

田村遺跡群Ⅲ

高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅶ

(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅤ)

第2分冊

Ⅳ区・自然科学分析・考察

2015.3

高 知 県 教 育 委 員 会

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

田村遺跡群Ⅲ

高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅶ
(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅣ)

第2分冊

Ⅳ区・自然科学分析・考察

2015.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

本文目次

第2分冊

11. IV - 1区(久家)	367
12. IV - 2区(久家)	433
13. IV - 3・4・8区(池澤)	461
14. IV - 5区(出原)	591
15. IV - 6区(久家)	643
16. IV - 7区(久家)	669

第IV章 田村遺跡群Ⅲの自然科学分析

1. はじめに	679
2. 田村遺跡群Ⅲの古環境復元	679
3. 田村遺跡群Ⅲの植物利用	700

第V章 考察

1. 中期末の土器と弥生時代の遺構と田村遺跡の消長(出原)	715
2. 古代を中心とした田村遺跡群北部の様相 - 古墳時代末から中世前期 - (池澤)	727
3. 弥生時代中期(Ⅲ期)の遺構と遺物(久家)	737
4. 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺跡と遺物(久家)	743

挿図目次

IV - 1区

図IV - 1	ST1平面図・断面図.....	367
図IV - 2	ST1遺物実測図1.....	368
図IV - 3	ST1遺物実測図2.....	369
図IV - 4	ST2平面図・断面図.....	371
図IV - 5	ST2遺物実測図.....	372
図IV - 6	ST3平面図・断面図・遺物実測図.....	374
図IV - 7	ST4平面図・断面図・遺物実測図.....	375
図IV - 8	SB1平面図・断面図.....	376
図IV - 9	SB2平面図・断面図・エレベーション図.....	377
図IV - 10	SB3平面図・断面図・エレベーション図・遺物実測図.....	378
図IV - 11	SB4平面図・断面図・エレベーション図.....	379
図IV - 12	SB5平面図・断面図・エレベーション図・遺物実測図.....	380
図IV - 13	SB6平面図・断面図・エレベーション図・遺物実測図.....	381
図IV - 14	SK1～4平面図・断面図・遺物実測図.....	383
図IV - 15	SK5・9平面図・断面図・遺物出土状況図・遺物実測図.....	385
図IV - 16	SK6平面図・断面図・遺物実測図.....	386
図IV - 17	SK7・8・11・12・15・22・24・30・31平面図・断面図.....	387
図IV - 18	SK10平面図・断面図・遺物実測図.....	388
図IV - 19	SK13平面図・断面図・遺物実測図1.....	389
図IV - 20	SK13遺物実測図2.....	390
図IV - 21	SK13遺物実測図3.....	391
図IV - 22	SK14平面図・断面図・遺物実測図.....	392
図IV - 23	SK16平面図・断面図・遺物実測図.....	393
図IV - 24	SK17遺物実測図.....	393
図IV - 25	SK23遺物実測図.....	393
図IV - 26	SK25平面図・断面図・遺物実測図.....	394
図IV - 27	SK26平面図・断面図・遺物実測図.....	395
図IV - 28	SK27平面図・断面図・遺物実測図.....	395
図IV - 29	SK29平面図・断面図.....	396
図IV - 30	SK29遺物実測図1.....	397
図IV - 31	SK29遺物実測図2.....	398
図IV - 32	SK32～34・36・37・40・41・44～46平面図・断面図.....	399
図IV - 33	SK35平面図・断面図・遺物実測図.....	400
図IV - 34	SK47平面図・断面図・遺物実測図.....	401

図Ⅳ－35	SK48平面図・断面図・遺物実測図	402
図Ⅳ－36	SK49平面図・エレベーション図・遺物実測図	404
図Ⅳ－37	SD1断面図・遺物実測図	405
図Ⅳ－38	SD2断面図・遺物実測図	406
図Ⅳ－39	SD6断面図・遺物実測図1	407
図Ⅳ－40	SD6遺物実測図2	408
図Ⅳ－41	SD7エレベーション図・遺物実測図	409
図Ⅳ－42	SD10遺物実測図	410
図Ⅳ－43	SD11・12断面図・遺物実測図	410
図Ⅳ－44	SD13断面図・遺物実測図	412
図Ⅳ－45	SR1断面図・遺物実測図	413
図Ⅳ－46	SX1遺物実測図	414
図Ⅳ－47	P34遺物出土状況図・遺物実測図	414
図Ⅳ－48	ピット出土遺物実測図	415
図Ⅳ－49	遺構外出土遺物実測図	417
Ⅳ－2区		
図Ⅳ－50	基本層序	433
図Ⅳ－51	SK1・3平面図・断面図・遺物実測図	434
図Ⅳ－52	SK2平面図・断面図・遺物実測図	435
図Ⅳ－53	SK4平面図・エレベーション図・遺物実測図	436
図Ⅳ－54	SK5平面図・断面図・遺物実測図	436
図Ⅳ－55	SK6平面図・断面図	437
図Ⅳ－56	SK7平面図・断面図・遺物実測図	437
図Ⅳ－57	SK8平面図・エレベーション図・遺物実測図	438
図Ⅳ－58	SK9・10平面図・エレベーション図	438
図Ⅳ－59	SD1エレベーション図・遺物実測図	439
図Ⅳ－60	SD3断面図, SD4・7エレベーション図	440
図Ⅳ－61	SR1遺物実測図1	441
図Ⅳ－62	SR1遺物実測図2	442
図Ⅳ－63	SR1遺物実測図3	443
図Ⅳ－64	SR1遺物実測図4	444
図Ⅳ－65	SR1遺物実測図5	445
図Ⅳ－66	SR1遺物実測図6	446
図Ⅳ－67	SR1遺物実測図7	447
図Ⅳ－68	SR1遺物実測図8	448
図Ⅳ－69	SR1遺物実測図9	449
図Ⅳ－70	ピット平面図・断面図・エレベーション図・遺物実測図	450

插图目次

图IV - 71	遺構外出土遺物実測図.....	451
IV - 3・4・8区		
图IV - 72	3区 遺構配置図.....	462
图IV - 73	3区 基本層準図.....	463
图IV - 74	3区 SK1・4~6.....	464
图IV - 75	3区 SK7・SX1.....	465
图IV - 76	3区 SR1上層(1)・SD1断面図・出土遺物.....	466
图IV - 77	3区 SR1上層(2)出土遺物.....	467
图IV - 78	3区 SR1上層(3)・下層(1)出土遺物.....	468
图IV - 79	3区 SR1下層(2)出土遺物.....	469
图IV - 80	3区 SR1下層(3)出土遺物.....	470
图IV - 81	3区 SX2.....	471
图IV - 82	3区 包含層等出土遺物.....	471
图IV - 83	4区 基本層準図1.....	473
图IV - 84	4区 基本層準図2.....	474
图IV - 85	4区 SR2・3断面図.....	475
图IV - 86	4区 ST1平断面図.....	476
图IV - 87	4区 ST1出土遺物.....	477
图IV - 88	4区 ST2平断面図.....	478
图IV - 89	4区 ST2出土遺物.....	479
图IV - 90	4区 SK1・4.....	480
图IV - 91	4区 SK52.....	481
图IV - 92	4区 SK57.....	482
图IV - 93	4区 SK72.....	483
图IV - 94	4区 SK75・76.....	484
图IV - 95	4区 SK77(1).....	485
图IV - 96	4区 SK77(2)出土遺物.....	486
图IV - 97	4区 SK77(3)出土遺物.....	487
图IV - 98	4区 SD7断面図.....	488
图IV - 99	4区 SX5.....	488
图IV - 100	4区 土器集中1平面図・出土遺物.....	489
图IV - 101	4区 土器集中1出土遺物.....	490
图IV - 102	4区 土器集中3平面図・出土遺物.....	491
图IV - 103	4区 SR2・3出土遺物(1).....	492
图IV - 104	4区 SR3出土遺物(2).....	493
图IV - 105	4区 SB1.....	494
图IV - 106	4区 SB2.....	495

図Ⅳ - 107	4区 SB3.....	496
図Ⅳ - 108	4区 SB4・5平断面図.....	497
図Ⅳ - 109	4区 SB10平断面図.....	498
図Ⅳ - 110	4区 SB4・5・10出土遺物.....	499
図Ⅳ - 111	4区 SB6.....	500
図Ⅳ - 112	4区 SB7・SA1.....	501
図Ⅳ - 113	4区 SB9.....	502
図Ⅳ - 114	4区 SB12.....	503
図Ⅳ - 115	4区 SB11・13.....	504
図Ⅳ - 116	4区 SB14平断面図.....	505
図Ⅳ - 117	4区 SB15平断面図.....	506
図Ⅳ - 118	4区 SB16.....	507
図Ⅳ - 119	4区 SB17・18.....	508
図Ⅳ - 120	4区 SB24平断面図.....	509
図Ⅳ - 121	4区 SB25・26.....	510
図Ⅳ - 122	4区 SK2・3.....	511
図Ⅳ - 123	4区 SK24・35・40・41.....	512
図Ⅳ - 124	4区 SK43・48・54.....	513
図Ⅳ - 125	4区 SK56・68・84.....	514
図Ⅳ - 126	4区 SD1・5・8.....	515
図Ⅳ - 127	4区 SX2・Pit出土遺物.....	516
図Ⅳ - 128	4区 Pit出土遺物.....	517
図Ⅳ - 129	4区 Pit・包含層出土遺物.....	518
図Ⅳ - 130	8区 基本層準図.....	519
図Ⅳ - 131	8区 SK2.....	520
図Ⅳ - 132	8区 SK6.....	521
図Ⅳ - 133	8区 SK6出土遺物.....	522
図Ⅳ - 134	8区 SD2断面図・出土遺物.....	523
図Ⅳ - 135	8区 SX1・SX4.....	524
図Ⅳ - 136	8区 SX5.....	525
図Ⅳ - 137	8区 SB19.....	526
図Ⅳ - 138	8区 SB20・SA2.....	527
図Ⅳ - 139	8区 SB21.....	528
図Ⅳ - 140	8区 SB22・23.....	529
図Ⅳ - 141	8区 SB27.....	530
図Ⅳ - 142	8区 SB28.....	531
図Ⅳ - 143	8区 SB29.....	532

挿図目次

図Ⅳ－144	8区 SE1・SX6平断面図	533
図Ⅳ－145	8区 Pit出土遺物	533
Ⅳ－5区		
図Ⅳ－146	調査区南壁基本層序	591
図Ⅳ－147	ST1・10平面図・断面図	592
図Ⅳ－148	ST1遺物実測図	593
図Ⅳ－149	ST2平面図・断面図・エレベーション図	594
図Ⅳ－150	ST2遺物実測図	595
図Ⅳ－151	ST3平面図・断面図・エレベーション図・遺物実測図	596
図Ⅳ－152	ST4平面図・断面図・遺物実測図	597
図Ⅳ－153	ST5平面図・断面図・エレベーション図	598
図Ⅳ－154	ST5出土遺物位置図	599
図Ⅳ－155	ST5遺物実測図1	600
図Ⅳ－156	ST5遺物実測図2	601
図Ⅳ－157	ST5遺物実測図3	602
図Ⅳ－158	ST5遺物実測図4	603
図Ⅳ－159	ST5遺物実測図5	604
図Ⅳ－160	ST6平面図・断面図	606
図Ⅳ－161	ST6遺物実測図1	607
図Ⅳ－162	ST6遺物実測図2	608
図Ⅳ－163	ST7平面図・断面図・遺物実測図	609
図Ⅳ－164	ST8平面図・断面図・エレベーション図・遺物実測図	611
図Ⅳ－165	ST9平面図・断面図・遺物実測図	612
図Ⅳ－166	SB1・SK6平面図・断面図・エレベーション図及びSK6遺物実測図	613
図Ⅳ－167	SB2平面図・エレベーション図	614
図Ⅳ－168	SK1平面図・断面図	614
図Ⅳ－169	SK2平面図・エレベーション図・遺物実測図	615
図Ⅳ－170	SK3平面図・断面図・遺物実測図	615
図Ⅳ－171	SK5平面図・エレベーション図・遺物実測図	616
図Ⅳ－172	SK7平面図・エレベーション図及びSK8平面図・断面図・遺物実測図	617
図Ⅳ－173	SK9～12平面図・断面図及びSK12遺物実測図	618
図Ⅳ－174	SK13～17平面図・断面図・遺物実測図	619
図Ⅳ－175	SK18・19平面図・断面図・エレベーション図・遺物実測図	620
図Ⅳ－176	SK20・21平面図・断面図・遺物実測図	621
図Ⅳ－177	SK22～27平面図・断面図・遺物実測図	622
図Ⅳ－178	SK28～30平面図・断面図及びSK28・29遺物実測図	623
図Ⅳ－179	SK30遺物実測図	625

図Ⅳ－180	SD1～3断面図及びSD2・3遺物実測図.....	626
図Ⅳ－181	P1平面図・エレベーション図及びピット遺物実測図.....	628
Ⅳ－6区		
図Ⅳ－182	調査区南壁基本層序.....	643
図Ⅳ－183	ST1平面図・断面図・遺物実測図.....	645
図Ⅳ－184	ST2平面図・遺物実測図.....	646
図Ⅳ－185	SB1平面図・エレベーション図.....	646
図Ⅳ－186	SB2・SK4・P26平面図・断面図・エレベーション図・遺物実測図.....	647
図Ⅳ－187	SB3平面図・エレベーション図.....	648
図Ⅳ－188	SB4平面図・エレベーション図.....	649
図Ⅳ－189	SB5平面図・エレベーション図.....	649
図Ⅳ－190	SK1～3・8・10・15平面図・断面図・エレベーション図・遺物実測図.....	650
図Ⅳ－191	SK9平面図・断面図・遺物出土状況図.....	651
図Ⅳ－192	SK9遺物実測図.....	653
図Ⅳ－193	SK13平面図・エレベーション図・遺物出土状況図・遺物実測図.....	654
図Ⅳ－194	SK16・17平面図・エレベーション図・遺物実測図.....	655
図Ⅳ－195	SK20平面図・エレベーション図・遺物出土状況図.....	655
図Ⅳ－196	SK27・28平面図・断面図・遺物実測図.....	656
図Ⅳ－197	SD1断面図・遺物実測図.....	657
図Ⅳ－198	SR1エレベーション図・遺物実測図.....	658
図Ⅳ－199	P2・6平面図・エレベーション図・遺物実測図.....	660
図Ⅳ－200	遺構外出土遺物実測図.....	661
Ⅳ－7区		
図Ⅳ－201	調査区東壁基本層序.....	669
図Ⅳ－202	ST1_中央P平面図・断面図.....	670
図Ⅳ－203	ST1遺物実測図.....	671
図Ⅳ－204	ST2平面図・断面図.....	672
図Ⅳ－205	SK3平面図・断面図・焼土分布図・遺物実測図.....	673
図Ⅳ－206	SK4平面図・断面図.....	673
図Ⅳ－207	遺構外出土遺物実測図.....	674
第Ⅳ章		
図 1	分析試料採取地点の柱状図.....	680
図 2	植物珪酸体含量.....	684
図 3	調査地点周辺の地形起伏と自然科学分析が実施された主要な周辺遺跡.....	686
図 4	遺跡の位置図と自然科学分析が実施された主要な周辺遺跡.....	686
図 5	田村遺跡群周辺地形分類図.....	687
図 6	西野々・関遺跡の堆積層の累重状況.....	689

表目次

図 7 介良野遺跡の層序と年代.....	690
図 8 田村遺跡群周辺の微地形.....	691
図 9 物部川扇状地の標高分布図.....	694
図 10 炭化種実画像(その1).....	703
図 11 炭化種実画像(その2).....	704
図 12 炭化種実画像(その3).....	705
図 13 IV-1区SK9の炭化種実組成.....	706
図 14 アワ・キビ炭化胚乳の大きさ.....	708
図 15 マメ科炭化種子の大きさ.....	708
図 16 IV-1区SK5・9遺構平面図と断面図および検出状況写真.....	709
第V章	
図 1 壺分類.....	716
図 2 甕分類.....	718
図 3 鉢分類.....	720
図 4 高杯分類.....	720
図 5 田村遺跡群位置図(S=1/10,000).....	724
図 6 周辺遺跡遺物資料 0期.....	728
図 7 周辺遺跡遺物資料 I期.....	729
図 8 周辺遺跡遺物資料 II~IV期.....	731
図 9 弥生時代中期(Ⅲ期)の遺構配置図.....	738
図 10 鹿児島県麦田下遺跡出土の南四国型土器.....	740
図 11 弥生時代後期末~古墳時代前期初頭の遺構配置図.....	744

表目次

IV-1区	
竪穴建物跡計測表 (IV-1区).....	419
土坑計測表(IV-1区).....	421
出土遺物(土器)観察表.....	424
出土遺物(石器)観察表.....	430
出土遺物(鉄器)観察表.....	432
出土遺物(土製品)観察表.....	432
IV-2区	
土坑計測表(IV-2区).....	452
出土遺物(土器)観察表.....	453
出土遺物(石器)観察表.....	460
出土遺物(土製品)観察表.....	460

IV-3・4・8区	
表1 IV-3区 土坑等計測表.....	461
表2 IV-4区 竪穴建物計測表.....	472
表3 弥生遺構計測表(竪穴建物除く).....	534
表4 掘立柱建物等計測表.....	535
表5-1 ピット計測表 IV-4区.....	537
表5-2 ピット計測表 IV-8区.....	550
表6 土坑等計測表(古代以降等).....	555
表7 溝・流路跡計測表(古代以降等).....	558
表8 IV-4・8区 弥生遺構出土遺物計数表.....	558
表9 IV-4区 古代以降遺構出土遺物計数表.....	562
IV-3区出土遺物(土製品)観察表.....	566
IV-3区出土遺物(石器)観察表.....	571
IV-3区出土遺物(鉄器)観察表.....	571
IV-4区出土遺物(土製品)観察表.....	572
IV-4区出土遺物(石器)観察表.....	586
IV-4区出土遺物(鉄器)観察表.....	586
IV-8区出土遺物(土製品)観察表.....	587
IV-8区出土遺物(石器)観察表.....	590
IV-5区	
出土遺物(土器)観察表.....	631
出土遺物(石器)観察表.....	639
IV-6区	
竪穴建物跡計測表 (IV-6区).....	663
土坑計測表(IV-6区).....	664
出土遺物(土器)観察表.....	666
出土遺物(石器)観察表.....	668
IV-7区	
竪穴建物跡計測表 (IV-7区).....	675
土坑計測表(IV-7区).....	676
出土遺物(土器)観察表.....	677
出土遺物(鉄器)観察表.....	677
出土遺物(石器)観察表.....	677
第IV章	
表1 放射性炭素年代測定結果.....	682
表2 珪藻分析結果.....	683
表3 植物珪酸体含量.....	683

表目次

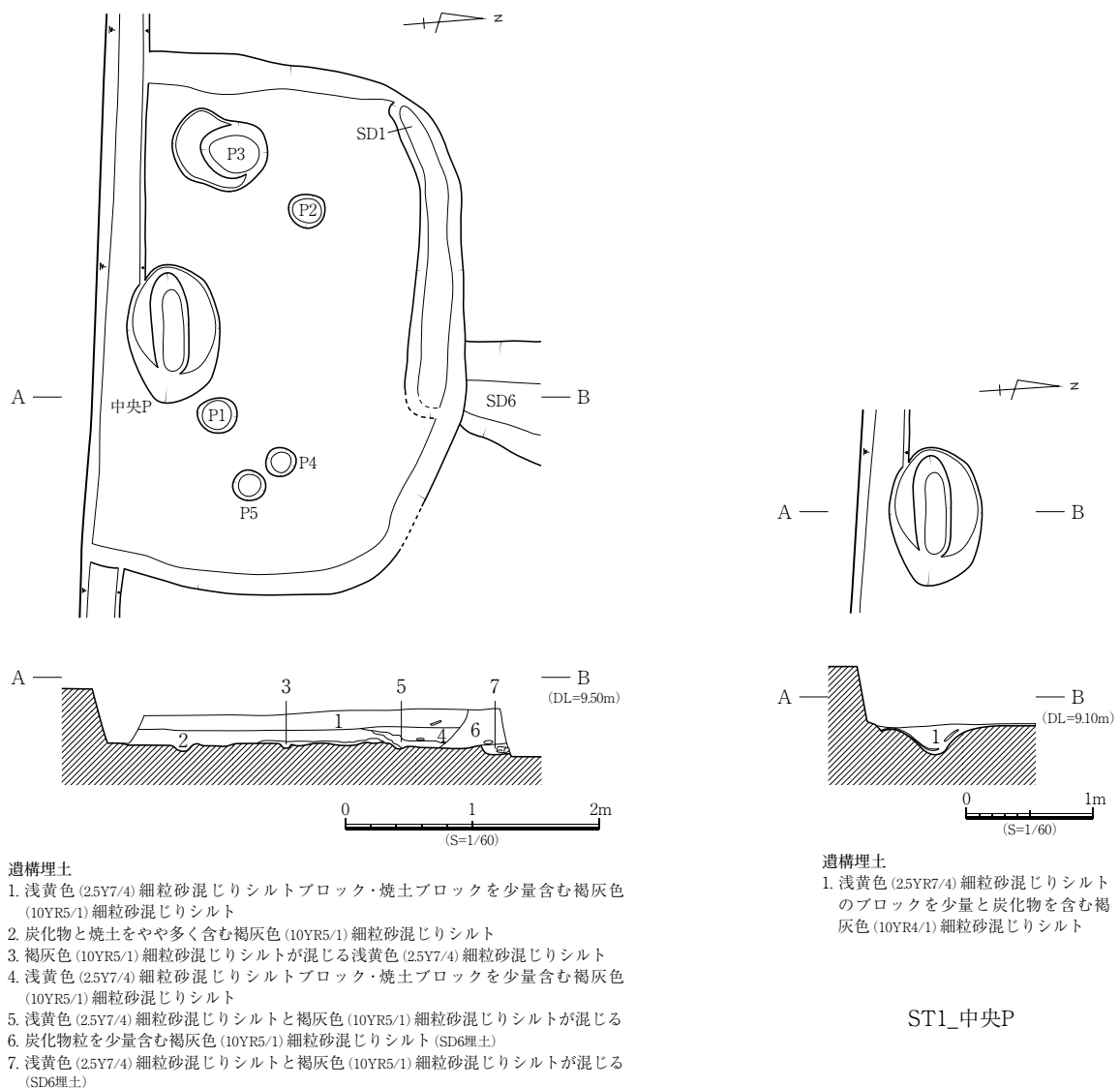
表4 炭化種実同定結果.....	702
表5 炭化米の大きさ・重量.....	707
表6 アワ・キビ炭化胚乳の大きさ・重量.....	707
表7 マメ科炭化種子の大きさ・重量.....	707
表8 炭化材同定結果.....	708
第V章	
表1 遺跡別壺組成.....	722
表2 遺跡別甕組成.....	722
表3 検出遺構の方位と出土遺物・時期.....	732
表4 粘土帯外面.....	739
表5 口唇部形状.....	739
表6 口唇部文様.....	739
表7 器種別組成比率.....	745

11. IV-1区

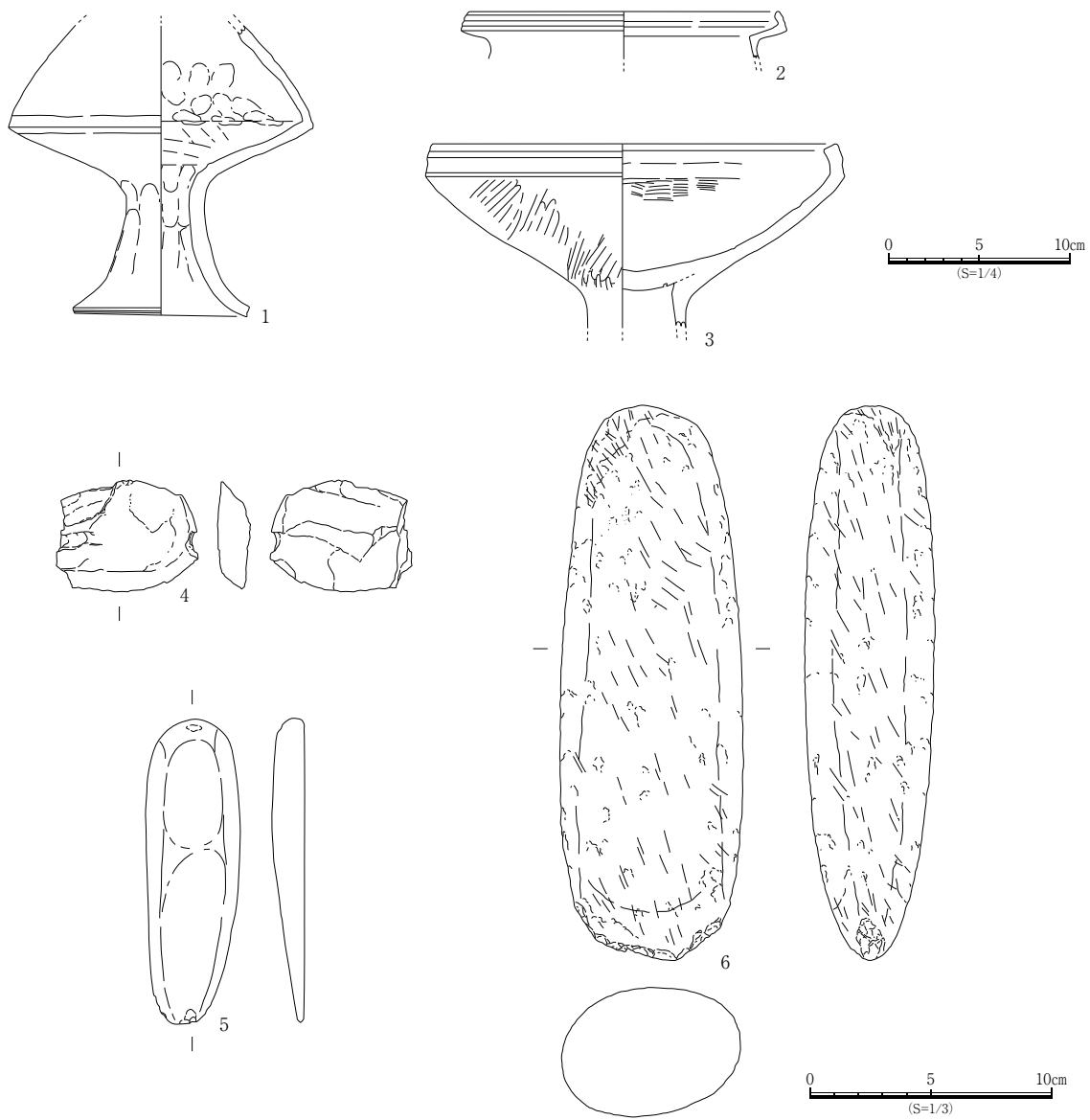
1. 調査の概要と基本層序

弥生時代中期後葉の土坑、中期末では竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、後期末の溝跡、古代の掘立柱建物跡、溝跡を検出した。弥生時代中期後葉の土坑は調査区の西部にあり、Ⅲ区との関連が想定される。弥生時代中期末は遺構の切り合い関係から概ね2時期のものがあったと考えられるが、出土遺物での細分は難しい。後期末の溝跡は北の調査区（IV-5・8区）でも検出され、さらに北にのびる。後期末の遺構は溝跡以外は検出されておらず、周辺に当該期の居住域が存在することを示唆している。

調査区の東半部は表土等を除去すると黒褐色細粒砂混じりシルト層（下層の黒色土層）、明黄褐色細粒砂混じりシルト層である。遺構は、黒褐色細粒砂混じりシルト層上面で検出した。一部の遺構は明黄褐色細粒砂混じりシルト層上面で検出したが、本来は一面であったと考えられる。一方、



図IV-1 ST1平面図・断面図



图IV-2 ST1遺物実測図1

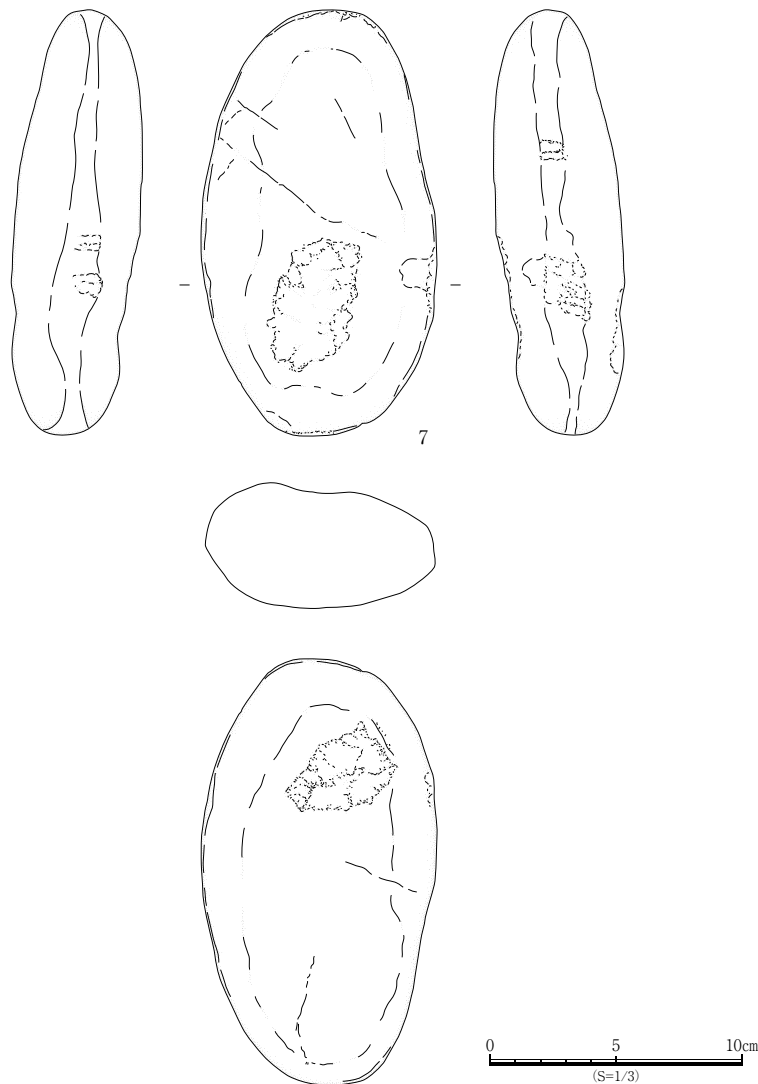
調査区の西半部は表土等を除去すると砂礫層となり、この砂礫層上面が遺構検出面となる。

2. 検出遺構と遺物

(1) ST

ST1 (図IV-1~3)

調査区南東部で検出した竪穴建物跡である。南半分は調査区外である。SD6を切る。一辺約4.2mの隅丸方形と推測され、検出面からの深さは25cm、床面の標高は約8.9mである。埋土は炭化物・焼土ブロックを含む褐灰色細粒砂混じりシルトである。上層よりも下層のほうが炭化物・焼土ブロックの含有量が多い。床面で中央ピット、ピット、壁溝を検出した。中央ピットは床面のほぼ中央に位置するものと推測される。平面形は長軸約1.1m、短軸約0.7mの東西に長い楕円形を呈し、南北にテラスを有する。床面からの深さは23cmである。埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトである。中央ピッ



図IV-3 ST1遺物実測図2

トの底のやや上から南床面まで続く炭化物層が存在する。検出したピットのうち、ST1_P2、ST1_P4は、主柱穴と考えられる。ST1_P3は、南側にテラスを持つ不整形のピットである。長軸約0.76m、短軸約0.56m、床面からの深さは19cmである。床面の北辺にのみ壁溝が認められる。炭化材と焼土が点在していることから焼失建物と考えられるが、炭化材は少なく、西半部に偏在する傾向がある。炭化材はほぼ床面での検出である。床面からの出土遺物も少ない。1、5、7は床面直上からの出土である。

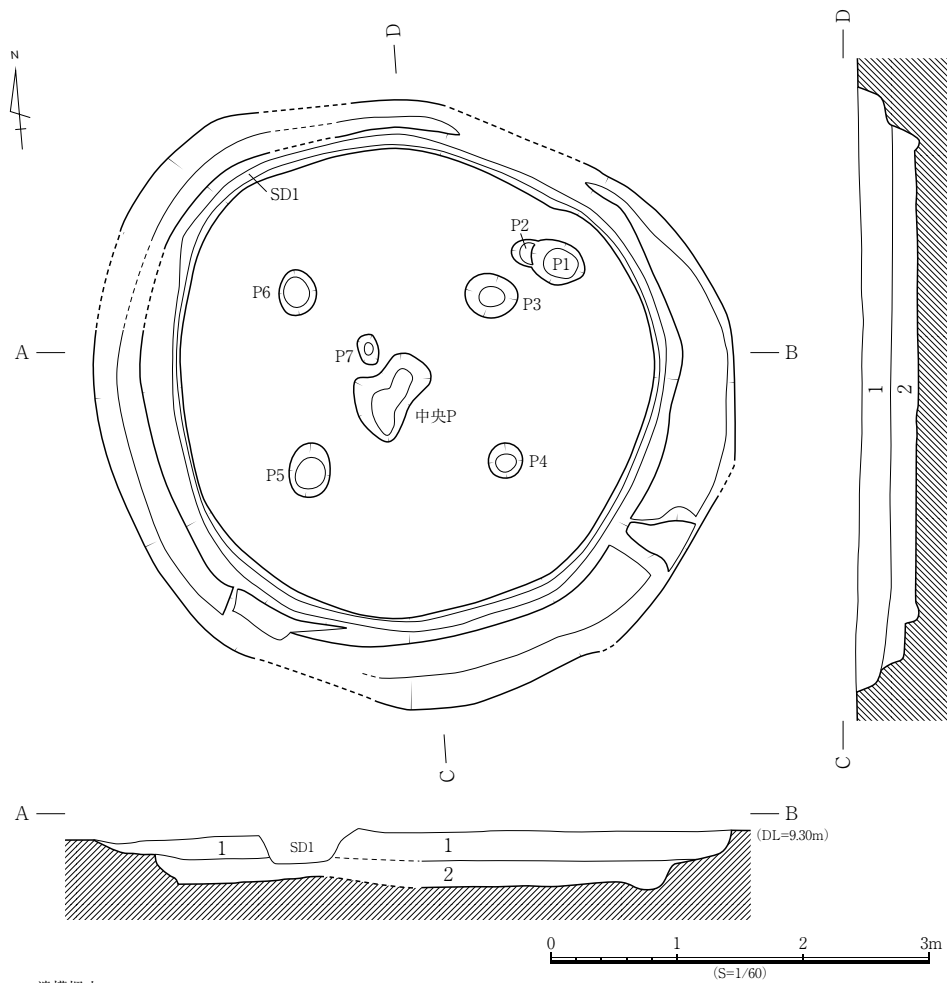
図示した出土遺物は、弥生土器の壺・甕・高杯、打製石包丁、石斧、叩石である。1は脚付壺である。脚部は中空で徐々にひろがり、裾部は「ハ」の字状にひろがり、端部は面取りし沈線を施す。円盤充填技法であり、円盤は剥離している。被熱及び摩耗のため調整等の観察は困難である。脚部内面には砂粒の移動痕跡が認められる。体部の上半部と下半部の境には明瞭な稜線を持つ。2は甕である。口縁部を上方に拡張させ、3条の凹線文を施す。器壁は薄い。3は高杯である。杯部は丸みを持ち、外上方にのび、口縁部は内傾させる。口縁部上面は平坦面を成し、外面には2条の太めの凹線文を施す。円盤充填技法である。円盤の下面には脚部内面を調整した時の痕跡(先端が尖った工具による)が円形に残存している。全体的に摩耗しており調整等の観察は困難であるが、杯部外面にはミガキ調整、内面にはハケメが認められる。4は短辺に抉りが認められることから打製石包丁とした。約半分は欠損する。表面は主要剥離面であり、裏面は自然面を大きく残す。チャート製である。5は棒状の粘板岩を石材とする。縦方向に割り、平滑に磨く。石斧あるいは石剣の未成品か。6は伐採斧の未成品である。棒状の自然石を敲打により形を調整する。基部から刃部にむかって幅がひろくなり、刃部付近で若干幅が減じる。断面形は楕円形である。重量は1.6kgである。7は砂岩製の叩石である。全体的に表面は滑らかである。両面とも同じ部位が敲打により激しく凹んでおり、石を握り振り下ろしていたと推測される。他に側面にも弱い敲打痕跡が認められる。

ST2 (図IV-4・5)

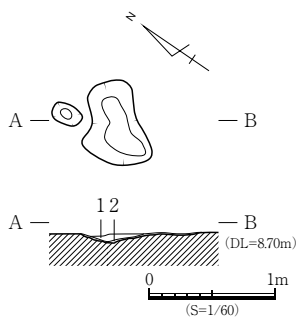
調査区東部で検出した楕円形の竪穴建物跡である。SD1に切られる。長軸約5.1m、短軸約4.8m、検出面からの深さは42cmであり、床面の標高は8.7mである。東側には地山を削り残し三日月状のテラスが存在する。テラスの最大幅は約0.4mであり、上面は平坦ではなく突出している部分がある。床面とテラス上面の比高差は北側で約20cm、南側で約10cmであり、北側から南側にむけて傾斜している。埋土はテラス上面より上は、にぶい黄橙色細粒砂混じりシルト、下は褐灰色細粒砂混じりシルトである。

床面で中央ピット、ピット、壁溝を検出した。中央ピットは床面の中央に位置する。平面形は長軸約0.7m、短軸約0.3mの不整形を呈し、床面からの深さは9cmである。埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトとにぶい黄橙色細粒砂混じりシルトが混ざる層と炭化物層である。炭化物層は底から床面の南側にかけて炭化物層が認められる。埋没直前まで燃焼施設として使用されていたと考えられる。また、中央ピットの北側には深さ10cmの小ピットが付属する可能性がある。検出したピットのうち、4基が主柱穴と考えられる。床面からの深さは10cmとすべて浅い。4本柱の建物である。幅約0.20m、深さ約3cmの壁溝は全周する。

図示した出土遺物は弥生土器の壺・甕・ミニチュア土器、石包丁、石鏃、投弾である。8は壺である。貼付口縁であり、玉縁状を呈する。貼付直下に直径4mmの円孔を穿つ。2穴確認でき、両者の間隔は2.4cmである。色調は橙色である。9は壺である。幅約3cmの粘土帯を貼付し、粘土帯全面に刻目を施す。口唇部は丸くおさめる。粘土帯直下に楕円形浮文を施す。10は壺である。頸部から緩やかに外反し二



- 遺構埋土
1. 浅黄橙色 (10YR8/4) 細粒砂混じりシルトブロックを少し含むにぶい黄橙色 (10YR7/2) 細粒砂混じりシルト
 2. 浅黄橙色 (10YR8/4) 細粒砂混じりシルトブロックを含む褐灰色 (10YR5/1) 細粒砂混じりシルト

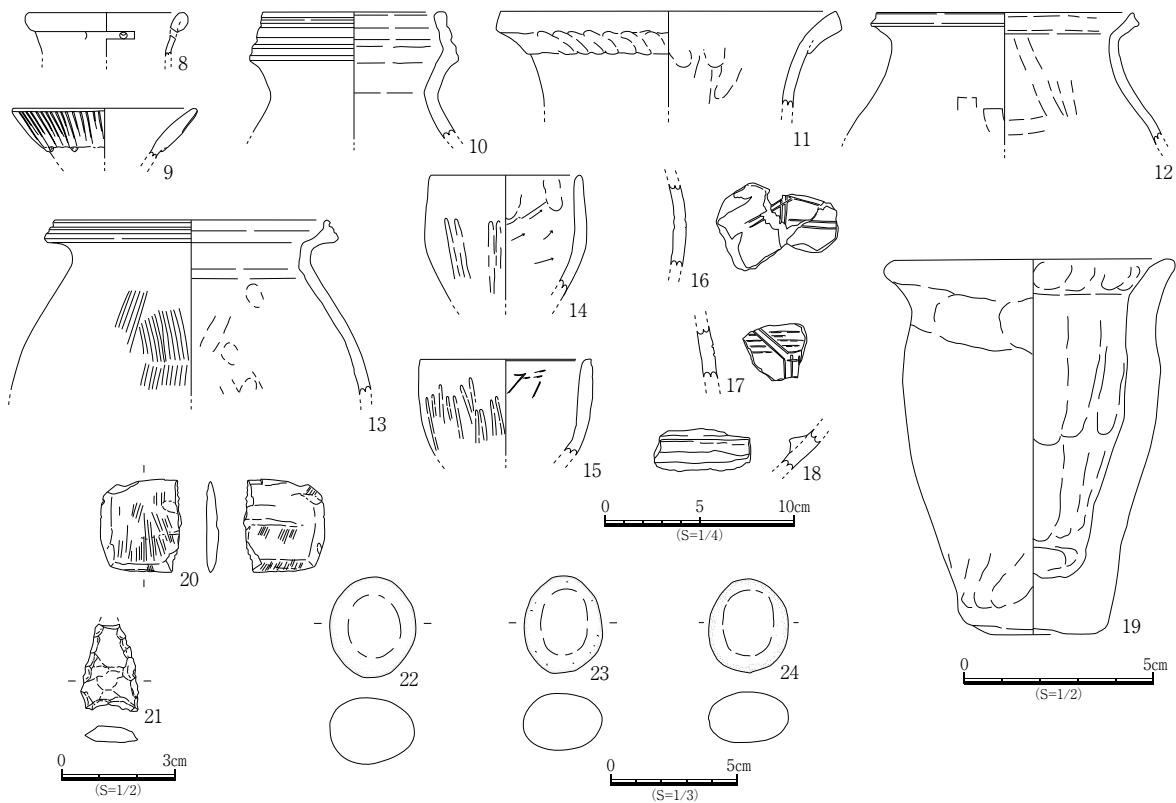


- 遺構埋土
1. 褐灰色 (10YR6/1) 細粒砂混じりシルトとにぶい黄橙色 (10YR7/4) 細粒砂混じりシルトが混ざる
 2. 炭化物層

ST2_中央P

図IV-4 ST2平面図・断面図

次口縁は内傾する。口唇部は面取りし、二次口縁外面には3条の凹線文を施す。内外面ともナデ調整を施す。11は壺である。貼付口縁であり、粘土帯に指頭圧痕が認められる。口唇部はハケ状工具により面取りを施す。12は甕である。肩部から内傾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は強いヨコナデによりつまみ上げ、凹面状を呈する。口縁部はナデ調整、体部は工具によるナデ調整を施す。13は甕である。わずかな頸部を持つ。口縁部は端部にむかって厚みを増す。口縁部は上方に拡張させ、2条の凹線文を施す。体部内面上半部はナデ調整であり指頭圧痕が認められる。下半部はヘラケズリ調整である。外面はタテハケ調整である。外面に煤が付着する。14・15は鉢か。上半部は直立し、下半部はすぼまる。口縁部はヨコナデ調整を施し、口唇部は尖らせる。外面は縦方向のミガキ調整であり、内面下半部はケズリ調整である。14と15は同一個体の可能性がある。16・17は体部の破片である。双線で描いた直線を組み合わせ、文様を描く。両者は同一個体の可能性がある。18は体部片である。内面に断面三角形の突帯を貼付ける。19はミニチュア土器である。底部から肩部にむかってわずかにひろがり、頸部はしぼられ、口縁部は短く外反する。外底面の中央は凹み、調整はやや雑である。内外面ともナデ調整を施し、比較的丁寧な作りである。煤が付着し、火にかけられたと推測される。黒斑が認められる。20はやや小型の磨製石包丁と考えられる。大部分が欠損する。長方形を呈し、片刃である。21はサヌカイト製の打製石鏃である。埋土の最下層から出土した。二等辺三角形を呈した凹基式である。先端部を欠損する。両面とも剥離面を大きく残し、縁辺部に調整剥離を施す。22～24は砂岩製の投弾である。特に加工は認められない自然の川原石であり、大きさも約4cm、重量は30～50gである。



図IV-5 ST2遺物実測図

ST3 (図IV-6)

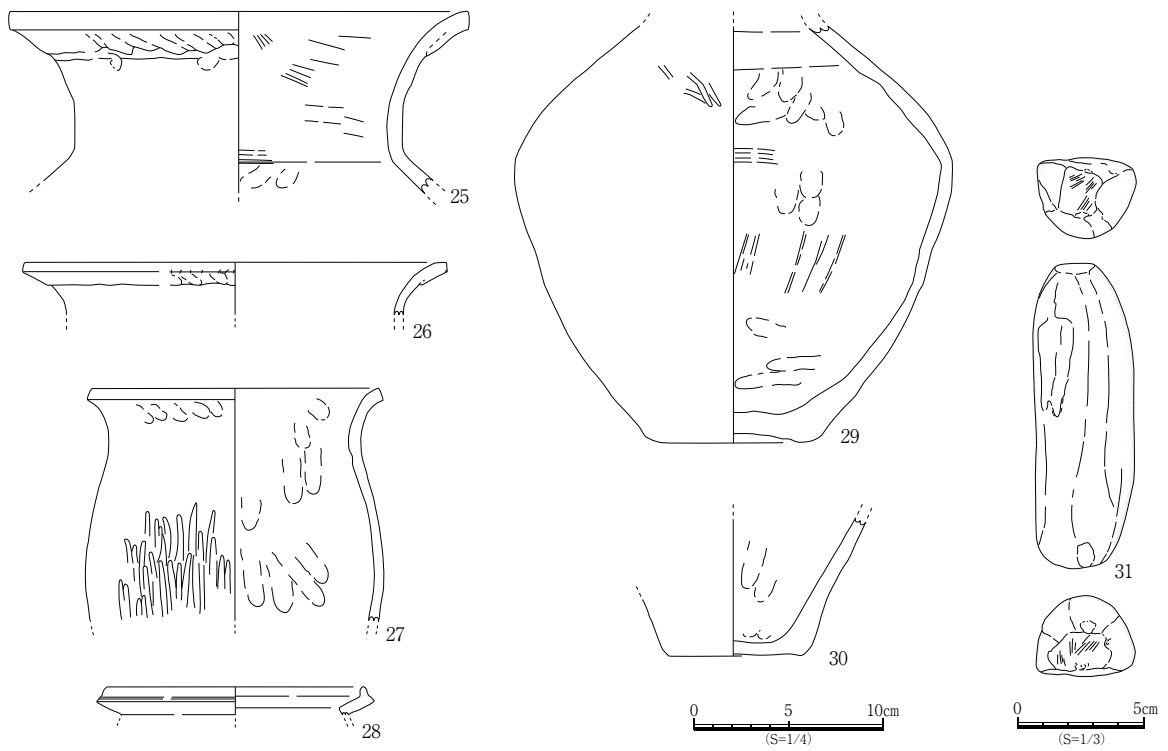
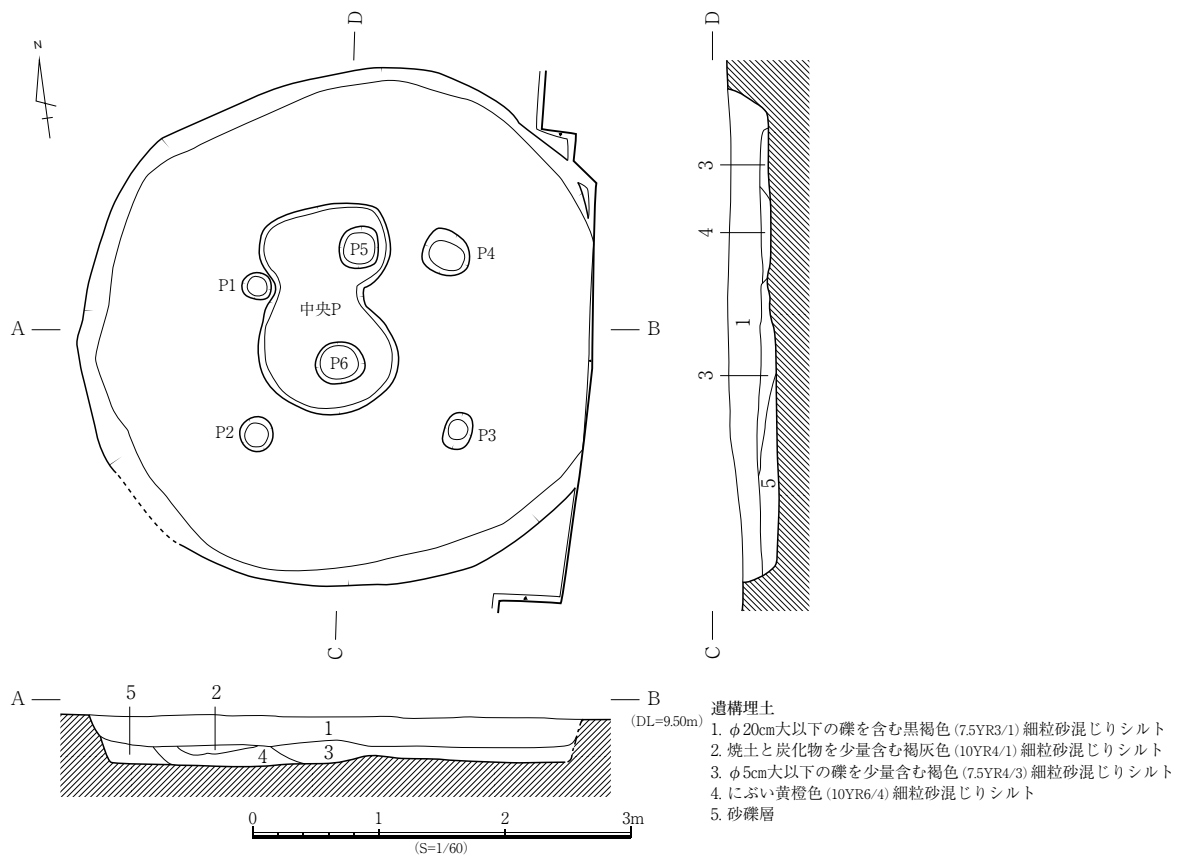
調査区中央部で検出した円形の竪穴建物跡である。SK41に切られる。直径約4m、検出面からの深さは32cmである。埋土の上層は黒褐色細粒砂混じりシルト、下層は褐色細粒砂混じりシルト、にぶい黄橙色細粒砂混じりシルト、褐灰色細粒砂混じりシルト、砂礫層である。砂礫層は南西部の壁際に分布し地山削り出しのベッド状遺構であった可能性がある。床面で中央ピット、ピットを検出した。中央ピットは床面の中央に位置する。長軸約1.7m、短軸約1.1m、床面からの深さは4cmの不整形を呈している。長軸約1.1m、短軸約0.9mの楕円形の土坑と長軸約1.0m、短軸約0.7mの楕円形の土坑が南北に連結しているような形状である。それぞれの一部がピット状に深くなる。南の土坑が床面の中央に位置する。ピットは床面からの深さは17cmであり、北側のピットよりも若干深いこと等から南側の土坑が主要な燃焼施設と推測される。支柱穴は4基である。大きさ、深さも不揃いである。

図示した遺物は弥生土器の壺・甕、磨石である。25は壺である。頸部は短く直立し、口縁部は外反する。貼付口縁であり、粘土帯は指押えの後、ヨコナデ調整を施すため指頭圧痕がナデ消されており、わずかに残る程度である。口唇部には面取りを施すが、やや雑である。外面はナデ調整、内面はナメハケ調整である。26は壺である。貼付口縁であり、粘土帯外面には弱い指頭圧痕が認められる。口唇部は面取りされ、下端に刻目を施す。27は甕である。体部から頸部にかけて緩やかにすぼまり、口縁部は緩やかに外反する。口唇部には面取りを施す。体部外面はタテ方向のミガキ調整、口頸部はナデ調整である。内面はナデ調整である。外面には煤が付着する。28は甕である。口縁部は上方へ強くヨコナデ調整を施し、つまみ上げる。凹面状を呈する。凹線文を施す。29は壺の体部である。肩部が体部最大径となり、器高は低い。全体的に歪む。上げ底である。全体的に磨耗している。外面肩部にミガキ調整が認められる。内面はナデ調整を基本としており、下半部にはハケメがみられる。また、内底面には凹凸が認められる。31は磨石である。棒状の自然石を利用する。両先端部を使用し、平坦面と成る。

ST4 (図IV-7)

調査区南西部で検出した竪穴建物跡である。約4分の1を検出したのみである。1辺約4mの隅丸方形を呈していたと推測される。検出面から床面までの深さは20cmであり、床面の標高は約9.2mである。焼失建物である。ST1と同様に炭化材、遺物とも少ない。32は口を上にもつけた正位の状態で床面直上で出土した。炭化材は北西から南東方向、北西の方が下がっていた。埋土は、焼土・炭化物が介在した黒褐色細粒砂混じり粘土、灰黄褐色細粒砂混じりシルトである。床面で中央ピット、ピットを検出した。中央ピットは長軸約0.7m、短軸0.4m以上、床面からの深さは7cmである。埋土は炭化物を少量含む暗灰色細粒砂混じり粘土である。床面から炭化物層が中央ピット底まで続く。床面中央から若干ずれているが埋土等の状況から燃焼施設とした。ST4_P2は、北東隅に位置し直径約0.4m、床面からの深さは20cmであり支柱穴と考えられる。また、ST4_P1、ST4_P3については支柱穴の可能性はある。

図示した遺物は弥生土器の壺・高杯である。32は壺である。直立した頸部から口縁部は大きく外反する。貼付口縁であるが、粘土帯の接合痕跡はナデ調整され段差は少ない。口唇部に強くヨコナデ調整を施し、下垂し凹面状を呈する。外面はタテハケ調整、内面はナデ調整である。33は高杯の脚部である。裾部にむかってひろがり、端部は強いヨコナデ調整により凹面状を呈し、端部は突出する。



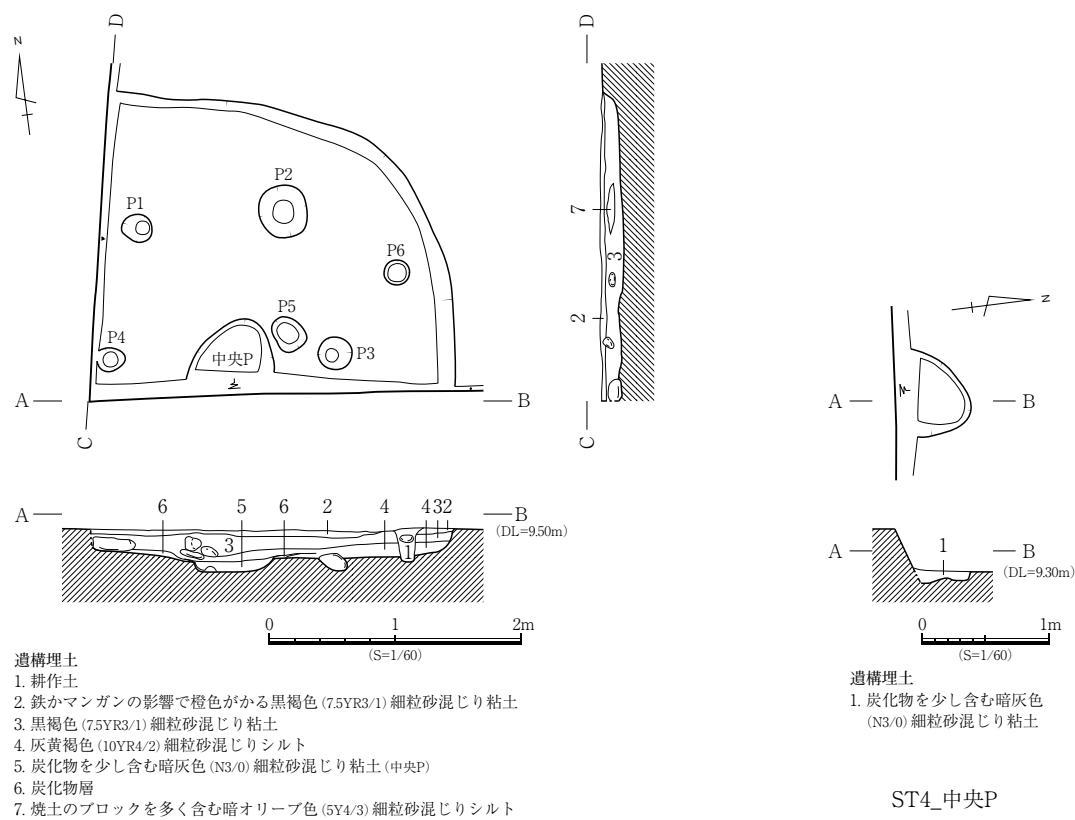
図IV-6 ST3平面図・断面図・遺物実測図

外面はタテハケ調整, 内面はナデ調整である。

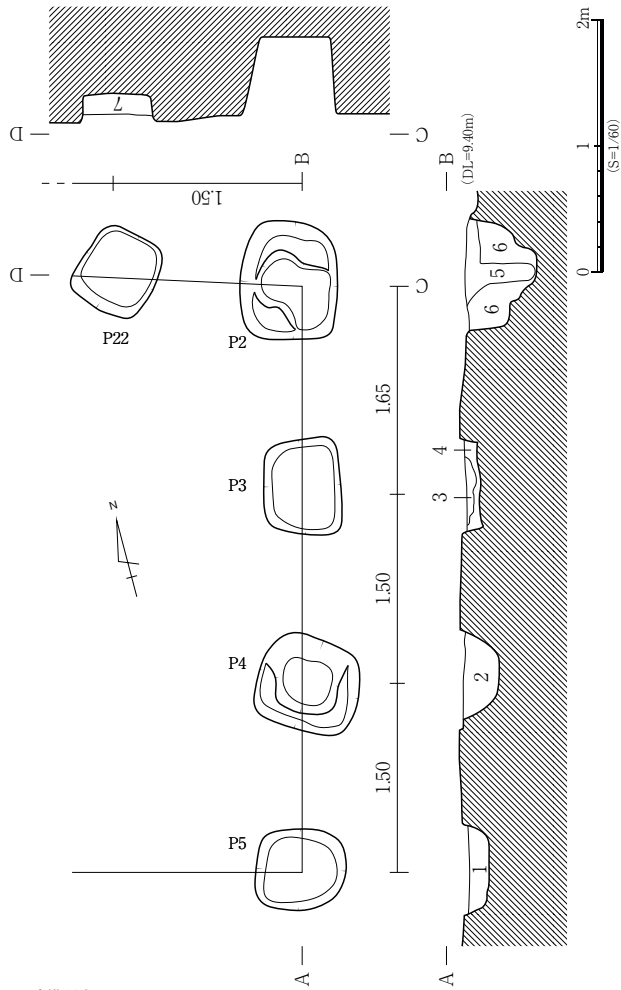
(2)SB

SB1 (P2~5・22・(P150)) (図IV-8)

調査区の中央部に南北方向に並ぶ4基のピットを検出した。対応する柱列は精査したが検出できなかったが, 2間×3間の掘立柱建物跡と推測できる。ピットは一辺約0.6~0.9mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは様々である。旧流路が埋没後に掘削されているため, 底が認識しづらかった。桁行3間(4.7m)である。柱穴の心々間の長さは約1.5mである。棟方向はN-14°44'-Eであり, 香長条理の方向とほぼ一致している。SB1は古代に属する。



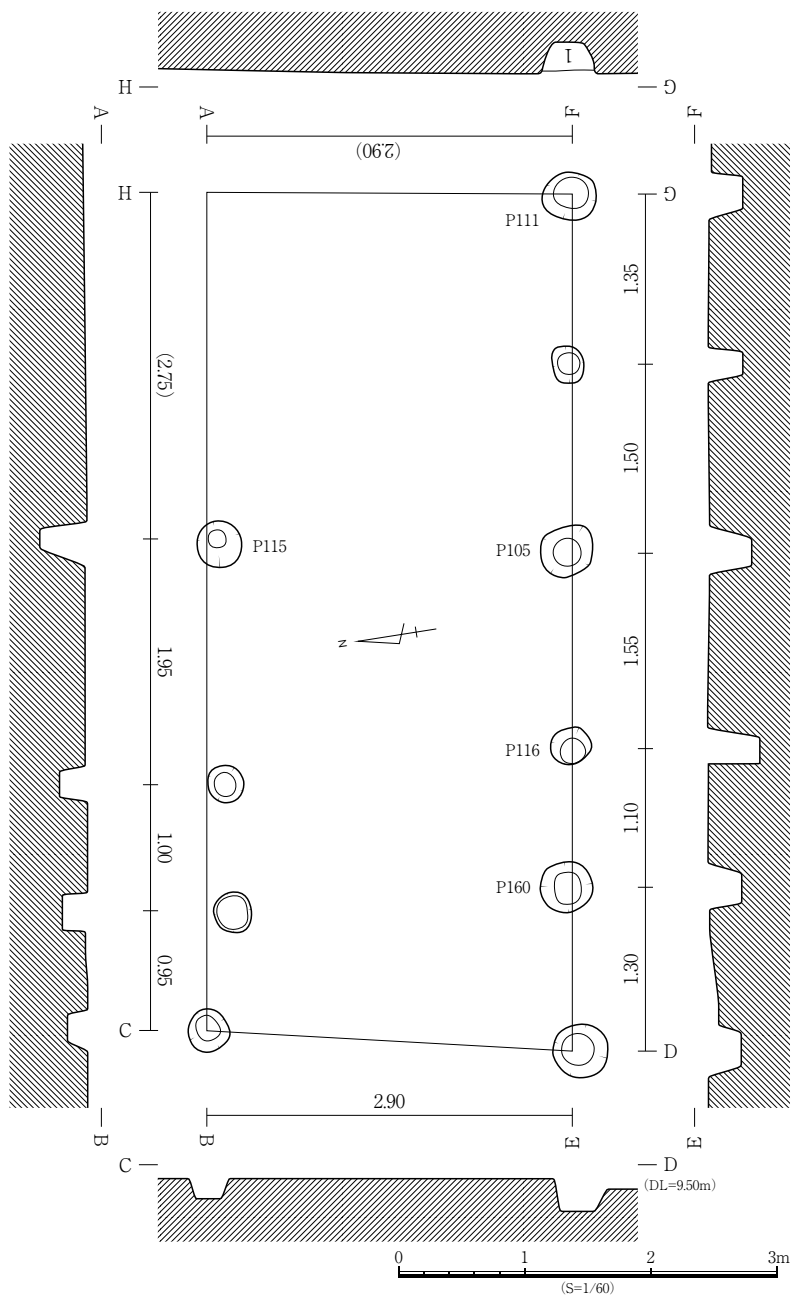
図IV-7 ST4平面図・断面図・遺物実測図



遺構埋土

1. 褐灰色 (10YR6/1) 細粒砂混じりシルトと黒褐色 (7.5YR3/1) シルト質粘土と明黄褐色 (10YR6/6) シルト質粘土が混ざる
2. 黒褐色 (10YR3/1) 細粒砂混じり粘土ブロックを含む明黄褐色 (10YR6/6) 細粒砂混じりシルト
3. 明黄褐色 (10YR7/6) 細粒砂混じりシルト
4. 明黄褐色 (10YR7/6) 細粒砂混じりシルトをブロック状に少量含む黒褐色 (7.5YR3/1) 細粒砂混じり粘土
5. 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト質粘土をブロック状に少量含む褐灰色 (10YR6/1) 細粒砂混じりシルト
6. 褐灰色 (10YR6/1) 細粒砂混じりシルトと黒褐色 (7.5YR3/1) シルト質粘土と明黄褐色 (10YR6/6) シルト質粘土が混ざる
7. 灰黄褐色 (10YR6/2) 細粒砂混じりシルトと黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂混じりシルトと黒褐色 (7.5YR3/1) シルト質粘土が混ざる

図IV-8 SB1平面図・断面図



図IV-9 SB2平面図・断面図・エレベーション図

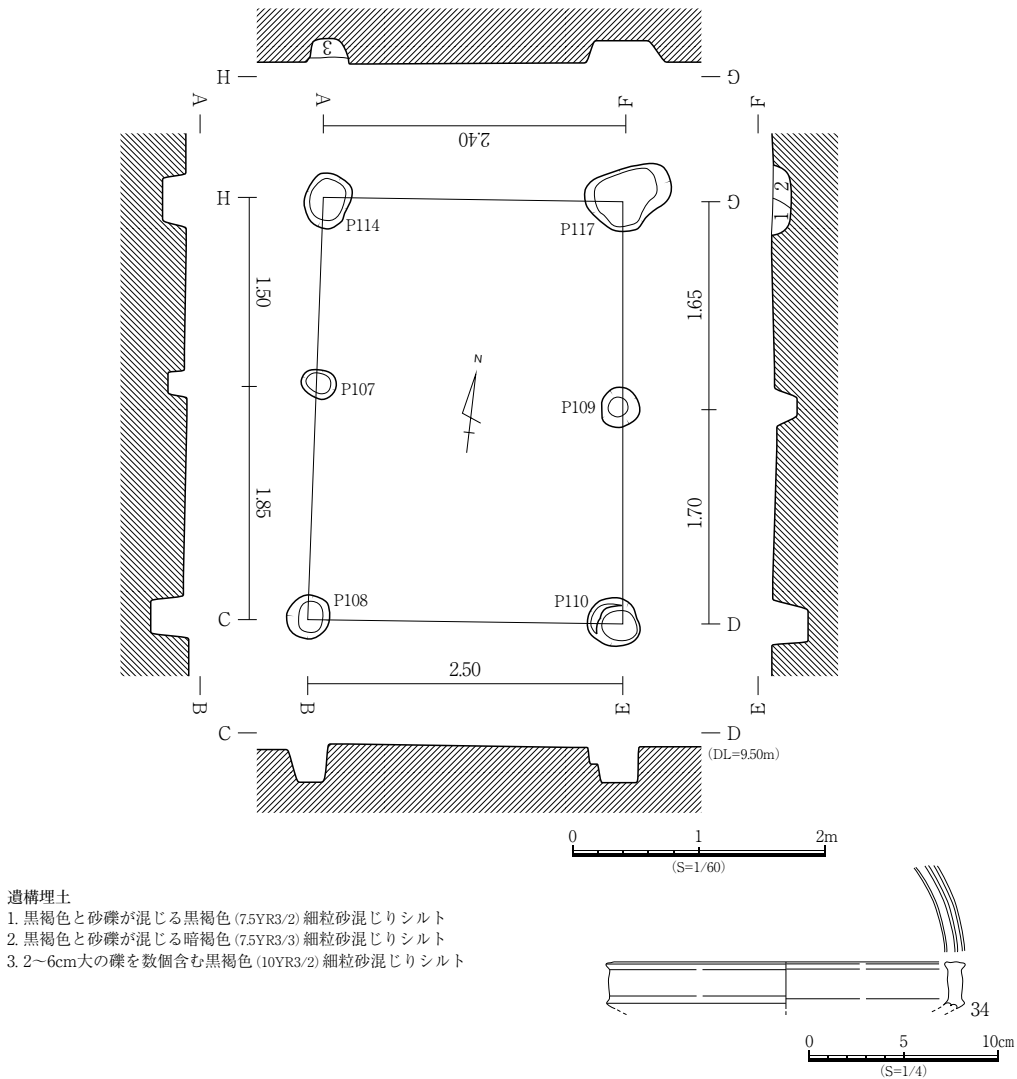
SB2 (P105・111・115・116・137・160) (図IV-9)

調査区の南西部で検出した掘立柱建物跡である。桁行5間(6.8m)、梁行1間(2.9m)の東西棟の建物に復元できる。棟方向はN-81°29'-Wである。柱穴は直径25~45cmである。P160の埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトと浅黄色細粒砂混じりシルトが混ざった土層で、P160以外は褐灰色細粒砂混じりシルトである。桁行の心々間の長さは1.1~1.6mと不揃いである。SB2は弥生時代中期末か。

SB3 (P107~111・114・115) (図IV-10)

調査区の南西部で検出した掘立柱建物跡である。桁行は2間(3.3m)、梁行1間(2.5m)分まで検出したが、調査区外へとのびる可能性がある。棟方向はN-4°50'-Wである。柱穴は直径約25~50cmである。桁行の心々間の長さは1.4~1.8mである。埋土はP114・117が黒褐色細粒砂混じりシルト、これら以外はすべて褐灰色細粒砂混じりシルトである。

図示した遺物はP110から出土した弥生土器の高杯(34)である。口唇部を水平に拡張させ、2条の凹線文を施す。また、外面にも2条の凹線文を施す。



図IV-10 SB3平面図・断面図・エレベーション図・遺物実測図

SB3は弥生時代中期末か。

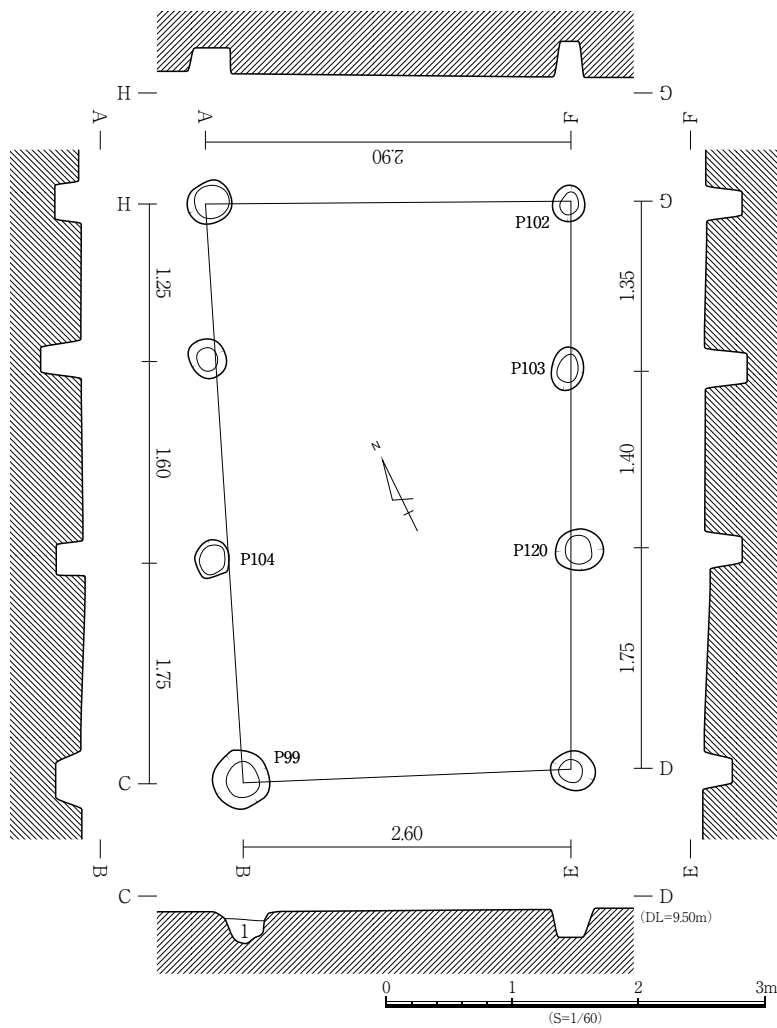
SB4 (P99・102～104・120) (図IV-11)

調査区の北西部で検出した掘立柱建物跡である。桁行3間(4.5m)、梁行1間(2.6m)の南北棟の建物跡である。棟方向はN-26°9'-Eである。柱穴は直径25～45cmである。桁行の心々間の長さは1.3～1.7mである。SB4は弥生時代中期末か。

SB5 (P118・132・183・185～187・189) (図IV-12)

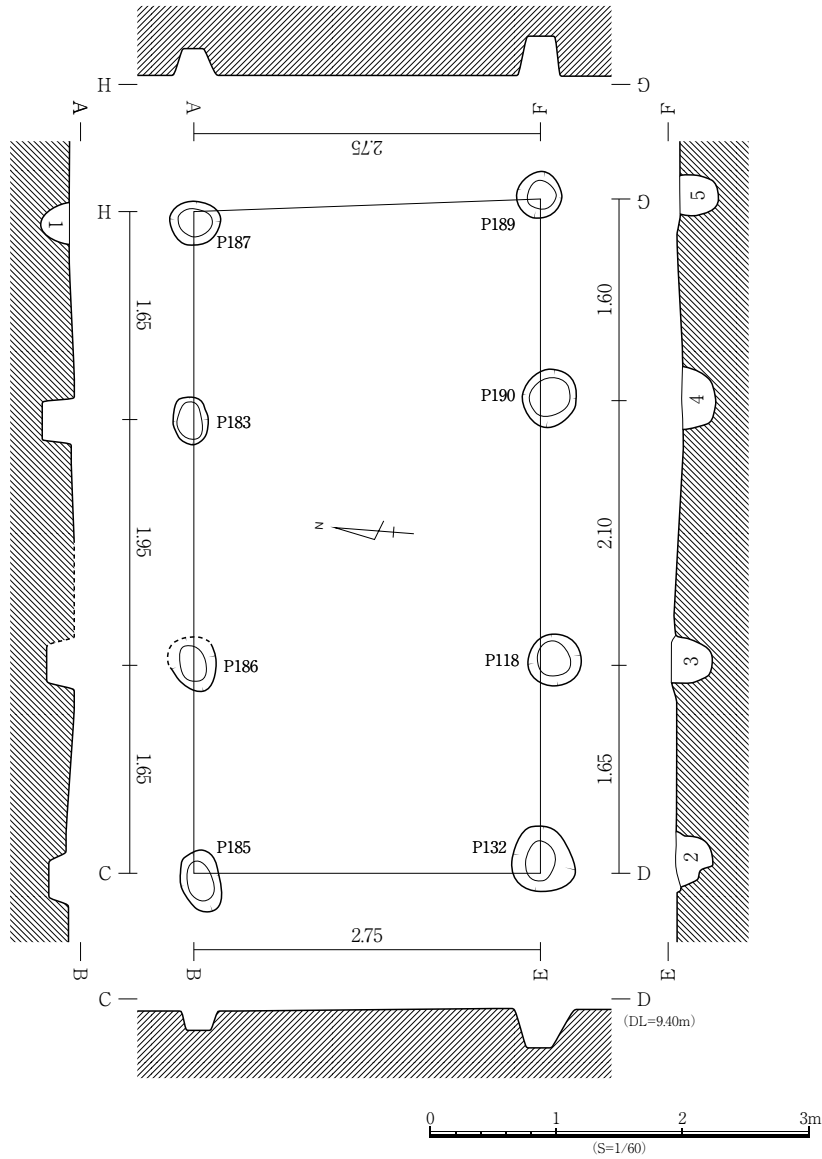
調査区の北西部で検出した掘立柱建物跡である。桁行3間(5.3m)、梁行1間(2.7m)の東西棟の建物跡である。棟方向はN-85°26'-Wである。柱穴は直径30～50cmである。P118は黒褐色細粒砂混じりシルト、P132は極暗褐色細粒砂混じりシルト、P183は黒褐色細粒砂混じりシルト、P185・186は褐色細粒砂混じりシルト、P187・189・190は黒褐色細粒砂混じりシルトである。

図示した遺物はP132から出土した弥生土器の高杯(35)である。口唇部を拡張させ、2条の凹線文を施す。外面には2～3条の弱い凹線文を巡らせる。内外面ともナデ調整である。



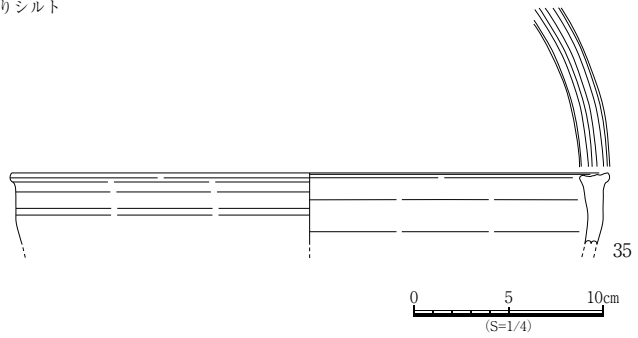
遺構埋土
1.5cm大の礫を1個含む黒褐色(10YR3/2)細粒砂混じりシルト

図IV-11 SB4平面図・断面図・エレベーション図

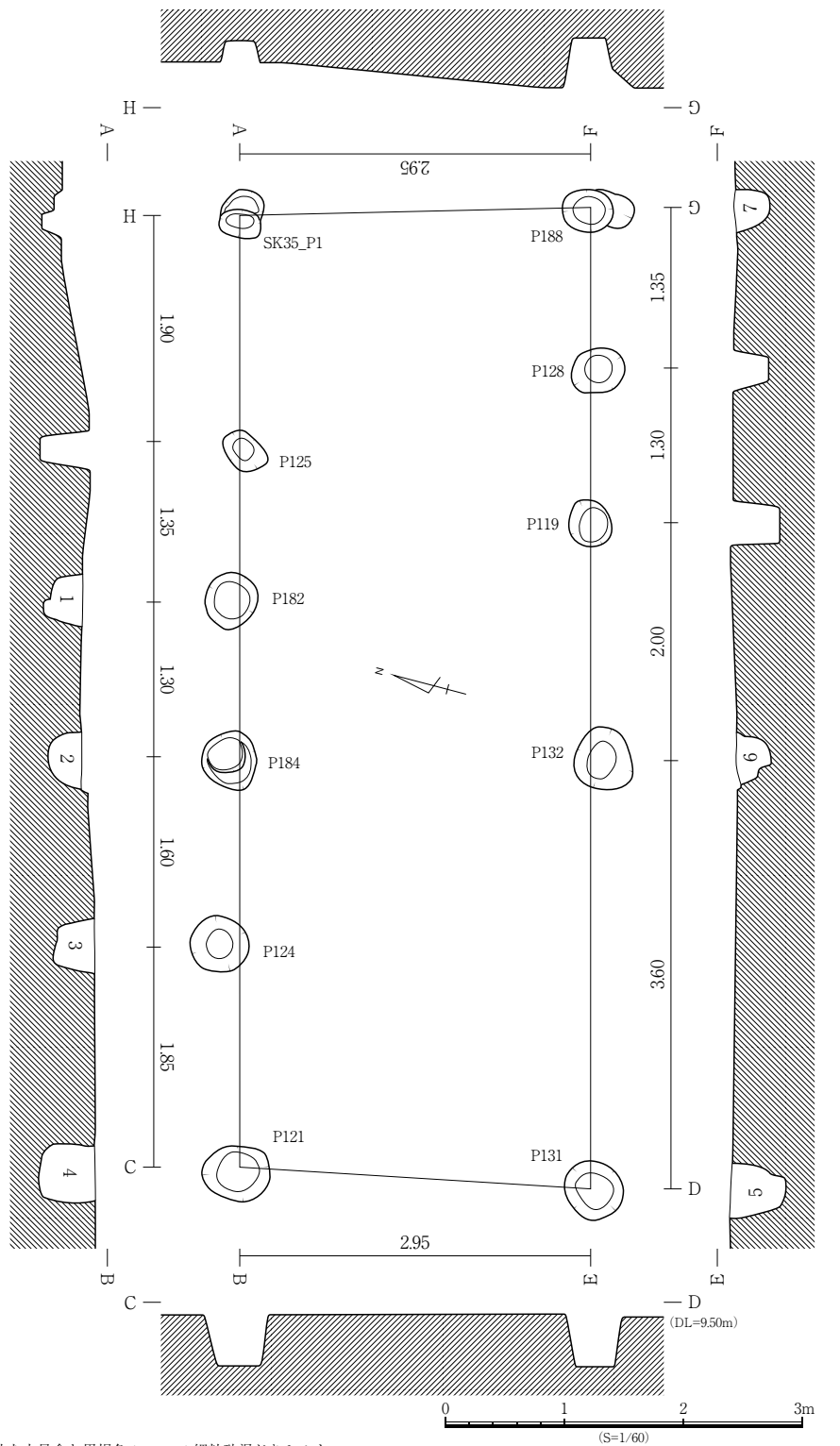


遺構埋土

1. 褐色が混じり7cm大の礫を2個と2~3cm大の礫を数個含む黒褐色 (7.5YR2/2) 細粒砂混じりシルト
2. 2~3cm大の礫を数個含む極暗褐色 (7.5YR2/3) 細粒砂混じりシルト
3. 2~4cm大の礫を数個含む黒褐色 (7.5YR3/2) 細粒砂混じりシルト
4. 1~5cm大の礫を数個含む黒褐色 (7.5YR3/2) 細粒砂混じりシルト
5. 2~4cm大の礫を数個含む黒褐色 (10YR3/2) 細粒砂混じりシルト

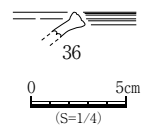


図IV-12 SB5平面図・断面図・エレベーション図・遺物実測図



遺構埋土

1. 炭化物粒を少量含む黒褐色(10YR3/1)細粒砂混じりシルト
2. 黒褐色(10YR3/1)細粒砂混じりシルト
3. 10cm大以下の礫を数個含む暗褐色(7.5YR3/3)細粒砂混じりシルト
4. 黄褐色が混じる黒褐色(10YR2/3)細粒砂混じりシルト
5. 9cm大以下の礫を少量含む極暗褐色(7.5YR2/3)細粒砂混じりシルト
6. 3cm大以下の礫を数個含む極暗褐色(7.5YR2/3)細粒砂混じりシルト
7. 褐色が混じり9cm大以下の礫を少量含む黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂混じりシルト



図IV-13 SB6平面図・断面図・エレベーション図・遺物実測図

SB5は弥生時代中期末か。

SB6 (P119・121・124・125・128・131・132・182・184・188・SK35_P1) (図Ⅳ-13)

調査区北西部で検出した掘立柱建物跡である。桁行5間(8.0m)、梁行1間(2.9m)の東西棟の建物跡である。棟方向はN-75°16'-Eである。柱穴は直径35～58cmである。埋土は暗褐色～極暗褐色細粒砂混じりシルトである。桁行の心々間の長さは1.3～1.9mである。

図示した遺物はP121から出土した弥生土器の甕(36)である。口縁部を上方に拡張させ、2条の凹線文を施す。内外面ともヨコナデ調整である。

SB6は弥生時代中期末か。

(3)SK

SK1 (図Ⅳ-14)

調査区の南東部に位置する不整形の土坑である。検出面ではSD2との埋土が類似しており、新旧関係は不明である。また、SD3とは埋土、形状から別遺構と考えられる。長軸約1.1m、短軸約0.7m、検出面からの深さは24cmである。埋土は、にぶい黄褐色細粒砂混じり粘土である。

SK2 (図Ⅳ-14)

調査区の東部に位置する溝状の土坑である。SD6と重複関係を持つ。長軸1.7m以上、短軸約0.7m、検出面からの深さは26cmである。断面形は舟底状を呈する。埋土は褐灰色細粒砂混じりシルト、灰黄褐色細粒砂混じり粘土、褐灰色細粒砂混じり粘土等である。

図示した遺物は弥生土器の細頸長頸壺(37)である。外面に7条の凹線文を施す。内外面はナデ調整であり、内面にはしほり目が認められる。

SK3 (図Ⅳ-14)

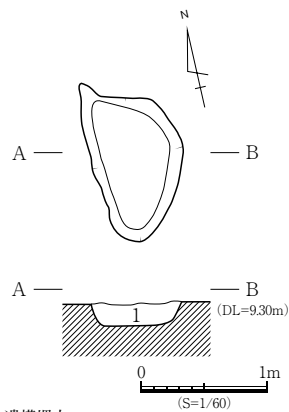
調査区の北東部に位置する隅丸長方形の土坑である。SK25の上面で検出した。長軸約0.8m、短軸約0.7m、検出面からの深さは39cmである。埋土は4層に分層できる。1層は褐灰色細粒砂混じりシルト、2層は黄灰色細粒砂混じりシルト、3層は黄灰色細粒砂混じりシルト、浅黄色細粒砂混じり粘土、黒褐色細粒砂混じり粘土が混ざった土層、4層は浅黄色細粒砂混じり粘土、黄灰色細粒砂混じりシルトが混ざった土層である。

図示した遺物は弥生土器の底部(38)である。若干上げ底であり、底部と体部の境は比較的明瞭である。器壁は薄い。シャープな作りである。

SK4 (図Ⅳ-14)

調査区の北東部に位置する隅丸長方形の土坑である。長軸約2.2m、短軸約1.5m、検出面からの深さは65cmである。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。埋土は3層に分層できる。1層は褐灰色細粒砂混じりシルト、明黄褐色細粒砂混じりシルトが混ざった土層、2層は褐灰色細粒砂混じりシルト、明黄褐色細粒砂混じりシルトが混ざった土層に少量の炭化物を含む。3層は褐灰色細粒砂混じりシルトである。

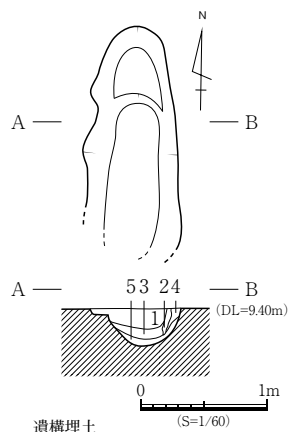
図示した遺物は石包丁の未成品(39)と考えられる。主要な剥離面を残し、縁辺部には調整剥離を施す。頁岩である。



遺構埋土

1. ぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂混じり粘土

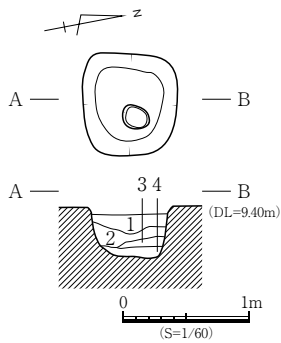
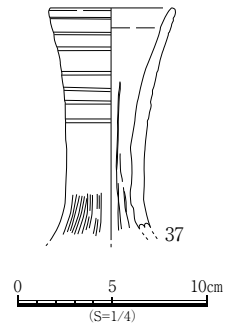
SK1



遺構埋土

1. 黄橙色 (10YR8/6) 細粒砂混じり粘土ブロックを少量含む褐色 (10YR5/1) 細粒砂混じりシルト
2. 黄橙色 (10YR8/6) 細粒砂混じり粘土
3. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細粒砂混じりシルト
4. 褐色 (10YR5/1) 細粒砂混じりシルト
5. 黄橙色 (10YR8/6) 細粒砂混じり粘土ブロックを少量含む褐色 (10YR4/1) 細粒砂混じり粘土

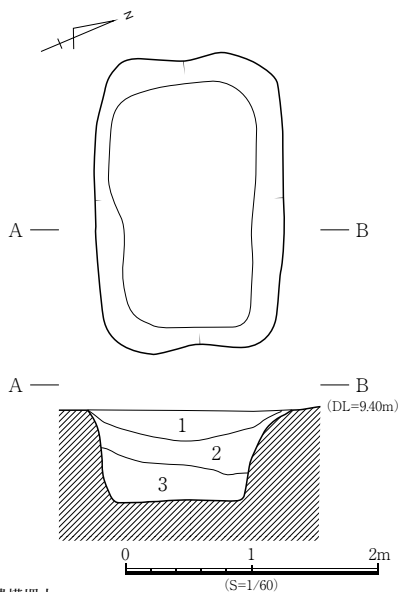
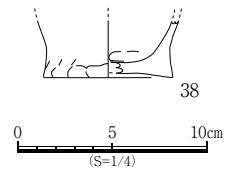
SK2



遺構埋土

1. 浅黄色 (2.5Y7/4) 細粒砂混じり粘土ブロックを少量含む褐色 (10YR5/1) 細粒砂混じりシルト
2. 浅黄色 (2.5Y7/4) 細粒砂混じり粘土ブロックを少量含む黄灰色 (2.5Y6/1) 細粒砂混じりシルト
3. 黄灰色 (2.5Y6/1) 細粒砂混じりシルトと浅黄色 (2.5Y7/4) 細粒砂混じり粘土と黒褐色 (10YR3/1) 細粒砂混じり粘土が混ざる
4. 浅黄色 (2.5Y7/4) 細粒砂混じり粘土と黄灰色 (2.5Y6/1) 細粒砂混じりシルトが混ざる

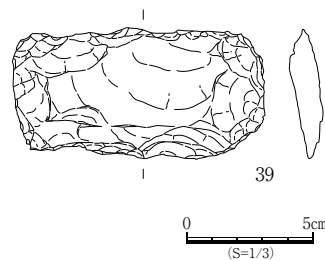
SK3



遺構埋土

1. 褐色 (10YR5/1) 細粒砂混じりシルトと明黄褐色 (10YR7/6) 細粒砂混じりシルトが混ざる
2. 炭化物を少量含む褐色 (10YR4/1) 細粒砂混じりシルトと明黄褐色 (10YR7/6) 細粒砂混じりシルトが混ざる
3. 明黄褐色 (10YR7/6) 細粒砂混じりシルトブロックを少量含む褐色 (10YR4/1) 細粒砂混じりシルト

SK4



図IV-14 SK1~4平面図・断面図・遺物実測図

SK5・9 (図IV - 15)

SK5は調査区の東部に位置する隅丸長方形の土坑である。長軸約2.5m, 短軸約1.6m, 検出面からの深さは19cmである。東辺のプランから複数の遺構が重複している可能性がある。SK9は調査区の東部に位置する隅丸長方形の土坑である。SK5に切られる。SK5の底面でSK9の北半部を検出した。長軸約1.7m, 短軸約1.0m, 検出面からの深さは40cmである。埋土は灰黄褐色細砂混じりシルト, 焼土ブロックを含む炭化物層である。炭化物層は西から傾斜して分布しており, 多量の炭化種実を含んでいた。同定の結果, イネ・アワ・キビ等であった(第IV章参照)。炭化種実の出土個数ではアワが60%, イネが32%であり, 重量ではイネが77%, アワが16%となっている。アワの占める割合が高く, この結果は地点によるものか。比較検討できる資料が無く, 今後の課題としたい。なお, 高知県の町のバーガ森北斜面遺跡で同時期の炭化種実の同定が行われている。それによると, イネ以外は検出されていない(パリノ・サーヴェイ株式会社 2015)。また, SK5からは他にイチイガシ・コナラ属の実が検出されている。空港拡張に伴う田村遺跡群の発掘調査においても, 複数の遺構からイチイガシ・コナラ属の実が検出されており(パリノ・サーヴェイ株式会社 2004・株式会社古環境研究所 2004), 弥生時代の食物の1つと推測される。

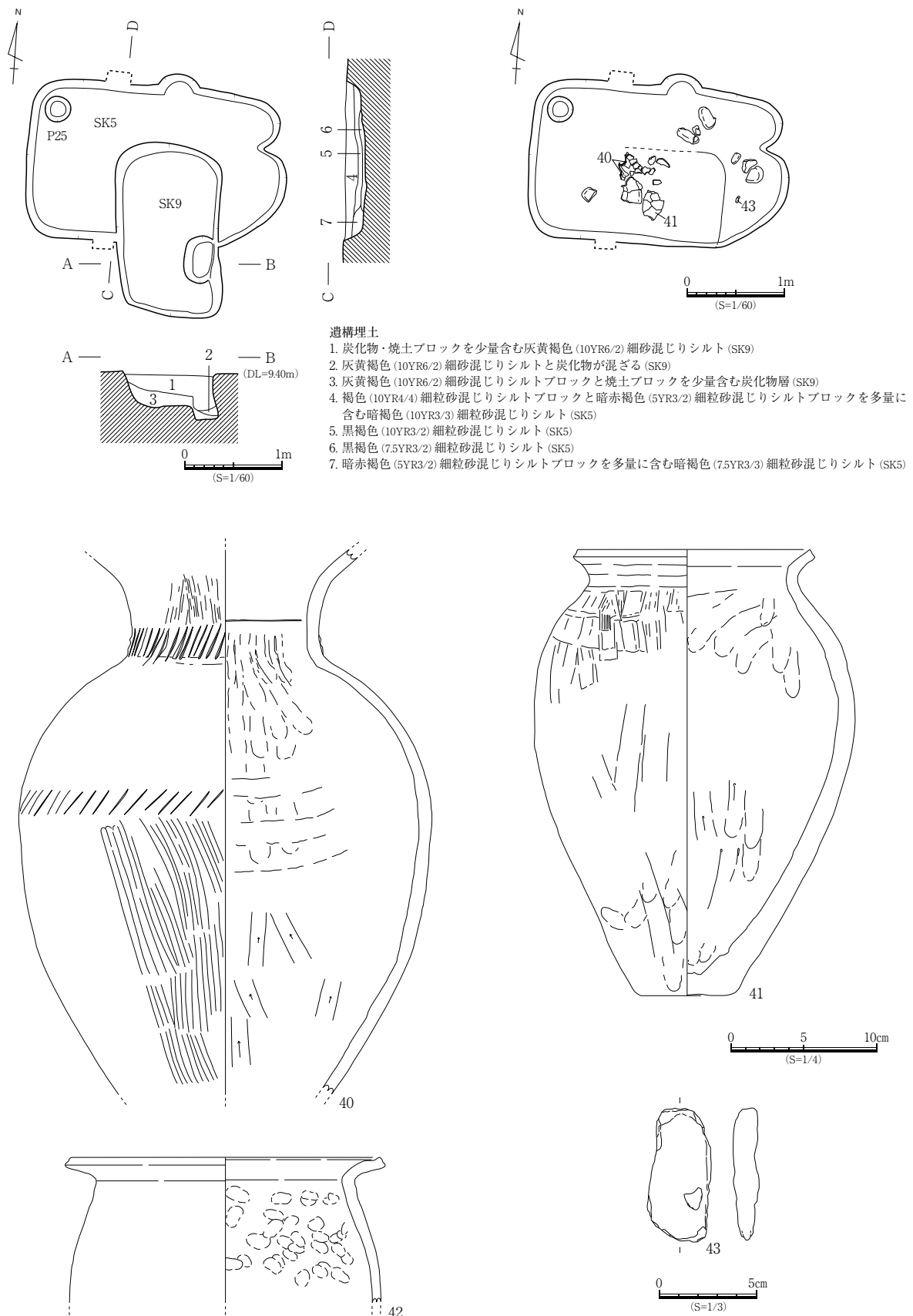
SK5・9の出土遺物は少量であるが, 図上復元できるなど大きな破片が多い。SK5で取上げた土器片とSK9で取り上げた土器片が接合しており, 炭化物層の分布状況等からSK5を掘り残していた可能性がある。これらの遺物(40・41)は炭化物層の上層から出土したものである。土坑の形態, 規模, 周辺状況からSK5は弥生時代中期末に属すると考えられる。

図示した出土遺物は弥生土器の壺・甕, 鉄器である。40は壺である。体部は上胴部に最大径を持つ倒卵形であり, 頸部は短く直立する。頸部と上胴部に「ノ」の字状の刻みを施す。外面はミガキ調整を施す。内面は体部下半部にケズリ調整を施し, 上半部はナデ調整であり, しぼり目が認められる。41は甕である。体部は上胴部に最大径を持つ倒卵形であり, 口縁部は短く外反する。口唇部は上下にわずかに拡張させ, 面取りする。外面はナデ調整を施す。内面下半部はケズリ調整, 上半部はナデ調整であり, 肩部には指頭圧痕が認められる。器壁が厚く重い。42は甕である。口縁部は強く外反し, 口唇部は上方へわずかに拡張する。磨耗のため口唇部の凹線文の有無は不明である。上胴部内面には指頭圧痕が多く認められる。43は板状鉄斧の可能性はある。

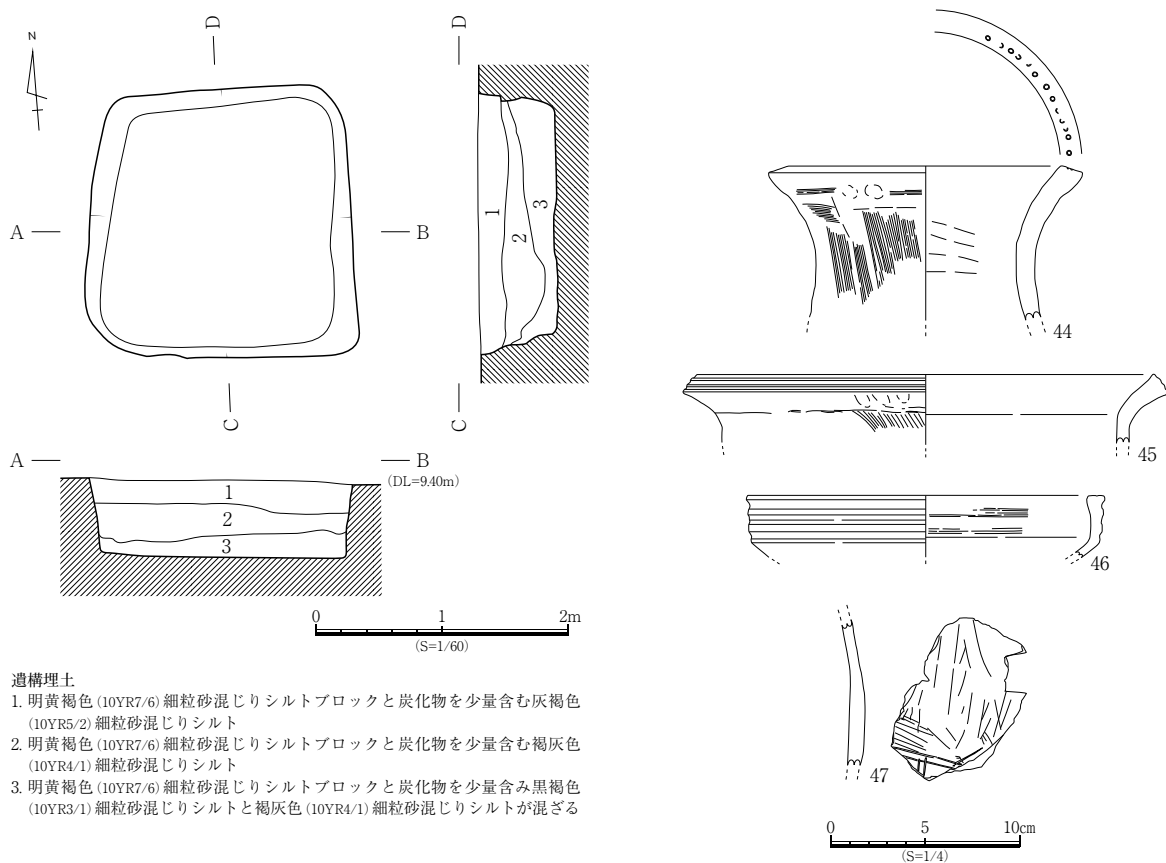
SK6 (図IV - 16)

調査区の東部に位置する隅丸方形の土坑である。一辺約2.1m, 検出面からの深さは61cmである。SK21・SD7・SD10を切る。断面形は箱形を呈し, 底面は平坦である。埋土は3層に分層できる。1層は灰黄褐色細粒砂混じりシルト, 2層は褐灰色細粒砂混じりシルト, 3層は褐灰色細粒砂混じりシルトと黒褐色細粒砂混じりシルトが混ざった土層である。

図示した出土遺物は弥生土器の壺・鉢・高杯である。44は壺である。口縁部はあまりひらかない。口唇部は強いナデ調整により凹面状を呈し, 竹管文を密に施す。外面はタテハケ調整, 内面はナデ調整である。45は鉢である。粘土帯を貼付し, 口縁部を肥厚させ, 3条の凹線文を施す。内外面ともナデ調整である。粘土帯接合痕跡は比較的丁寧になデ消されている。46は高杯である。口縁部は外方へ拡張し, ハケ状工具により面取りを施す。口縁部外面には3条の太めの凹線文を施す。杯部外面はミガキ調整である。内面は口縁部がハケ調整, 杯部がナデ調整である。47は上胴部の破片と考えられる。外面はハケ調整, 繊維痕跡が残るナデ調整である。双線で文様を描く。ST2の16・17と同一個体の



図IV-15 SK5・9平面図・断面図・遺物出土状況図・遺物実測図



図IV-16 SK6平面図・断面図・遺物実測図

可能性がある。

SK7 (図IV-17)

調査区の東部に位置する隅丸長方形の土坑である。長軸約1.0m, 短軸約0.8m, 検出面からの深さは12cmである。埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトである。

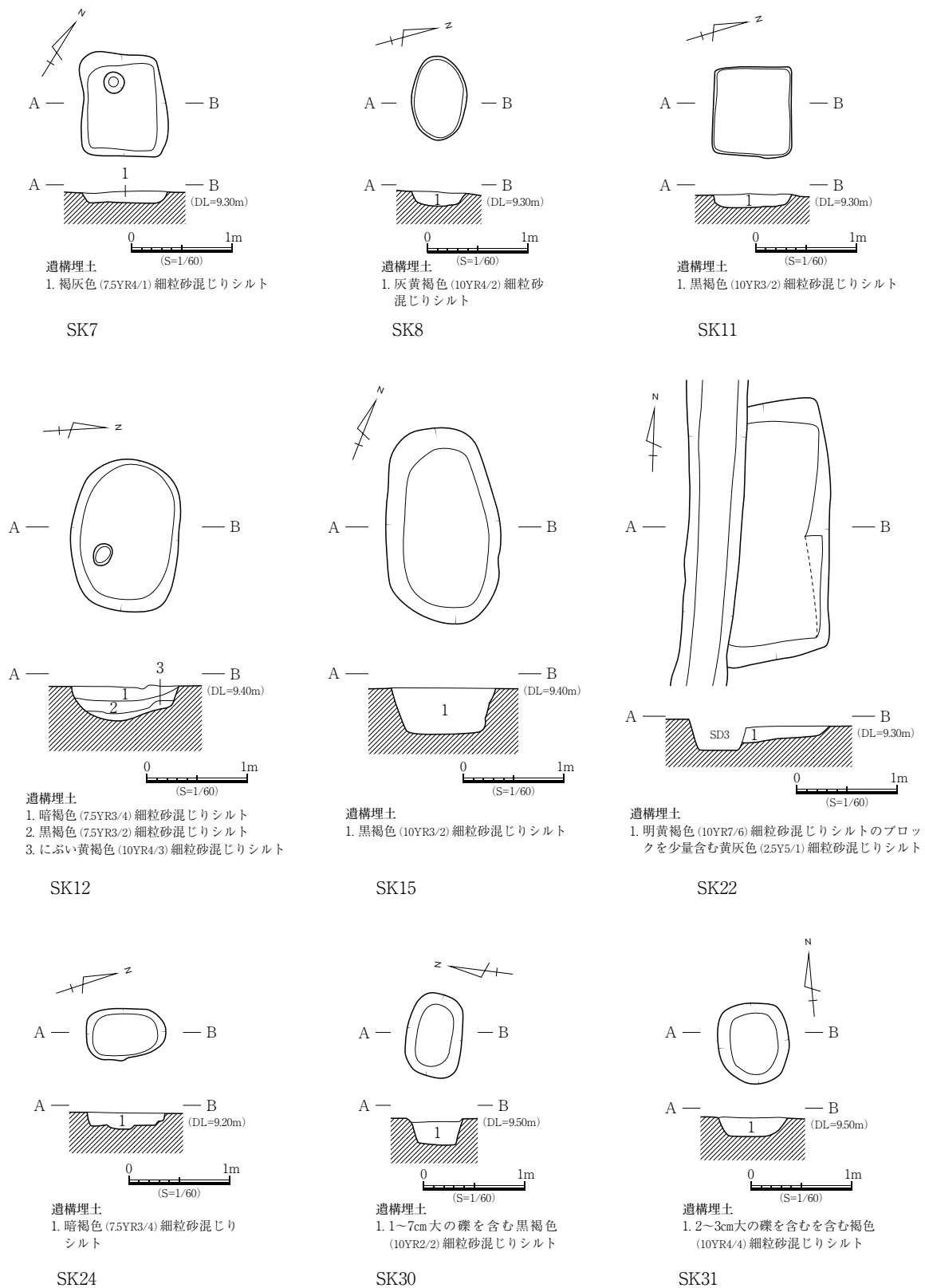
SK8 (図IV-17)

調査区の東部に位置する楕円形の土坑である。長軸約0.8m, 短軸約0.5m, 検出面からの深さは15cmである。埋土は灰黄褐色細粒砂混じりシルトである。

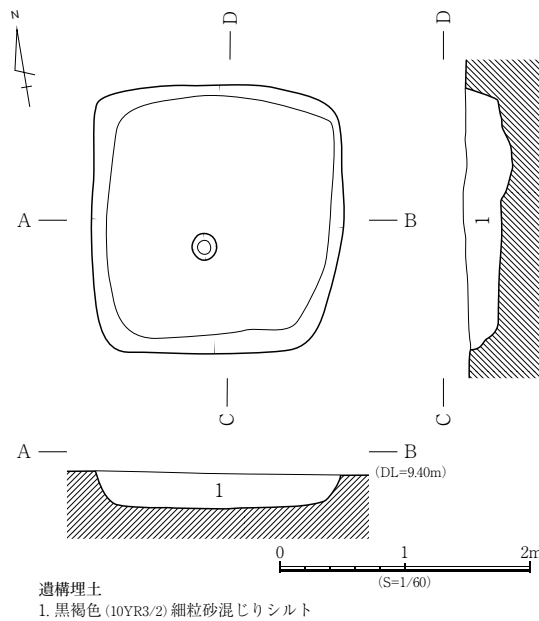
SK10 (図IV-18)

調査区の東部に位置する隅丸長方形の土坑である。長軸約2.1m, 短軸約2.0m, 検出面からの深さは27cmである。床面でピットを1基検出した。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。

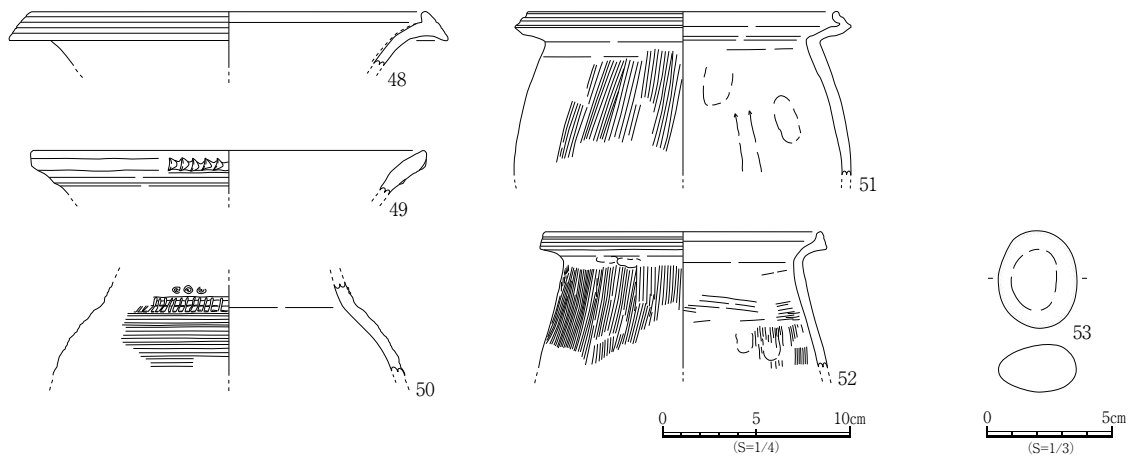
図示した出土遺物は弥生土器の壺・甕, 石製投弾である。48は壺である。口縁端部で大きくひらき, 口縁部を上下に拡張する。4条の凹線文を施す。49は壺である。口唇部にはヨコナデ調整を施し, 尖らせる。下端には斜め方向からの刻目を施す。微隆起突帯を1条巡らせる。胎土は砂粒を多く含み, 黒色を呈する仁淀川流域のものである。50は壺である。上胴部の破片である。頸部と胴部の境からドーナツ状浮文, 刻目, 単位境が微隆起突帯状になる櫛描直線文を施す。胎土は砂粒を多く含み, 黒色を呈する仁淀川流域のものである。51は甕である。口縁部は強く外反し, 上方へ拡張する。外面に2条の凹線文を施す。外面にはタテハケ調整を施す。内面は上胴部までケズリ調整, 肩部はナデ調整



図IV-17 SK7・8・11・12・15・22・24・30・31平面図・断面図



遺構埋土
1. 黒褐色(10YR3/2) 細粒砂混じりシルト



図IV-18 SK10平面図・断面図・遺物実測図

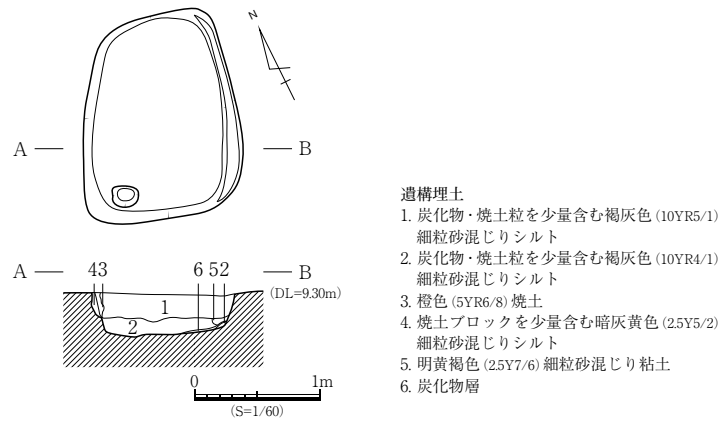
で指頭圧痕が認められる。52は甕である。口縁部は「く」の字状を呈し、上方へ拡張する。外面に2条の凹線文を施す。外面はタテハケ調整を施す。内面は上半部まではタテハケ調整、肩部はヨコハケ・ナデ調整である。53は砂岩製の投弾である。加工は認められない。全長は約4cm、重量は約30gである。

SK11 (図IV-17)

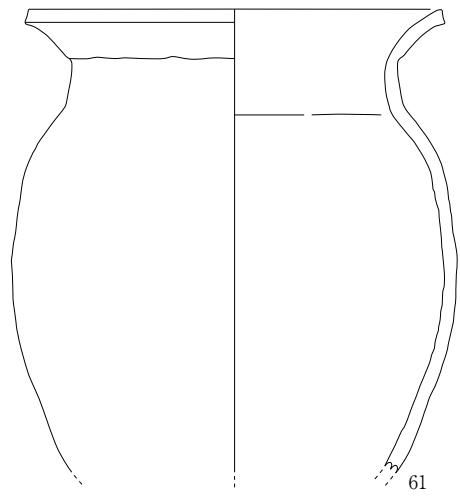
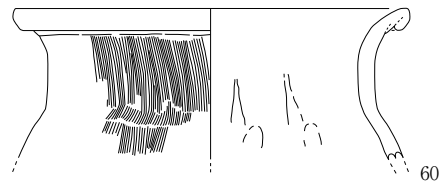
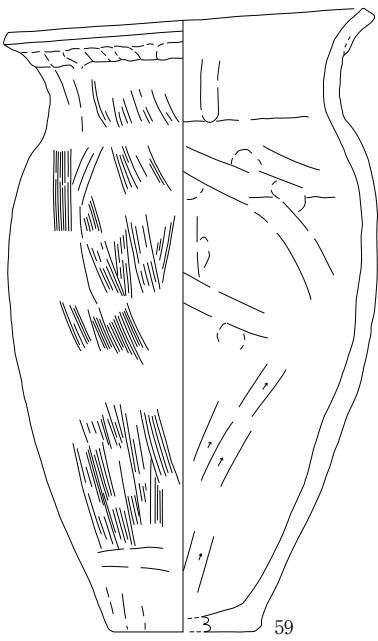
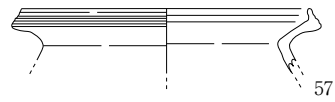
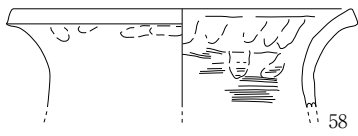
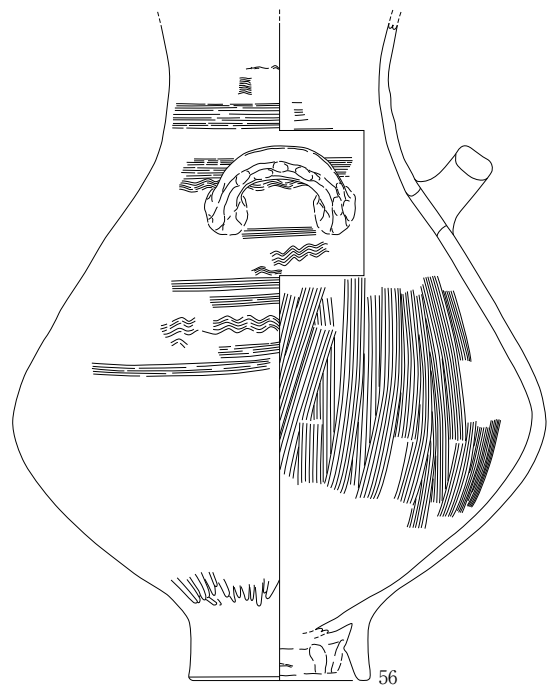
調査区の東部に位置する隅丸長方形の土坑である。長軸約0.9m、短軸約0.7m、検出面からの深さは14cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。

SK12 (図IV-17)

調査区の東部に位置する隅丸長方形の土坑である。長軸約1.5m、短軸約1.0m、検出面からの深さは27cmである。断面形は舟底状を呈している。埋土は3層に分層できる。1層は暗褐色細粒砂混じりシルト、2層は黒褐色細粒砂混じりシルト、3層はにぶい黄褐色細粒砂混じりシルトである。



図IV-19 SK13平面図・断面図・遺物実測図1



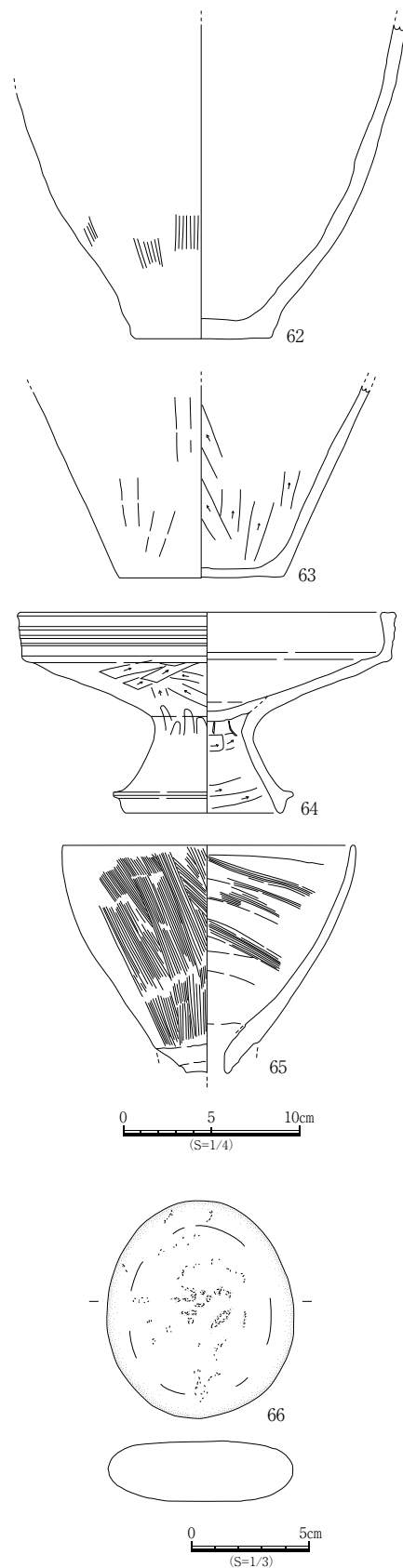
0 5 10cm
(S=1/4)

图IV-20 SK13遺物実測図2

SK13 (図IV-19~21)

調査区の東部に位置する不整隅丸長方形の土坑である。長軸約1.6m, 短軸約1.2m, 検出面からの深さは33cmである。断面形は逆台形であり, 底面は平坦である。西壁の一部は被熱のため橙色を呈する。また, 東側底面に炭化物層が認められる。埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトである。出土遺物は多く, 床面から検出面まで認められる。破片の大きなものも多い。

図示した出土遺物は弥生土器の壺・水差形土器・甕・高杯, 叩石である。54は壺である。口縁部はあまりひらかず, 上下に拡張する。2条のシャープな凹線文を施す。体部は中位よりやや上に最大径を持つ。頸部外面は斜め方向のハケ調整, 胴部は横方向のハケ調整である。内面はナデ調整であり, 指頭圧痕が多く認められる。また, 外面にはベンガラと思われる赤色顔料が塗布されている。55は壺である。直立した短い頸部から口縁部は外反する。貼付口縁であり, 粘土帯を指押えによる調整後ヨコナデ調整を施す。体部は上胴部に最大径を持つ。外面の肩部はヨコハケ調整, それ以外はタテハケ調整である。内面下半部はヘラケズリか, やや荒れる。また, 外面にはベンガラと思われる赤色顔料が塗布されている。56は水差形土器である。腰部は大きく張り, 頸部にむかって径が小さくなる。肩部に把手が付く。把手の断面は楕円形を呈し, 横方向に付く。底部には筒状の脚が付く。底は円盤充填である。外面には頸部から胴部最大径にかけて櫛描直線文と櫛描波状文を交互に配置する。櫛描文は繊細である。底部付近には縦方向のミガキ調整が認められる。また, 二次被熱により変



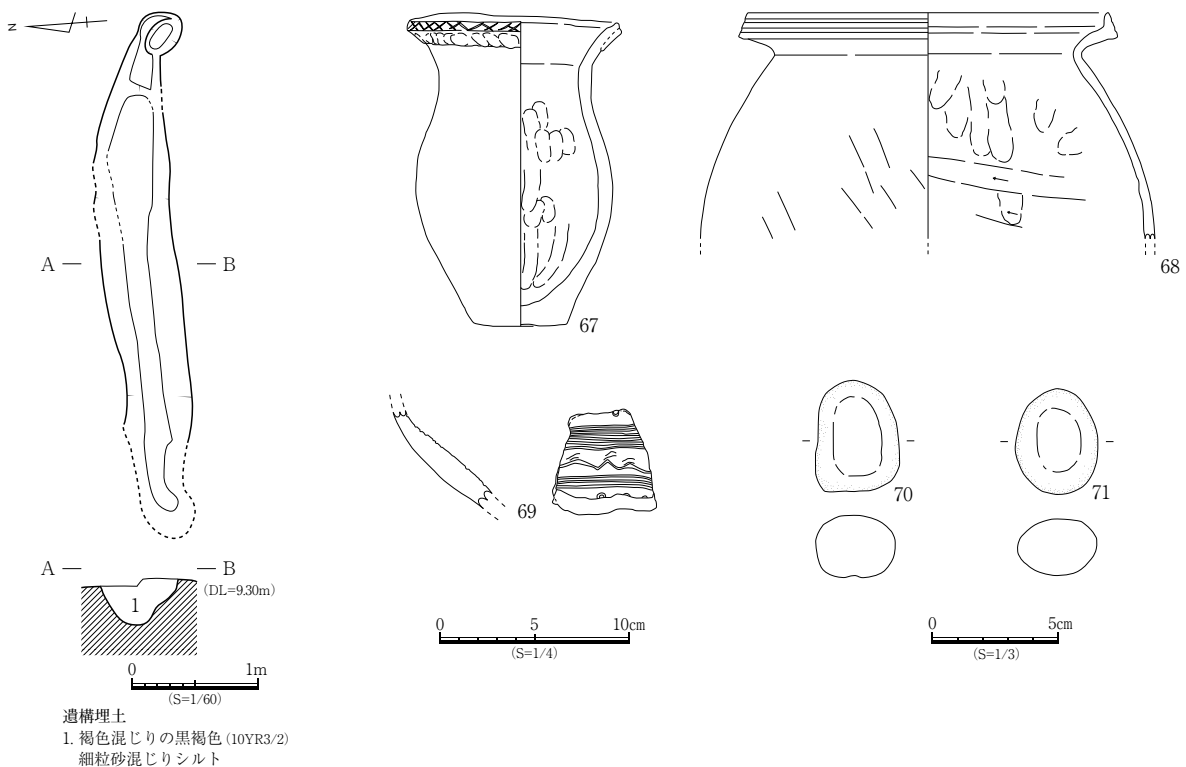
図IV-21 SK13遺物実測図3

色する。59は甕である。上胴部に最大径を持ち、頸部にタテハケ調整を施すため、頸部は直立気味になる。貼付口縁であり、粘土帯を指押さえ後ヨコナデ調整を施す。外面はタテハケ調整である。内面は上胴部までケズリ調整を施す。上胴部には帯状に煤が付着する。60は甕である。口縁端部の粘土帯接合時の痕跡を残し貼付口縁とし、さらに断面カマボコ形の粘土紐を貼付する。外面、タテハケ調整である。頸部のタテハケは1ストロークで施す。内面はナデ調整である。61は甕である。上胴部に最大径を持ち、口縁部にむけて緩やかに外反する。貼付口縁である。粘土帯を指押さえ後ヨコナデ調整か。口唇部には面取りを施す。磨耗のため調整不明である。64は高杯である。杯部は大きくひらき、口縁部は直立する。外面には4条の凹線文を施す。端部を拡張し、1条の凹線文を施す。外面はケズリ調整である。短い脚部は「ハ」の字状にひろがり、端部は強いヨコナデ調整により突帯状を呈する。内面はケズリ調整である。円盤充填である。SK29出土の遺物と接合した。65は脚付鉢であり、杯部は深い。外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整である。円盤充填である。被熱変色する。66は砂岩製の叩石である。扁平な川原石を利用する。中央部に弱い敲打痕跡が認められる。

SK14 (図IV-22)

調査区の北東部に位置する溝状土坑である。SK10に切られる。長軸約4.1m、短軸約0.6m、検出面からの深さは35cmである。断面形は舟底状を呈し、埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は弥生土器の壺・甕、投弾である。67は壺である。体部中位に胴部最大径を持ち、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。貼付口縁であり、粘土帯を指押さえ後ヨコナデ調整を施す。口唇部は面取りし、斜格子文を施す。外面は被熱により器面は荒れ、調整等の観察は困難である。内面はナデ調整である。残存率は良好である。68は甕である。口縁部を上方に拡張し、2条の凹線



図IV-22 SK14平面図・断面図・遺物実測図

文を施す。内面は上胴部まで横方向のケズリ調整を施す。煤が付着する。69は上胴部の破片である。外面には、上から竹管文、櫛描直線文、櫛描波状文、櫛描直線文、櫛描波状文、竹管文を施す。櫛描文は粗い。70・71は砂岩製の投弾である。

SK15 (図IV-17)

調査区の北東部に位置する不整隅丸長方形の土坑である。長軸約1.9m, 短軸約1.1m, 検出面からの深さは46cmである。

SK16 (図IV-23)

調査区の南東部に位置する不整形の土坑である。長軸約1.0m, 短軸約0.7m, 検出面からの深さは33cmである。

図示した出土遺物は砂岩製の投弾(72・73)である。

SK17 (図IV-24)

図示した出土遺物は土師器の皿(74)である。内外面ともミガキ調整であり、口縁部をわずかに外反させる。煤が付着する。

SK18

調査区の北東部に位置する隅丸長方形の土坑である。長軸約1.0m, 短軸約0.7m, 検出面からの深さは11cmである。

SK21

調査区の東部に位置する土坑である。SK6に大部分が切られており、形態・規模は不明である。長軸約2.1m, 短軸0.4m以上, 検出面からの深さは60cmである。

SK22 (図IV-17)

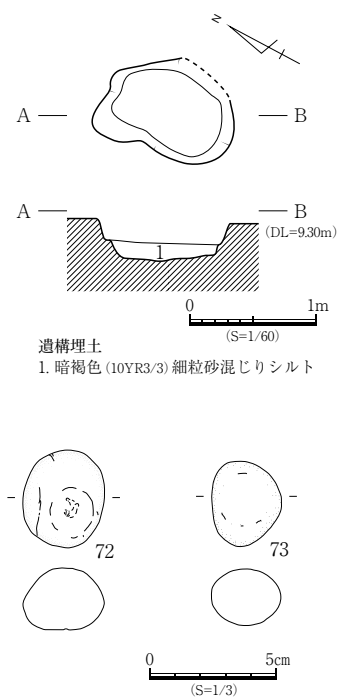
調査区の東部に位置する隅丸長方形の土坑である。SD3に切られる。長軸約2.5m, 短軸1.0m以上, 検出面からの深さは11cmである。埋土は黄灰色細粒砂混じりシルトである。

SK23 (図IV-25)

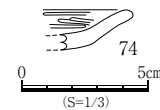
調査区東部に位置する土坑である。長軸約1.0m, 短軸約0.6mの不整形を呈する。検出面からの深さは57cmである。図示した出土遺物は砂岩製の投弾(75)である。

SK24 (図IV-17)

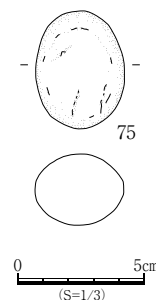
調査区の北東部に位置する不整形の土坑である。長軸約0.8m, 短軸約0.5m, 検出面からの深さは15cmである。埋土は暗褐色細粒砂混じりシルトである。



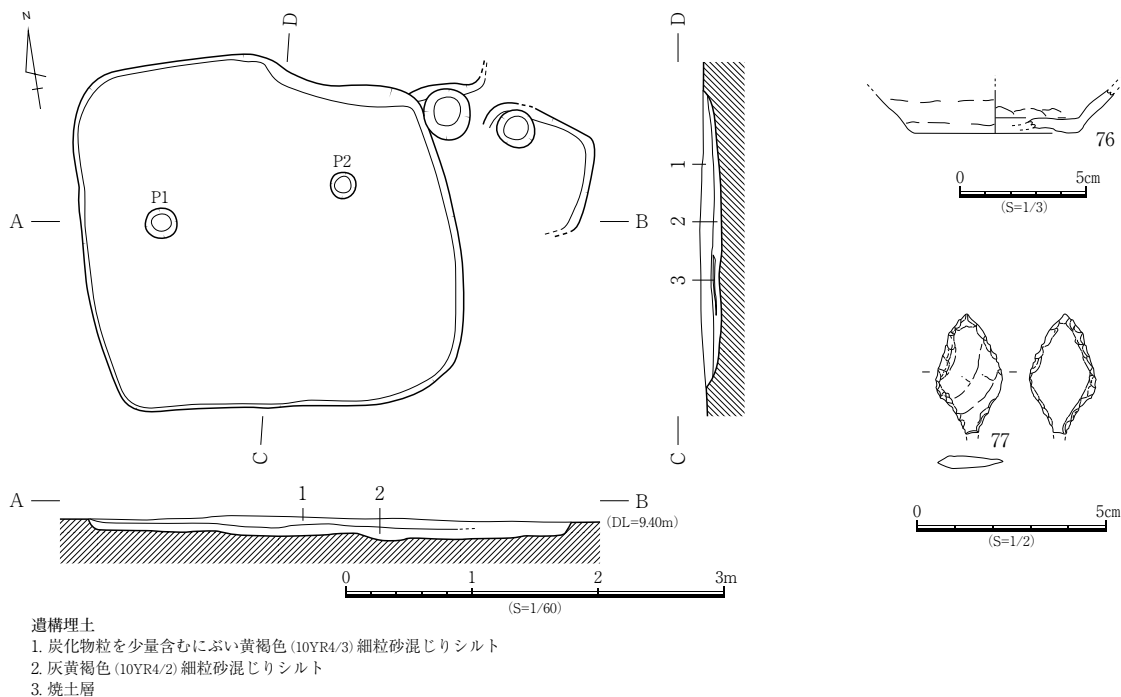
図IV-23 SK16平面図・断面図・遺物実測図



図IV-24 SK17遺物実測図



図IV-25 SK23遺物実測図



図IV-26 SK25平面図・断面図・遺物実測図

SK25 (図IV-26)

調査区の北東部に位置する。平面形は北東隅部が欠けた隅丸長方形の土坑である。長軸約3.0m, 短軸約2.8m, 検出面からの深さは10cmである。北壁と南壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は、にぶい黄褐色細粒砂混じりシルト, 灰黄褐色細粒砂混じりシルトであり, 焼土層を含む。また, 床面でピットを2基検出した。ピットは直径約0.2m, 深さは6cmであり, 両ピットの心々間の長さは約1.5mである。この土坑には覆い屋がかかっていた可能性がある。

図示した出土遺物は土師器の杯(76), 石鍬(77)である。76は磨耗が激しく, 調整等の観察が困難である。混入品である。77はサヌカイト製の有茎式打製石鍬である。両面とも主要な剥離面を残し, 縁辺部に調整加工を施す。断面は扁平である。

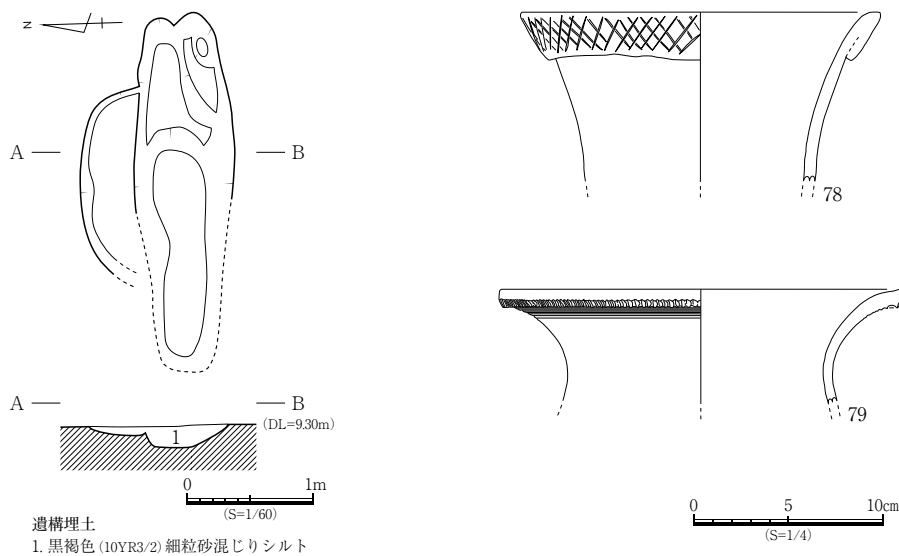
SK26 (図IV-27)

調査区の北東部に位置する溝状土坑である。長軸2.8m以上, 短軸約0.8m, 検出面からの深さは19cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は弥生土器の壺・甕である。78は壺である。頸部は長く, 口縁部はあまりひらかない。粘土帯は厚く, 口唇部は尖らせる。粘土帯外面には斜格子文を施す。斜格子文はヘラ描きにより, 右下がりの沈線の後に左下がりの沈線を描く。内外面ともナデ調整である。79は甕である。口縁部を大きく外反させ, 口唇部は面取りし, 下端には刻目を施す。また, 櫛描直線文を2単位施し, 単位境は微隆起突帯状を呈する。仁淀川流域からの搬入品である。

SK27 (図IV-28)

調査区の北東部に位置する隅丸方形の土坑である。一辺約0.6m, 検出面からの深さは10cmである。断面形は南に偏った舟底状を呈する。埋土は褐灰色細粒砂混じりシルト, 黒褐色細粒砂混じりシルト



図IV-27 SK26平面図・断面図・遺物実測図

ト、地山ブロックが混ざった土層である。

図示した出土遺物は管状土錘(80)である。中央部が最大径となる。径3mmの孔が貫通する。

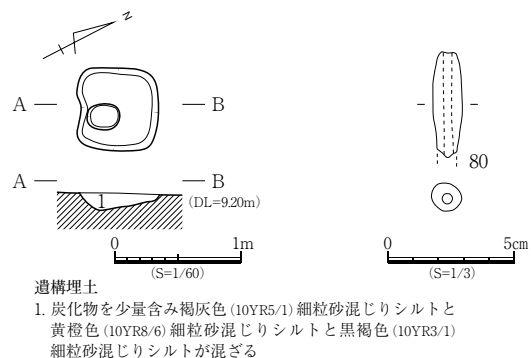
SK28

調査区の北東部に位置する長楕円形の土坑である。長軸約0.9m，短軸約0.3m，検出面からの深さは27cmである。

SK29 (図IV-29～31)

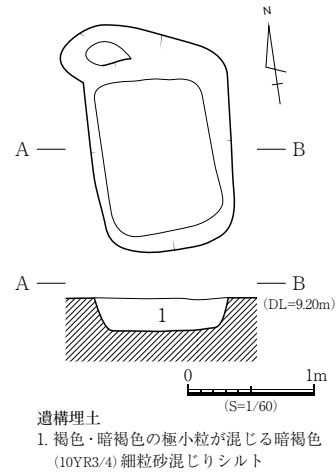
調査区の北東部に位置する不整隅丸長方形の土坑である。重複している可能性がある。長軸約1.8m，短軸約1.1m，検出面からの深さは13cmである。埋土は暗褐色細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は弥生土器の壺・水差形土器・甕・鉢，石斧の未成品である。81は壺である。短い直立した頸部を持つ。口唇部は粘土紐の貼付と強いヨコナデ調整により凹面状を呈する。肩部には1条のヘラ描き直線文，雑な櫛描波状文を施す。82は壺である。やや長めの直立した頸部から口縁部はわずかにひらく。口縁端部を横方向につまみ出し拡張させ，2条の凹線文を施す。頸部には櫛描直線文を4単位，押し引きの簾状文を2単位施す。83は壺である。口唇部はわずかに拡張し，2条の凹線文を施す。肩部には数条の沈線文が認められる。内外面，ナデ調整か。被熱により変色する。84は壺の肩部の破片である。ハケ状工具による刺突文，2段の竹管文を配置する。外面はハケ調整であり，内面はナデ調整である。85は水差形土器である。算盤玉形の体部から頸部は直立する。口縁部外面に2条の凹線文を施す。断面円形の把手が横位に付く。被熱により器面は荒れる。86は甕である。貼付口縁であり，粘土帯を指押え後ヨコナデ調整を



図IV-28 SK27平面図・断面図・遺物実測図

施し、口唇部は面取りする。肩部には刺突文を施す。外面はハケ調整、内面はナデ調整である。煤が付着する。87は甕である。貼付口縁であり、粘土帯を指押え後ヨコナデ調整を施し、口唇部は面取りする。外面は荒れており調整等の観察は困難であるが、体部には縦方向のハケメが認められる。内面は口縁部がヨコハケ調整、体部がナデ調整である。88は小型の甕である。体部から頸部・口縁部が緩やかに外反する。内外面ともナデ調整である。やや雑な作りである。ミニチュア土器の可能性ある。89は甕である。貼付口縁であり、粘土帯には指頭圧痕が明瞭に残る。口唇部は面取りする。煤が付着する。90は甕である。口縁部を上下に拡張し、2条の凹線文を施す。外面はタテハケ調整を施す。内面は頸部に1条のヨコナデ調整、肩部はヨコハケ調整、上胴部はケズリ調整か。器壁は薄い。91は壺体部である。上胴部に最大径を持つ。外底面は輪状に接地面を持ち、中央部はわずかに凹み、未調整である。外面はタテハケ調整、内面はナデ調整である。92は甕の底部である。外面はナデ調整であり、底付近は横方向のハケメが認められる。内面はナデ調整であり、爪のような圧痕がみられる。被熱変色する。93は鉢である。直立気味の体部から口縁部は外反する。口縁端部をつまみ上げ、口唇部を面取りする。外面はハケ調整であり、内面はナデ調整である。94は鉢である。口縁部は短く外反し、粘土帯を貼付する。粘土帯外面には指頭圧痕がみられる。口唇部には面取りを施す。外面は粗いタテハケ調整、内面はナデ調整である。被熱により変色する。95は棒状の自然石であり、特に加工の痕跡は認められない。緑色岩であり、形状・大きさから太型蛤刃石斧の未成品と考えられる。



図IV-29 SK29平面図・断面図

92は甕の底部である。外面はナデ調整であり、底付近は横方向のハケメが認められる。内面はナデ調整であり、爪のような圧痕がみられる。被熱変色する。93は鉢である。直立気味の体部から口縁部は外反する。口縁端部をつまみ上げ、口唇部を面取りする。外面はハケ調整であり、内面はナデ調整である。94は鉢である。口縁部は短く外反し、粘土帯を貼付する。粘土帯外面には指頭圧痕がみられる。口唇部には面取りを施す。外面は粗いタテハケ調整、内面はナデ調整である。被熱により変色する。95は棒状の自然石であり、特に加工の痕跡は認められない。緑色岩であり、形状・大きさから太型蛤刃石斧の未成品と考えられる。

SK30 (図IV-17)

調査区の北西部に位置する楕円形の土坑である。長軸約0.8m、短軸約0.5m、検出面からの深さは29cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。

SK31 (図IV-17)

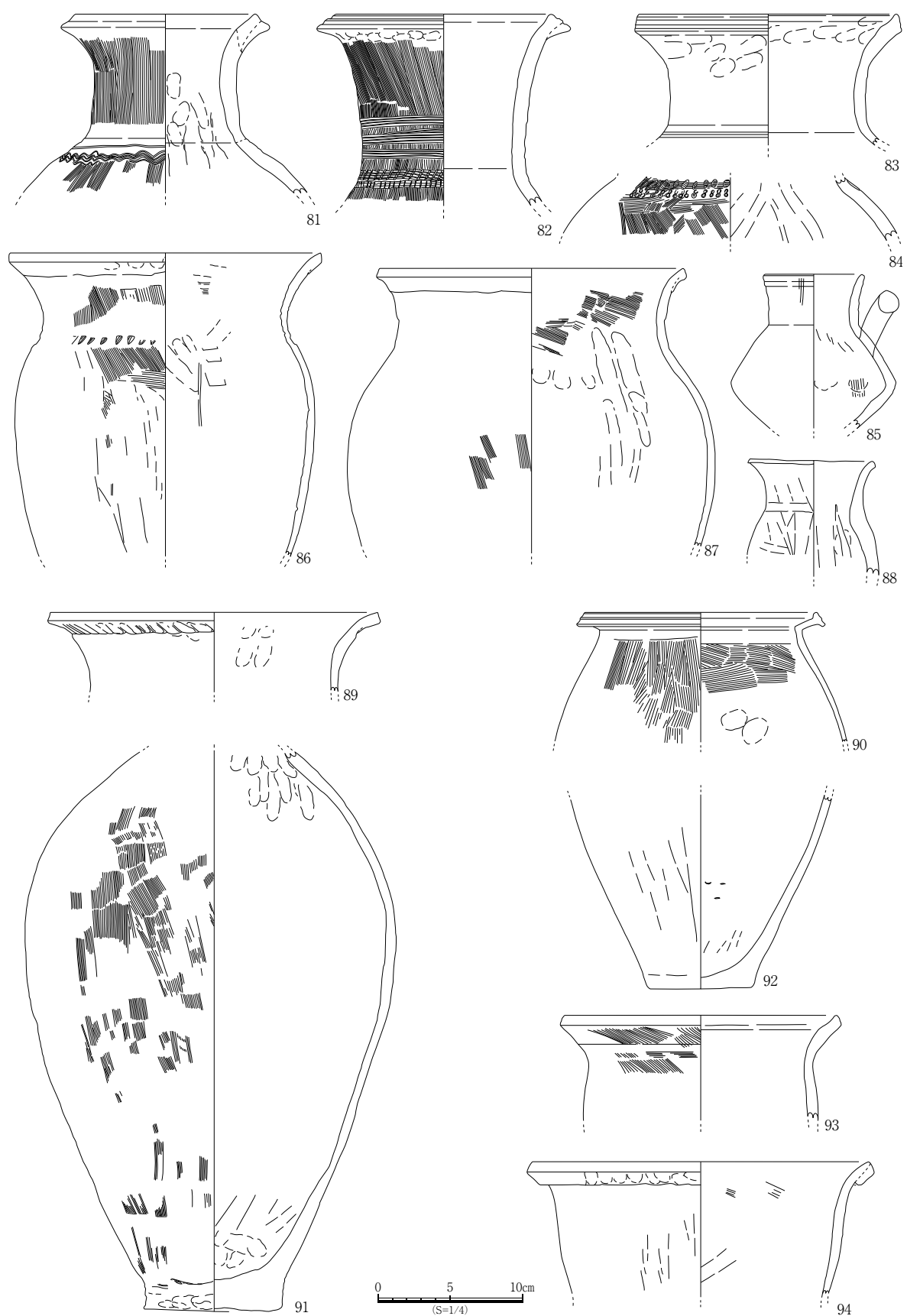
調査区の西部に位置する隅丸長方形の土坑である。長軸約0.8m、短軸約0.7m、検出面からの深さは19cmである。埋土は褐色細粒砂混じりシルトである。

SK32 (図IV-32)

調査区の西部に位置する不整形の土坑である。長軸約2.3m、短軸約1.6m、検出面からの深さは12cmである。底面は凹凸がある。埋土は、にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトである。

SK33 (図IV-32)

調査区の西部に位置する不整形の土坑である。東半部は調査区外である。長軸約1.2m、短軸0.6m以上、検出面からの深さは39cmである。埋土は褐色細粒砂混じりシルトである。



图IV-30 SK29遺物実測図1

SK34 (図IV - 32)

調査区の中央部に位置する楕円形の土坑である。長軸約0.9m, 短軸約0.8m, 検出面からの深さは17cmである。

SK35 (図IV - 33)

調査区の北西部に位置する竪穴建物跡である。一部は調査区外である。一辺約4mの隅丸方形を呈すると推測される。検出面からの深さは26cmである。埋土は直径15cm大以下の川原石を多く含む黒褐色細粒砂混じりシルトであり、一部に炭化物層が認められる。床面で中央ピット, ピットを検出した。中央ピットは床面の中央に位置すると推測される。平面形は長軸約0.6m, 短軸0.5mの楕円形を呈し, 床面からの深さは6cmである。埋土は炭化物を含む黒褐色細粒砂混じりシルトである。SK35_P2, SK35_P3, SK35_P4は主柱穴と考えられ, 四隅に配置された4本柱の建物跡と考えられる。

図示した出土遺物は弥生土器の壺・甕である。96は壺である。口縁部下端をわずかにつまみ出し, 上方へ拡張させていたと推測されるが欠損している。2条の凹線文を施す。97は壺である。粘土帯を貼付し, 外面には刻目を2段に施す。また, 粘土帯下端には楕円形浮文を貼付ける。口唇部は面取りし, 刻目を施す。98は甕である。口縁部上方へ拡張し, 2条の凹線文を施す。

SK36 (図IV - 32)

調査区の北部に位置する隅丸方形と推測される土坑である。長軸約0.8m, 短軸0.7m以上, 検出面からの深さは34cmである。底面は平坦であり, 壁は垂直である。埋土は, にぶい黄褐色細粒砂混じりシルト, 暗褐色細粒砂混じりシルトである。

SK37 (図IV - 32)

調査区の北部に位置する隅丸方形の土坑である。長軸約2.0m, 短軸約1.6m, 検出面からの深さは58cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。

SK38

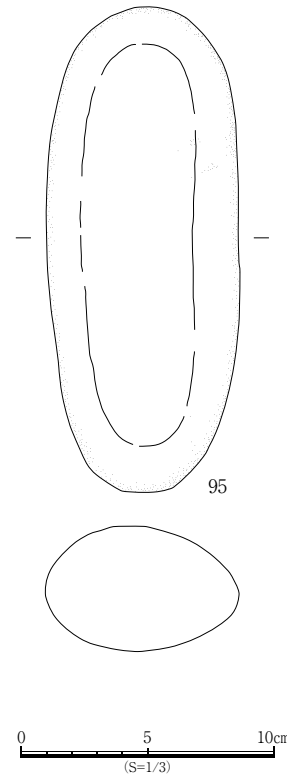
調査区の中央部に位置する楕円形の土坑である。長軸約1.1m, 短軸約0.5m, 検出面からの深さは10cmである。

SK40 (図IV - 32)

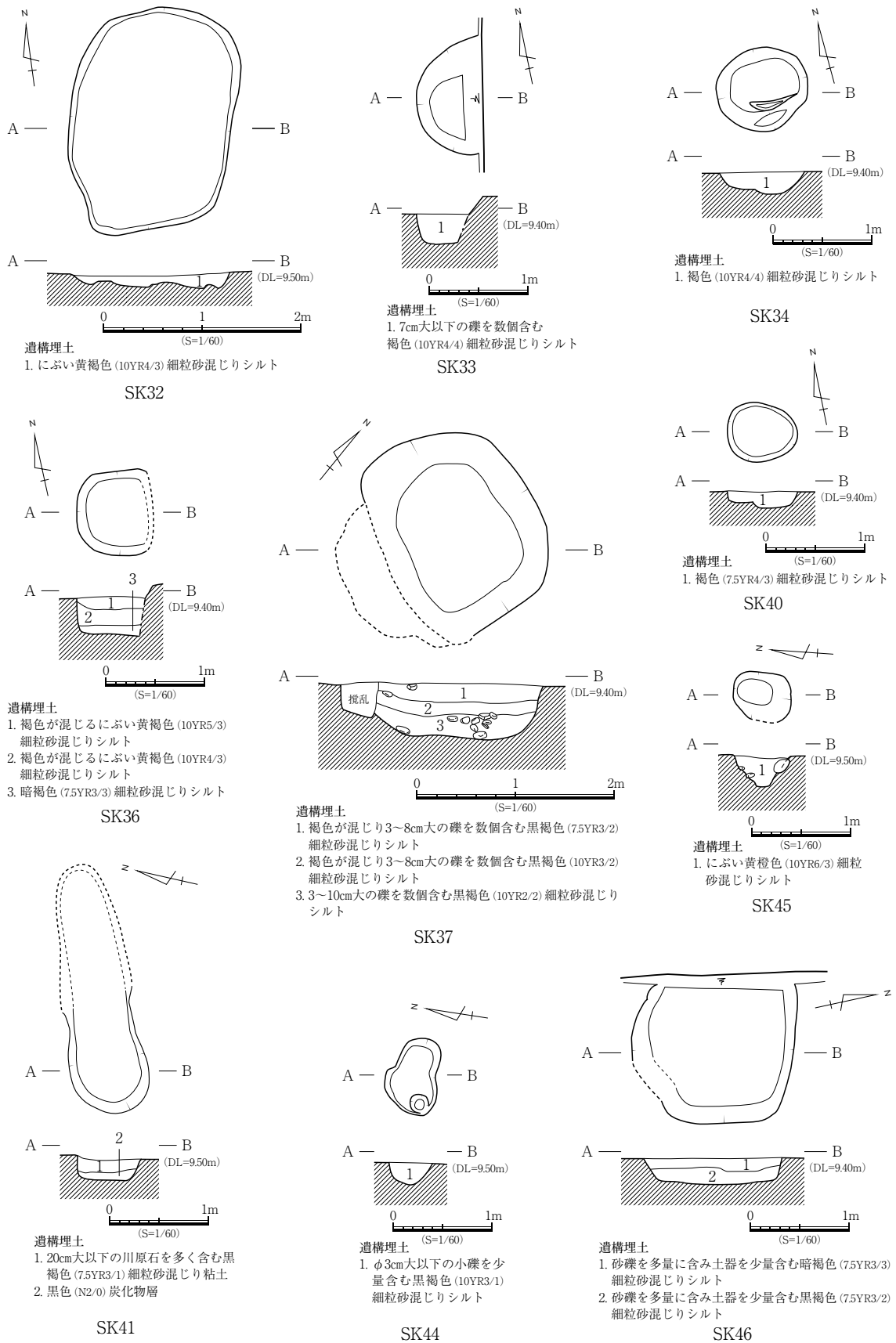
調査区の北部中央に位置する楕円形の土坑である。長軸約0.7m, 短軸約0.6m, 検出面からの深さは13cmである。

SK41 (図IV - 32)

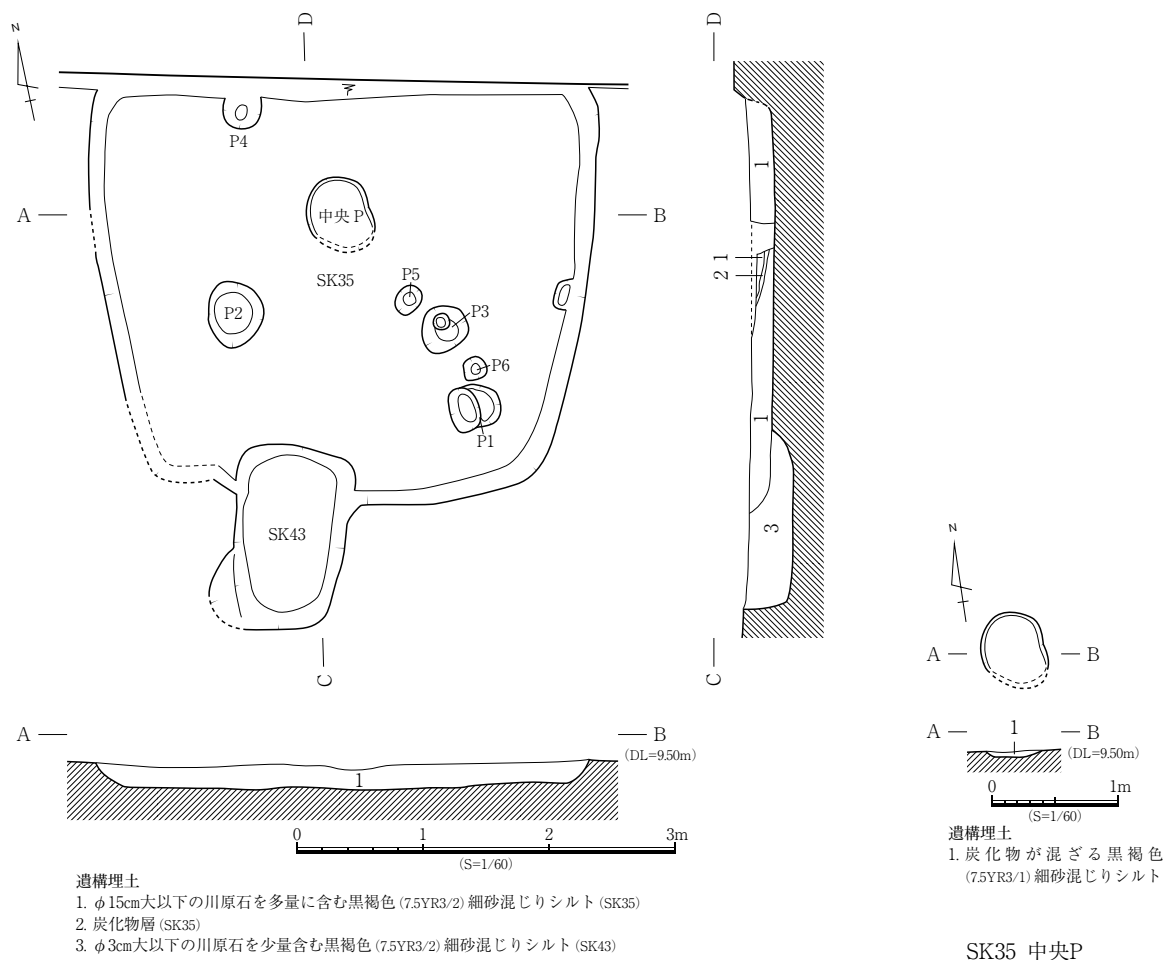
調査区の南西部に位置する楕円形の土坑である。ST3を切る。長軸1.3m以上, 短軸約0.7m, 検出面からの深さは22cmである。断面形は逆台形を呈する。埋土は2層に分層できる。上層は黒褐色細粒



図IV - 31 SK29遺物実測図2



図IV-32 SK32~34・36・37・40・41・44~46平面図・断面図



図IV-33 SK35平面図・断面図・遺物実測図

砂混じり粘土であり、下層は炭化物層である。

SK42

調査区の中央部に位置する方形の土坑である。一辺約0.8m、検出面からの深さは29cmである。西壁は垂直であるが東壁は外側へひろがる。床面の中央はピット状に凹み、断面観察では柱を抜き取ったような痕跡である。

SK43

調査区の北西部に位置する隅丸長方形の土坑である。SK35に切られる。長軸約1.5m, 短軸約0.9m, 検出面からの深さは40cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。

SK44 (図IV-32)

調査区の南西部に位置する不整形の土坑である。長軸約0.7m, 短軸約0.5m, 検出面からの深さは24cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。

SK45 (図IV-32)

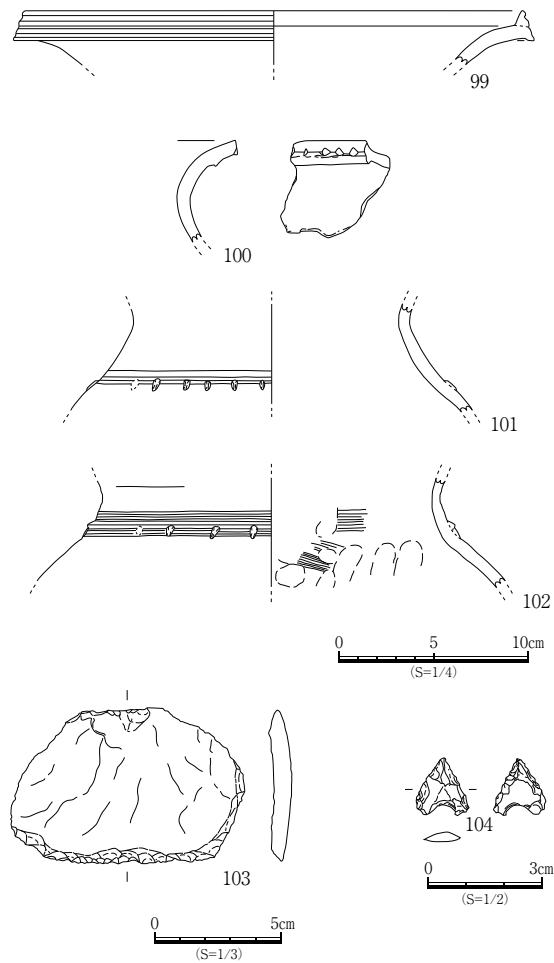
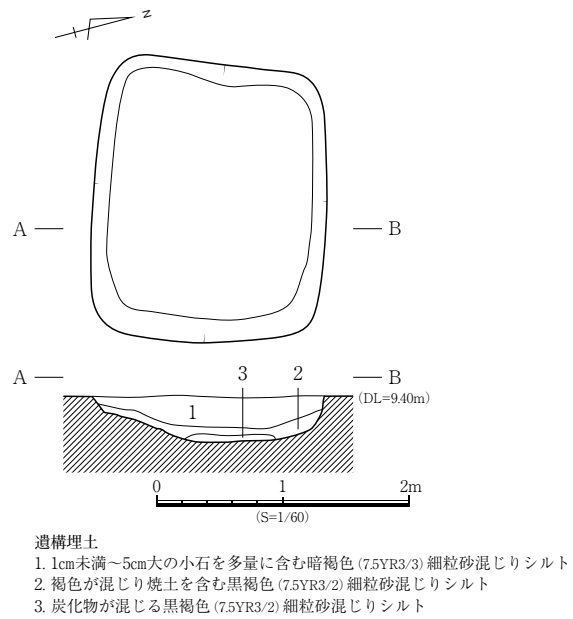
調査区の南西部に位置する楕円形の土坑である。長軸約0.6m, 短軸約0.5m, 検出面からの深さは42cmである。埋土は、にぶい黄橙色細粒砂混じりシルトである。

SK46 (図IV-32)

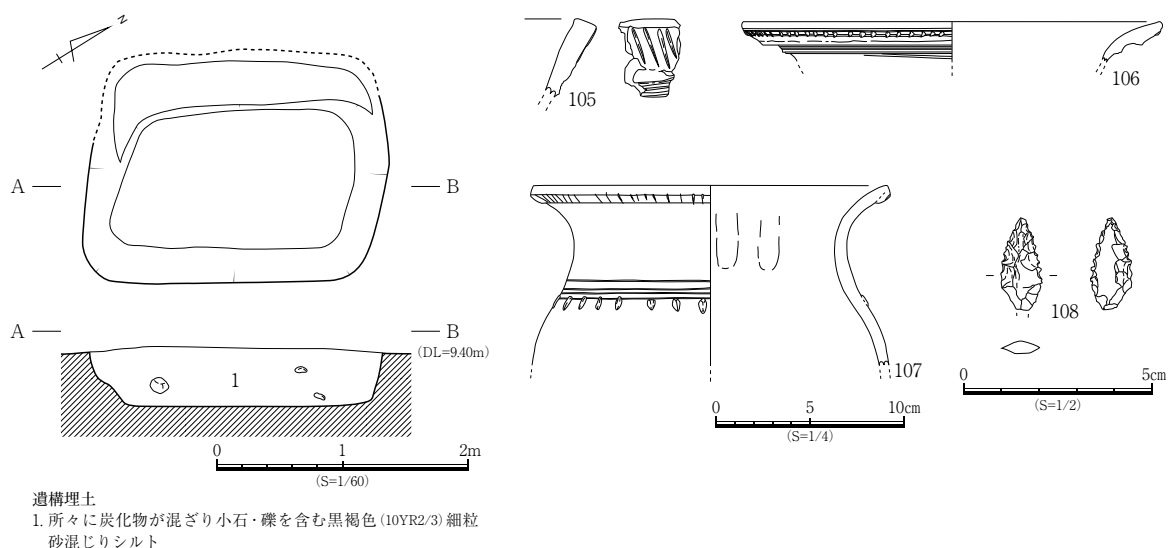
調査区の中央部に位置する土坑である。長軸約1.6m, 短軸1.3m以上の隅丸長方形と考えられる。検出面からの深さは20cmである。北肩は垂直に立ち上がり, 南方は外上方にのびる。埋土は暗褐色細粒砂混じりシルト, 黒褐色細粒砂混じりシルトである。

SK47 (図IV-34)

調査区の南西部に位置する土坑である。長軸約2.2m, 短軸約1.8mの隅丸長方形と考えられる。検出面からの深さは49cmである。南肩は緩やかにひろがるが, 北肩は垂直に立ち上がる。埋土は暗褐色細粒砂混じりシルト, 黒褐色細粒砂混じりシルトであり, 焼土・炭化物を含む。炭化物は中央部分に多



図IV-34 SK47平面図・断面図・遺物実測図



図IV-35 SK48平面図・断面図・遺物実測図

く分布する。

図示した出土遺物は弥生土器の壺・甕, 石包丁, 石鏃である。99は壺である。口縁部の下端を引っぱり出し, 上端に粘土紐を貼付けて拡張する。3条の凹線文を施す。100は甕である。ヨコナデ調整により口縁端部をつまみ上げ, 口唇部を面取りする。下端に刻目を施す。口縁部には微隆起突帯がみられる。内外面ともナデ調整である。仁淀川流域からの搬入品である。101は甕である。頸部と体部の境には櫛描直線文, 楕円形浮文を施す。内外面ともナデ調整である。102は甕である。頸部と体部の境には櫛描直線文, 突帯, 楕円形浮文を施す。内外面ともナデ調整であり, 内面にはハケメ, 指頭圧痕が認められる。103は打製石包丁である。砂岩の自然石を割り, 刃部に調整剥離を施す。紐掛け状の部位はみられるが, 明瞭な挟り等は認められない。完存である。104は凹基式の打製石鏃である。両面とも主要剥離面を大きく残し, 縁辺部に調整剥離を施すのみである。サヌカイト製であり完存である。

SK48 (図IV-35)

調査区の南西部に位置する土坑である。長軸約2.4m, 短軸約1.8mの隅丸長方形と考えられる。検出面からの深さは46cmであり, 断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は弥生土器の壺・甕, 石鏃である。105は壺である。貼付口縁であり, 口唇部は面取りし粘土帯外面には刻目を施す。粘土帯直下には櫛描直線文を施し, 単位間は微隆起突帯状となる。仁淀川流域からの搬入品である。106は甕である。口唇部を面取りし, 下端に刻目を施す。櫛描直線文と2条の微隆起突帯を施す。上の微隆起突帯は粘土紐の貼付けによるが, 下のものは櫛描直線文を強く施すことで突帯状にしたものと推測される。内面はナデ調整である。煤が付着する。107は甕である。貼付口縁である。口唇部は面取りし, 下端面には不揃いの刻目を施す。また, 口縁部直下には粘土帯の接合痕跡が残存しているが, 器壁の肥厚はほとんどみられない。内外面ともナデ調整である。頸胴部境には櫛描直線文, 楕円形浮文を施す。櫛描直線文は6条1単位とし, 1条1条の間隔はややひろい。煤が付着する。108は有茎式の打製石鏃である。サヌカイト製である。基部は欠損する。

縁辺部には調整剥離を施し、横断面形は扁平な菱形を呈する。

SK49 (図IV-36)

調査区の南西部に位置する不整形の土坑である。検出時に明確にプランを検出できなかった。長軸約1.7m、短軸1.3m以上の隅丸長方形と考えられる。検出面からの深さは25cmである。埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトであり、人頭大～拳大の川原石が集中している箇所がある。

図示した出土遺物は弥生土器の壺・甕・蓋、叩石である。109は壺である。口縁部は上下に拡張し、3～4条の凹線文を施す。110は甕である。口唇部は面取りし、下端に刻目を施す。口縁直下には櫛描直線文、微隆起突帯、頸部には櫛描直線文を施す。内外面とも、ナデ調整である。111は壺の体部である。外面上半部は粗いハケ調整、下半部はミガキ調整である。内面上半部はナデ調整であり、下半部はケズリ調整である。ベンガラを塗布か。112は蓋である。天井部の周縁部は凹み、端部を突出させる。被熱変色する。113は砂岩製の叩石である。全長約15cm、全幅約12cmのやや大きいサイズである。側面は全周にわたり磨石として使用し、側面は敲打することで表面が剥離している。

(4)SD

SD1 (図IV-37)

調査区の東部で検出した溝跡である。幅約0.9m、検出面からの深さは40cmである。底面は比較的平坦であり断面形は逆台形に近い。埋土は2層に分層できる。上層は浅黄色細粒砂混じりシルト、下層は浅黄色細粒砂混じりシルトと黄灰色細粒砂の互層である。検出長は約22mである。南は調査区外へのび、北はIV-4区でも検出されている。

図示した出土遺物は弥生土器の壺・底部、石鏃であるが、埋土等からSD1は古代と推測される。114は壺である。口唇部は面取りし、刻目を施す。磨耗のため調整等は不明瞭である。116は平基式の打製石鏃である。サヌカイト製である。全長約3cm、全幅2.4cm、重量1.9gを計る。両面とも主要剥離面を残し、縁辺部に調整剥離を施す。117は凹基式の打製石鏃である。両面とも主要剥離面を残し、縁辺部に調整剥離を施す。

SD2 (図IV-38)

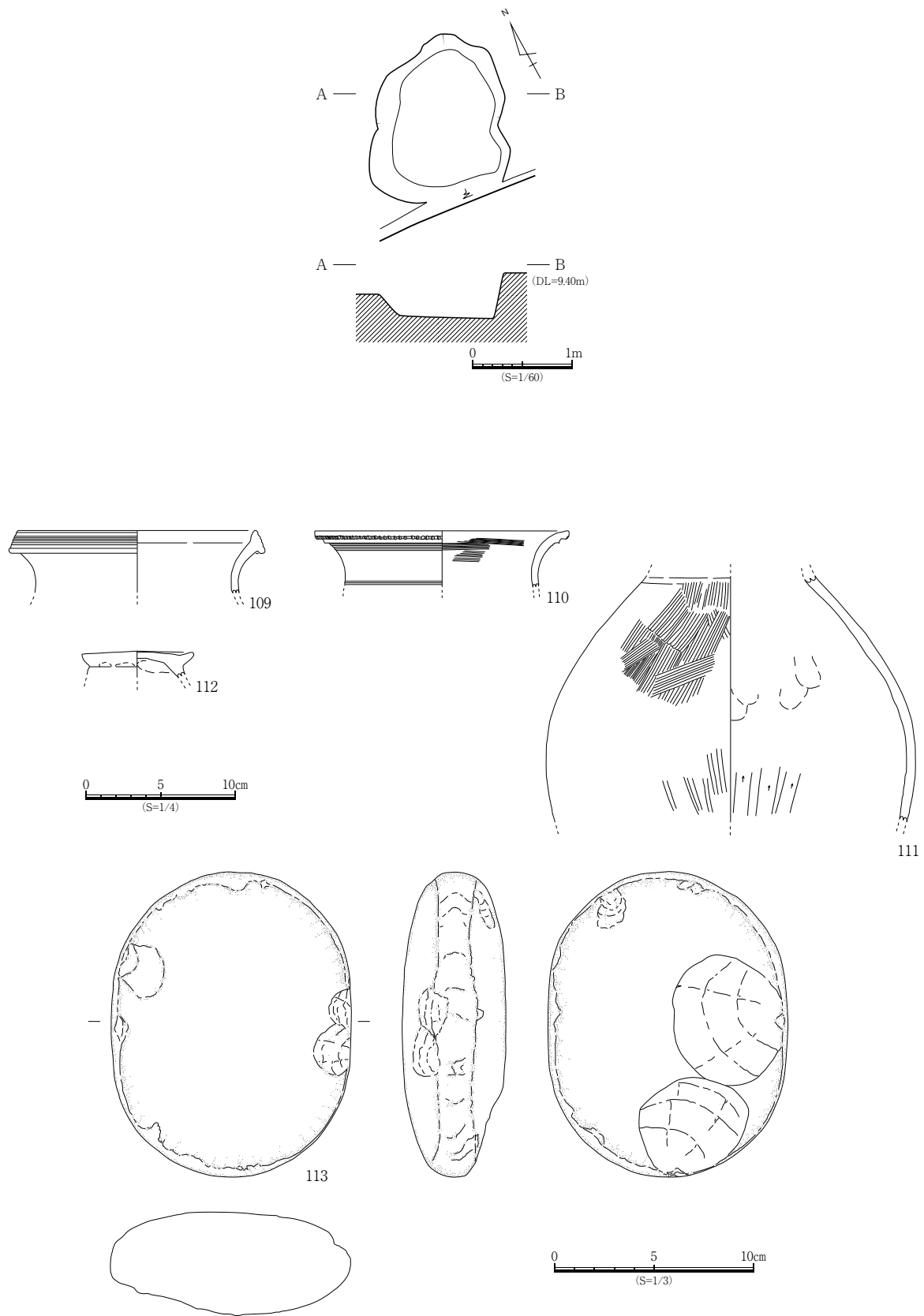
調査区の南東部で検出した東西方向の溝跡である。幅約0.5m、検出面からの深さは6cmである。検出長は約6.7mである。埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトと灰黄色細粒砂混じりシルトが混ざる。

図示した出土遺物は須恵器の杯と土師器の甕である。118は須恵器の杯である。底面に断面長方形の高台を貼付ける。磨耗のため調整等は不明である。119は土師器の甕である。口縁部上面は平坦面を成し、端部は丸くおさめる。外面は叩き(ハケ)調整である。搬入品である。

SD2は古代に属する。

SD3

調査区東部で検出した南北方向の溝跡である。幅約0.5m、検出面からの深さは30cmである。北側は調査区外へのび、検出長は約21mである。基本的にはSD1と並走する。断面形は逆台形を呈し、埋土は3層に分層できる。1層は黒褐色細粒砂混じり粘土、黒色細粒砂～シルト、明黄褐色細粒砂混じりシルト～粘土が混じった土層、2層は黒色細粒砂～シルト、明黄褐色細粒砂混じりシルト～粘土、灰色細粒砂が混じった土層、3層は灰色細粒砂である。SD3は古代に属する。



図IV-36 SK49平面図・エレベーション図・遺物実測図

SD4

調査区南部で検出した東西方向の溝跡である。幅約 0.3m, 検出面からの深さは 5 cm である。検出長は約 5.6m である。SD4は古代に属する。

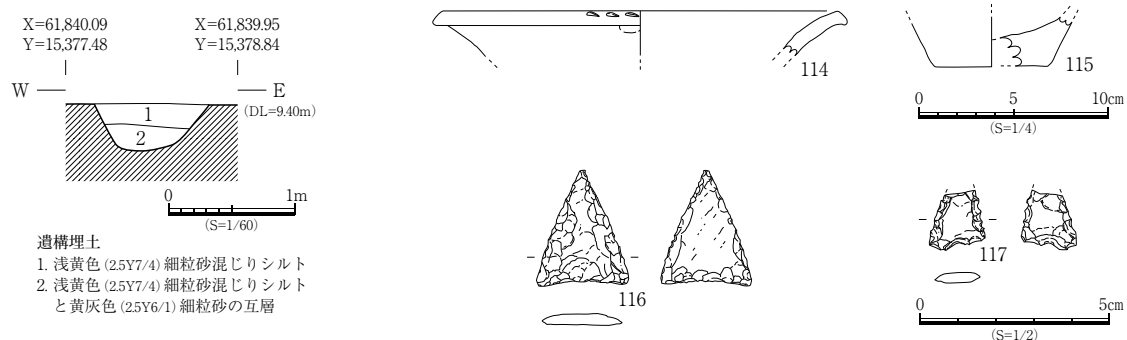
SD5

調査区東部で検出した東西方向の溝跡である。SD3 に切られる。幅約 0.8m, 検出面からの深さは 17cm である。検出長は約 3m である。SD5は古代か。

SD6 (図IV-39・40)

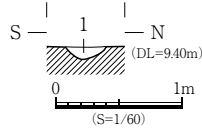
調査区東部で検出した溝状土坑である。ST1に切られる。幅約 1m, 長さ約 5.9m 検出した。検出面からの深さは 45cm であり, 断面形は漏斗状を呈する。埋土は 2層に分層できる。上層は褐灰色細粒砂混じりシルト, 下層は黒褐色細粒砂混じりシルトであり, 遺物は上層から多く出土した。SD6の東側にピット (P27・33) が分布しており, 本来は掘立柱建物跡に伴うと推測される。

図示した出土遺物は弥生土器の壺・甕・高杯, 叩石, 投弾, 鉢である。120は細頸長頸壺である。体部は最大径が上胴部に有る扁球形を呈する。内面は最大径部以下には粗いタテハケ調整, 上半部にはナデ調整を施す。搬入品である。121は壺である。口縁部はあまりひらかず, 口唇部は丸くおさめる。磨耗のため調整は不明瞭である。内外面ともナデ調整と推測される。122は壺の上胴部の破片である。竹管文, 2条の櫛描直線文, 櫛描波状文を配置する。内面はナデ調整であり, しぼり目がみられる。123は壺である。体部中位に最大径を持ち, あまり張らない長胴である。貼付口縁であり, 粘土接合痕跡は不明瞭である。口唇部は面取りする。煤が付着する。内外面ともナデ調整である。外面はミガキ状となる部分がある。胎土に砂粒を非常に多く含む。124は甕である。口縁直下に 1条のヨコナデ調整を施す。口縁部は上方に拡張し, 2条の凹線文を施す。凹線は沈線化している。体部外面はタテハケ調整, 内面はナデ調整である。煤が付着する。歪む。125は甕である。口縁部を上方へ拡張し, 2条の凹線文を施す。126は甕である。貼付口縁である。粘土帯を指押え後ヨコナデ調整を施すが, 均一さに欠ける。口唇部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整であり, 凹凸が認められる。雑な作りである。煤が付着する。127は高杯である。口縁部は直立し, 口唇部は尖らせる。外面には 2条の凹線文を施す。脚端部は強いヨコナデ調整により凹面状となる。内面はケズリ調整である。円盤充填である。128は高杯である。口縁部は内傾し口唇部を拡張する。口縁部外面には 3条の凹凸の明瞭な凹線文を施す。磨耗のため調整は不明瞭である。129は高杯の脚である。端部に強いヨコナデ調整を施す。磨



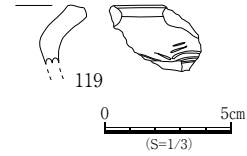
図IV-37 SD1断面図・遺物実測図

X=61,831.05 X=61,831.67
Y=15,368.67 Y=15,368.70



遺構埋土

1. 褐灰色 (10YR6/1) 細粒砂混じりシルトと
灰黄色 (2.5Y7/2) 細粒砂混じりシルトが
混じる



図IV-38 SD2断面図・遺物実測図

耗のため調整は不明瞭であるが、内面はナデ調整か。130はミニチュア土器である。平底から直立し、ややふくらみながら上方にのびる。内外面ともナデ調整である。煤が付着する。131は叩石である。棒状の砂岩を利用する。両先端部は敲打により激しく欠損する。また、側面、両面にも敲打痕跡が認められる。132は扁平な板状の川原石を利用する。側面、両面とも敲打痕跡が認められる。側面のほうが強い敲打である。側面には線状の敲打痕跡がみられる。133・134は投弾である。135は鉈である。断面形は長方形である。SD6は弥生時代中期末である。

SD7 (図IV-41)

調査区東部で検出した南北方向の溝跡である。SK6・16、ピットと重複する。幅約0.4m、検出面からの深さは16cmである。検出長は2.1mである。

図示した出土遺物は弥生土器の壺・甕である。136は壺である。貼付口縁である。粘土帯貼付後、ヨコナデ調整しており、接合痕跡が残る程度である。なで肩の体部から口縁部は直線的にのびるがあまりひらかない。口唇部は強いヨコナデ調整により下端部を横方向に引っ張り出すとともに上端部は上方へつまみ上げる。磨耗のため調整等の観察は困難であるが、外面はミガキ調整であり、内面はナデ調整である。頸胴部境には凹線文状に1条施す。137は甕である。口縁部は緩やかに外反し、口唇部には面取りを施す。内外面ともナデ調整であり、外面には擦痕が認められる。煤が付着する。138の口縁部は大きくひらき、口唇部は強いヨコナデ調整により、凹面状を呈し、上端をつまみ上げる。下端には刻目を施す。また、微隆起突帯を貼付ける。仁淀川流域からの搬入土器である。139は底部である。底面はほぼ正円である。内外面ともナデ調整である。

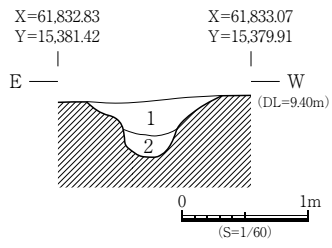
SD7は弥生時代中期末に属する。

SD8

調査区北東部で検出した南北方向の溝跡である。幅約0.5m、検出面からの深さは22cmである。検出長は約22mであり、北側は調査区外へのびる。断面形は逆台形であり、埋土は黒褐色細粒砂混じりシルトである。SD8は古代に属する。

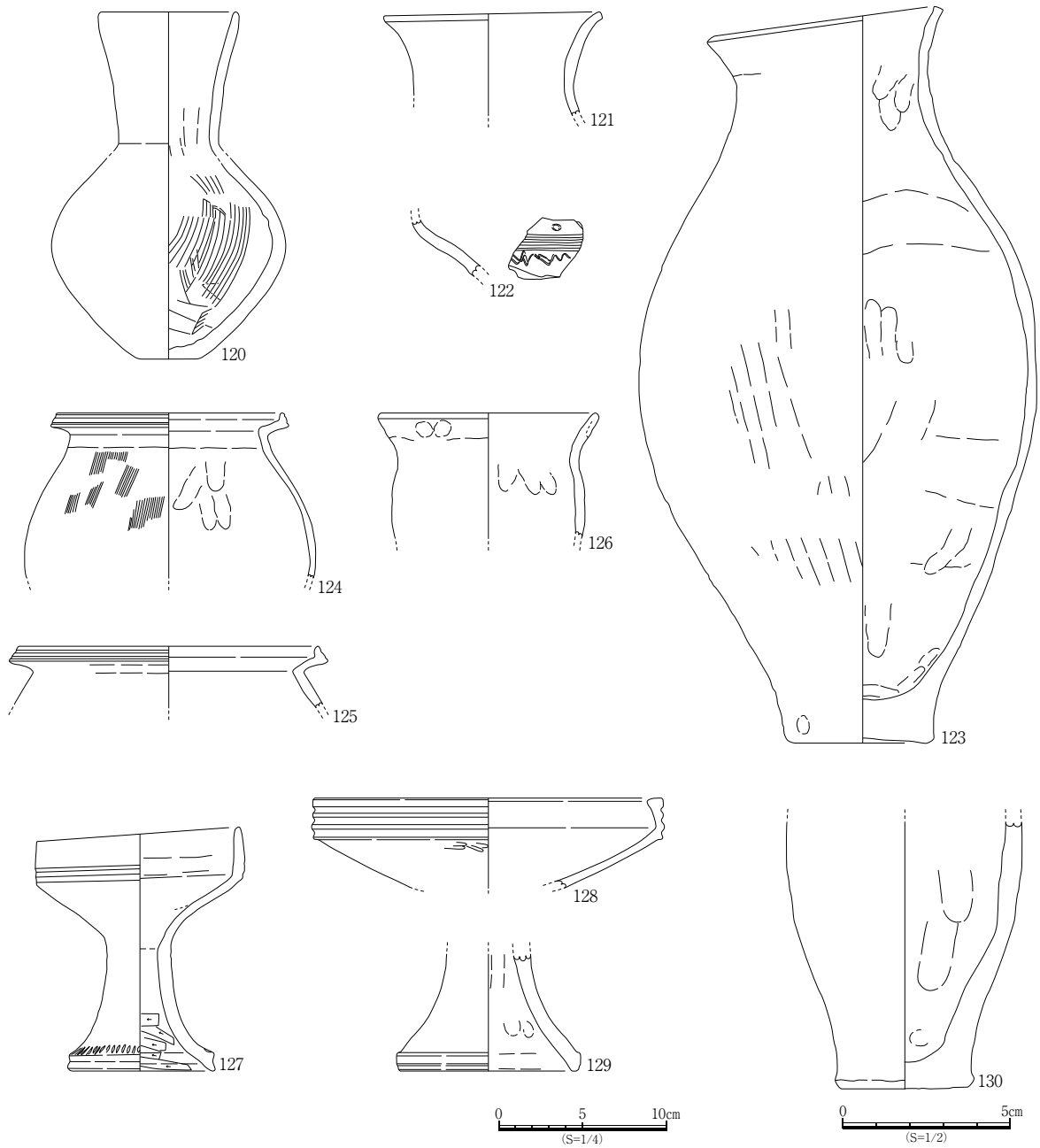
SD9

調査区北東部で検出した「L」字状の溝跡である。P59と重複する。幅約0.5m、検出面からの深さは17cmである。埋土は暗褐色細粒砂混じりシルト、黒褐色細粒砂混じりシルトである。検出長は約5.1mである。SD9は弥生時代か。



遺構埋土

1. 明黄褐色 (10YR7/6) 細粒砂混じりシルトブロックを少量含む褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂混じりシルト
2. 黒褐色 (10YR3/1) 細粒砂混じりシルト



図IV-39 SD6断面図・遺物実測図1

SD10 (図IV - 42)

調査区東部で検出した溝跡である。SK6に切られる。幅約0.5m, 検出長は約1.3mである。

図示した出土遺物は弥生土器の壺・甕である。140は貼付口縁であり, 口唇部は面取りされ凹面状を呈する。粘土帯外面には刻目, 下端に楕円形浮文を施す。櫛描直線文, 微隆起突帯がみられる。内面はナデ調整である。仁淀川流域からの搬入品である。141は甕である。口唇部は面取りする。口縁部外面に刻目を施す。内面はハケ・ナデ調整, 外面はナデ調整である。

SD10は弥生時代中期末に属する。

SD11 (図IV - 43)

調査区西部で検出した南北方向の溝跡である。SD12に切られる。北はSD13からのびる溝跡に切られ, 南は調査区外へのびる。幅約0.6m, 検出面からの深さは19cmである。埋土は黄褐色細粒砂混じりシルトである。SD13からのびる溝跡と重複するが, 新旧は不明である。

図示した出土遺物は弥生土器の甕・高杯である。142は甕である。口唇部には面取りを施し, やや丸みを帯びる。下端には刻目を施す。上から順に微隆起突帯, 櫛描直線文, 微隆起突帯, 櫛描直線文を配置する。内面, ナデ調整である。仁淀川流域からの搬入品である。143は高杯である。脚端部に強いヨコナデ調整を施し凹面状を呈する。2条の凹線文を施す。

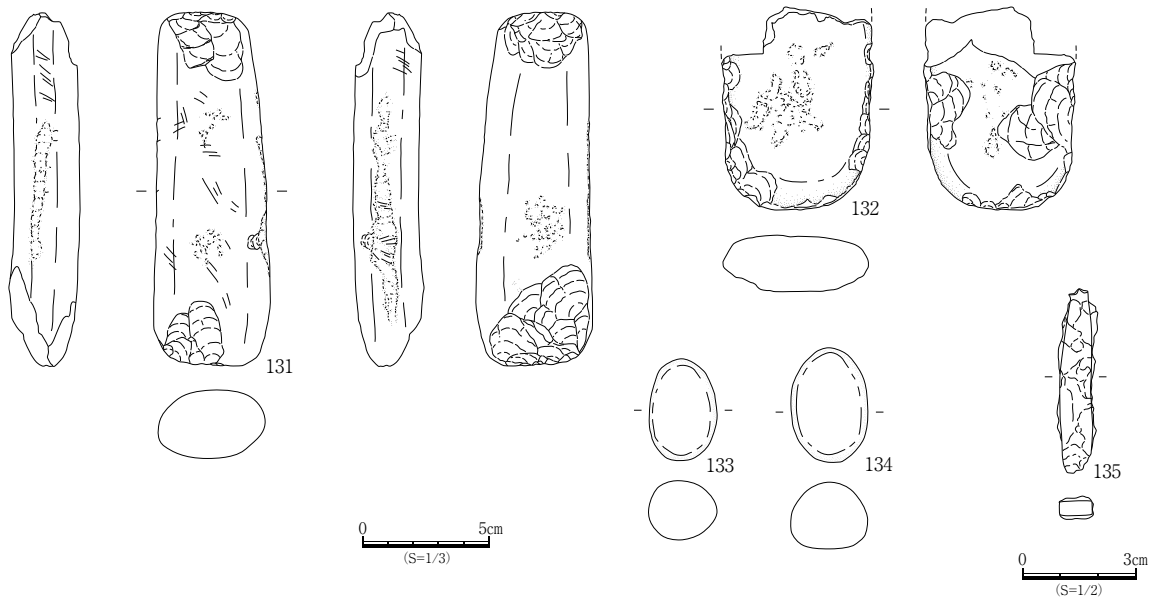
SD10は弥生時代中期末に属する。

SD12 (図IV - 43)

調査区西部で検出した南北方向の溝跡である。SD11を切る。北はSD13に接続する。微地形, 流水方向を考慮すると分岐するといったほうがよい。南は調査区外へのびる。

SD13 (図IV - 44)

調査区西部で検出した南北方向に直前的にのびる溝跡である。検出長は約16mである。北はIV - 5・8区でも検出されている。南は調査区外へのびる。最大幅約5mであるが, 弥生時代中期末の溝跡



図IV - 40 SD6遺物実測図2

と後期末の溝跡が重複した結果である。後期末の溝跡は東寄りのもので、幅約2.5m、検出面からの深さは45cmである。埋土は明黄褐色砂、褐色砂、黄褐色細粒砂混じりシルト、にぶい黄褐色細粒砂混じりシルト、小礫を多く含む明褐色細粒砂混じりシルトである。切られている溝は幅2.5m以上、検出面からの深さは27cmである。埋土は、にぶい黄褐色細粒砂混じりシルト、砂を多く含む細粒砂混じりシルトである。

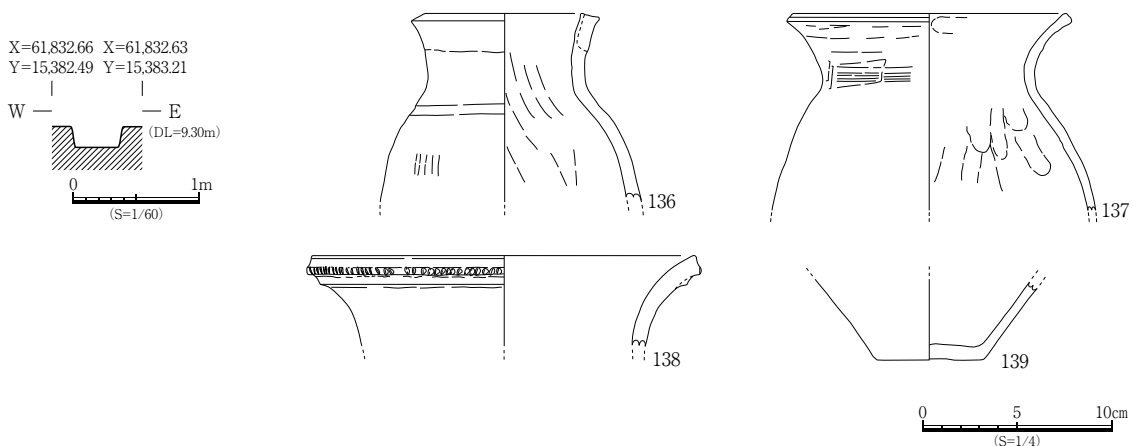
図示した出土遺物は弥生土器の壺・甕、石包丁である。144は壺である。口縁部は上方へ拡張し、3条の凹線文を施す。磨耗する。145は壺である。貼付口縁であり、接合痕跡を残す。口縁部を上方へ拡張し、下端は横方向へ引っ張り出し拡張する。4条の凹線文を施す。146は甕である。口唇部は面取りし、端部をつまみ上げる。下端には刻目、微隆起突帯を施す。微隆起突帯は粘土紐の貼付けによる。仁淀川流域からの搬入品である。147は甕である。口縁部は短く強く外反させ、上方へ拡張し2条の凹線文を施す。内外面ともナデ調整である。148は体部片である。竹管文、2単位の櫛描直線文、櫛描波状文を配置する。内面には指頭圧痕が認められる。149は丸底の底部である。外面は叩き調整であり、底部付近は丁寧にナデ消されている。内面はハケ調整である。150は磨製石包丁の未成品である。粘板岩である。表面は自然面であり、裏面は打割後磨く。

(5)SR

SR1 (図IV-45)

調査区中央部に設定したトレンチで確認した自然流路跡である。北の調査区(IV-4区)でも確認しており、南北方向に流れていたと推測される。

図示した出土遺物は弥生土器の壺・高杯、鉢である。151は壺である。頸部外面は櫛描直線文を充填し、扁平な刻目突帯を3条貼付ける。内外面ともナデ調整である。152は壺である。貼付口縁である。粘土帯は指押さえ後ナデ調整を加える。口唇部は面取りし下端に刻目を施す。頸部外面はタテハケ調整、口縁部内面はヨコハケ調整である。153は壺である。貼付口縁であり、粘土帯を指押さえ後ヨコナデ調整を施す。口唇部は面取りし、下端に刻目を施す。内外面ともナデ調整である。仁淀川流域からの搬入品である。154は高杯である。脚端部を上方へ拡張し2条の凹線文を施す。脚部外面に2段



図IV-41 SD7エレベーション図・遺物実測図

の刺突文を施す。内外面ともナデ調整である。155は高杯である。脚端部を上方へ拡張し、3条の凹線文を施す。櫛描直線文、三角形の透孔、凹線文を配置する。内面はケズリ調整を施す。156は鉢である。先端部は丸みを帯びる。断面形は長方形を呈する。

SR1は弥生時代中期末に属する。

(6)SX

SX1 (図IV-46)

SK4・23, P87が重複しそれぞれの平面プラン、新旧等が不明確であったためSXとした。このSXを掘削してSK4・23, P87を検出した。

図示した出土遺物は弥生土器の甕・高杯である。157は甕である。口縁部を上下に拡張し、3条の凹線文を施す。内外面ともナデ調整である。158は高杯である。脚端部を上方へ拡張し2条の凹線文を施す。磨耗のため調整は不明である。

(7)P (ピット)

P9 (図IV-48)

調査区東部で検出したピットである。平面形は楕円形を呈し、直径約0.8m, 検出面からの深さは57cmである。主な埋土は灰黄褐色細粒砂混じりシルト, 灰黄褐色シルト粘土, 黒褐色シルト粘土である。

図示した出土遺物は須恵器の皿(160)である。折り曲げ口縁である。磨耗のため調整等は不明瞭である。

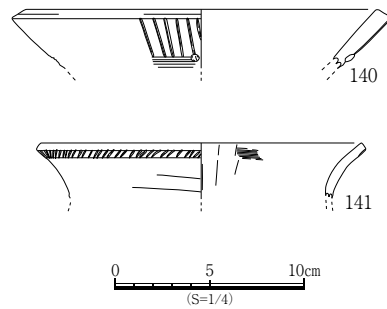
P16 (図IV-48)

調査区東部で検出したピットである。平面形は楕円形を呈し、直径約0.4m, 検出面からの深さは17cmである。主な埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトである。

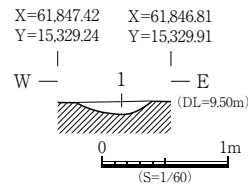
図示した出土遺物は須恵器の杯(161)である。断面逆台形の高台が付く。内外面とも回転ナデ調整である。

P19 (図IV-48)

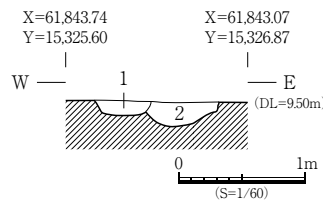
調査区東部で検出したピットである。平面形は



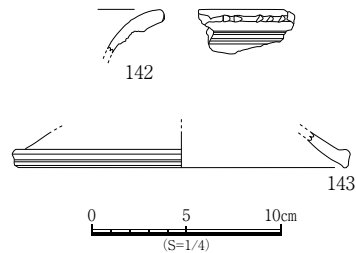
図IV-42 SD10遺物実測図



遺構埋土
1. 灰色(N6/0)細粒砂層がある褐灰色(10YR6/1)細粒砂混じりシルト(SD11)



遺構埋土
1. 砂状の褐灰色が混じる黄褐色(10YR5/6)細粒砂混じりシルト(SD12)
2. 砂状の褐灰色が混じる黄褐色(10YR5/6)細粒砂混じりシルト(SD11)



図IV-43 SD11・12断面図・遺物実測図

楕円形を呈し、直径約0.3m、検出面からの深さは22cmである。主な埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は須恵器の甕(162)である。内外面とも回転ナデ調整であり、口唇部は凹面状を呈する。自然釉が付着する。

P20(図IV-48)

調査区東部で検出したピットである。平面形は楕円形を呈し、直径約0.4m、検出面からの深さは17cmである。主な埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は須恵器の杯(163)である。断面方形の高台を付す。内外面とも回転ナデ調整である。

P21(図IV-48)

調査区東部で検出したピットである。平面形は楕円形を呈し、直径約0.3m、検出面からの深さは24cmである。主な埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は須恵器の杯(164)である。内外面とも回転ナデ調整であり、口縁部のナデ調整が強く口縁端部がわずかに外反する。

P27(図IV-48)

調査区南東部で検出したピットである。平面形は楕円形を呈し、直径約0.4m、検出面からの深さは42cmである。主な埋土は暗褐色細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は弥生土器の壺(165)である。口縁部を上下に拡張し3条の凹線文を施す。2個1対のドーナツ状浮文を貼付する。内外面ともナデ調整である。

P34(図IV-47)

調査区東部で検出したピットである。平面形は楕円形を呈し、直径約0.5m、検出面からの深さは57cmである。

図示した出土遺物は弥生土器の壺(159)である。平底、器厚は薄い。やや器高は低い。体部は上胴部に最大径を持つ。口縁部は緩やかにひろがり、端部は上下に拡張し4条の凹線文を施す。頸部には綾杉文、「ノ」の字状の列点文を施す。外面はミガキ調整である。内面は底部付近のみケズリ調整であり、それ以外はナデ調整である。外面にベンガラを塗布する。SK9出土の破片と接合した。

P35(図IV-48)

調査区南東部で検出したピットである。平面形は不整形を呈し、長軸約0.9m、短軸約0.5m、検出面からの深さは51cmである。

図示した出土遺物は弥生土器の壺である。166は貼付口縁である。粘土帯を指押さえ後ヨコハケ調整か。口唇部はハケ状工具により面取りし、下端に刻目を施す。167は壺である。貼付口縁か、接合痕跡がわずかに認められる。口唇部はハケ状工具により面取りする。内面はハケ調整である。

P48(図IV-48)

調査区東部で検出したピットである。平面形は楕円形を呈し、直径約0.5m、検出面からの深さは54cmである。埋土は暗褐色細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は須恵器の杯(168)である。断面逆台形の高台を付す。内外面とも回転ナデ調整である。

P53 (図IV - 48)

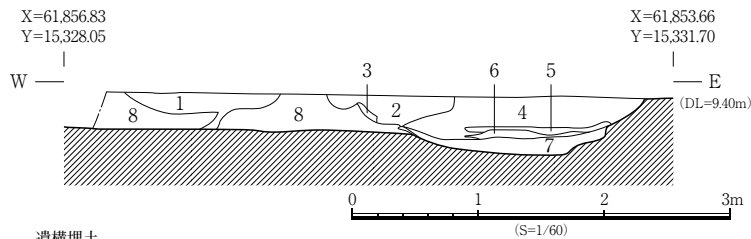
調査区北東部で検出したピットである。平面形は楕円形を呈し、直径約 0.3m、検出面からの深さは 41cm である。主な埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトと浅黄色細粒砂混じりシルトが混じる。

図示した出土遺物は弥生土器の甕(169)である。口縁端部をつまみ上げ、口唇部は凹面状を呈する。口唇部に2条の沈線か。内外面ともナデ調整である。

P55 (図IV - 48)

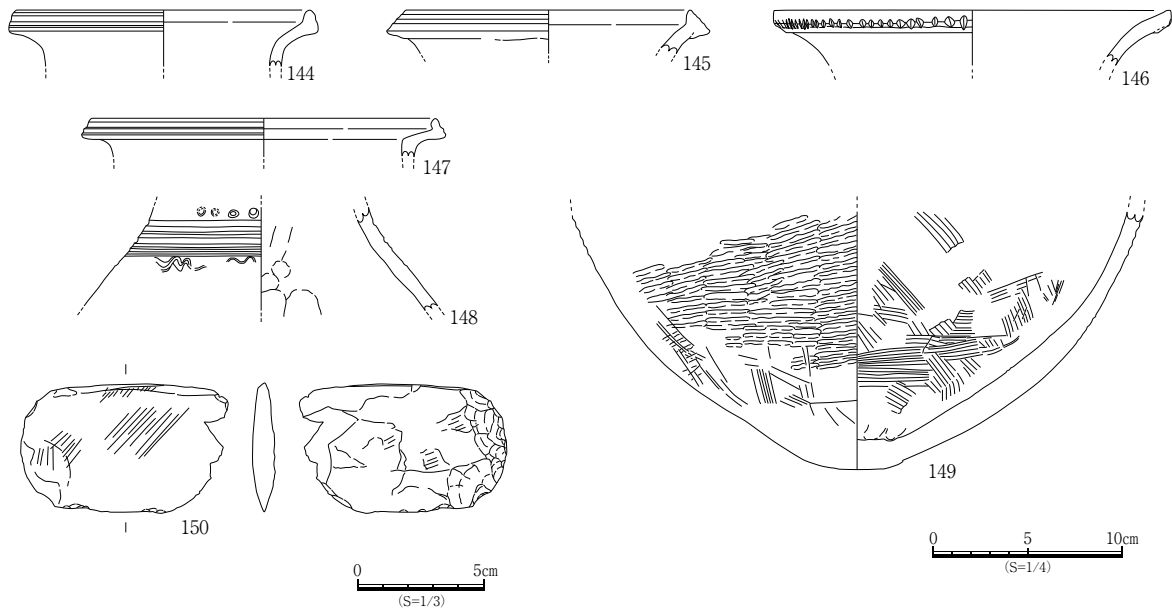
調査区北東部で検出したピットである。平面形は円形を呈し、直径約 0.6m、検出面からの深さは 24cm である。主な埋土は褐灰色細粒砂混じりシルト、黒褐色細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は土師器の杯(170)である。磨耗のため調整は不明瞭である。

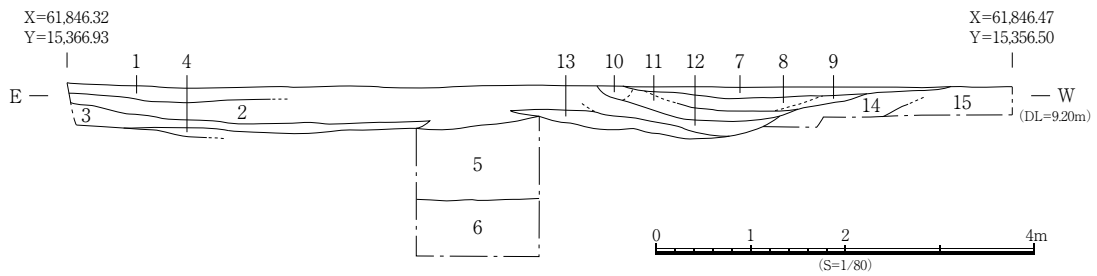


遺構埋土

1. 明褐色の砂が混ざるにぶい黄褐色(10YR5/4) 細粒砂混じりシルト
2. 砂が広範囲に混ざる明黄褐色(10YR6/6) 細粒砂混じりシルト
3. 砂が大部分を占める褐色(10YR4/4) 細粒砂混じりシルト
4. 黄褐色(10YR5/6) 細粒砂混じりシルト
5. 大半が砂と1cmまでの小石が占める褐色(10YR4/6) 細粒砂混じりシルト
6. にぶい黄褐色(10YR5/4) 細粒砂混じりシルト
7. 2cmまでの小石を多量に含む明褐色(7.5YR5/6) 細粒砂混じりシルト
8. 砂が多量に混ざるにぶい黄褐色(10YR5/4) 細粒砂混じりシルト

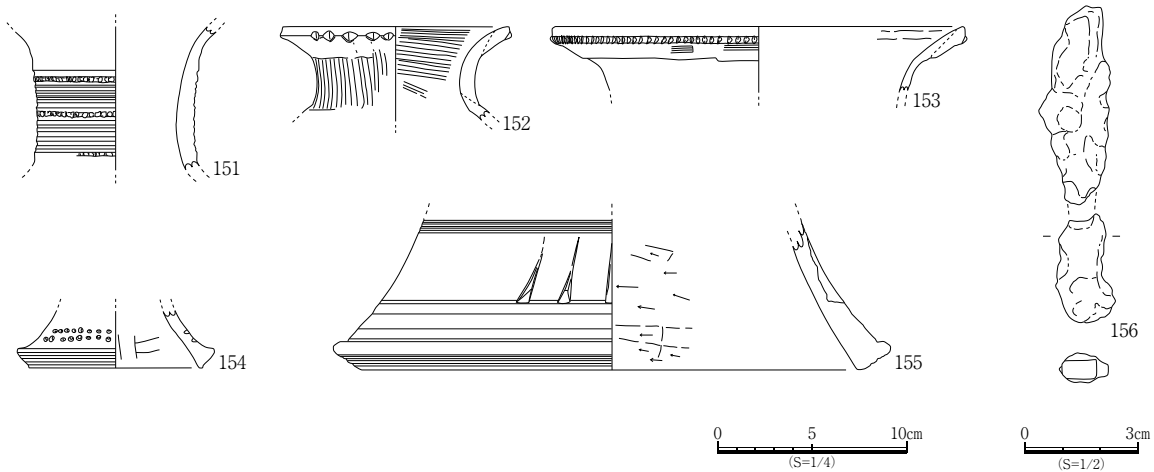


図IV - 44 SD13断面図・遺物実測図



遺構埋土

- | | |
|---|--------------------------------------|
| 1. 褐灰色 (7.5YR4/1) 細粒砂混じりシルト [古代の遺構検出面] | 9. 砂利層 |
| 2. 灰白色 (2.5Y7/1) シルト～極細粒砂 | 10. 砂利層 |
| 3. φ1cm大の小石を多量に含み拳大の丸礫を少量含む中粒砂 | 11. 砂利層 |
| 4. 黒褐色 (7.5YR3/1)～にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細粒砂混じり粘土 | 12. 黄褐色 (2.5Y5/3) 細粒砂 |
| 5. 褐灰色 (10YR5/1) 極細粒砂 (シルト～細粒砂の互層) | 13. 砂利層 |
| 6. 拳大の礫を含む砂利層 | 14. マンガン粒か鉄分粒を多量に含む灰白色 (10YR7/1) 細粒砂 |
| 7. 浅黄色 (2.5Y7/3) 極細粒砂 | 15. 人頭大～拳大の礫層 |
| 8. 黄灰色 (2.5Y6/1) 細粒砂 | |



図IV-45 SR1断面図・遺物実測図

P59 (図IV-48)

調査区東部で検出したピットである。平面形は円形を呈し、直径約0.7m、検出面からの深さは17cmである。主な埋土は黒褐色細粒砂混じりシルト、にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は弥生土器の底部(171)である。磨耗のためか、外面には凹凸がみられる。

P78 (図IV-48)

調査区東部で検出したピットである。平面形は円形を呈し、直径約0.2m、検出面からの深さは15cmである。

図示した出土遺物は管状土錘(172)である。中央部が膨らむ。中心に径約4mmの孔を穿つ。

P79 (図IV-48)

調査区東部で検出した直径約0.3mの円形のピットである。主な埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は須恵器の蓋(173)である。口縁端部を垂下させ丸くおさめる。内外面とも回転

ナデ調整である。

P82 (図IV-48)

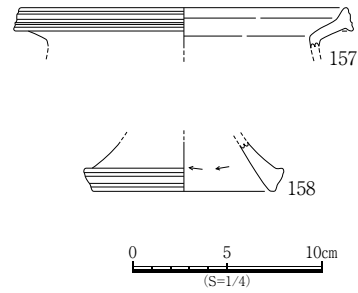
調査区北東部で検出したピットである。平面形は楕円形を呈し、直径約0.4m、検出面からの深さは16cmである。

図示した出土遺物は須恵器の杯、土師器の甕である。174は須恵器の杯である。回転ナデ調整である。やや歪む。175は土師器の甕である。口縁部はやや内湾気味にのび、口唇部は面取りによりわずかに拡張する。外面はナデ調整、内面はヨコハケ調整である。

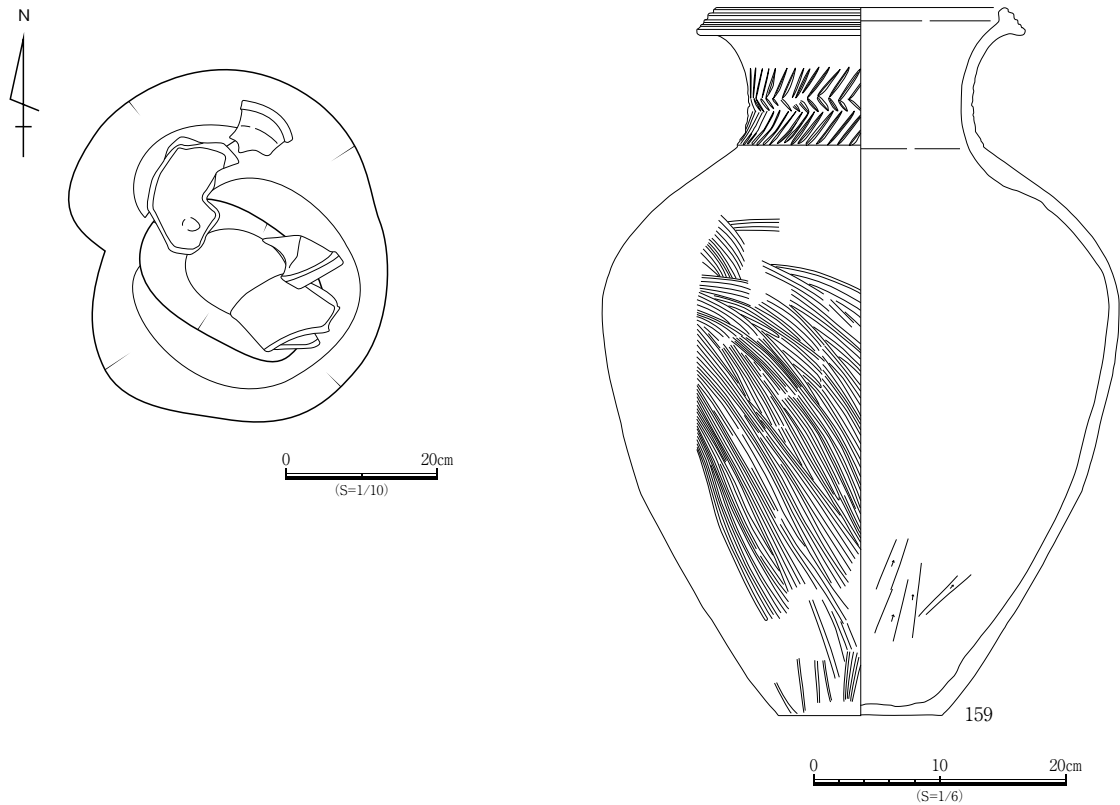
P87 (図IV-48)

調査区東部で検出したピットである。平面形は楕円形を呈し、長軸約0.5m、短軸約0.3m、検出面からの深さは23cmである。

図示した出土遺物は須恵器の蓋、土師器の皿・甕、製塩土器である。176は須恵器の蓋である。口縁端部はわずかに屈曲し下垂する。内外面とも回転ナデ調整である。177は土師器の皿である。口縁部をわずかに外反させ、端部を丸くおさめる。内外面とも回転ナデ調整である。178は土師器の甕である。口唇部は面取りによりわずかに拡張する。外面はナデ調整、内面はヨコハケ調整である。179は製塩土器である。内面には布目の圧痕が認められる。



図IV-46 SX1遺物実測図



図IV-47 P34遺物出土状況図・遺物実測図

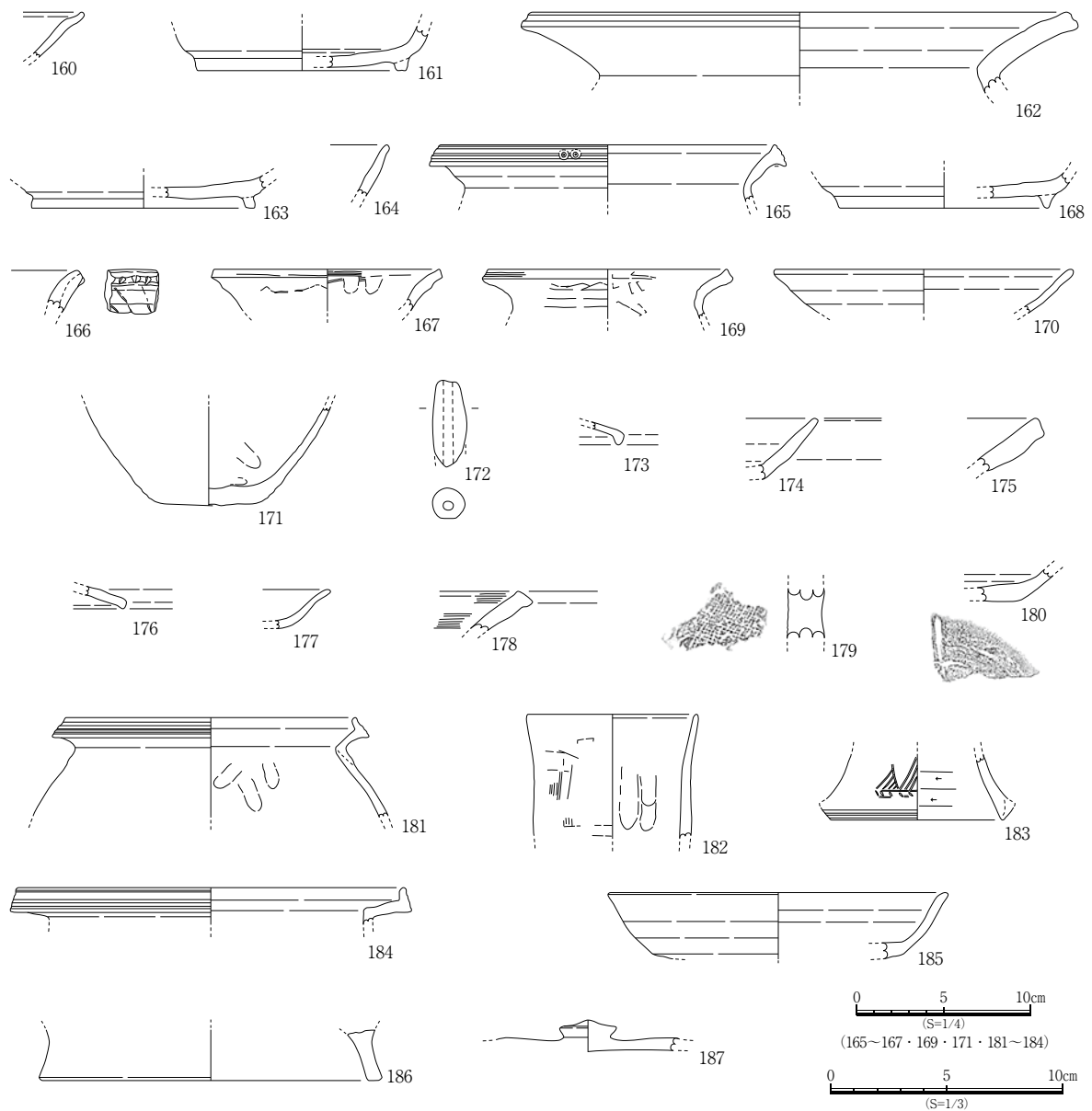
P88 (図IV-48)

調査区北東部で検出したピットである。北は調査区外である。長軸約 1.0m, 短軸 0.5m 以上, 検出面からの深さは 21 cm である。主な埋土はにぶい黄橙色細粒砂混じりシルト, 黒褐色細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は須恵器の杯(180)である。内外面とも回転ナデ調整である。外底面は回転ヘラ切り後ナデ調整である。

P92 (図IV-48)

調査区東部で検出したピットである。平面形は円形を呈し, 直径約 0.5m, 検出面からの深さは 27 cm である。



図IV-48 ピット出土遺物実測図

図示した出土遺物は弥生土器の甕(181)である。口縁部は横方向へ引っ張り出し、上方へ拡張する。外面には3条の凹線文を施す。煤が付着する。外面から内面頸部まではヨコナデ調整であり、内面肩部には指頭圧痕が認められる。

P112(図Ⅳ-48)

調査区西部で検出したピットである。平面形は楕円形を呈し、長軸約0.5m、短軸約0.4m、検出面からの深さは26cmである。主な埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は弥生土器の壺(182)である。頸部は直立する。外面はタテハケ調整、ヨコハケ調整を施す。内面はナデ調整である。

P123(図Ⅳ-48)

調査区西部で検出したピットである。平面形は円形を呈し、直径約0.4m、検出面からの深さは30cmである。埋土は極暗褐色細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は弥生土器の高杯(183)である。脚端部は上方へ拡張し2条の凹線文を施す。沈線を充填した鋸歯文、刺突文、沈線文を配置する。内面はケズリ調整である。

P129(図Ⅳ-48)

調査区北西部で検出したピットである。平面形は円形を呈し、直径約0.5m、検出面からの深さは36cmである。主な埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は弥生土器の甕(184)である。口縁部を上方へ拡張し3条の凹線文を施す。内外面ともヨコナデ調整である。

P154(図Ⅳ-48)

調査区中央部で検出したピットである。平面形は楕円形を呈し、直径約0.3m、検出面からの深さは36cmである。主な埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は須恵器の杯、土師器の杯である。185は須恵器の杯である。内外面とも回転ナデ調整である。186は杯の高台である。端部は平坦面を成す。内外面とも回転ナデ調整である。

P172(図Ⅳ-48)

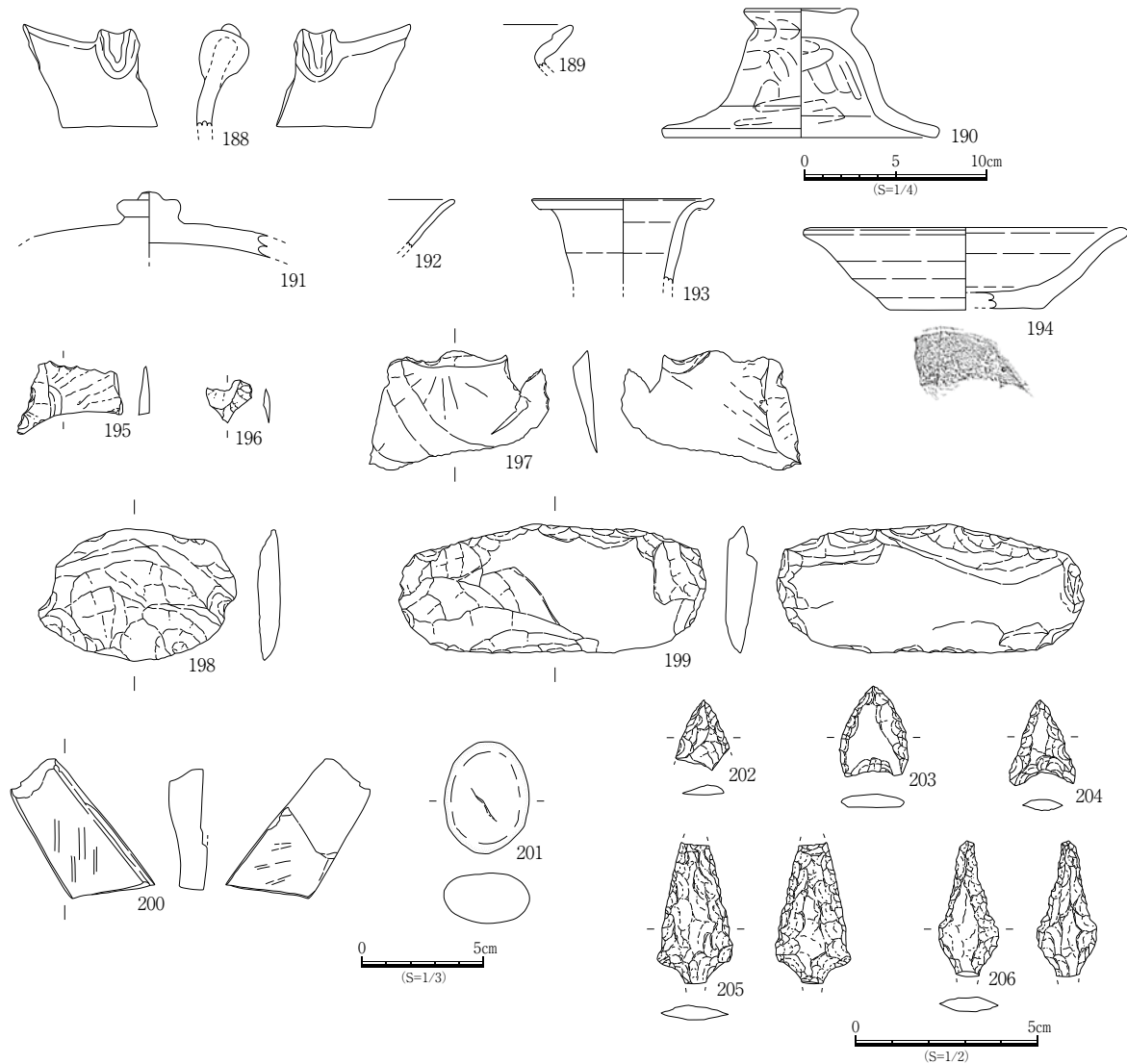
調査区中央部で検出したピットである。平面形は楕円形を呈し、直径約0.4m、検出面からの深さは35cmである。埋土は暗褐色細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は須恵器の蓋(187)である。扁平な擬宝珠形のつまみを付す。外面天井部は回転ヘラケズリ調整、内面は回転ナデ調整及び仕上げナデ調整を施す。

(8)遺構外出土遺物(図Ⅳ-49)

図示した出土遺物は縄文土器の浅鉢(188・189)、弥生土器の蓋(190)、土師器の蓋(191)、緑釉陶器の皿(192)、須恵器の壺(193)、土師器の杯(194)、サヌカイトの剥片(195～197)、石包丁(198・199)、砥石(200)、投弾(201)、石鏃(202～206)である。このうち縄文土器の浅鉢(188・189)はⅣ-1区の北東部から出土した。縄文時代晩期中葉である。今次調査では最古の遺物である。周辺を精査したが当該期の遺構は検出していない。188は波状口縁であり、口唇部をやや肥厚させ、丸くおさめる。内外面に粘土を貼付け、突起とする。突起の中央部は凹む。189の口縁部で外反させ、口唇部は尖らせ気味に丸くおさめる。口縁部内面に段を持つ。190の口縁部は水平にひらく。天井端部をつまみ出すとともに笠部の上部を凹ませることで持ち手とする。残存率は良好である。191の天井部には扁平で頂

部が突出する扁平な擬宝珠形をつまみを付す。内外面ともに赤彩を施す。192は口縁部をわずかに外反させ、口唇部を尖らせ気味におさめる。素地は須恵質であり、内外面に透明感の強いオリーブ灰色の釉薬を施す。195～197はサヌカイトの剥片である。明瞭な調整剥離痕跡は認められない。199は石包丁の未成品であり、荒割段階のものである。片面は自然面が多く残っている。203・204は凹基式の打製石鏃、205・206は有茎式の打製石鏃である。



図IV-49 遺構外出土遺物実測図

引用文献

パリノ・サーヴェイ株式会社2004年「田村遺跡群の自然科学分析」『田村遺跡群Ⅱ』第8分冊高知県教育委員会・

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

E4区SK447(弥生時代) イチイガシ

L1区SK110(弥生時代後期か) イチイガシ

L2区SK247(弥生時代中期末～後期初頭) イチイガシ

株式会社古環境研究所2004年「高知県, 田村遺跡群における自然科学分析」『田村遺跡群Ⅱ』第8分冊

高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

O2区SK209(弥生時代中期末～後期初頭) イチイガシ

D1区SK1130(弥生時代中期中葉) コナラ属アカガシ亜属

Q2区P2006(弥生時代中期末) コナラ属アカガシ亜属

I2区ST205(弥生時代中期末～後期初頭) コナラ属アカガシ亜属

パリノ・サーヴェイ株式会社2015年「自然科学分析」『バーガ森北斜面遺跡』高知県教育委員会・(公財)高知県文

化財団埋蔵文化財センター

竪穴建物跡計測表 (IV-1区)

遺構名	平面形	規 模 (m)			床面標高(m)	面積 (㎡)	長軸方向 (NはGN)	時 期
		長軸/検出長	短軸/幅	深さ (cm)				
ST1	隅丸方形	4.2	(2.7)	25	8.9	(17.6)	N - 9° - E	弥生時代中期末
ST1 _中央P	楕円形	1.0	0.7	23	8.7	-	-	
ST1_P1	円形	0.3	0.2	29	8.6	-	-	
ST1_P2	〃	0.3	0.2	12	8.8	-	-	
ST1_P3	不整形	0.7	0.5	19	8.7	-	-	
ST1_P4	円形	0.2	0.2	29	8.6	-	-	
ST1_P5	〃	0.2	0.2	10	8.8	-	-	
ST1_SD1	-	(2.4)	0.2 ~ 0.3	2	8.9	-	-	
ST2	楕円形	5.2	4.8	42	8.6	19.9	-	弥生時代中期末
ST2 _中央P	不整形	0.6	0.3	9	8.5	-	-	
ST2_P1	楕円形	0.4	0.3	12	8.5	-	-	
ST2_P2	円形	(0.2)	0.2	4	8.6	-	-	
ST2_P3	楕円形	0.4	0.3	-	-	-	-	
ST2_P4	円形	0.2	0.2	-	-	-	-	
ST2_P5	楕円形	0.4	0.3	-	-	-	-	
ST2_P6	〃	0.3	0.3	-	-	-	-	
ST2_P7	〃	0.2	0.1	10	8.5	-	-	
ST2_SD1	-	12.3	0.1 ~ 0.3	4	8.6	-	-	
ST3	円形	4.0	4.2	38	9.0	13.5	-	弥生時代中期末
ST3 _中央P	ヒョウタン形	1.6	1.1	13	8.9	-	-	
ST3_P1	円形	0.2	0.2	9	8.9	-	-	
ST3_P2	〃	0.2	0.2	20	8.8	-	-	
ST3_P3	楕円形	0.3	0.2	16	8.8	-	-	
ST3_P4	〃	0.3	0.3	20	8.8	-	-	

遺構名	平面形	規模 (m)			床面標高(m)	面積 (㎡)	長軸方向 (NはGN)	時 期
		長軸/検出長	短軸/幅	深さ (cm)				
ST3_P5	隅丸方形	0.3	0.3	11	8.9	-	-	
ST3_P6	楕円形	0.4	0.3	17	8.8	-	-	
ST4	隅丸方形か	(2.8)	(2.3)	24	9.1	(16.0)	N - 11° - E	弥生時代中期末
ST4 _中央P	楕円形か	0.6	(0.4)	7	9.0	-	-	
ST4_P1	不整形	0.2	0.2	29	8.9	-	-	
ST4_P2	不整円形	0.4	0.3	37	8.8	-	-	
ST4_P3	円形	0.2	0.2	26	8.9	-	-	
ST4_P4	〃	0.2	0.2	30	8.8	-	-	
ST4_P5	楕円形	0.3	0.2	13	9.0	-	-	
ST4_P6	〃	0.2	0.2	7	9.1	-	-	

土坑計測表 (IV-1区)

遺構名	平面形	規 模			床面標高 (m)	主軸方向 (NはGN)	時 期
		長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)			
SK1	不整形	1.3	0.7	24	8.9	N - 12° - E	古代
SK2	溝状	(1.7)	0.7	26	8.9	N - 3° - E	弥生時代中期末
SK3	隅丸方形	0.8	0.7	39	8.8	N - 74° - W	古代
SK4	隅丸長方形	2.2	1.5	65	8.5	N - 66° - W	弥生時代中期末
SK5	〃	2.7	1.6	19	8.9	N - 89° - E	〃
SK6	隅丸正方形	2.1	2.0	61	8.6	N - 6° - E	〃
SK7	隅丸長方形	1.0	0.8	12	9.0	N - 30° - W	古代
SK8	楕円形	0.8	0.5	15	9.0	N - 62° - W	時期不明
SK9	隅丸長方形	1.8	1.0	41	8.8	N - 3° - W	弥生時代中期末
SK10	〃	2.1	2.0	27	8.9	N - 10° - W	〃
SK11	〃	0.9	0.8	14	9.0	N - 71° - W	古代
SK12	〃	1.5	1.0	27	8.9	N - 78° - W	〃
SK13	不整隅丸長方形	1.6	1.2	33	8.8	N - 26° - E	弥生時代中期末
SK14	溝状	4.0	0.3 ~ 0.6	35	8.7	N - 87° - W	〃
SK15	不整隅丸長方形	1.9	1.1	47	8.7	N - 25° - W	〃
SK16	不整形	1.1	(0.7)	33	8.8	N - 1° - E	〃
SK17	欠番						
SK18	隅丸長方形	1.0	0.6	11	9.0	N - 3° - E	古代
SK19	欠番						
SK20	〃						
SK21	隅丸長方形か	(2.1)	(0.4)	(60)	7.7	N - 9° - E	弥生時代中期末
SK22	隅丸長方形	2.5	(1.0)	11	9.0	N - 6° - W	〃
SK23	不整形	(1.0)	0.6	57	8.6	N - 27° - W	古代
SK24	〃	0.8	0.5	15	8.9	N - 16° - E	〃

遺構名	平面形	規 模			床面標高 (m)	主軸方向 (NはGN)	時 期
		長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)			
SK25	不整隅丸長方形	2.9	2.8	12	9.0	N - 1° - E	弥生時代中期末
SK25 P1	円形	0.2	0.2	6	8.9	-	
SK25 P2	〃	0.2	0.2	6	8.9	-	
SK26	溝状	(2.8)	0.8	19	8.8	N - 89° - W	弥生時代
SK27	隅丸正方形	0.6	0.6	10	8.9	N - 30° - E	古代
SK28	長楕円形	0.9	0.3	27	8.8	N - 50° - W	〃
SK29	不整隅丸長方形	1.8	1.1	23	8.8	N - 0° - W	弥生時代中期末
SK30	楕円形	0.8	0.5	29	9.0	N - 86° - W	時期不明
SK31	隅丸長方形	0.8	0.7	19	9.2	N - 3° - E	〃
SK32	不整形	2.3	1.6	12	9.2	N - 11° - E	弥生時代
SK33	楕円形か	1.1	(0.6)	39	9.0	N - 83° - W	時期不明
SK34	楕円形	0.9	0.8	17	9.0	N - 86° - W	古代
SK35	隅丸方形か	4.0	(3.2)	26	9.0	N - 11° - E	弥生時代中期末
SK35 中央 P	楕円形	(0.6)	0.5	7	9.0	-	
SK35 P1	不整形	0.4	0.3	7	8.9	-	
SK35 P2	楕円形	0.5	0.4	28	8.7	-	
SK35 P3	不整形	0.3	0.3	32	8.7	-	
SK35 P4	円形	0.3	(0.2)	28	8.8	-	
SK35 P5	楕円形	0.2	0.2	17	8.9	-	
SK35 P6	〃	0.1	0.1	11	9.0	-	
SK36	方形	0.8	(0.7)	35	8.9	N - 9° - E	古代
SK37	不整形	2.0	(1.6)	57	8.7	N - 62° - W	弥生時代
SK38	〃	1.1	0.5	10	9.2	N - 2° - E	時期不明
SK39	溝状	1.1	0.5	6	9.2	N - 13° - W	古代か
SK40	不整形	0.7	0.6	14	9.1	N - 74° - W	時期不明

遺構名	平面形	規模			床面標高 (m)	主軸方向 (NはGN)	時期
		長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)			
SK41	楕円形	(1.2)	0.7	28	9.1	N - 67° - E	弥生時代中期末
SK42	隅丸長方形	0.8	0.7	30	8.9	N - 2° - E	古代
SK43	〃	1.4	0.9	41	8.9	N - 15° - E	弥生時代
SK44	不整形	0.7	0.4	27	9.1	N - 72° - W	時期不明
SK45	〃	0.6	0.5	42	8.9	N - 7° - E	〃
SK46	不整隅丸長方形	1.6	(1.4)	20	9.1	N - 14° - E	弥生時代中期末
SK47	隅丸長方形	2.2	1.8	49	8.7	N - 71° - W	〃
SK48	〃	2.4	1.8	48	8.7	N - 31° - E	弥生時代中期後葉
SK49	不整形	(1.7)	(1.3)	51	8.8	N - 29° - E	弥生時代中期末

出土遺物(土器)観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量(cm)			色調(外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-2	1	ST1	弥生壺		(16.1)	9.5	浅黄橙色	摩耗のため、調整不明瞭。ナデ。二次被熱。
〃	2	〃	弥生甕	16.9	(2.6)		にぶい橙色	口縁部、上方へ拡張。3条の凹線文。
〃	3	〃	弥生高杯	22.2	(10.2)		橙色	口縁端部、平坦面。外面、2条の凹線文。円盤充填。ミガキ・ハケ。
IV-5	8	ST2	弥生壺	8.2	(2.3)		〃	貼付口縁。玉縁状。焼成前穿孔有り。磨耗、調整不明瞭。
〃	9	〃	〃	9.6	(2.6)		灰白色	貼付口縁。刻目、楕円形浮文。仁淀川流域の胎土。
〃	10	〃	〃	9.6	(6.7)		橙色	複合口縁。二次口縁外面に3条の凹線文。内外面ともナデ。
〃	11	〃	〃	17.6	(5.1)		にぶい橙色	貼付口縁。粘土帯外面に指頭圧痕有り。口唇部、ハケ状工具による面取り。
〃	12	〃	弥生甕	13.5	(7.0)		橙色	口唇部、強いヨコナデ、凹面状。口縁部、ヨコナデ。体部、工具ナデ。
〃	13	〃	〃	14.4	(9.3)		にぶい橙色	上方へ拡張、2～3条の凹線文。外面、タテハケ。内面、ナデ・ケズリ。煤付着。
〃	14	〃	弥生鉢か	7.8	(6.7)		〃	外面、ミガキ。内面、ケズリ。15と同一個体か。
〃	15	〃	〃	9.0	(5.0)		褐灰色	外面、ミガキ。内面、ケズリ。14と同一個体か。
〃	16	〃	弥生体部		(4.3)		にぶい黄橙色	双線により文様を描く。17・47と同一個体か。
〃	17	〃	〃		(2.8)		〃	双線により文様を描く。16・47と同一個体か。
〃	18	〃	〃		(2.2)		橙色	内面に断面三角形の突帯を貼付ける。
〃	19	〃	弥生ミニ	7.3	9.9	3.4	にぶい橙色	黒斑有り。煤、付着。床面から出土。
IV-6	25	ST3	弥生壺	24.1	(9.6)		浅黄橙色	貼付口縁。粘土帯外面に弱い指頭圧痕。口唇部、面取り。
〃	26	〃	〃	22.3	(2.8)		〃	貼付口縁。粘土帯外面に弱い指頭圧痕。口唇部、面取り。口唇下端、刻目。
〃	27	〃	弥生甕	15.2	(12.3)		にぶい黄褐色	口唇部、面取り。体部外面、ミガキ。内面、ナデ。煤付着。
〃	28	〃	〃	13.5	(1.5)		灰色	口縁部を上方に拡張、つまみ上げ。凹線文。
〃	29	〃	弥生壺		(22.1)	8.4	浅黄橙色	やや上げ底。内底面に指頭圧痕。外面肩部にミガキ。内面はナデ、一部ハケ。
〃	30	〃	弥生底部		(7.3)	7.0	にぶい黄橙色	外底面は端部に沿ってわずかに凹む。内外面、ナデか。
IV-7	32	ST4	弥生壺	20.8	(12.6)		にぶい橙色	貼付口縁。口唇部、凹面状。外面、タテハケ。内面、ナデ。二次被熱。
〃	33	〃	弥生高杯		(11.8)	10.9	〃	端部、凹面状、突出させる。外面、ハケ調整。内面、ナデ調整。
IV-10	34	P110 (SB3)	〃	17.7	(2.5)		オリーブ黒色	口唇部、拡張、2条の凹線文。外面に2条の凹線文。火山ガラス片を含む。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-12	35	P132 (SB5)	弥生 高杯	31.5	(3.7)		橙色	口唇部, 拡張, 2条の凹線文。外面に2~3条の凹線文。内外面, ナデ。
IV-13	36	P121 (SB6)	弥生 甕		(1.3)		にぶい黄橙色	口縁部, 上方へ拡張。2条の凹線文。内外面, ヨコナデ。
IV-14	37	SK2	弥生 壺	6.5	(12.3)		橙色	細頸長頸壺。7条の弱い凹線文。
〃	38	SK3	弥生 底部		(3.0)	6.8	黒褐色	若干, 上げ底。シャープな作り。雲母片を含む。
IV-15	40	SK4・5・9	弥生 壺		(37.5)		橙色	頸部と上胴部に「ノ」の字状刻目。外面, ミガキ・ナデ。内面, ケズリ・ナデ。
〃	41	SK5	弥生 甕	15.9	30.5	6.6	にぶい橙色	口縁部, 「く」の字状。口唇部, わずかに拡張。外面, ナデ。内面, ケズリ・ナデ。重い。
〃	42	SK9	〃	21.1	(10.0)		にぶい黄橙色	口縁部, 強く外反。口唇部, 上方へ拡張。上胴部内面, 指頭圧痕。
IV-16	44	SK6	弥生 壺	14.5	(8.2)		にぶい橙色	口唇部, 凹面状。竹管文。外面, タテハケ。内面, ナデ。
〃	45	〃	弥生 鉢	24.1	(3.7)		にぶい黄褐色	貼付口縁。口唇部, 肥厚。3条の凹線文。
〃	46	〃	弥生 高杯	18.8	(3.3)		橙色	口縁部, 拡張。外面, 3条の凹線文。外面, ミガキ。内面, ハケ。
〃	47	〃	弥生 体部		(7.7)		にぶい橙色	双線により文様を描く。16・17と同一個体か。
IV-18	48	SK10	弥生 壺	21.0	(2.9)		橙色	口縁部, 上下に拡張。4条の凹線文。
〃	49	〃	〃	20.7	(2.4)		オリーブ黒色	口縁下端, 刻目。微隆起突帯。仁淀川流域の土器。
〃	50	〃	〃		(5.1)		黄灰色	ドーナツ状浮文, 刻目, 単位境が微隆起突帯状になる櫛描直線文。仁淀川流域からの搬入品。
〃	51	〃	弥生 甕	16.4	(8.7)		にぶい黄褐色	口縁部は強く屈曲し, 上方へ拡張。2条の凹線文。外面, タテハケ。内面, 上胴部までケズリ。肩部, 指頭圧痕。
〃	52	〃	〃	14.7	(7.3)		褐灰色	口縁部, 「く」の字状。上方へ拡張。2条の凹線文。外面, タテハケ。内面, 上胴部までタテハケ。肩部, ヨコナデ。
IV-19	54	SK13	弥生 壺	14.5	(37.5)	8.7	にぶい黄橙色	口縁部, 上下に拡張, 2条の凹線文。外面, 横方向のハケ・ナデ。内面, ナデ。指頭圧痕。ベンガラを塗布。
IV-20	55	〃	〃	17.0	(39.8)		橙色	貼付口縁。粘土帯, 指押さえ後ヨコナデ。ベンガラを塗布。外面, ハケ。内面, ナデ。
〃	56	〃	弥生 水差形		(34.9)	9.6	〃	腰部が大きく張る。脚が付く。肩部に把手が付く。外面は櫛描文。内面はタテハケ調整。
〃	57	〃	弥生 甕	15.0	(3.4)		〃	口縁部を上方へ拡張。3条の凹線文。煤付着。磨耗, 調整不明瞭。
〃	58	〃	〃	17.9	(5.2)		〃	口唇部, 面取り。外面, ナデか。内面, 頸部, ヨコハケ。口縁部, ナデ, 指頭圧痕。
〃	59	〃	〃	18.9	33.0	7.4	灰褐色	貼付口縁。粘土帯, 指押さえ後ヨコナデ。外面, タテハケ。内面, ヘラケズリ。上半部, 煤付着。
〃	60	〃	〃	20.5	(8.0)		にぶい橙色	貼付口縁。さらに断面カマボコ形の粘土紐を貼付する。外面, タテハケ調整。内面, ナデ調整。
〃	61	〃	〃	21.8	(24.5)		にぶい黄橙色	貼付口縁。磨耗, 調整不明。
IV-21	62	〃	弥生 底部		(18.0)	7.8	にぶい褐色	平底。外面, タテハケ。磨耗。二次被熱。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量(cm)			色調(外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-21	63	SK13	弥生 底部		(11.0)	9.3	にぶい黄橙色	底部, 器壁は薄い。外面, ミガキ。内面, ケズリ。
〃	64	〃	弥生 高杯	21.2	11.4	8.8	橙色	口縁部は直立し, 4条の凹線文。端部, 拡張, 1条の凹線文。脚部内面, 杯部外面, ケズリ。円盤充填。
〃	65	〃	弥生 脚付鉢	16.4	(13.0)		褐灰色	深い杯部。外面, タテハケ。内面, ヨコハケ。円盤充填。
IV-22	67	SK14	弥生 壺	11.0	16.6	4.9	にぶい黄橙色	貼付口縁。口唇部, 斜格子文。被熱により器面は荒れる。内面, ナデ。
〃	68	〃	弥生 甕	19.0	(12.0)		にぶい橙色	口縁部, 上方へ拡張。2条の凹線文。外面, ナデ。内面, 上胴部までケズリ。煤附着。
〃	69	〃	弥生 体部		(5.2)		浅黄橙色	外面, 竹管文, 櫛描直線文, 櫛描波状文, 櫛描直線文, 櫛描波状文, 竹管文。内面, ナデ。
IV-24	74	SK17	土師 皿		1.6		にぶい黄褐色	内外面ともミガキ。煤附着。
IV-26	76	SK25_P1	土師 杯		(1.7)	6.2	黄灰色	摩耗のため, 調整不明瞭。
IV-27	78	SK26	弥生 壺	18.9	(9.0)		にぶい黄橙色	貼付口縁。粘土帯に斜格子文。内外面, ナデ。
〃	79	〃	弥生 甕	21.1	(6.1)		〃	口唇部, 面取り。下端, 刻目。櫛描直線文。微隆起突帯状。仁淀川流域からの搬入品。
IV-30	81	SK29	弥生 壺	(12.5)	(12.4)		にぶい橙色	肩部, ヘラ描き沈線文。櫛描波状文。外面, タテハケ。内面, ナデ。
〃	82	〃	〃	(15.0)	(13.3)		橙色	口縁部拡張, 2条の凹線文。外面, タテハケ。櫛描直線文, 簾状文。
〃	83	〃	〃	17.8	(9.1)		にぶい橙色	2条の凹線文。肩部に櫛描沈線文を施す。被熱変色。
〃	84	〃	〃		(4.4)		にぶい褐色	肩部にハケ状工具による刺突文, 2段の竹管文。外面, ハケ。内面, ナデ。
〃	85	〃	弥生 水差形	6.7	(10.7)		浅黄橙色	口縁部, 2条の凹線文。断面円形の把手が付く。被熱変色。
〃	86	〃	弥生 甕	21.4	(21.0)		灰黄褐色	貼付口縁。粘土帯, 指押え後ヨコナデ。肩部, 刺突文。外面, ハケ。内面, ナデ。煤附着。
〃	87	〃	〃	21.0	(19.3)		橙色	貼付口縁。粘土帯, 指押え後ヨコナデ。外面, ハケ。内面頸部, ヨコハケ。体部, ナデ。
〃	88	〃	〃	8.4	(8.0)		にぶい黄橙色	内外面, ナデ。雑な作り。ミニチュア土器か。
〃	89	〃	〃	22.6	(5.5)		〃	貼付口縁。粘土帯には明瞭な指頭圧痕。口唇部, 面取り。煤附着。
〃	90	〃	〃	16.0	(9.0)		にぶい橙色	口縁部, 上下に拡張, 2条の凹線文。外面, タテハケ。内面, 頸部にヨコナデ。肩部, ヨコハケ。体部, ケズリか。
〃	91	〃	弥生 壺		(38.9)	9.6	浅黄橙色	上胴部に最大径。外底面, 中央わずかに凹む。外面, タテハケ。内面, ナデ。
〃	92	〃	弥生 底部		(13.5)	7.0	にぶい黄橙色	内外面, ナデ。内面, 爪の圧痕か。被熱変色。
〃	93	〃	弥生 鉢	18.8	(7.3)		〃	口縁端部をつまみ上げる。外面, ハケ。内面, ナデ。
〃	94	〃	〃	23.2	(9.4)		淡赤橙色	貼付口縁。粘土帯, 指頭圧痕。口唇部, 面取り。外面, 粗いハケ。内面, ナデ。被熱変色。
IV-33	96	SK35	弥生 壺		(1.6)		にぶい橙色	2条の凹線文。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-33	97	SK35	弥生壺		(2.8)		にぶい橙色	貼付口縁。口唇部, 刻目。粘土帯に2段の刻目, 楕円形浮文。
〃	98	〃	弥生甕		(1.5)		明黄褐色	口縁部を上方へ拡張, 2条の凹線文。
IV-34	99	SK47	弥生壺	26.2	(2.9)		浅黄褐色	口縁部は下方へつまみ出し, 粘土紐貼付けて上方へ拡張。3条の凹線文。
〃	100	〃	弥生甕		(5.4)		黄灰色	口唇部, 面取り, 下端に刻目。微隆起突帯。内外面, ナデ。仁淀川流域からの搬入品。
〃	101	〃	〃		(5.8)		〃	内外面, ナデ。櫛描直線文, 楕円形浮文。
〃	102	〃	〃		(5.8)		浅黄褐色	外面, ナデ。内面, ナデ・ハケ・指頭圧痕。櫛描直線文, 突帯, 楕円形浮文。
IV-35	105	SK48	弥生壺		(4.1)		にぶい黄褐色	貼付口縁。口唇部, 面取り。外面, 刻目。櫛描直線文, 微隆起突帯状。仁淀川流域からの搬入品。
〃	106	〃	弥生甕	22.1	(2.1)		明褐色	口唇部下端, 刻目。櫛描直線文・2条の微隆起突帯。煤付着。仁淀川流域からの搬入品。
〃	107	〃	〃	18.8	(9.6)		にぶい黄褐色	貼付口縁。口唇部面取り, 下端面刻目。櫛描直線文, 楕円形浮文。煤付着。
IV-36	109	SK49	弥生壺	15.8	(4.2)		灰白色	口縁部, 上下に拡張。3~4条の凹線文。内外面, ナデ。
〃	110	〃	弥生甕	17.0	(3.7)		灰黄褐色	口唇部, 面取り。下端, 刻目。微隆起突帯, 櫛描直線文。頸部, 櫛描直線文。内外面, ナデ。内面, ハケメ状。
〃	111	〃	弥生壺		(16.6)		橙色	外面上半, ハケ。下半, ミガキ。内面上半, ナデ。下半, ケズリ。ベンガラ塗布か。
〃	112	〃	弥生蓋		(1.8)	つまみ径 7.4	にぶい黄褐色	端部は突出。被熱変色。
IV-37	114	SD1	弥生壺	20.8	(2.4)		浅黄色	口唇部, 面取り。刻目。
〃	115	〃	弥生底部		(2.6)	6.0	橙色	内外面, ナデ。被熱変色。
IV-38	118	SD2	須恵杯		(2.0)	11.0	灰白色	断面長方形の高台を付す。摩耗のため, 調整不明瞭。
〃	119	〃	土師甕		(2.3)		にぶい褐色	口縁部上面は平坦面を成し, 端部は丸くおさめる。外面, 叩きか。搬入品。
IV-39	120	SD6	弥生壺	8.1	(20.7)	3.8	にぶい黄褐色	細頸長頸壺。扁球形の体部。体部内面, 粗いハケ。搬入品か。
〃	121	〃	〃	12.8	(6.3)		橙色	口縁部, あまりひらかない。口唇部, 丸くおさめる。磨耗のため調整不明瞭。内外面, ナデか。
〃	122	〃	〃		(3.4)		にぶい橙色	竹管文, 櫛描直線文, 櫛描波状文。内面, ナデ。しほり目。
〃	123	〃	〃	13.3	44.2	8.6	灰白色	口縁部, あまりひらかない。貼付口縁, 口唇部面取り。長胴。内外面, ナデ。煤付着。
〃	124	〃	弥生甕	13.5	(9.9)		にぶい橙色	口縁部上方へ拡張, 沈線化した2条の凹線文。内面口縁部直下, ヨコナデ。内面, ナデ。外面, タテハケ。煤付着。
〃	125	〃	〃	17.8	(3.7)		淡橙色	口縁部, 上方へ拡張, 2条の凹線文。内外面, ナデ。
〃	126	〃	〃	13.0	(7.5)		灰白色	貼付口縁。粘土帯指押え後, ヨコナデ。内外面, ナデ。煤付着。
〃	127	〃	弥生高杯	12.1	14.6	8.5	浅黄褐色	口縁部, 2条の凹線文。裾部, 刻目。脚部内面, ケズリ。円盤充填。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量(cm)			色調(外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-39	128	SD6	弥生 高杯	20.7	(5.4)		明赤褐色	口縁部, 内傾。口唇部, 面取り。外面, 3条の凹線文。磨耗, 調整不明瞭。
〃	129	〃	〃		(7.0)	10.3	橙色	脚端部, 強いヨコナデ。磨耗, 調整不明瞭。
〃	130	〃	弥生 ミニ		(8.0)	3.8	灰黄褐色	平底。内外面, ナデ。煤付着。
IV-41	136	SD7	弥生 壺	8.2	(9.9)		にぶい橙色	貼付口縁。口唇部, 面取り。端部, 突出。頸胴部境, 1条の凹線文状。外面, ミガキ。内面, ナデ。
〃	137	〃	弥生 甕	14.4	(10.4)		浅黄橙色	口唇部, 面取り。内外面, ナデ。擦痕。煤付着。
〃	138	〃	〃	20.2	(4.8)		暗灰黄色	口唇部, 強いヨコナデ。下端に刻目。微隆起突帯。仁淀川流域からの搬入品。
〃	139	〃	弥生 底部		(4.3)	5.7	にぶい黄橙色	平底。内外面, ナデ。仁淀川流域からの搬入品。
IV-42	140	SD10	弥生 壺	18.5	(3.1)		灰色	貼付口縁。刻目, 楕円形浮文, 櫛描直線文, 微隆起突帯。仁淀川流域からの搬入品。
〃	141	〃	弥生 甕	16.9	(2.9)		にぶい褐色	口唇部, 面取り。刻目。内面, ハケ・ナデ。外面, ナデ。
IV-43	142	SD11	〃		(2.3)		灰黄褐色	口唇部, 面取り。下端, 刻目。微隆起突帯, 櫛描直線文。仁淀川流域からの搬入品。
〃	143	〃	弥生 高杯		(1.9)	17.2	にぶい橙色	脚端部, 強いヨコナデにより凹面。2条の凹線文。
IV-44	144	SD13	弥生 壺	15.5	(3.0)		橙色	口縁部, 上方へ拡張。3条の凹線文。磨耗のため調整不明瞭。内外面, ナデ。
〃	145	〃	〃	15.0	(2.3)		にぶい褐色	貼付口縁。横方向へひっぱり出す。上方へ拡張。4条の凹線文。内外面, ナデ。
〃	146	〃	弥生 甕	21.0	(3.0)		オリーブ黒色	口唇部, 面取り。下端, 刻目。微隆起突帯, 貼付。内外面, ナデ。仁淀川流域からの搬入品。
〃	147	〃	〃	18.1	(2.0)		にぶい黄橙色	口縁部, 上方へ拡張。2条の凹線文。内外面, ナデ。
〃	148	〃	弥生 体部		(5.6)		浅黄橙色	竹管文, 櫛描直線文, 櫛描波状文。内面, 指頭圧痕。
〃	149	〃	弥生 底部	(13.7)		4.1	〃	丸底。外面, 叩き・ナデ。内面, ハケ。黒斑有り。
IV-45	151	SR1	弥生 壺		(7.7)		にぶい黄橙色	櫛描直線文, 扁平な刻目突帯。内外面, ナデ。
〃	152	〃	〃	12.0	(5.0)		にぶい褐色	貼付口縁。粘土帯, 指押え後ヨコナデ。口唇部, 面取り, 下端刻目。頸部外面, タテハケ。内面, ヨコハケ。
〃	153	〃	〃	21.5	(3.5)		にぶい黄橙色	貼付口縁。粘土帯指押さえ後ヨコナデ。口唇部面取り, 下端刻目。仁淀川流域からの搬入品。
〃	154	〃	弥生 高杯		(3.0)	9.0	にぶい橙色	端部を上方に拡張, 2条の凹線文。2段の刺突文。内外面, ナデ。
〃	155	〃	〃		(8.0)	26.8	〃	端部, 上方へ拡張, 3条の凹線文。櫛描直線文, 沈線文, 三角形の未貫通の透孔, 凹線文。内面, ケズリ。
IV-46	157	SX1	弥生 甕	17.0	(2.1)		浅黄橙色	口縁部, 上下に拡張, 3条の凹線文。内外面, ナデ。
〃	158	〃	弥生 高杯		(2.6)	9.6	〃	端部を上方へ拡張, 2条の凹線文。磨耗のため調整不明。
IV-47	159	P34	弥生 壺	22.8	56.2	13.0	灰褐色	口縁部, 上下に拡張, 4条の凹線文。頸部, 綾杉文・列点文。外面, ミガキ。内面, 底部付近ケズリ, 以外はナデ。ベンガラ塗布。SK9と接合。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特 徴
				口径	器高	底径		
IV-48	160	P9	須恵皿		(2.0)		灰白色	折り曲げ口縁。磨耗のため調整不明瞭。
〃	161	P16	須恵杯		(1.9)	9.0	〃	断面逆台形の高台が付く。内外面, 回転ナデ。
〃	162	P19	須恵甕	23.1	(3.5)		〃	口唇部, 凹面状。内外面, 回転ナデ調整。自然釉, 付着。
〃	163	P20	須恵杯		(1.4)	9.6	灰色	断面方形の高台を付す。内外面, 回転ナデ調整。
〃	164	P21	須恵杯		(2.2)		黄灰色	回転ナデ調整。
〃	165	P27	弥生壺	19.0	(3.3)		灰黄色	口縁部, 上下に拡張, 3条の凹線文。2個1対のドーナツ状浮文。内外面, ナデ。
〃	166	P35	〃		(2.5)		にぶい褐色	貼付口縁。指押さえ後ヨコハケか。口唇部面取り, 下端刻目。
〃	167	〃	〃	12.9	(2.4)		灰黄褐色	貼付口縁か, 接合痕跡が残る。口唇部, ハケ状工具による面取り。内面, ハケ。
〃	168	P48	須恵杯		(1.5)	9.0	灰白色	断面逆台形の高台。内外面, 回転ナデ。
〃	169	P53	弥生甕	13.6	(2.8)		黒色	口縁端部, つまみ上げる。口唇部, 凹面状。2条の沈線か。内外面, ナデ。
〃	170	P55	土師杯	12.8	(1.9)		にぶい橙色	摩耗のため, 調整不明瞭。
〃	171	P59	弥生底部		(5.8)	5.9	灰白色	内外面, ナデ。
〃	173	P79	須恵蓋		(1.0)		〃	口縁端部垂下。内外面, 回転ナデ。
〃	174	P82	須恵杯		(2.6)		灰色	内外面, 回転ナデ。やや歪む。
〃	175	〃	土師甕		(2.3)		灰白色	外面, 回転ナデ。内面, ヨコハケ。
〃	176	P87	須恵蓋		(1.0)		〃	内外面, 回転ナデ。
〃	177	〃	土師皿		(1.7)		にぶい橙色	内外面, 回転ナデ。
〃	178	〃	土師甕		(1.8)		橙色	外面, 回転ナデ。内面, ヨコハケ。
〃	179	〃	製塩土器		(2.2)		にぶい橙色	内面には布目の圧痕。
〃	180	P88	須恵杯		(1.4)		灰色	内外面, 回転ナデ。ヘラ切り後ナデ。
〃	181	P92	弥生甕	16.6	(5.7)		褐灰色	上方へ拡張, 横方向へ引っぱり出す。3条の凹線文。外面, ヨコナデ。内面, ヨコナデ・指頭圧痕。煤付着。
〃	182	P112	弥生壺	9.6	(7.1)		にぶい黄褐色	外面, ハケ。内面, ナデ。搬入品か。
〃	183	P123	弥生高杯		(3.8)	9.9	橙色	沈線を充填した鋸歯文, 刺突文, 沈線文。内面, ケズリ。
〃	184	P129	弥生甕	22.2	(2.2)		にぶい橙色	上方へ拡張, 3条の凹線文。内外面, ヨコナデ。
〃	185	P154	須恵杯	14.5	(2.9)		灰色	内外面, 回転ナデ。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量(cm)			色調(外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-48	186	P154	土師杯		(22)	14.0	にぶい黄橙色	端部, 平坦面。内外面, 回転ナデ。
〃	187	P172	須恵蓋		(1.4)	つまみ径 (2.4)	灰白色	扁平な擬宝珠形のつまみ。外面, 回転ケズリ。内面, 回転ナデ・仕上げナデ。
IV-49	188	遺構外	縄文浅鉢		(4.2)		にぶい褐色	口唇部, やや肥厚させ, 丸くおさめる。波状口縁。口縁部に粘土を貼り付け, 突起とする。
〃	189	〃	〃		(2.4)		灰黄色	口唇部, 尖らせ気味に丸くおさめる。内面, 段。角閃石・火山ガラスを含む。
〃	190	〃	弥生蓋	15	7.1		にぶい黄橙色	端部, 突出。内外面, ナデ。内面, タール付着か。
〃	191	〃	土師蓋		(2.8)	つまみ径 2.6	浅黄橙色	扁平な擬宝珠形のつまみ。内外面, ミガキ。赤彩。
〃	192	〃	緑釉皿か		(2.0)		オリーブ灰色	内外面, 回転ナデ。素地, 須恵質。透明感の強い釉薬。
〃	193	〃	須恵壺	7.5	(3.5)		灰色	口縁端部, 短く外反, つまみ上げ。内外面, 回転ナデ。
〃	194	〃	土師杯	12.9	3.4	6.4	橙色	内外面, 回転ナデ。糸切り。被熱変色。

出土遺物(石器)観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量(cm/g)				石材	特徴
				全長	全幅	全厚	重量		
IV-2	4	ST1	石包丁か	(5.9)	4.6	1.4	(43.6)	チャート	欠損。短辺に抉り有り。表面は主要剥離面, 裏面は自然面。
〃	5	〃	石斧か	12.7	3.9	1.4	93.7	粘板岩	棒状の石材を縦方向に割り, 割れ面を平滑に磨く。石斧, 石剣の未成品か。
〃	6	〃	石斧	23.0	7.7	5.3	1615.9	緑色片岩	棒状の石材を敲打により成形。伐採斧の未成品。
IV-3	7	〃	叩石	16.9	9.3	5.0	1120.0	砂岩	両面に強い敲打痕。側面に弱い敲打痕。
IV-5	20	ST2	石包丁か	(3.2)	3.7	0.5	(9.4)	粘板岩	磨製石包丁か。大部分が欠損。長方形。片刃。
〃	21	〃	石鏃	(2.3)	1.5	0.4	(1.3)	サヌカイト	打製石鏃。先端部, 欠損。二等辺三角形。凹基式。剥離面を残す。縁辺部に調整剥離。
〃	22	〃	投弾	4.0	3.4	2.6	46.3	砂岩	加工は認められない。
〃	23	ST2_P1	〃	3.8	3.1	2.2	39.5	〃	加工は認められない。
〃	24	〃	〃	3.7	3.1	2.0	33.6	〃	加工は認められない。
IV-6	31	ST3	磨石	12.2	4.0	3.2	290.0	緑色岩	棒状の自然石を利用。両先端を主として使用。
IV-14	39	SK4	石包丁か	10.0	5.2	1.3	75.2	頁岩	石包丁の未成品。主要な剥離面を残す。縁辺部には調整剥離。
IV-18	53	SK10	投弾	3.9	3.2	1.9	34.0	砂岩	加工は認められない。
IV-21	66	SK13	叩石	9.3	8.0	2.6	302.0	〃	中央部に弱い敲打痕。
IV-22	70	SK14	投弾	4.4	3.3	2.5	62.0	〃	加工は認められない。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm/g)				石 材	特 徴
				全長	全幅	全厚	重量		
IV-22	71	SK14	投弾	4.2	3.3	2.2	43.0	砂岩	加工は認められない。
IV-23	72	SK16	〃	3.9	3.2	2.4	45.0	〃	加工は認められない。
〃	73	〃	〃	3.4	2.7	2.2	30.3	〃	加工は認められない。
IV-25	75	SK23	〃	4.7	3.5	2.8	65.4	〃	加工は認められない。
IV-26	77	SK25	石鏃	(3.2)	1.7	0.3	(2.0)	サヌカイト	有茎式の打製石鏃。茎部、欠損。主要剥離面を残す。縁辺部、調整加工。
IV-31	95	SK29	石斧	19.3	7.7	5.0	1280.0	緑色岩	棒状の自然石で加工は認められない。未成品。
IV-34	103	SK47	石包丁	9.3	6.2	0.9	58.6	砂岩	打製石包丁。裏面は自然面。刃部を加工。完存。
〃	104	〃	石鏃	1.5	1.4	0.2	0.4	サヌカイト	凹基式の打製石鏃。
IV-35	108	SK48	〃	(2.4)	1.1	0.3	(0.8)	〃	有茎式の打製石鏃。縁辺部、調整剥離。断面形扁平な菱形。欠損。
IV-36	113	SK49	叩石	15.4	12.0	5.2	1481.0	砂岩	周囲に磨る。側面を敲打することにより剥離する。
IV-37	116	SD1	石鏃	3.1	2.4	0.3	1.9	サヌカイト	平基式の打製石鏃。大型。両面とも主要剥離面を残す。縁辺部に調整剥離。
〃	117	〃	〃	(1.6)	1.5	0.3	(0.7)	〃	凹基式の打製石鏃。欠損。両面とも主要剥離面を残す。縁辺部に調整剥離。
IV-40	131	SD6	叩石	(14.1)	4.7	2.7	(2820)	砂岩	棒状の川原石。両先端部、激しく敲打。側面、両面にも敲打痕。
〃	132	〃	〃	(8.1)	6.0	2.3	(1690)	〃	側面、両面に敲打痕。側面のほうが強い敲打。線状の敲打痕。欠損する。
〃	133	〃	投弾	4.0	2.7	2.3	37.3	〃	加工は認められない。
〃	134	〃	〃	4.5	3.0	2.6	53.4	〃	加工は認められない。
IV-44	150	SD13	石包丁	8.2	5.2	0.9	53.1	粘板岩	磨製石包丁の未成品。表面、自然面。裏面、打割後磨く。
IV-49	195	遺構外	剥片	4.3	3.0	0.4	4.9	サヌカイト	風化面が残る。明瞭な調整剥離は認められない。
〃	196	〃	〃	1.9	1.8	0.2	0.6	〃	明瞭な調整剥離は認められない。
〃	197	〃	〃	7.4	5.0	1.0	19.6	〃	一部に調整剥離か。刃器として使用か。
〃	198	〃	石包丁	8.1	5.4	0.9	50.6	砂岩	打製石包丁。裏面は自然面。片刃。紐掛け用の抉りを両端に入れる。完存。
〃	199	〃	〃	12.7	5.3	1.3	111.5	〃	石包丁の未成品。
〃	200	〃	砥石	5.7	3.0	1.6	(45.0)	粘板岩	4面使用。
〃	201	〃	投弾	4.6	3.5	2.0	48.9	砂岩	特に加工痕跡なし。
〃	202	〃	石鏃か	(1.9)	(1.5)	(0.2)	(0.5)	サヌカイト	打製石鏃か。縁辺部、調整剥離。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm/g)				石 材	特 徴
				全長	全幅	全厚	重量		
IV-49	203	遺構外	石鏃	2.5	1.8	0.4	1.6	サヌカイト	凹基式の打製石鏃。両面とも主要剥離面を残す。縁辺部, 調整剥離。完存。
〃	204	〃	〃	2.3	1.8	0.2	1.0	〃	凹基式の打製石鏃。両面とも主要剥離面を残す。縁辺部, 調整剥離。ほぼ完存。
〃	205	〃	〃	(3.9)	2.1	0.4	(3.2)	〃	凸基式打製石鏃。両面とも主要剥離面を残す。縁辺部, 調整剥離。欠損。
〃	206	〃	〃	(3.7)	1.6	0.4	(2.5)	〃	凸基式打製石鏃。両面とも主要剥離面を残す。縁辺部, 調整剥離。欠損。

出土遺物(鉄器)観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm/g)				特 徴
				全長	全幅	全厚	重量	
IV-15	43	SK5	鉄斧か	6.9	3.2	1.3	30.3	板状鉄斧か。使用により刃部, 片減りか。
IV-40	135	SD6	鉈	4.8	1.1	0.6	3.5	断面長方形。
IV-45	156	SR1	〃	(8.4)	0.9	0.5	14.2	先端部, 丸みを持つ。断面長方形。

出土遺物(土製品)観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm/g)				色 調 (外面)	特 徴
				全長	全幅	全厚	重量		
IV-28	80	SK27	土錘	(4.2)	1.2	1.1	(4.0)	明赤褐色	管状土錘。径3mmの孔。
IV-48	172	P78	〃	(3.8)	1.5	1.3	(5.7)	灰黄色	管状土錘。欠損。中心に径4mmの孔。

12. IV-2区

1. 調査区の概要

各遺構は1から遺構番号を付している。遺物の出土していないピットについては基本的に番号を付していないが、必要に応じて番号を付した。遺構埋土と検出面、地山の色調等が類似しており、遺構検出、遺構掘削が困難であったものが多い。

2. 基本層序(図IV-50)

当調査区は流路が埋没した上に遺構が形成されている。周辺よりも標高が低かったとみられ、複数の流路が重複しており、堆積状況が非常に複雑となっている部分がある。当調査区で検出した古代の自然流路跡(SR1)はその名残をとどめている。

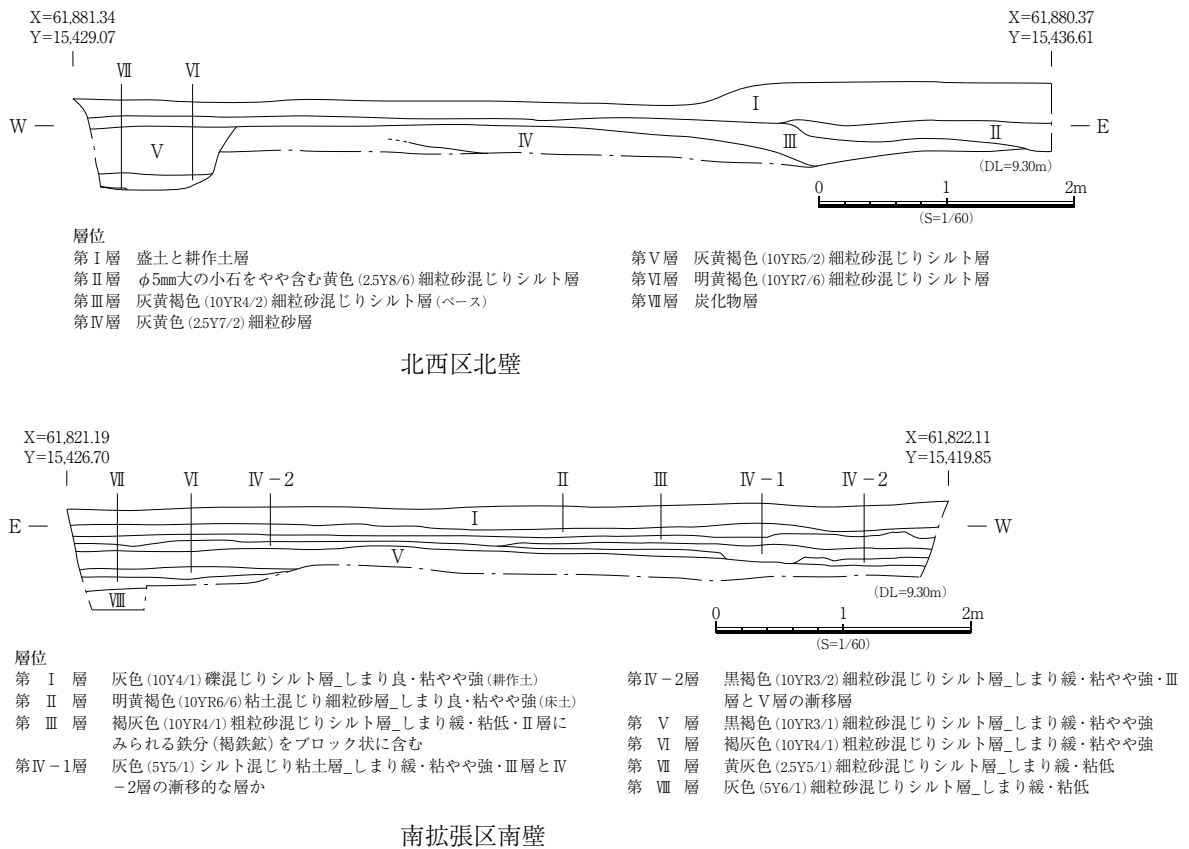
3. 検出遺構と遺物

(1) SK

SK1 (図IV-51)

調査区の北東部で検出した土坑である。調査区外へのびており、形状・規模は不明である。SK3に切られる。床面に炭化物層がひろがる。

図示した出土遺物は、弥生土器の壺・甕である。1は壺である。貼付口縁であるが、貼付部分の器厚



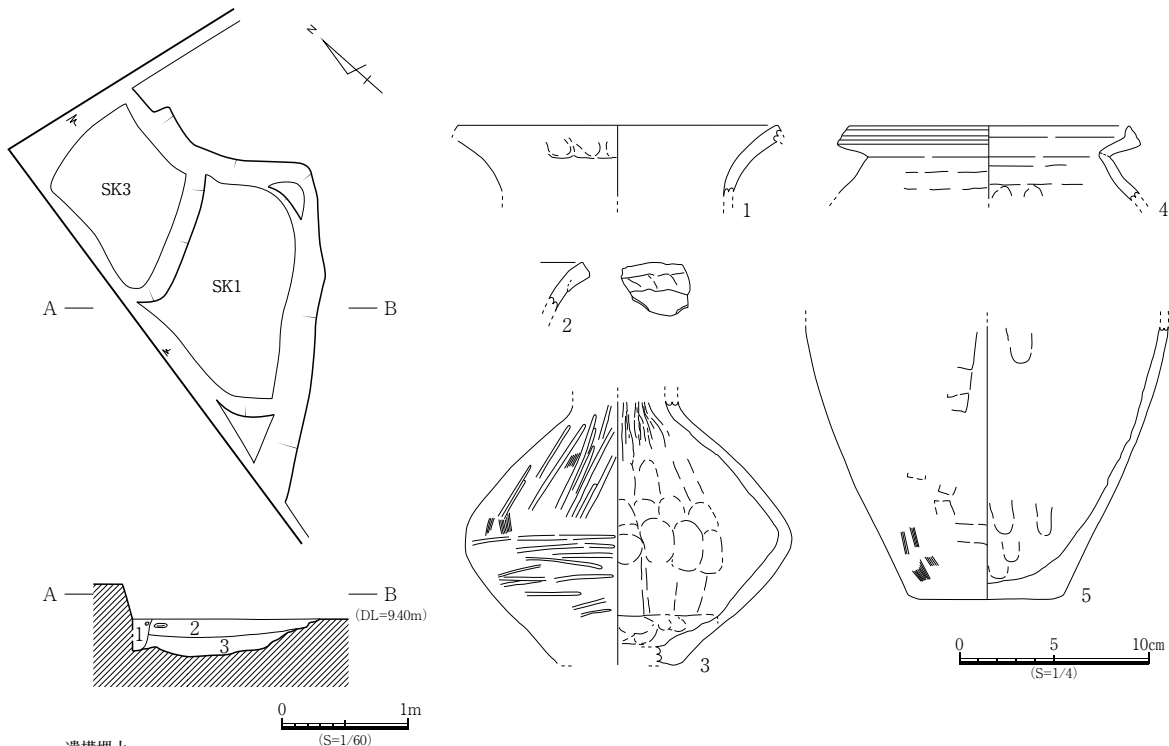
図IV-50 基本層序

はほとんど変わらない。粘土帯外面には指頭圧痕が残存し、口唇部には面取りを施す。2は壺か甕の口縁部片である。貼付口縁であり、粘土帯外面には弱い指頭圧痕が残る。口唇部に面取りを施す。3は壺である。体部は算盤玉形を呈する。外面はミガキ調整であり、最大径部より上は縦方向、下は横方向である。内面の底部付近は粗いハケ調整、その他はナデ調整であり、指頭圧痕が認められる。また、頸部にはしぼり目、底部付近には粘土紐の接合による凹凸が明瞭にみられる。外底面は粘土紐接合部で欠損する。4は甕である。口縁部は上方へ拡張し、2条の凹線文を施す。頸部直下内面に1条のヨコナデ調整を施す。

SK2 (図IV-52)

調査区の北部で検出した土坑である。一部は調査区外であるが、隣接する調査区では検出できなかったことから、長軸2.9m以上、短軸約2.5mの隅丸長方形を呈した土坑と考えられる。検出面からの深さは11cmである。埋土は黄灰色細粒砂混じりシルトと灰白色細粒砂混じりシルトが混じる。床面中央部で不整楕円形の浅い中央ピット(SK2_SK1)を検出した。規模は長軸0.8m以上、短軸0.4m以上、床面からの深さは6cmである。埋土は灰黄褐色細粒砂混じりシルトであり、炭化物層がみられる。

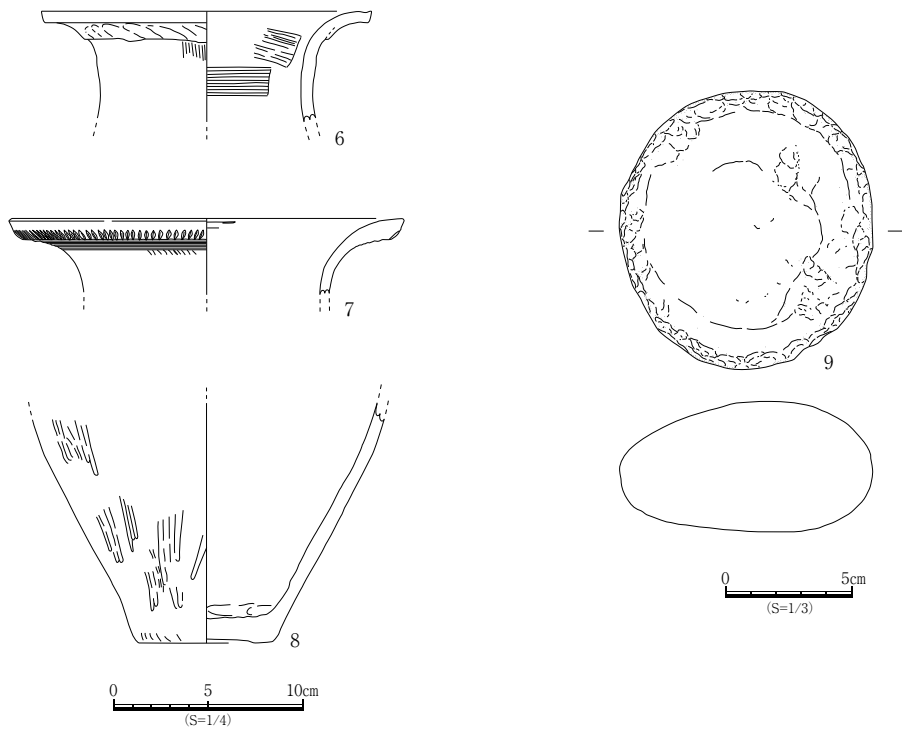
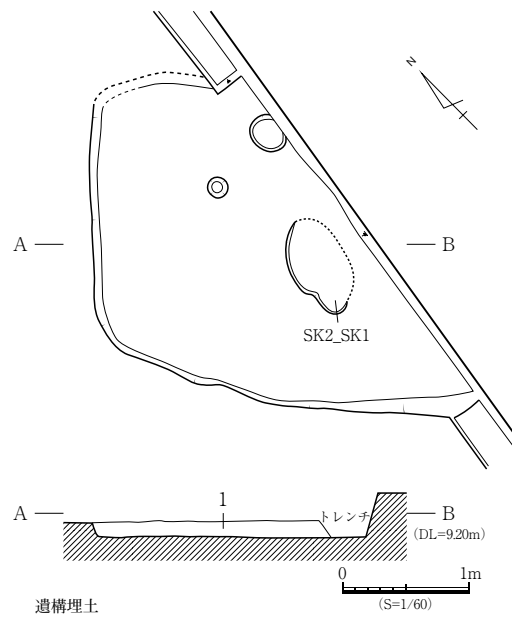
図示した出土遺物は、弥生土器の壺・甕、叩石である。6は壺である。長めの頸部から口縁部は大きく外反する。貼付口縁であり、粘土帯は指押さえ後ヨコナデ調整を加える。口唇部はヨコナデ調整によりわずかに上方につまみ上げる。内外面ともハケ調整である。7は甕である。口縁部は大きく外反させる。口縁部には粘土帯を貼付し、肥厚させる。口唇部は面取りを施し、上端部は尖らせ、下端に



遺構埋土

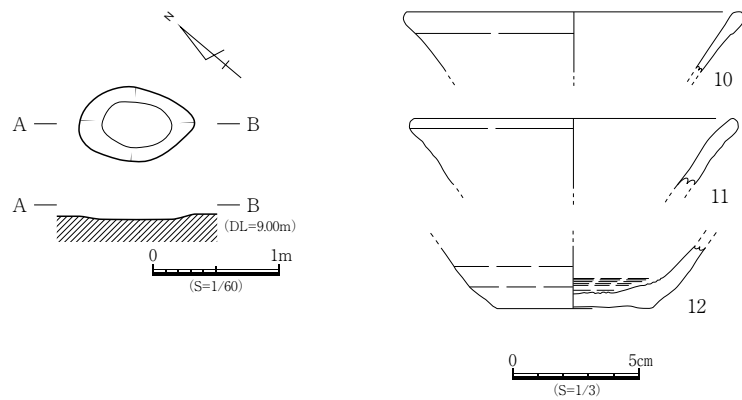
1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト (SK3)
2. 黄灰色 (2.5Y6/1) と淡黄色 (2.5Y8/3) と灰黄褐色 (10YR4/2) の細粒砂混じりシルトが混ざる (SK1)
3. 灰黄色 (2.5Y7/2) シルトブロックを少量含みにぶい黄橙色 (10YR7/4) と褐灰色 (10YR4/1) の細粒砂混じりシルトが層状に混ざる (SK1)

図IV-51 SK1・3平面図・断面図・遺物実測図



図IV-52 SK2平面図・断面図・遺物実測図

は刻目を施す。口縁直下には微隆起突帯，櫛描直線文を巡らせる。さらに爪状の圧痕がみられる。仁淀川流域からの搬入品である。9は砂岩製の叩石である。やや厚みのある円盤を使用する。外周に敲打痕跡が認められる。



図IV-53 SK4平面図・エレベーション図・遺物実測図

SK3 (図IV-51)

調査区の北東部で検出した土坑である。調査区外へのびており，形状・規模は不明である。SK1を切る。床面の一部に炭化物層がひろがる。

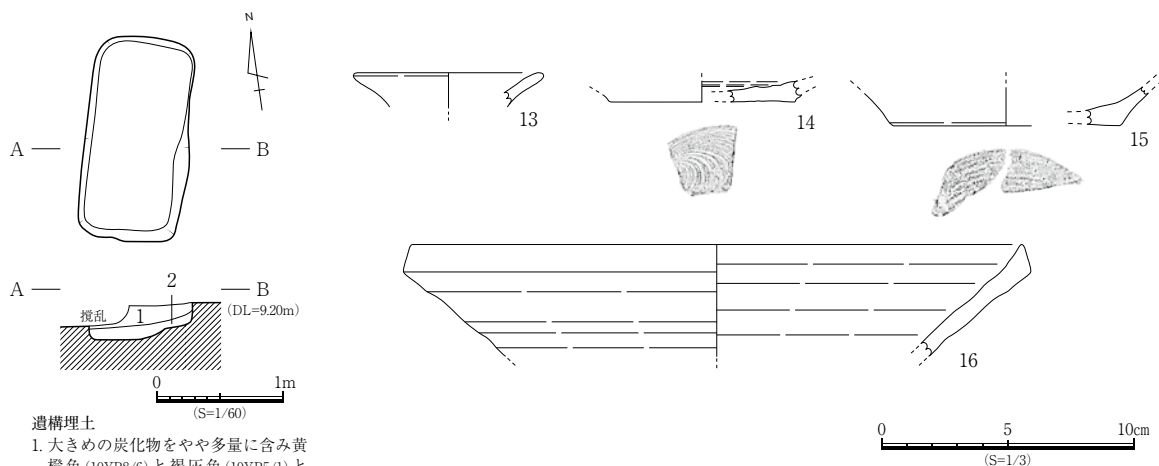
SK4 (図IV-53)

調査区北部で検出した不整形の土坑である。規模は長軸約0.8m，短軸約0.6m，検出面からの深さは2cmである。

図示した出土遺物は，土師器の杯(10～12)である。

SK5 (図IV-54)

調査区中央部で検出した隅丸長方形の土坑である。規模は長軸約1.6m，短軸約0.8m，検出面からの深さは13cmである。埋土は，2層に分けることができる。上層は，にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトと褐灰色細粒砂混じりシルトと黄橙色細粒砂混じりシルトが混じる。下層は灰黄褐色細粒砂混じりシルトと黄橙色細粒砂混じりシルトが混じる。両層とも炭化物粒をやや多く含む。



遺構埋土

1. 大きめの炭化物をやや多量に含み黄褐色(10YR8/6)と褐灰色(10YR5/1)とにぶい黄褐色(10YR4/3)の細粒砂混じりシルトが混ざる
2. 大きめの炭化物をやや多量に含み灰黄褐色(10YR4/2)と黄橙色(10YR8/6)の細粒砂混じりシルトが混ざる

図IV-54 SK5平面図・断面図・遺物実測図

図示した出土遺物は、土師器の小杯(13)・杯(14・15)、須恵器の捏鉢(16)である。14・15の外底面には回転糸切り痕跡が認められる。16は口縁端部を上方へつまみ上げる。内外面とも回転ナデ調整である。

SK6 (図IV-55)

調査区中央部で検出した隅丸長方形の土坑である。規模は長軸約1.1m、短軸約0.6m、検出面からの深さは10cmである。埋土は褐灰色細粒砂混じりシルトに黒褐色細粒砂混じりシルトが混ざる。

SK7 (図IV-56)

調査区中央部で検出した隅丸長方形の土坑である。規模は長軸約1.4m、短軸約1.0m、検出面からの深さは7cmである。埋土は黄灰色細粒砂混じりシルトとにぶい黄褐色細粒砂混じりシルトとにぶい黄橙色細粒砂混じりシルトが混ざる。

図示した出土遺物は土師質土器の小皿(17)と土師質土器の杯(18)である。両方とも、磨耗しており調整等の観察は困難である。

SK8 (図IV-57)

調査区中央部で検出した隅丸長方形の土坑である。規模は長軸約1.1m、短軸約0.9m、検出面からの深さは22cmである。

図示した出土遺物は土師質土器の小皿(19)と瓦器の椀(20)である。19は回転ナデ調整で仕上げられ、外底面には回転糸切り痕跡が認められる。20は二次被熱により炭素の吸着はみられず、にぶい黄橙色を呈する。口縁部はヨコナデ調整を施し、外面には指頭圧痕がみられる。内面には暗文を施す。

SK9 (図IV-58)

調査区南部で検出した隅丸長方形の土坑である。P33に切られる。規模は長軸0.9m以上、短軸約0.8m、検出面からの深さは16cmである。埋土は黄灰色細粒砂混じりシルトである。

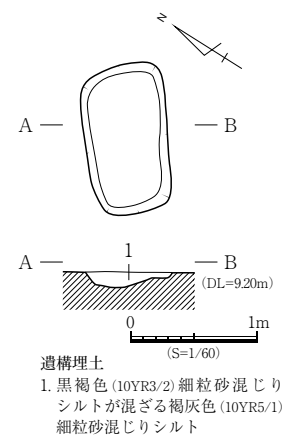
SK10 (図IV-59)

調査区南西部で検出した不整形の土坑である。西は調査区外へのびる。長軸1.7m、短軸1.3m以上である。検出面からの深さは45cmである。埋土は灰色粗粒砂混じりシルトである。

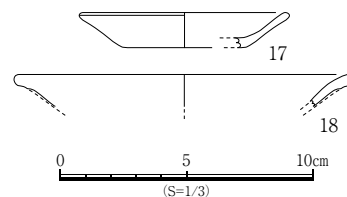
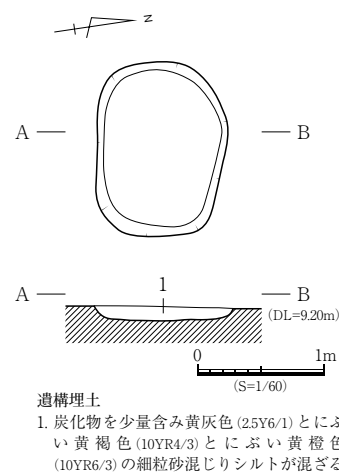
(2)SD

SD1 (図IV-59)

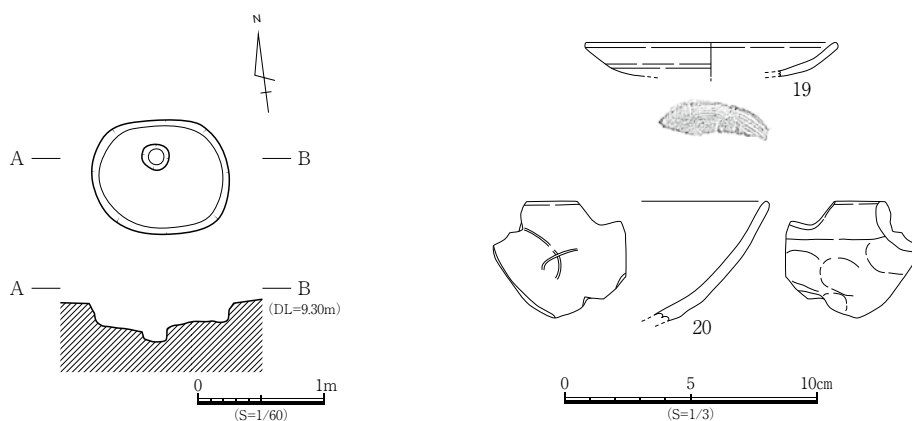
調査区北部で検出した溝跡である。北西方向から南東



図IV-55 SK6平面図・断面図



図IV-56 SK7平面図・断面図・遺物実測図



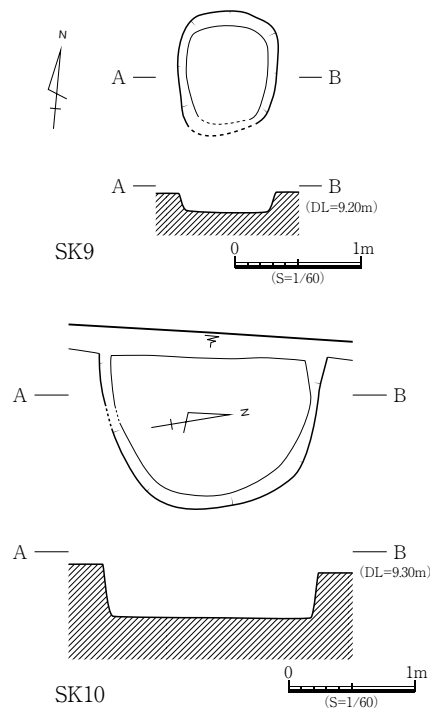
図IV-57 SK8平面図・エレベーション図・遺物実測図

方向へ流れていたと考えられる。

図示した出土遺物は弥生土器の壺・甕である。21は甕である。口縁部は「く」の字状を呈する。口縁端部に強いヨコナデ調整を施し、上端部をつまみ上げる。口唇部は凹面状を呈し、下端に刻目を施す。22は甕である。口縁部は緩やかに外反する。貼付口縁である。粘土帯を指押え後ヨコナデ調整を施しており、粘土帯外面には弱い指頭圧痕がみられる。口唇部には面取りを施す。23は壺である。頸部は短く直立し、上胴部はなで肩である。頸部と上胴部の境に櫛描直線文を2単位、刻目を施す。外面はミガキ調整か。内面はナデ調整であり、指頭圧痕が明瞭に認められる。24は甕である。口縁部は緩やかに外反させ、口唇部は面取りにより凹面状を呈する。頸部外面にはタテハケ調整による工具静止痕跡がみられる。内面はナデ調整である。25は甕である。上胴部に最大径を持つ。口縁部は「く」の字状に外反する。上下に拡張させ、4条の凹線文を巡らせる。外面はミガキ調整である。内面頸部直下にヨコナデ調整を施す。上胴部はナデ調整であり、指頭圧痕が認められる。上胴部以下にヘラケズリ調整を施す。外面の最大径部以下に煤が付着する。26は底部である。底面形は楕円形を呈する。外底面には指頭圧痕が認められ、やや上げ底状となる。内外面ともナデ調整であり、外面はミガキ調整の可能性はある。27は底部である。平底であり、側面は直立する。外面はヘラケズリ調整、内面はナデ調整である。内底面の調整は不十分である。

SD2

調査区南部で検出した溝跡である。幅約0.2m、検出面から深さは2cmである。検出長は約2.0mである。埋土は灰黄褐色細粒砂混じりシルトで



図IV-58 SK9・10平面図・エレベーション図

ある。

SD3 (図IV-60)

調査区南西部で検出した溝跡である。西は調査区外にのびる。幅約0.5m, 検出面から深さは13cmである。検出長は約3.6mである。埋土は灰黄褐色細粒砂混じりシルトである。

SD4 (図IV-60)

調査区南西部で検出した溝跡である。両端は調査区外にのびる。幅約0.5m, 検出面から深さは15cmである。検出長は約3.9mである。埋土は灰黄褐色細粒砂混じりシルトである。

SD5

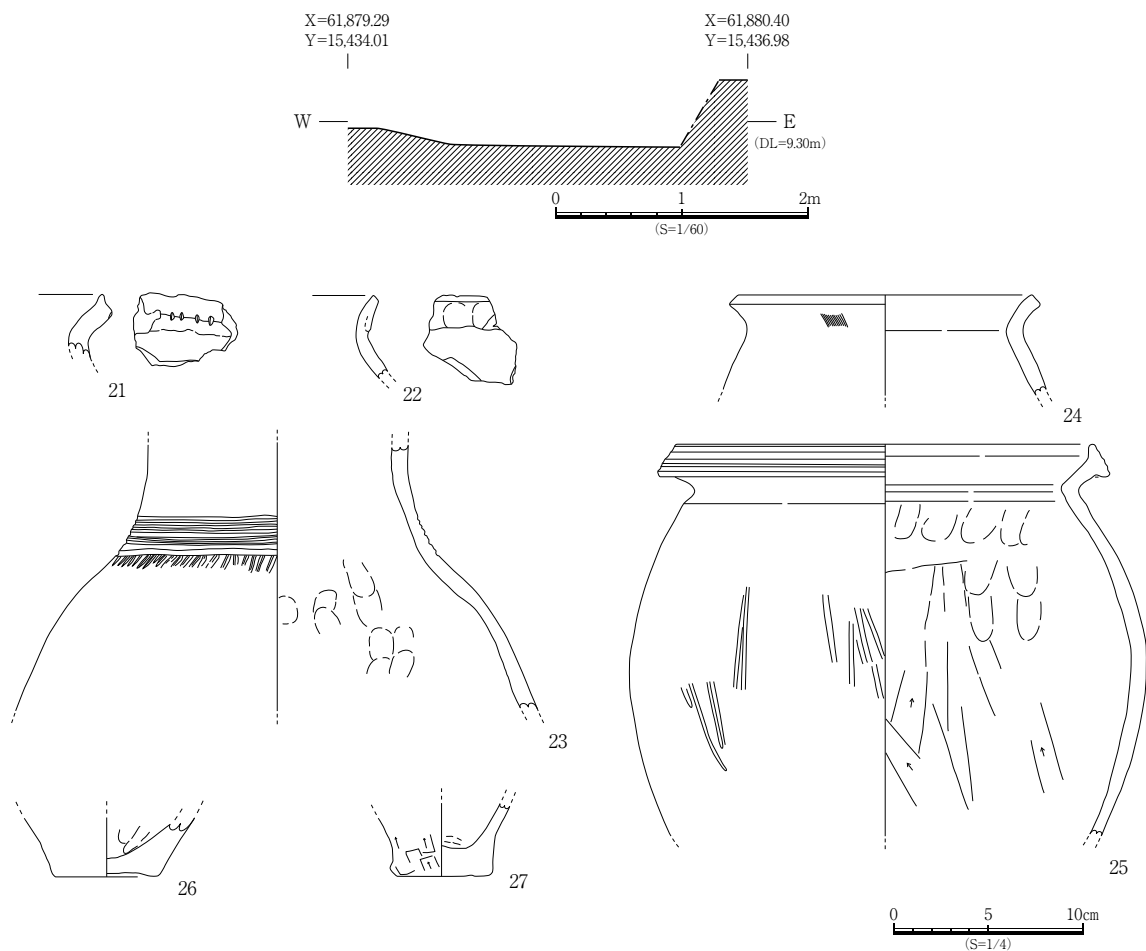
調査区南西部で検出した溝跡である。「L」字状に屈曲する。SRに切られる。幅約0.2m, 検出面からの深さは3cmである。検出長は約3.8mである。埋土は灰黄褐色細粒砂混じりシルトである。

SD6

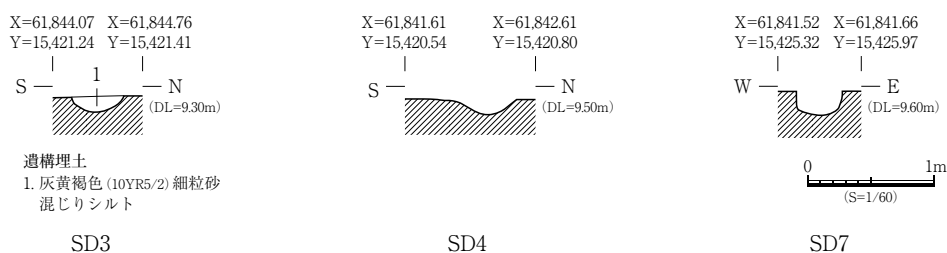
調査区南西部で検出した溝跡である。幅約0.2m, 検出面からの深さは5cmである。検出長は約2.5mである。埋土は、にぶい黄褐色細粒砂混じりシルトである。

SD7 (図IV-60)

調査区南西部で検出した溝跡である。北はSR1に切られ, 南は調査区外へのびる。幅約0.4m, 検出



図IV-59 SD1エレベーション図・遺物実測図



図IV-60 SD3断面図, SD4・7エレベーション図

面からの深さは15cmである。検出長は約5.3mである。埋土は、にぶい黄橙色細粒砂混じりシルト、灰黄褐色細粒砂混じりシルトである。

SD8

調査区南西部で検出した溝跡である。SR1に並行する。両端は調査区外へのびる。幅約0.5m、検出面からの深さは6cmである。検出長は約10.5mである。埋土は褐灰色シルト混じり細粒砂、にぶい黄褐色細粒砂混じりシルト、灰黄褐色細粒砂混じりシルト、にぶい褐色中粒砂混じりシルト、灰色シルト混じり中粒砂である。

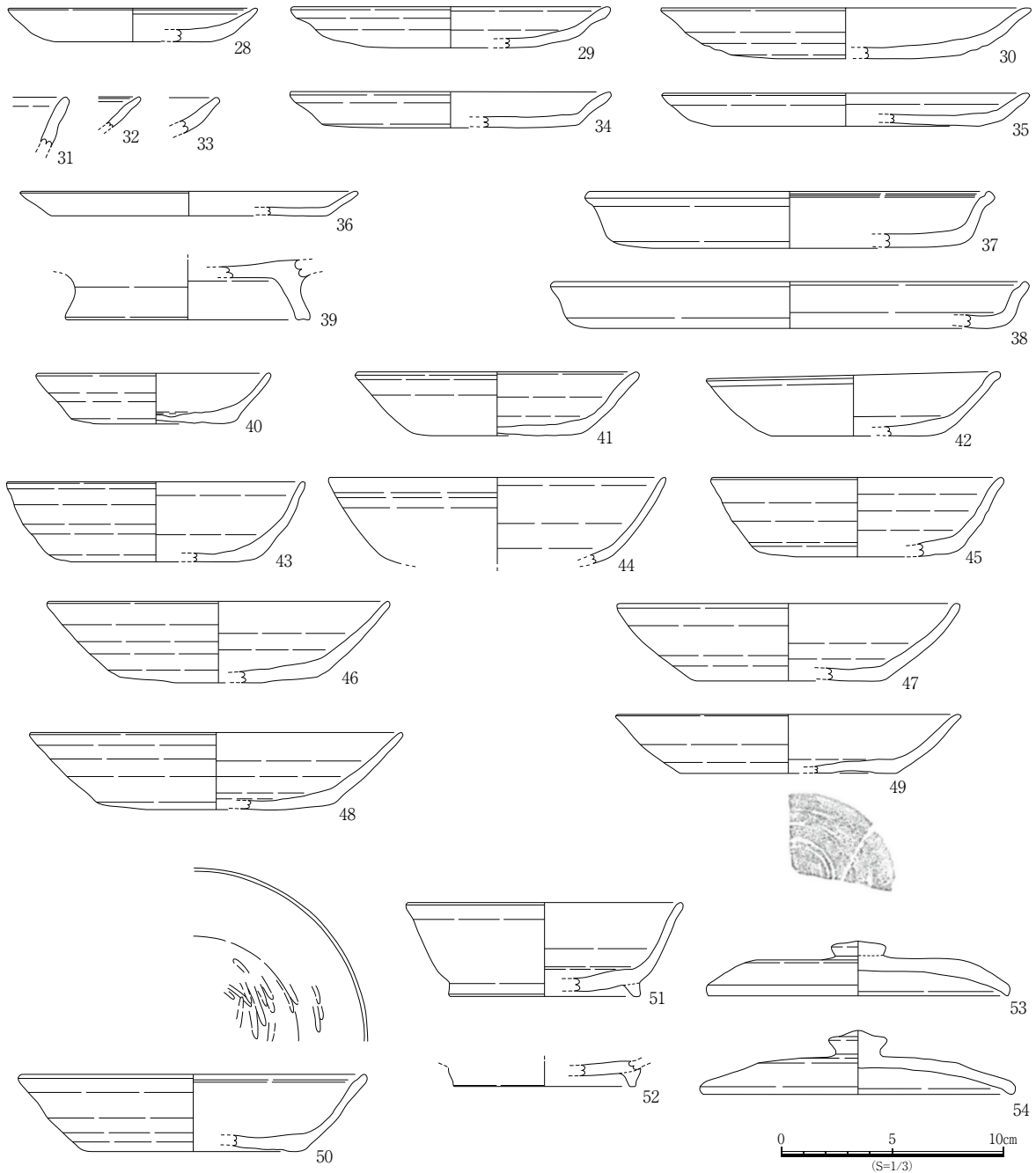
(3)SR

SR1 (図IV-61～69)

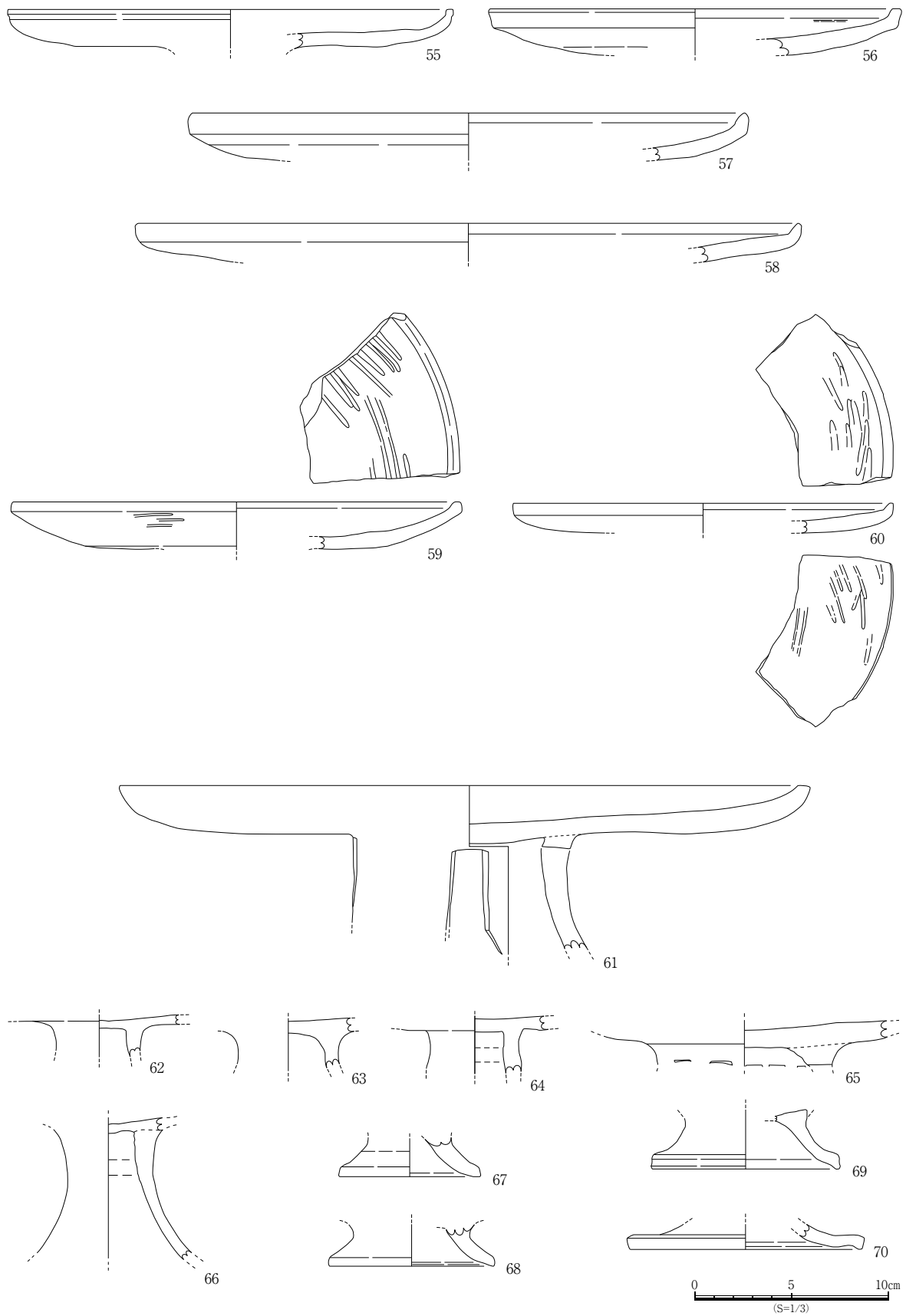
調査区南東部で検出した自然流路跡である。幅約4.5m、検出長は約16mである。IV-3区のSR1に接続する。

図示した出土遺物は土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、土師器の甕、製塩土器、土錘、台石、砥石である。28は土師器の折り曲げ口縁の皿である。回転ナデ調整である。赤彩を施す。29は土師器の皿である。口縁部は屈曲してひろがる。外底面はヘラ切り後、ナデ調整を施す。30は土師器の皿である。内面は磨耗のため調整は不明瞭であるが、外面は回転ナデ調整である。外底面はヘラ切り後、ナデ調整を施す。31は土師器の皿である。外面に強いヨコナデを施す。回転ナデ調整であり、赤彩を施す。32は土師器の折り曲げ口縁の皿である。外面は横方向のミガキ調整、内面もミガキか。赤彩を施す。33は土師器の皿である。口縁部内面はわずかに凹む。内外面ともミガキか。赤彩を施す。34は土師器の皿である。磨耗のため、調整不明瞭である。ヘラ切り後、ナデ調整を施す。35は土師器の皿である。磨耗のため、調整の観察は困難である。内外面ともミガキ調整か。ヘラ切り後、ナデ調整である。口縁部にはタールが付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。37は折り曲げ口縁の土師器の皿である。内外面ともミガキ調整である。39は高台付き皿である。高台は「ハ」の字状を呈する。端部はわずかに凹状を呈する。磨耗のため、調整は不明瞭である。内面はミガキ調整か。赤彩を施す。40は土師器の杯である。内外面とも回転ナデ調整である。ヘラ切り後ナデ調整を施す。41は折り曲げ口縁の土師器の皿である。磨耗のため、調整等の観察は困難である。45は土師器の杯である。体部は外上方に直線的にのびる。外面には回転ナデ調整による凹凸が認められる。47は土師器の杯である。体部は内湾気味に立ち上がる。磨耗のため調整等は不明瞭であるが、回転ナデ調整と考えられる。50は土師器の杯である。折り曲げ口縁である。外面は回転ナデ調整であり、一部はミガキ状を呈する。内面はミガキ調整である。外底面にはヘラ切り痕跡がみられる。51は高台付き杯である。口

縁端部をわずかに外反させる。断面逆台形の高台を「ハ」の字状に付ける。磨耗のため、調整等の観察は困難である。53は土師器の蓋である。平らな天井部から口縁部はひろがる。口縁端部はわずかに下がり、内面には沈線が巡る。天井部に扁平な擬宝珠形をつまみを付す。磨耗のため調整等は不明瞭である。天井部外面はケズリ、口縁部は回転ナデ調整である。被熱により変色する。55は土師器の高杯である。口縁部は短く立ち上がり、端部は丸みを持った平坦面を成す。調整等は磨耗と付着物で観察は困難である。56は土師器の高杯である。口縁部は杯部から短く立ち上がる。屈曲部には稜が立つ。

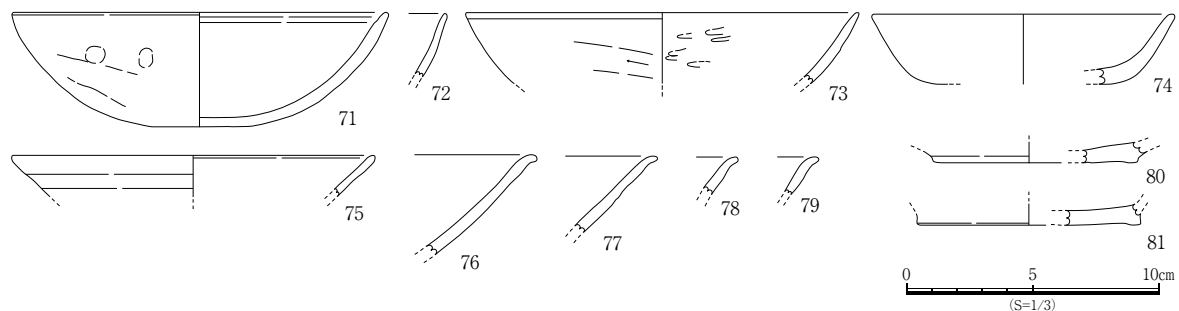


図IV-61 SR1遺物実測図1



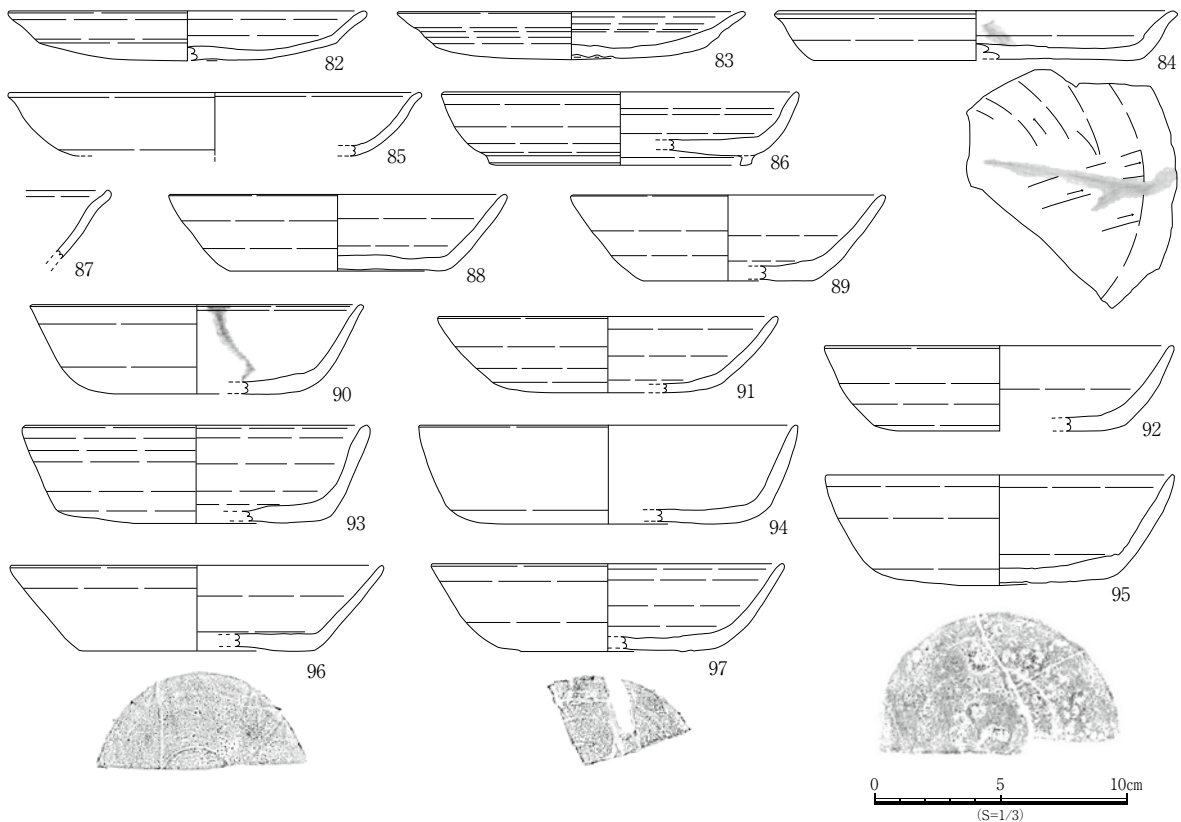
图IV-62 SR1遺物実測図2

口縁端部には面取りを施す。内面はミガキ調整である。赤彩を施す。器壁は厚い。破断面は擬口縁状を呈する。59は土師器の高杯である。口縁部は杯底部から緩やかに立ち上がり、端部は短く曲げる。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともミガキ調整を施す。赤色塗彩である。60は土師器の高杯である。口縁部は杯部から短く曲がる。内外面ともミガキ調整である。赤彩である。61は土師器の盤である。杯部はほぼ水平であり、口縁部は短く立ち上がる。口縁端部には面取りを施す。脚部は筒状を呈し、4方向に長方形の透孔を開ける。付着物が多く、調整等の観察は困難であるが、杯部外面には回転ケズリ調整を施す。65は土師器の盤である。脚部には10～11個の方形透孔を穿つ。赤色塗彩である。71は内黒の黒色土器の椀である。口縁端部はヨコナデ調整によりシャープに仕上げる。内面には横方向のハケメが認められる。外面はケズリ調整であり、上半部に指頭圧痕がみられる。内面はミガキ調整である。72は内黒の黒色土器の椀である。口縁端部はヨコナデ調整によりシャープに仕上げる。口縁部外面はハケメ状にみえる。内面はミガキ調整である。74は黒色土器の杯である。平らな底部から口縁部は外上方へのび、端部は丸くおさめる。内外面とも細かなミガキ調整を密に施し、粗いハケメ状を呈する。75～81は緑釉陶器である。淡緑色の釉薬を全面に施釉する。釉薬は総じて剥落しているのが多く、75は点的にしか残存していない。75の口縁部は直線的にのび、丸くおさめる。76～79は口縁端部を外反させる。80・81は円盤状高台であり、糸切り痕跡が認められる。76にはミガキ調整が認められる。82～86は須恵器の皿である。82・83は腰部の回転ナデ調整により口縁部をひろげる。84は平らな底部から口縁部が立ち上がる。底部と口縁部の境は比較的明瞭である。内外面に火襷が認められる。85は内湾気味の口縁部を持ち、端部を外反させる。搬入品の可能性がある。86は高台付きの皿である。断面方形の低く小さい高台を付す。内外面とも回転ナデ調整である。ヘラ切り後、ナデ調整を施す。器壁は厚い。87～97は杯である。ほとんどのものは焼成不良で磨耗しており、調整等の観察が困難である。87は口縁端部を屈曲させる。外面に自然釉が付着する。88・96は口縁部が平らな底部から直線的に外上方へのびる。90・93～95は口縁部が内湾気味に立ち上がり、深めの器形である。92・97は底部から口縁部が丸みを持って立ち上がる。98～119は高台付きの杯である。99～102は口縁部が外上方へのび、口縁端部を尖らせる。口径約13cm、器高約4cmである。器形的にも法量的にも当流路出土の主要なものである。103・105・111・115は焼成不良である。高台の付かない杯に比べると焼成不良の割合は少なく、供給先の違いを反映している可能性がある。103・116・117は口縁部に強いヨコナデ調整を施し、端部を屈曲させる。107の口縁部は外上方へ大きくひろく。108は口縁端部を外反させる。高台については、98・105・114は外縁より少し内側に貼付け、それら



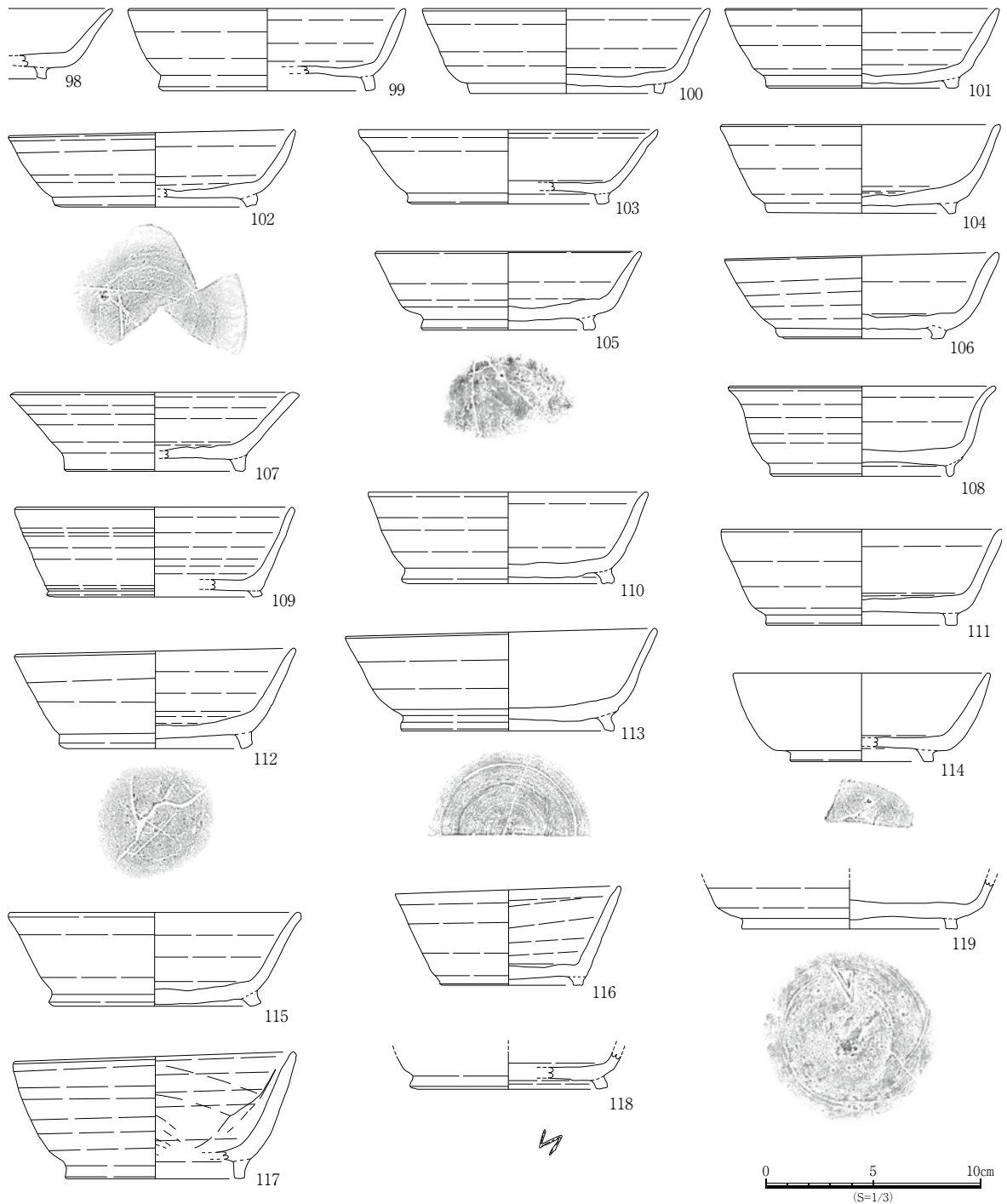
図IV-63 SR1遺物実測図3

以外は外縁付近に貼付ける。高台の形態では断面逆台形を呈し外下端部を突出させるもの(98・105・114), 貼付け位置とも相関しており古い様相である。断面方形で端部が凹状を呈するもの(99・101・102・106・110・112・113・118), 断面方形で端部は平坦面のもの(100・107・109・116・117・119), 幅が狭く端部が丸いもの(108)がある。102・112・114・118・119の外底面にはヘラ記号が認められる。102・112は「×」, 114は線状, 118は「Z」の字状, 119は「レ」の字状に施す。105・113の外底面には爪状圧痕が認められる。120～133は須恵器の蓋である。扁平な擬宝珠形つまみが付された蓋は口径約14cmのものが多く, 上述した高台付きの杯に組合わさるものと推測される。天井部は平らなものが多く, 120・124は若干丸みを持つ。125は平らな天井部から口縁部は緩やかに屈曲する。断面はセピア色を呈し, 焼成は良好である。130～133は輪状つまみを付す。つまみ外端部を外側へのつまみ出しが強いもの(132・133)とつまみ出しが弱いもの(130・131)がある。130の天井部外面にはケズリ痕跡が認められる。134は高杯の脚部である。低脚であり, 端部を屈曲させる。136～143は須恵器の高台付き長頸壺である。136の頸部は長くのび, 口縁部付近でややふくらむ。肩部は張り, 体部は直線的にすぼまる。底端部には断面方形の高台が「ハ」の字状に付く。頸部には1条の凹線を巡らせる。内外面とも回転ナデ調整である。138は肩部径に比べ頸部径が小さい。頸部に2条の凹線, 肩部に1条の凹線を巡らせる。142の高台端部は強いヨコナデ調整により凹状を呈し, 両端は拡張する。144は小型の広口壺である。口縁部は水平近くまで外反し, 口唇部には面取りを施す。内外面とも回転ナデ調整である。145は無頸壺である。口縁部は短く直立し口唇部は面取りする。肩部は張る。内外面と

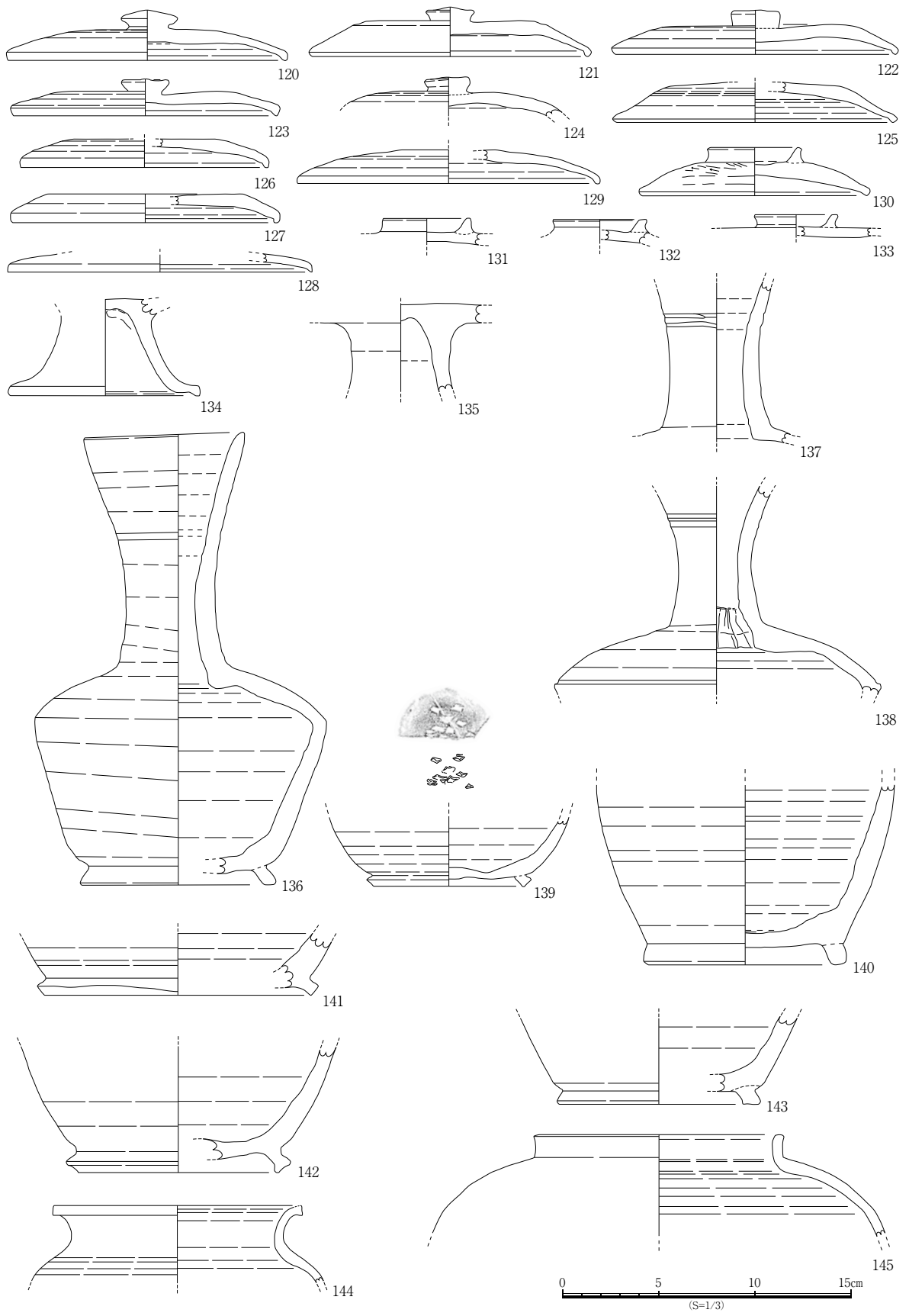


図IV-64 SR1遺物実測図4

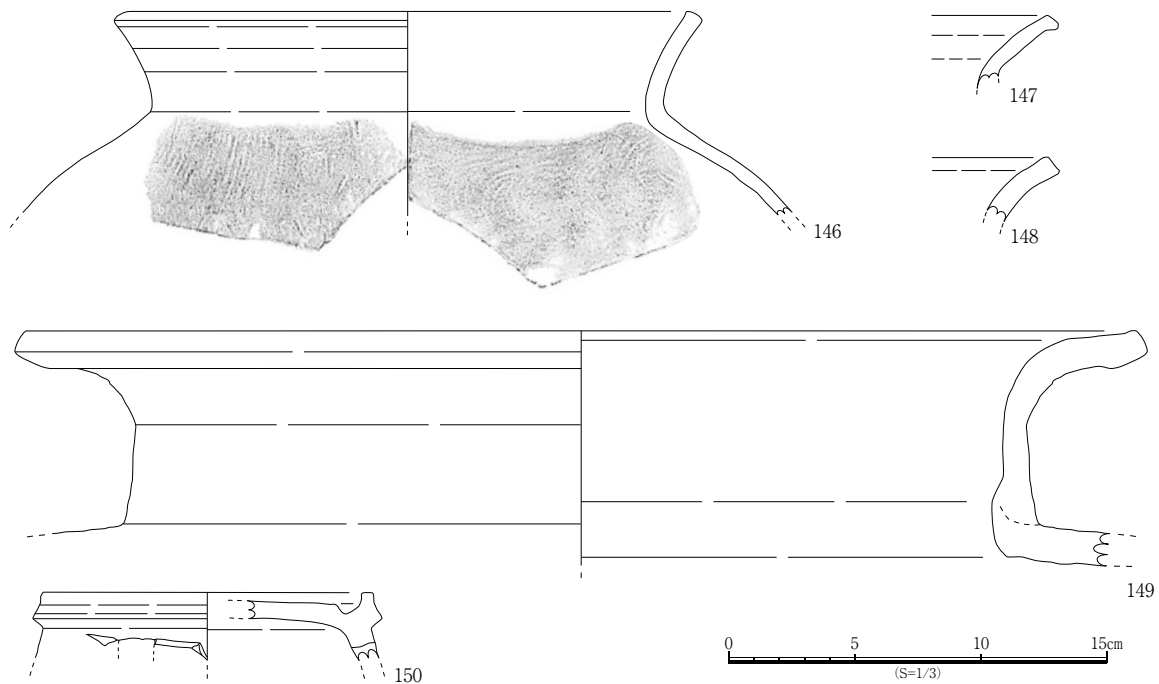
も回転ナデ調整を施す。146は須恵器の甕である。口縁部は直線的に外反し、口唇部には面取りを施す。口縁部は回転ナデ調整である。体部外面には平行叩き目が密にみられ、内面には当て具痕跡がみられる。149は甕である。直立した頸部から口縁部は大きく外反する。口縁部はわずかに屈曲し、口唇部には面取りを施す。口縁部は内外面とも回転ナデ調整である。体部外面には叩き目、内面には当て具痕跡が認められる。150は須恵器の円面硯である。陸部の中央は使用により平滑となる。海部に



図IV-65 SR1遺物実測図5



图IV-66 SR1遺物実測図6



図IV-67 SR1遺物実測図7

近い部分は使用頻度が低い。脚部には長方形の透かしが穿たれている。151～156は土師器の甕である。151の口頸部は弱い「く」の字状を呈する。口唇部は面取りする。口縁部外面はナデ調整、内面はヨコハケ調整、体部外面はタテハケ調整、内面はナデ調整である。搬入品である。152の口縁部は緩やかに外反する。口唇部には面取りを施し、端部をつまみ上げる。口縁部外面はナデ調整、内面は粗いヨコハケ調整である。体部外面は粗いタテハケ調整、内面はナデ調整である。153の口縁部は外反する。口唇部は面取りを施し、端部をつまみ上げる。口縁部外面はナデ調整、内面はヨコハケ調整である。体部外面はタテハケ調整、内面はナデ調整である。頸部内外面に1条のヨコナデ調整を施す。154の口縁部を外反させる。口唇部は強いヨコナデ調整により凹状を呈し、端部をつまみ上げる。口縁部外面はナデ調整、内面は粗いヨコハケ調整である。155の口縁部は外反する。口唇部には強いヨコナデ調整を施し、凹状を呈し端部をつまみ上げる。口縁部外面はヨコナデ調整、内面は粗いヨコハケ調整である。体部外面はタテハケ調整、内面はナデ調整である。156の口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸みを帯びた方形である。内外面ともヨコナデ調整であり、外面にはハケメ状に見えるものがある。158～163は製塩土器である。口縁部はほとんど曲げないものから折り曲げるものまでである。外面調整はナデ調整である。指頭圧痕がみられるものが多い。内面は布目が残るもの、しぼり目がみられるもの、ナデ調整のものがある。胎土についても複数の種類が認められる。166は砂岩製の台石と考えられる。中央付近は敲打により凹む。裏面にも敲打による凹みがみられるが、表面のものに比べ小さい。167は砂岩製の砥石である。欠損しており形態はいびつである。4面を使用する。

(4)P (ピット)

P1 (図IV-70)

調査区北部に位置する。長軸約0.3m、短軸約0.3mの楕円形を呈する。検出面からの深さは26cmで

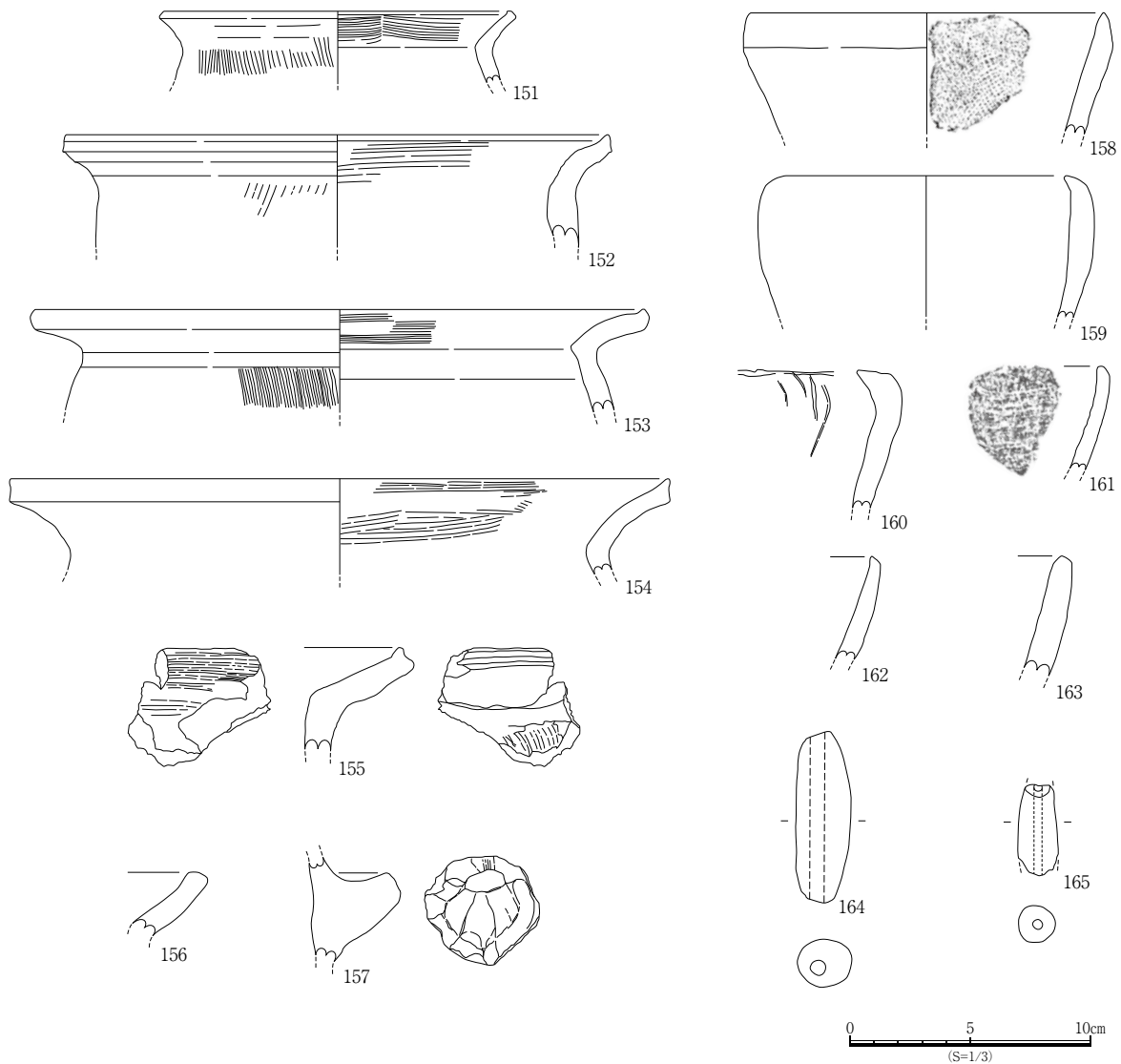
あり、埋土は黒褐色細砂混じりシルトと浅黄色細砂混じりシルトが混ざる。図示した出土遺物は土師質土器の杯(168)である。口縁部はやや肥厚し大きくひらく。回転ナデ調整であり、内底面にはロクロ目が残る。切り離しは回転糸切りによる。口縁端部にはタールが付着しており、灯明皿として使用されていたと考えられる。

P16(図IV-70)

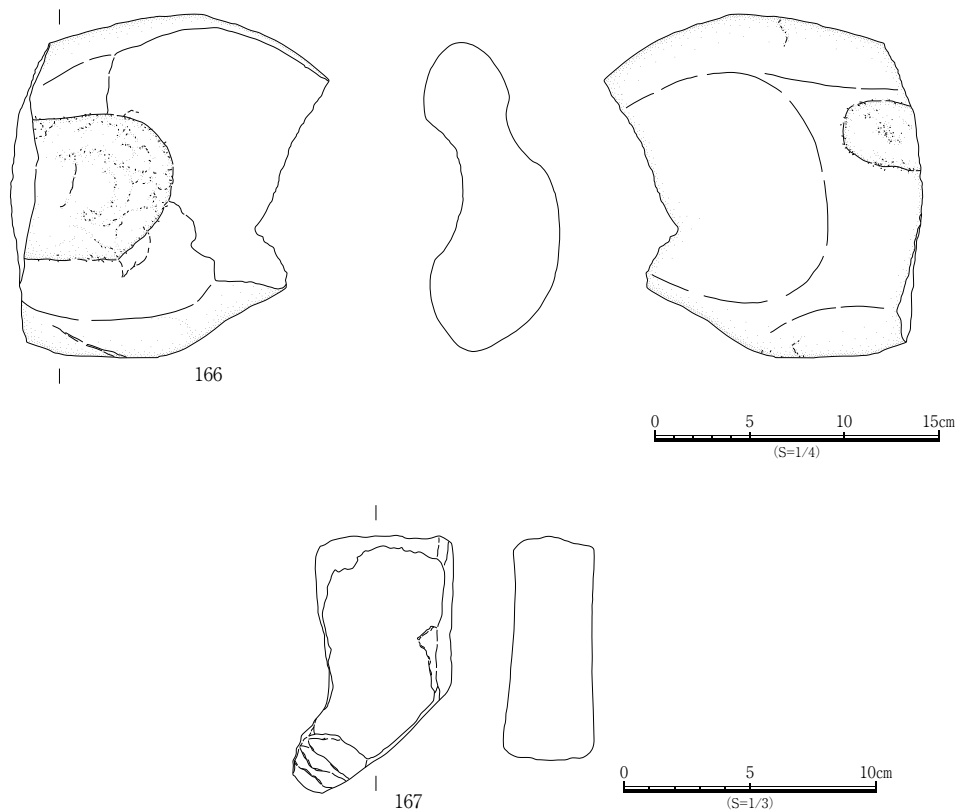
調査区中央部に位置する。他のピットに切られる。直径約0.3mの円形を呈し、検出面からの深さは32cmであり、埋土は褐灰色細砂混じりシルトである。図示した出土遺物は土師質土器の杯(169)である。口縁部はやや肥厚し大きくひらく。回転ナデ調整である。切り離しは回転糸切りによる。

P19(図IV-70)

調査区中央部に位置する。直径約0.4mの円形を呈する。検出面からの深さは30cmであり、埋土は暗灰褐色細砂混じりシルトである。柱痕跡が認められた。図示した出土遺物は土師質土器の杯(170)である。外底面には回転糸切り痕跡、スノコ状の圧痕が認められる。



図IV-68 SR1遺物実測図8



図IV-69 SR1遺物実測図9

P22 (図IV-70)

調査区中央部に位置する。直径約0.3mの円形を呈する。検出面からの深さは26cmであり、埋土は暗灰褐色細砂混じりシルトである。柱痕跡が認められた。図示した出土遺物は土師質土器の小皿(171)である。ロクロ成形である。外底面には回転糸切り痕跡が認められる。被熱により変色し、煤が付着する。

P24 (図IV-70)

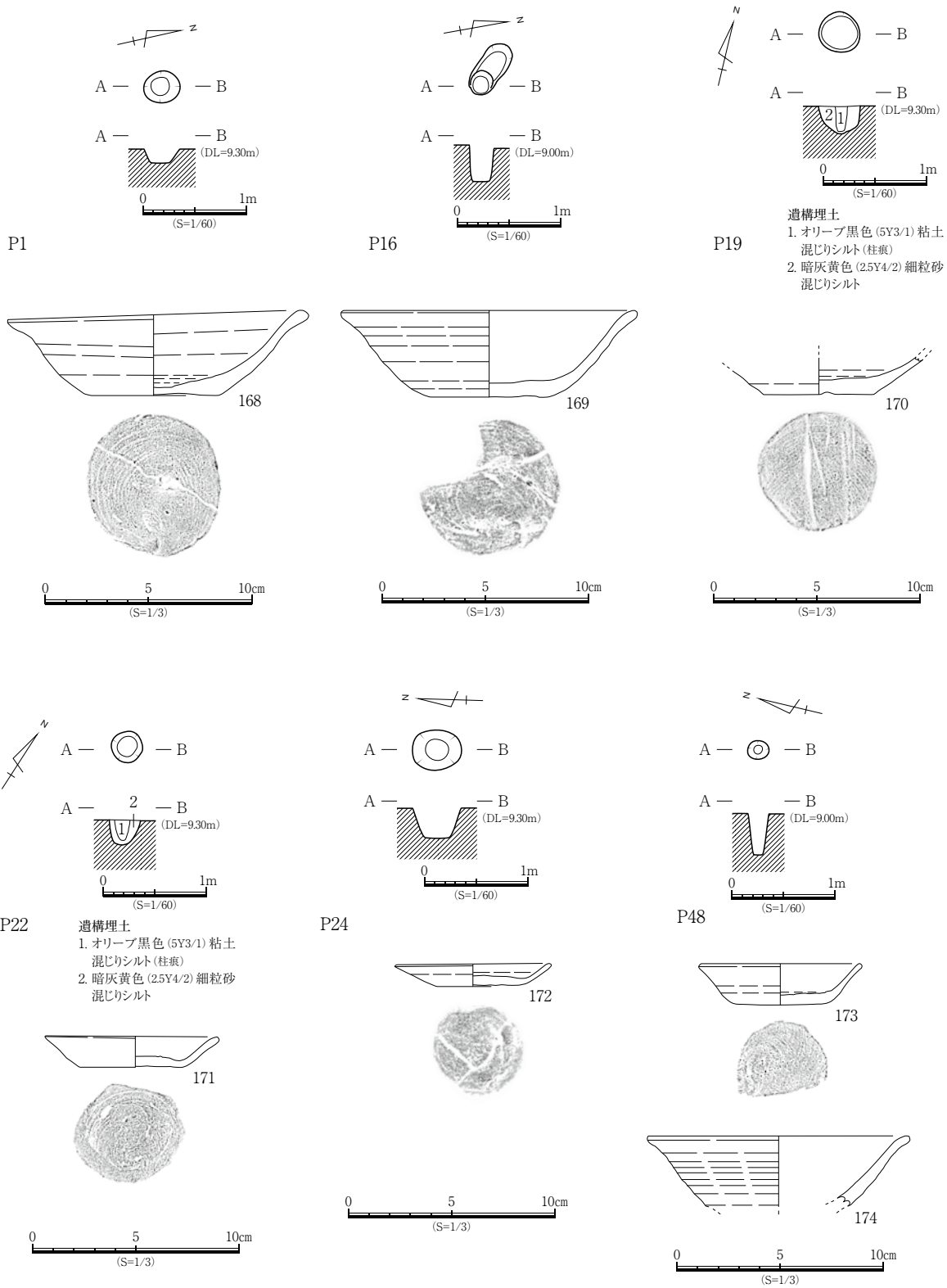
調査区中央部に位置する。長軸約0.5m、短軸約0.4mの楕円形を呈する。検出面からの深さは28cmであり、埋土は黒褐色細砂混じりシルトである。図示した出土遺物は土師質土器の小皿(172)である。ロクロ成形である。外底面には回転糸切り痕跡が認められる。

P48 (図IV-70)

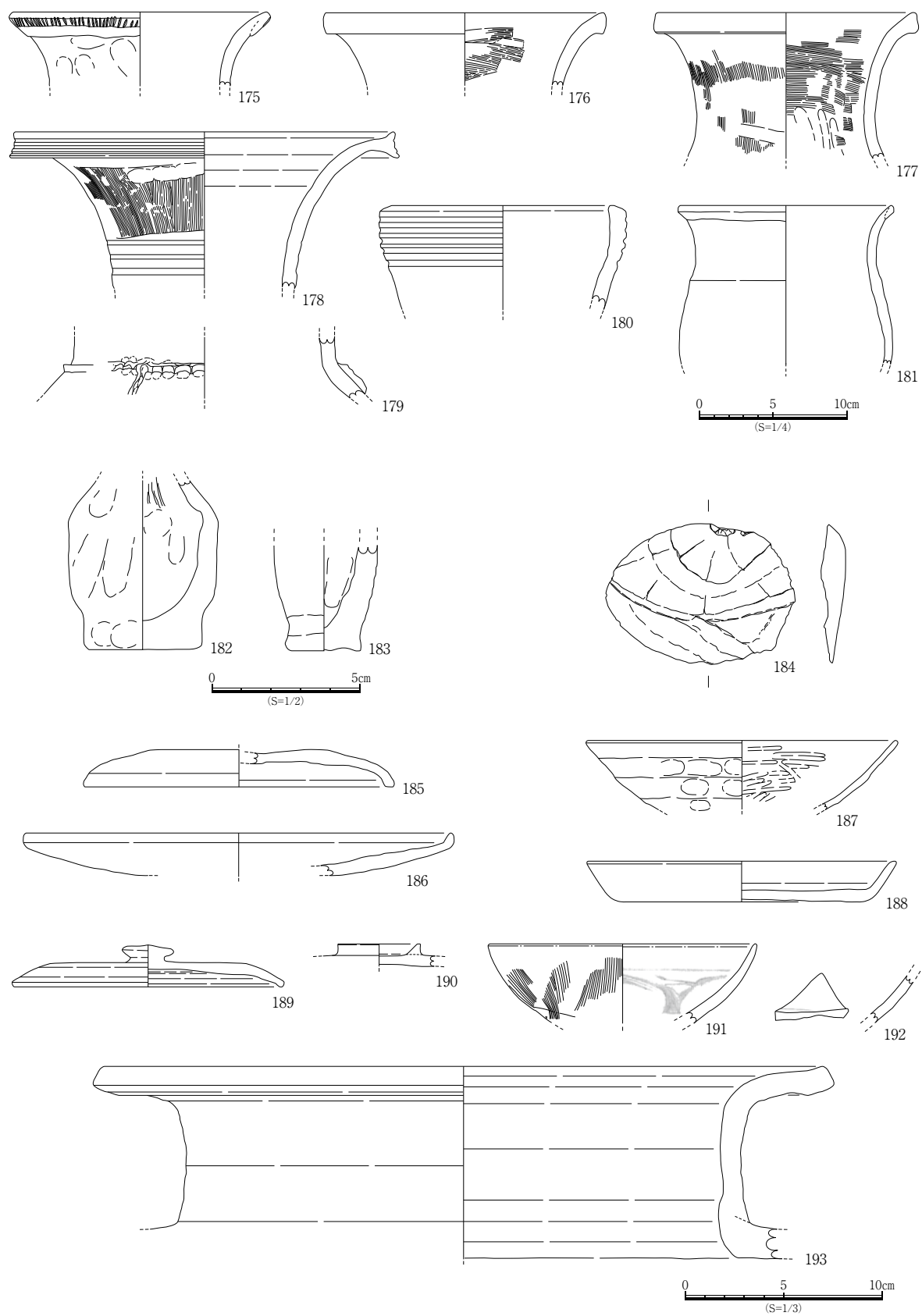
調査区北部に位置する。直径約0.2mの円形を呈する。検出面からの深さは29cmであり、埋土は褐灰色細砂混じりシルトである。図示した出土遺物は土師質土器の小杯(173)、土師質土器の杯(174)である。173は磨耗のため調整等は不明瞭であるが、ロクロ成形であり、外底面に回転糸切り痕跡が認められる。また、口縁端部にタールが付着していた可能性がある。

(5)遺構外出土遺物(図IV-71)

図示した出土遺物(175~193)は弥生土器の壺・甕・ミニチュア土器、打製石包丁、土師器の蓋・高杯、黒色土器の椀、須恵器の皿・蓋・甕、青磁の碗、白磁の碗である。



図IV-70 ピット平面図・断面図・エレベーション図・遺物実測図



图IV-71 遺構外出土遺物実測図

土坑計測表 (IV-2区)

遺構名	平面形	規模			床面標高 (m)	主軸方向 (NはGN)	時期
		長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)			
SK1	不整形	(2.6)	(1.3)	30	8.9	N - 58° - E	弥生時代中期末
SK2	隅丸長方形	(2.8)	(2.7)	15	9.0	N - 41° - W	〃
SK2 P1	不整形	(0.7)	(0.3)	6	8.9	N - 17° - E	〃
SK3	〃	(1.4)	(1.3)	(25)	(8.9)	N - 6° - E	〃
SK4	〃	0.9	0.5	4	8.8	N - 37° - W	中世前期
SK5	隅丸長方形	1.6	0.8	26	8.6	N - 14° - E	13世紀
SK6	〃	1.1	0.6	11	8.8	N - 50° - E	時期不明
SK7	〃	1.3	1.0	10	8.7	N - 73° - W	13世紀
SK8	〃	1.1	0.9	22	8.9	N - 85° - W	〃
SK9	〃	(0.9)	0.8	16	8.9	N - 1° - W	時期不明
SK10	不整形	1.8	(1.2)	45	8.7	N - 11° - E	〃

出土遺物(土器)観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量(cm)			色調(外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-51	1	SK1	弥生壺	16.9	(3.8)		明赤褐色	貼付口縁。粘土帯外面に指頭圧痕有り。口唇部, 面取り。磨耗, 調整不明瞭。
〃	2	SK3	〃		(2.6)		橙色	貼付口縁。粘土帯外面に弱い指頭圧痕有り。口唇部, 面取り。磨耗, 調整不明瞭。
〃	3	SK1・3	〃		(14.0)		にぶい黄橙色	算盤玉形の体部。外面, ミガキ。内面, ナデ・ハケ。
〃	4	〃	弥生甕	14.7	(3.9)		灰白色	口縁部, 上方へ拡張。2条の凹線文。内外面, ヨコナデ。
〃	5	〃	弥生底部		(14.5)	8.2	橙色	平底。磨耗, 調整不明瞭。外面, ハケメ有り。
IV-52	6	SK2	弥生壺	17.4	(5.9)		にぶい黄橙色	貼付口縁。粘土帯外面, 指押さえ後ヨコナデ。口唇部, 面取り。内外面, ハケ。
〃	7	〃	弥生甕	20.9	(4.0)		黒褐色	貼付口縁。口唇部, 面取り。下端, 刻目。微隆起突帯, 櫛描直線文。仁淀川流域からの搬入品。
〃	8	〃	弥生底部		(12.7)	7.0	灰褐色	平底。外面, ミガキ。内面, ナデ。
IV-53	10	SK4	土師杯	13.3	(2.4)		橙色	口縁部, 肥厚。磨耗, 調整不明瞭。
〃	11	〃	〃	12.6	(2.8)		灰白色	口縁部, 肥厚。磨耗, 調整不明瞭。
〃	12	〃	〃		(2.5)	6.3	〃	磨耗, 調整不明瞭。内底面, ロクロ目。回転糸切り。
IV-54	13	SK5	土師小杯	7.5	(1.4)		にぶい橙色	磨耗, 調整不明瞭。
〃	14	〃	土師杯		(0.8)	7.4	灰黄褐色	回転糸切り。
〃	15	〃	〃		(1.5)	9.2	浅黄橙色	回転糸切り。
〃	16	〃	須恵捏鉢	24.2	(4.4)		灰黄色	口縁端部をつまみ上げる。内外面, 回転ナデ調整。外面, 煤付着。
IV-56	17	SK7	土師質小皿	8.1	1.4		灰白色	磨耗, 調整不明瞭。
〃	18	〃	土師質杯	13.3	(1.2)		〃	口縁部, 肥厚。磨耗, 調整不明瞭。
IV-57	19	SK8	土師質小皿	10.0	(1.3)		浅黄橙色	回転ナデ。回転糸切り。
〃	20	〃	瓦器椀		(4.8)		にぶい黄橙色	口縁部, ヨコナデ。外面, 指頭圧痕。内面, 暗文。二次被熱。
IV-59	21	SD1	弥生甕		(3.5)		にぶい橙色	貼付口縁か。口唇部, 強いヨコナデ, 凹面状。口縁端部, 上方へつまみ上げ。下端, 刻目。
〃	22	〃	〃		(4.4)		橙色	貼付口縁。粘土帯外面, 指押さえ後ヨコナデ。口縁部, 面取り。煤付着。磨耗, 調整不明瞭。
〃	23	〃	弥生体部		(14.1)		〃	頸胴部境に櫛描直線文2単位, 刻目。外面, ミガキか。内面, ナデ, 指頭圧痕。
〃	24	〃	弥生甕	15.5	(5.4)		黒褐色	口縁部, 緩やかに外反。口唇部, 面取り。外面, ハケ・ナデ。内面, ナデ。
〃	25	〃	〃	21.9	(20.7)		橙色	口縁部, 上下に拡張。4条の凹線文。外面, ミガキ。内面, 上胴部, ナデ, 指頭圧痕有り。上胴部以下, ヘラケズリ。黒斑, 有り。煤付着。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量(cm)			色調(外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-59	26	SD1	弥生 底部		(3.1)	5.4	にぶい橙色	やや上げ底。内外面, ナデ。
〃	27	〃	〃		(3.9)	4.9	橙色	平底。底部側面, 直立。器壁厚い。外面, ケズリ。内面, ナデ。
IV-61	28	SR1	土師 皿	11.1	1.6	7.0	浅黄橙色	折り曲げ口縁。回転ナデ。赤彩。
〃	29	〃	〃	14.4	1.8		橙色	回転ナデ。ヘラ切り後ナデ。
〃	30	〃	〃	16.6	2.3	10.3	〃	回転ナデ。ヘラ切り後ナデ。
〃	31	〃	〃		(2.3)		灰白色	回転ナデ。赤彩。
〃	32	〃	〃		(1.4)		浅黄橙色	折り曲げ口縁。外面, ミガキ。内面, ミガキか。赤彩。
〃	33	〃	〃		(1.6)		橙色	折り曲げ口縁か。内外面, ミガキか。赤彩。
〃	34	〃	〃	14.4	1.7	11.5	〃	磨耗, 調整不明瞭。ヘラ切り後ナデ。
〃	35	〃	〃	16.4	1.5	12.0	にぶい橙色	磨耗, 調整不明瞭。内外面, ミガキか。ヘラ切り後ナデ。口縁部にタール附着。
〃	36	〃	〃	15.0	1.1	12.3	〃	磨耗, 調整不明瞭。
〃	37	〃	〃	18.1	2.5	16.0	にぶい黄橙色	折り曲げ口縁。内外面, ミガキ。
〃	38	〃	〃	21.2	2.2	17.0	褐色	折り曲げ口縁。器面に付着物が多く, 調整不明瞭。
〃	39	〃	〃		2.7	10.9	にぶい橙色	高台が「ハ」の字状に付く。磨耗, 調整不明瞭。赤彩。
〃	40	〃	土師 杯	10.4	2.3	7.5	浅黄橙色	回転ナデ。ヘラ切り後, ナデ。
〃	41	〃	〃	12.6	2.9	7.7	橙色	折り曲げ口縁。磨耗, 調整不明瞭。
〃	42	〃	〃	13.1	2.9	7.9	〃	磨耗, 調整不明瞭。ヘラ切り。
〃	43	〃	〃	13.3	3.6	9.0	〃	磨耗, 調整不明瞭。ヘラ切りか。
〃	44	〃	〃	15.1	(3.9)		浅黄橙色	磨耗, 調整不明瞭。回転ナデか。
〃	45	〃	〃	13.1	3.6	7.9	にぶい橙色	磨耗, 調整不明瞭。回転ナデ。ヘラ切り。
〃	46	〃	〃	15.3	3.7	9.0	にぶい黄橙色	回転ナデ。ヘラ切り後ナデ。
〃	47	〃	〃	15.1	3.5	8.3	〃	磨耗, 調整不明瞭。回転ナデか。
〃	48	〃	〃	16.7	3.5	10.8	〃	回転ナデ。ヘラ切り後ナデ。
〃	49	〃	〃	15.4	2.7	9.6	にぶい橙色	磨耗, 調整不明瞭。回転ナデか。ヘラ切り後ナデ。
〃	50	〃	〃	15.4	3.5	9.8	橙色	折り曲げ口縁。外面, 回転ナデ, 一部ミガキ。内面, ミガキ。ヘラ切り後ナデ。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特 徴
				口径	器高	底径		
IV-61	51	SR1	土師 杯	12.3	4.3	8.6	浅黄色	断面逆台形の高台を「ハ」の字状に付す。磨耗, 調整不明。
〃	52	〃	〃		(1.2)	8.2	浅黄橙色	断面逆台形の高台を「ハ」の字状に付す。磨耗, 調整不明瞭。赤彩。
〃	53	〃	土師 蓋	13.5	2.5	つまみ径 2.4	灰白色	扁平な擬宝珠形つまみ。口縁部内面, 沈線。磨耗, 調整不明瞭。天井, ケズリ。口縁部, 回転ナデ。内面, 回転ナデか。被熱変色。
〃	54	〃	〃	13.9	2.8	つまみ径 2.6	淡黄色	扁平な擬宝珠形つまみ。口縁部はわずかに下がる。磨耗, 調整不明。
IV-62	55	〃	土師 高杯	22.6	(2.0)		にぶい黄橙色	口縁部, 丸みを持った平坦面。磨耗, 付着物により調整不明瞭。
〃	56	〃	〃	21.2	(2.4)		橙色	口縁部, 面取り。外底面, ヘラ切り痕か。内面, ミガキ。赤彩。シャープな作り。
〃	57	〃	土師 盤	28.5	(2.5)		にぶい橙色	磨耗, 調整不明瞭。
〃	58	〃	土師 高杯	34.0	(2.0)		灰白色	磨耗, 調整不明瞭。内面, ミガキか。赤彩。
〃	59	〃	〃	22.8	(2.5)		明赤褐色	内外面, ミガキ。赤彩。
〃	60	〃	〃	19.6	(1.6)		灰白色	内外面, ミガキ。赤彩。
〃	61	〃	土師 盤	35.1	(8.7)		橙色	脚部, 4方向に長方形透孔。付着物により調整不明瞭。赤彩。
〃	62	〃	土師 高杯		(2.2)		〃	磨耗, 調整不明。
〃	63	〃	〃		(2.6)		灰白色	磨耗, 調整不明瞭。脚部, 回転ナデ。
〃	64	〃	〃		(3.0)		にぶい褐色	脚部, 回転ナデ。
〃	65	〃	土師 盤		(2.4)		灰白色	脚部, 10~11個の方形透孔。磨耗, 調整不明瞭。赤彩。
〃	66	〃	土師 高杯		(7.3)		橙色	磨耗, 調整不明。
〃	67	〃	〃		(2.0)	7.3	浅黄橙色	磨耗, 調整不明。赤彩か。
〃	68	〃	〃		(2.2)	8.5	灰白色	磨耗, 調整不明瞭。回転ナデ。赤彩か。
〃	69	〃	〃		(3.1)	9.5	浅黄橙色	磨耗, 調整不明瞭。回転ナデ。赤彩か。
〃	70	〃	〃		(1.3)	12.0	にぶい黄橙色	付着物のため, 調整不明瞭。回転ナデ。
IV-63	71	〃	黒色 椀	14.8	4.6	6.0	にぶい橙色	内黒。外面, 口縁部, ヨコナデ。体部, ケズリ。指頭圧痕有り。内面, ミガキ。
〃	72	〃	〃		(2.5)		黒色	内黒。口縁部外面, 黒色。外面, ヨコナデ。内面, ミガキ。
〃	73	〃	〃	15.6	(2.8)		にぶい黄橙色	内黒。口縁部外面, 黒色。口縁部, ヨコナデ。外面, ケズリ。指頭圧痕有り。内面, ミガキ。
〃	74	〃	黒色 杯	11.8	(2.8)		オリーブ黒色	内外面, 黒色。内外面, ミガキ。やや異質。
〃	75	〃	緑釉 皿	14.4	(1.6)		灰白色	口縁部, 直線的。淡緑色の釉葉, 点的に残存。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量(cm)			色調(外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-63	76	SR1	緑釉 椀		(4.0)		灰白色	口縁部, 外反。淡緑色の釉薬。内外面, ミガキ。
〃	77	〃	緑釉 陶器		(3.0)		〃	口縁部, 外反。淡緑色の釉薬。
〃	78	〃	緑釉 皿		(1.4)		浅黄色	口縁部, 外反。淡緑色の釉薬。
〃	79	〃	緑釉 陶器		(1.5)		灰白色	口縁部, 外反。淡緑色の釉薬。
〃	80	〃	緑釉 皿		(0.8)	8.1	浅黄色	円盤状高台。糸切り。淡緑色の釉薬。全面施釉。
〃	81	〃	〃		(0.8)	8.7	〃	円盤状高台。糸切り。淡緑色の釉薬。全面施釉。
IV-64	82	〃	須恵 皿	14.0	2.0	11.7	灰白色	磨耗, 調整不明瞭。回転ナデ。
〃	83	〃	〃	13.7	1.9	9.2	〃	回転ナデ。
〃	84	〃	〃	15.6	2.0	12.9	灰黄色	口縁端部, 外反。回転ナデ。ヘラ切り後ケズリ。火襷有り。
〃	85	〃	〃	16.3	(2.5)		灰色	口縁端部, 外反。回転ナデ。搬入品か。
〃	86	〃	〃	14.0	2.9	10.4	灰白色	断面方形の高台。回転ナデ。ヘラ切り後ナデ。
〃	87	〃	須恵 杯		(2.7)		〃	口縁部, 屈曲。回転ナデ。外面, 自然釉。
〃	88	〃	〃	13.3	3.1	8.5	灰黄褐色	磨耗, 調整不明。焼成不良。
〃	89	〃	〃	12.4	3.4	6.8	灰色	磨耗, 調整不明瞭。焼成不良。器壁, 厚め。
〃	90	〃	〃	13.0	3.6	9.3	灰白色	回転ナデ。ヘラ切り後ナデ。焼成不良。火襷有り。
〃	91	〃	〃	13.4	3.1	9.0	黄灰色	磨耗, 調整不明瞭。回転ナデ。
〃	92	〃	〃	13.7	3.4	8.0	灰黄色	磨耗, 調整不明。焼成不良。
〃	93	〃	〃	13.5	3.9	10.9	灰白色	磨耗, 調整不明。焼成不良。
〃	94	〃	〃	14.9	4.0	10.4	〃	磨耗, 調整不明。焼成不良。
〃	95	〃	〃	13.8	4.4	10.0	黄灰色	磨耗, 調整不明瞭。回転ナデ。ヘラ切り後ナデ。焼成不良。
〃	96	〃	〃	14.7	3.4	9.4	灰色	磨耗, 調整不明瞭。回転ナデか。ヘラ切り後ナデ。焼成不良。
〃	97	〃	〃	13.9	3.5	8.6	灰白色	磨耗, 調整不明瞭。回転ナデか。ヘラ切り後ナデ。焼成不良。
IV-65	98	〃	〃		3.2		灰黄色	断面方形の高台。磨耗, 調整不明。
〃	99	〃	〃	12.8	3.8	10.1	灰白色	断面方形の高台。回転ナデ。
〃	100	〃	〃	13.3	4.0	9.0	〃	断面方形の低い高台。回転ナデ。ヘラ切り後ナデ。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特 徴
				口径	器高	底径		
IV-65	101	SR1	須恵杯	12.6	3.7	8.8	灰色	断面方形の高台。底部，粘土紐接合痕跡。回転ナデ。
〃	102	〃	〃	13.3	3.6	9.3	灰白色	断面方形の高台。回転ナデ。外底面，ヘラ記号。
〃	103	〃	〃	13.9	3.5	9.4	〃	断面方形の高台。回転ナデ。やや磨耗。
〃	104	〃	〃	12.9	4.2	8.7	〃	断面逆台形の高台。磨耗，調整不明。回転ナデか。二次被熱か。
〃	105	〃	〃	12.2	3.7	8.0	〃	断面方形の高台。焼成不良。磨耗，調整不明瞭。外底面，爪状圧痕。
〃	106	〃	〃	12.7	4.1	7.3	灰色	断面方形の低い高台。回転ナデ。ヘラ切り後ナデ。
〃	107	〃	〃	13.0	3.7	8.4	〃	断面長方形の高台。回転ナデ。ヘラ切り後ナデ。
〃	108	〃	〃	12.2	4.2	8.6	灰白色	口縁端部，外反。断面台形の高台。回転ナデ。内・外底面，仕上げナデ。
〃	109	〃	〃	12.8	4.2	10.0	灰色	断面方形の高台。回転ナデ。内・外底面，仕上げナデ。
〃	110	〃	〃	12.8	4.3	9.8	灰白色	断面方形の高台。回転ナデ。内底面，仕上げナデ。外底面，粘土紐接合痕跡有り。
〃	111	〃	〃	13.0	4.5	8.9	〃	断面方形の高台。焼成不良。外面磨耗，調整不明瞭。回転ナデ。内底面，仕上げナデ。
〃	112	〃	〃	12.9	4.7	9.0	〃	断面方形の高台。回転ナデ。外底面，ヘラ記号。
〃	113	〃	〃	14.3	4.8	9.9	灰色	断面方形の高台。回転ナデ。ヘラ切り後ナデ。外底面，爪状圧痕。
〃	114	〃	〃	11.8	4.2	6.6	にぶい黄橙色	断面長方形の高台。回転ナデ。外底面，ヘラ記号。二次被熱。
〃	115	〃	〃	13.3	4.4	9.2	灰白色	断面長方形の高台。焼成不良。磨耗，調整不明。
〃	116	〃	〃	10.4	4.7	6.7	〃	断面方形の低い高台。回転ナデ。
〃	117	〃	〃	13.0	5.9	8.3	〃	断面方形の高台。回転ナデ。内面，回転ナデ後斜め上方ヘナデ上げる。
〃	118	〃	〃		(1.7)	9.2	〃	断面方形の高台。ナデ。外底面，ヘラ記号。
〃	119	〃	〃		(2.3)	10.0	灰色	断面方形の高台。内底面，回転ナデ後仕上げナデ。ヘラ切り後ナデ。外底面，ヘラ記号。
IV-66	120	〃	須恵蓋	14.4	2.7	つまみ径 2.9	灰白色	扁平な擬宝珠形のつまみ。口縁端部はわずかに下がる。磨耗，調整不明。焼成不良。
〃	121	〃	〃	14.2	2.6	つまみ径 2.5	〃	扁平な擬宝珠形のつまみ。口縁端部はわずかに下がる。磨耗，調整不明瞭。天井部外面，回転ケズリ。
〃	122	〃	〃	14.5	2.3	つまみ径 2.6	〃	扁平な擬宝珠形のつまみ。口縁端部はわずかに下がる。回転ナデ。天井部外面，回転ケズリ。
〃	123	〃	〃	13.6	1.9	つまみ径 2.5	〃	扁平な擬宝珠形のつまみ。口縁端部はわずかに下がる。回転ナデ。天井部外面，回転ケズリ。天井部内面，仕上げナデ。ヘラ記号か。
〃	124	〃	〃		(2.1)	つまみ径 2.4	灰色	扁平な擬宝珠形のつまみ。回転ナデ。天井部外面，丁寧な回転ケズリ。
〃	125	〃	〃	14.3	(2.1)		〃	口縁部を若干屈曲させ，端部はわずかに下がる。回転ナデ。天井部内面，仕上げナデ。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-66	126	SR1	須恵 蓋	12.7	(1.5)		灰色	口縁端部はわずかに下がる。回転ナデ。天井部内面, 仕上げナデ。自然釉付着。
〃	127	〃	〃	13.6	(1.5)		灰白色	口縁端部はわずかに下がる。回転ナデ。
〃	128	〃	〃	15.8	(0.9)		〃	口縁端部はわずかに下がる。回転ナデ。
〃	129	〃	〃	15.5	(1.8)		〃	口縁端部はわずかに下がる。回転ナデ。天井部外面, 回転ケズリ。自然釉付着。
〃	130	〃	〃	11.6	2.5	つまみ径 4.9	〃	輪状のつまみ。口縁端部, わずかに下がる。回転ナデ。天井部外面, ケズリ。天井部内面, 仕上げナデ。
〃	131	〃	〃		(1.4)	つまみ径 4.3	〃	輪状のつまみ。回転ナデ。天井部内面, 仕上げナデ。
〃	132	〃	〃		(1.3)	つまみ径 4.8	〃	輪状のつまみ。回転ナデ。
〃	133	〃	〃		(1.2)	つまみ径 4.3	〃	輪状のつまみ。ナデ。
〃	134	〃	須恵 高杯		(5.0)	9.8	〃	脚端部, 屈曲。磨耗, 調整不明。
〃	135	〃	〃		(4.7)		〃	磨耗, 調整不明瞭。脚部, 回転ナデ。杯部内底面, 仕上げナデ。
〃	136	〃	須恵 壺	8.2	23.6	10.0	〃	高台付き長頸壺。断面方形の高台。回転ナデ。頸部, 1条の凹線。
〃	137	〃	〃		(8.4)		〃	高台付き長頸壺。回転ナデ。頸部, 2条の凹線。
〃	138	〃	〃		(10.9)		灰色	高台付き長頸壺。回転ナデ。頸部, 2条の凹線。肩部, 1条の凹線。
〃	139	〃	〃		(3.6)	7.8	灰白色	高台付き長頸壺。高台は断面方形, 端部, 凹状。「ハ」の字状。回転ナデ。内底面, 工具痕跡。
〃	140	〃	〃		(9.4)	10.5	〃	高台付き長頸壺。断面方形の高台。回転ナデ。
〃	141	〃	〃		(3.3)	13.9	〃	高台付き長頸壺。断面方形の高台。「ハ」の字状。回転ナデ。
〃	142	〃	〃		(6.6)	10.5	〃	高台付き長頸壺。高台端部は凹状, 端部拡張。回転ナデ。内外面, 自然釉付着。
〃	143	〃	〃		(4.6)	10.4	灰色	高台付き長頸壺。高台端部はわずかに凹状。回転ナデ。
〃	144	〃	〃	12.8	(4.1)		灰白色	広口壺。口唇部, 凹状。回転ナデ。
〃	145	〃	〃	13.0	(5.3)		〃	無頸壺。口唇部, 面取り。回転ナデ。
IV-67	146	〃	須恵 甕	22.0	(8.1)		黄灰色	口縁部, 直線的に外反。口唇部, 面取り。磨耗, 調整不明瞭。外面, 叩き目。内面, 当て具痕跡。煤付着。
〃	147	〃	〃		(2.9)		灰色	口唇部, 面取り。外方に突出。回転ナデ。
〃	148	〃	〃		(2.5)		灰白色	口唇部, 凹状。回転ナデ。内面, 自然釉付着。
〃	149	〃	〃	44.0	(9.4)		〃	頸部, 直立。口縁部, 外反。口縁端部, 屈曲。口唇部, 面取り。口縁部, 回転ナデ。体部外面, 叩き目。内面, 当て具痕跡。
〃	150	〃	須恵 円面硯	13.1	(2.7)		灰色	脚部, 長方形透かし。回転ナデ。陸部の中央, 使用により平滑。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調(外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-68	151	SR1	土師甕	14.3	(3.0)		にぶい赤褐色	口頸部, 弱い「く」の字状。口唇部, 面取り。口縁部外面, ナデ。内面, ハケ。体部外面, ハケ。内面, ナデ。搬入品。
〃	152	〃	〃	22.5	(4.7)		浅黄橙色	口縁部, 緩やかに外反。口唇部, 面取り, つまみ上げ。口縁部, ナデ。体部, ハケ。被熱変色。
〃	153	〃	〃	25.3	(4.2)		にぶい黄橙色	口頸部, 弱い「く」の字状。口唇部, つまみ上げ。口縁部外面, ナデ。内面, ハケ。体部外面, ハケ。内面, ナデ。頸部, 1条のヨコナデ。搬入品。
〃	154	〃	〃	27.3	(4.0)		暗褐色	口縁部, 外反。口唇部, 凹状。つまみ上げ。口縁部外面, ナデ。内面, ハケ。仁淀川流域からの搬入品か。
〃	155	〃	〃		(4.3)		にぶい赤褐色	口縁部, 外反。口唇部, 強いヨコナデ, 凹状。つまみ上げ。口縁部外面, ナデ。内面, ハケ。体部外面, ハケ。内面, ナデ。搬入品。
〃	156	〃	〃		(2.6)		にぶい褐色	口唇部, 丸くおさめる。内外面, ナデ。搬入品。
〃	157	〃	土師 把手		(4.5)		〃	指頭により成形。搬入品。
〃	158	〃	製塩 土器	14.7	(5.1)		にぶい黄橙色	口縁部, わずかに内傾。口縁端部, 尖らせる。外面, ナデ。内面, 布目の圧痕。
〃	159	〃	〃	11.6	(5.9)		〃	口縁部, 内傾。口縁端部, 尖らせる。内外面, ナデ。
〃	160	〃	〃		(5.7)		にぶい橙色	口縁部, 折り曲げ。口縁端部, 尖らせる。内外面, ナデ。内面, しぼり目。
〃	161	〃	〃		(4.3)		にぶい黄橙色	口縁部, わずかに内傾。口縁端部, 尖らせ気味。外面, ナデ。内面, 布目か。器壁, 薄い。
〃	162	〃	〃		(4.3)		灰黄色	口縁部, わずかに内傾。口縁端部, 尖らせる。外面, ナデ。内面, 布目か。
〃	163	〃	〃		(5.0)		〃	口縁端部, 尖らせる。内外面, ナデ。
IV-70	168	P1	土師質 杯	14.2	4.2	6.3	にぶい黄橙色	回転ナデ。内底面, ロクロ目有り。回転糸切り。口縁部にタールが付着, 灯明皿として使用。残存率, 良好。
〃	169	P16	〃	14.1	4.2	5.6	灰白色	やや磨耗。回転ナデ。回転糸切り。
〃	170	P19	〃		(1.8)	5.3	浅黄橙色	磨耗, 調整不明瞭。回転ナデ。外底面, 回転糸切り, スノコ状の圧痕有り。
〃	171	P22	土師質 小皿	8.3	1.5	5.0	淡橙色	回転ナデ。回転糸切り。被熱変色。煤付着。残存率, 良好。
〃	172	P24	〃	7.4	1.2	3.8	灰白色	磨耗, 調整不明瞭。ロクロ成形。回転糸切り。残存率, 良好。
〃	173	P48	土師質 小杯	7.6	2.0	3.9	〃	磨耗, 調整不明瞭。ロクロ成形。回転糸切り。
〃	174	〃	土師質 杯	12.5	(3.4)		浅黄橙色	磨耗, 調整不明瞭。外面, ロクロ目。
IV-71	175	遺構外	弥生 壺	17.2	(5.0)		灰黄色	貼付口縁。口唇部, 面取り。粘土帯外面上端部, 刻目。内外面, ナデ。
〃	176	〃	〃	18.9	(5.0)		橙色	口唇部, ハケ状原体による面取り。外面, ナデ。内面, ヨコハケ。
〃	177	〃	〃	17.2	(9.9)		〃	口唇部, 面取り。外面, タテハケ。内面, ヨコハケ。
〃	178	〃	〃	25.6	(10.7)		にぶい橙色	口縁部, 拡張。3条の凹線文。外面, タテハケ。内面, ナデ。口縁部, 穿孔有り。
〃	179	〃	〃		(4.2)		橙色	頸胴部境に断面三角形の突帯。縦方向の突帯。内外面, ナデ。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-71	180	遺構外	弥生壺	14.9	(7.1)		橙色	口唇部, 面取り。外面, 5条の凹線文。磨耗, 調整不明瞭。
〃	181	〃	弥生甕	14.3	(10.8)		にぶい橙色	貼付口縁。弱い指頭圧痕有り。口唇部, 面取り。被熱変色。煤付着。
〃	182	〃	弥生ミニ		(5.7)	3.6	灰白色	壺形。内外面, ナデ。黒斑, 有り。
〃	183	〃	〃		(3.6)	2.5	灰黄色	内外面, ナデ。
〃	185	〃	土師蓋	15.8	(1.9)		橙色	口縁端部, 丸くおさめる。口唇部, 面取り。磨耗, 調整不明瞭。
〃	186	〃	土師高杯	21.5	(2.2)		〃	口縁部, 短く立ち上がる。調整不明瞭。
〃	187	〃	黒色椀	15.6	(3.6)		にぶい褐色	内面, ミガキ。外面, 指頭圧痕。
〃	188	〃	須恵皿	15.8	2.1	12.6	灰白色	口縁端部, 外方へ引き出す。回転ナデ。外底面, 不定方向のナデ。
〃	189	〃	須恵蓋	13.5	2.2	つまみ径 2.7	灰色	扁平な擬宝珠形つまみ。回転ナデ。天井部外面, 回転ケズリ。天井部内面, 仕上げナデ。
〃	190	〃	〃		(1.2)	つまみ径 4.2	灰白色	輪状つまみ。回転ナデ。
〃	191	〃	青磁碗	13.5	(4.0)		灰オリーブ色	外面, 櫛描文。内面, 櫛描文。透明感の有る灰オリーブ色の釉薬。外面腰部以下, 露胎。
〃	192	〃	白磁碗		(2.4)		オリーブ黄色	V類。オリーブ黄色の釉薬。
〃	193	〃	須恵甕	36.4	(9.9)		灰白色	口縁部, 屈曲させる。口唇部, 面取り。口頸部, 回転ナデ。肩部外面, 叩き目か。

出土遺物(石器)観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm/g)				石材	特徴
				全長	全幅	全厚	重量		
IV-52	9	SK2	叩石	11.1	10.5	5.2	797	砂岩	やや厚みのある円礫。外周に敲打痕跡。
IV-69	166	SR1	台石	18.2	16.9	7.3	(2560)	〃	欠損。両面とも, 中央部付近, 使用(敲打)により凹む。
〃	167	〃	砥石	10.2	6.3	3.6	(301)	〃	欠損。4面使用。
IV-71	184	遺構外	石包丁	9.6	7.1	1.3	78.8	〃	打製石包丁。表面, 剥離面。打点, 残存。裏面, 自然面。刃部, わずかに調整剥離。完存。

出土遺物(土製品)観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm/g)				色調 (外面)	特徴
				全長	全幅	孔径	重量		
IV-68	164	SR1	土錘	7.2	2.3	0.6	24.6	淡黄色	管状土錘。断面, 楕円形。ほぼ完存。
〃	165	〃	〃	(3.8)	1.5	0.4	(8.4)	浅黄色	管状土錘。断面, 円形。両端, 欠損。

13. IV-3・4・8区

1. 調査区の概要

隣接しているこれらの調査区は、検出した遺構・遺物の時期等に共通性があり、一括的に報告する。

①IV-3区

1. 基本層準

遺構は3および4層の上面で検出され、その間、すなわち3層の層厚は概ね9～20cmを測る。下記のごとく、各々の面で検出された遺構群には時期差を指摘できる。包含層1および2には、後記のごとく中世およびそれ以前の遺物が含まれ、明確な時期差は指摘できない。

2. 遺構と遺物

(1)土坑・性格不明遺構

「上面」で検出されたものは古代以降、「下面」は弥生時代に属する。

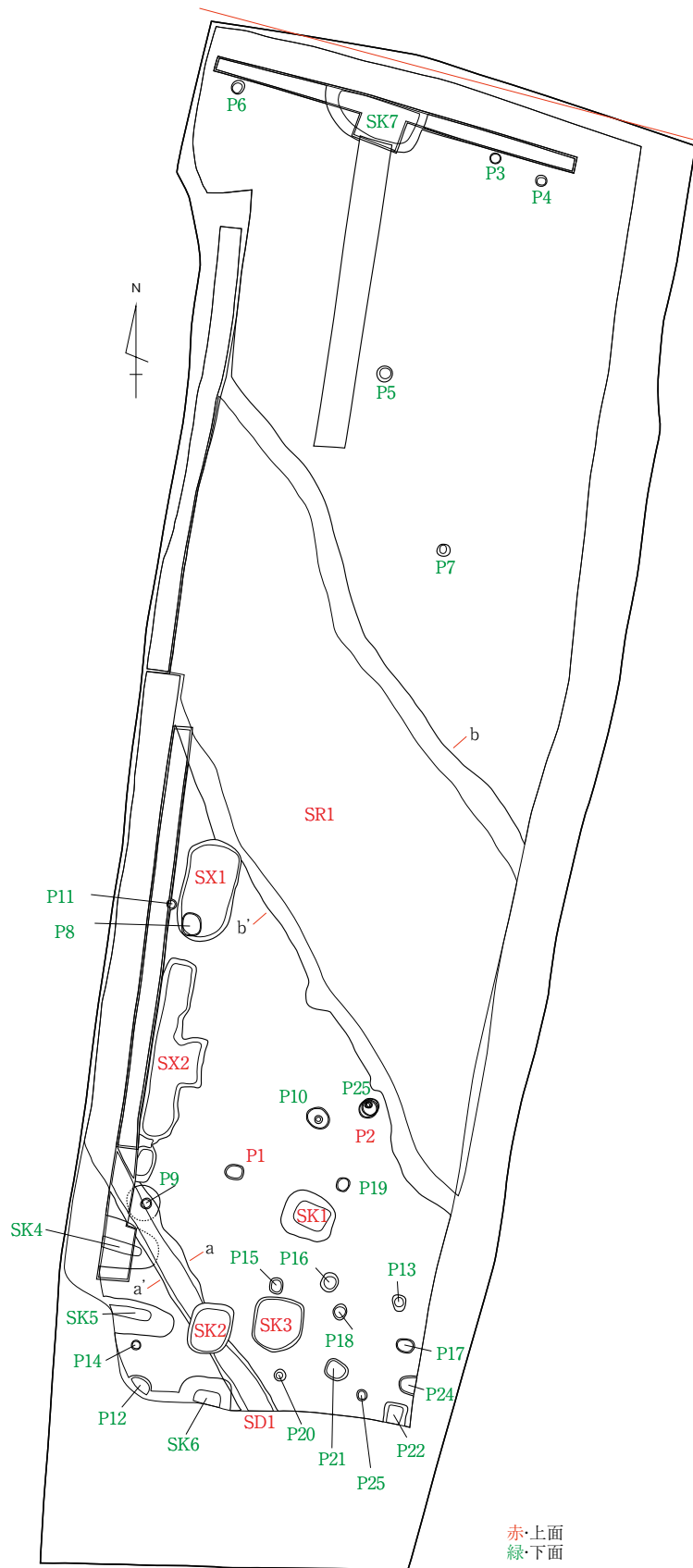
(2)溝・流路跡

SD1はIV-4区SD8に該当する。SR1は流路跡で、下層は古代前期まで、上層はそれに古代後期の遺物が加わる。土層は図IV-76にある。古代後期の遺物の量比は低い。SD1, SR1ともに南側の調査区へ延伸する。

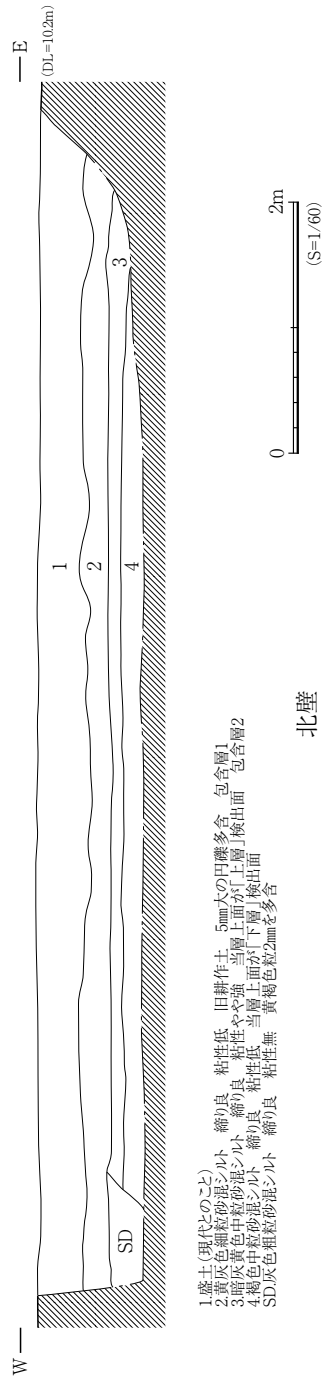
表1 IV-3区 土坑等計測表

遺構名	平面形	長軸	短軸	深さ	備考
SK1	隅丸方形	0.99	0.87	0.24	上面
SK4	不明	(1.10)	(0.98)	0.45	下面
SK5	不明	(1.19)	0.67	0.46	下面
SK6	隅丸方形 か	(0.53)	1.00	0.66	下面
SK7	不明	2.01	(0.86)	0.38	下面
SX1	楕円形	1.97	0.99	0.09	上面
SX2	不定形	3.47	(0.99)	0.15	上面。遺構重複の可能性あり

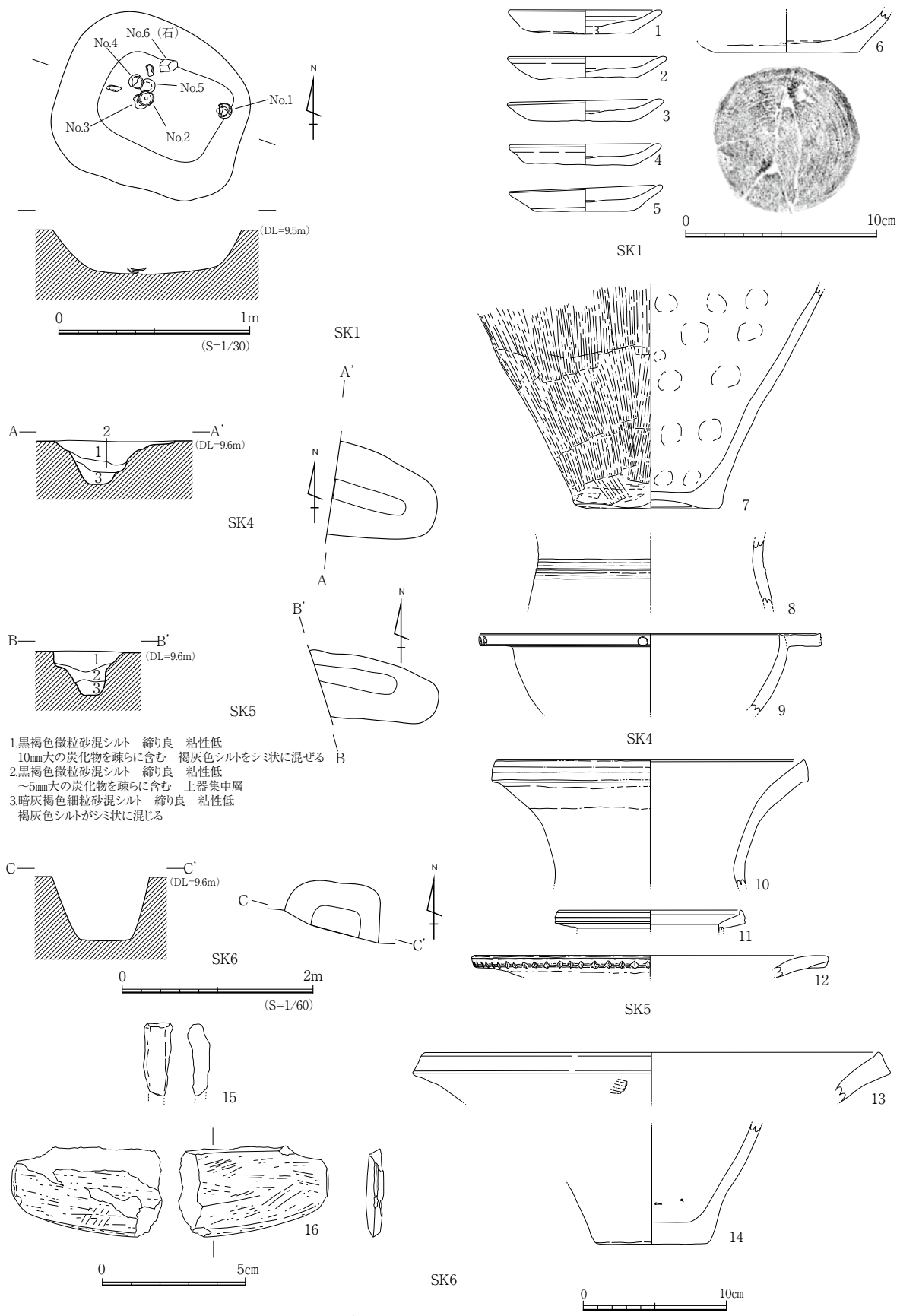
※計測値はm



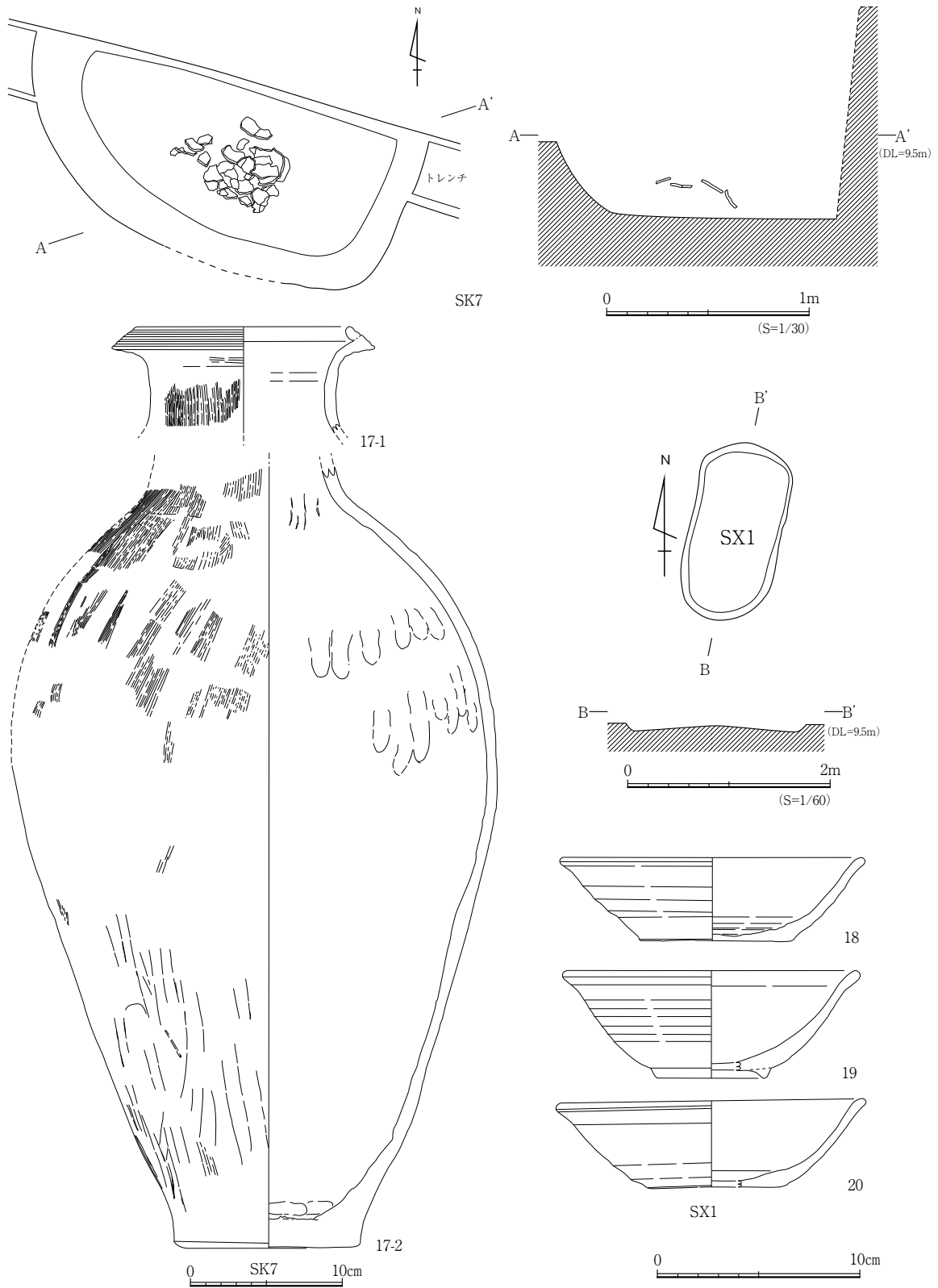
図IV-72 3区 遺構配置図



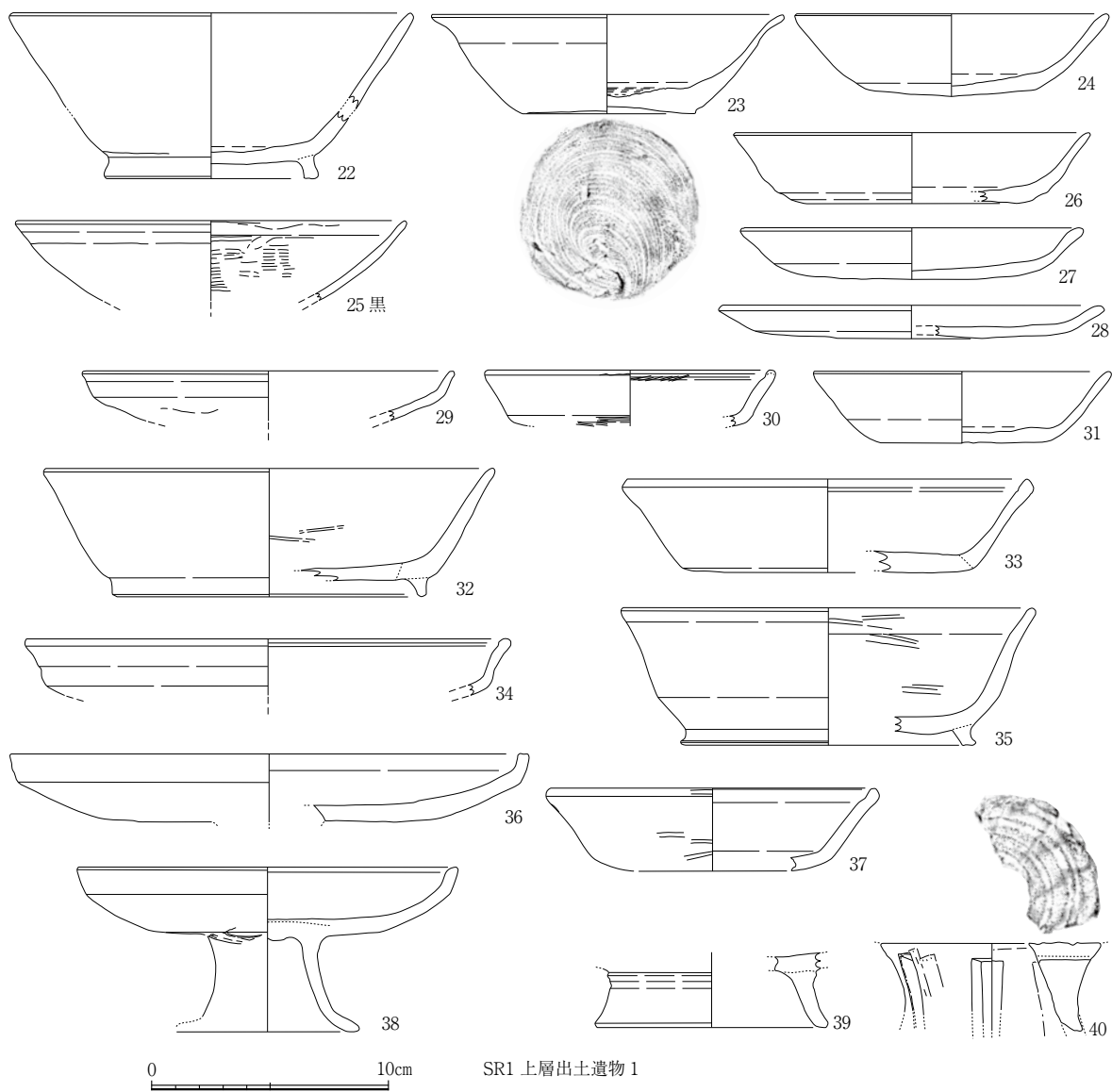
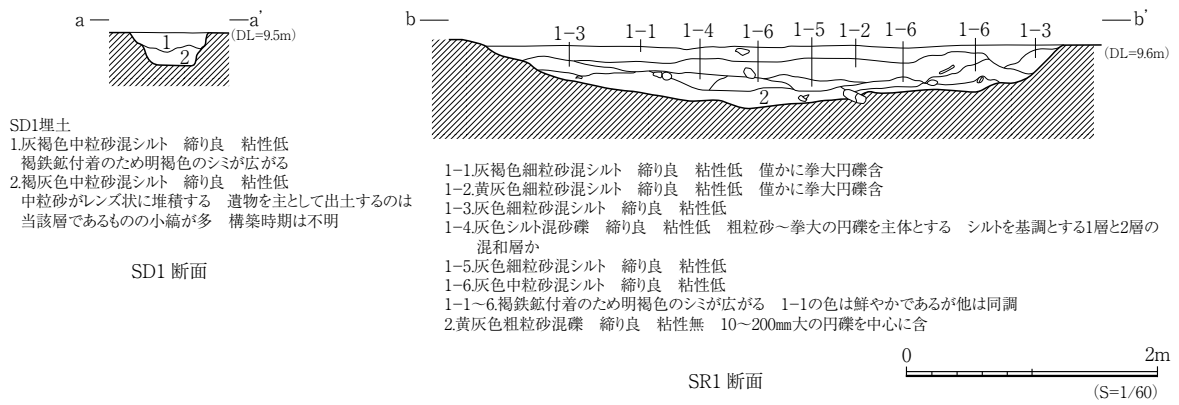
図IV-73 3区 基本層準図



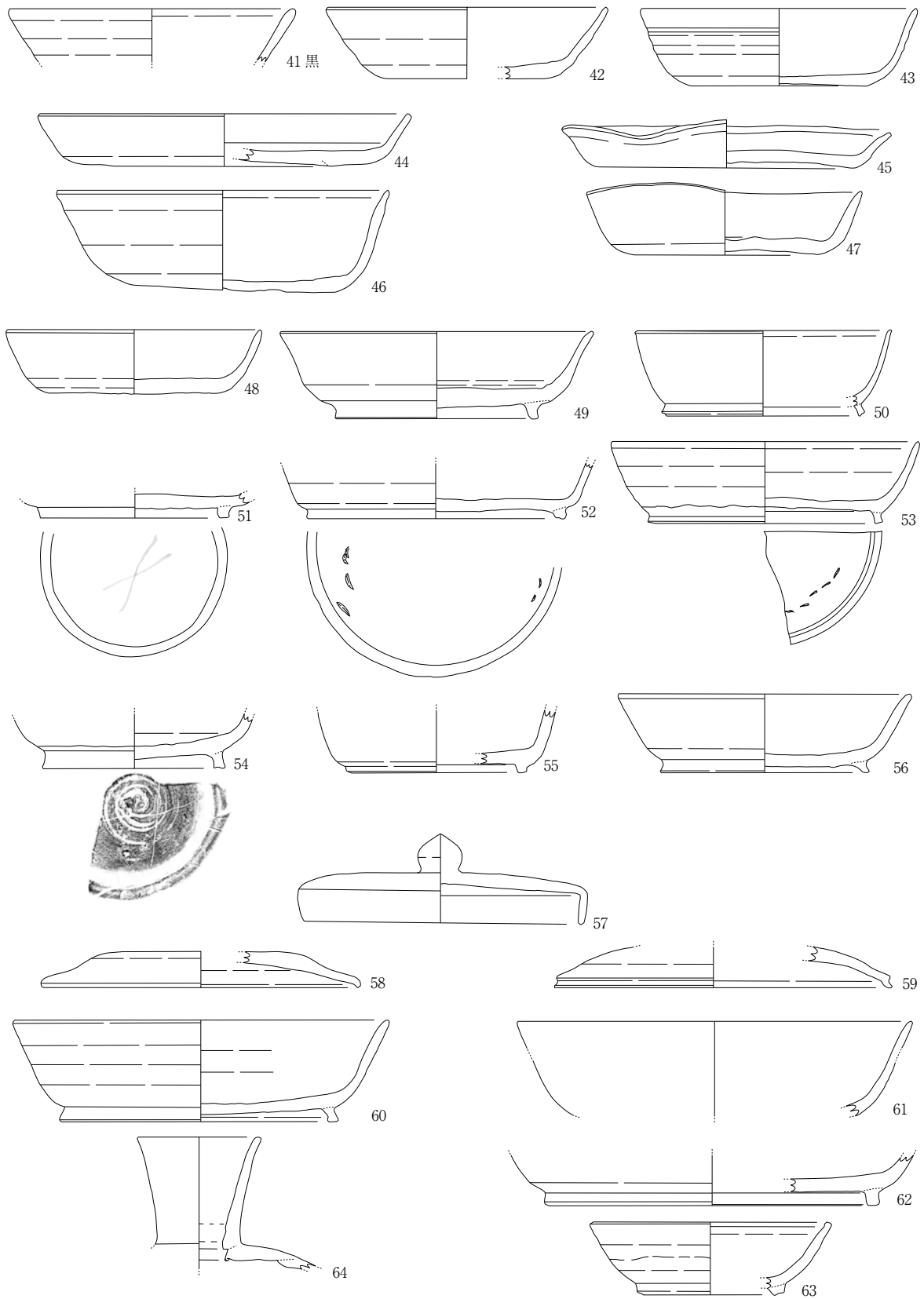
図IV-74 3区 SK1・4~6



図IV-75 3区 SK7・SX1



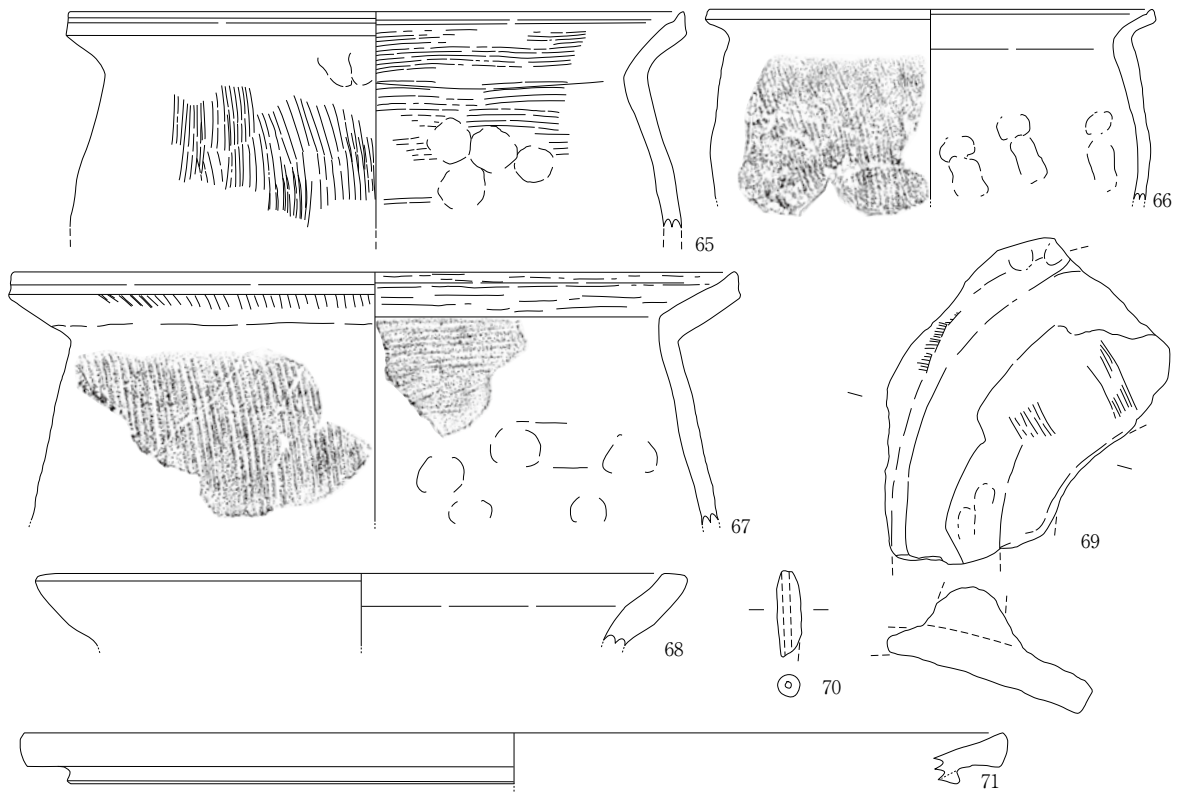
図IV-76 3区 SR1上層(1)・SD1断面図・出土遺物



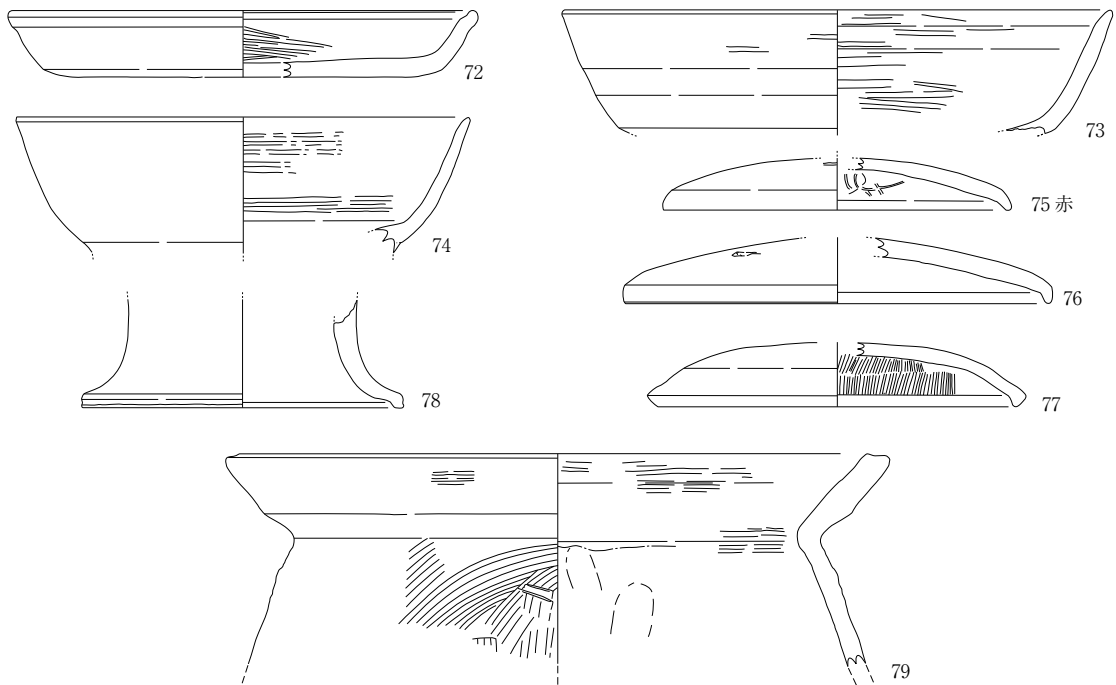
(60~65は層位不分離、60~62は土師器)

SR1 上層出土遺物 2

図IV-77 3区 SR1上層(2)出土遺物

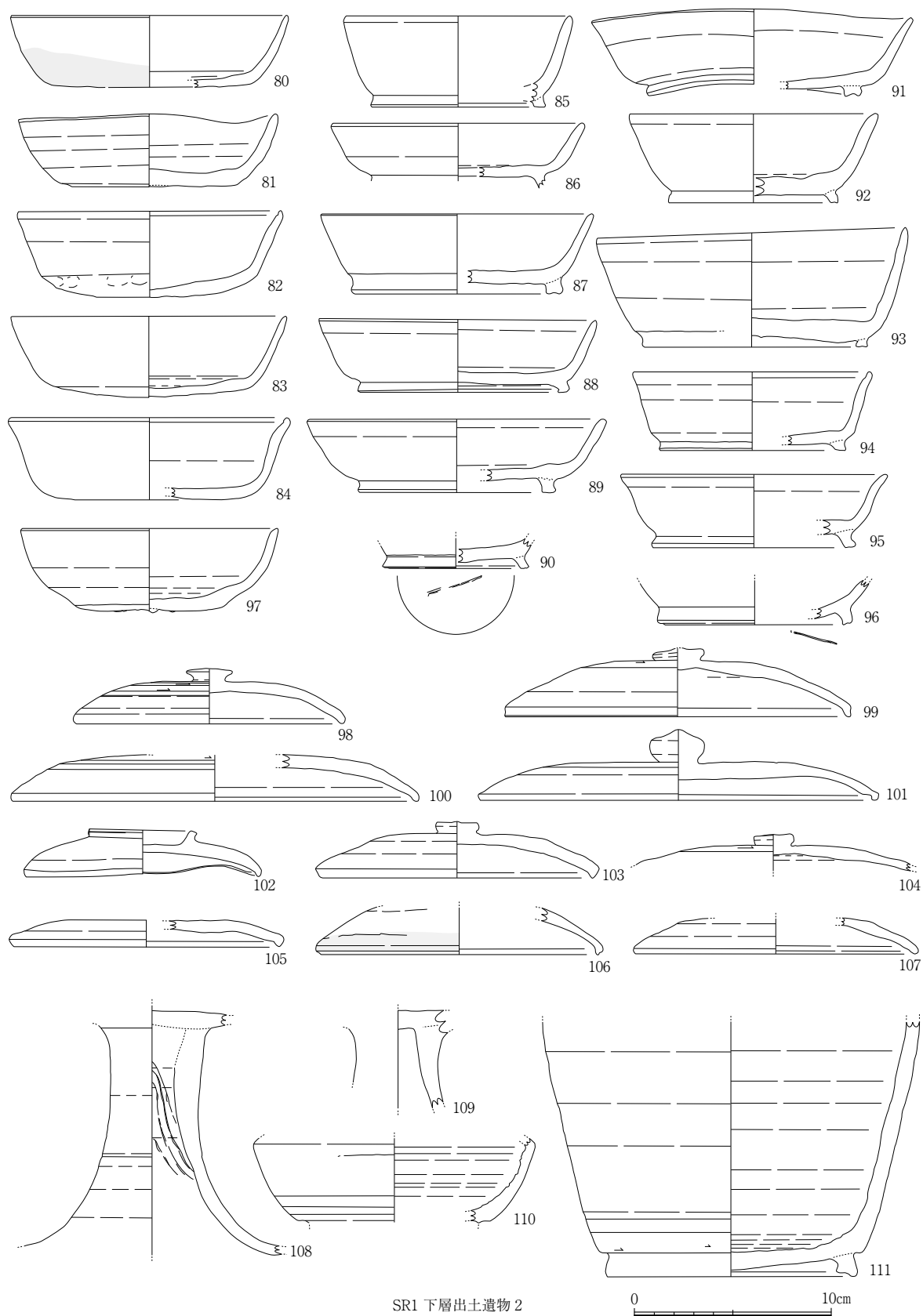


SR1 上層出土遺物 3

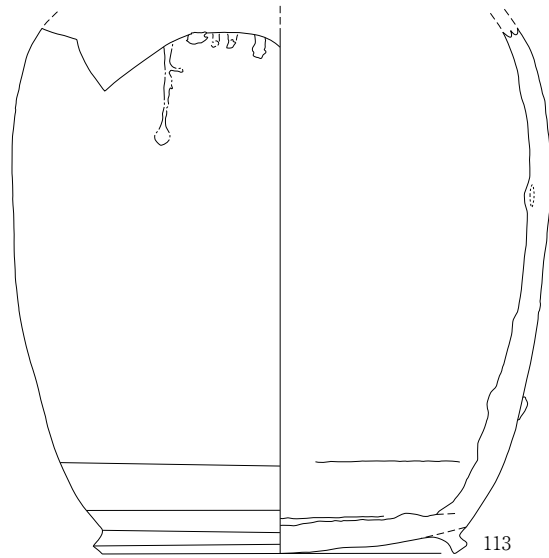
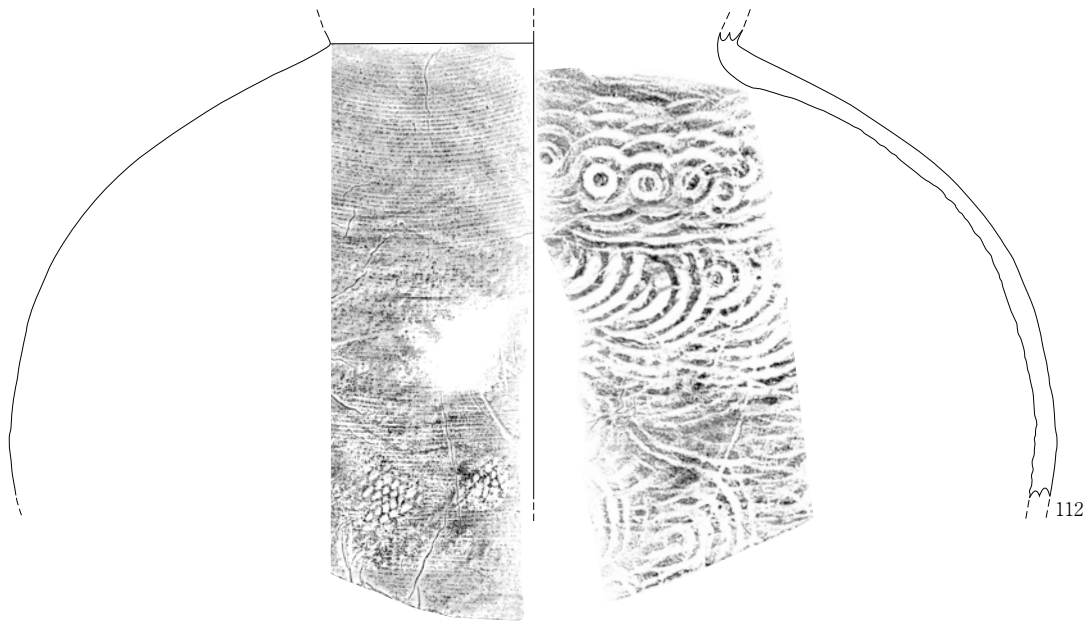


SR1 下層出土遺物 1

図IV-78 3区 SR1上層(3)・下層(1)出土遺物



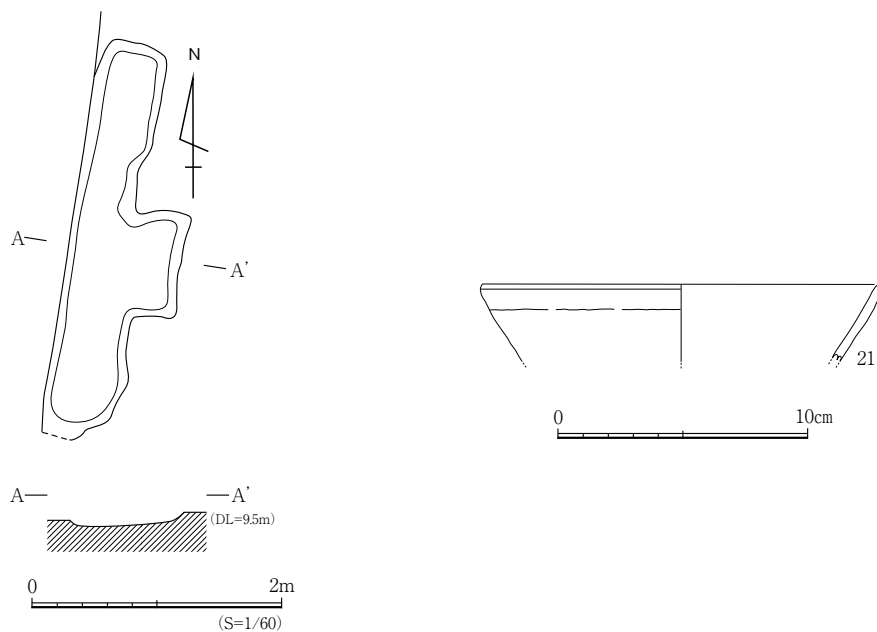
图IV-79 3区 SR1下層(2)出土遺物



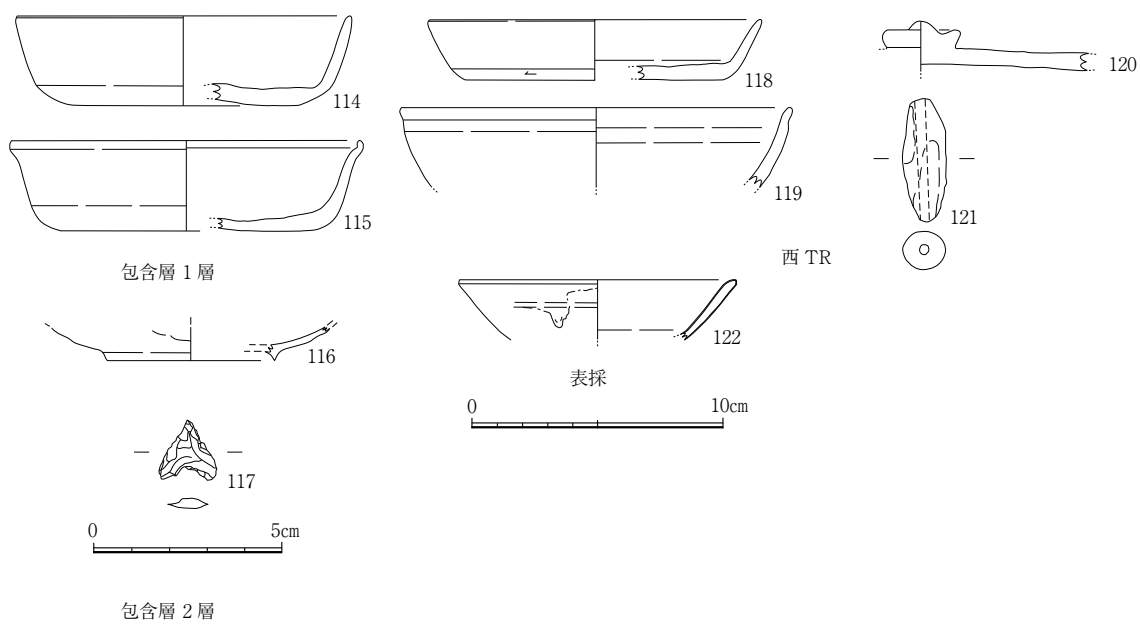
SR1 下層出土遺物 3



図IV-80 3区 SR1下層(3)出土遺物



图IV-81 3区 SX2



图IV-82 3区 包含層等出土遺物

②IV－4区

調査の便宜上、着手時の区画を境として「東」・「西」に分けた。

1. 基本層準

調査区北壁断面を図示する。遺構検出「上面」と「下面」は各々2, 3層上面ないしそれと標高の同じ面に該当する。しかし、後述するように「上面」・「下面」の整然とした時期差を指摘することができない。

大きな落込みとなっているSRcは、後述のSR2, 3と関連する可能性がある。

2. 遺構と遺物

当区は遺構密度が比較的高く、時期も複数におよぶため、弥生時代と古代以降に分けて記述する。遺構計測値や出土遺物の詳細は、後掲の諸表にまとめる。

1) 弥生時代

(1) 竪穴建物

当区では2軒を検出した。

ST1

東部に位置する。焼土および炭化材の検出状態から、焼失した建物跡とみられる。平面形およびピットの位置から、建替えの可能性が考えられる。

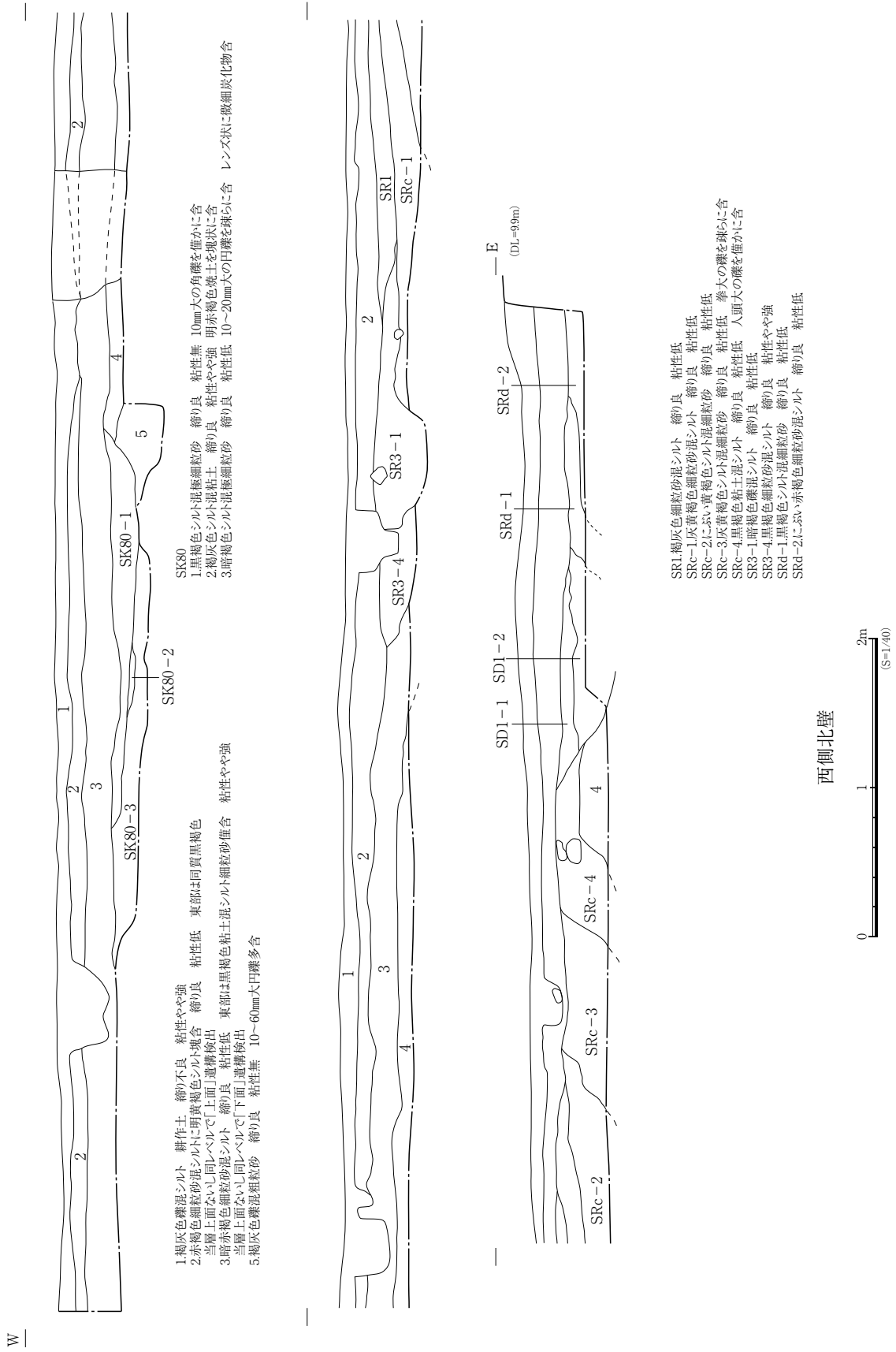
ST2

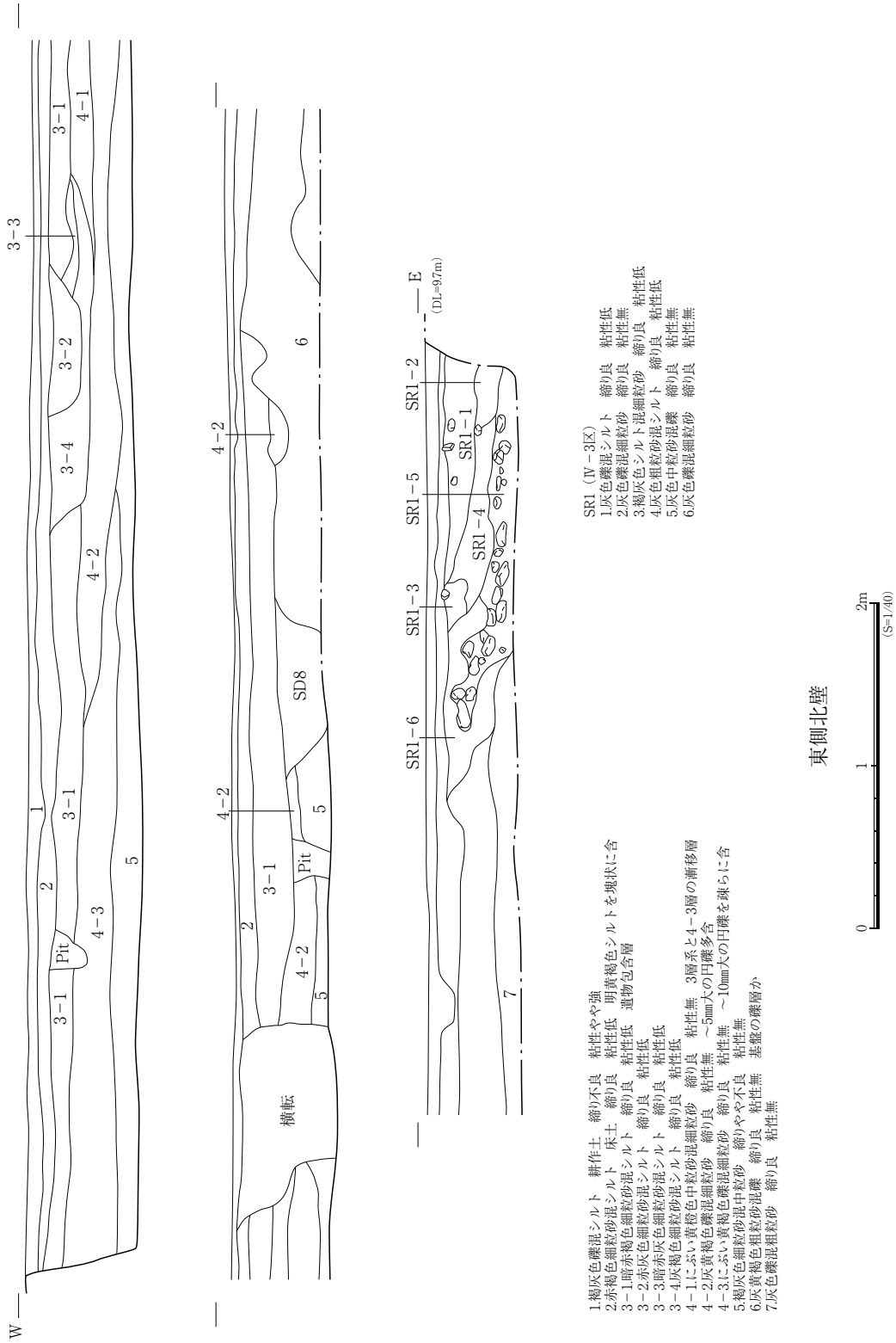
調査区北東部に位置する。中央ピットに伴う炭化物は、部分的かつ希薄で層厚も薄い。長軸 1.9m 余・深さ 0.84m の土坑は当遺構に伴うとみられる。

表2 IV－4区 竪穴建物計測表

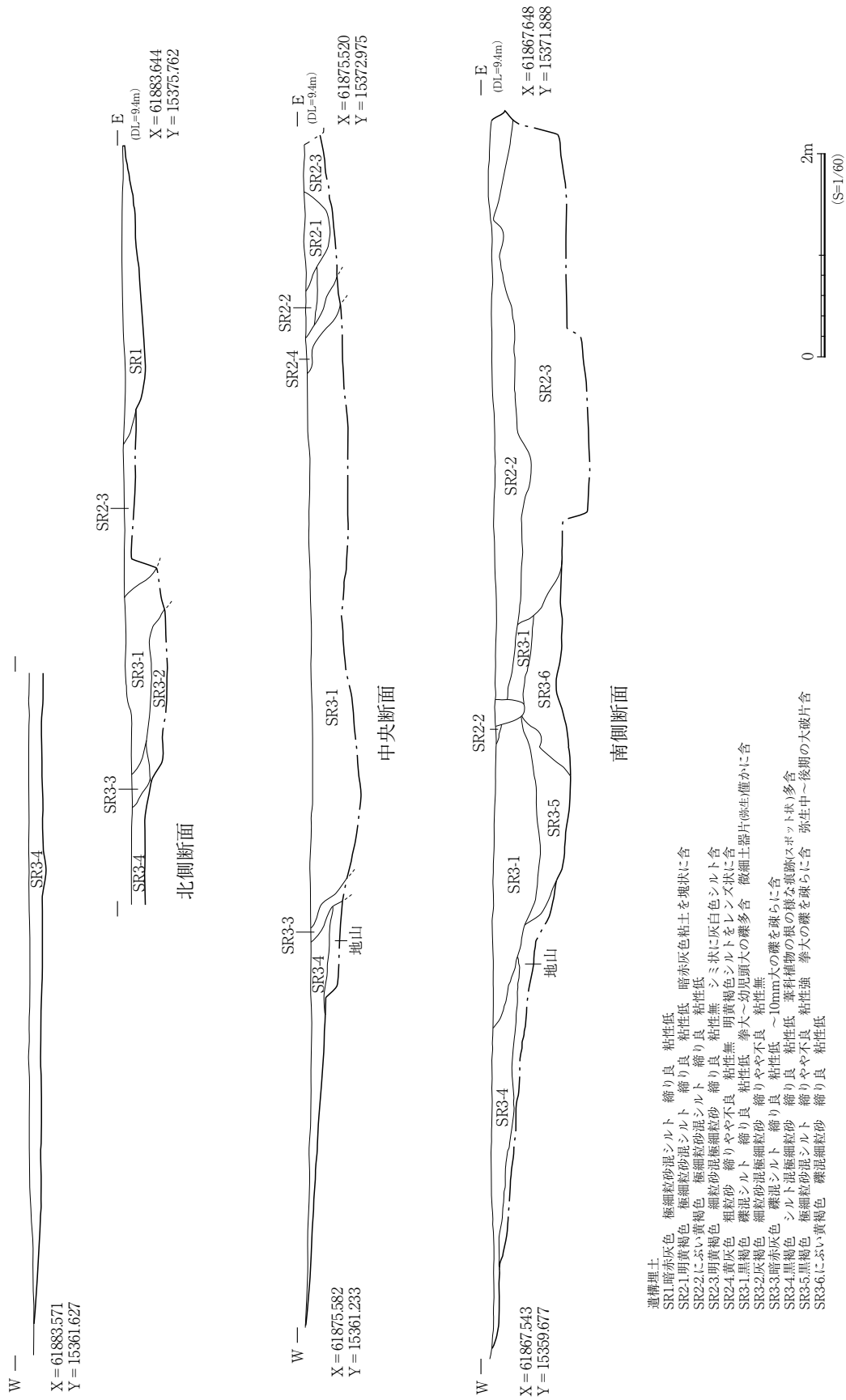
遺構名	位置	長軸	短軸	深さ (床面)	柱穴		中央ピット		備考	
					直径	深さ	長軸	深さ		
ST1	IV－4東	6.24	6.06	0.37	0.19～ 0.34	0.14～ 0.36	0.70	0.48	第4層	SK52に切られる
ST2	IV－4東	6.37	6.02	0.24	0.21～ 0.46	0.08～ 0.43	1.20	0.16	周縁部の一部にのみ微細炭化物	SD8に切られる

計測値は m
※「柱穴」は推定含む



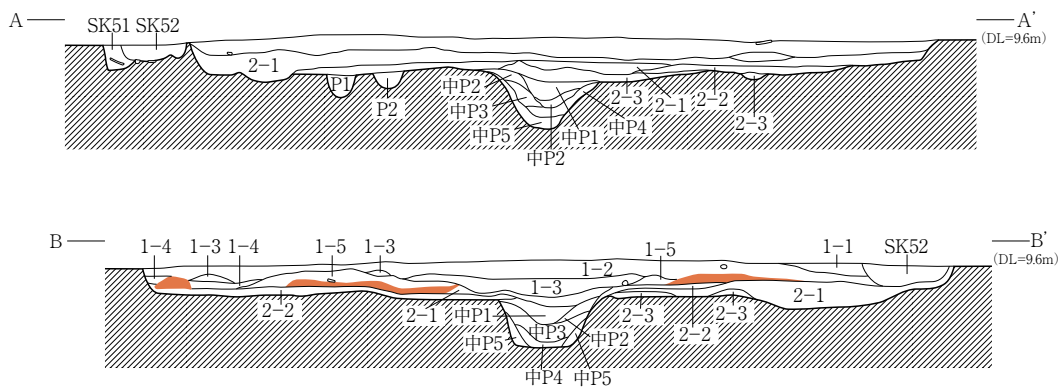
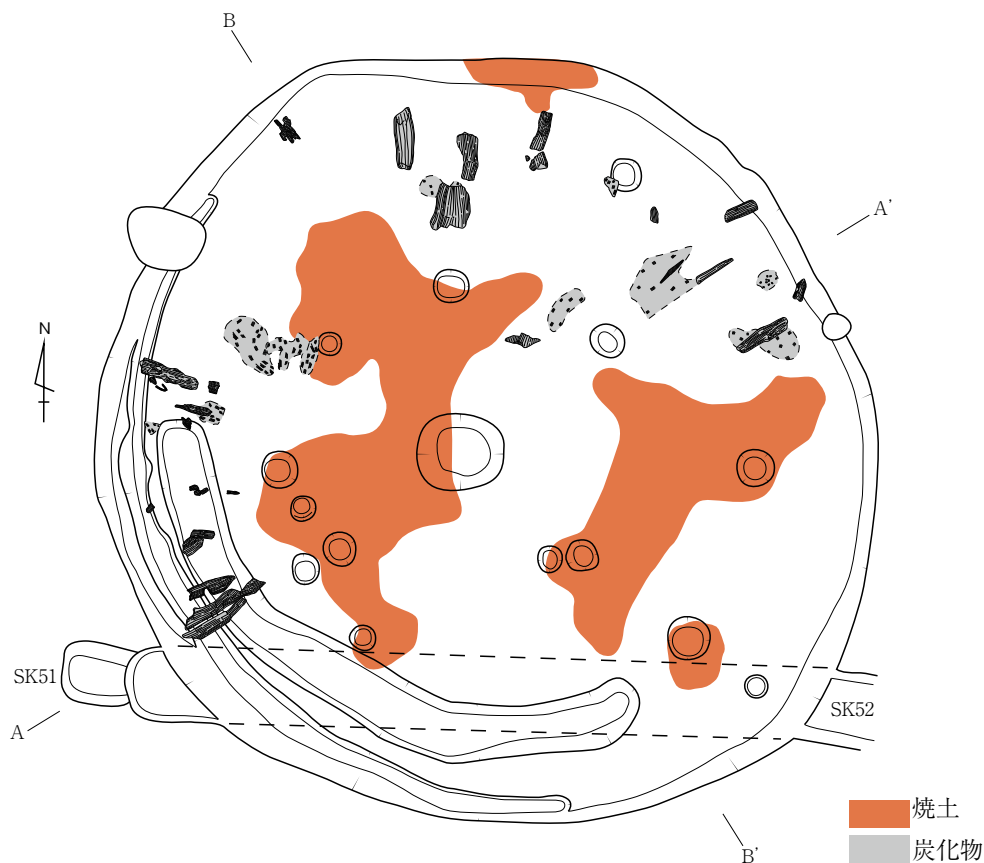


図IV-84 4区 基本層準図2



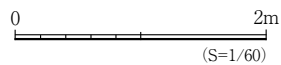
- 遺構埋土
- SR1 暗赤灰色 極細粒砂混シルト 粘り良 粘性低
 - SR2-1 明黄褐色 極細粒砂混シルト 粘り良 粘性低
 - SR2-2 灰白〜黄褐色 極細粒砂混シルト 粘り良 粘性低
 - SR2-3 明黄褐色 細粒砂混極細粒砂 粘り良 粘性無 シミ状に灰白色シルト含
 - SR2-4 黄灰色 粗粒砂 粘りやや不良 粘性無 明黄褐色シルトをレンズ状に含
 - SR3-1 黒褐色 礫混シルト 粘り良 粘性低 礫大〜幼児頭大の礫多含 微細土器片(破片)僅かに含
 - SR3-2 灰褐色 細粒砂混極細粒砂 粘りやや不良 粘性無
 - SR3-3 暗赤灰色 礫混シルト 粘り良 粘性低 ~10mm大の礫を疎らに含
 - SR3-4 黒褐色 シルト混極細粒砂 粘り良 粘性低 葦科植物の根の様な遺跡(ポット)多含
 - SR3-5 黒褐色 極細粒砂混シルト 粘りやや不良 粘性強 礫大の礫を疎らに含 弥生中〜後期の土破片含
 - SR3-6 灰〜黄褐色 礫混細粒砂 粘り良 粘性低

図IV-85 4区 SR2・3断面図

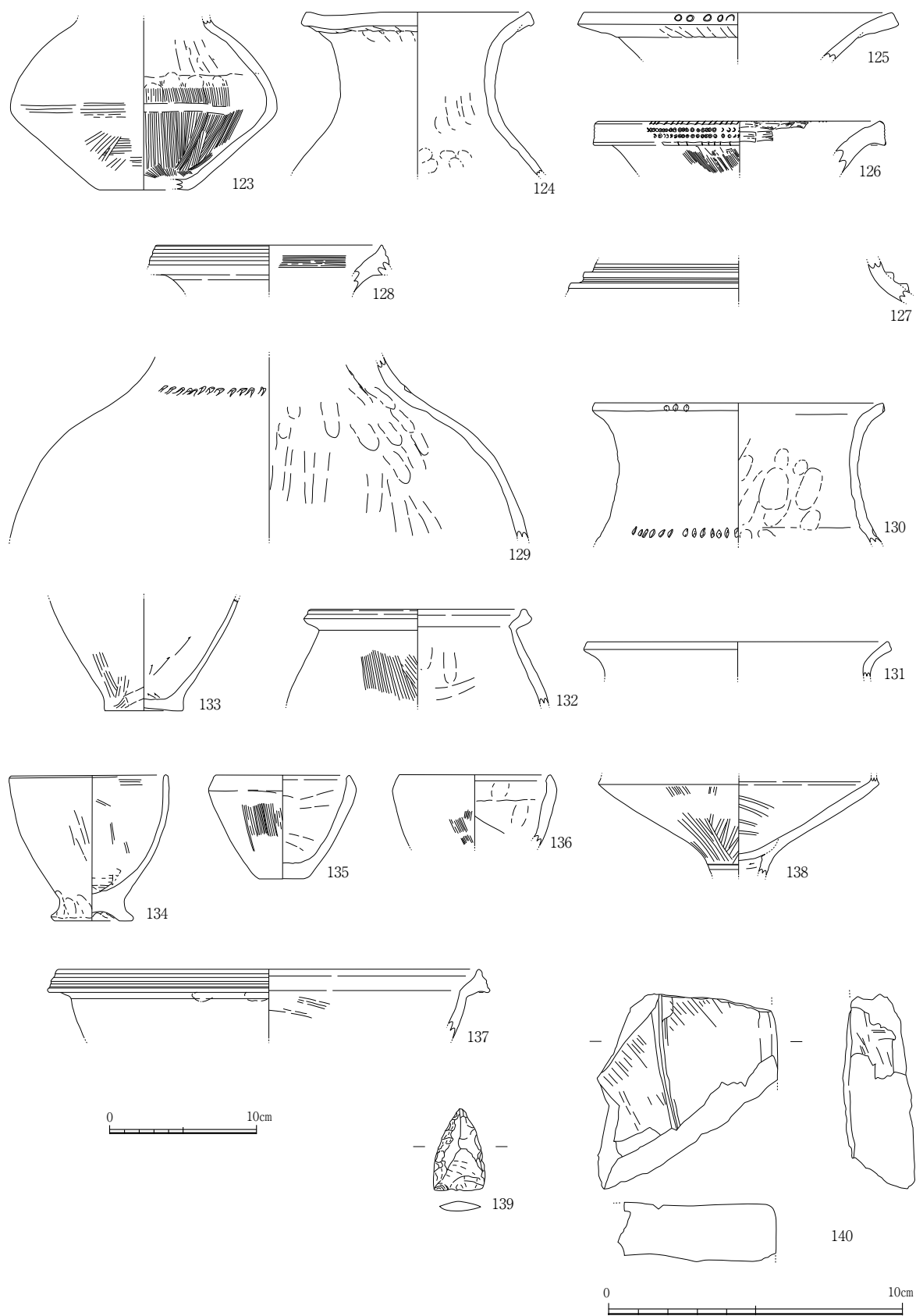


遺構埋土

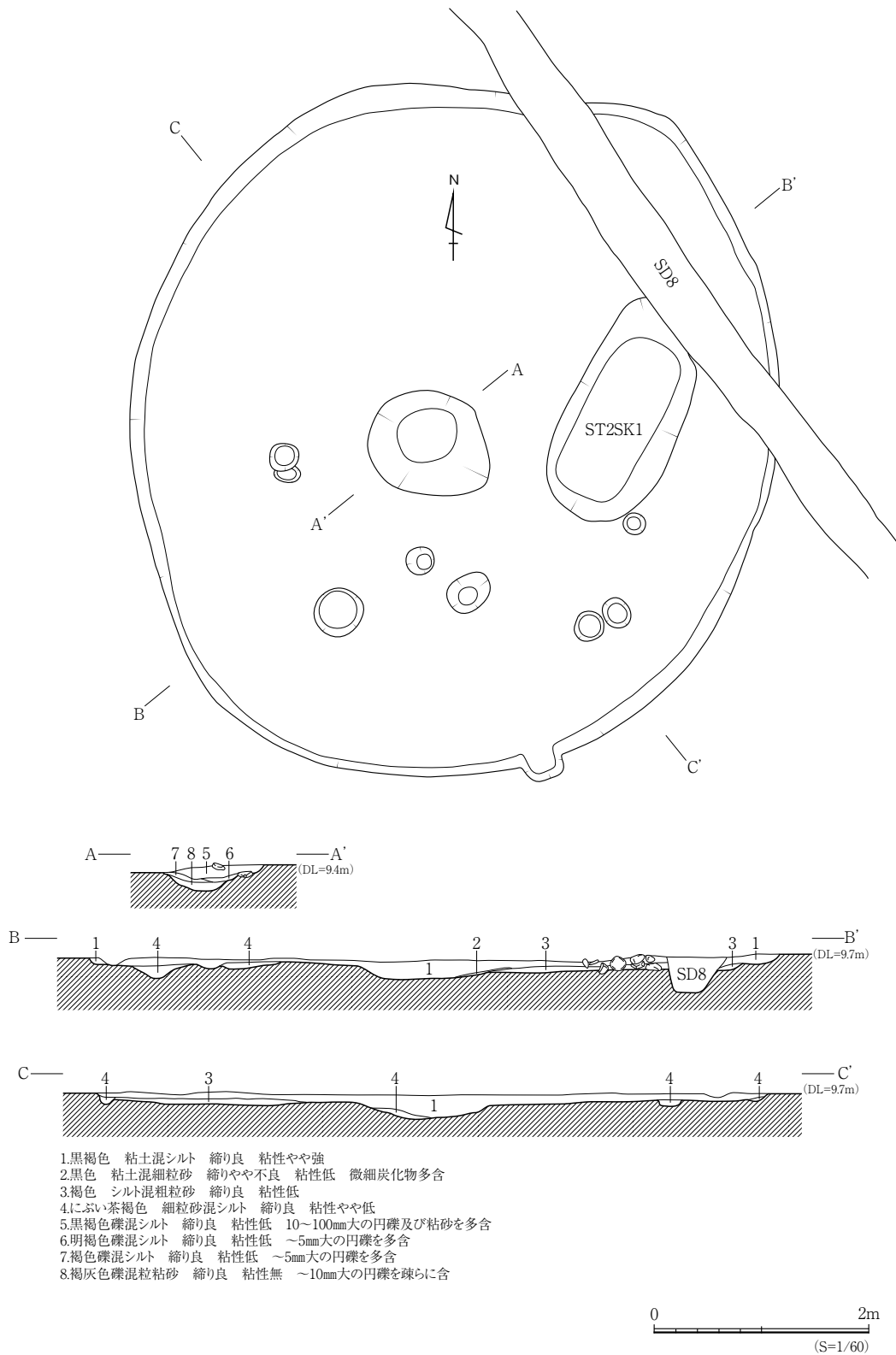
- 1-1. 灰黄褐色礫混シルト 締り良 粘性強 シミ状に褐灰色シルト含 20mm大の円礫を疎らに含
- 1-2. 褐色細粒砂混シルト 締り良 粘性やや強 微細炭化物及び微細焼土含
- 1-3. 灰褐色粘土混シルト 締り良 粘性強 シミ状に焼土含
- 1-4. 灰褐色シルト混粘土 締りやや不良 粘性強 シミ状に微細炭化物含
- 1-5. 灰褐色細粒砂混シルト 締り良 粘性低 ~5mm大の炭化物及び~10mm大の焼土ブロックを疎らに含
- 2-1. 灰褐色礫混シルト 締り良 粘性やや強 シミ状に焼土シルト含 微細炭化物多
- 2-2. 明赤褐色礫混細粒砂 締り良 粘性無 塊状に焼土シルトを含 微細炭化物多
- 2-3. 灰褐色細粒砂混シルト 締り良 粘性やや低 薄くシミ状に焼土シルトを含 微細炭化物多
- 中P1. 灰褐色粗粒砂混シルト 締り良 粘性強 ~5mm大の炭化物及び焼土シルト
- 中P2. 赤褐色細粒砂混シルト 締り良 粘性やや強 シミ状に焼土を含
- 中P3. 灰褐色シルト混粘土 締り良 粘性強 塊状に焼土含 微細炭化物多
- 中P4. 灰赤色細粒砂混シルト 締り良 粘性強 シミ状に焼土含
- 中P5. 灰褐色細粒砂混粘土 締りやや不良 粘性強 粘土状になった炭化物疎混
- SK51. 細粒砂混シルト 締り良 粘性やや強
- P1.2. 壁溝と同じ埋土



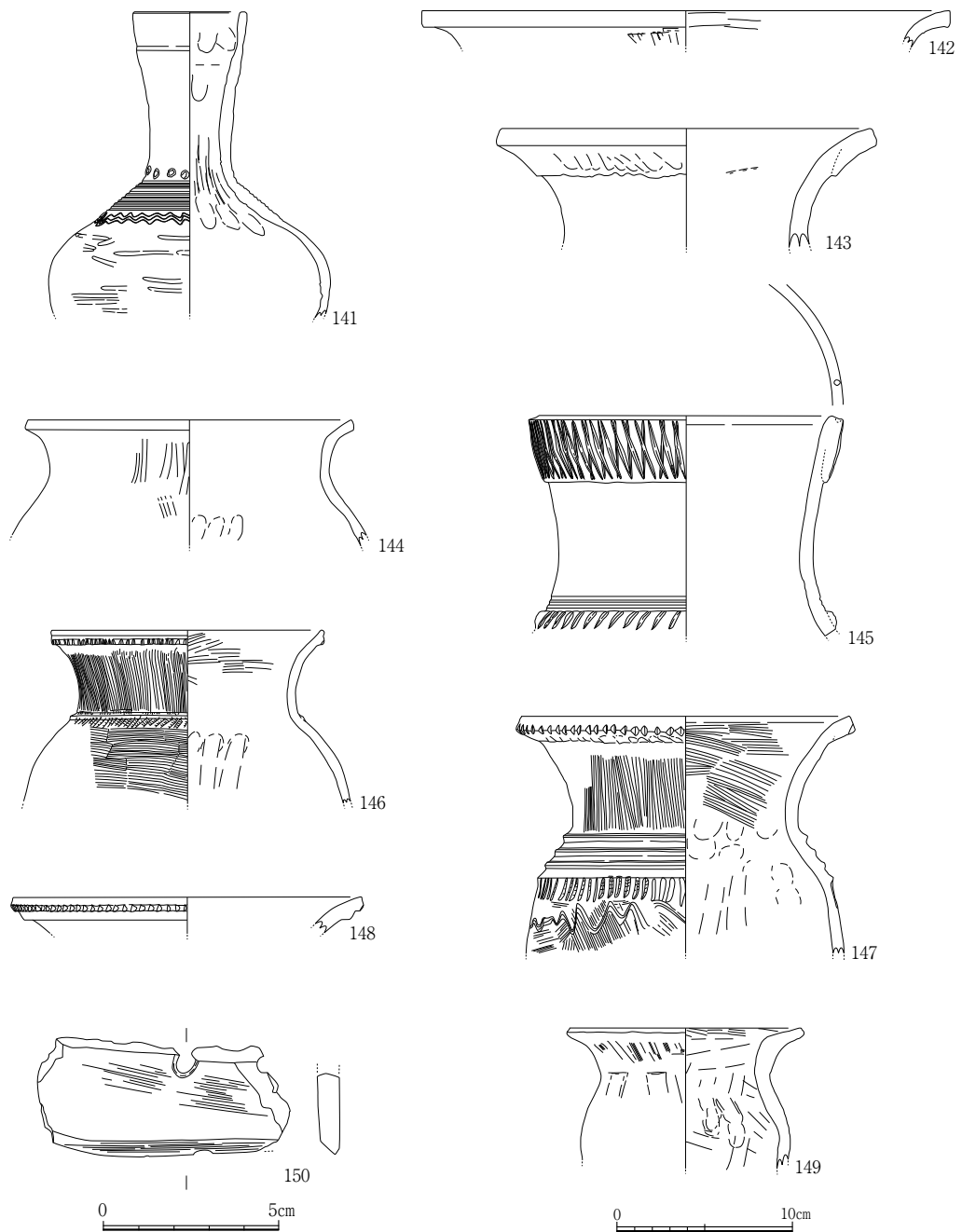
図IV-86 4区 ST1 平断面図



图IV-87 4区 ST1出土遗物



図IV-88 4区 ST2平面断面図



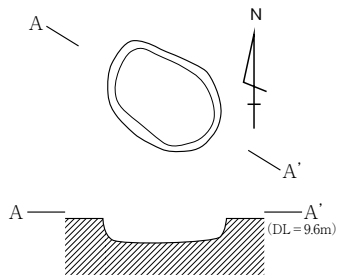
図IV-89 4区 ST2出土遺物

(2)土坑・性格不明遺構

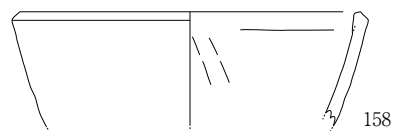
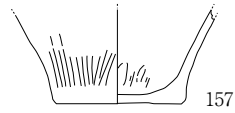
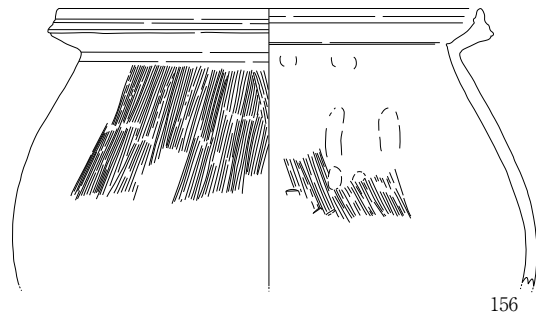
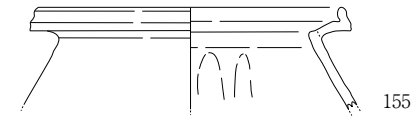
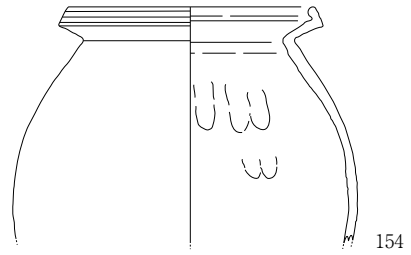
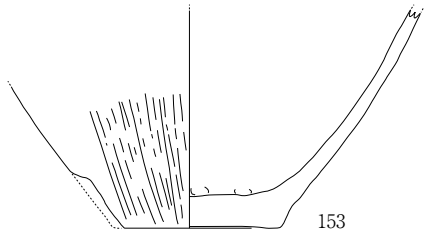
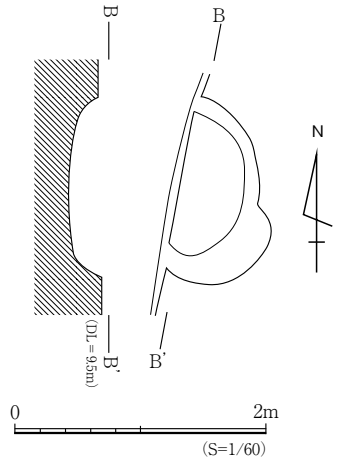
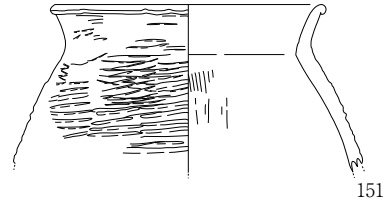
弥生時代に位置付けられる主な土坑・性格不明遺構は下記のごとく、出土遺物の詳細は後掲表8のとおりである。

(3)遺物集中

東部中央部で検出した。掲図した他にサヌカイト剥片8片が出土した。周辺のピット等との関係は、それらからの出土遺物が僅少かつ細片で判断し難い。

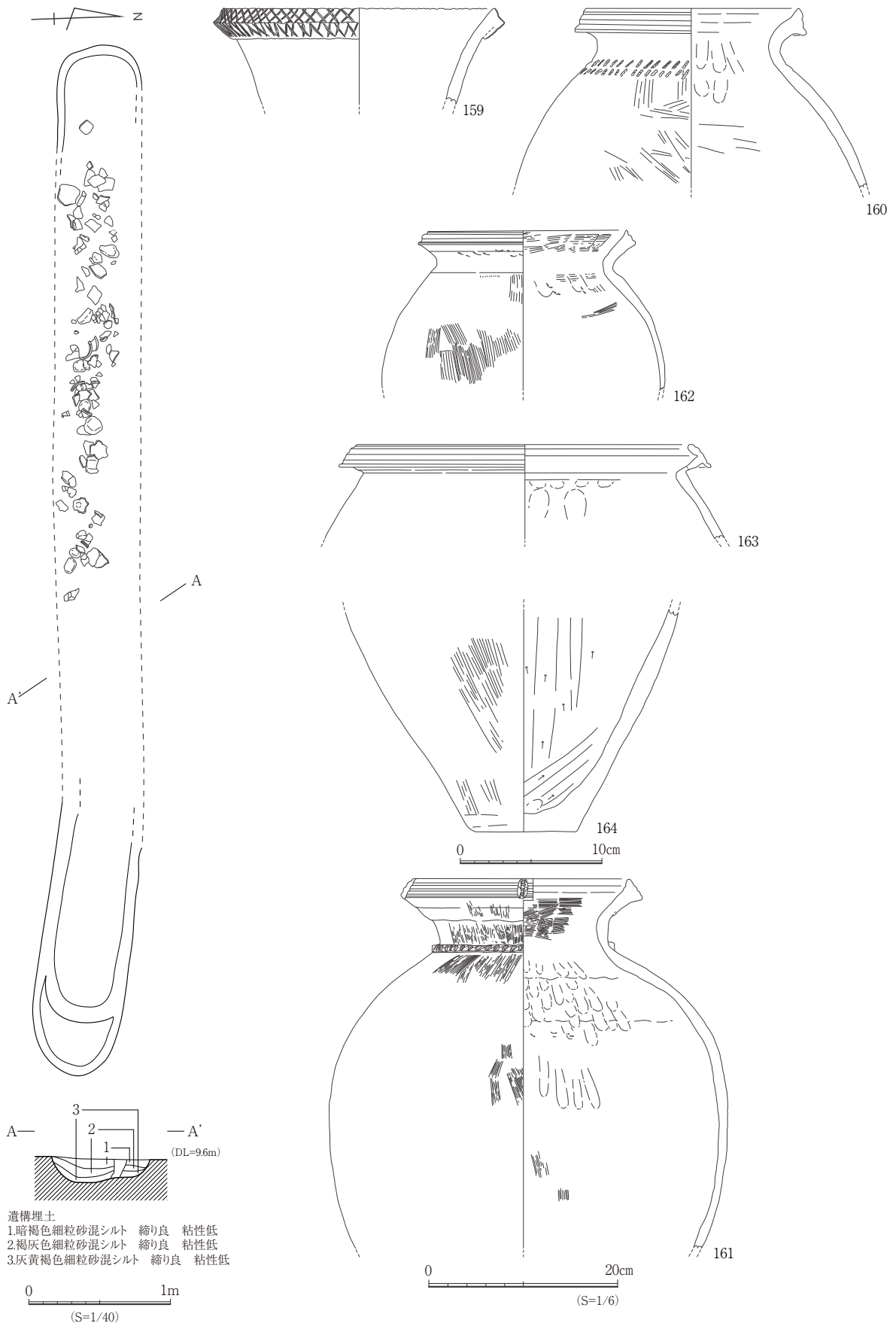


SK1

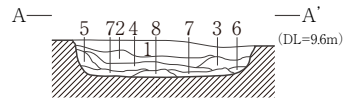
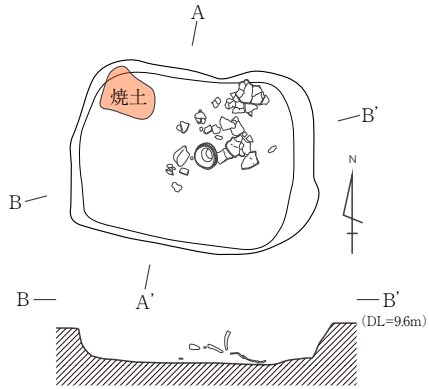


SK4

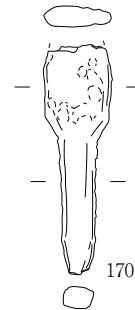
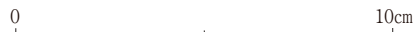
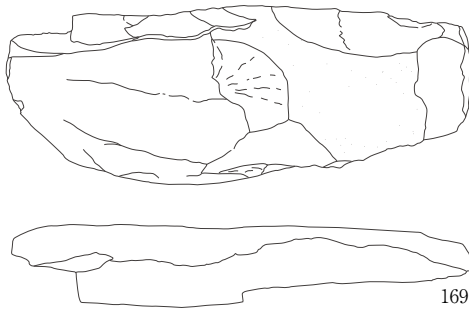
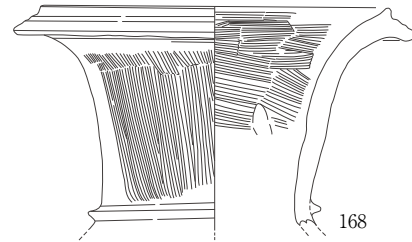
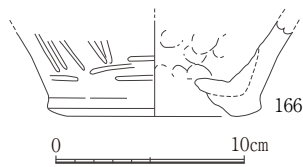
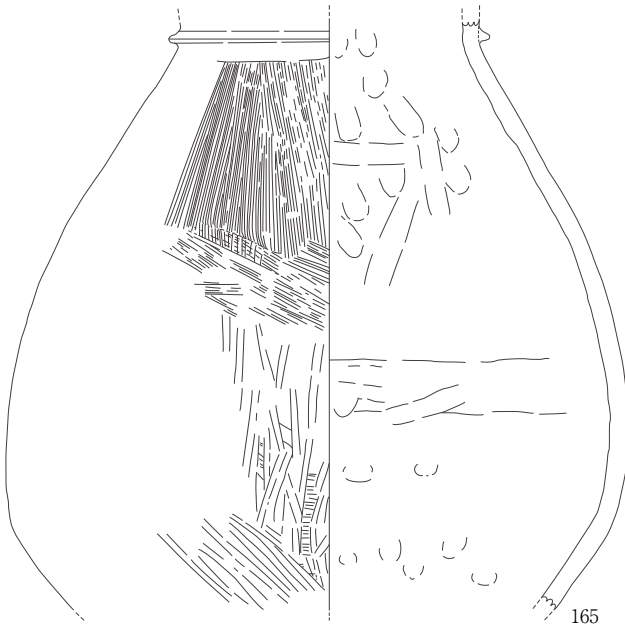
图IV-90 4区 SK1·4



図IV-91 4区 SK52



- 1.黄灰色細粒砂混シルト 締り良 粘性低
10mm大の円礫僅含
- 2.灰色中粒砂混シルト 締り良 粘性低
10-15mm大の円礫僅含 におい黄褐色シルトをシミ状に含
- 3.黄灰色細粒砂混シルト 締り良 粘性低
オリブ黒色シルトをシミ状に含
- 4.黄灰色中粒砂混シルト 締り良 粘性低
5mm大の円礫極僅含
- 5.灰黄褐色細粒砂シルト 締り良 粘性やや強
- 6.黄灰色粘土混シルト 締りやや不良 粘性強
- 7.黒褐色シルト混粘土 締りやや不良 粘性強
赤褐色シルトの焼土塊と微細炭化物多含
- 8.黒褐色シルト混粘土 締りやや不良 粘性強



図IV-92 4区 SK57

(4)溝・溝状遺構

弥生土器のみが数片以上出土しているものはSD7, 9, 12の3条である。出土遺物で図示できるものはない。SD7出土遺物にはタタキを施した土器片がある。各遺構の規模等は表3に記す。

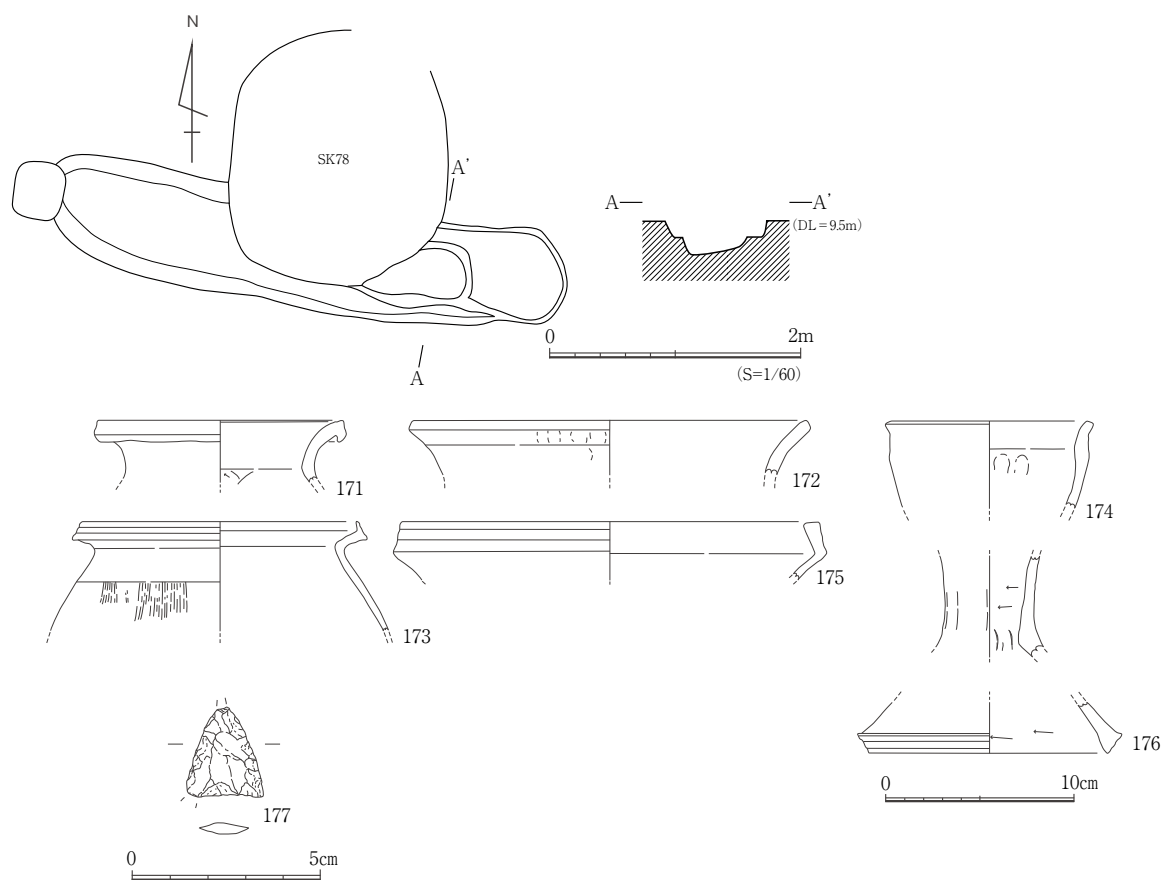
(5)流路跡または落込み

上面・下面で検出した遺構群の基層には弥生土器が包含され、東へ落込むことが判明したのでSR2および3とした。規模が大きいため完掘はしていない。東肩は検出できなかったが、図IV-83のSRcが該当する可能性がある。

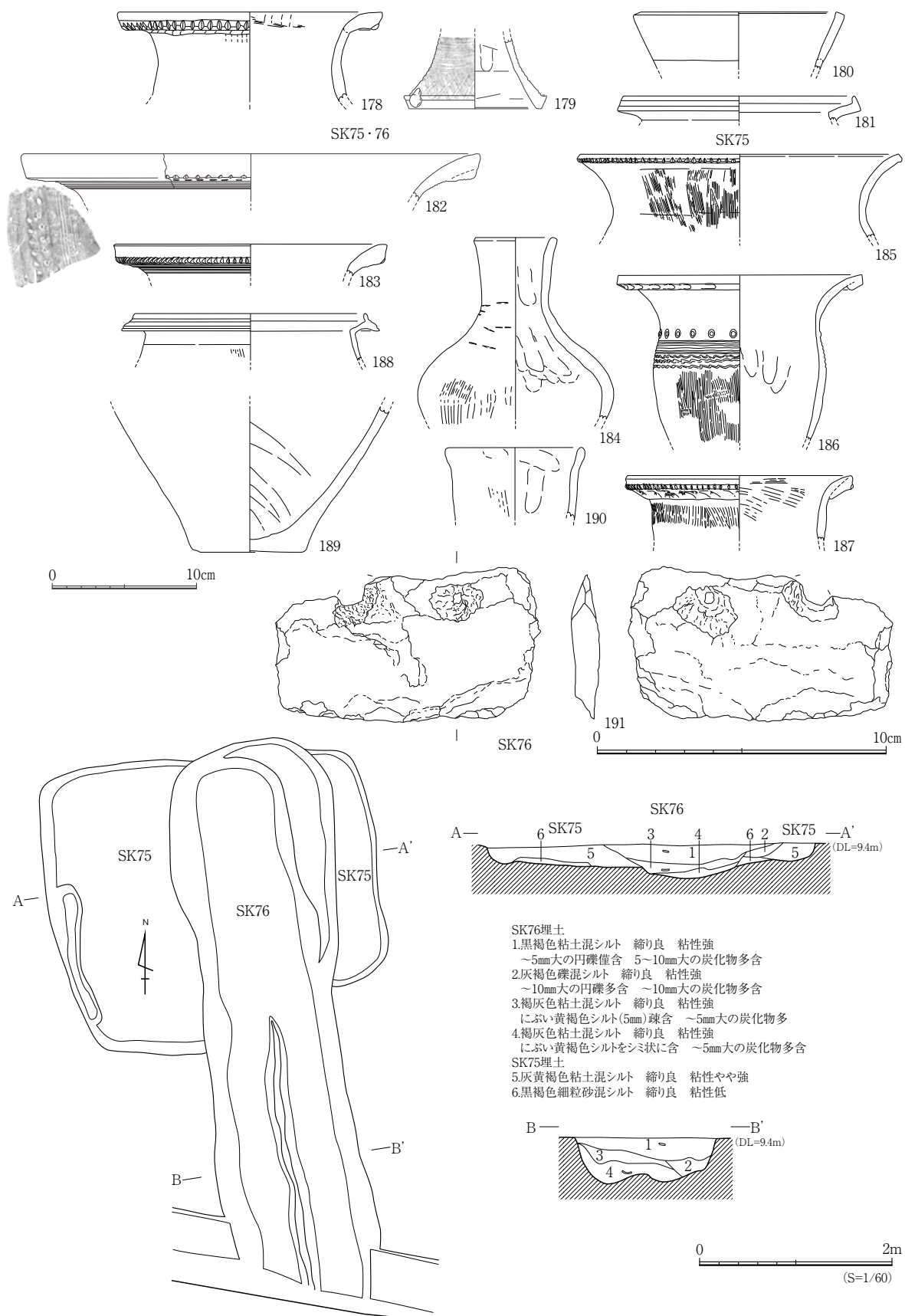
2) 古代以降等

(1)掘立柱建物・柱穴列

調査区全体図のごとく検出された多数のピットから、掘立柱建物跡の存在も多数想定されるが、ピットが密集する部分では建替えを含む個々の建物を確定することが難しい。存在すべき位置に柱穴が検出されていない例や、1棟を構成するとみられる柱穴に、既述の「上層」で検出できたものと「下層」で検出したものが混在する例も多い。なお、遺構名をSAとしたものにも掘立柱建物跡の一部である可能性のあるものがある。当小区の東・西で遺構密度が異なる。



図IV-93 4区 SK72

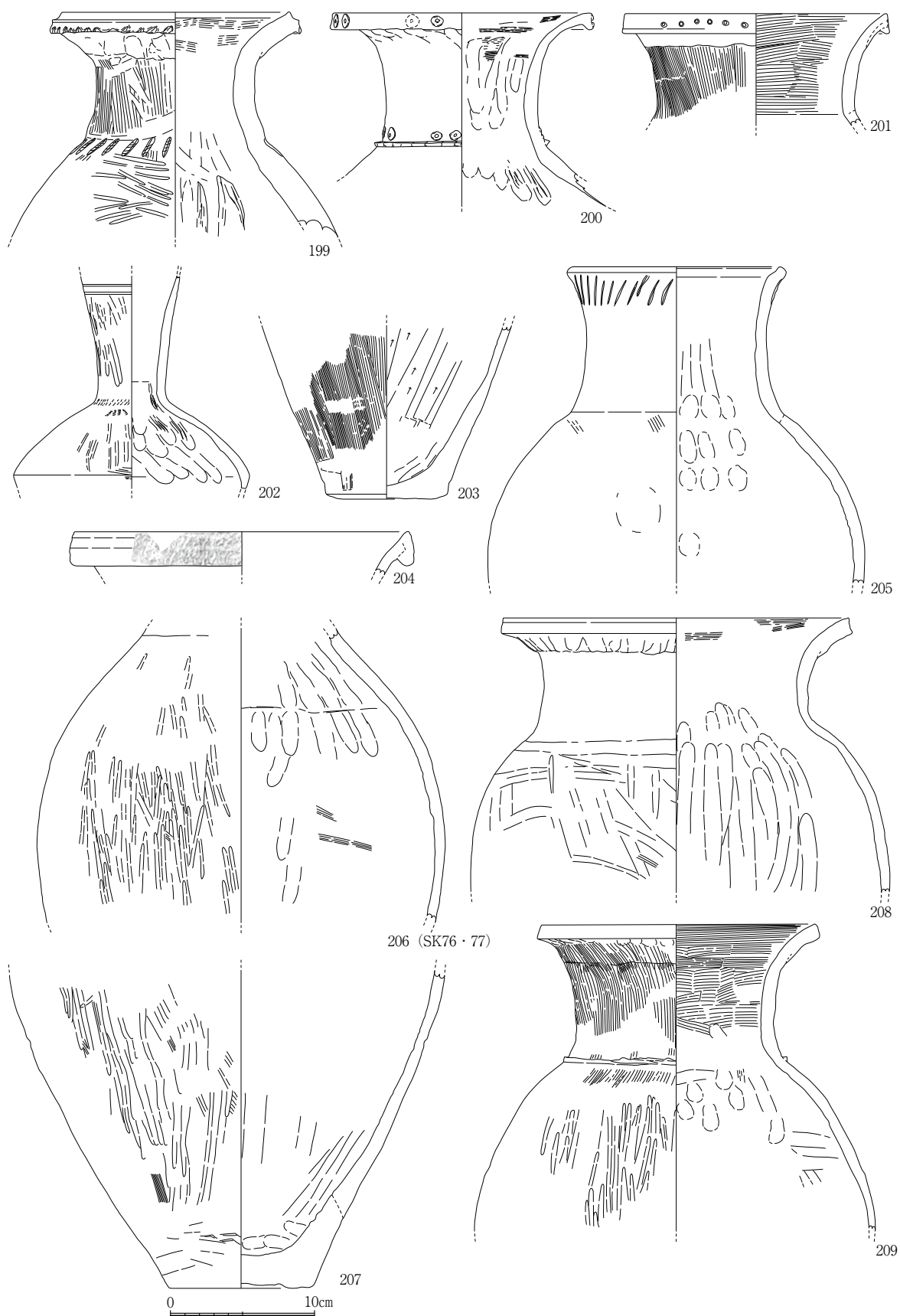


- SK76埋土
- 1.黒褐色粘土混シルト 締り良 粘性強
～5mm大の円礫僅含 5～10mm大の炭化物多含
 - 2.灰褐色礫混シルト 締り良 粘性強
～10mm大の円礫多含 ～10mm大の炭化物多含
 - 3.褐灰色粘土混シルト 締り良 粘性強
にぶい黄褐色シルト(5mm)疎含 ～5mm大の炭化物多
 - 4.褐灰色粘土混シルト 締り良 粘性強
にぶい黄褐色シルトをシミ状に含 ～5mm大の炭化物多含
- SK75埋土
- 5.灰黄褐色粘土混シルト 締り良 粘性やや強
 - 6.黒褐色細粒砂混シルト 締り良 粘性低

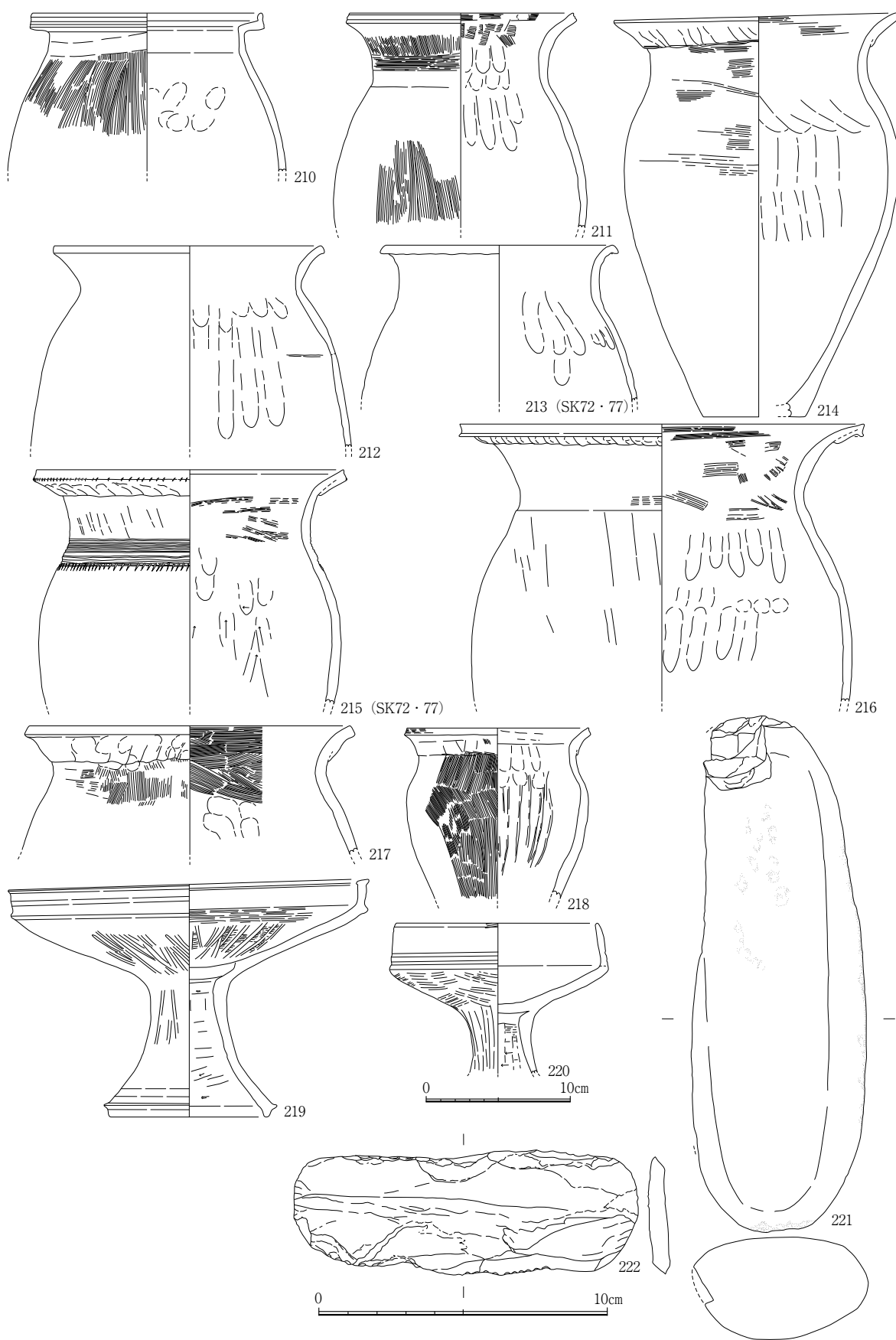
図IV-94 4区 SK75・76



図IV-95 4区 SK77(1)



图IV-96 4区 SK77(2)出土遗物



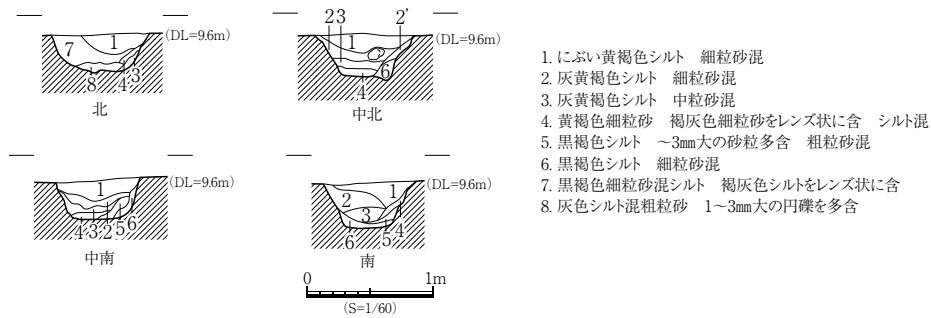
图IV-97 4区 SK77(3)出土遗物

柱穴の平面形は、方形基調で長軸1m前後を測る建物と、円形で20数～数10cmの建物に大きく分かれる。全容がわかるものでは、桁行4～5間が当区での最大規模である。

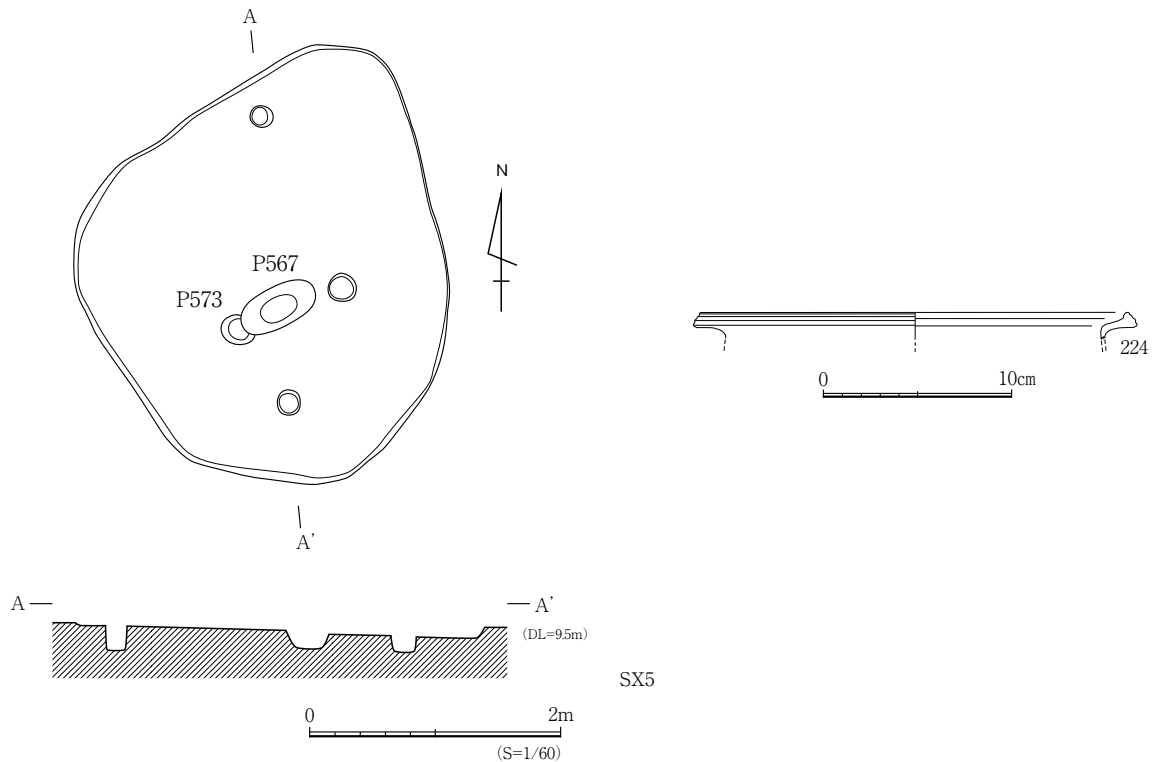
建物の主軸方位角は、IV-8区も併せて $-7^{\circ} \sim -6^{\circ}$ 、 $-2^{\circ} \sim 2^{\circ}$ 、 $11^{\circ} \sim 16^{\circ}$ （角度表記はP130）の概ね3群を認識できる。遺物は、表4・5のごとくである。

(2)土坑・性格不明遺構

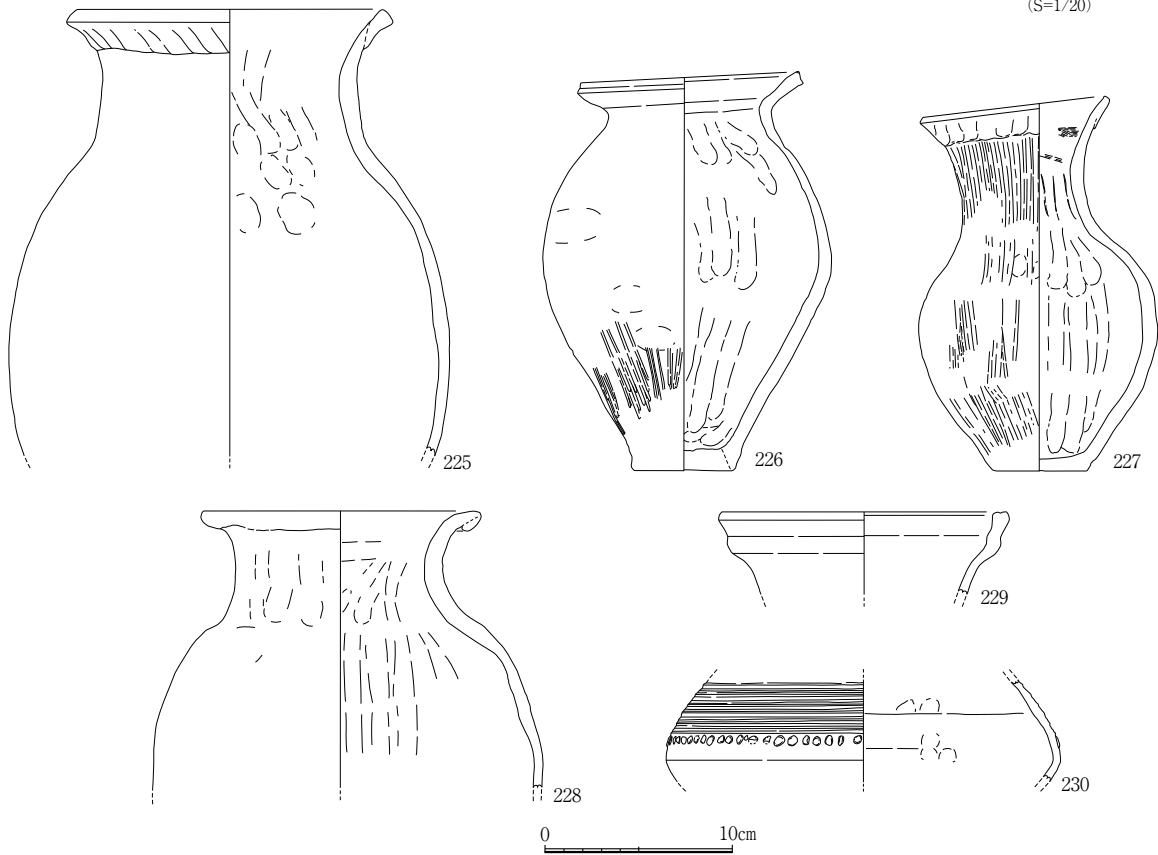
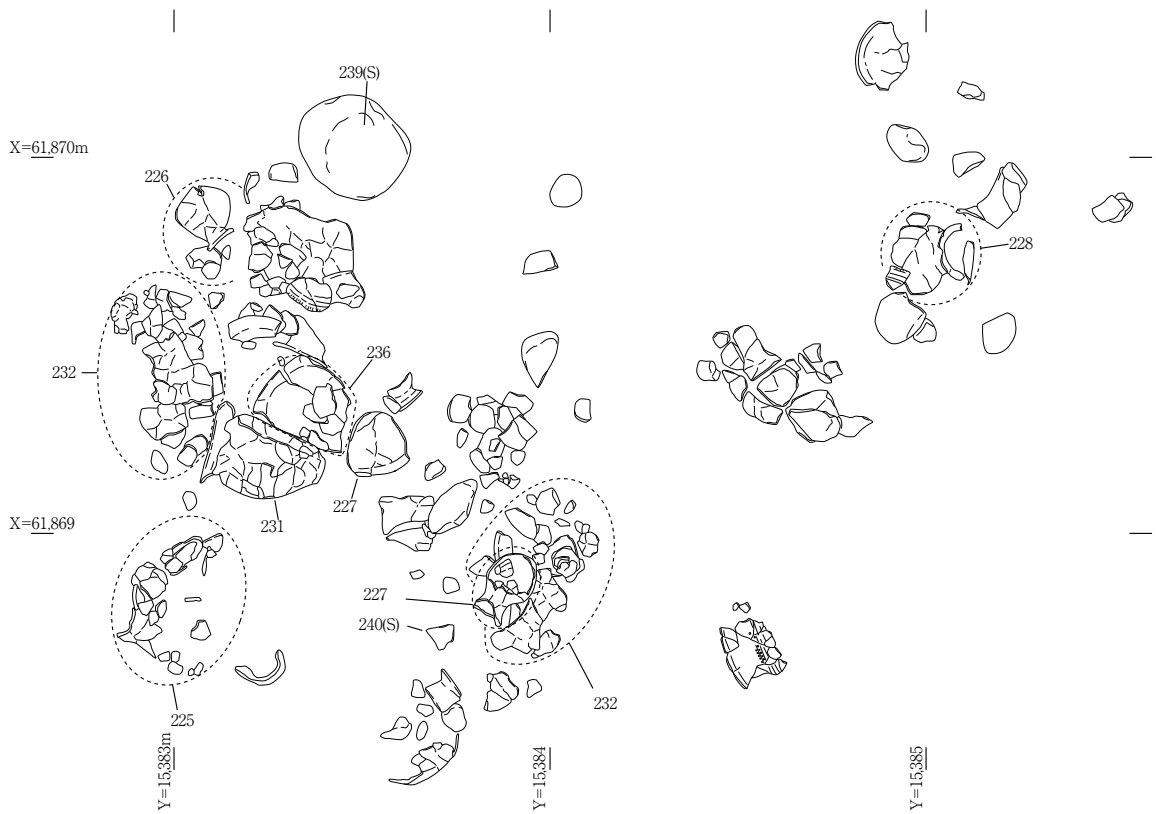
遺構名をSKとしたもののうち、掘立柱建物の柱穴であったもの、あるいはその可能性のあるものは当区では少なくない。全体に瓦器の出土率が高いとは言えない中で、瓦器碗や同皿が出土した遺構もある。



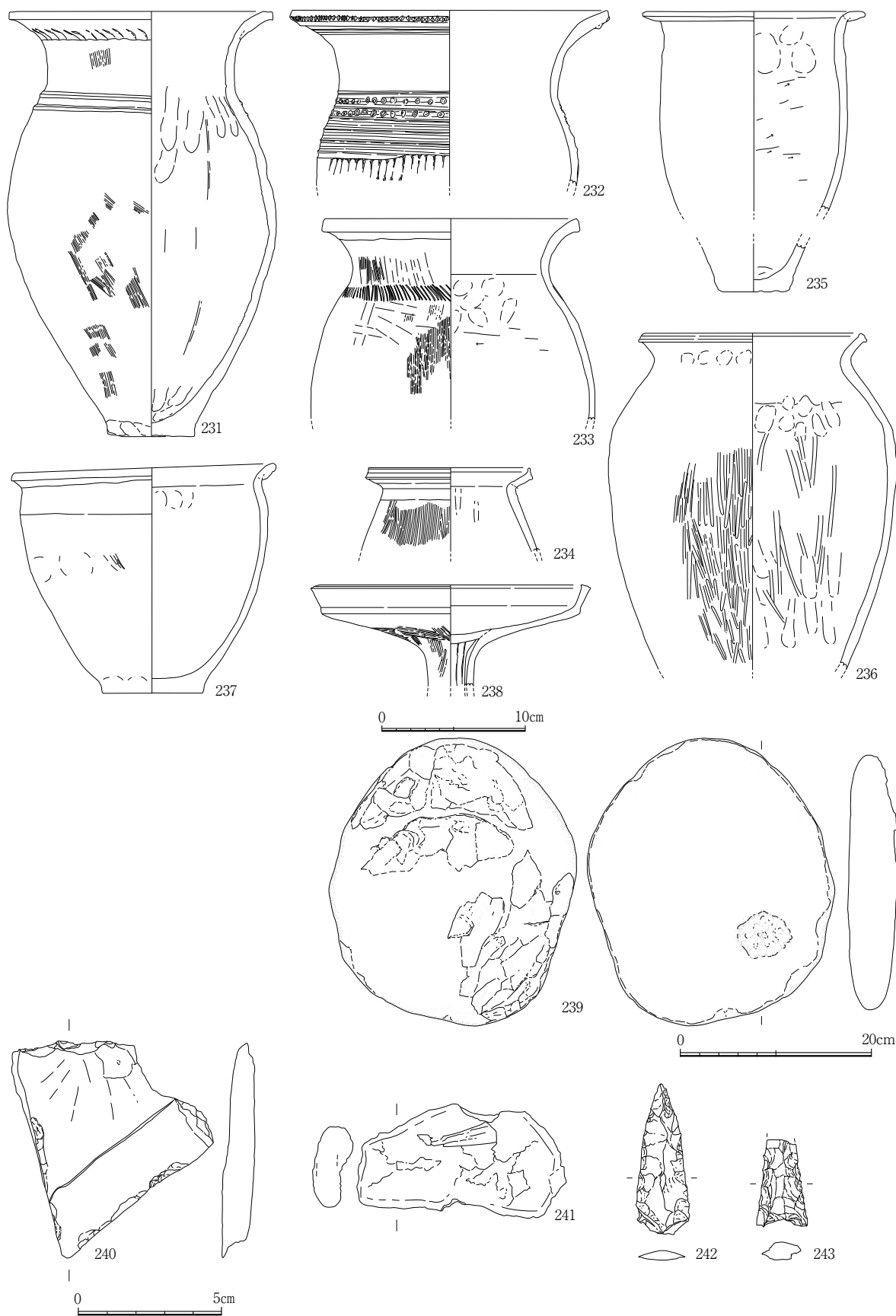
図IV-98 4区SD7断面図



図IV-99 4区SX5



图IV-100 4区 土器集中1平面图·出土遗物



图IV-101 4区 土器集中1出土遗物

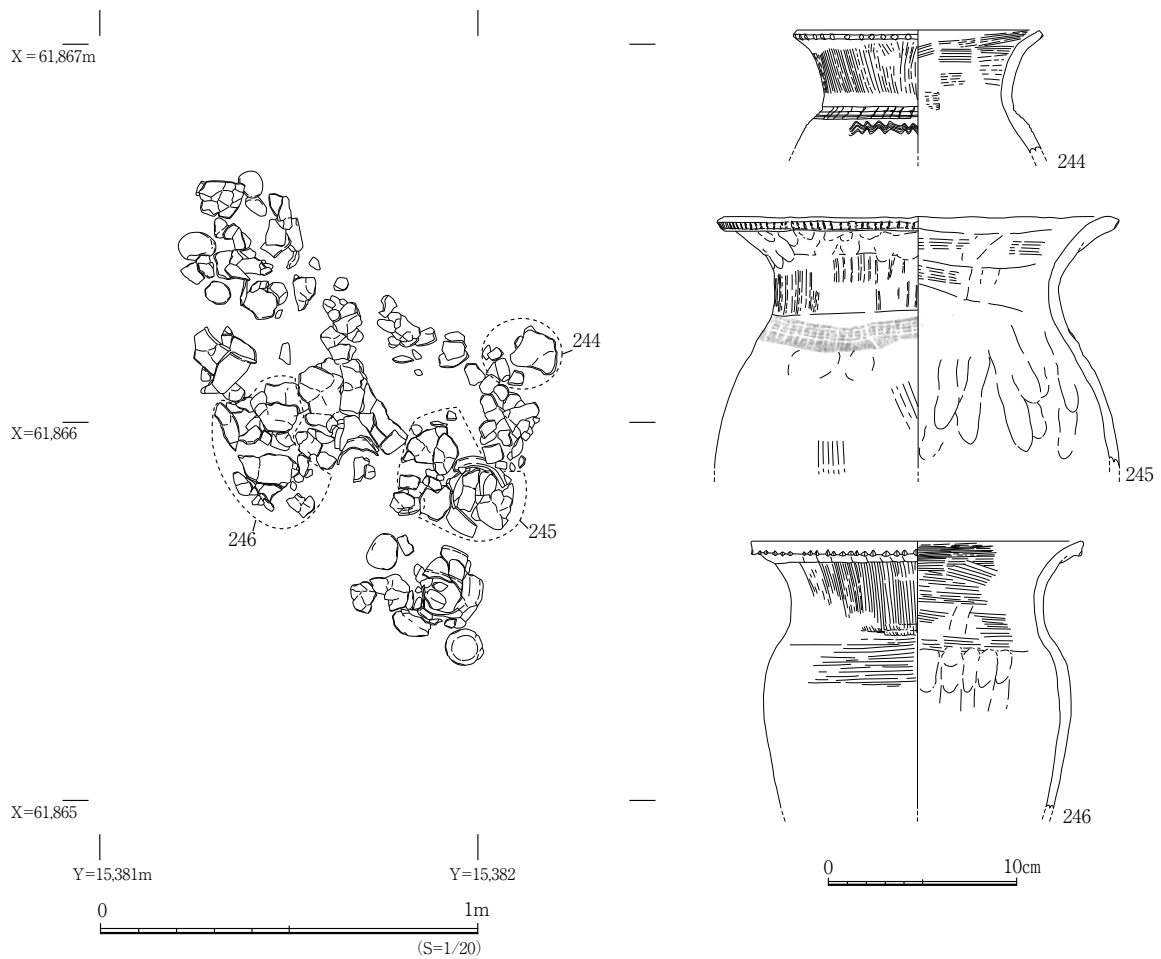
(3)溝

表7には、出土遺物等からみて時期が不明確なもの等を含む。

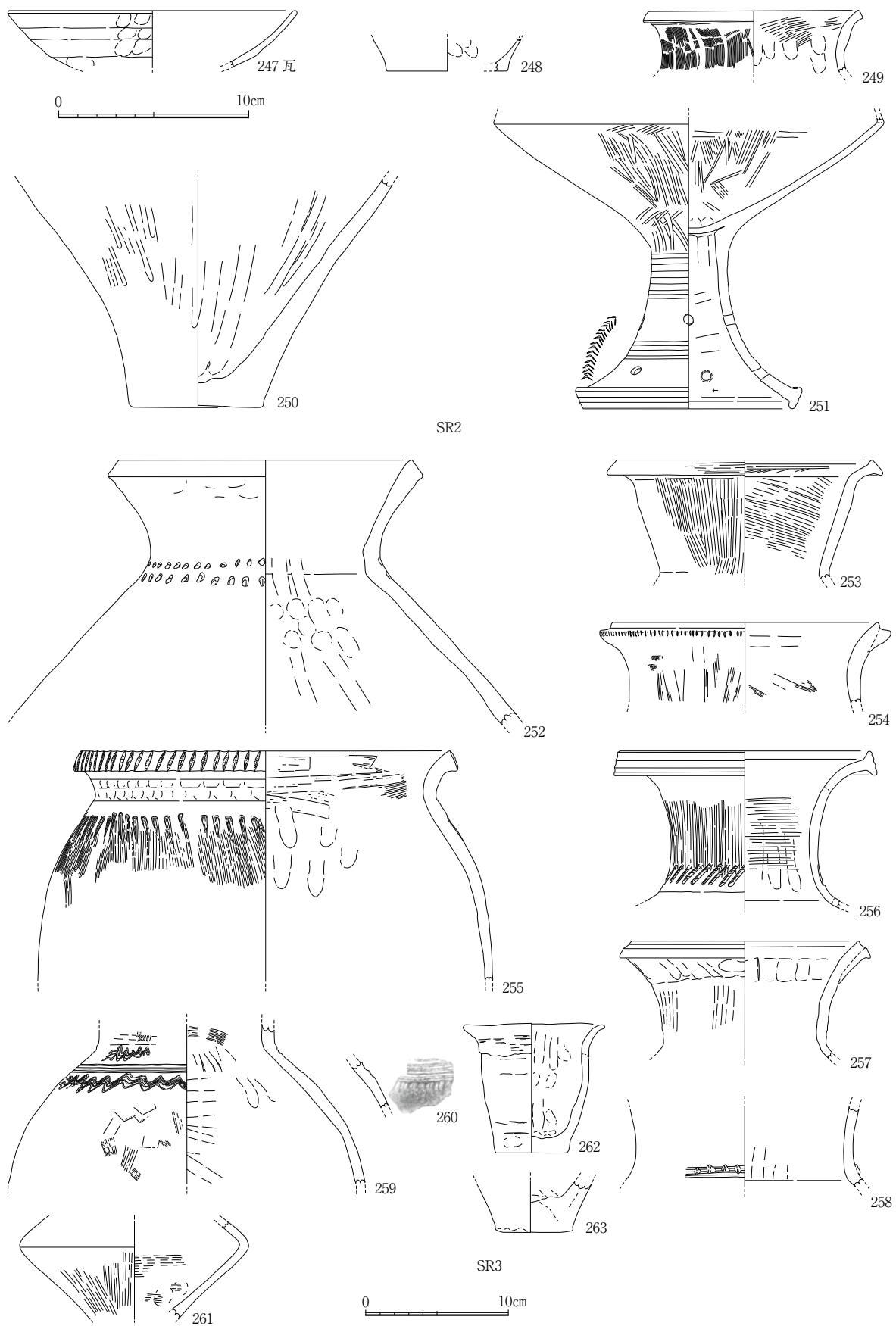
(4)ピット

出土遺物のあるものおよび掘立柱建物等を構成するものを表5-1に記す。供膳具を埋納したとみられる例もある。

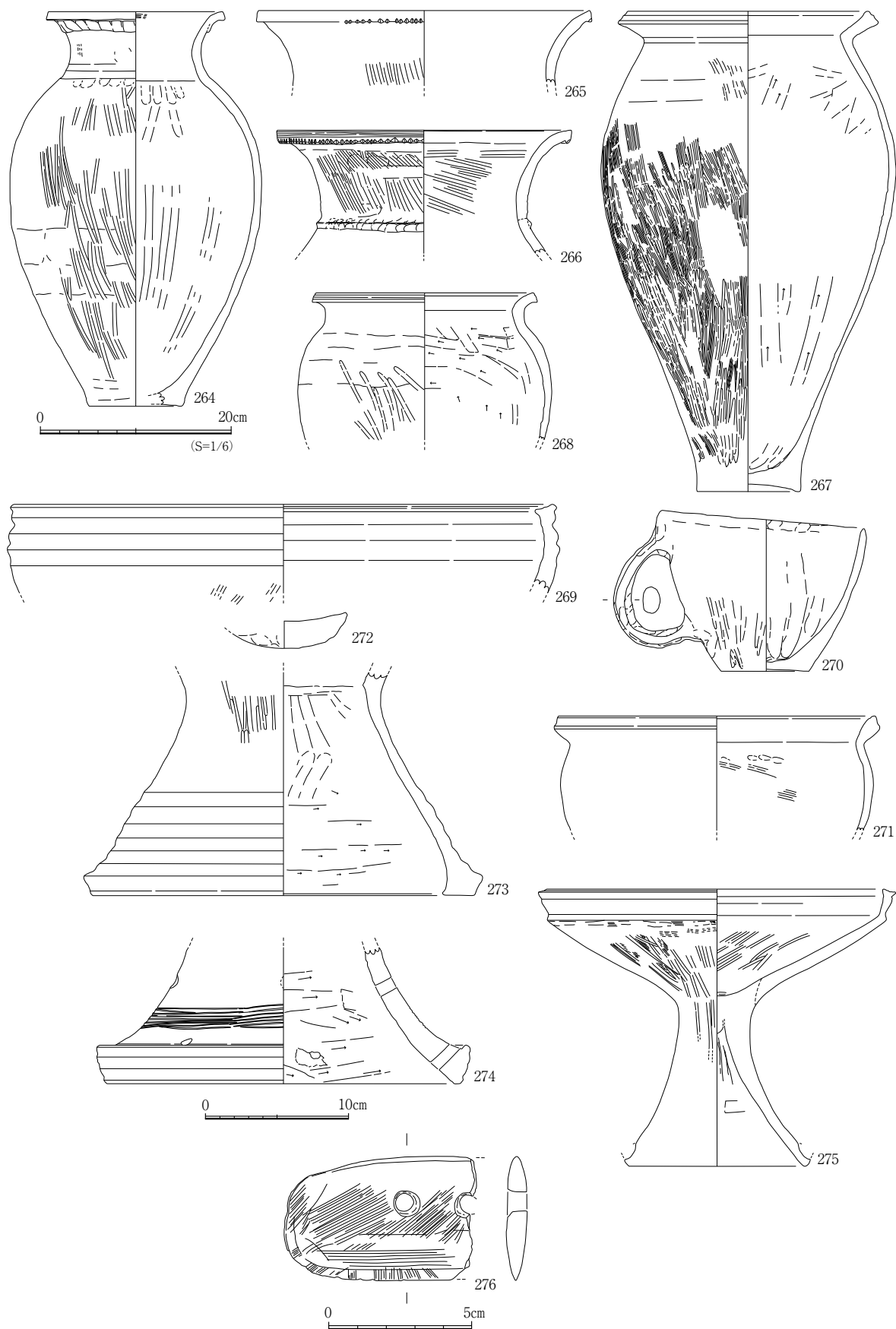
調査区中央部に、東西、南北方位のピット集中帯があるが、時期や性格は不明瞭である。



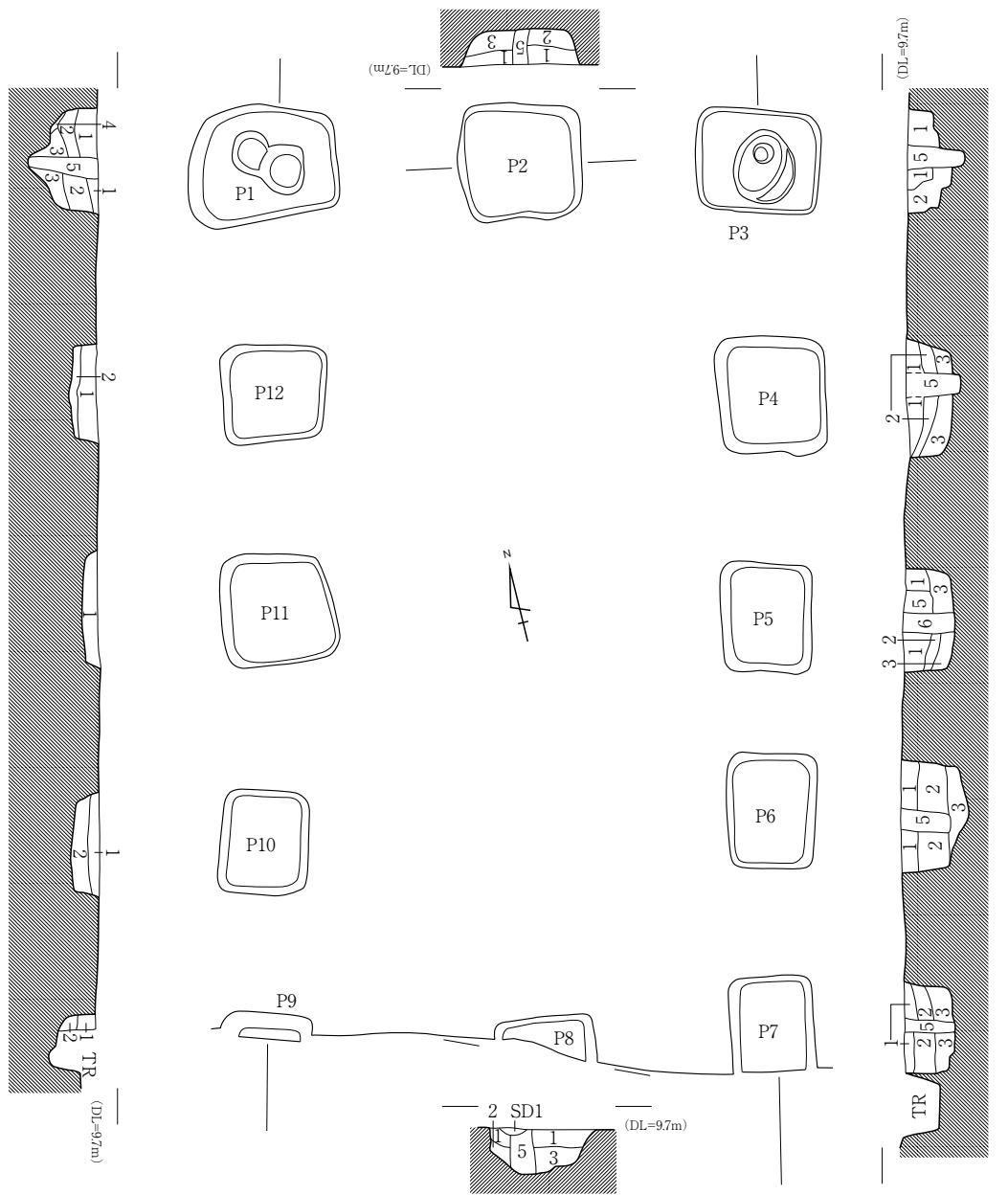
図IV-102 4区 土器集中3平面図・出土遺物



图IV-103 4区 SR2·3出土遗物(1)

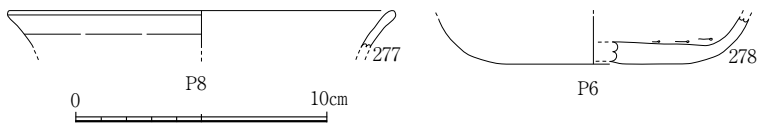


图IV-104 4区 SR3出土遗物(2)

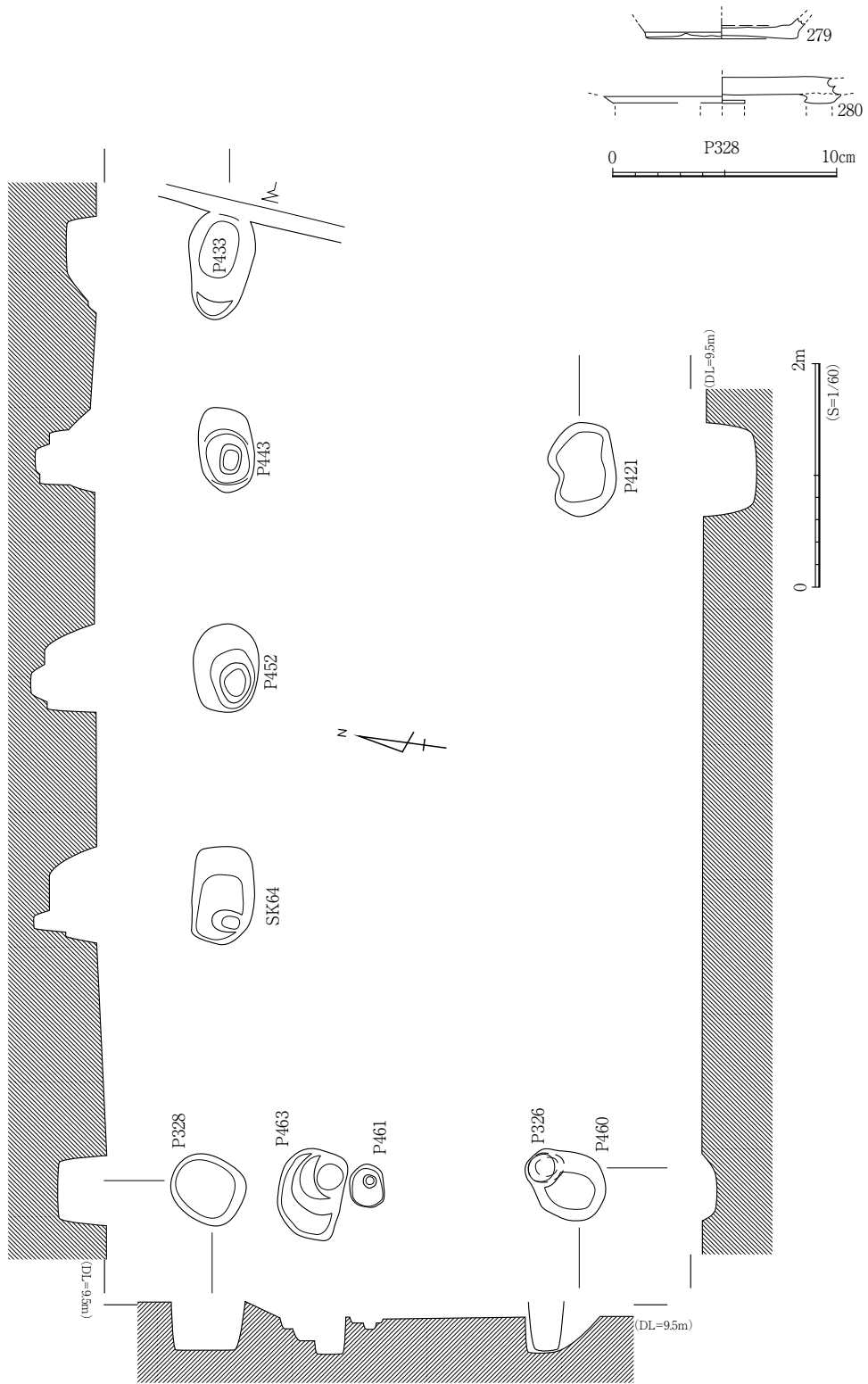


- 1. 灰黄色細粒砂混シルト 締り良 粘性低 暗灰黄色シルトを塊状に含 ~3mm大の円礫含
- 2. 黄灰色粘土混シルト 締り良 粘性やや強 暗灰黄色シルトを塊状に含
- 3. 黄褐色シルト混粘土 締り良 粘性やや強 黒褐色シルトを塊状に含
- 4. 黄灰色粘土混細粒砂 締り良 粘性無 灰黄色粘土を塊状に含
- 5. 黄灰色礫混細粒砂 締り良 粘性無 ~3mm大の円礫多含
- 6. 黄褐色礫混シルト 締り良 粘性低 ~3mm大の円礫多含 黄灰色粘土及び黒褐色シルトをシミ状に含

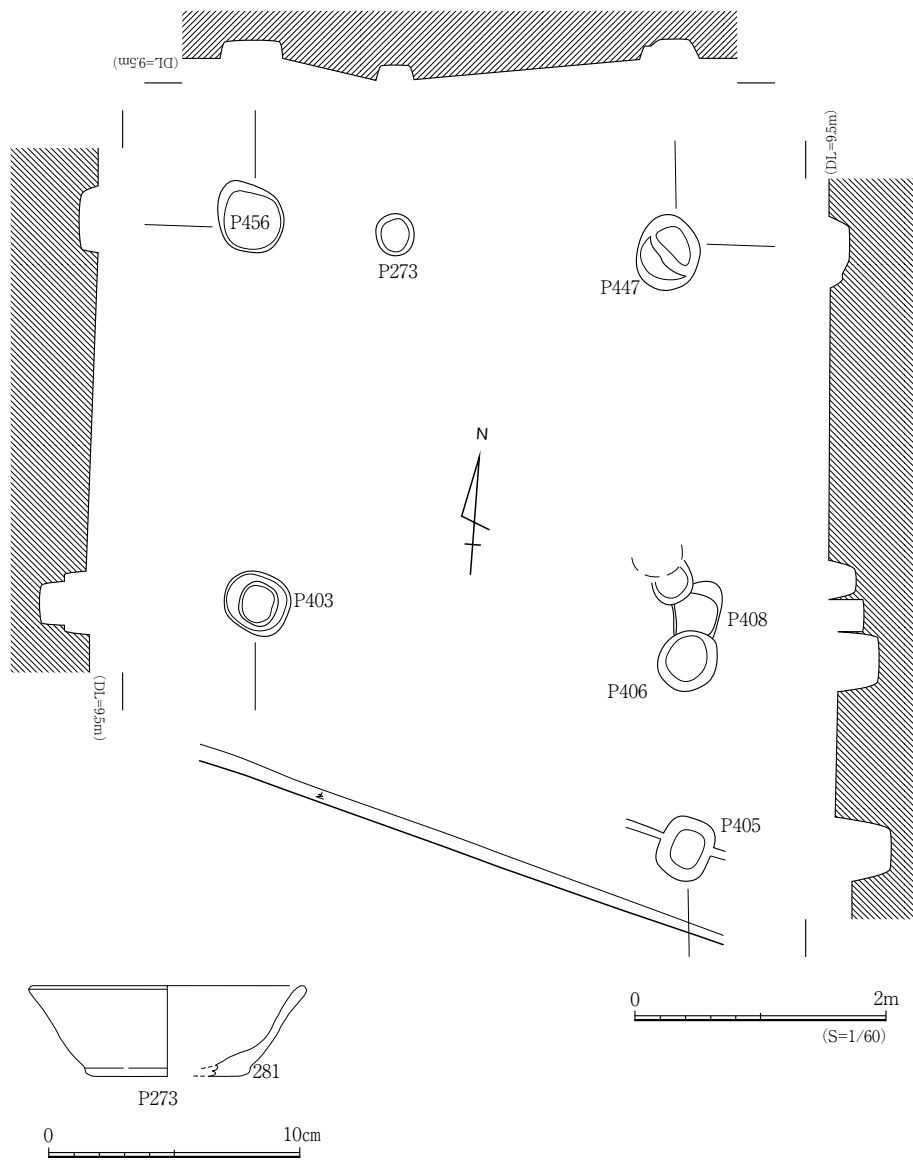
0 2m
(S=1/60)



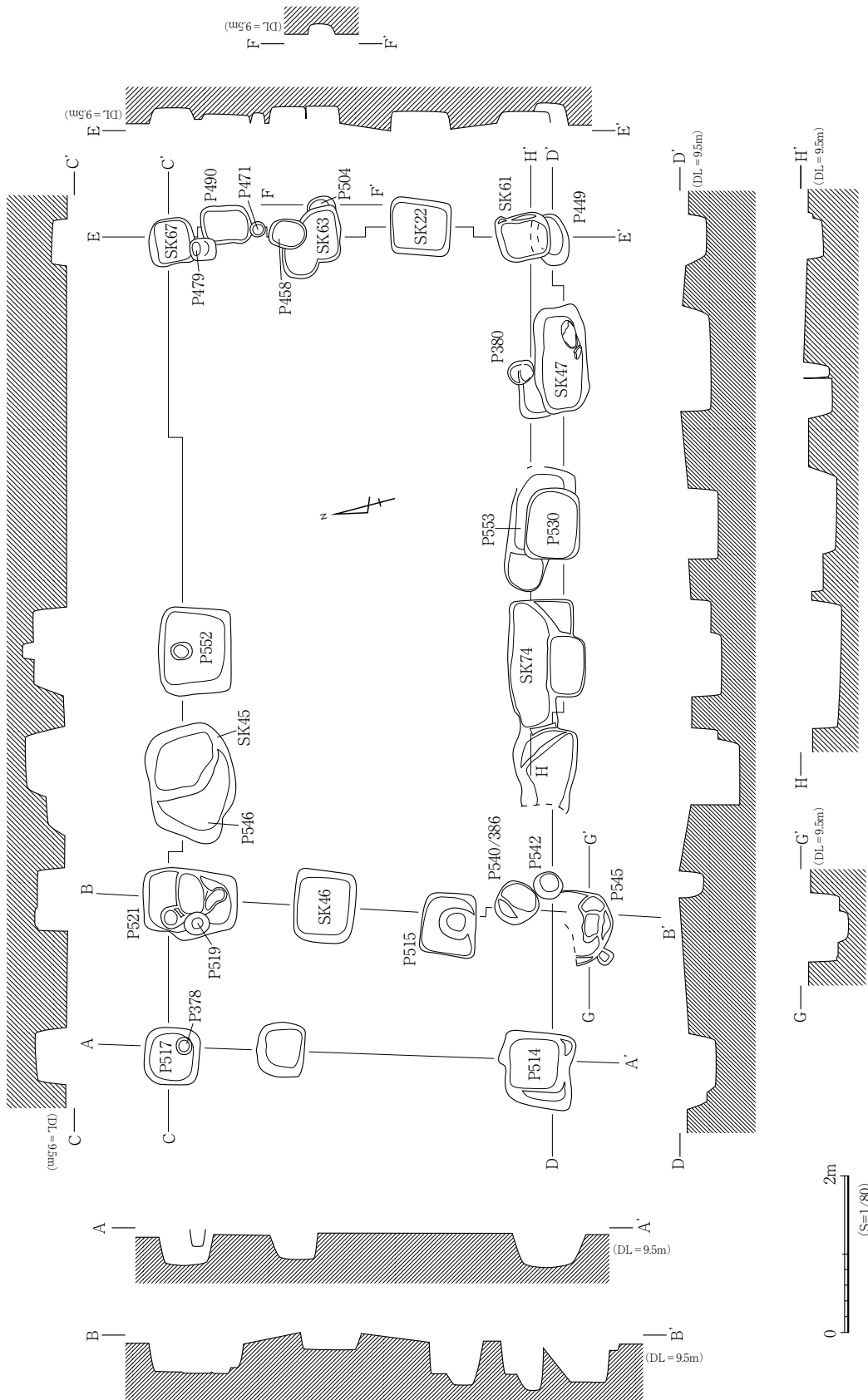
図IV-105 4区 SB1



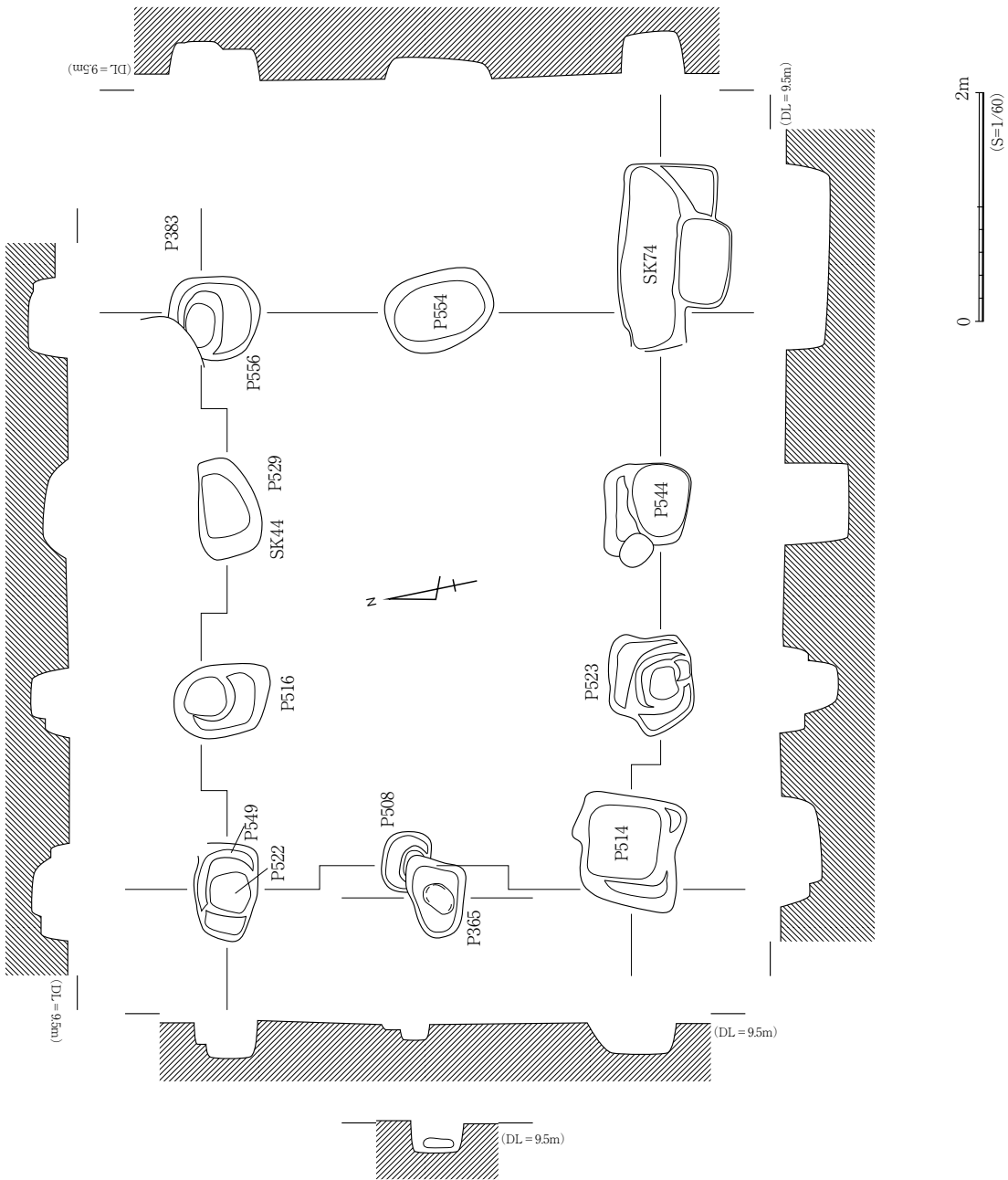
图IV-106 图4区 SB2



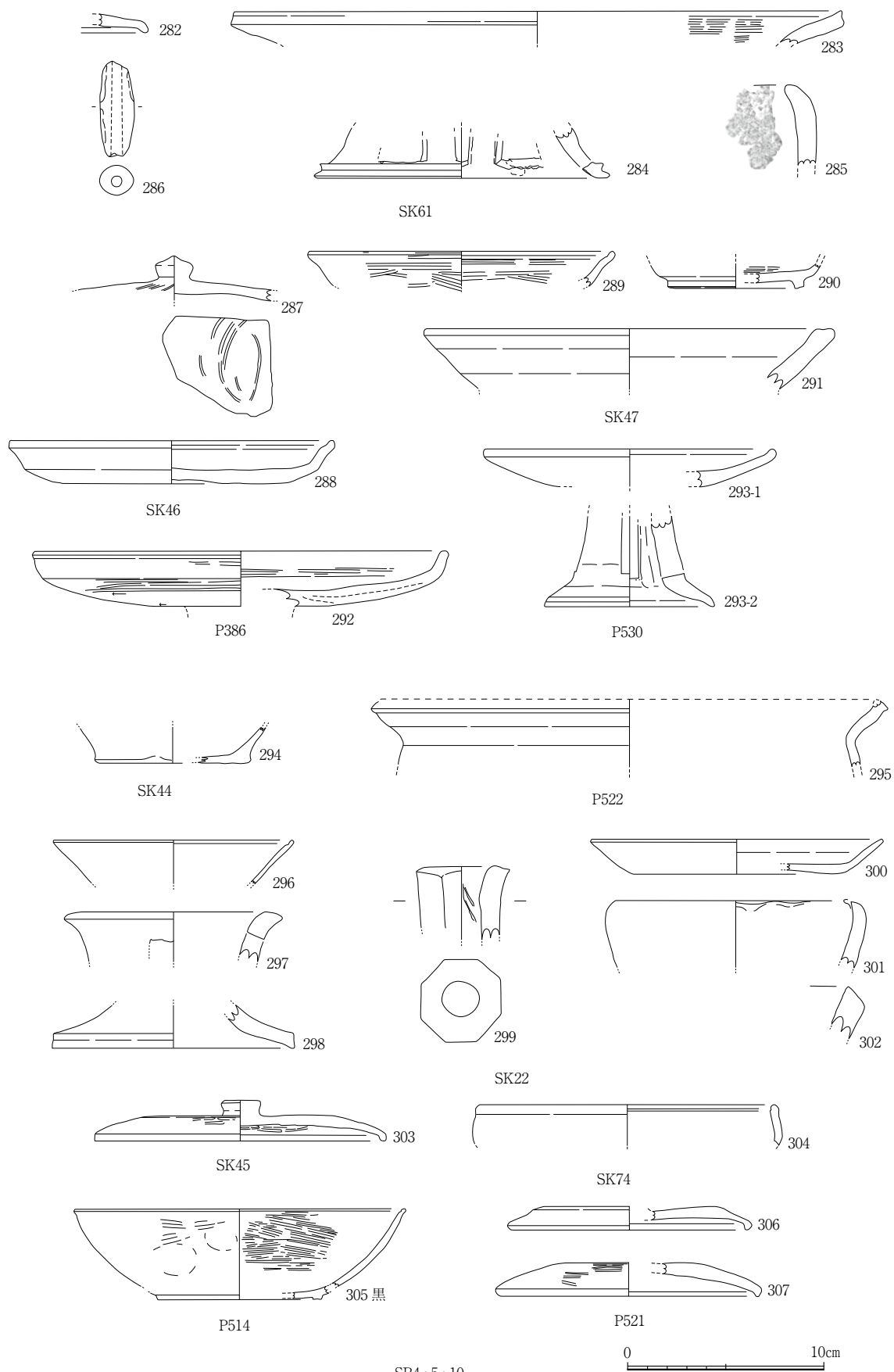
图IV-107 4区 SB3



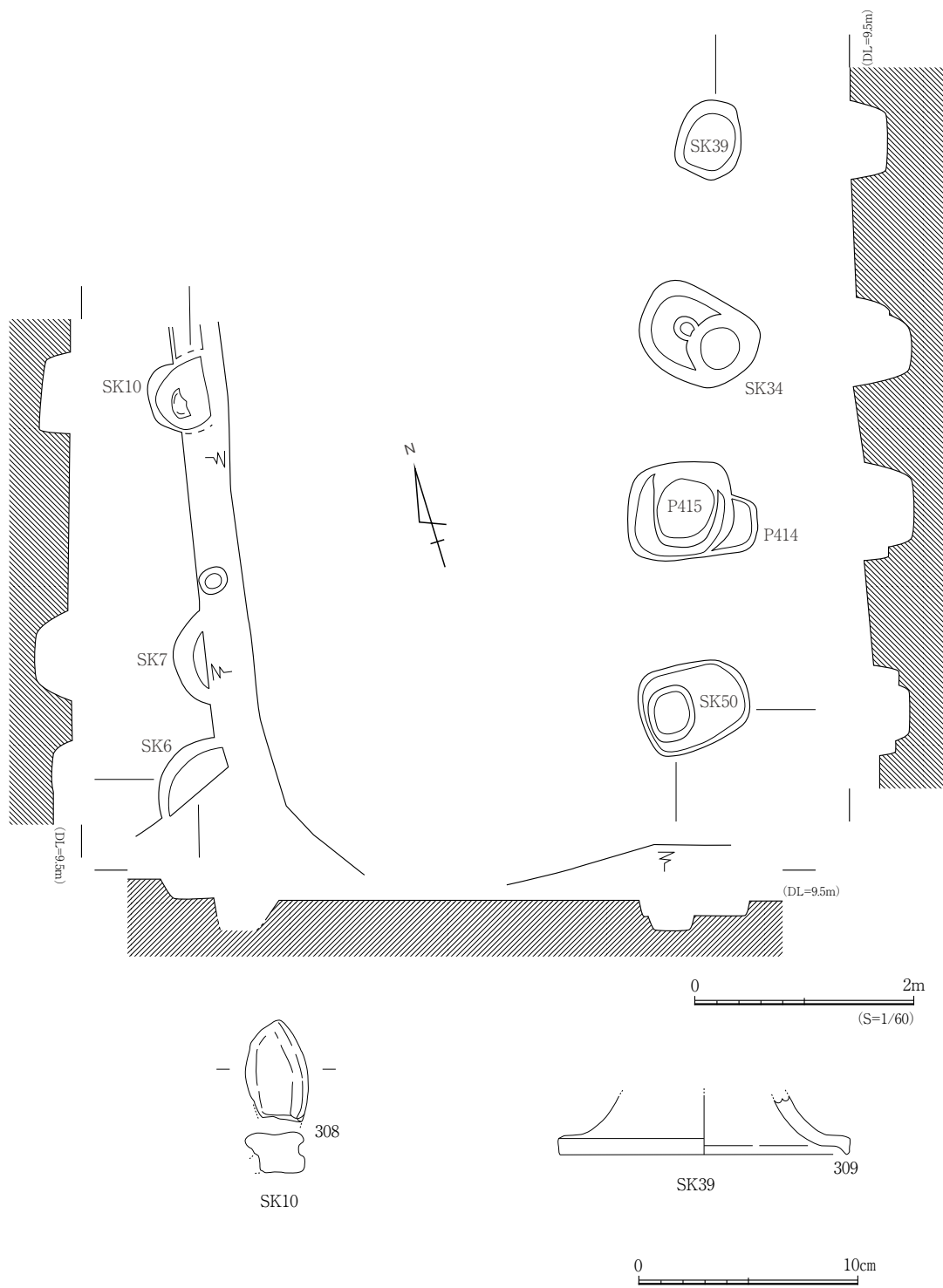
图IV-108 4区 SB4·5平面断面图



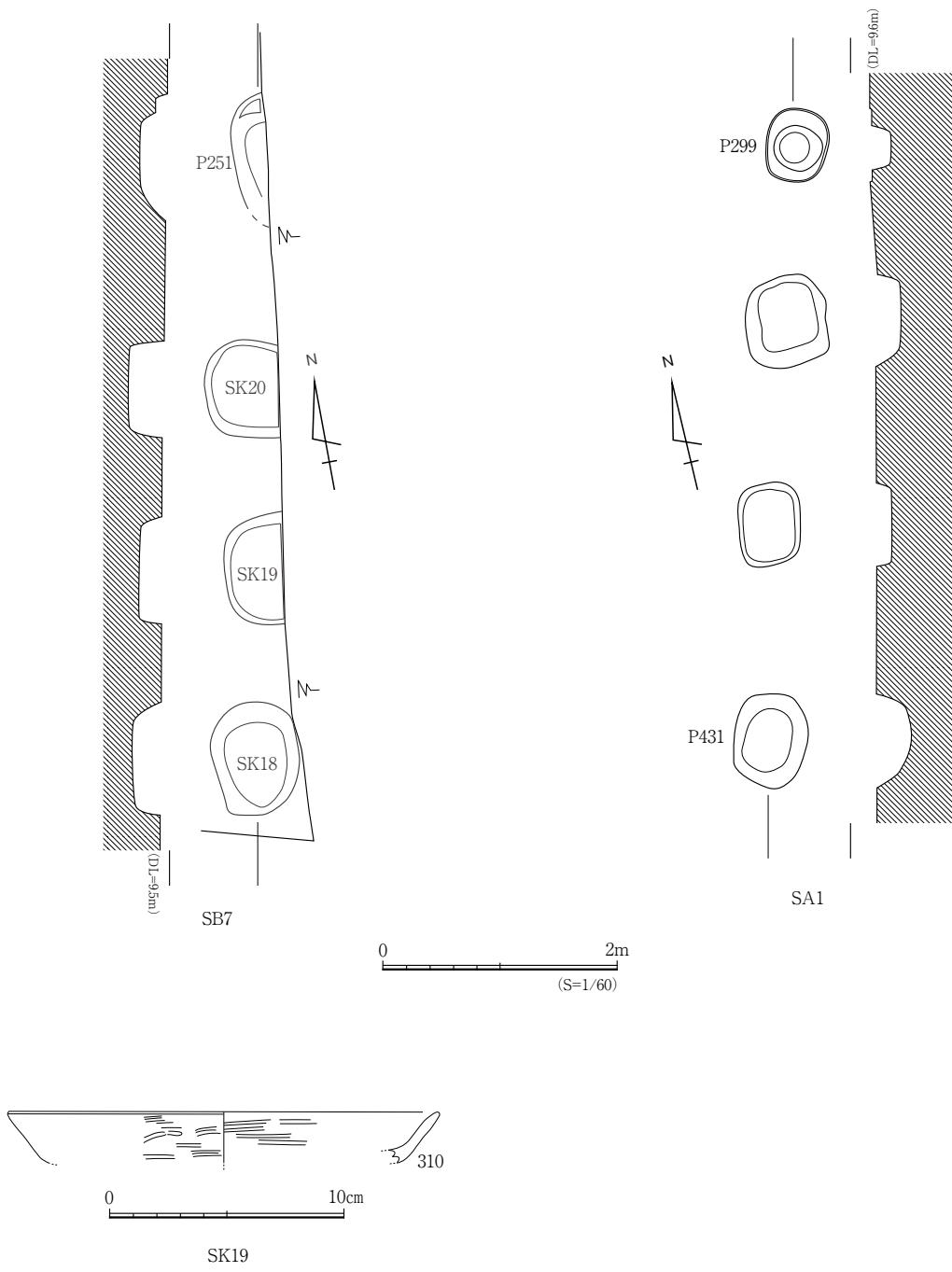
图IV-109 4区 SB10平面断面图



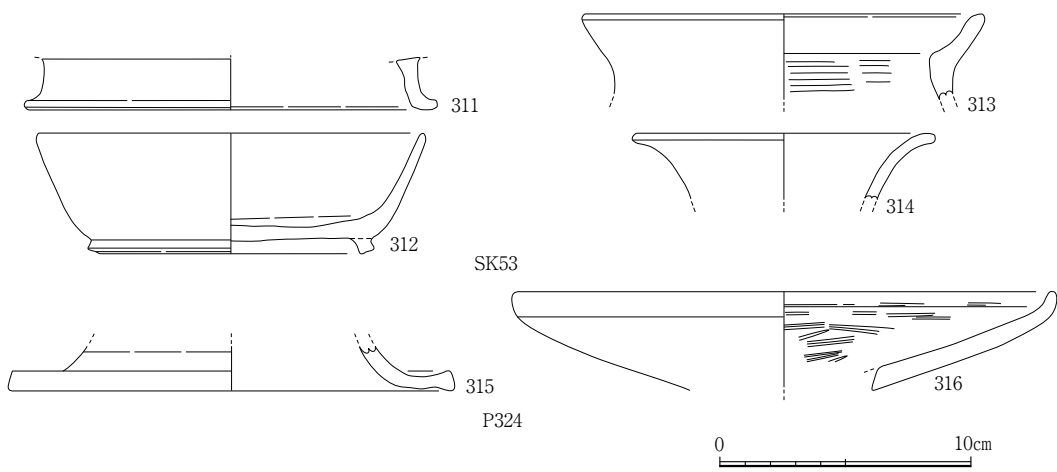
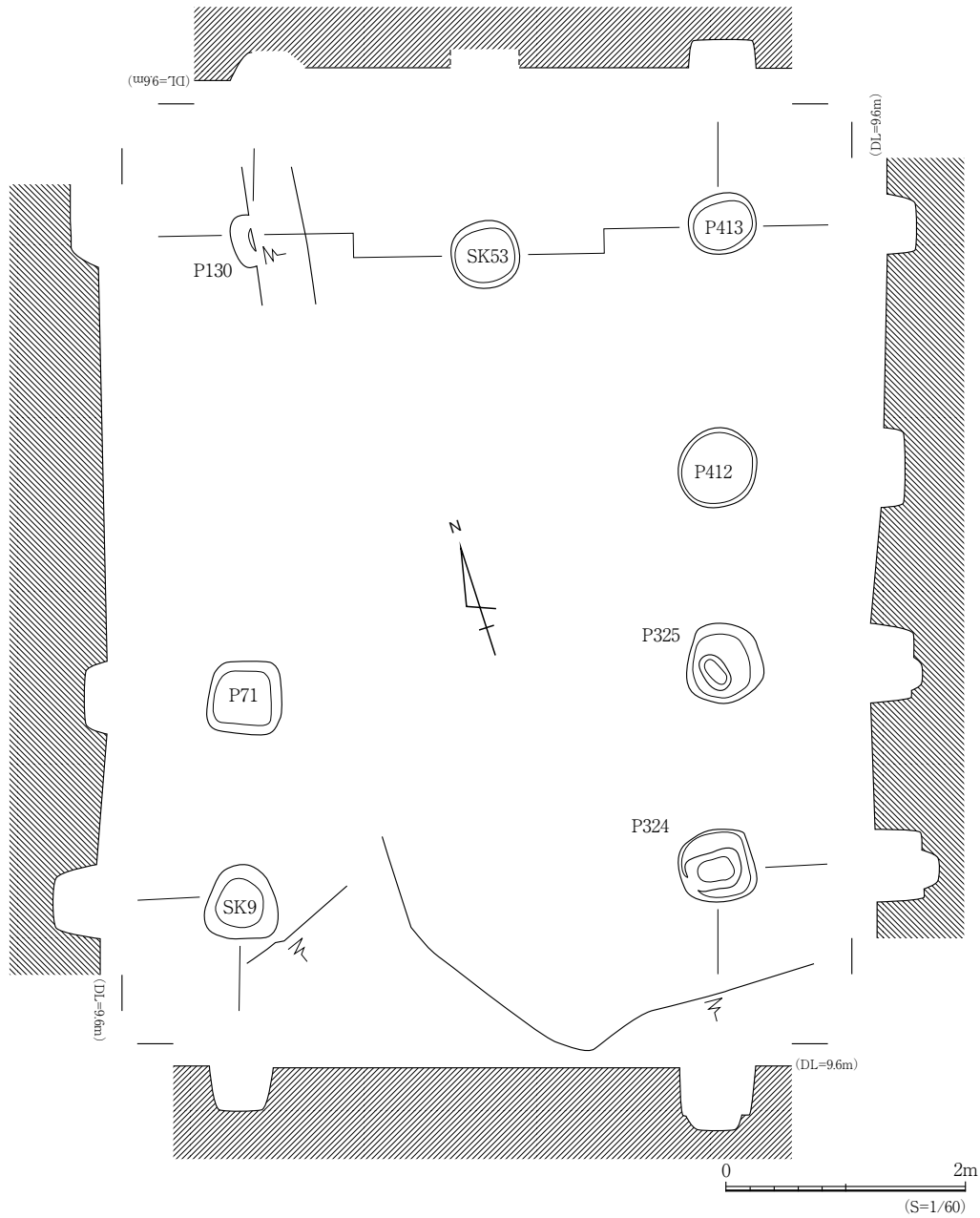
SB4·5·10
图IV-110 4区 SB4·5·10出土遗物



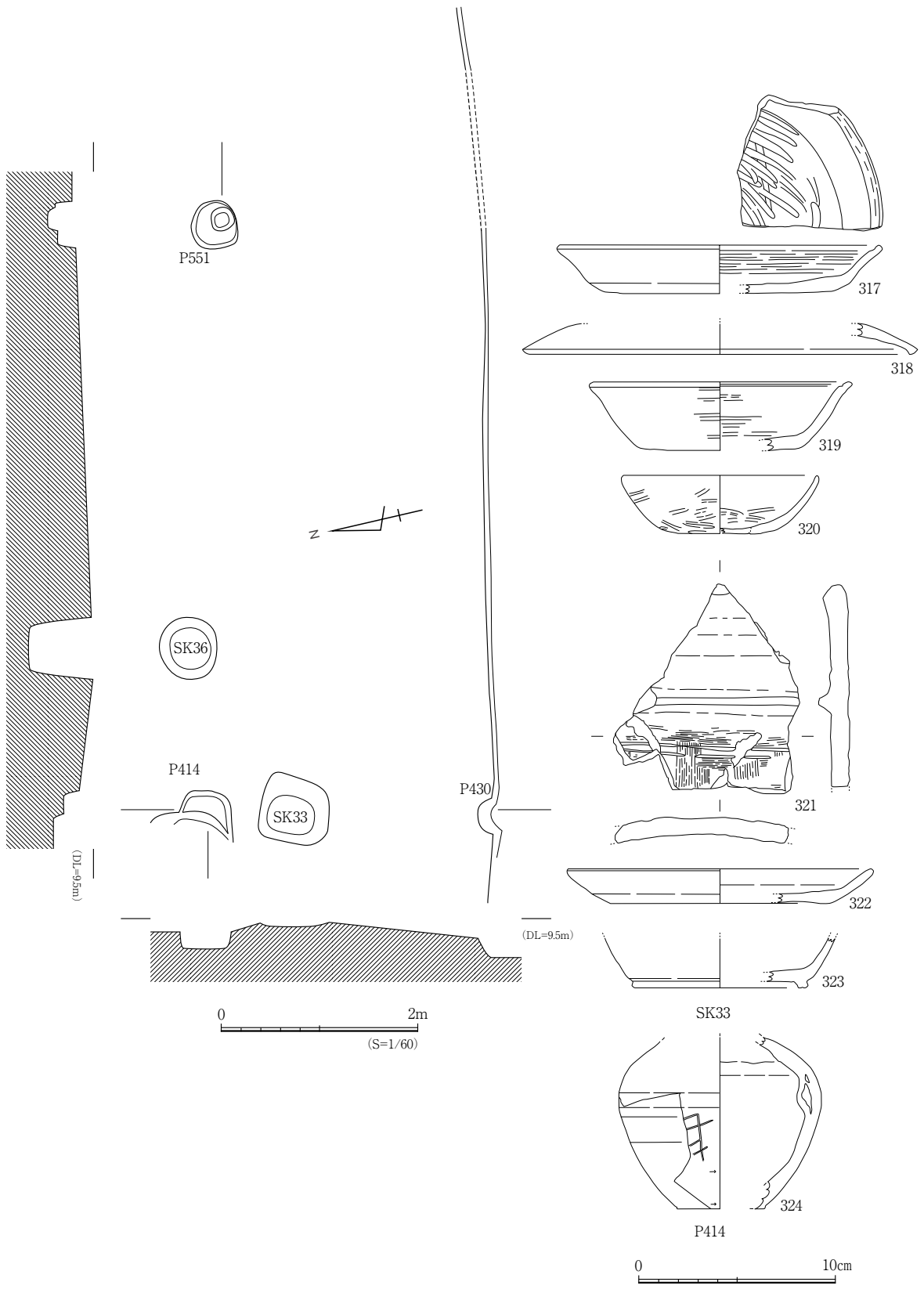
图IV-111 4区 SB6



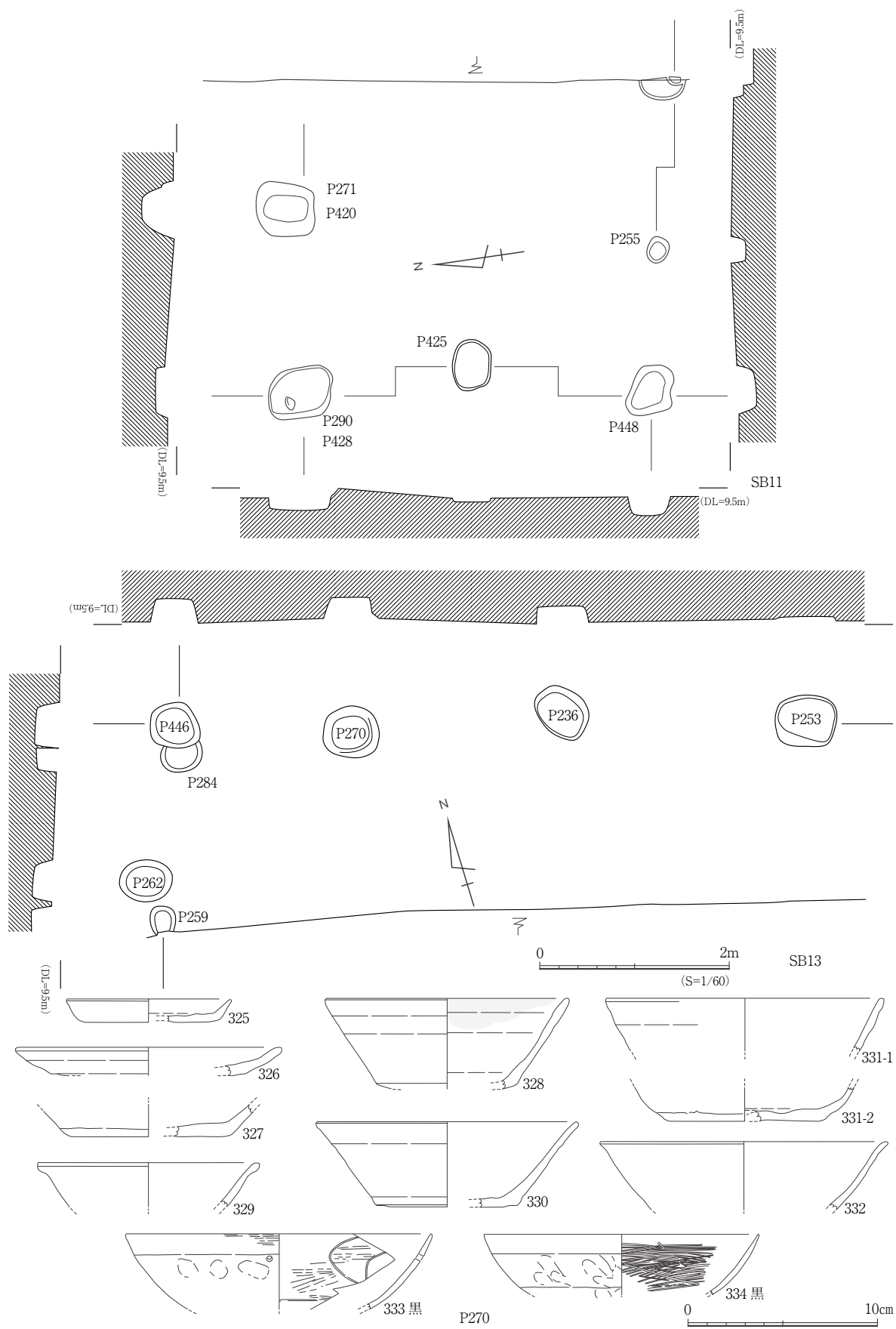
图IV-112 4区 SB7·SA1



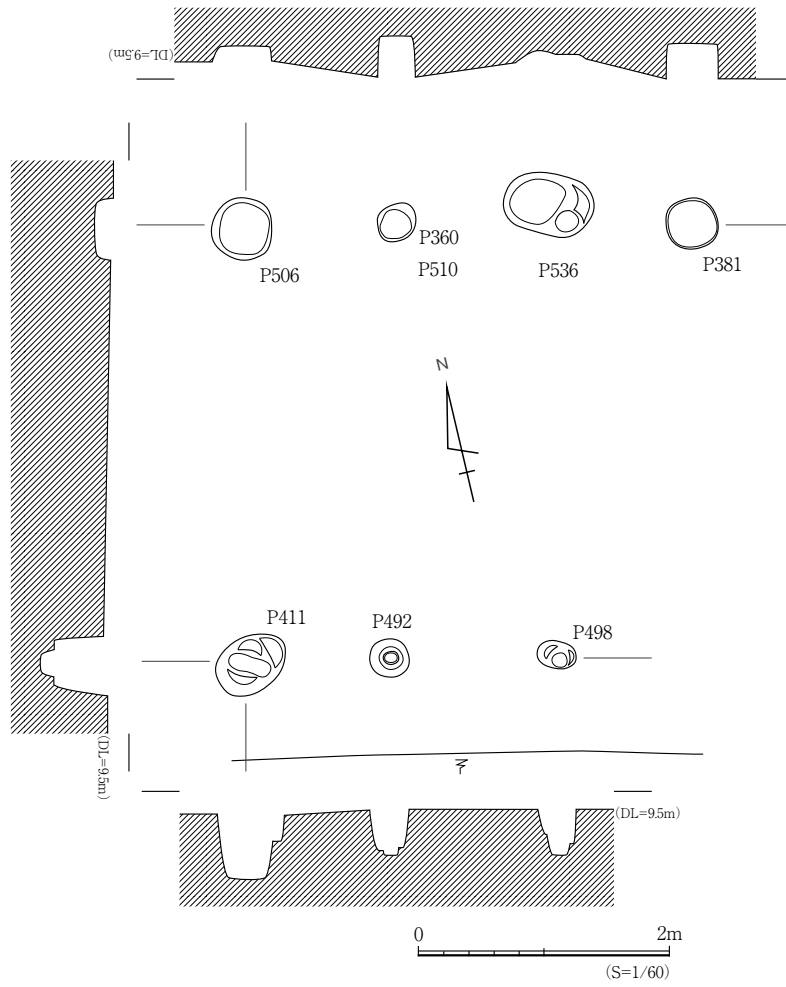
图IV-113 4区SB9



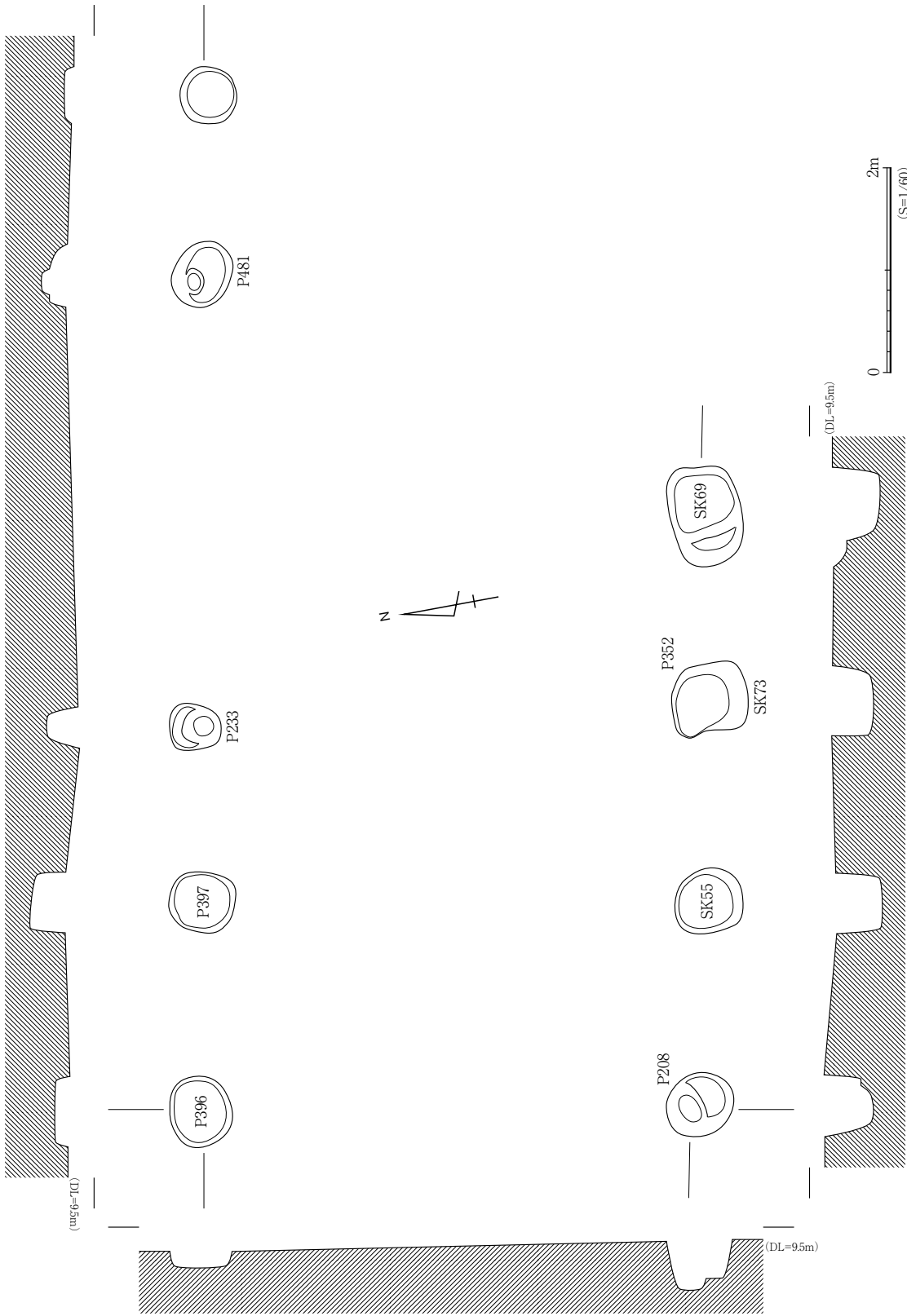
图IV-114 4区 SB12



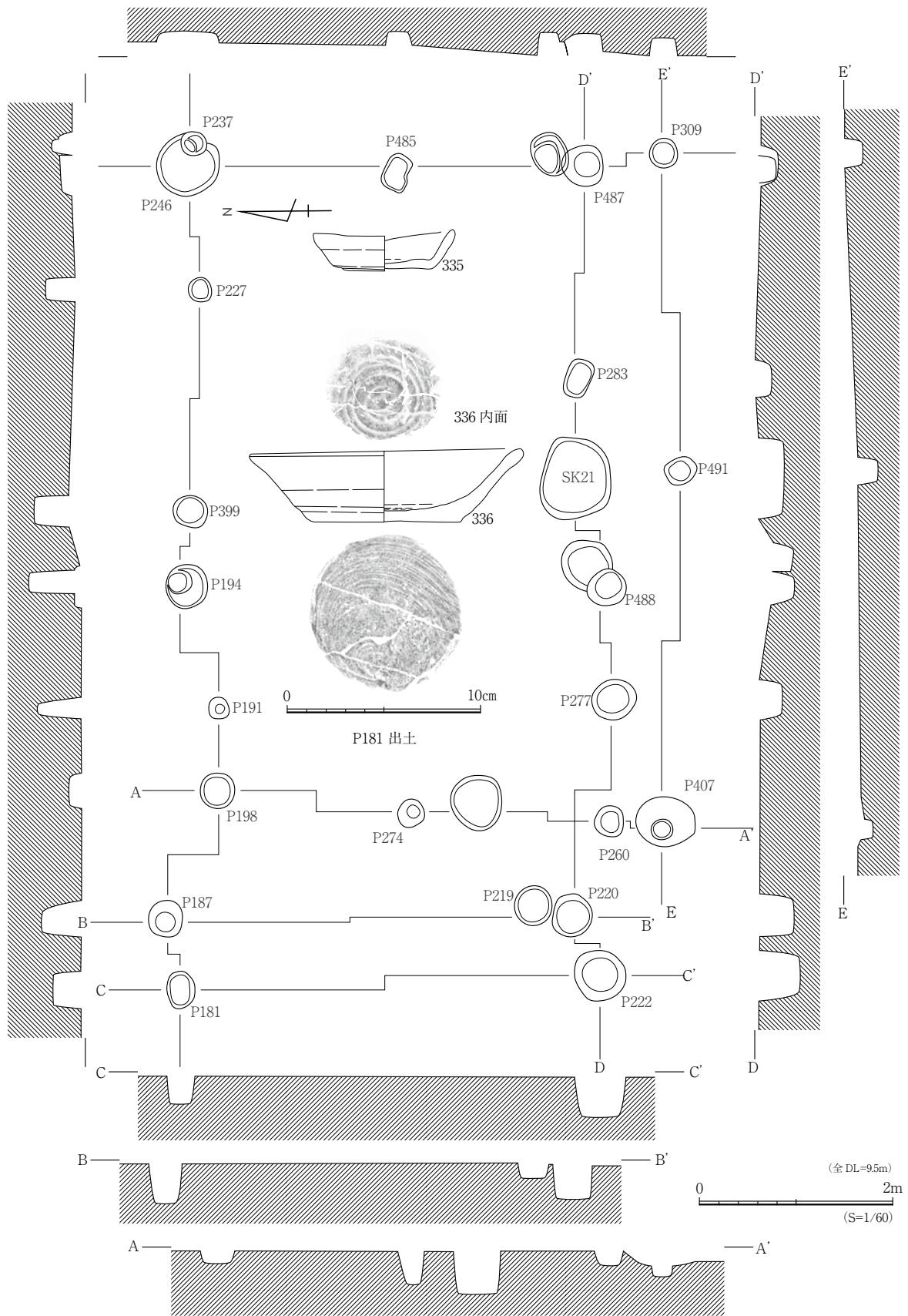
图IV-115 4区 SB11·13



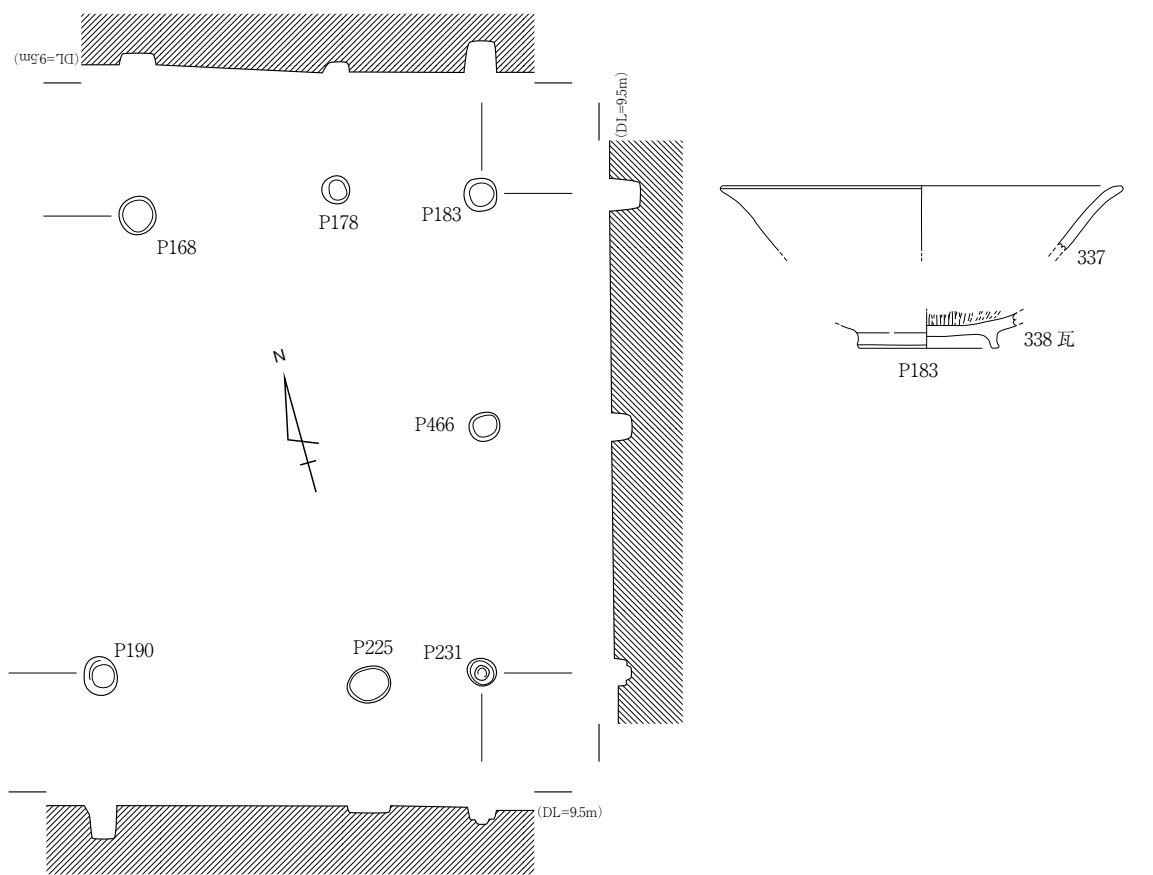
图IV-116 4区 SB14平断面图



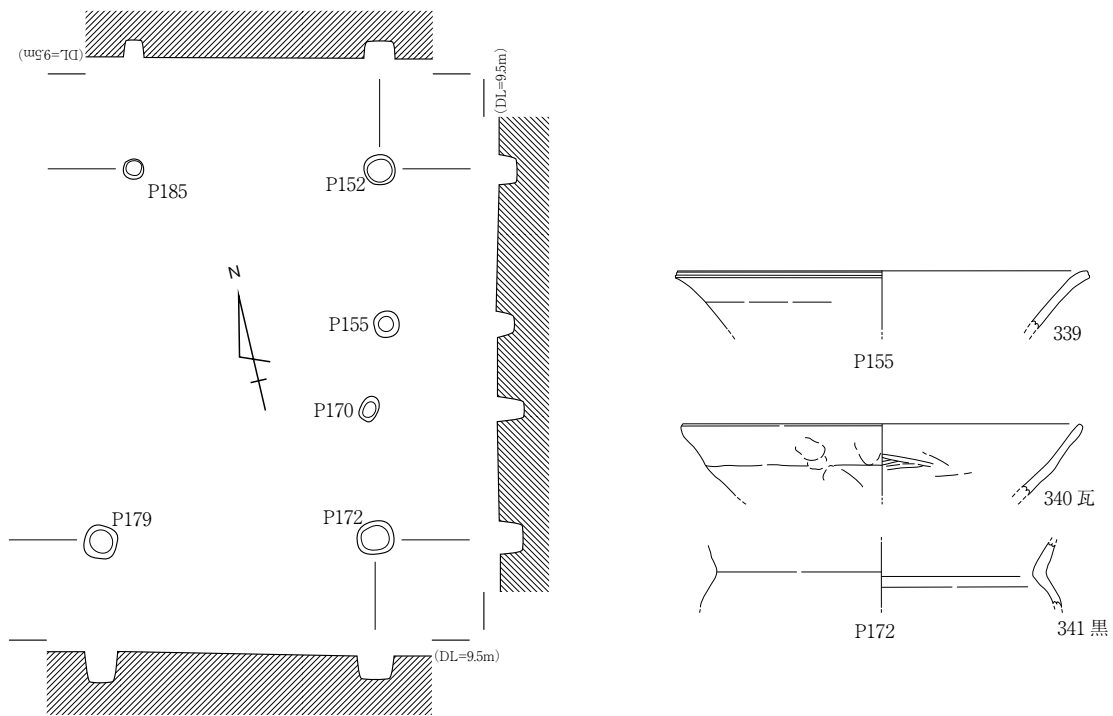
图IV-117 4区 SBI5 平面断面图



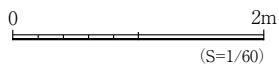
图IV-118 4区 SB16



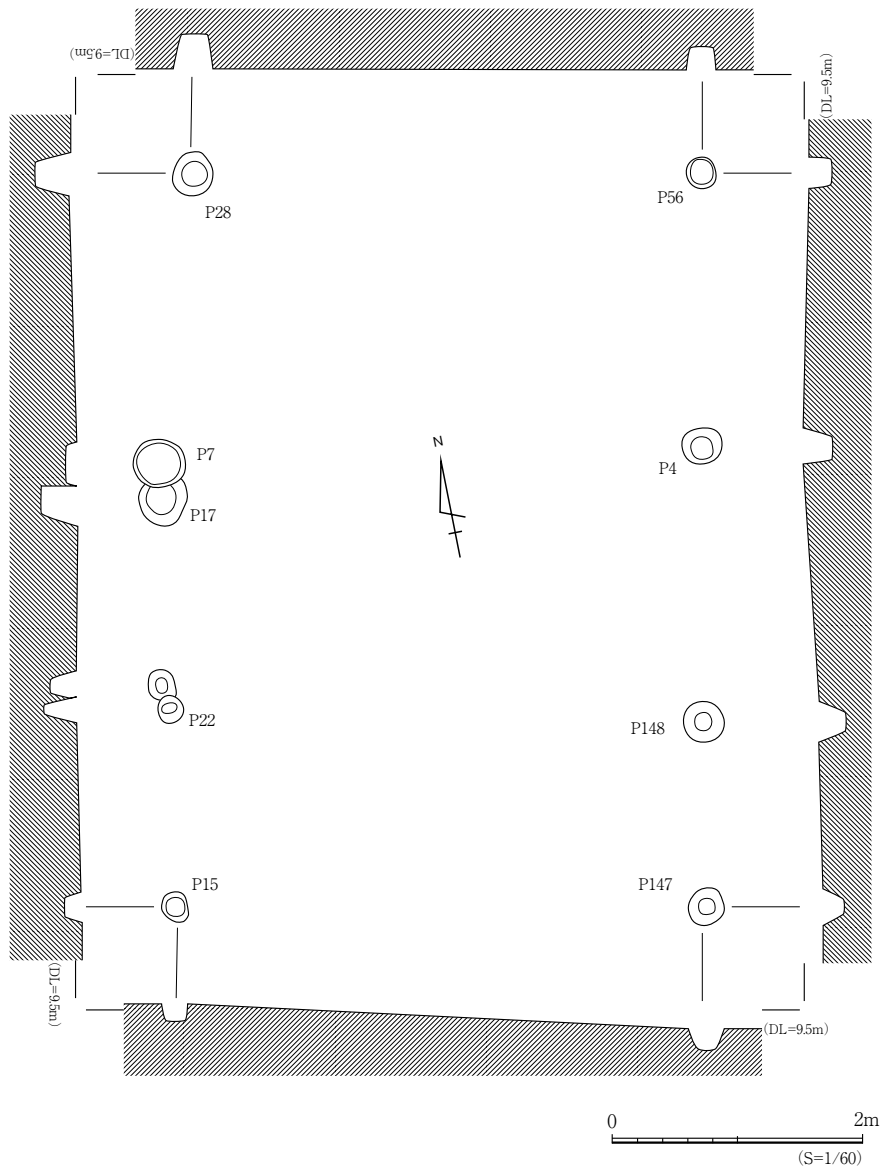
SB17



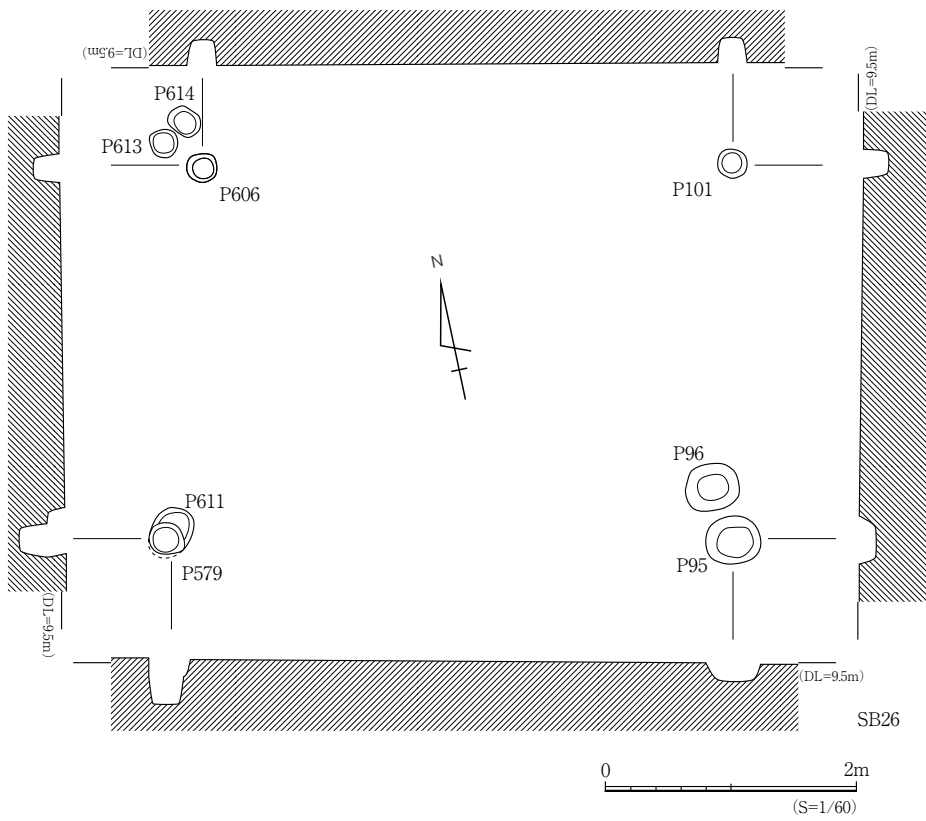
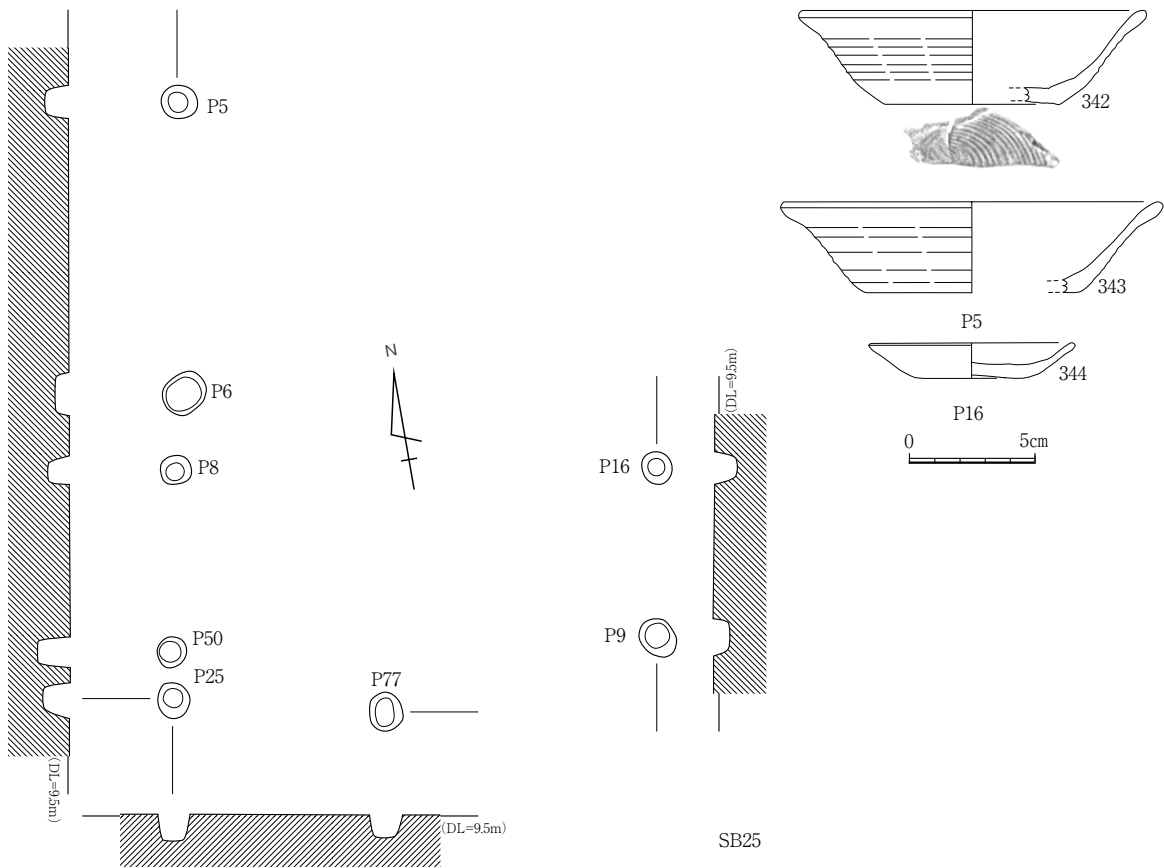
SB18



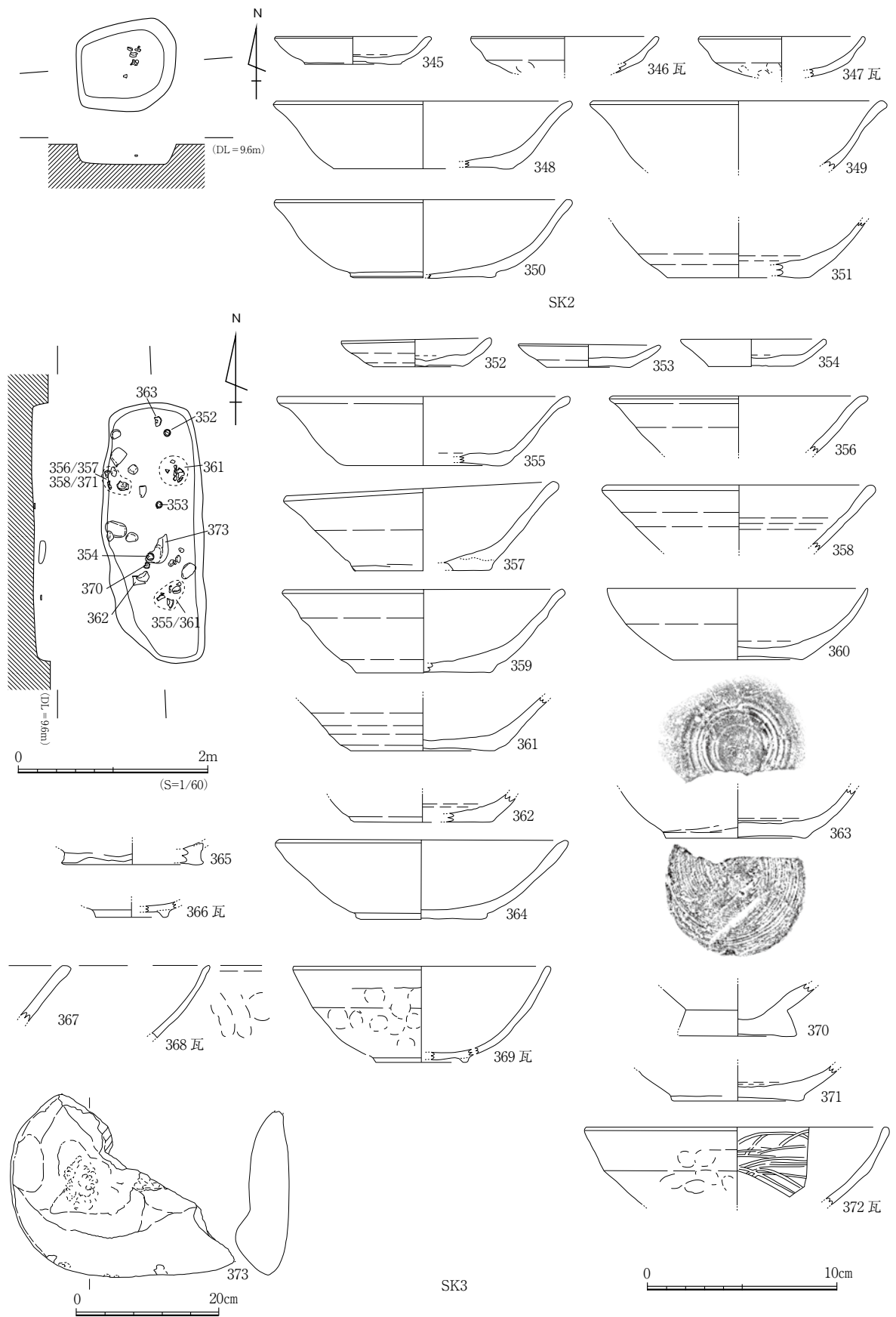
图IV-119 4区 SB17·18



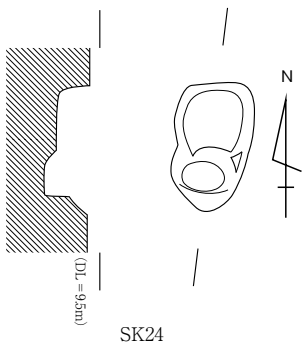
图IV-120 4区 SB24平断面图



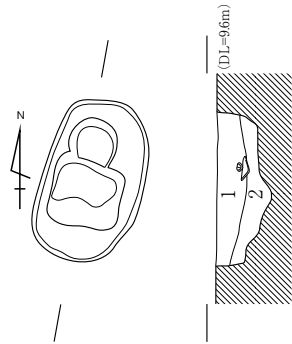
图IV-121 4区 SB25·26



图IV-122 4区 SK2·3

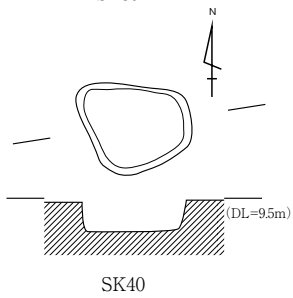


SK24

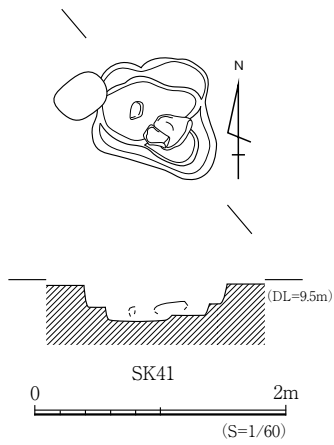


SK35

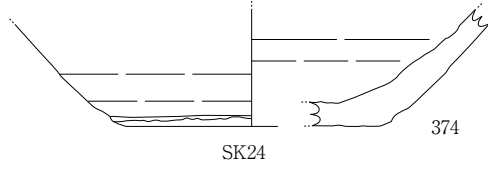
- 1.黒褐色細粒砂混シルト 締り良
粘性低 30~200mm大の礫僅含
- 2.にぶい黄褐色細粒砂混シルト 締り良
粘性低 にぶい黄褐色のシルトを塊状に含



SK40

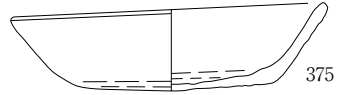


SK41

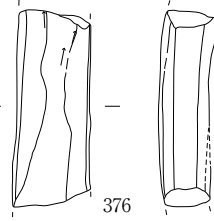


374

SK24

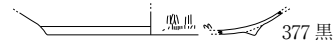


375



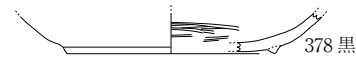
376

SK35

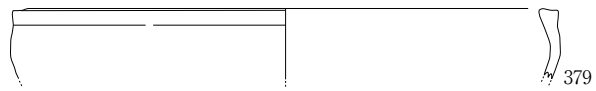


377 黒

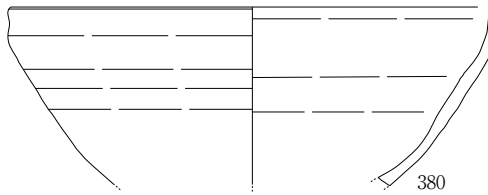
SK40



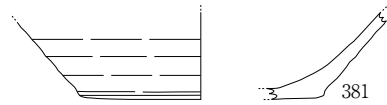
378 黒



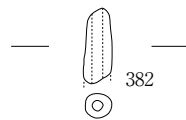
379



380

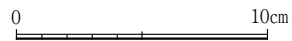


381

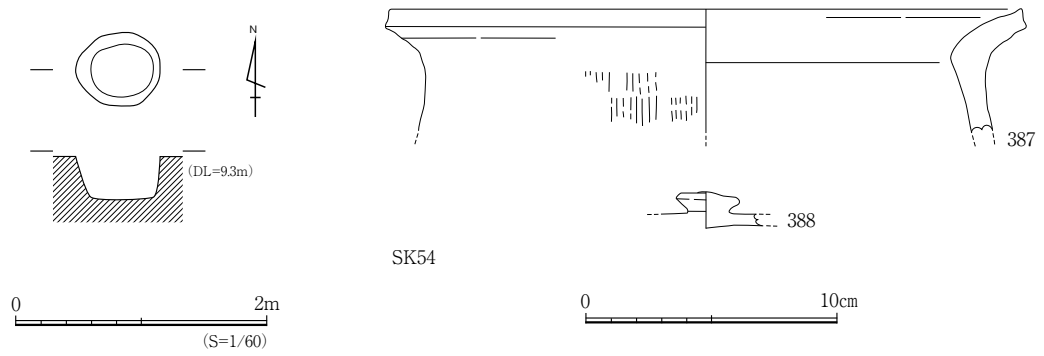
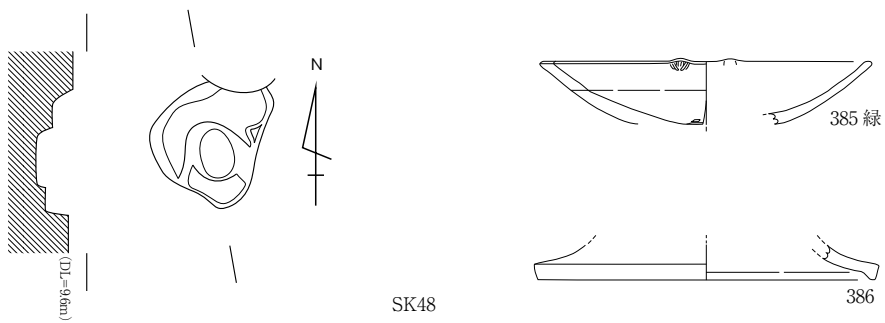
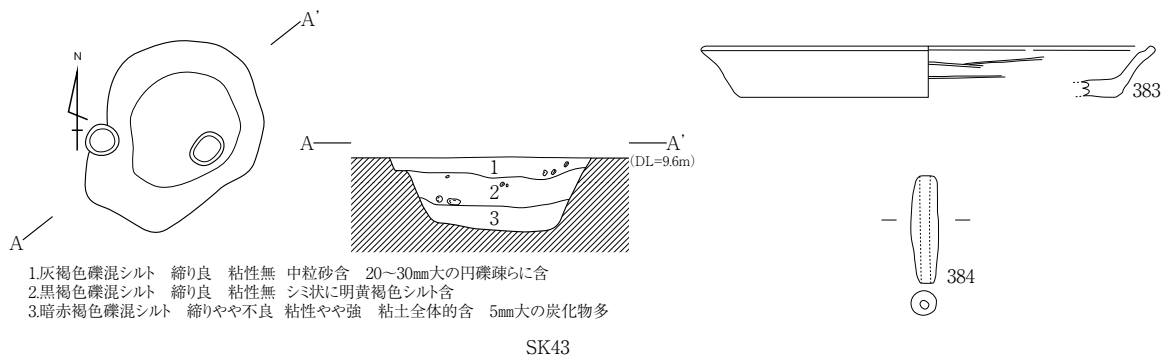


382

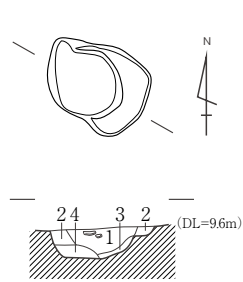
SK41



図IV-123 4区 SK24・35・40・41

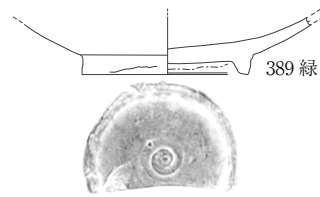


図IV-124 4区 SK43・48・54



- 1. 灰黄褐色細粒砂混シルト 締り良 粘性低 微細炭化物及び小土器片多含
- 2. にぶい黄褐色細粒砂混シルト 締り良 粘性低 微細炭化物含
- 3. 褐色細粒砂混シルト 締り良 粘性やや高 にぶい黄褐色シルトを斑点状に含
- 4. 褐色細粒砂混シルト 締り良 粘性やや高

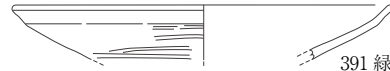
SK56



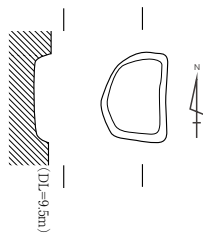
389 緑



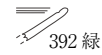
390 黒



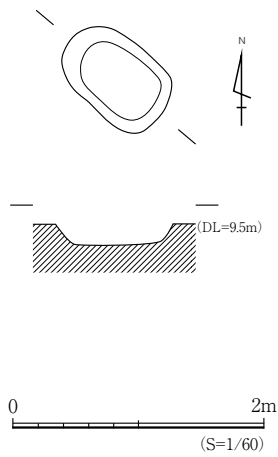
391 緑



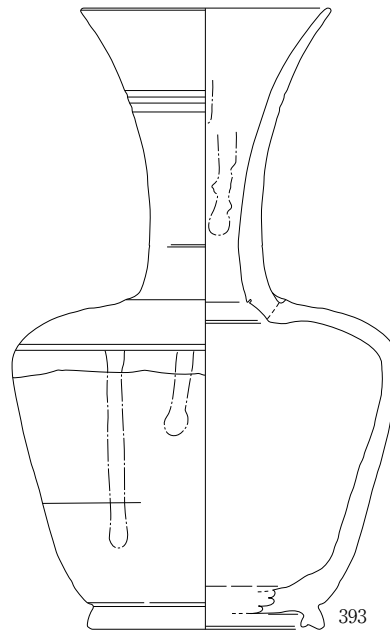
SK68



392 緑



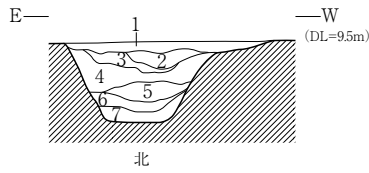
SK84



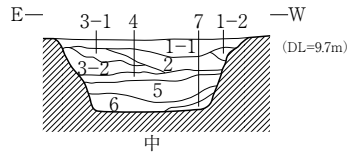
393



図IV-125 4区 SK56・68・84

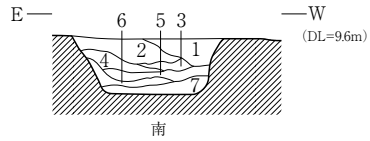


- SD1埋土(北)
- 1.明黄褐色粗粒砂混シルト 締り良 粘性低 凹線文出土
 - 2.灰色細粒砂混粗粒砂 締り良 粘性無
 - 3.灰色粗粒砂 締り良 粘性無 灰褐色シルトを塊状に含
 - 4.灰色細粒砂混粗粒砂 締り良 粘性無 中粒砂をレンズ状に含
 - 5.灰色中粒砂混粗粒砂 締り良 粘性無
 - 6.灰色中粒砂 50mm大の円礫を僅かに含
 - 7.灰色細粒砂混中粒砂 30cm大の円岩を疎らに含

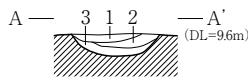
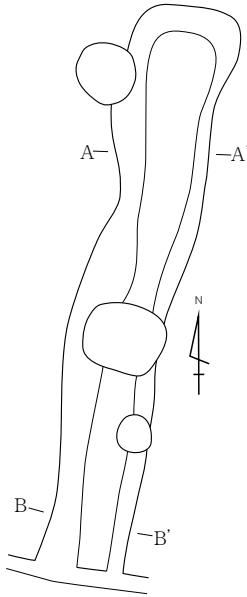


- SD1埋土(中)
- 1-1.明黄褐色中粒砂混シルト 締り良 粘性低 ~5mm大の砂粒を疎らに含
 - 1-2.明黄褐色細粒砂混シルト 締り良 粘性低
 - 2.灰色細粒砂混粗粒砂 締り良 粘性無
 - 3-1.灰色細粒砂 締り良 粘性無
 - 3-2.灰色粗粒砂 締り良 粘性無 灰褐色シルトを塊状に含
 - 4.灰色細粒砂混粗粒砂 締り良 粘性無 中粒砂をレンズ状に含
 - 5.灰色中粒砂混粗粒砂 締り良 粘性無
 - 6.灰色中粒砂 ~5mm大の角礫を疎らに含
 - 7.灰色細粒砂混中粒砂 10cm大の円礫を疎らに含

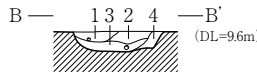
SD1



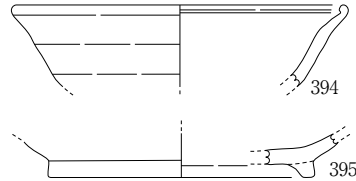
- SD1埋土(南)
- 1.暗灰黄色細粒砂混シルト 締り良 粘性やや強 中粒砂をレンズ状に含
 - 2.灰色粗粒砂 暗灰黄色シルト・灰色細粒砂をレンズ状に含
 - 3.暗灰黄色粗粒砂混シルト 締り良 粘性低
 - 4.灰色中粒砂混シルト 締り良 粘性低 灰色粗粒砂をレンズ状に含
 - 5.灰色粗粒砂 締り良 粘性低
 - 6.褐灰色中粒砂 締り良 粘性低
 - 7.灰色粗粒砂混シルト 締り良 粘性低



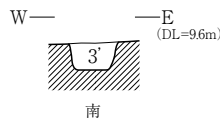
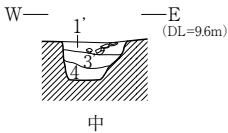
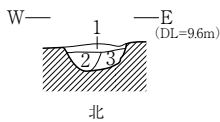
- SD5埋土
- 1.黒褐色細粒砂混シルト 締り良 粘性極めて低
 - 2.灰褐色細粒砂混シルト 締り良 粘性極めて低 褐灰色細粒砂をレンズ状に含
 - 3.褐色細粒砂混シルト 締り良 粘性極めて低



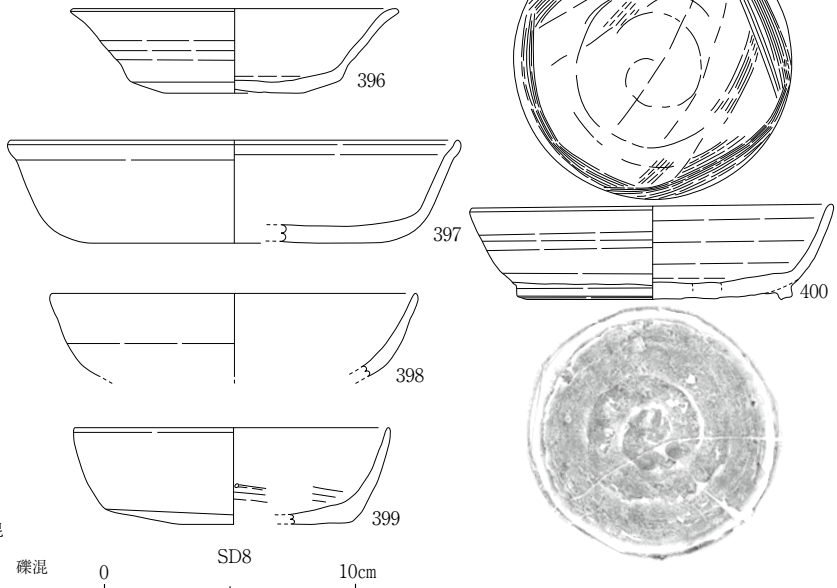
- SD5埋土
- 1.黒褐色細粒砂混シルト 締り良 粘性極めて低
 - 2.灰褐色細粒砂混シルト 締り良 粘性極めて低 褐灰色細粒砂をレンズ状に含
 - 3.褐色中粒砂混シルト 締り良 粘性極めて低 黄灰色粗粒砂をレンズ状に含
 - 4.褐色粘土混シルト 締り良 粘性やや高



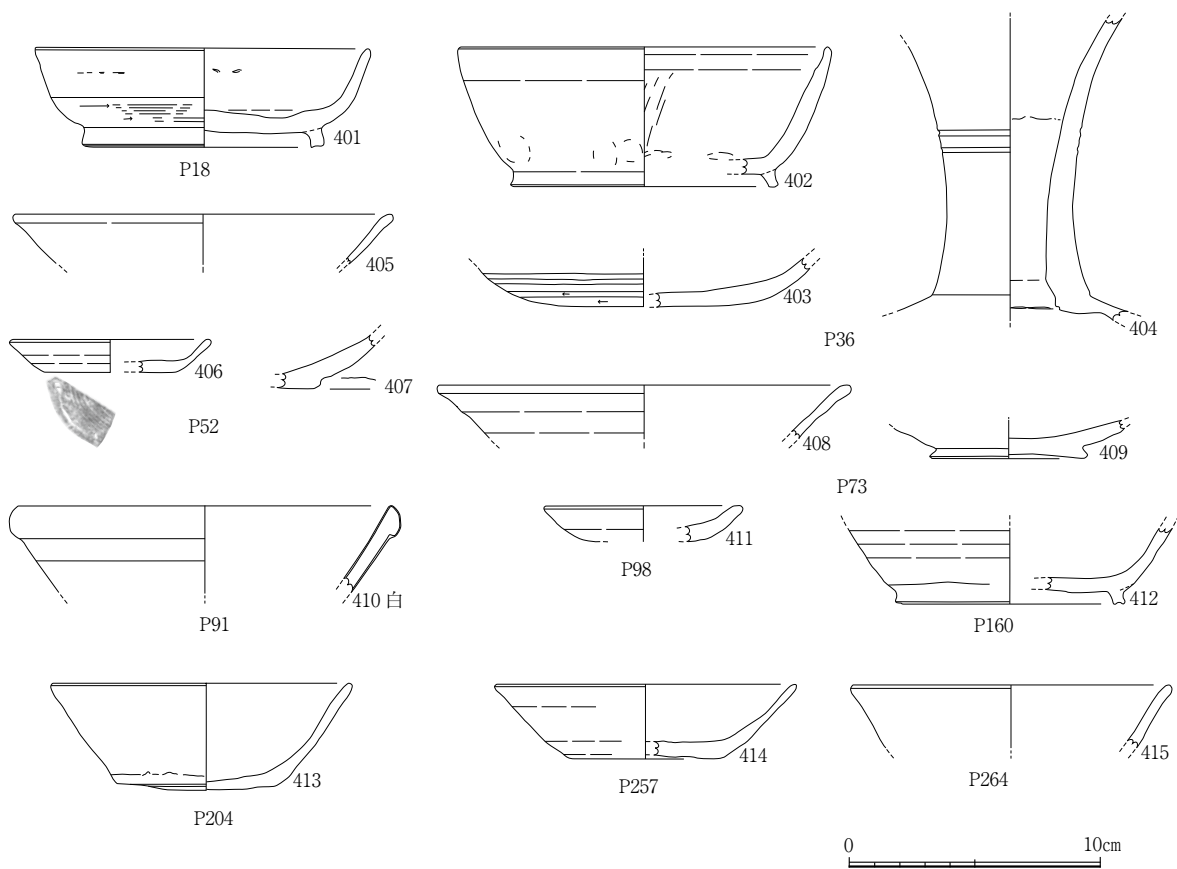
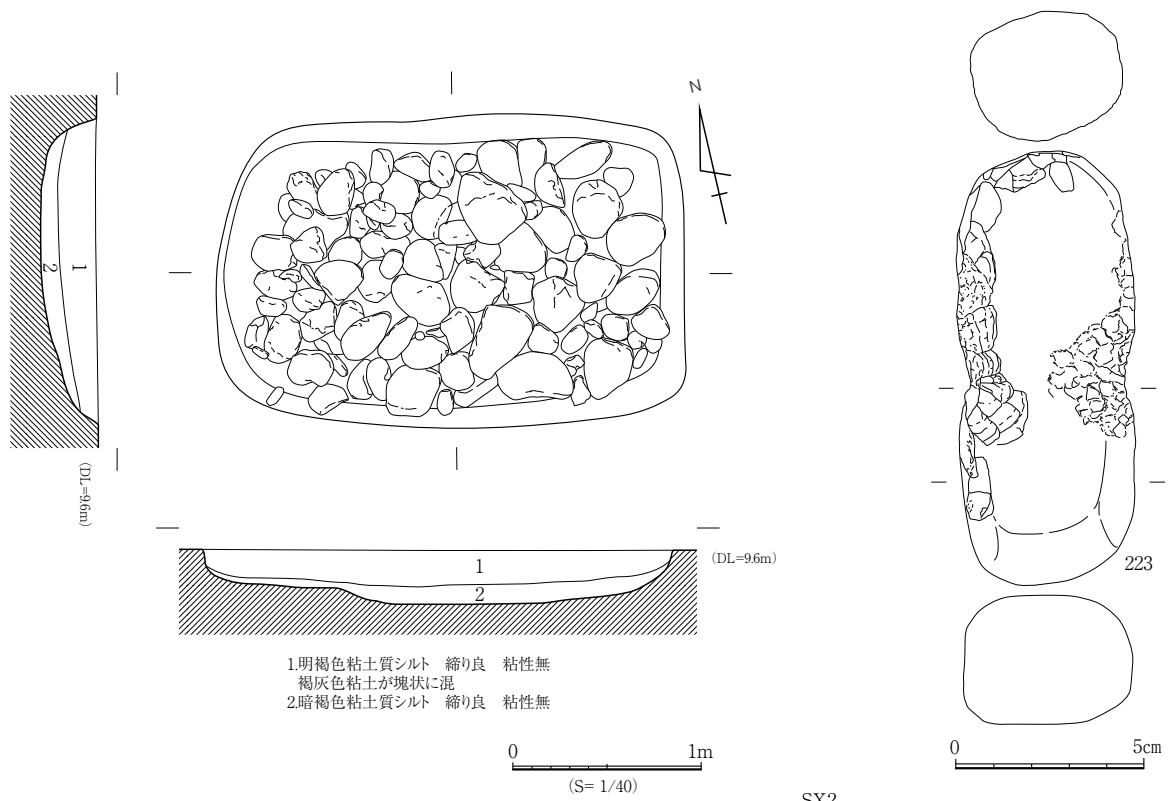
SD5



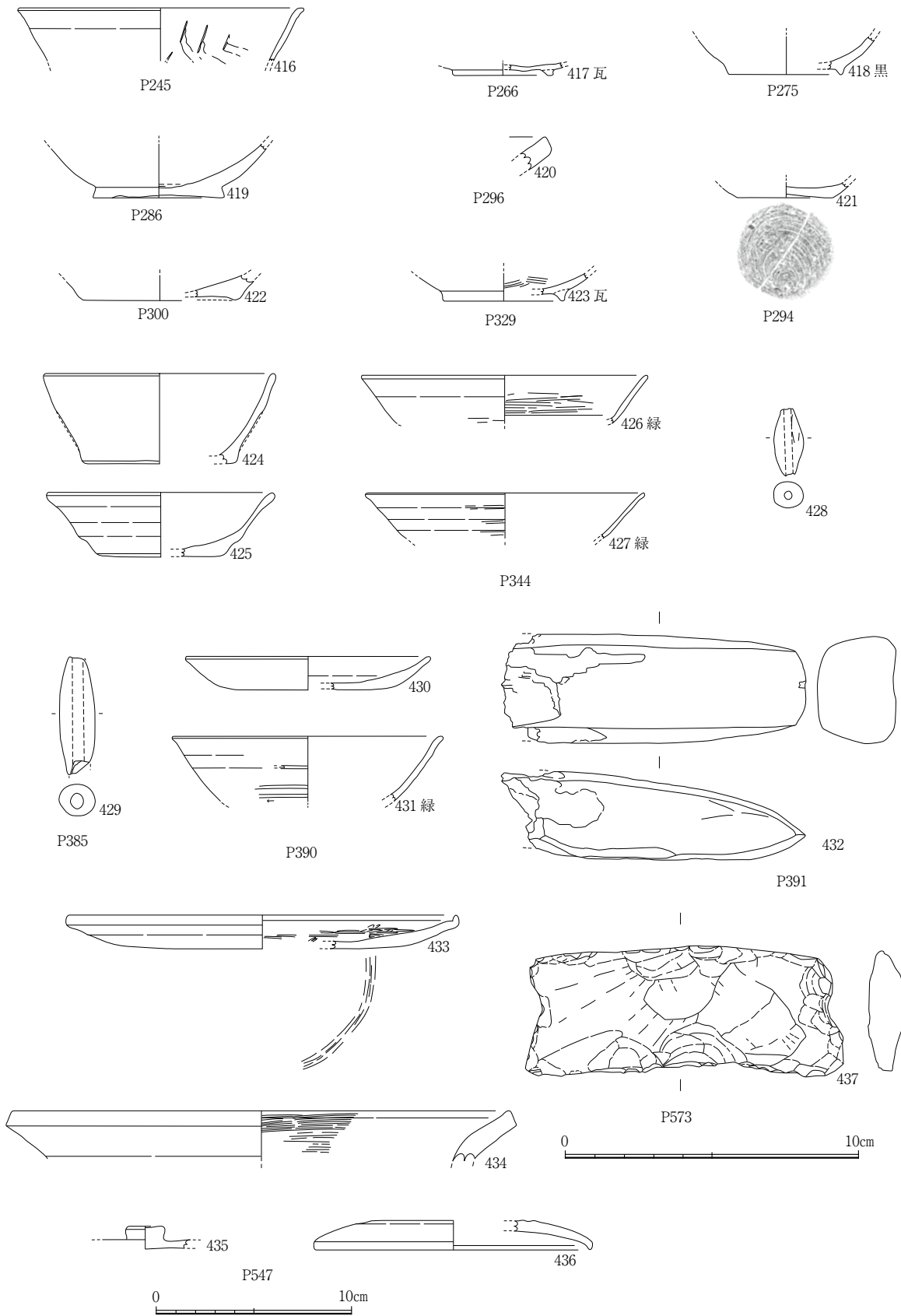
- SD8埋土
- 1.にぶい黄褐色シルト 3~10mm大の円礫含 礫混
 - 2.灰黄褐色シルト 10mm大の円礫僅かに含 礫混
 - 3.灰黄褐色シルト 50mm大の円礫含 中粒砂塊含 礫混
 - 4.灰色粗粒砂



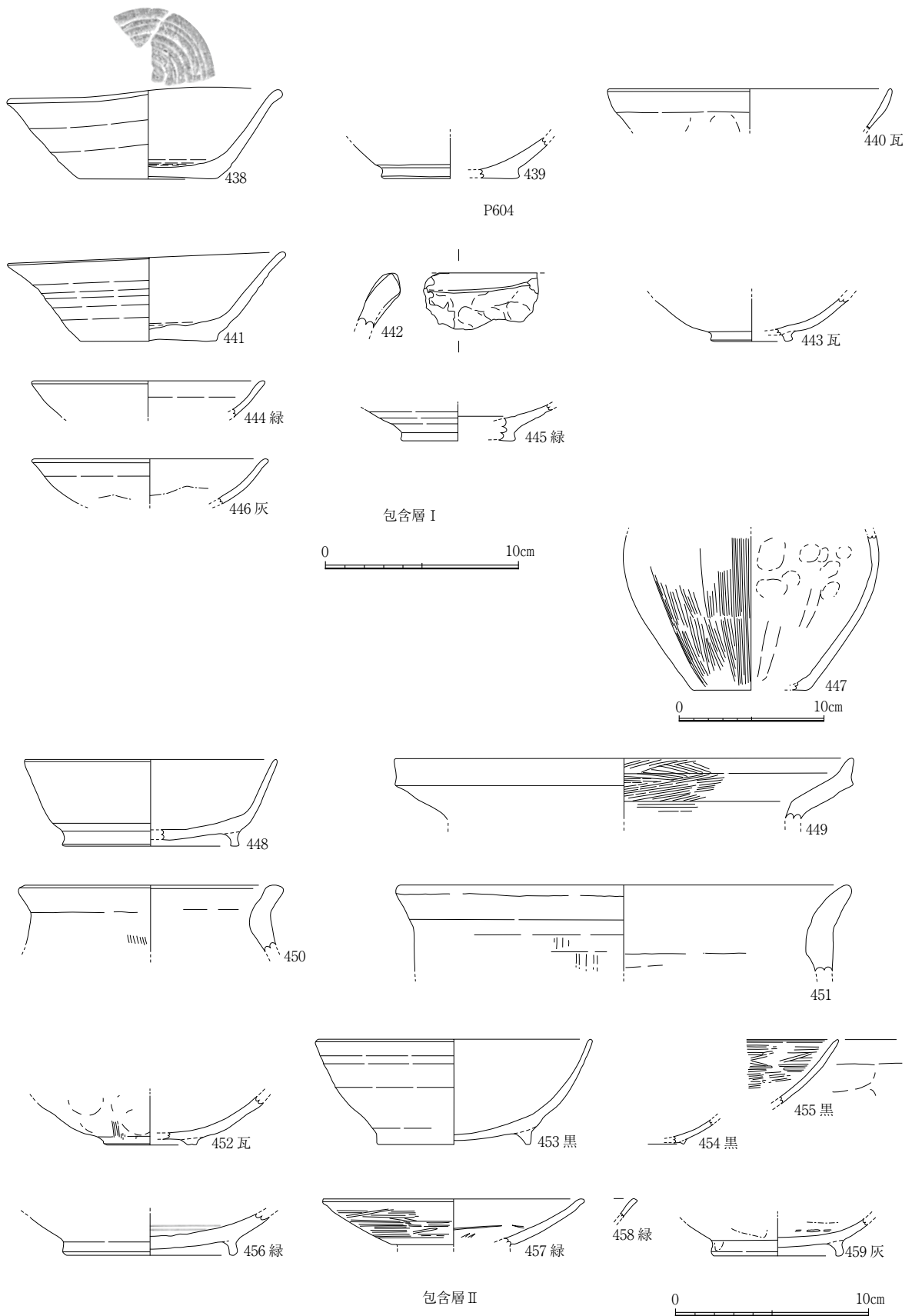
図IV-126 4区 SD1・5・8



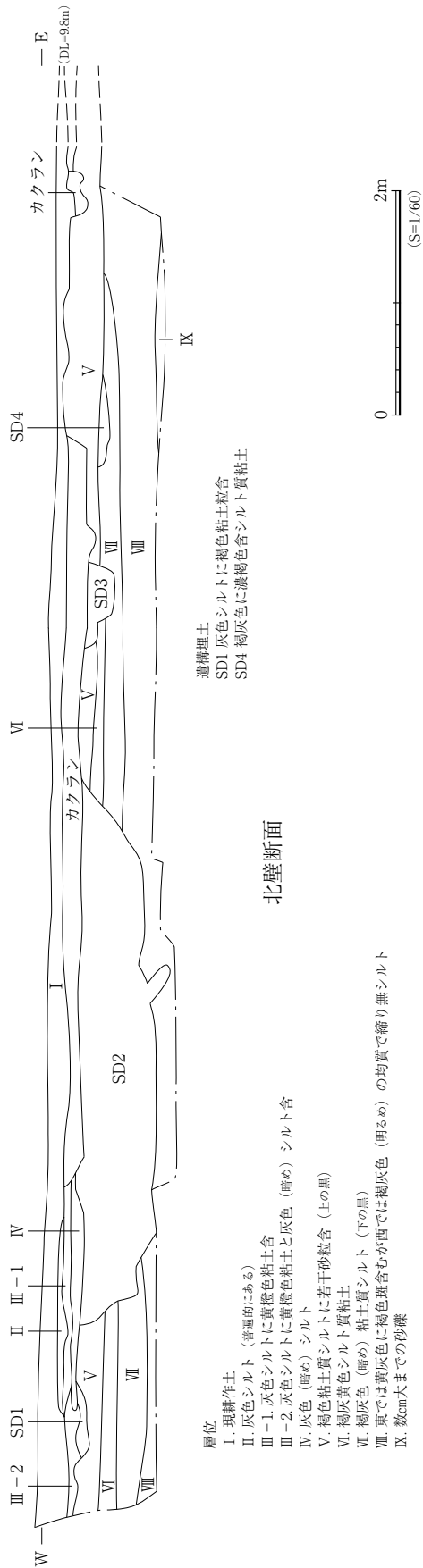
図IV-127 4区 SX2・Pit出土遺物



图IV-128 4区 Pit 出土遺物



图IV-129 4区 Pit·包含層出土遺物



図IV-130 8区基本層準図

③IV-8区

1. 基本層準

遺構検出面は、当区でも概ね2面を認識することができ、「上面」はV層、「下面」はVII層の各々上面であった。ただし、調査区南部では基盤層が異なり、礫を含む土層で、上・下2面の差が存在しないことが多かった。上面検出遺構には古代の方形ピット等があり、時期的に最も遡るものはSD2である。同面検出遺構で弥生中期末以前に遡るものはない。このことはV・VI層の堆積時期に一定の示唆を与える。

II層は、既述のごとく今次対象地に広く分布する灰色シルト層である。

2. 遺構と遺物

遺構計測値や出土遺物の詳細は、後掲の諸表にまとめる。以下に図示されていない遺構の出土遺物は概して少ない。調査区中央部で検出した一定の平面規模の遺構も出土遺物は僅少で、残深は最大20～30cm程度である。遺構埋土は上層検出時に概ね3群、下層検出時には4群に分けることができた。

1) 弥生時代

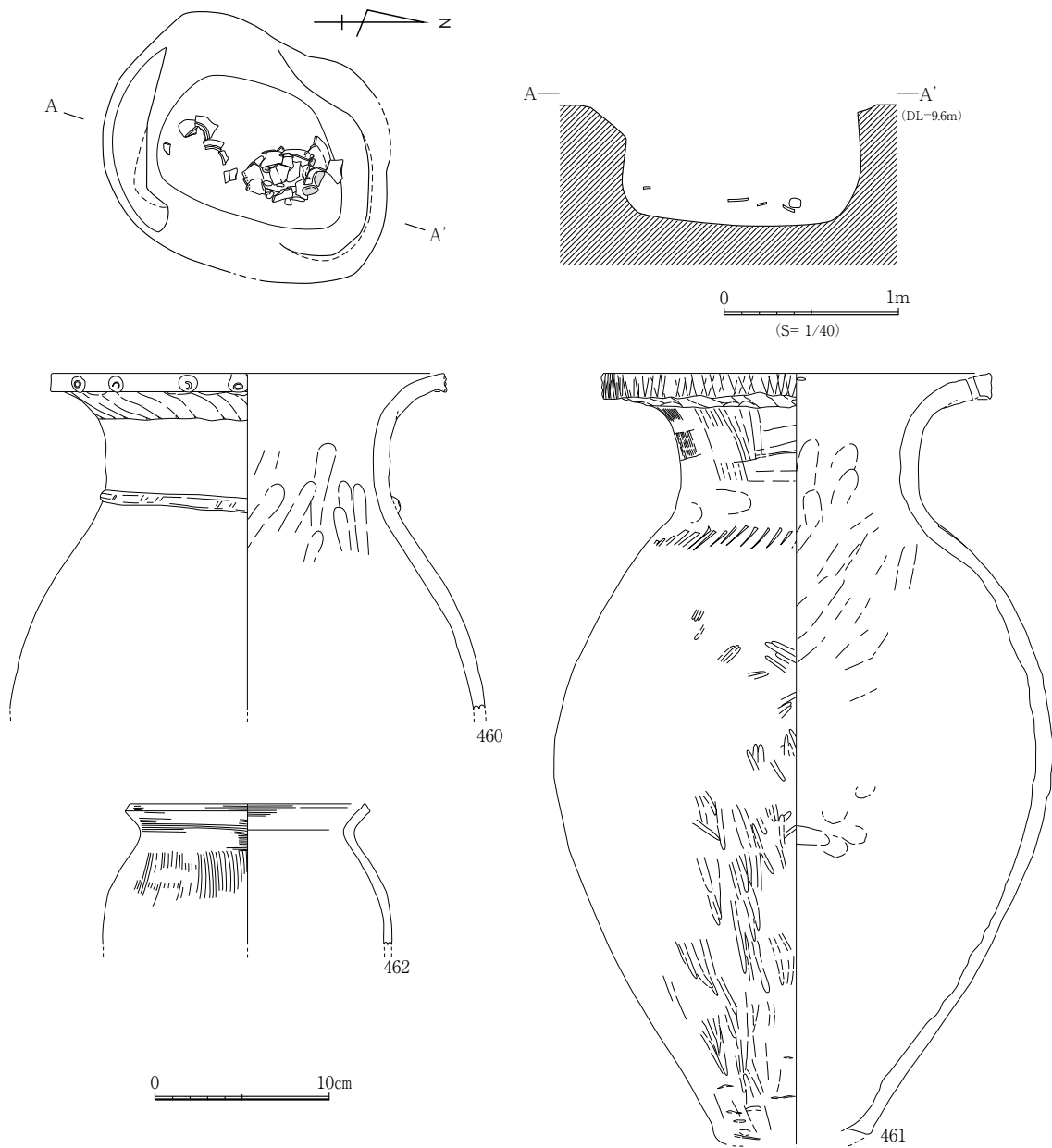
当区では、該期の遺構の主軸方位に言及できる資料が十分でないが、南北に横断するIV-8区SD2等はIII区で述べた方位と一致している。またIV-8区SK6やIV-4区中央部の南北溝は正方位に近い一群として捉えられる可能性があり、その場合、これら2群の方位規制がIII区西端からIV区まで及んでいることになる。

(1)土坑・性格不明遺構

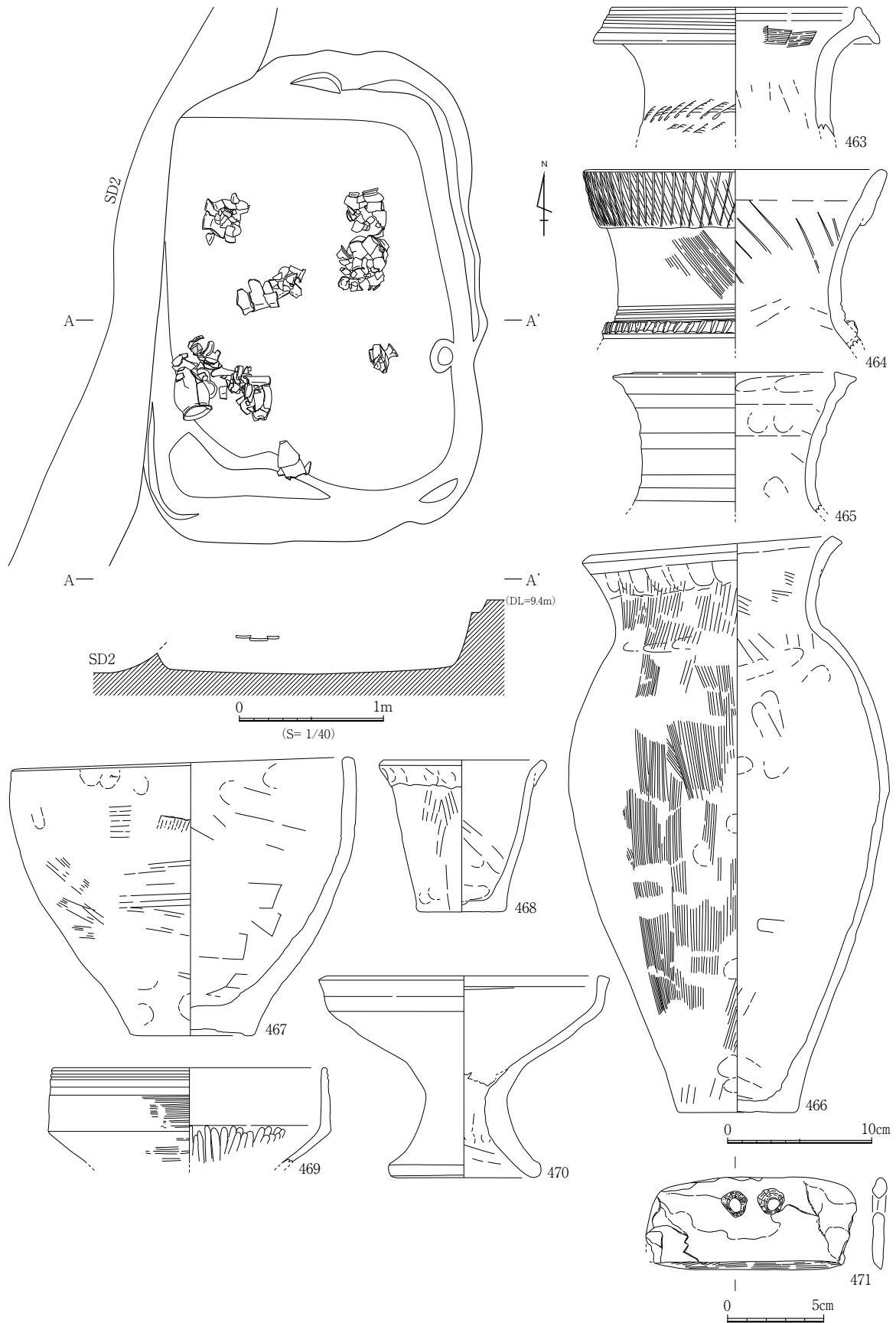
表3の遺構は、出土遺物より弥生時代に属する。弥生後期のSD2をはじめとする溝跡と重複するものは、それらに切られる。

SK6では、残存良好な土器が多数出土した。遺物は中層以下に多い。埋土は褐色シルト質粘土が基調で、中層以下では炭化物および若干の灰黄色土塊を含むが明確な分層は不可能であった。

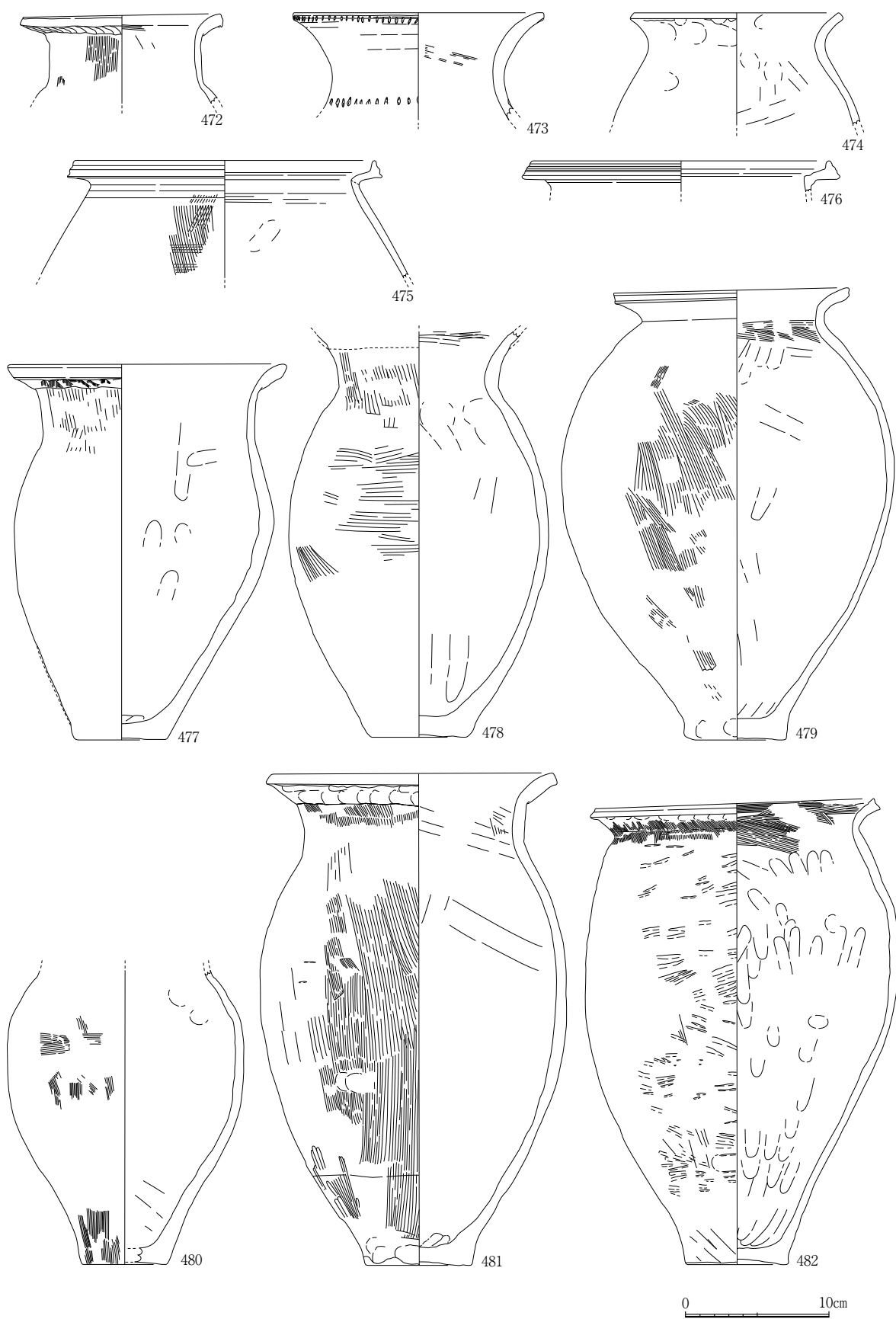
SX5はSD2肩部で検出し、平面形は本来隅丸方形とみられる。埋土層には礫や砂を多含する層がある。最下層は砂利と礫で、その上に粘土層があった。当地点の地山下層は鉄分を含む砂礫層である。遺物は主に最上層から出土した。



図IV-131 8区 SK2



图IV-132 8区SK6



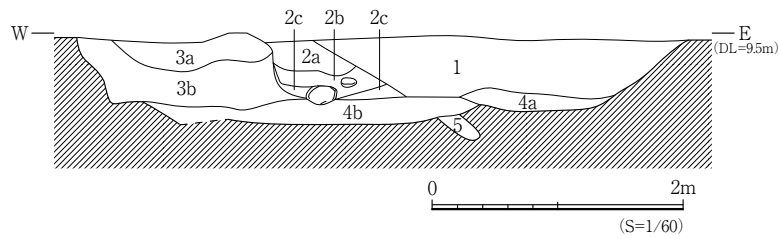
图IV-133 8区 SK6出土遺物

(2)溝

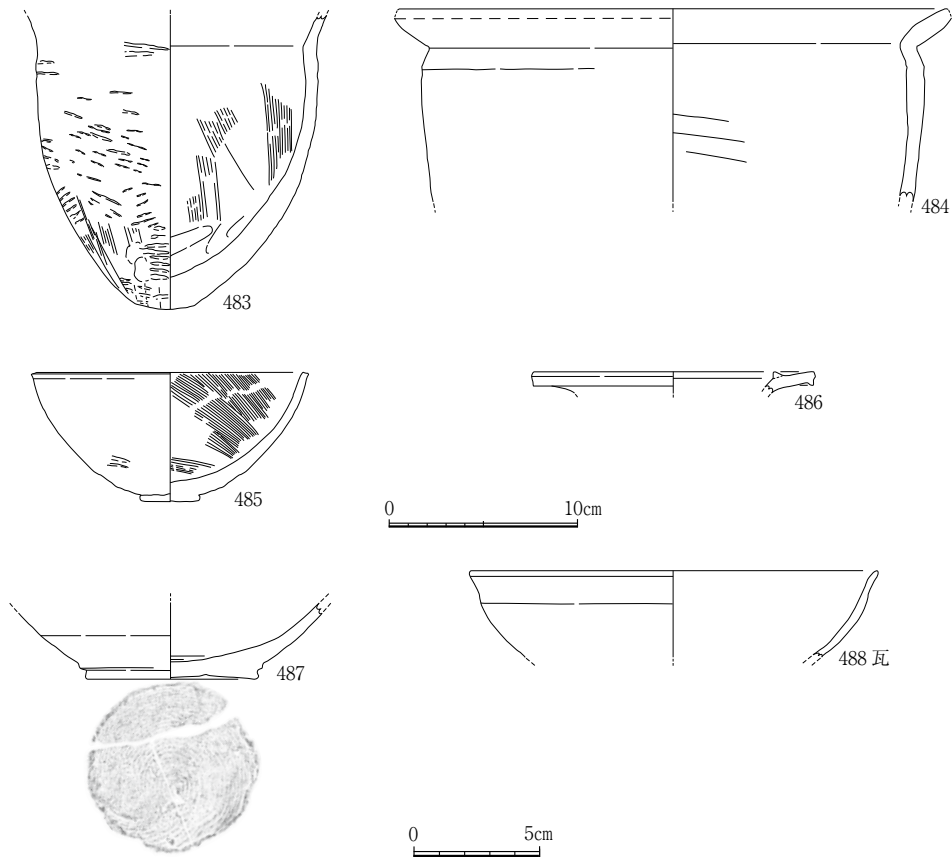
西部で、並走あるいは重複する南北溝跡群を検出した。最も幅が大きいSD2は「上面」で検出され、重なりを持つSK・SX・SDを全て切る。SK6上位の「上面」検出の小土坑またはピットも、SD2に切られていた。下層の砂利主体層から少数の弥生後期土器片が出土する。図示した古代以降の土器群は、上層あるいは掘り込まれていた遺構からの混入の可能性がある。

SD3はSB21に先行する。下面検出のSD4は、下面検出遺構を概ね切る。

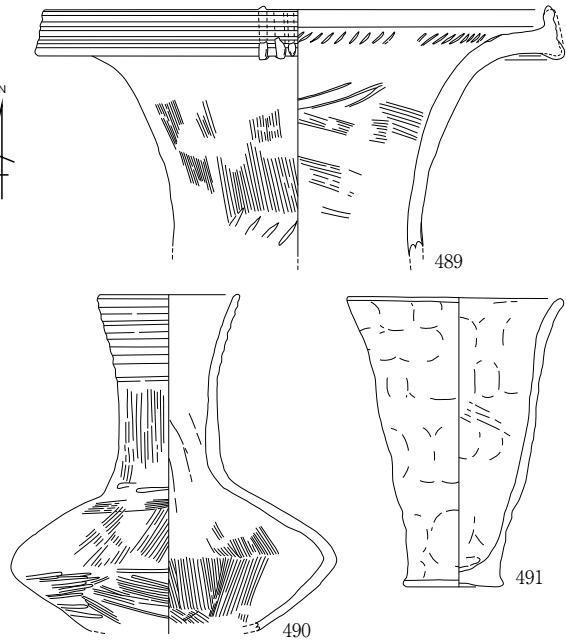
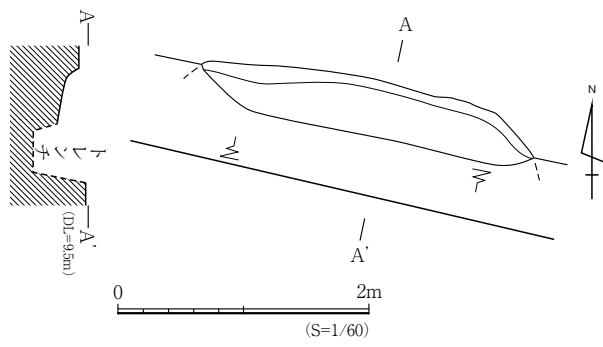
これら溝跡の出土遺物は、SD2を除きいずれも細片で図示していない。



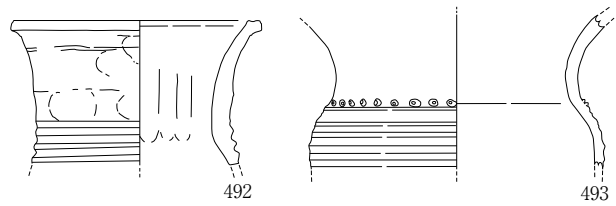
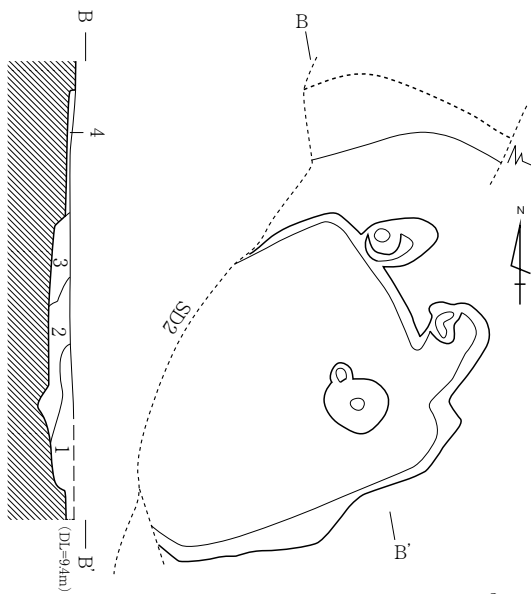
- 1.砂
- 2a.砂と褐色シルト質粘土
- 2b.砂と褐色シルト質粘土多
- 2c.砂主体の褐色シルト質粘土
- 3a.砂に褐色シルト質粘土含
- 3b.砂に褐色粒含
- 4a.砂利主体
- 4b.砂利に10cm大までの礫含 上面に20数cm大の円礫点在
- 5.砂に粘土質シルト含



図IV-134 8区 SD2断面図・出土遺物



SX1



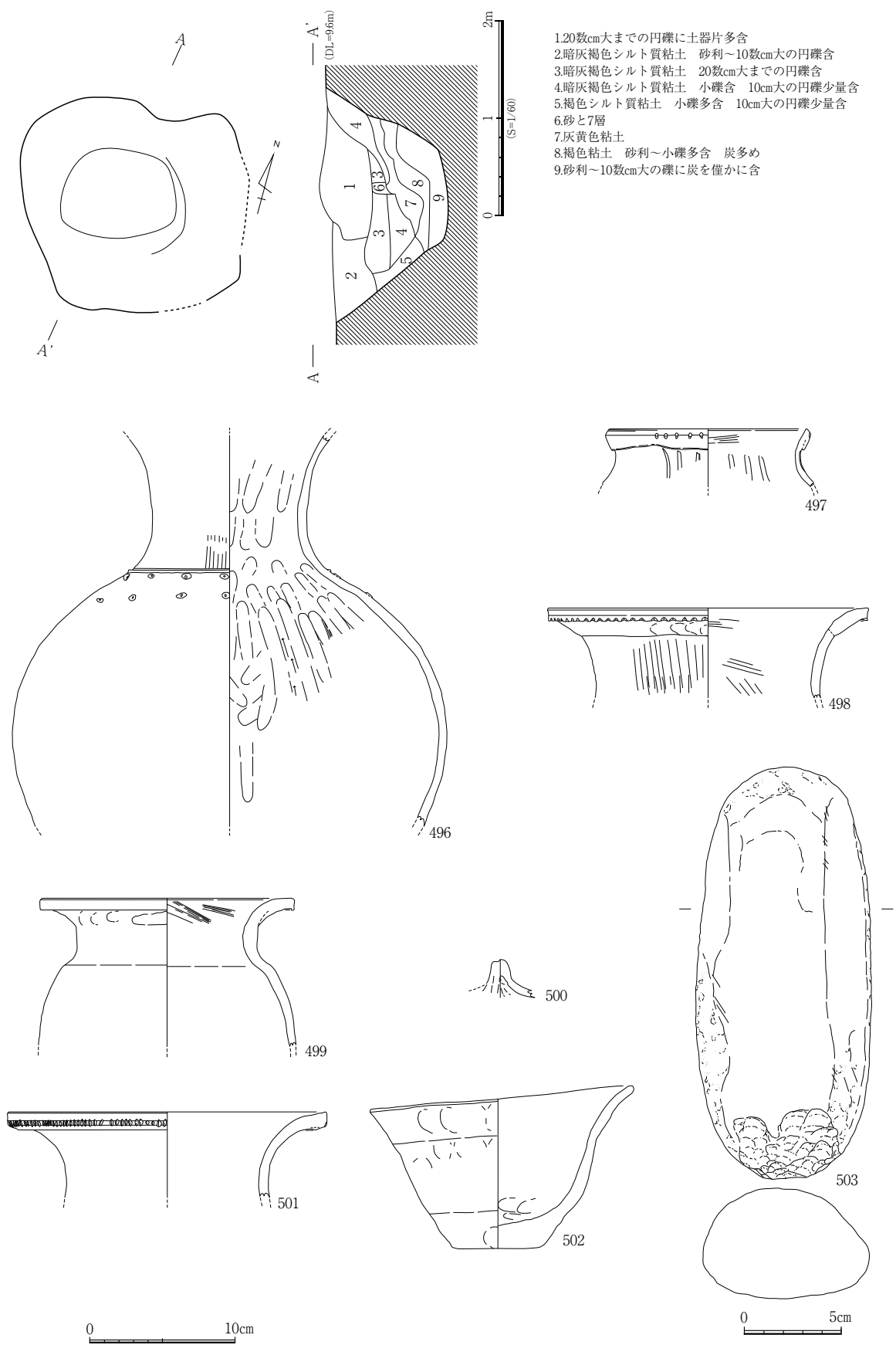
SX4

1. 褐灰色シルト質粘土
2. 褐灰色に黄灰色塊含粘土質シルト
3. 褐灰色に黄灰色粒含シルト質粘土
4. 褐灰色シルト質粘土

(S=1/60)

0 10cm

図IV-135 8区 SX1・SX4

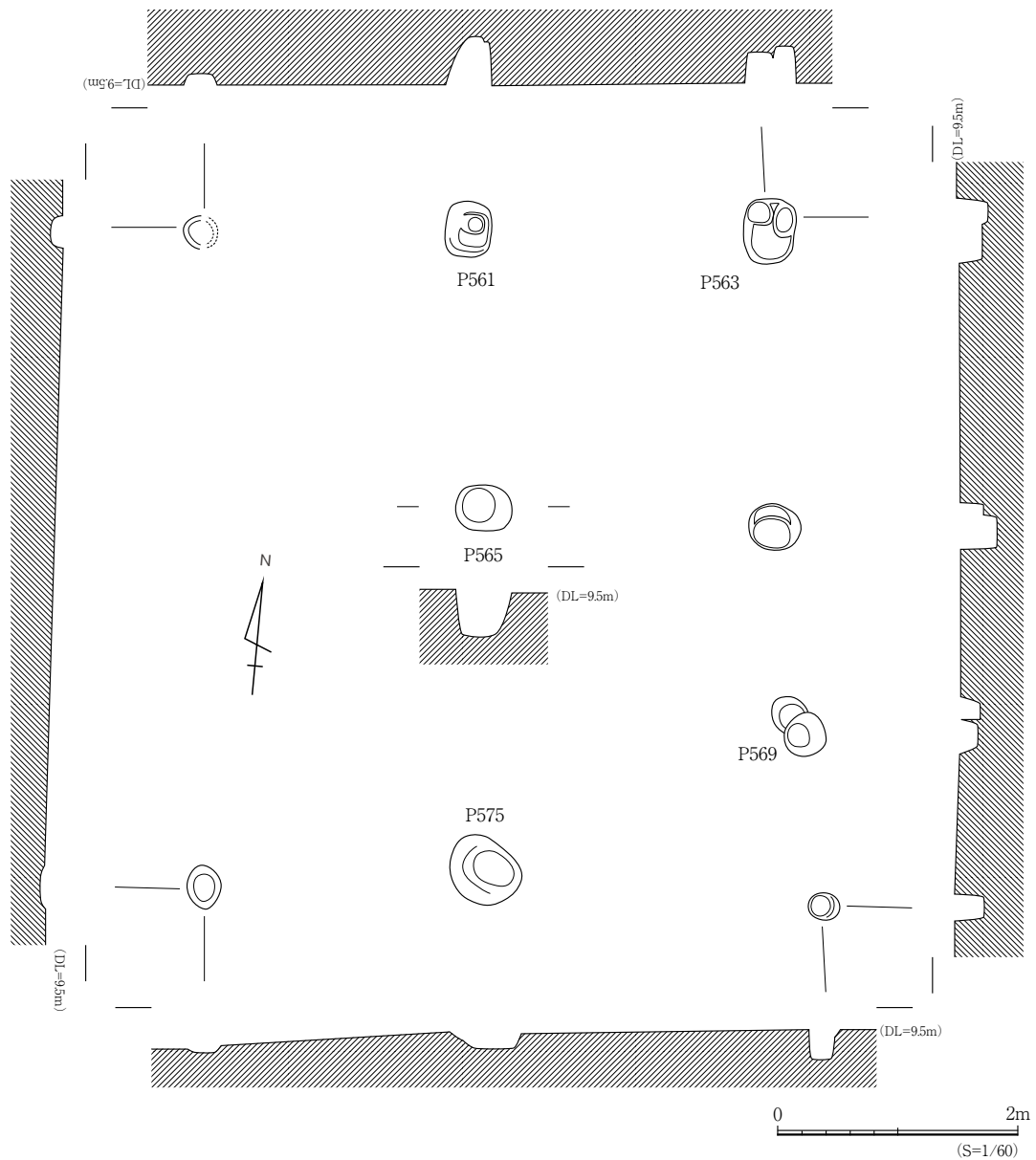


図IV-136 8区 SX5

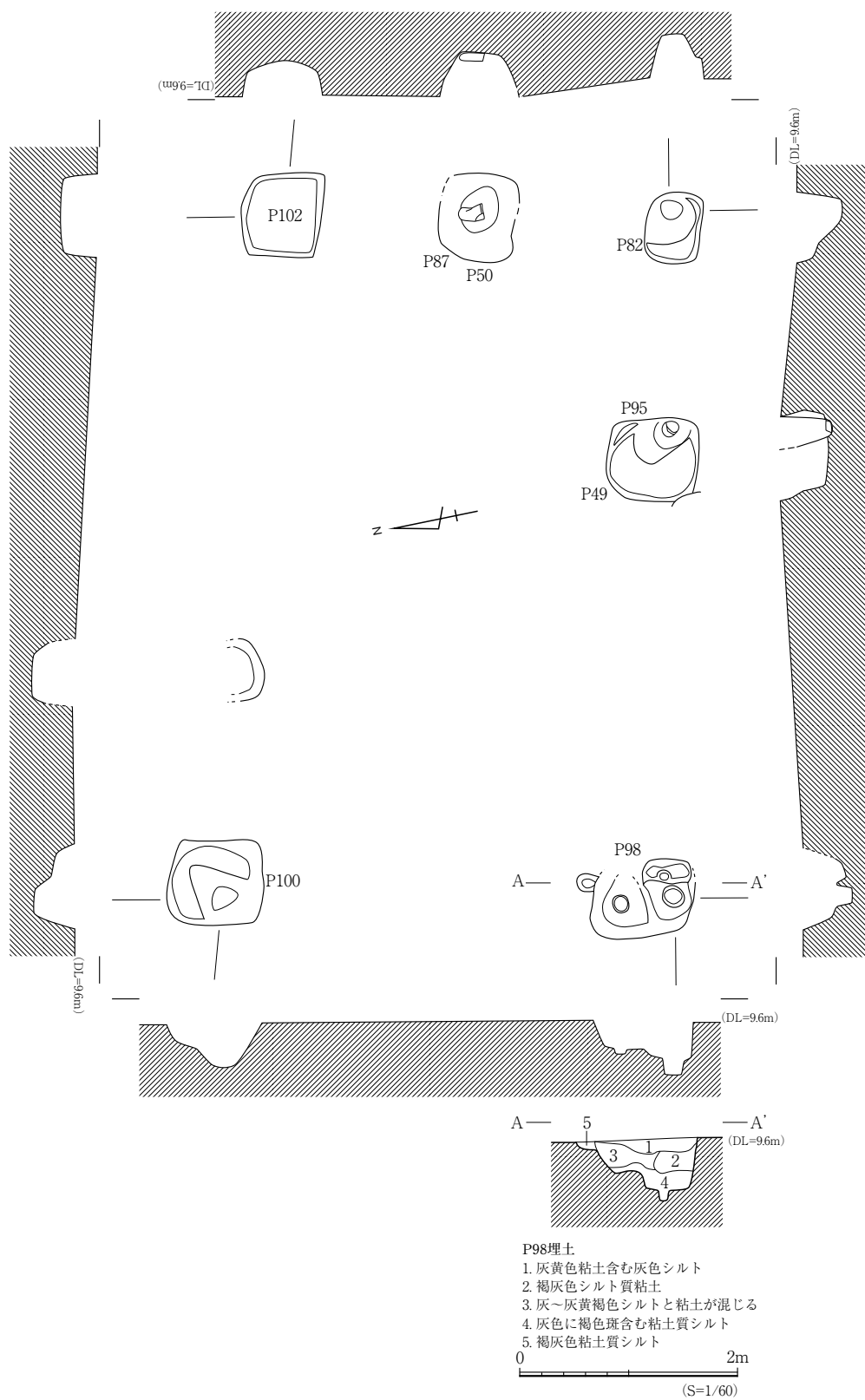
2) 古代以降

(1) 掘立柱建物・柱穴列

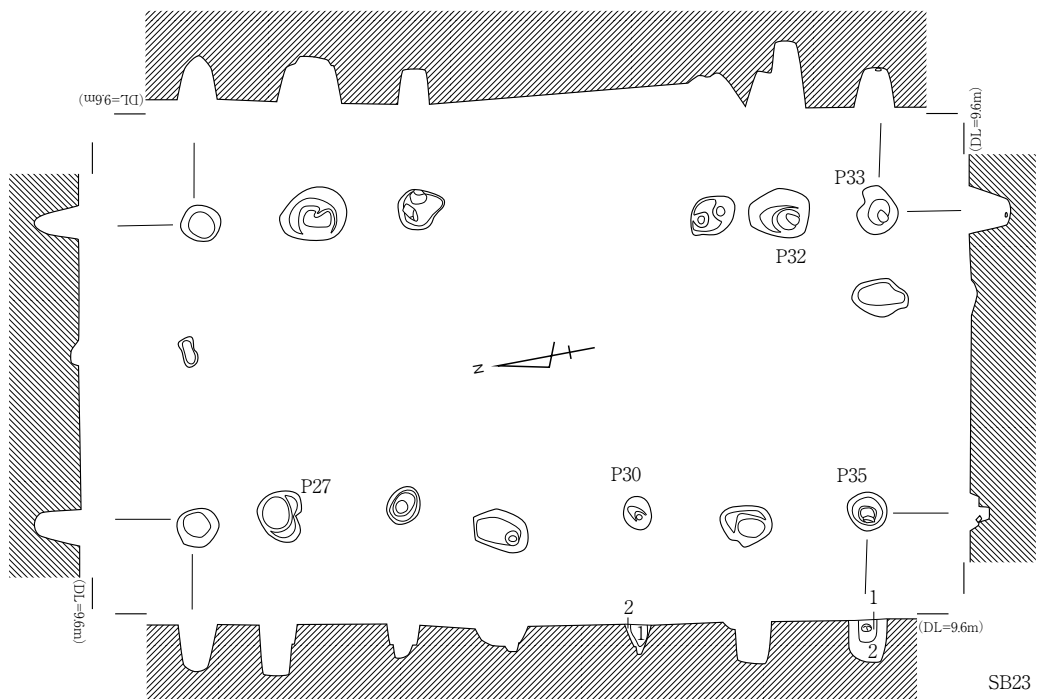
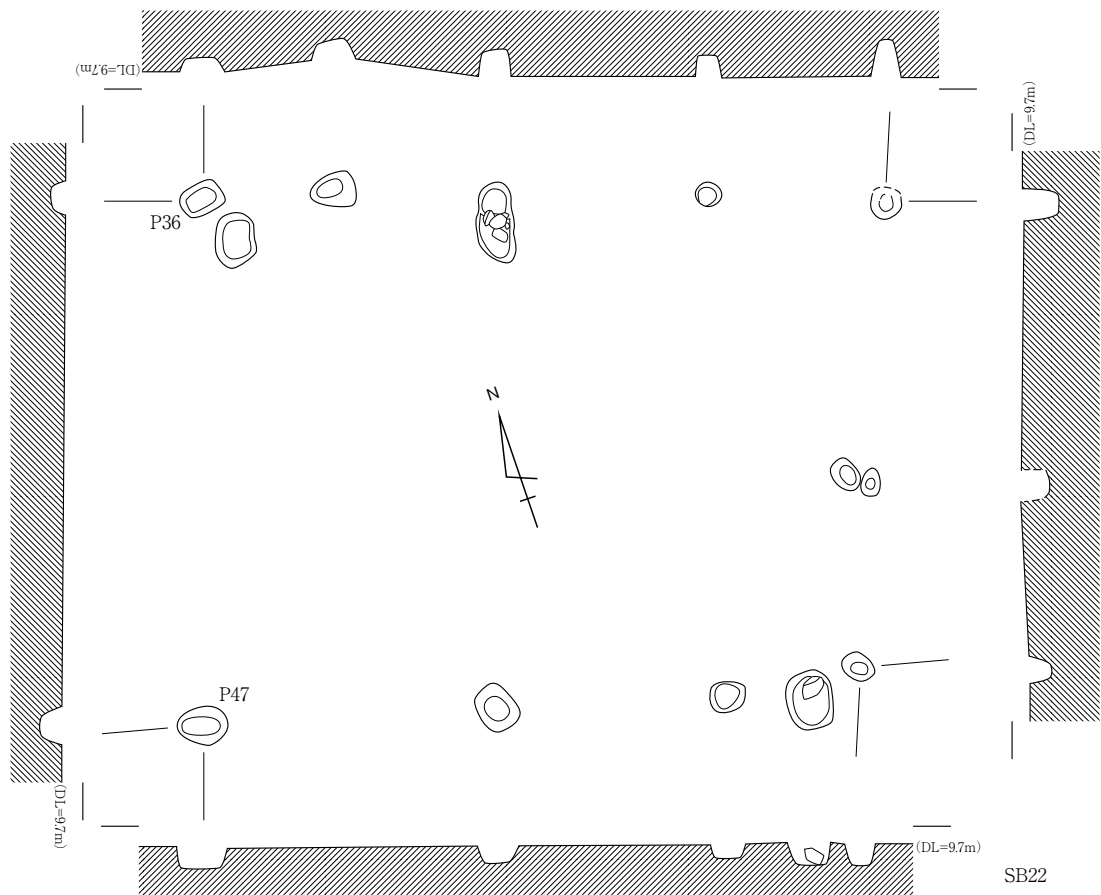
ピットの密度はIV-4区東に比して低い。それ以外は、IV-4区の掘立柱建物跡等の記述に準ずる点が多く、そちらを参照されたい。



図IV-137 8区 SB19



図IV-139 8区 SB21



P30埋土

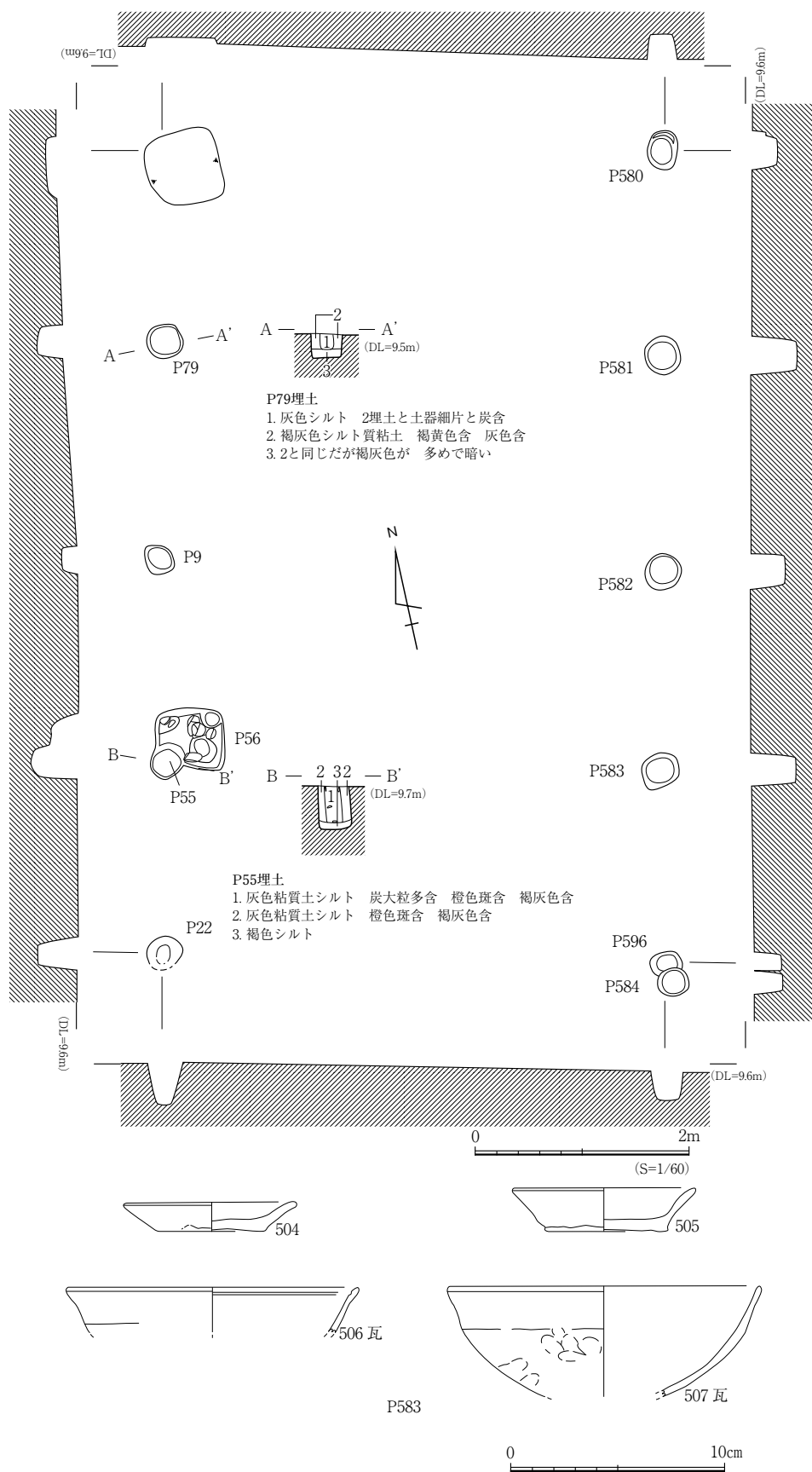
1. 灰黄色シルトと灰色シルト質粘土塊混A群
灰色粘質シルト 橙色斑含 褐灰色含
2. 褐灰色に灰黄色小塊含粘質シルト

P35埋土

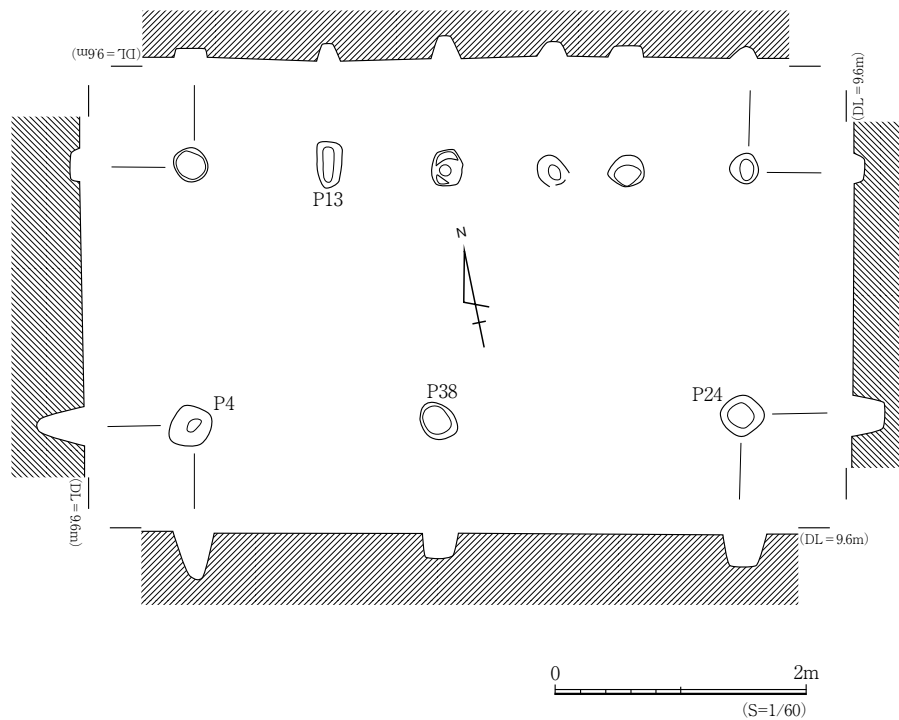
1. 褐灰色シルト質粘土 橙色斑と褐灰色含 灰色粘質シルト含
2. 褐灰色シルト質粘土 灰黄色僅含



図IV-140 8区 SB22・23



図IV-141 8区 SB27



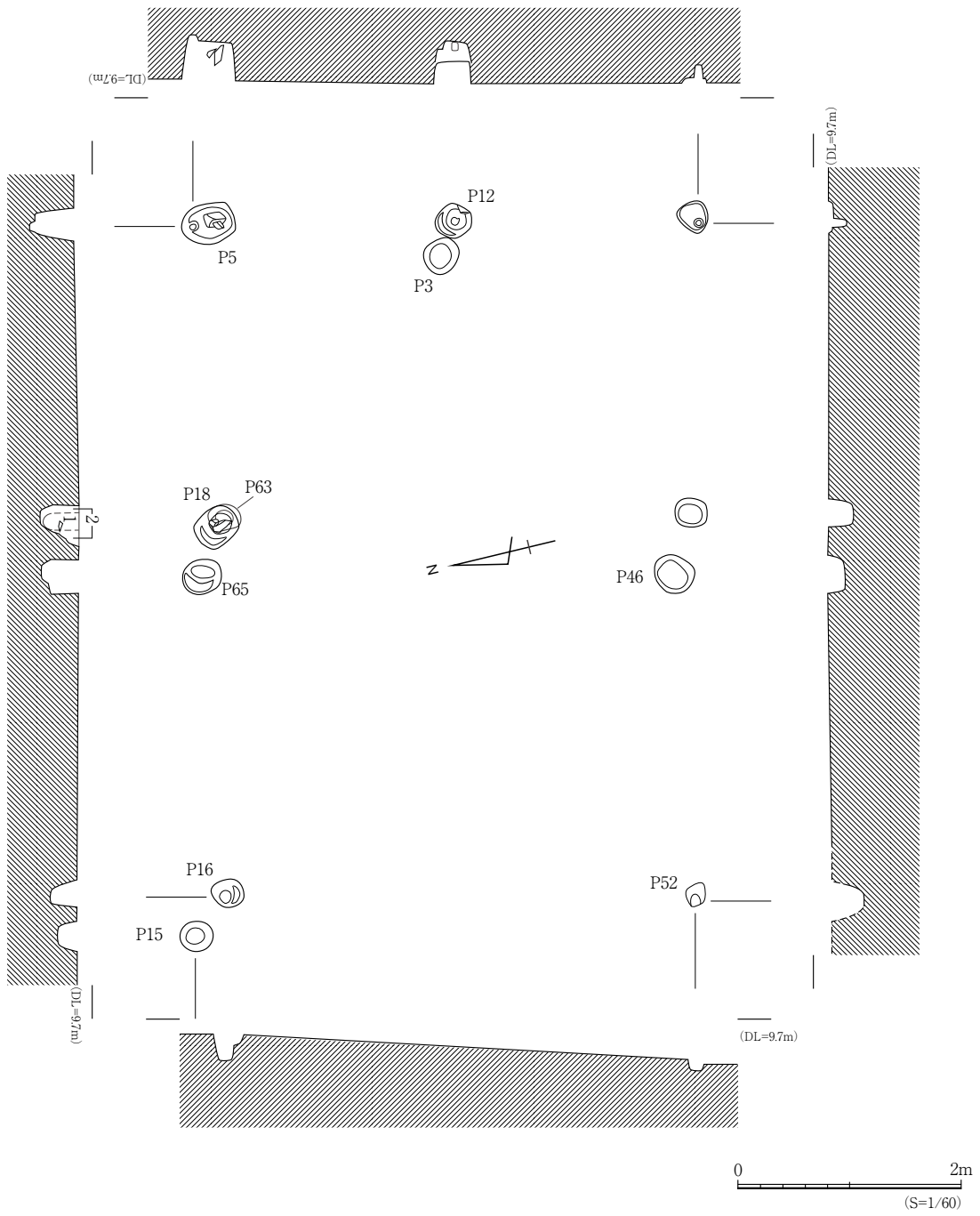
図IV-142 8区 SB28

(2)性格不明遺構等

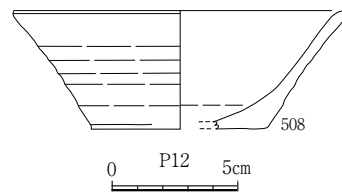
SX6, SE1は遺物が出土しておらず、詳細な時期が不明である。SE1はIV-4区との境界近くに位置する。テラス状部分に川原石があった。「下面」で検出し、SB23に切られる。

(3)ピット

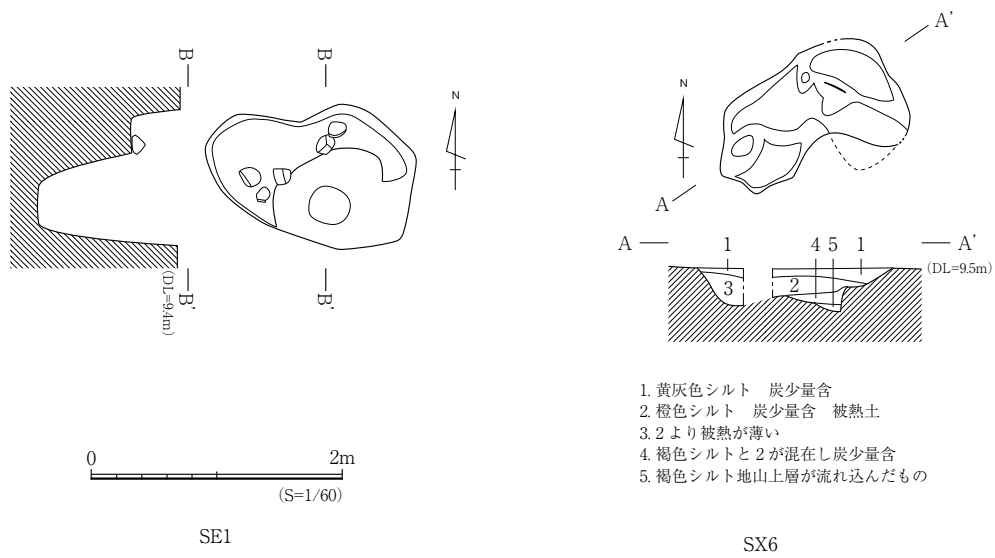
柱穴も含めてピットの出土遺物は概して少なく、帰属時期を特定し難いものが少なくないため、表5-2に一括記載した。遺物や遺構の形状、想定される掘立柱構造物から古代～中世のものが主体と思われるが、弥生時代他に属するものの存在も否定できない。P11は当小区中央部、P77は中央部東寄りにある。



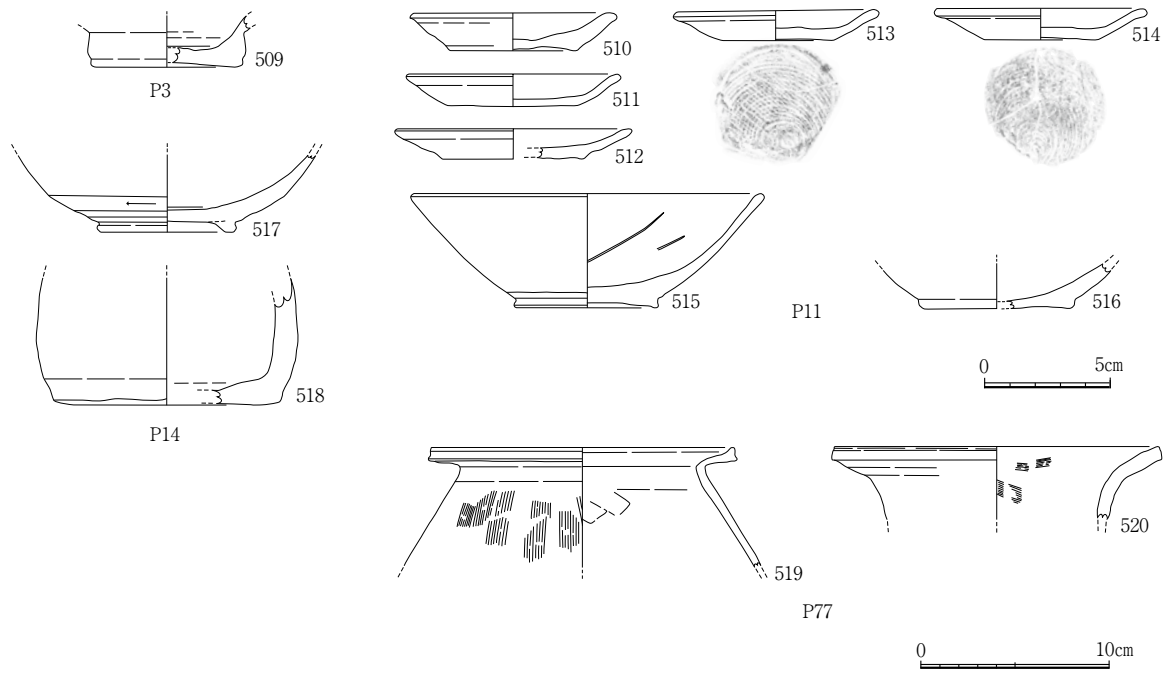
P63埋土
 1. 2より灰色多い炭と土器細片含
 2. 褐灰色シルト質粘土 褐黄色含 灰色含



図IV-143 8区 SB29



図IV-144 8区 SE1・SX6平断面図



図IV-145 8区 Pit 出土遺物

表3 弥生遺構計測表（竪穴建物除く）

全ての表の凡例はⅡ区(P130・148)に準ず

遺構名	位置	平面形	長軸	短軸	深さ	備考・遺物
SK1	Ⅳ-4 西北東	楕円形	0.98	0.73	0.21	
SK4	Ⅳ-4 東北	不明	(1.19)	(1.00)	0.25	
SK52	Ⅳ-4 東中央	溝状	7.25	0.62	0.28	ST1を切る。上面。
SK57	Ⅳ-4 東南東	隅丸方形	1.94	1.40	0.28	下層に焼土・炭化物
SK64	Ⅳ-4 東中央	長方形	0.87	0.56	0.57	
SK72	Ⅳ-4 東南	溝状	4.16	0.88	0.20	SK78に切られる
SK75	Ⅳ-4 東南	方形	3.42	3.09	0.21	
SK76	Ⅳ-4 東南	溝状	(5.83)	1.42	0.55	大型。炭化物多含。SK75を切る。
SK77	Ⅳ-4 東南縁	不明	1.58	(1.05)	0.54	遺物高密。SK72と接合遺物あり。
SK79	Ⅳ-4 西北西	隅丸方形	1.06	0.86	0.30	
SX2	Ⅳ-4 東南東	隅丸方形	2.46	1.64	0.36	10～40cm大の川原石が覆う
SX5	Ⅳ-4 西北	不整形	3.50	3.00	0.11	弥生20片
SD7	Ⅳ-4 東西	南北(湾曲)	(42.01)	0.78	0.44	検出長はⅣ-1区含む。クワ調整他数十片。後期。
SD9	Ⅳ-4 東北東部	弓又は弧状	6.12	0.55	0.36	弥生数片
SD12	Ⅳ-4 西端	弓又は丸L字	4.26	0.20	0.03	下面。弥生数片。
SR2	Ⅳ-4 西南	ほぼ南北か	17.30	不明	0.31	埋土上面は諸遺構の検出面。西肩のみ検出。瓦器片1は混入とみられる
SR3	Ⅳ-4 西南	ほぼ南北か	17.58	不明	0.62	SR2と一体的。先行。西肩のみ検出。
SK2	Ⅳ-8	楕円形	1.72	1.36	0.72	
SK6	Ⅳ-8 北	方形	3.39	(2.22)	0.58	SD2に切られる。埋土褐色シル質粘土(類D群)。
SX1	Ⅳ-8 南縁	不明	(2.73)	(0.44)	0.21	
SX4	Ⅳ-8	不定形	(4.26)	2.24	0.27	SD2に切られる
SX5	Ⅳ-8	隅丸方形	2.65	2.50	1.18	SD2肩部でSD2に切られる。礫や砂多含層あり。
SD2	Ⅳ-8	南北	61.6	4.85	0.72	上面。弥生SK,SX群を切る。ピット群に切られる。確認長はⅣ-6区含む。砂や砂利層あり。弥生後期以降。底標高8.75。
SD5	Ⅳ-8	南北	(16.03)	0.46	0.18	下面。SD2・3に切られる。蛇行。弥生後期以降。底標高9.22。

表4 掘立柱建物等計測表

遺構名	位置	間数	規模	柱穴平面規模	柱穴深さ	方位	出土遺物等	備考
IV-4区								
SB1	IV-4 西南	2×4	4.18×7.31	85～123	14～64	14°	須甕, 塩	柱痕幅 12～20 cm
SB2	IV-4 東	2×(4)	3.27×(8.31)	67～(93)	26～59	-7°	Ⅱ期, 9C. / 赤蓋. 土・須杯, 塩 3, 弥生中期後半 30, 弥 27	柱痕径 26～36 cm
SB3	IV-4 東	(2)	(3.35) × (4.81)	50～62	15～44	-6°		柱痕径 22～33 cm
SB4	IV-4 東	3×6	4.91×10.55	36～(162)	17～64	15°	I, I-5～6, I-7～Ⅱ期, 平安初/土・皿 3, 高杯 3, 鉢, 蓋, 杯 A(8C) 2, 杯 B 2, 杯 2, 甕 2, 甕 A, 甕 B, 塩 88, 赤, 錘, 須・杯 A 5, 杯 B, 不明杯 11, 杯 C 1, 高杯, 壺 3, 皿, 蓋 2, 陶硯, 熱溶粘土, 炭片, 赤割石. 須, 土, 塩等各 40 片	SB4・5 は正確分離不可. 柱痕径 27 cm
SB5	IV-4 東	3×5	4.14×8.59	37～153	12～64	16°	I, I-4～5, I-5～6, I-7～Ⅱ-1期 / 土・皿 2, 杯 10, 甕 B, 蓋, 塩 28, 錘. 須・杯 2, 甕, 皿 2, 杯 4, 蓋. 須, 土, 塩等各 20 片 / 土・高杯 3, 鉢, 杯, 杯 B, 甕 B, 皿, 塩 29. 須・杯 A 3, 壺 2, 皿, 須, 土, 塩等各 40 片. SB4 と重複	柱痕幅 18 cm
SB6	IV-4 東・西	×(3)	4.69×(5.82)	(53)～109	17～51	18°	土・杯 B (I-5 期頃), 蓋 or 蓋赤, 高杯, 赤, 甕, 塩 10. 須・杯 A 2・B 2・不明杯, 高杯, 壺, 弥生中期 20	柱痕径 40 cm
SB7	IV-4 東縁	(3)	(5.19)	62～96	23～34	15°	土・高杯, 杯, 大皿 B, 塩. 須・杯, 桃種子	
SB9	IV-4 東・西	2×(3)	3.88×(5.51)	57～68	18～61	18～19°	I 期, 8C. / 土・杯 or 高杯, 杯 A (8C.), 杯 B, 甕 B, 赤 2. 須・杯 B, 高杯, 不明杯, 椀状滓	柱痕径 32～40 cm
SB10	IV-4 東	2×3	3.88×4.96	53～(162)	17～56	11°	I, I-4～5, I-5 頃, I-6, I～Ⅱ, 律令期, 平安初/土・杯 22, 杯 B, 蓋 2, 甕 A, 皿 B, 塩 26. 須・皿, 杯 3, 蓋, 壺. 赤高杯, 釘, 土質皿. 須, 土, 塩等 20 数片 / 土・杯 A 2, 杯 B, 甕 A, 甕 2, 塩 15, 須・杯 A 3, 不明杯 4, 蓋, 壺. SB4 と重複	
SB11	IV-4 東	2×	3.70×(3.65)	49～65	18～59	8°	I-6～7 / 土質杯. 須・蓋, 杯, 塩	
SB12	IV-4 東	(1) × (2)	(2.95) × (5.92)	(24)～62	16～64	14°	I-4～5 / 土・杯 A, 塩 9. 須・杯, 高杯, カマド, 須・土 20 片	柱痕幅 17 cm
SB13	IV-4 東	(2) × 3	(1.72) × 6.66	(27)～64	7～26	16°	土・杯, 皿, 椀埋納. 内黒	
SB14	IV-4 東	3×	3.56×(4.50)	31～71	8～54	11°	Ⅱ期 / 土質杯 D, 弥生 5 片	柱痕径 12～18 cm
SB15	IV-4 東	2×5	4.78×9.95	50～96	9～52	10°	I-5～6, I 期か / 土・杯, その他 7, 土師器杯 A, 錘, 塩, 赤, 須・杯 A, 不明杯, 蓋, 杯蓋, 他	柱痕径 25 cm
SB16a	IV-4 東	×(4)	4.18×7.75	37～45	35～40	2°	古代 / 土・甕	SB16 は 2 回建替え. 柱痕幅 20 cm
SB16b	IV-4 東	×(4)	4.36×8.63	38～54	28～42	1°	中世	柱痕幅 18 cm
SB16c	IV-4 東	2×	4.92×6.95	29～67	12～33	-2°	古代後・中世前期 / 瓦椀, 糸切杯	柱痕径 22 cm
SB17	IV-4 東	2×3	3.01×3.78	24～31	9～26	17°	平安末期	柱痕径 11 cm
SB18	IV-4 東	×(3)	2.17×2.98	16～29	13～24	16°	古代後～中世, 中世 / 土・杯 2	

遺構名	位置	間数	規模	柱穴平面規模	柱穴深さ	方位	出土遺物等	備考
SB24	IV - 4 西	×3	4.21×5.78	22 ~ 42	9 ~ 29	12°		
SB25	IV - 4 西	(2×2)	3.88×(4.74)	24 ~ 36	11 ~ 26	10°	中世/土質皿埋納, 糸切杯 2, 糸切土	
SB26	IV - 4 西	1×1	3.07×4.64	23 ~ 44	13 ~ 20	13°	古代末~中世前/土質杯 3, 土錘 (小)	
SA1	IV - 4 東 東縁	3	5.07	62 ~ 80	13 ~ 30	15°	弥生 20 片	SB か
IV - 8 区								
SB19	4 ~ 8	2×	5.18×5.80	26 ~ 62	7 ~ 40	- 8°	弥生 13 片	柱痕径 18 cm
SB20	4 ~ 8	×3	5.20×6.18	22 ~ 87	12 ~ 39	9°	土質皿 (口径 7.8 cm 完形) 埋納, 被熱割石 8	柱痕径 14 ~ 29 cm
SB21	8	2×3	3.99×6.24	55 ~ 92	15 ~ 52	14°	古前, I - 6 ~ II - 1 期/土質杯 B, 土師器・蓋, 高杯, 甕, 塩, 赤, 弥生甕	柱痕径 21 ~ 35 cm
SB22	8	-	4.15×5.43	20 ~ 65	11 ~ 30	16°	近世 播鉢	西辺は SK2 に切られる
SB23	8	×6	2.38×5.39	23 ~ 54	5 ~ 41	10°	古末中前 瓦器片	柱痕径 12 ~ 28 cm
SB27	4 ~ 8	1×4	4.73×7.52	29 ~ 38	23 ~ 43	13°	中世前, 古末中初, III - 3 期/土質椀 A 半存埋納・杯 2 片, 瓦器 2 片, 瓦器椀 4 片, 瓦器椀 (和泉). 土層に埋納した土質杯 or 椀 (古末中初) は割れ・劣化しているが原位置保つ. 炭粒多含	柱痕径 31 cm
SB28	8	1×5	2.09×4.39	25 ~ 33	7 ~ 38	12°	古後中初/土質杯 2, 土質杯 7 片, 球形砂岩礫 (4cm)	柱痕径 17 cm
SB29	8	2× (2)	4.31×6.08	28 ~ 47	16 ~ 41	13°	古代, 古後中初/土質杯 2・その他, 皿 (径 7.8cm 準完) 埋納. 土層に土質杯底 (中前頃) 埋納. 炭粒多含	建替 1 回. 柱痕径 8 ~ 9 cm
SA2	8	1	4.78	64 ~ 82	19 ~ 24	10°		
SA3	8	(6)	(8.60)	26 ~ (56)	18 ~ (41)	- 2°	弥生甕	
SA4	8	(3)	(4.76)	40 ~ (52)	13 ~ 25	12°	土師器高杯 (完形)	

※遺物欄は, 構成するピット・SK の一覧および全遺物計数表にある出土遺物を羅列. 柱穴規模は cm. () は検出分あるいは推定. その他は P130 の凡例に準ず.

表5-1 ピット計測表 IV-4区

遺構	小区	長軸	短軸	深さ	出土遺物等等	検出	備考
P18	IV-4 西	29	29	15	8C. 須・杯B埋納	上面	
P36	IV-4 西	34	30	16	古代 or 古墳 図402・403・404	上面	
P37	IV-4 西	78	60	24	律令期 須・杯	上面	
P38	IV-4 西	68	48	31	律令期 須・杯, 塩	上面	
P39	IV-4 西	48	46	25	8C. 赤杯, 土・甕	上面	隅丸方形
P42	IV-4 西	59	36	17	律令期 須・杯	上面	
P52	IV-4 西	27	24	22	平安末 図405・406・407	上面	
P59	IV-4 西	41	25	30	中世 土・杯	上面	2基か
P62	IV-4 西	65	51	22	中世 須・片	上面	隅丸方形
P63	IV-4 西	30	21	18	須・杯	上面	
P65	IV-4 西	38	31	19	須・杯, 塩	上面	
P66	IV-4 西	44	41	11	平安 土・杯 or 椀A, 甕, 小鉄滓	上面	
P68	IV-4 西	32	30	34	糸切皿 or 杯	上面	
P69	IV-4 西	28	28	24	古代 土・杯 Bor 椀C	上面	
P72	IV-4 西	37	28	26	塩	上面	
P73	IV-4 西	61	61	13	11C. 後半~12C. 前半 土椀A埋納, 内黒(搬入) 9~10C.	上面	柱痕幅 20cm
P80	IV-4 西	28	26	17	打割川原石2 (22と24cm)	上面	
P81	IV-4 西	30	29	16	須・杯, 扁平円礫	上面	
P91	IV-4 西	37	31	14	中世 瓦器片, 刀子先片 図410	上面	
P94	IV-4 西	50	43	17	律令期 須・杯	上面	
P98	IV-4 西	38	36	20	土・皿	上面	
P109	IV-4 西	32	25	17	律令期 土・甕B	上面	
P123	IV-4 西	58	54	15	肥前系陶器椀か	上面	
P137	IV-4 西	33	26	33	律令期後半 須・杯B	下面	

遺構	小区	長軸	短軸	深さ	出土遺物等	検出	備考
P138	IV-4 西	34	32	40	古代末～中世 土・糸切	下面	
P143	IV-4 西	73	51	30	律令期 土師器杯, 須	下面	
P158	IV-4 東	20	19	11	古代末～中世 土・糸切杯	上面	
P160	IV-4 東	58	53	37	律令期後期 図412	上面	隅丸方形
P171	IV-4 東	28	25	12	中世 土・鍋(黒・白雲母多含搬入品), 土・杯	上面	
P178	IV-4 東	22	22	8	中世 瓦器?底	上面	
P215	IV-4 東	30	23	13	古代後～中世 土・杯	上面	
P221	IV-4 東	34	26	19	律令期頃 須・甕	上面	
P223	IV-4 東	(41)	(22)	19	土・錘	上面	
P232	IV-4 東	36	32	26	赤	上面	
P239	IV-4 東	(30)	24	47	8C. 赤, 須, 土・杯	上面	複数遺構の集合
P245	IV-4 東	27	27	33	11C. 図416	上面	
P248	IV-4 東	61	55	19	律令期か 土・杯, 塩, 須	上面	
P249	IV-4 東	35	29	17	中世 瓦器片	上面	
P252	IV-4 東	30	27	20	律令期頃 須・甕	上面	
P257	IV-4 東	62	53	24	9～10C. 前 図414	上面	
P264	IV-4 東	(26)	33	14	古代後 図415	上面	P240に切られる
P266	IV-4 東	30	29	39	12C. 末～13C. 前 土・杯 図417	上面	
P267	IV-4 東	34	34	35	土・椀C2	上面	
P273	IV-4 東	33	31	12	10C.	上面	
P275	IV-4 東	33	31	14	10C. 図418	上面	
P283	IV-4 東	40	26	16	10C. 杯D埋納	上面	隅丸方形
P286	IV-4 東	26	20	28	10～11C. 図419	上面	隅丸方形
P294	IV-4 東	40	30	11	古代末～中世 瓦器椀片 図421	上面	2基か
P297	IV-4 東	44	28	12	8C. 後～9C. 初 土師器杯, 須・蓋	上面	

遺構	小区	長軸	短軸	深さ	出土遺物等	検出	備考
P298	IV-4 東	34	28	14	10C. 内黒	上面	
P300	IV-4 東	36	36	17	図422	上面	
P302	IV-4 東	31	24	17	8C. 須・杯B, 土師器蓋, 須・甕, 土・甕	上面	
P305	IV-4 東	27	23	16	古代末~中世 土・小皿	上面	
P308	IV-4 東	65	(44)	29	古代 須・碗, 杯	上面	トシに切られる
P312	IV-4 東	27	24	17	10C. 末~11C. 須・碗C	上面	
P320	IV-4 東	24	22	23	瓦碗片1	上面	
P323	IV-4 東	44	42	16	8C. 後半(I-5) 須・皿, 塩	上面	柱痕幅16cm
P326	IV-4 東	32	26	43	土質皿	上面	
P327	IV-4 東	54	49	40	律令期 塩2片	上面	
P329	IV-4 東	29	28	19	瓦碗 図423	上面	
P333	IV-4 東	26	24	26	Ⅲ-2~3期 土・碗C	上面	
P335	IV-4 東	28	26	31	律令末I-6~7期 須・杯B	上面	
P336	IV-4 東	36	36	-	律令期か 塩	上面	図なし
P344	IV-4 東	55	40	29	黒碗搬入	上面	
P345	IV-4 東	36	28	31	須・甕片, 塩	上面	
P347	IV-4 東	38	35	26	土・高杯	上面	
P350	IV-4 東	36	30	34	瓦碗	上面	
P351	IV-4 東	26	25	35	須・甕片	上面	
P355	IV-4 東	32	28	20	須・蓋	上面	
P358	IV-4 東	30	26	33	弥生7	上面	
P360	IV-4 東	34	28	27	搬入黒	上面	
P364	IV-4 東	24	22	21	須・杯	上面	
P367	IV-4 東	24	24	25	弥生50片	上面	
P375	IV-4 東	80	54	20	Ⅱ~Ⅲ期 土・甕, 土質碗	上面	

遺構	小区	長軸	短軸	深さ	出土遺物等	検出	備考
P378	IV-4 東	22	20	21	I期 土・高杯	上面	
P384	IV-4 東	34	32	18	I期 須・杯B	上面	
P385	IV-4 東	45	35	25	II-2~3期 黒椀3片 杯D2片 図429	上面	
P386	IV-4 東	54	41	25	III B/ I期 鍾	上面	
P387	IV-4 東	27	25	29	I-6~7期 須・皿	上面	
P388	IV-4 東	44	42	30	土・皿径9cm	上面	
P390	IV-4 東	86	58	40	杯D 図430・431	上面	
P391	IV-4 東	24	22	26	弥生 図432	下面	
P394	IV-4 東	55	46	26	I期 土・高杯	下面	
P418	IV-4 東	46	44	28	土・鍾小	下面	
P422	IV-4 東	52	50	21	塩	下面	
P426	IV-4 東	51	48	26	III期 土質椀 or 杯	下面	
P427	IV-4 東	24	23	18	III~IV-1期 土質糸切	下面	
P436	IV-4 東	(52)	59	23	律令期 須・杯A, 土・甕	下面	P429に切られる
P442	IV-4 東	54	30	17	塩, 須・甕	下面	
P450	IV-4 東	39	39	15	I-5~6期	下面	
P455	IV-4 東	33	32	12	律令期 塩, 土・甕	下面	
P458	IV-4 東	46	38	20	塩	下面	
P463	IV-4 東	78	57	33	I-6~7期 須・杯B, 土・高杯, 塩8	下面	
P465	IV-4 東	29	23	7	I-5~6期 須・蓋	下面	
P467	IV-4 東	20	20	23	中世前期 瓦片, 土質杯	下面	
P470	IV-4 東	31	30	25	I-4~6期 土・杯B(大), 須・杯2	下面	方形
P471	IV-4 東	19	19	13	古代 土・甕	下面	
P476	IV-4 東	28	27	20	弥生 多条微隆起帯壺	下面	
P477	IV-4 東	27	25	13	中世前期 瓦椀, 土質杯	下面	

遺構	小区	長軸	短軸	深さ	出土遺物等	検出	備考
P483	IV-4 東	28	27	26	古代 土・杯, 甕	下面	
P486	IV-4 東	24	24	23	律令期 須・杯 or 皿	下面	
P488	IV-4 東	40	38	23	塩	下面	
P497	IV-4 東	36	34	27	土錘(小)	下面	
P499	IV-4 東	24	23	20	律令期 土・杯	下面	方形
P501	IV-4 東	30	29	22	泉Ⅲ-2~3期 瓦椀	下面	
P505	IV-4 東	42	30	16	I-4~5期 土・杯, 塩	下面	2基か
P507	IV-4 東	50	42	29	Ⅱ期 内黒椀(搬入), 土質杯	下面	2基か
P519	IV-4 東	30	28	29	塩2	下面	
P520	IV-4 東	37	36	36	I-5期 ± 土・杯B, 塩, 須・杯A	下面	
P525	IV-4 東	113	90	60	Ⅱ期初 搬入黒椀, 須・杯B, 蓋, 皿, 甕, 土・蓋, 甕C, 塩2	下面	
P530	IV-4 東	91	69	38	I-5期以前 土・杯, 須・杯B, 蓋, 割れた扁平川原石 21cm	下面	隅丸方形
P531	IV-4 東	57	57	13	弥生 20	下面	
P532	IV-4 東	50	38	22	須・杯	下面	
P537	IV-4 東	54	49	28	古代後~中世前 土質皿, 軽石	下面	隅丸方形
P539	IV-4 東	23	21	16	古代後~中世前 土・杯	下面	
P540	IV-4 東	54	53	41	赤, 鉄片	下面	
P543	IV-4 東	30	25	8	Ⅱ期 搬入黒椀	下面	
P555	IV-4 東	59	58	20	Ⅱ期 搬入黒椀	下面	P537に切られる。隅丸方形
P559	IV-4 東	(46)	42	32	弥生 8	下面	
P567	IV-4 西	64	32	14	弥生 甕凹線文	下面	
P568	IV-4 西	36	27	14	古代後~中世前 土質杯	下面	
P571	IV-4 西	24	22	20	古代後期~ 土質杯	下面	
P572	IV-4 西	57	38	26	古代後期~ 弥生 甕	下面	
P573	IV-4 西	28	23	35	弥生 3片 図 437	下面	SX5床で検出。P567に切られる

遺構	小区	長軸	短軸	深さ	出土遺物等	検出	備考
P574	IV-4 西	25	24	12	弥生	下面	
P579	IV-4 西	29	28	22	古代末～中世前 糸切杯 F	下面	
P582	IV-4 西	35	33	31	中世前 瓦器 2片	上面	
P585	IV-4 西	38	32	17	土質杯 2片	上面	
P588	IV-4 西	38	35	18	土質杯	上面	
P589	IV-4 西	21	20	13	土質杯 2	上面	
P590	IV-4 西	43	32	15	弥生のみ	上面	
P592	IV-4 西	22	22	11	瓦器片	上面	
P597	IV-4 西	27	26	24	須・高杯	上面	
P598	IV-4 西	26	24	25	土質杯	上面	
P604	IV-4 西	58	24	20	椀 A 図 438・439・440	上面	
P607	IV-4 西	36	34	26	瓦器片	上面	
P612	IV-4 西	81	38	9	I-5期± 須・蓋,土・杯	上面	
P613	IV-4 西	22	22	17	I-5期± 須・杯 B,塩	上面	
P614	IV-4 西	27	20	45	土質皿 7.0cm	上面	
P616	IV-4 西	29	27	27	古代末～中世前 土質杯 2	上面	
P618	IV-4 西	27	25	19	古代末～中世前 瓦器 3片	上面	
P622	IV-4 西	41	35	27	土質皿 7.5cm, 土質杯	上面	
P624	IV-4 西	23	16	18	古代後～中世前 土質杯	上面	
P625	IV-4 西	51	50	12	弥生甕	下面	
P627	IV-4 西	72	70	7	弥生甕,他 15片	下面	
P629	IV-4 西	25	20	16	古代後～中世前 土質糸切	下面	
P633	IV-4 西	52	29	52	弥生	下面	P575 に切られる
P634	IV-4 東	67	41	27	I期 土・杯 B (中大)	下面	P503 に切られる
SB1 P1	IV-4 西	123	94	64		上面	隅丸方形。柱痕幅 17cm

遺構	小区	長軸	短軸	深さ	出土遺物等	検出	備考
SB1 P2	IV-4 西	103	95	33		上面	方形。柱痕幅 13cm
SB1 P3	IV-4 西	104	86	47	須甕	上面	方形。柱痕幅 19cm
SB1 P4	IV-4 西	97	90	40		上面	方形。柱痕幅 20cm
SB1 P5	IV-4 西	89	75	38		上面	方形。柱痕幅 17cm
SB1 P6	IV-4 西	96	74	43	図 278	上面	方形。柱痕幅 17cm
SB1 P7	IV-4 西	-	70	43	須	上面	方形。柱痕幅 12cm
SB1 P8	IV-4 西	-	83	22	図 277	上面	柱痕幅 18cm 大部分調査区外
SB1 P9	IV-4 西	-	76	28		上面	大部分調査区外
SB1 P10	IV-4 西	86	73	24		上面	方形
SB1 P11	IV-4 西	94	92	14	塩	上面	方形
SB1 P12	IV-4 西	85	80	23		上面	方形
SB2-1 P433	IV-4 東	(88)	58	26	塩 2	下面	
SB2-2 P421	IV-4 東	83	58	45		下面	瓢箪形。重複か
SB2-3 P460	IV-4 東	75	58	32		下面	隅丸方形
SB2-4 P328	IV-4 東	67	58	43	9C./ II期 赤蓋, 土・須・杯, 塩 図 279・280	上面	隅丸方形
SB2-5 SK64	IV-4 東	87	56	57	弥生 20	下面	隅丸方形。柱痕径 30 cm
SB2-6 P452	IV-4 東	79	58	59	弥生 7	下面	柱痕径 36 cm
SB2-7 P443	IV-4 東	76	49	53	弥生中期後半 30	下面	隅丸方形。柱痕径 26 cm
SB3-1 P447	IV-4 東	60	49	16		下面	柱痕径 22cm
SB3-2 P406	IV-4 東	51	46	22		下面	
SB3-3 P405	IV-4 東	50	42	44		下面	隅丸方形
SB3-4 P403	IV-4 東	53	48	38		下面	柱痕径 33 cm
SB3-5 P456	IV-4 東	62	51	15		下面	
SB4-1 SK67	IV-4 東	59	58	21	土・皿 (8C.) , 須・杯 B, 不明杯 C1	下面	方形
SB4-2 P504	IV-4 東	36	(13)	17		下面	SK63 に切られる

遺構	小区	長軸	短軸	深さ	出土遺物等	検出	備考
SB4-3 SK22	IV-4 東	76	71	26	土・高杯3, 鉢, 塩 15, 須・杯 A3, 壺 2, 皿	上面	隅丸方形
SB4-4 SK61	IV-4 東	67	59	21	土・蓋, 赤, 錘, 塩 36, 須・不明杯 7, 高杯, 陶硯, 熱溶粘土, 炭片, 赤割石	下面	隅丸方形
SB4-5 SK47 拡張	IV-4 東	132	66	42	土・杯 B, 甕 B, 皿, 須, 土, 塩等各 40 片	上面	SK47 とは別か。P380 の一部とつながる
SB4-6 P553	IV-4 東	161	72	37	I-7~II期 土・皿, 杯, 須・蓋, 塩 8	下面	P530 に切られる
SB4-7 SK74	IV-4 東	(162)	98	40	土・杯 A2 (8C.), 杯 B, 甕 A, 塩 3, 須・杯 A, 不明杯 4, 壺	下面	複数遺構の集合か
SB4-8	IV-4 東	(97)	82	64		下面	複数遺構の集合か。P544 に切られる
SB4-9 P514	IV-4 東	95	91	44	平安初 須・杯 A2, 蓋, 塩 12, 土・甕 2 図 305	下面	複数遺構の集合か。隅丸方形
SB4-10	IV-4 東	70	60	34		下面	隅丸方形
SB4-11 P517	IV-4 東	73	70	40		下面	隅丸方形
SB4-12 P521	IV-4 東	120	81	40	I-5~6期 塩 4 図 306・307	下面	複数遺構の集合か。隅丸方形
SB4-13 P546	IV-4 東	153	108	51		下面	SK45 と重複
SB4-14 P552	IV-4 東	109	94	46	I期 土・杯, 塩 10	下面	隅丸方形。柱痕径 27 cm
SB5-1 P490	IV-4 東	63	48	12		下面	隅丸方形
SB5-2 SK63	IV-4 東	101	62	25	須・不明杯 2	下面	2 つの遺構の集合か
SB5-3 SB4-3 と同じ	IV-4 東	76	71	26	土・高杯 3, 鉢, 塩 15, 須・杯 A3, 壺 2, 皿	上面	隅丸方形
SB5-4 P449	IV-4 東	66	(39)	26	塩 9, 須・甕, 皿, 杯, 錘	下面	SK61 に切られる
SB5-5 SB4-5 と同じ	IV-4 東	132	66	42	土・杯 B, 甕 B, 皿, 須, 土, 塩等各 40 片	上面	SK47 とは別か。P380 の一部とつながる
SB5-7	IV-4 東	81	49	38		下面	SK74 と切合う。隅丸方形
SB5-8 SB4-8 と同じ	IV-4 東	(97)	82	64		下面	複数遺構の集合か。P544 に切られる
SB5-9 P542	IV-4 東	37	35	16 (20)	須・杯	下面	P384 と重複。() 内は P384 検出面から
SB5-10 P545	IV-4 東	96	(67)	48	I-5期 ± 須・杯, 蓋, 土・皿, 塩 8	下面	複数遺構に切られる。柱痕径 38 cm
SB5-11 P515	IV-4 東	79	70	55	I-4~5期 土・杯 10, 甕 B, 須・杯, 塩 7	下面	柱痕幅 18cm。隅丸方形
SB5-12 SK46	IV-4 東	92	78	22	土・蓋, 須・皿, 須, 土, 塩等各 20 数片	上面	隅丸方形
SB5-13 SB4-12 と同じ	IV-4 東	120	81	40	I-5~6期 塩 4 図 306・307	下面	複数遺構の集合か。隅丸方形
SB5-15 SB4-14 と同じ	IV-4 東	109	94	46	I期 土・杯, 塩 10	下面	隅丸方形。柱痕径 27 cm

遺構	小区	長軸	短軸	深さ	出土遺物等	検出	備考
SB5-16 P462	IV-4 東	68	54	24	I-7~II-1期 土・皿, 塩4	下面	隅丸方形
SB6-1 SK39	IV-4 東	70	59	32	土・甕, 塩5, 須・不明杯	上面	隅丸方形
SB6-2 SK34	IV-4 東	109	81	51	塩4, 須・杯A, 杯B2	上面	隅丸方形
SB6-3 P415	IV-4 東	93	88	43		下面	隅丸方形
SB6-4 SK50	IV-4 東	100	77	32	土・杯B(8C.後頃), 須・壺, 弥生中期20	下面	隅丸方形
SB6-5 SK6	IV-4 西	(77)	(40)	17		下面	中央トレンチに切られる
SB6-6 SK7	IV-4 西	(85)	(29)	33	土・蓋 or 高杯, 塩, 須・杯A	下面	中央トレンチに切られる
SB6-7 SK10	IV-4 西	72	(53)	30	土・蓋赤, 高杯赤, 須・高杯	下面	中央トレンチに切られる 石あり
SB7-1 SK18	IV-4 東	96	73	30	土・高杯, 塩, 須・不明杯	上面	東トレンチに切られる
SB7-2 SK19	IV-4 東	95	(50)	26	土・不明杯, 大皿B, 種子	上面	東トレンチに切られる
SB7-3 SK20	IV-4 東	83	(62)	34		上面	東トレンチに切られる
SB7-4 P251	IV-4 東	(88)	(31)	23		上面	東トレンチに切られる
SB9-1 P413	IV-4 東	57	50	23		下面	
SB9-2 P412	IV-4 東	68	65	18		下面	
SB9-3 P325	IV-4 東	67	64	44	8C. 土・杯 or 高杯, 椀状滓	上面	隅丸方形か。柱痕径 32 cm
SB9-4 P324	IV-4 東	61	61	61	I期 図 315・316	上面	隅丸方形。柱痕径 40 cm
SB9-5 SK9	IV-4 西	66	62	37		下面	隅丸三角か。SK6に切られる
SB9-6 P71	IV-4 西	61	61	20	8C. 赤2	上面	隅丸方形
SB9-7 P130	IV-4 西	(17)	44	23		下面	中央トレンチに切られる
SB9-8 SK53	IV-4 東	56	56	-	土・杯A(8C.), 杯B, 甕B, 須・杯B, 不明杯, 高杯	下面	
SB10-1a P383	IV-4 東	67	60	22	I-6期 土・杯, 須・皿	上面	
SB10-1b P556	IV-4 東	80	73	34	I期 赤高杯, 須・杯, 土・杯	下面	隅丸方形。P546に切られる
SB10-2 P554	IV-4 東	94	68	19	土・杯, 塩	下面	
SB10-3 SB4-7と同じ	IV-4 東	(162)	98	40	土・杯A2(8C.), 杯B, 甕A, 塩3, 須・杯A, 不明杯4, 壺	下面	複数遺構の集合か
SB10-4 P544	IV-4 東	80	71	56	I-5期 ± 須・蓋, 土・杯, 塩7	下面	隅丸方形

遺構	小区	長軸	短軸	深さ	出土遺物等	検出	備考
SB10-5 P523	IV-4 東	81	72	49	I-4~5期 土・杯10,蓋,甕A,皿B,塩12, 須・杯,釘	下面	複数遺構の集合か。柱痕径40cm
SB10-6 SB4-9と同じ	IV-4 東	95	91	44	平安初 須・杯A2,蓋,塩12,土・甕2 図305	下面	複数遺構の集合か。隅丸方形
SB10-7a P365	IV-4 東	66	52	27	I-4~5期 土・杯B,須・杯	上面	
SB10-7b P508	IV-4 東	53	41	17	土質皿	下面	
SB10-8 P522・549	IV-4 東	83	55	34	I~II期 土・杯2,塩6 図295	下面	2基。方形
SB10-9 P516	IV-4 東	87	63	33	律令期 土・杯6,須・壺	下面	
SB10-10a P529	IV-4 東	86	53	28	土・蓋	下面	上面SK44と重複。隅丸方形
SB10-10b SK44	IV-4 東	76	61	32	須,土,塩等各20片	上面	隅丸方形
SB11-1 P420	IV-4 東	61	56	(59)		下面	上面P271と重複。()内はP271検出面から
SB11-2 P226	IV-4 東	49	(23)	21		上面	東トレンチに切られる。柱痕径9cm以上
SB11-3 P448	IV-4 東	51	43	20	土質杯	下面	
SB11-4 P428	IV-4 東	65	53	13 (18)	I-6~7期 須・蓋,杯,塩	下面	上面P290と重複。()内はP290検出面から
SB12-1 P551	IV-4 東	48	47	29		下面	柱痕径23cm
SB12-2 P430	IV-4 東	(24)	36	33	I-4~5期 土・杯A	下面	トレンチに切られる
SB12-3 P414	IV-4 東	50	(22)	16	移動カマド,須・杯 図324	下面	P415に切られる
SB12-4 SK36	IV-4 東	62	58	64	塩9,須・高杯,須・土20片	上面	柱痕幅17cm
SB13-1 P253	IV-4 東	64	54	7		上面	隅丸方形
SB13-2 P259	IV-4 東	(27)	27	21		上面	南トレンチに切られる
SB13-3 P262	IV-4 東	55	44	21		上面	
SB13-4a P284	IV-4 東	45	(25)	22		上面	P446に切られる
SB13-4b P446	IV-4 東	50	49	26		上面	隅丸方形
SB13-5 P270	IV-4 東	59	54	25	土・杯,皿,椀埋納,内黒	上面	
SB13-6 P236	IV-4 東	61	48	18		上面	隅丸方形
SB14-1 P381	IV-4 東	41	40	28	II期 土質杯D	上面	
SB14-2 P498	IV-4 東	31	22	36		下面	柱痕径18cm

遺構	小区	長軸	短軸	深さ	出土遺物等	検出	備考
SB14-3 P492	IV-4 東	31	30	36		下面	柱痕径 12 cm
SB14-4 P411	IV-4 東	60	44	54		下面	
SB14-5 P506	IV-4 東	49	48	13		下面	
SB14-6 P510	IV-4 東	35	32	19 (32)		下面	上面 P360 に切られる。() 内は P360 検出面から
SB14-7 P536	IV-4 東	71	49	11	弥生 5 片	下面	複数遺構の集合か。円形ステップが柱穴か
SB15-1	IV-4 東	55	55	9		下面	石あり
SB15-2 SK69	IV-4 東	96	69	46	土・その他 7, 塩, 須・その他	下面	
SB15-3 SK73	IV-4 東	75	66	44 (52)	須・蓋	下面	上面 P352 と重複。() 内は P352 検出面から
SB15-4 SK55	IV-4 東	67	61	46	錘, 須・杯 A, 不明杯	下面	
SB15-5 P208	IV-4 東	69	60	48	8C. 後~ 9C. 初 土師器杯 A, 須・杯蓋	上面	
SB15-6 P396	IV-4 東	68	60	14	I 期か 土・杯	下面	石あり
SB15-7 P397	IV-4 東	64	58	34		下面	石あり
SB15-8 P233	IV-4 東	50	45	31	赤	上面	
SB15-9 P481	IV-4 東	67	54	25		下面	柱痕径 25 cm
SB16-1a P220	IV-4 東	45	41	35		上面	
SB16-2a P187	IV-4 東	37	35	40	古代 土・甕	上面	柱痕幅 20cm
SB16-1b P222	IV-4 東	54	52	42		上面	
SB16-2b P181	IV-4 東	38	29	28	中世	上面	柱痕幅 18cm
SB16-1c P246	IV-4 東	65	65	12		上面	
SB16-2c P485	IV-4 東	36	26	14	中世前期 瓦椀	下面	方形
SB16-3c P309	IV-4 東	31	29	18		上面	
SB16-4c P491	IV-4 東	33	27	21		下面	
SB16-5c P407	IV-4 東	61	51	15		下面	柱痕径 22 cm
SB16-6c P274	IV-4 東	29	27	33		上面	
SB16-7c P198	IV-4 東	37	36	12	古代後期 糸切杯	上面	

遺構	小区	長軸	短軸	深さ	出土遺物等	検出	備考
SB17-1 P183	IV-4 東	26	26	24	平安末 図 337・338	上面	
SB17-2 P466	IV-4 東	25	22	15		下面	
SB17-3 P231	IV-4 東	24	22	13		上面	柱痕径 11 cm
SB17-4 P190	IV-4 東	31	26	26		上面	
SB17-5 P168	IV-4 東	31	29	9		上面	
SB18-1 P152	IV-4 東	25	24	14		上面	
SB18-2 P155	IV-4 東	20	20	14	古代後～中世 土・杯	上面	
SB18-3 P172	IV-4 東	29	26	18	中世 図 340・341	上面	
SB18-4 P179	IV-4 東	26	26	24	古代後～中世 土・杯	上面	隅丸方形
SB18-5 P185	IV-4 東	16	16	13		上面	
SB24-1 P56	IV-4 西	25	23	18		上面	
SB24-2 P4	IV-4 西	31	29	24		上面	
SB24-3 P148	IV-4 西	33	32	21		下面	
SB24-4 P147	IV-4 西	31	28	16		下面	
SB24-5 P15	IV-4 西	24	20	14		上面	
SB24-6 P22	IV-4 西	22	20	28		上面	
SB24-7	IV-4 西	(24)	21	22		上面	P22 に切られる
SB24-8 P17	IV-4 西	(31)	39	29		上面	P7 に切られる
SB24-9 P7	IV-4 西	42	39	9		上面	
SB24-10 P28	IV-4 西	35	32	27		上面	
SB25-1 P16	IV-4 西	27	24	17	中世 土・皿埋納	上面	
SB25-2 P9	IV-4 西	33	26	12		上面	
SB25-3 P77	IV-4 西	31	26	18	糸切杯	上面	
SB25-4 P25	IV-4 西	29	26	20	中世 土・糸切	上面	
SB25-5 P50	IV-4 西	25	23	26		上面	

遺構	小区	長軸	短軸	深さ	出土遺物等	検出	備考
SB25-6 P8	IV-4 西	24	23	17		上面	
SB25-7 P6	IV-4 西	36	30	11		上面	
SB25-8 P5	IV-4 西	29	26	18	中世 糸切杯埋納	上面	
SB26-1 P101	IV-4 西	23	23	19		上面	
SB26-2 P95	IV-4 西	44	38	13		上面	
SB26-3 P611	IV-4 西	39	32	14	古代末~中世前 土質杯 3, 土錘 (小)	上面	下面 P579 と重複
SB26-4 P606	IV-4 西	23	23	20		上面	
SA1-1 P299	IV-4 東	62	52	19		上面	柱痕径 40 cm
SA1-2	IV-4 東	76	68	21		下面	
SA1-3	IV-4 東	72	53	13		下面	
SA1-4 P431	IV-4 東	80	62	30	弥生 20	下面	

※ 計測値はcm

表 5-2 ピット計測表 IV-8 区

遺構	小区	長軸	短軸	深さ	出土遺物	検出	備考
P3	IV-8	33	29	40	古後~中初。柱状高台杯	上面	
P8	IV-8	38	37	27	土質皿(8.0cm)下層埋納	上面	
P11	IV-8	44	36	19		上面	
P14	IV-8	49	37	28	Ⅲ-2期	上面	
P20	IV-8	28	20	9	須・甕片1	上面	
P21	IV-8	46	33	25	古後中初。土質杯3片	上面	柱痕あり。下面P72と重複
P25	IV-8	48	30	29	被熱砂岩片5,土質	上面	
P40	IV-8	35	34	24	古後中前。土質杯2片	上面	
P48	IV-8	33	33	25	古後中前。土質	上面	
P53	IV-8	80	67	19	土師器甕,塩	上面	
P64	IV-8	40	31	4	棒状川原石埋納	下面	
P72	IV-8	32	21	8	古後中前。土質杯	下面	
P77	IV-8	32	29	21		下面	石あり
P84	IV-8	26	21	33	弥生小壺埋納	下面	
P85	IV-8	22	18	14	弥生甕底	下面	
P86	IV-8	40	34	32	古末頃。椀Aor杯F,杯(土質)	下面	
P87	IV-8	78	62	18	打割された22cmの川原石	下面	
P88	IV-8	34	26	19	古後中前。土質椀or杯	下面	上面ピットと重複。柱痕幅16cm
P90	IV-8	54	31	18	古後中前。土質椀or杯	下面	2基か。柱痕あり
P93	IV-8	27	24	29	古末中前。土質杯F	下面	
P94	IV-8	28	20	7	土質	下面	
P95	IV-8	76	68	22	弥生甕口,他弥生8片	下面	
SB19-1 P563	IV-4 西	55	42	31		下面	隅丸方形
SB19-2	IV-4 西	44	39	30		下面	

遺構	小区	長軸	短軸	深さ	出土遺物	検出	備考
SB19-3 P569	IV-4 西	37	35	15		下面	
SB19-4	IV-4 西	26	23	24		下面	
SB19-5 P575	IV-4 西	62	51	18		下面	
SB19-6	IV-8	36	28	7		下面	
SB19-7	IV-8	27	(14)	9		下面	東半未検出
SB19-8 P561	IV-4 西	46	38	40	弥生13	下面	隅丸方形。柱痕径18cm
SB19-9 P565	IV-4 西	47	38	37		下面	
SB20-1 P564	IV-4 西	69	69	12		下面	隅丸方形
SB20-2 P56	IV-8	64	56	39		上面	隅丸方形。底面に3ヶ所凹。川原石投入。柱痕幅16cm
SB20-3	IV-8	87	71	25		上面	隅丸方形。柱痕径14cm
SB20-4	IV-8	22	22	15		上面	
SB20-5 P51	IV-8	85	74	36	土質皿(口径7.8cm完形)埋納,被熱割石8	上面	
SB20-6	IV-8	73	60	30		上面	隅丸方形。柱痕径28cm
SB20-7 P29	IV-8	84	70	39		上面	隅丸方形。柱痕幅18cm
SB20-8 P37	IV-8	86	60	28		上面	隅丸方形。柱痕幅16cm
SB20-9	IV-8	70	59	28		上面	隅丸方形。礫あり
SB21-1 P102	IV-8	77	74	34	I-6~II-1期。土質杯B	上面	方形
SB21-2 P50	IV-8	80	70	40	古前。土師器蓋,甕,塩	上面	柱痕あり。下面P87と重複。隅丸方形
SB21-3 P82	IV-8	66	50	41	古前。土師器高杯,赤	上面	隅丸方形。攪乱底で検出
SB21-4 P49	IV-8	84	75	47	弥生甕	上面	下面P95と重複。隅丸方形。柱痕径35cm
SB21-5 P98	IV-8	92	(69)	52		下面	隅丸方形。SD2掘削により東半破壊。柱痕幅9cm
SB21-6 P100	IV-8	86	77	42		下面	隅丸方形
SB21-7	IV-8	55	(26)	15			
SB22-1	IV-8	25	(20)	30			P22との切合い不明
SB22-2	IV-8	25	21	17		上面	

遺構	小区	長軸	短軸	深さ	出土遺物	検出	備考
SB22-3	IV-8	28	23	11		上面	
SB22-4	IV-8	37	29	15		上面	方形
SB22-5 P47	IV-8	40	31	19	近世。播鉢	上面	
SB22-6 P36	IV-8	34	25	13		上面	方形
SB22-7	IV-8	36	28	20		下面	
SB22-8	IV-8	65	26	20		上面	2基か。石あり
SB22-9	IV-8	20	19	17		上面	
SB23-1	IV-8	30	28	35		上面	方形
SB23-2	IV-8	54	43	37		上面	
SB23-3	IV-8	37	32	29		上面	石あり
SB23-4	IV-8	41	30	9		下面	
SB23-5 P32	IV-8	48	38	43		上面	石あり。柱痕径28cm
SB23-6 P33	IV-8	38	32	31	古末中前。瓦器片	上面	石あり
SB23-7	IV-8	45	31	5		上面	
SB23-8 P35	IV-8	32	31	17		上面	石あり。柱痕幅15cm
SB23-9	IV-8	42	33	34		上面	
SB23-10 P30	IV-8	27	22	24		上面	柱痕幅13cm
SB23-11	IV-8	47	30	20		上面	柱痕径12cm
SB23-12	IV-8	32	26	26		上面	
SB23-13 P27	IV-8	42	37	41		上面	複数遺構の集合か
SB23-14	IV-8	32	31	38		上面	
SB23-15	IV-8	23	12	6		上面	
SB27-1 P580	IV-4 西	36	28	23		上面	柱痕径31cm
SB27-2 P581	IV-4 西	36	32	42	中世前。瓦器2片	上面	
SB27-3 P582	IV-4 西	35	32	31	中世前	上面	

遺構	小区	長軸	短軸	深さ	出土遺物	検出	備考
SB27-4 P583	IV-4 西	35	31	42	瓦器椀4片。図504・505・506・507	上面	
SB27-5 P596	IV-4 西	30	(16)	26		上面	P584に切られる
SB27-6 P584	IV-4 西	29	26	27	土質杯2片	上面	
SB27-7 P22	IV-8	33	(26)	38	古末中初。瓦器椀(和泉)	上面	
SB27-8 P55	IV-8	35	29	43	上層に埋納された土質杯or椀(古末中初)は割れ・劣化しているが原位置保つ。炭粒多含	上面	P56と重複。柱痕幅15cm
SB27-9 P9	IV-8	38	37	42		上面	
SB27-10 P79	IV-8	34	31	23	Ⅲ-3期。土質椀A半存埋納	下面	柱痕幅13cm
SB28-1	IV-8	25	23	10		上面	
SB28-2 P24	IV-8	35	33	27	古後中初。土質杯	上面	
SB28-3 P38	IV-8	32	26	20	土質杯7片	上面	
SB28-4 P4	IV-8	37	33	38	古後中初。土質杯	上面	
SB28-5	IV-8	28	26	7		上面	
SB28-6 P13	IV-8	37	20	14		上面	
SB28-7	IV-8	30	24	18		上面	柱痕径17cm
SB28-8	IV-8	(25)	22	12		上面	P34とつながる
SB28-9	IV-8	29	24	9		上面	
SB29-1 P5	IV-8	48	36	42	古後中初。土質杯	上面	石あり。柱痕径9cm
SB29-2 P12	IV-8	34	32	21 [38]		上面	石あり
SB29-3	IV-8	28	25	16		上面	柱痕径8cm
SB29-4	IV-8	29	26	23		上面	
SB29-5 P46	IV-8	37	32	15	古代。土質	上面	出土礫に敲打痕
SB29-6 P52	IV-8	(23)	(18)	19	上層に土質杯底(中世前期頃)埋納,炭粒多含	上面	SD2の法面で検出
SB29-7 P15	IV-8	30	27	18	土質杯,皿(7.8cm準完)皿埋納	上面	
SB29-8 P16	IV-8	30	26	23		上面	
SB29-9 P65	IV-8	38	29	33		上面	

遺構	小区	長軸	短軸	深さ	出土遺物	検出	備考
SB29-10 P18	IV-8	40	32	34		上面	石あり。下面 P63 と重複
SA2-1	IV-4	82	70	19		下面	
SA2-2 P621	IV-4	64	56	24		上面	
SA3-1	IV-8	46	38	18		上面	石あり
SA3-2 P6	IV-8	46	38	22		上面	
SA3-3	IV-8	36	29	29		上面	
SA3-4	IV-8	34	32	27		上面	
SA3-5	IV-8	40	34	20		上面	
SA3-6	IV-8	26	24	20		上面	
SA3-7 P57	IV-8	(56)	50	(41)	弥生甕	上面	調査区南トレンチに切られる
SA4-1	IV-8	40	38	14		上面	
SA4-2 P59	IV-8	42	40	13		上面	
SA4-3 P7	IV-8	41	38	13	土師器高杯(完形)	上面	
SA4-4	IV-8	(52)	(38)	25		上面	

※ 計測値はcm

表6 土坑等計測表(古代以降等)

遺構	位置	平面形	長軸	短軸	深さ	備考
IV-4区						
SK2	IV-4西中央	隅丸方形	1.04	0.92	0.21	瓦器皿, 土質, 土・鍋 or 甕, 割石
SK3	IV-4西中央	長方形	2.75	1.07	0.20	瓦器, 土質, 土・蓋 3, 杯 F27, 須・碗, 瓦器 7, 他 6
SK5	IV-4西東端	不明	1.60	(0.74)	0.33	中央トレンチとSD1に切られる。東では未検出
SK6	IV-4西南東	不明	(0.77)	(0.40)	0.17	SB6。中央トレンチに切られる
SK7	IV-4西南東	不明	(0.85)	(0.29)	0.33	SB6。中央トレンチに切られる。土・蓋 or 高杯, 塩, 須・杯
SK8	IV-4西東	隅丸方形	0.89	0.67	0.38	土・高杯, 須・高杯
SK9	IV-4西南東	楕円形	0.66	0.62	0.37	SB9。隅丸三角か。SK6に切られる
SK10	IV-4西南東	不明	0.72	(0.53)	0.30	SB6。中央トレンチに切られる。石あり。土・蓋赤, 高杯赤, 須・高杯
SK11	IV-4西東	楕円形	0.72	0.64	0.34	弥生 11 片
SK12	IV-4西東	円形	0.90	0.55	0.30	土
SK13	IV-4西東	不整形	0.68	0.42	0.30	塩
SK14	IV-4東西	隅丸方形	1.63	1.60	0.73	弥生 5 片
SK15	IV-4東北西	隅丸方形	0.82	0.64	0.13	
SK16	IV-4東北	不明	(2.80)	(0.59)	0.15	大半が調査区外。土 2
SK17	IV-4東北	溝状	2.47	0.61	0.46	
SK18	IV-4東南東	楕円形	0.96	0.73	0.30	SB7。東トレンチに切られる。土・高杯, 塩, 須・不明杯
SK19	IV-4東南東	隅丸方形	0.95	(0.50)	0.26	SB7。東トレンチに切られる。土・不明杯, 大皿 B, 桃種子
SK20	IV-4東南東	不明	(0.62)	0.83	0.34	SB7。東トレンチに切られる
SK22	IV-4東南東	隅丸方形	0.76	0.71	0.26	SB4・5。高杯 3, 鉢, 塩 15, 須・杯 A3, 壺 2, 皿
SK24	IV-4東東	隅丸方形	1.03	0.64	0.37	東播系須恵器鉢
SK25	IV-4東西	隅丸方形	1.14	(1.05)	0.22	中央トレンチに切られる。土・不明杯, 高杯, 塩
SK30	IV-4東南西	不定形	0.62	0.58	0.29	須・不明杯
SK31	IV-4東南西	不明	1.17	(0.56)	0.27	中央トレンチに切られる。土・甕, 須・杯 B

遺構	位置	平面形	長軸	短軸	深さ	備考
SK32	IV-4東 南	楕円形	0.88	0.71	0.27	土・杯 A, 高杯, 甕, 須・壺
SK33	IV-4東 南西	隅丸方形	0.66	0.66	0.06	土・杯 A, 不明杯, 高杯, 皿, 塩 5, 須・杯 B2, 不明杯, 壺, 皿
SK34	IV-4東 南西	隅丸方形	1.09	0.81	0.51	SB6. 塩 4, 須・杯 A, 杯 B, 不明杯 2
SK35	IV-4東 東	隅丸方形	1.31	0.80	0.41	遺構重複の可能性。土・杯 A, 高杯, 塩
SK36	IV-4東 南	円形	0.62	0.58	0.64	SB12. 塩 9, 須・高杯。須, 土 20 片
SK37	IV-4東 南西	隅丸方形	0.58	0.52	0.46	柱痕径 38 cm。須・甕, 内黒椀, 移動カマド
SK38	IV-4東 南西	円形	0.61	0.57	0.37	土・杯 A, 須・壺, 甕
SK39	IV-4東 南西	隅丸方形?	0.70	0.59	0.32	SB6. 土・甕, 塩 5, 須・不明杯
SK40	IV-4東 南	不整隅丸方 形	0.81	0.73	0.25	土・杯 A, 塩 2, 錘
SK41	IV-4東 南	不定形	1.00	0.90	0.30	重複か。土・不明杯 11, 甕 C1, 鉢, 塩 3, 須・杯 B3, 高杯, 鉢, 円礫 (赤・割)
SK42	IV-4東 南西	隅丸方形	0.80	0.69	0.43	椀 C
SK43	IV-4東 東	不定形	1.57	1.29	0.63	土・高杯, 皿, 塩 15, 錘, 黒色。須, 土 130 片 (ほぼ食器)
SK44	IV-4東 中央	隅丸方形	0.76	0.61	0.32	SB10. 須, 土, 塩等各 20 数片
SK45	IV-4東 中央	隅丸方形	0.96	0.95	0.17	遺構内に Pit2 基。須, 土, 塩等各 20 数片
SK46	IV-4東 中央	隅丸方形	0.92	0.78	0.22	SB5. 土・蓋, 須・皿
SK47 拡張	IV-4東 南	長方形	1.32	0.66	0.42	SB4・5. SK47 とは別か。P380 の一部とつながる。土・杯 B, 甕 B, 皿。須, 土, 塩各 40 片
SK48	IV-4東 東	不整方形	1.04	0.88	0.32	SK35 に切られる。土・高杯, 土主体 20 片
SK49	IV-4東 南東	長方形	1.05	0.68	0.55	須, 土 15 片
SK50	IV-4東 南西	隅丸方形	1.00	0.77	0.32	SB6. 土・杯 B (8C. 後葉), 須・壺, 弥生中期 20
SK51	IV-4東 中央	方形	0.55	0.49	0.21	SK52 に切られる
SK53	IV-4東 南西	円形	0.56	0.56	-	SB9. 土・杯 A (8C.), 杯 B, 甕 B, 須・杯 B, 不明杯, 高杯
SK54	IV-4東 西	円形	0.66	0.58	0.34	須・蓋
SK55	IV-4東 西	楕円形	0.67	0.61	0.46	SB15. 錘, 須・杯 A, 不明杯
SK56	IV-4東 南	不整方形	0.83	0.63	0.23	上層土器小片多。土・杯 A, 甕不明 2, 塩 4, 錘, 須・甕, 施釉 2
SK59	IV-4東 東	溝状	(1.64)	0.47	0.11	IV-3 には延びない

遺構	位置	平面形	長軸	短軸	深さ	備考
SK60	IV-4東 南東	台形	1.23	0.92	0.33	土・杯B, 甕A2, 塩, 赤2, 須・蓋2 (全て8C.)
SK61	IV-4東 南東	隅丸方形	0.67	0.59	0.21	SB4。土・蓋, 塩36, 赤, 錘, 須・不明杯7, 高杯, 陶硯, 熱溶粘土, 炭片, 赤割石
SK62	IV-4東 東	溝状	2.35	0.5	0.14	瓦器, サヌ, 弥生20
SK63	IV-4東 南東	方形等	1.01	0.62	0.25	SB5。重複。須・不明杯2
SK65	IV-4東 東	楕円形	1.02	0.65	0.26	
SK66	IV-4東 南東	楕円形	1.01	(0.52)	0.13	
SK67	IV-4東 東	方形	0.59	0.58	0.21	SB4。土・皿(8C.), 須・杯B, 不明杯C1。
SK68	IV-4東 南東	不整形	0.70	0.51	0.13	土・盤, 皿2, 須・甕平行タタ
SK69	IV-4東 中央	楕円形	0.96	0.69	0.46	SB15。土・その他7, 塩, 須
SK70	IV-4東 西	楕円形	0.73	0.66	0.22	
SK71	IV-4東 西	楕円形	0.77	0.74	0.30	
SK73	IV-4東 中央	不定形	0.75	0.66	(0.52)	SB15。上面P352と重なる。()内はP352の上端。須・蓋
SK74	IV-4東 南	溝状	(1.62)	0.98	0.40	SB4・10。重複か。土・杯A2(8C.), 杯B, 甕A, 塩3, 須・杯A, 不明杯4, 壺
SK78	IV-4東 南西	隅丸方形	2.01	1.72	0.75	
SK80	IV-4西 北縁	隅丸方形	3.33	(1.25)	0.24	
SK81 北	IV-4西 北	方形	2.21	1.68	0.13	
SK82	IV-4西 西	楕円形	1.50	1.05	0.14	土質・不明杯12片, 甕
SK83	IV-4西 南西	楕円形	1.47	1.25	0.18	土・不明杯5片
SK84	IV-4西 北東	隅丸方形	0.94	0.60	0.17	
SX2	IV-4東 南	長方形	2.47	1.67	0.36	土・蓋数片, 椀(Ⅲ-2期), 塩数片, 須・蓋数片, 弥生30片
IV-8区						
SX6	IV-8	不定形	1.52	0.60	0.28	焼土と炭化物。オーバーハンク部あり。煙管状の形状。無遺物
SE1	IV-8	不定形	1.68	1.10	1.11	川原石あり

※ 備考にSB名のあるものは掘立柱建物跡の柱穴としたもの。
時期不明含む

表7 溝・流路跡計測表 (古代以降等)

遺構	位置	方向	確認長	幅	深さ	底面 標高	備考
IV-4区							
SD1	IV-4 西	南北	19.56	1.38	0.56	8.95	調査区北外へ
SD2	IV-4 西	南北 13°	23.14	0.29	0.08	9.44	SB1の中軸と一致
SD3	IV-4 東縁	東西	(5.26)	0.55	0.30	9.02	
SD5	IV-4 東	南北	4.55	0.74	0.19	9.30	調査区南外へ
SD6	IV-4 東	東西	5.38	0.65	0.20	9.31	調査区東外へ
SD8	IV-4 東	南北 -35°	50.5	0.52	0.33	9.06	確認長はIV-3・2区含む
SD10	IV-4 東	南北	1.38	0.28	0.07	9.26	
SD11	IV-4 東	東西 7°	4.93	0.49	0.23	9.15	SK52-58と同種
SR1	IV-3	南北	40.4	4.61	0.46	8.95	確認長はIV-3・2区含む
IV-8区							
SD1	IV-8 区	南北 28°	60.7	(1.66)	0.14	9.31	上。調査区北西隅。確認長はIV-6区含む。古代
SD3	IV-8 区	南北	(30.27)	0.98	0.55	9.16	上。SB21に切られる。弥生の可能性
SD4	IV-8 区	南北	(16.56)	1.03	0.12	9.22	下。SD3に切られる。弥生の可能性

※ 時期不明含む

表8 IV-4・8区 弥生遺構出土遺物計数表

遺構	属性	壺	甕	鉢	高杯	その他
4区						
ST1	貼付	6	1			
	素	4		3		
	凹線	1	3	1		
	不明	3	1		1	
	底	5	1			
						石鏃, *効付剥片 2, 砥石 4, 軽石
ST2	貼付	3	4			

遺構	属性	壺	甕	鉢	高杯	その他
ST2	素	1	2			
	凹線			1		
	不明	1	2		1	
	底	1	1			
						石包丁, 被熱割石, 木刀剥片
SK4						弥生土器片 6
SK9						弥生土器小片 7
SK51						弥生土器片 17
SK52	貼付	1				
	凹線	1	5			
	底					不明
SK57	貼付	1				不明
	凹線	2				
	不明	2			1	
						未成石包丁, 鉄鏃
SK59						弥生土器片
SK64						弥生土器片 20
SK65						弥生土器各数片
SK66						弥生土器各数片
SK70						弥生土器片
SK72	素		3	1		
	凹線	1	2		1	
	不明		1		2	
	底	1				不明 2

遺構	属性	壺	甕	鉢	高杯	その他
SK75	素	1				
	凹線		1		1	
	不明	1				
	底	1				
						砥石, 不明鉄 2
SK76	貼付	2	7			
	素			1		
	凹線		2		1	
	不明	4			1	
	底	1	3			
						石包丁, 対付剥片, 叩石 2
SK77	貼付	4	11			
	貼付 + 凹線	2				
	素	3	4			
	凹線	3	8		1	
	不明	3	1			
	底	3	12			
						石包丁未成, 叩石 6, 赤割石 3
SK78						弥生土器片 20
SK79						弥生土器片 30, 叩石, 不明石器
SK80						弥生土器片 13
SK81						弥生土器片 13
8 区						
SK2	貼付	2				
	素		3			

遺構	属性	壺	甕	鉢	高杯	その他
SK2	不明		1			
	底	1				
						緑色片岩川原石 20cm
SK6	貼付	7	13			
	素	1	2			
	凹線	2	5		5	
	不明	2	2		2	把手か
	底	2	3			
						石包丁, サヌカイト剥片, 叩石 3, 軽石 10cm
SX1	素		1	1		
	凹線	2	2			
	底		2			
SX4	貼付		2			
	素		4			
	凹線		1		1	
	不明	1				
						播石
SX5	貼付	6	4			
	素	1	2	1		
	凹線	2				
	不明	1				
	底	1	11			
	蓋か					1
						サヌカイト剥片 (2層下層), 叩石 2, 打割された剥片状の川原石が, VII~VIII層に 3片

※「貼付」、「素」、「凹線」は口縁の属性、「底」は底部。数字を付さないものは1点。

表9 IV-4区 古代以降遺構出土遺物計数表

遺構	土師器・土師質土器										須恵器				瓦器	その他
	杯A	杯B・蓋	高杯・盤	甕	杯E・F	焼塩	その他	杯A	杯B・蓋	不明杯等	高杯	壺	甕	黒色		
SB7 - P1・2			P1・1			P1・1	P2大皿B	P1・ス								P2・桃種子
SK2				銅 or 甕	Fス		ス								ス	割石
SK3		蓋3			F27		ス			椀					7	石ズ, 他6
SK7			蓋 or 高杯			1		1								
SK8			1								1					
SK10		蓋赤1	赤高杯				鉢ス				1					
SK11 ~ 16						13・1	12・土, 16・土・2									11・Y11片 14・Y5片
SK22			3			15	鉢	3				2				須皿
SK24																播
SK25			1			1										
SK30・31				31・1					31・1	30・1						
SK32	1		高杯	1								2				
SK33	1		1			5	皿		2	1		1				須皿
SK34						4		1	身	2						
SK35	1		高杯			1	ス									

遺構	土師器・土師質土器										須恵器						施釉	瓦器	その他
	杯A	杯B・蓋	不明杯	高杯・盤	甕	杯E・F	焼塩	その他	杯A	杯B・蓋	不明杯等	高杯	壺	甕	黒色				
SK36						9	須,土片20片				1								
SK37													1		内黒 椀				移動カマド
SK38	1											1							
SK39		1				5					1								
SK40	1					2	鉢								搬入 ズ				
SK41	ズ		II		C1	3	鉢 須鉢				1				搬入 ズ				円礫(赤・靑)
SK42							椀C												
SK43				高杯		15	皿, 鉢								1				須・土片130 (ほぼ食器)
SK44~46									45・蓋ズ 46・蓋										須,土,塩等各20数片,46・ 須皿
SK47					B		皿		身										須,土,塩等各40片
SK48				高杯			土主体20片										ズ		
SK49																			須・土15片
SK50									身(8後 頃)										Y中期20
SK53	1 (8C)				B		ズ		身		1	1	ズ						
SK54					A(在地・ ズ)														
SK55							鉢												1

遺構	土師器・土師質土器										須恵器					瓦器	その他
	杯A	杯B・蓋	不明杯	高杯・盤	甕	杯E・F	焼塩	その他	杯A	杯B・蓋	不明杯等	高杯	壺	甕	黑色		
SK56	1				不明2	4	鍾						1		2		
SK60		身			A2	1	赤2										全て8C.
SK61		蓋				36	赤, 鍾					7	1	ズ			陶硯, 熱溶粘土, 炭片, 赤割石
SK62																1	Y20片, 榊
SK63											2						
SK67							皿(8C.)					C1型式					
SK68							皿2							平行タ タ	ズ		
SK69						1	7										須
SK73																	
SK74	2(8C.)	身			A	3			1	4		1					
SK82			土質12 片		1												
SK83			5片														
SK84																	
SD1						1	1			蓋(8C.)							不須, Y数十片
SD2							土質					1					Y数十片
SD3							土・1										Y20

遺構	土師器・土師質土器						須恵器						施釉	瓦器	その他	
	杯A	杯B・蓋	不明杯	高杯・盤	甕	杯E・F	焼塩	その他	杯A	杯B・蓋	不明杯等	高杯				壺
SD5				盤			3			身・蓋	ズ					
SD6			1					1								
SD11					1											Y十数片 割石(赤変)
SD8	1	身2					1		2	2	7C.か					
SX2		蓋数片					数片			蓋数片						Y30片, ズ

※ 数字は片数, 数字のないものは1点, 原則的に実測図掲載分含む.
 播 = 東播系須恵器, Y = 弥生土器, 割石 = 割れた石, 赤 = 被熱赤変, 杯 = *功作剥片, ズ = 実測
 図掲載
 例えば「13・1」=SK13で1点.
 その他はP130の凡例に準ず.

IV-3区出土遺物（土製品）観察表

全ての表の凡例はⅡ区(130・148)に準ず

挿図 番号	図版 番号	出土位置 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特 徴	備 考
				口径	器高	底径			
IV -74	1	SK1 No.1	土師質 皿	8.0	1.3	5.3	浅黄橙色 胎土やや粗 焼成不良	内外面ともに回転ナデ。糸切。胎土中に微細な金雲母を僅かに含む。	摩 8/10
〃	2	SK1 No.2	〃	8.0	1.2	4.9	浅黄橙色 胎土やや粗 焼成やや不良	内外面ともに回転ナデ。糸切。内底中央凹。口縁に薄い黒変部あり。胎土中に微細な金雲母及び角閃石を僅かに含む。	摩 完
〃	3	SK1 No.3	〃	8.0	1.0	5.5	浅黄橙色 胎土やや粗 焼成やや不良	内外面ともに回転ナデ。内底中央凹。口縁に薄い赤変部あり。糸切。胎土中に微細な金雲母を僅かに含む。	摩 完
〃	4	SK1 No.4	〃	7.9	1.1	5.7	浅黄橙色 胎土やや粗 焼成やや不良	内外面ともに回転ナデ。内底中央凹。口縁に薄い赤変部あり。糸切。	摩 完
〃	5	SK1 No.5	〃	7.8	1.2	5.2	浅黄橙色 胎土やや粗 焼成やや不良	内外面ともに回転ナデ。内底中央凹。口縁に薄い黒変部あり。糸切。胎土中に微細な金雲母をまばらに含む。	摩 完
〃	6	SK1 1層	土師質 杯			7.4	にぶい黄橙色 胎土やや粗 焼成並	内外面ともに回転ナデ。底肩部に板状工具のナデ痕跡有。糸切。胎土中に微細な金雲母を比較的多く含む。	底 1/1
〃	7	SK4 1層	弥生 甕			10.0	橙色 胎土やや粗 焼成並	内面・指頭圧痕。外面・ㇱ。	底 1/1
〃	8	SK4	〃				にぶい黄褐色 胎土やや粗 焼成並	櫛描文が2段。	頸部 1/6
〃	9	SK4 1層	弥生 高杯	23.6			橙色 胎土やや粗 焼成並	内外面ともにナデ。2個一対の円形貼付文を口唇部の4ヶ所に有するとみられる。	1/7
〃	10	SK5 1層	弥生 壺	21.2			橙色 胎土やや粗 焼成並	内面・ナデ。外面・ミガキ但し殆ど摩滅。口縁に凹線文。口縁部を面取り、凹線を二条施すが、浅いものであるため、遺存状況は極めて不鮮明。	摩 2/5
〃	11	〃	弥生 甕	12.6			灰黄褐色 胎土密 焼成並	内外面ともにナデ。口縁外面に凹線文。	1/10
〃	12	SK5	〃	24.8			灰黄褐色 胎土やや粗 焼成並	内外面ともにナデ。口縁下に大振りの刻目。	摩 1/9
〃	13	SK6 1層	弥生 壺	31.6			橙色 胎土やや粗 焼成良	内面・ナデ。外面・ㇱ後ナデ消し。口縁部に緩い凹線。	1/8
〃	14	SK6	弥生 甕			7.8	浅黄色 胎土やや粗 焼成並	内面・ケズリ。外面・ナデ。2次被熱。	摩 底 1/1
IV-75	17	SK7	弥生壺	13.8	胴径 31.0	12.2	橙色	頸～上胴部ㇱ。下胴部はㇱ後太いミガキ。胴部内面摩著。	摩 2/3
〃	18	SX1	土師質 杯	15.0	4.1	7.6	淡黄色 胎土やや粗 焼成やや不良	内外面ともに回転ナデ。糸切。2次被熱有。胎土中に微細な金雲母と0.5mm大の角閃石を僅かに含む。杯E。12C.頃か。	摩 4/5

挿 番 号	図 版 号	出土位置 (遺構)	器 種 形	法 量 (cm)			色 調 (外面)	特 徴	備 考
				口径	器高	底径			
IV -75	19	SX1	土師質 椀	14.2	5.3	5.2	浅黄色 胎土やや粗 焼成不良	外面・回転ナデ。2次被熱の可能性有。椀C。	摩 1/8
〃	20	〃	土師質 杯	14.9	4.2	6.9	浅黄色 胎土やや粗 焼成やや不良	内外面ともに回転ナデ。糸切。2次被熱有。胎土中に微細な金雲母を僅かに含む。杯E。	摩 完
IV -81	21	SX2	瓦器 椀	15.9			灰色 胎土緻密 焼成やや不良	摩滅により不明	摩 1/10
IV -76	22	SR1 1層	土師質 杯B	16.8	7.0	8.8	灰白色	内底ナデ。外底へ切痕。	摩 底 1/2
〃	23	〃	土師質 杯	14.8	4.2	7.3	灰白色	糸切。内底口如目。杯F。	底 1/1
〃	24	SR1 TR	土師器 杯	13.0	3.5	7.5	浅黄橙色	杯D	1/2
〃	25	SR1 I層	黒色 椀	16.4			にぶい黄褐色 胎土精	内面・密ミガキ。黒。口縁外面ヨコナデにより僅かに凹。長石、雲母の微細粒、赤礫粒少量含。搬入品。	内表面摩 1/9
〃	26	〃	土師器 杯A	14.8	3.0	9.8	橙色 胎土良		摩 1/7
〃	27	〃	土師器 皿	14.0	2.2	11.3	橙色 胎土密 焼成不良	外面・低へ切。II-1期。	摩 底 1/3
〃	28	〃	土師質 皿	15.8	1.4	13.2	にぶい黄褐色	へ切	摩 1/2
〃	29	〃	土師器 皿か杯	15.3			内面橙色		摩 1/8
〃	30	〃	土師器 杯A	12.0		10.1	橙色 断面灰白色 胎土緻密 焼成やや不良	内外面ともにミガキ。口縁端巻込み。全面赤彩。胎土中に微細な金雲母を僅かに含む。	摩 1/9
〃	31	〃	土師器 杯	12.4	3.1	6.8	橙色 胎土良	内外面ミガキか。外底へ切後、平滑仕上。	摩 底 1/3
〃	32	〃	土師器 杯B	18.8	5.4	13.2	内面橙色	内面・ミガキ	摩 1/5
〃	33	〃	土師器 杯A	16.7	4.0	12.2	浅黄色 胎土良	口縁内凹線。ミガキ仕上げとみられる。	摩 1/8
〃	34	〃	土師器 皿	20.0			内面橙色 焼成良	外面・ヨコナデ痕。口縁端部を巻込んで沈線。石英微細粒、長石風化粒、赤色風化礫含。搬入品。	1/7
〃	35	〃	土師器 杯B	17.2	5.8	12.0	灰白色 胎土緻密 焼成良	内外面ミガキ。表面に沈着物。全面赤彩。	摩 1/3
〃	36	〃	土師器 高杯	21.7			浅黄橙色 胎土良 焼成不良		摩 1/8
〃	37	〃	土師器 杯A	13.6	3.5	10.0	浅黄色 胎土密 焼成良	内外面ミガキ	摩 1/10
〃	38	〃	土師器 高杯	16.0	7.0	7.8	橙色 胎土緻密 焼成良	内外面ミガキか。脚接合部に絞り目痕。	摩 杯 1/3

挿図 番号	図版 番号	出土位置 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴	備考
				口径	器高	底径			
IV -76	39	SR1 1層	土師器 脚			9.6	橙色 胎土やや粗 焼成やや不良	内外面ともにナデ	摩 1/5
〃	40	〃	土師器 高杯				外断面橙色 胎土緻密 焼成良	内外面ともにナデ。一部ハが認められる。スリット側面は丁寧なミガキか。赤彩。透かし巾は不揃い。上面に接合溝を細工。	摩 3/7
IV -77	41	〃	黒色 椀	14.4			灰白色	内面・黒。(滑)。在地産。	2/9
〃	42	〃	須恵器 杯 A	14.0	3.7	8.5	灰白色 胎土やや粗	内底ケズリ。外底弱いケズリ。	底 1/4
〃	43	〃	〃	13.9	4.0	9.0	淡黄色 焼成不良	酸化色。重ね焼により口縁部のみ橙色。	摩 1/2
〃	44	〃	須恵器 皿	18.6	2.7	16.2	灰白色 焼成不良	ヘラ切痕。	摩 底 1/4
〃	45	〃	〃	16.4	2.5	13.0	灰色 焼成不良	内底・弱い回転ナデ痕。外底、ヘラ切痕。	摩 準完
〃	46	〃	須恵器 杯 A	16.7	5.3	11.0	灰白色 焼成不良	口縁内外、凹状にヨコナデ。	摩 1/2
〃	47	〃	〃	13.7	3.7	10.0	灰白色	外底ヘラ切後ナデ	2/3
〃	48	〃	〃	12.6	3.3	8.8	灰白色 胎土密 焼成不良	内外面ともに回転ナデ。回転ヘラ切。	摩 1/2
〃	49	〃	須恵器 杯 B	15.6	4.4	10.2	灰白色 胎土やや粗 焼成不良	内外面ともに基本、回転ナデ。外面底部付近を回転ヘラケズリ、但し緩い。	摩 3/5
〃	50	〃	〃	12.7	4.4	10.2	灰白色 胎土密		1/8
〃	51	〃	〃			9.5	灰色 断面灰褐色	内外底ナデ。外底「×」墨書。	3/5
〃	52	〃	〃			13.0	灰色 焼成良	外底ヘラ切、ケズリ、高台貼付、爪状圧痕。内底ナデ。薄手で丁寧な仕上げ。	3/5
〃	53	〃	〃	15.4	4.2	11.8	灰白色 胎土密	外底ナデ後、弱い爪状圧痕。	1/4
〃	54	〃	〃			9.2	灰白色	外底ヘラ切、×記号。内底ナデ。	2/5
〃	55	〃	〃			9.1	灰色 内面灰白色	外面全体に自然釉	1/5
〃	56	〃	〃	14.7	4.0	10.5	灰色 断面灰黄色	内底ナデ。外底回転ケズリ。	1/2
〃	57	〃	須恵器 壺蓋	14.0			灰白色	外面自然釉	4/7
〃	58	〃	須恵器 蓋	15.8			灰白色 焼成不良		摩 1/2
〃	59	〃	〃	17.0			灰色 胎土良	天井内外ナデ仕上。口縁 a 形。	1/9
〃	60	SR1 1・2層接合	土師器 杯 B	18.7	5.2	14.0	浅黄色	調整不明。摩耗により仕上げ不明。	摩 準完
〃	61	SR1	土師器 杯	19.9			にぶい橙色	調整不明。摩耗により仕上げ不明。	摩 1/11

挿図 番号	図版 番号	出土位置 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴	備考
				口径	器高	底径			
IV -77	62	SR1	土師器			16.8	赤色 胎土密 焼成不良	不明。但し、ナデミガキの上から彩色した可能性大。胎土中に微細な金雲母を僅かに含む。	摩 1/5
〃	63	ST1 TR	須恵器 杯 B	11.8	3.7	7.5	灰白色 焼成やや不良	内底周縁ナデ。口縁内面凹線。体部外面粘土接合痕。高台弱い第2形態。	1/4
〃	64	SR1	須恵器 提瓶	6.2			灰色	上面を閉塞した粘土板部分に、穿孔して頸部を接合。	
IV -78	65	SR1 TR	土師器 甕	24.4			灰白色	内外面・ハケ痕。チャート、砂岩円礫含。在地産。甕 A。	1/6
〃	66	SR1 1層	〃	17.6		胴径 17.4	明赤褐色 胎土粗 焼成良	外面・胴部ケツケ。2次被熱。胎土、石英等角粒多含。	摩 1/3
〃	67	〃	〃	28.6			にぶい黄橙色 胎土やや粗 焼成良	外面・粗いケツケ。口縁部はヨコナデで消される。内面・口～頸部ヨコケ。胎土中に細角粒多含。甕 A。	1/5
〃	68	〃	〃	24.0			橙色 胎土粗 焼成良	内外面ともにナデ。胎土中に花崗岩由来の角粒多含。甕 B。	摩 1/9
〃	69	〃	土師器 かまど	残長 14.0		残厚 3.5	にぶい黄橙色 胎土粗	ハケ痕。～3.5mmのチャート多含、赤礫含。	摩 部分
〃	70	〃	土錘	全長 3.5	全幅 1.0	孔径 0.2			2.5g 12/13
〃	71	〃	須恵器 甕	38.8			灰色 断面赤灰色 焼成良	口縁下に断面三角突帯	1/11
〃	72	SR1 2層	土師器 皿	18.2	2.7	15.8	断面灰白色 胎土やや密 焼成良	赤彩とみられる。内外面ミガキ。外底ハケ切後、ケズリか。微細な金雲母を僅かに含む。素地明色で底部厚め。	摩 底 1/3
〃	73	〃	土師器 杯	21.6			橙色 胎土緻密 焼成良	内外面ミガキ。底・体部接合部で剥離。	摩 1/5
〃	74	〃	土師器 杯 B	17.9			内面にぶい 橙色	内面・ミガキ	摩 1/5
〃	75	〃	土師器 蓋	13.8			橙色 断面浅黄橙色 胎土やや粗	赤彩。外面・ミガキ、内面・暗文とみられるが、摩耗。	摩 1/3
〃	76	〃	〃	16.8			褐灰色 断面灰白色 焼成並	内外面ともに時計回りのケズリの後、ナデミガキ。天・外ケズリ。胎土中に微細な金雲母を疎らに含む。2次被熱か。内面に赤彩残る。	摩 1/7
〃	77	〃	〃	14.0			断面明黄褐色 胎土密 焼成良	内外面ミガキ。内面は放射状2段。全面に沈着物（鉄分か）。	1/5
〃	78	〃	土師器 高杯			12.8	明赤褐色 焼成良	内外面ともに丁寧なナデ	摩 1/4
〃	79	〃	土師器 甕	24.7			明赤褐色 胎土粗	内外面・粗いケ。口縁部、ヨコナデ2段。～4mmの花崗岩風化礫多含。搬入品。甕 B。	1/5
IV -79	80	〃	須恵器 杯 A	13.8	3.6	10.0	灰白色 胎土密 焼成不良	内外面ともに回転ナデ。底・体部接合部明瞭。重ね焼き部黒色。	摩 1/2
〃	81	〃	〃	12.9	3.7	8.5	灰白色	ハケ切未調整	2/3

挿図 番号	図版 番号	出土位置 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴	備考
				口径	器高	底径			
IV -79	82	SR1 2層	須恵器 杯A	13.2	4.4	4.5	灰白色 焼成不良	外底周縁押圧	摩 2/3
〃	83	〃	〃	13.8	4.2	9.9	内外暗灰色 焼成不良		摩 底 4/5
〃	84	〃	〃	13.8	4.2	9.5	灰白色 焼成不良瓦質	口縁内面, 沈線。	摩 1/2
〃	85	〃	須恵器 杯身	11.4	4.7	8.8	灰白色 胎土密 焼成不良	外面, 緩い回転ナデ。	摩 1/8
〃	86	〃	須恵器 杯B	12.6	(3.4)		灰白色 胎土密 焼成不良	外面・基本, 回転ナデ。外面底部付近を回転ヘラケズリ, 但し緩い。	摩 1/3
〃	87	〃	〃	14.0	4.1	10.7	灰オリーブ色 胎土やや粗 焼成不良	摩滅により不明	摩 1/2
〃	88	〃	〃	14.0	3.8	10.7	灰白色	外底ヘラ切後ナデ。丁寧仕上げ。	
〃	89	〃	〃	14.8	3.7	9.9	灰色	底部内外ナデ仕上げ。高台接合部に条線。	1/2
〃	90	〃	〃			7.4	灰白色	内外底ナデ。外底刻線か。	1/4
〃	91	〃	〃	13.8	4.4	10.4	胎土密	外底ナデ。全体的に丁寧だが歪む。高台下端面凹。	2/3
〃	92	〃	〃	12.4	4.5	8.6	内面黄灰色 胎土やや粗	外底ナデ。平行圧痕。外面のみ口縁より自然釉下垂。	2/5
〃	93	〃	〃	15.6	6.1	11.3	灰白色 焼成不良		摩 底 1/1
〃	94	〃	〃	11.8	4.0	9.4	灰白色 焼成不良瓦質	口縁内面沈線	摩 1/4
〃	95	〃	〃	13.3	3.7	10.2	灰白色	外面丁寧仕上げ。高台端は外方へ拡張。	1/9
〃	96	〃	〃			9.8	灰色	外底ヘラ記号か。高台は高めで端面凹。全体に丁寧。	1/4
〃	97	SR1	須恵器 杯	12.8	4.3		灰白色 胎土密 焼成やや不良	内外面ともに回転ナデ。外底未調整。杯C。	2/5
〃	98	SR1 2層	須恵器 蓋	13.4	2.8		灰白色		
〃	99	〃	〃	17.4			灰白色	天井外面, 回転ケズリ3段。成形～仕上丁寧。全体1・口縁a形。	天井1/1 口縁1/2
〃	100	〃	〃	20.4			灰白色 焼成やや不良	天井外面回転ケズリ	1/5
〃	101	〃	〃	19.9	3.6		灰白色	天井: 外面・回転ケズリ。内面・ナデ。	1/2
〃	102	〃	〃	12.0	3.0	摘み径 5.3	灰白色 胎土密 焼成不良	内外面ともにナデ。輪状摘み。焼成時の歪みが著しい。	2/5
〃	103	〃	〃	13.6	2.9		灰白色 焼成不良		摩 天井1/1 口縁1/3
〃	104	〃	〃				灰白色	天井内面, 丁寧ナデ。天井外面, 回転ケズリ, 自然釉。	1/4

挿図 番号	図版 番号	出土位置 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴	備考
				口径	器高	底径			
IV -79	105	SR1 2層	須恵器 蓋	13.4			灰白色		1/3
〃	106	〃	〃	13.9			灰白色	天井外面ケズリ。口縁外面やや暗色 (重ね焼痕)。	1/6
〃	107	〃	〃	14.1			灰色		1/8
〃	108	〃	須恵器 高杯				灰白色 焼成不良	内面絞り目	摩
〃	109	〃	須恵器 脚部				灰白色 焼成やや不良	胎土に、脚部を捻った痕。	摩
〃	110	〃	須恵器 壺				灰白色	外面下位回転ケズリ。高台剥離。	1/5
〃	111	〃	〃			12.5	灰白色	外底ハチ切、押圧痕。外下部回転ケズリ。	底 3/4
IV -80	112	〃	須恵器 甕		胴径 41.4		灰白色	外面・斜格子タテ後回転コケ。内面、同心円当具痕。	上胴 1/2
〃	113	〃	須恵器 壺		胴径 21.4	14.0	灰白色	外面・丁寧仕上げ。外底ナデ。外面上方と内面底中央に自然釉。内面に火脹れ。外面、融着物を処理。	体部径 1/1
IV -82	114	包含層 1層	須恵器 杯 A	13.2	3.7	9.2	灰白色		3/8
〃	115	〃	〃	13.8	3.6	10.5	灰白色 焼成不良	口縁内面、沈線。	摩 3/8
〃	116	包含層 2層	瓦器 椀			6.6	黄灰色		摩 1/8
〃	118	西 TR	須恵器 杯 A	13.1	2.4	10.4	灰白色	外底回転ケズリ。全体に丁寧。	3/8
〃	119	〃	須恵器 杯	15.4			灰白色 焼成不良	杯 C	摩 1/5
〃	120	〃	土師器 蓋				浅黄橙色 胎土粗	内面・平滑	摩
〃	121	〃	土錘	全長 4.9	全幅 1.8	孔径 0.4		10.4g	摩 準完
〃	122	表採	磁器 皿	11.0			断面灰白	内外釉。外面釉垂下。	

出土遺物 (石器) 観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm/g)				石 材	特 徴	備 考
				全長	全幅	全厚	重量			
IV -74	16	SK6 1層	石包丁	残長 5.2	残幅 3.1	残厚 0.5	160	蛇紋岩製	欠損。磨製。片岩性の石材。	
IV -82	117	包含層 2層	石鏃	1.6	1.6	0.3	0.50	サヌカイト		完

出土遺物 (鉄器) 観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm/g)				特 徴	備 考
				全長	全幅	全厚	重量		
IV -74	15	SK6	不明	残長 2.5	残幅 1.0	残厚 0.6	2.02	欠損。錆に覆われる。	

IV-4区出土遺物（土製品）観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特 徴	備 考
				口径	器高	底径			
IV -87	123	ST1 焼土 直上	弥生 壺	胴径 18.1		6.0	灰白色	外面・ミガキ。内面・タテハ、上部指痕。外面下部黒斑。	外摩 胴 1/2
〃	124	ST1	〃	15.1			橙色	貼付口縁	全摩 1/2
〃	125	ST1 1層	〃	20.9			にぶい橙色	貼付口縁。口縁端面に竹管文。	摩 1/8
〃	126	ST1	〃	19.0			にぶい黄橙色	内外面ハ。口縁端面・小さな竹管文。上下端に繊細な刻目。	1/8
〃	127	〃	〃				褐灰色	櫛描に突帯を貼付	摩 1/15
〃	128	〃	〃	15.3			橙色 胎土やや粗	凹線文	摩 1/7
〃	129	ST1 1層	〃				にぶい橙色	頸部外面・角棒状工具の先で列点文。外面・丁寧仕上げ。内面・指痕。	頸 1/4
〃	130	ST1 検面 直下	弥生 甕	19.6			赤橙色	外面・頸下に列点、口縁端に刻目。全面赤変、荒れ。	荒摩 1/4
〃	131	ST1 1層	〃	20.3			にぶい橙色		1/8
〃	132	ST1	〃	14.4			橙色	外面・ハ	1/8
〃	133	〃	〃			5.3	灰色	外面・ハ。内面・ケズリ。	底 1/1
〃	134	〃	弥生 鉢	10.5	10.0	5.2		内外面丁寧。ハ状残痕。脚外面指痕。	摩 準完
〃	135	〃	〃	9.1	7.1	3.3	橙色	外面・ハ。内面・口縁横位のナデ。	底 1/1
〃	136	ST1 2層	〃	10.2			にぶい黄橙色	外面・ハ。内面・指痕、口縁下ヨコナデ。	1/8
〃	137	ST1	〃	28.4			にぶい黄褐色	凹線文。内面・ハカ。	1/10
〃	138	〃	弥生 高杯				橙色	杯部内外面ミガキ。接合部・内面ケズリ、外面細く鋭い沈線。	摩 1/5
IV -89	141	ST2	弥生 壺	6.4		胴径 16.0	にぶい黄橙色	上胴外面に櫛描文、竹管文。内面絞り目と指痕。	摩。頸11 胴12
〃	142	ST2-SK1	弥生 甕	30.0			にぶい黄橙色	口縁部外面・上向するハ。内面・横位のハラナデ。	1/12
〃	143	〃	弥生 壺	10.9			赤褐色		内外摩 1/9
〃	144	ST2 1層	弥生 甕	18.3			にぶい褐色	外面・頸部に粗いミガキ、肩部にハ痕。ヌケ。	摩 1/11
〃	145	ST2-SK1	弥生 壺	16.6			浅黄橙色	貼付口縁外面に押圧による斜格子文。頸部下の突帯に刻目、突帯基部に3条の沈線。口縁上端面の一小穴の性格は不明。	摩 2/5
〃	146	〃	弥生 甕	15.3			にぶい橙色	外面・頸部下微隆起帯の下部を突いて簾状文。同微隆起帯の上部を突く細かいタテハ。口縁端下に浅い刻目。ヌケあり。	1/2
〃	147	〃	〃	18.6			にぶい橙色	貼付口縁、下端に刻目。4条の微隆起帯下に櫛状原体による列点文、その下に波状文。内外面ハ。外面ヌケ。	2/3
〃	148	ST2 検面	〃	19.8			にぶい橙色 胎土やや粗	口端外に2条の微隆起帯、その上方側の1条に刻目。	摩 1/8

挿 図 番 号	図 版 番 号	出土場所 (遺構)	器 種 器 形	法 量 (cm)			色 調 (外面)	特 徴	備 考
				口径	器高	底径			
IV -89	149	ST2-SK1	弥生 甕	13.2		胴径 11.9	にぶい黄橙色	内外面のワケ。内面・ナデ仕上げ。外面・ヌケ。	1/5
IV -90	151	SK1	〃	14.2			浅黄橙色	外面・ツツ。内面・ツツか。	1/5
〃	152	SK4	〃	25.0	39.2	9.8 胴径 26.2	浅黄橙色	内面・胴部ツツ。頸～口縁ワケ。外面・全面に細か目のワケ。頸と上胴部境に浅い沈線。胴外面被熱。	
〃	153	〃	弥生 壺			9.5	赤橙色	外面・ツツ。被熱、剥離有。	剥 底 1/1
〃	154	〃	弥生 甕	12.9		胴径 18.2	にぶい橙色	口端外面浅い凹線3条。下胴部内面ケズリ。	荒 4/5
〃	155	〃	〃	15.9			にぶい橙色	口端外面2条の凹線。胴部被熱、変色し、荒れ。	荒 3/4
〃	156	〃	〃	22.2		胴径 27.8	橙色	口縁各部分は鋭く屈曲。外面に2条の凹線。胴部外面ツツ。	1/1
〃	157	〃	〃			6.7	橙色	外面下部太いミガキ。内底周縁ナデ上げ+ケズリ上げ風痕跡。2次被熱。	底 1/1
〃	158	〃	弥生 鉢	18.0			にぶい黄橙色	口縁内側薄く貼付か。内面ナデか。	摩 1/5
IV -91	159	SK52	弥生 壺	19.0			にぶい黄色 内面黒色	貼付口縁。施文具はワケ状原体か。	全摩
〃	160	SK52 ST1	〃	14.9			橙色	体部内外面・粗目のワケ。頸部下にワケ先による刺突文。口縁外面凹線文。図164と同一個体の可能性大。図164はST1と接合。	内摩 口 8/9
〃	161	〃	〃	22.8		胴径 42.1	橙色	口縁端外面凹線文は沈線状、その上に突起状浮文。頸部突帯にワケ状原体による刻目。頸部～胴部外面細目のワケ。胴部外面はナデ消す。胴部内面指痕。	頸部完周 胴部 3/4
〃	162	SK52 SK51	弥生 甕	14.0			橙色	内外面のワケ。口縁外面2段のヨコナデ、ツツ状痕。	口 1/1
〃	163	SK52	〃	23.3			橙色	口縁端面凹線文	
〃	164	SK52 ST1 I層	弥生 壺			7.0	にぶい橙色	内底指圧痕。ヘラケズリ。図160と同一個体の可能性大。SK52とST1が接合。	外摩 低 1/1
IV -92	165	SK57	〃			胴径 33.0	橙色	外面ワケ、中位以下ミガキ。内面指痕。外面胴部に大きな黒斑。図166は同一個体か。	
〃	166	〃	〃			11.2	にぶい黄橙色	165と同一個体か。底部剥離。外面ミガキ、内面指痕。	
〃	167	〃	〃		胴径 32.8	11.1	明赤褐色	外：多方向のワケ後、下位は密ミガキ、中位は粗ミガキ。底部や胴部に接合痕や剥離痕。頸部屈曲部開始部が僅かに残る。	1/2
〃	168	〃	〃	18.0			にぶい黄橙色	口縁3条の凹線。内外ワケ後未調整。口縁下に1条の条線。	口 1/1
IV -93	171	SK72	弥生 甕	13.0			橙色 胎土良 焼成良	胴部内面上位ケズリ	1/4
〃	172	SK72 I層	〃	20.8			灰黄褐色	口縁外面に弱い指痕。頸部ヨコナデ。	1/8
〃	173	SK72	〃	14.4			浅黄橙色	薄手。外面胴部細かいツツ後、頸部ヨコナデ。	1/3
〃	174	〃	弥生 鉢	10.3			にぶい黄橙色		1/5

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特 徴	備 考
				口径	器高	底径			
IV -93	175	SK72	弥生 高杯	22.0			浅黄橙色	口縁外面2条の凹線。SK76に同一個体片。	1/9
〃	176	〃	弥生 高杯			12.4	灰白色	脚内面ヨコ斜ケズリ	摩
IV -94	178	SK75 SK76 1層	弥生 甕	18.0			黄灰色	口縁部の接合部が外面を巡ってみえる。口縁下面・細目のハナ原 体で押圧後、指押圧にて菊花状。内面と頸部外面は細目のハナ後、 ナデ。	1/2
〃	179	SK75・76	弥生 高杯			9.2	オリーブ黒～ 橙色	外面平滑に仕上げ、ハナ沈線文。内面指痕とケズリ痕。	底 1/2
〃	180	SK75 1層	弥生壺	13.4			橙色	口縁接ぎ目が外面を巡る。端部内側に尖らせる。	1/9
〃	181	〃	弥生甕	15.9			内面橙色	外面スガ	1/8
〃	182	SK76 4層	弥生 壺	31.3			灰白色	口縁下面に竹管文、微隆起帯、櫛描文。	
〃	183	SK76	〃	16.7			内面にぶい黄 橙色	口縁外下面に、櫛状原体による横条文を施し、その間に微隆起 帯を残す。端部下端に刻目。	1/12
〃	184	SK76 4層	〃	5.3		胴径 13.5	にぶい黄橙色	胴外面中位以下ミガキ、上胴～頸部にコナデ。内面ナデ、押圧痕。 口縁端面取り。雲母を含む粒子を若干含む。	口 1/1 胴 1/2
〃	185	〃	弥生 甕	21.9			灰黄褐色 焼成良	外面タケ。口縁端は強いヨコナデで面取、刻目。	1/4
〃	186	SK76 1層	〃	16.8			褐灰色	外面・タケ、頸部丁寧なヨコナデ。上胴部に櫛描文・竹管文。 口縁上端強いヨコナデでやや摘み出す。外スガ。	1/2
〃	187	〃	弥生	15.4			灰黄褐色	頸部内外粗目のハナ。貼付口縁下面・細目のハナと指痕、刻目。	1/2
〃	188	SK76	弥生 甕	15.7			灰黄褐色	薄手。口縁外面凹線文。頸部ヨコナデ。雲母又は火山ガラス片、 花崗岩風化礫含。	1/5
〃	189	SK76 1層	〃			7.8	浅黄橙色	内面・ナデ	外摩 1/1
〃	190	SK76 4層	弥生 手捏 鉢	9.2			灰白色	内外面に指痕。体部外面擦痕。	1/4
IV -95	192	SK72 I層 SK77	弥生 壺			8.3	浅黄橙色	厚手。外面・タケ、内底押圧痕。	
〃	193	SK72・77	〃	32.0		胴径 27.2	橙色	やや肥厚させた口縁部と頸部に不連続の粗目のタケ。4条の太 い沈線施文により内面に凹凸。	1/2
〃	194	SK77 床	〃	19.8		胴径 (32.3)	黄灰色	外面・タケ後、下半太いミガキ。頸部に施文具押圧による稜杉状文。 内面・胴部上半ナデ、下半ケズリ。口縁は厚手で、拡張部は明 確に屈曲。	頸 1/1
〃	195	〃	〃	31.3		胴径 39.8	橙色	口縁下端は貼付状の絞り目。その下側をヨコナデ。口縁上端と 外端面はヨコナデにより凹。外面ミガキ、内面ナデ、上胴部・ 内面に接合痕、外面に施文具先端を上方から押圧した列点文。	
〃	196	SK77	〃	18.3	43.4	12.1	にぶい橙色	外面・タケ仕上後、貼付口縁。口縁下端は摘出し又は若干の貼付 により突出。上端は強いナデにより摘出し。胴部・6ヶ所に打 撃穴。胴径 31.7。	準完
〃	197	SK77 床	〃	13.8	43.6	8.2	橙色	外面・摩著。内外面タケ痕。胴径 26.7。	1/1
〃	198	SK77	〃	16.2	38.9	10.3	にぶい橙色	外面・タケ後、頸部は3段のヨコナデ、下胴部はミガキ。外底も 丁寧なナデ。内面・成形後、下半は底までケズリ。拡張した口 縁端面に3条の凹線。胴径 29.3。	1/1

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特 徴	備 考
				口径	器高	底径			
IV -96	199	SK77	弥生 壺	15.6			にぶい橙色	外・タテウ、列点文、上胴部ミガキ。口縁端面は強いヨコナデによる凹線と摘み上げ、下端に刻み。内・口縁はヨコウ、上胴部は深い絞り皺。	口 1/2
〃	200	〃	〃	17.7			明黄褐色	外面・口縁端と頸部に円形浮文。突帯は摘み上げにより鋭い稜をなす。口縁下面に押圧痕。内面・細目のウ、ナデ。	頸 1/1
〃	201	〃	〃	18.0			灰黄色	貼付口縁の上に、口縁下端をさらに貼付して拡張。竹管文。内外粗目のウ後未調整。	1/2
〃	202	〃	〃			胴径 16.3	にぶい橙色	外面・ウ後、ミガキ。口縁に2条の沈線。内面・押圧痕と絞り目。頸ヨコ方向ケズリ。胴部最大径部の接合部で剥離。	胴 2/5
〃	203	SK77 床	〃			8.3	にぶい黄褐色	厚手。外面・タテウ。内面・ケズリ。	2/3
〃	204	SK77 I層	〃	22.9			黄褐色	垂下させた口縁外面に凹線、その上に、施文具押圧による斜位の波板状文。	口 1/8
〃	205	SK77	〃	14.2		胴径 26.0	橙色	外面・ウ後、丁寧仕上。口縁に鋭い刻目。口縁内上端凹ませる。	口 3/4
〃	206	SK77・76 I層	〃			胴径 28.2	灰白色	外面・密ミガキ。内面・ナデ、接合部観察可。図207と同一の可能性。	
〃	207	SK77	〃			10.0	浅黄褐色	厚い底部。外面・密ミガキ。外底にワ様の圧痕と切離し状擦痕。	1/1
〃	208	〃	〃	23.8			にぶい橙色	外面ナデ、ミガキ。口縁端は強い横ナデにより、角を摘出す。	
〃	209	〃	〃	18.9		胴径 27.6	浅黄色	貼付口縁の上に、ウ。胴部ミガキ、胴内面・板ナデ、指痕。	3/4
IV -97	210	〃	弥生 甕	15.7			灰黄褐色	薄手。口縁は明確に屈折。外面・細目のウ後頸部2段のヨコナデ。口縁や胴中部の内外に炭化物付着。ファト、雲母状の微小片含。搬入品か。	1/3
〃	211	〃	〃	15.5		胴径 17.5	にぶい橙色	内外面に細目のウ痕。頸部外面はタテウ→ヨコウ→ヨコナデ。やや薄手。口縁端面に2条の沈線。	1/2
〃	212	〃	〃	18.5			にぶい橙色		全摩 1/1
〃	213	SK72・77	〃	15.8			にぶい褐色	口縁端は、下方への貼付又は摘み出しにより若干拡張。外面・被熱による荒れ著。内外炭化物。	3/7
〃	214	SK77	〃	19.7		胴径 19.0	にぶい黄褐色	外面、及び口縁内に横方向の長いウ、その後ナデ仕上。内面ナデ痕。	摩 1/1
〃	215	SK72 I層 SK77	〃	21.2		胴径 20.9	浅黄褐色	外面・頸部に櫛描文、上胴部列点文、貼付口縁端部に刻目、外面に押圧痕。頸部タテウ痕。内面・指成形後、下位にケズリ、上位に細目のヨコウ。口縁上端はヨコナデにより摘み出す。被熱橙色。	口 1/3
〃	216	SK77	〃	27.9		胴径 26.3	橙色	外面・貼付口縁に押圧痕、皺。胴部にウまたは板ナデ後、ナデ仕上げ。内面・胴部接合部に指痕並ぶ。外面スナ。	1/2
〃	217	〃	〃	22.0			にぶい黄褐色	内外面に細目のウ。内外に若干の炭化物。	1/3
〃	218	〃	〃	12.5		胴径 12.6	にぶい黄褐色	外面・細目のウ、スナ。内面・コ状の縦条痕。	1/4
〃	219	SK77 床	弥生 高杯	24.8	16.5	10.8	橙色	杯部内面・ウ後、放射状ミガキ、周縁部はヨコミガキ。中心部は小円盤で閉塞。外面・ミガキ。脚内・横位のケズリ。	脚 1/1
〃	220	SK77	〃	13.9			橙色	外面・ミガキ。脚内・断続的なヨコケズリ。	3/5
IV -99	224	SX5	弥生 甕	22.5			にぶい橙色	口縁端面に3条沈線	1/11
IV -100	225	集中1	弥生 壺	16.2		胴径 23.4	にぶい橙色 胎土粗粒多		摩 1/3

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特 徴	備 考
				口径	器高	底径			
IV -100	226	集中 1	弥生 壺	11.4	器高 21.3 胴径 15.3	5.2	灰白色	外面・ナデ→ミガキ。内面・ナデ。口縁端部は強くヨコナデして、稜をなす。	摩 完
〃	227	〃	〃	9.7	器高 20.1 胴径 12.7	5.1	浅黄橙色	下部の一部以外残。外面・単位巾の狭い粗目のワ。内面・ナデ。	摩
〃	228	〃	〃	14.5			にぶい橙色	内面・ナデ。外面・摩耗により不明。ナデか。	摩 8/9
〃	229	〃	〃	15.1			橙色	花崗岩風化は多含。搬入品とみられる。	摩 1/4
〃	230	〃	〃		胴径 21.0		内外面黒褐色 胎土粗砂多	長頸壺。高知平野西部以西産胎土。ファト片、頁岩、砂岩等の粗粒多含。薄手。櫛描 + 微隆起帯 + 円形浮文。	
IV -101	231	〃	弥生 甕	18.3	器高 29.5 胴径 18.7	6.1	灰黄色	外面・ワ痕。内面・ナデとワ又は板ナデ。貼付口縁下は菊花状押圧。端部は面取り。上胴部微隆起帯。	摩 胴 1/1
〃	232	〃	〃	21.9			内外面黄灰色 胎土粗粒多	ファト由来とみられる砂粒多含。発色とともに、高知平野西部以西産とみられる。口縁下に微隆起帯、ワ痕を巡らせる。上胴部櫛描 + 微隆起帯 + 円形浮文 + 短い縦微隆起。やや薄手。	摩 1/1
〃	233	〃	〃	17.5			にぶい黄橙色	内面・指痕と、横位のケズリ。外面・弱いワ。鋭い列点文。	摩 1/2
〃	234	〃	〃	11.2			橙色	胴外面・ワ。口縁端面 2 条凹線。	1/5
〃	235	〃	〃	14.8	胴径 13.0	4.8	明褐灰色	内面・ケズリ。薄手。2 次被熱による剥離著。	3/5
〃	236	〃	〃	15.0	胴径 20.0		黄灰色	内外面・ミガキ的なケズリ。薄手。口縁端面は若干拡張して 2 条の弱い凹線。	1/2
〃	237	〃	弥生 鉢	17.9	器高 16.1 胴径 17.2	6.9	橙色		摩 5/6
〃	238	〃	弥生 高杯	18.1			橙色	花崗岩細～粗粒を多含する搬入品。脚内上方に深い絞り。口縁の各端部は稜をなし、口縁端面は浅い 2 条凹線。杯部外 (下) 面は分割的ミガキ。	摩 1/3
IV -102	244	集中 3	弥生 甕	12.8			にぶい黄橙色	口縁内外面・ワ。肩部に押しき簾状文。櫛描波状文。	摩 1/2
〃	245	〃	〃	20.5			浅黄橙色	外面・ワ後、ナデ。頸下の文様は、列点文に横位の櫛描を重ねる。頸内部・指、ワ痕。	摩 1/1
〃	246	〃	〃	17.5		16.2	灰黄褐色	内外面・ワ。胴内面・ナデ、押圧。薄手。胴部被熱剥離。	外荒 1/2
IV -103	247	SR2・3	瓦器 椀	15.0			灰白色	口縁ヨコナデ。和泉型。	内摩 1/8
〃	248	SR2	弥生			8.4	内外褐～ 灰黒色 胎土精 焼成良	花崗岩風化礫や角閃石微細粒含。讃岐方面からの搬入品。	摩 1/8
〃	249	SR2・3	弥生 壺	14.7			橙色	頸部外面・2 段のワ。口縁ヨコナデにより面取り。	1/2

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴	備考
				口径	器高	底径			
IV -103	250	SR2	弥生 壺			9.1	にぶい黄橙色	外面・ミガキ。内面・ナデ。	摩 1/1
〃	251	SR2・3	弥生 高杯			14.5	浅黄橙色	杯部・内面ハケ+ミガキ。外面ミガキ。脚部・外面に細線14条。杯部2列の穿孔。裾に綾杉状の列点文。下端凹線文。内面ケズリ。	杯部 1/8
〃	252	SR3	弥生 壺	20.3			橙色	頸外面に二列の列点文。口縁下に押圧痕。厚手。	摩 1/2
〃	253	〃	〃	17.8			橙色	内外面・粗目のハケ	1/5
〃	254	〃	〃	19.4			にぶい橙色	口縁に突帯を貼付。端部に刻目+厚手。	摩 1/4
〃	255	〃	〃	25.8			橙色	内外面にハケ。外面・頸部に弱い押圧とヨコナデ。口縁端面と上胴部にハケ状原体押圧及び押し引きによる刻目、及び列点文。	2/5
〃	256	〃	〃	17.3			にぶい褐色 焼成良	頸部外面・ケハケ→ハケ状原体による大きめの列点文→縦位の沈線。頸部内面・ナデ→横位の弱いハケ痕。口縁端面凹線文。	7/8
〃	257	〃	〃	15.8			浅黄橙色	広い貼付口縁。上端を摘み出して尖らせる。端面に凹線。	
〃	258	〃	〃				オリーブ黒色	泥岩小円礫、チャト小角礫多含。仁淀川流域以西の胎土か。粘土粒を摘んだ浮文。	1/8
〃	259	〃	〃				橙色	上胴部・櫛描文。外面・ハケ。内面・頸部に絞り目、ハケ。胴部横方向ナデ。	1/5
〃	260	〃	〃				黄灰色	上胴部・ハケ状原体をケに押圧したのち、細い櫛描文。仁淀川流域方面の胎土か。	
〃	261	〃	〃		胴径 16.0		にぶい橙色	ソロバン形の胴部。下位ミガキ。内面・弱いハケ痕。薄手。	外摩 1/5
〃	262	〃	弥生 小壺	9.6	9.1	4.9	橙色	貼付状口縁の接合線あり。外面に調整具圧痕。	2/3
〃	263	〃	弥生			5.4	にぶい黄橙色		1/2
IV -104	264	〃	弥生 壺	18.1	41.3	9.7	橙色	外面・ミガキ。下半に粘土帯又は押圧の単位痕。内面・ナデ。胴径26.1。	内摩 口1/1
〃	265	〃	弥生 甕	23.0			にぶい橙色	外・口縁下端に刻目。頸部・ケハケ。外面に若干スケ。	摩 1/7
〃	266	〃	〃	20.3			にぶい黄橙色	内外面・粗目のハケ。頸外面は二段。口縁外面・押圧とヨコナデ。口縁端部外面・ヨコハケ、刻目。頸部に微隆起帯。	1/4
〃	267	〃	〃	16.8	(33.4)		にぶい褐色	内面・ケズリ。外面・ミガキ。ハケ痕が弱く残る。やや拡張した口縁外端面に2条の凹線。体部薄手。	2/3
〃	268	〃	〃	15.0			浅黄橙色	外面・上半はわずかな凹凸あり。下半巾広ミガキ。内・ケズリ。口縁は屈曲させ、強いヨコナデによって端面を若干拡張。3条の細い沈線。	1/4
〃	269	〃	弥生 高杯	37.6			にぶい橙色	口縁外面に大きな凹線。下方にハケ痕。	1/9
〃	270	〃	弥生 鉢	14.2	11.3	6.2	にぶい黄橙色 胎土砂粒多	把手付き。外面・ミガキ。	摩 準完
〃	271	〃	〃	22.0	胴径 21.8		にぶい黄橙色	内面・ハケと押圧痕	摩 1/9
〃	272	〃	弥生 高杯	径8.5	(2.5)		にぶい黄橙色	図269の中央充填円盤。図269、273と同一個体。	
〃	273	〃	〃			26.5	橙色	脚外面に大きな凹線。外面・ミガキ。内面・下方はケズリ。上方ナデ。杯部中央は図272で閉塞か。粗粒多含。図269、272と同一個体。	3/5
〃	274	〃	〃			24.6	橙色	外面・櫛描文。下端を拡張し、凹線文。穿孔。内面・広い巾のケズリ。	

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特 徴	備 考
				口径	器高	底径			
IV -104	275	SR3	弥生 高杯	23.4	19.4	12.2	にぶい橙色	脚部に杯部を巻きつけるように接合。杯部外面は多方向の細目ハケ後、ミガキ。内面・ミガキ。脚内面・絞り目、下方にヨコケズリ。下端外面の貼付帯は剥離。口縁の各端部は稜をもって仕上げ。	1/3
IV -105	277	SB1 - P8	土師質 杯	15.4			浅黄橙色		摩著 1/8
〃	278	SB1 - P6	須恵器 杯			9.3	灰白色	丸い立上がり。内底・丁寧仕上げ。周縁立上がり部は擦痕と砂粒の動き。外底ハケ切後ナデ。I期前半頃。	1/2
IV -106	279	P328	土師質 杯か			6.8	橙色 胎土良	ハケ切とみられる	摩著 1/2
〃	280	〃	土師器 高杯				にぶい橙色 胎土良	脚に方形とみられる透かし孔。杯との接合面はやや溝状にして接合。杯部裏も含めて全面ミガキ。全面平滑に仕上げ。	摩 1/4
IV -107	281	P273	土師質 杯	10.7	3.6	6.6	灰白色 胎土良		摩 1/6
IV -110	282	SK61	土師器 蓋				灰白色 胎土良		摩
〃	283	〃	土師器 甕	30.3			灰黄褐色 胎土粗 焼成良	口縁：内面ヨコナデ痕。端部強いヨコナデでやや摘み上がる。I期。甕A。	1/18
〃	284	〃	須恵器 円面碗			15.0	灰色 断面赤灰色 焼成良	透かしは8孔か。穿孔工具痕残る。外面口縁の一部を面取り。全体にシャープな成形。	1/6
〃	285	〃	焼塩				浅黄橙色 胎土粗	内面布痕。砂岩円礫等含。2次被熱。	
〃	286	〃	土錘	全長 (4.9)	外径 1.8	孔径 0.6	灰黄色		12.1g 完 両端摩
〃	287	SK46	土師器 蓋		(2.2)	摘み径 19	明赤褐色 断面暗灰色	内外面ミガキ。器表面が赤褐色。	
〃	288	〃	須恵器 皿	16.2	2.3	12.0	灰白色 焼成不良	外底ハケ切後弱ナデ。口端屈曲。内底平滑。	1/4
〃	289	SK47	土師器 皿	15.4			橙色	口端内沈線。内外面密ミガキ。	内摩 1/10
〃	290	SK47	土師器 杯B			6.9	明赤褐色 断面暗褐色	内面ミガキ、外摩。外底ハケ切後、処理。高台端面、弱く凹。器表面橙色。	摩 1/2
〃	291	〃	土師器 甕	20.7			橙色 胎土粗	口縁内外弱い2段のヨコナデ。上端面やや凹面。花崗岩風化とみられる角粒を多含。典型的甕B。搬入品か。	1/10
〃	292	P386	土師器 高杯	20.8			にぶい橙色	下面・回転ケズリ→回転ミガキ。上面・全面ミガキ。脚部・接合部で剥離。	
〃	293-1	P530	〃	14.6			赤褐色 断面灰白色 胎土選	赤彩か。口縁部被熱か。図293-2と同一個体の可能性。	全摩 1/10
〃	293-2	P530	土師器 高杯			8.5	赤褐色 断面灰白色 胎土選	赤彩。化粧土が一部残る。脚部4ヶ所に長方形とみられる透かし孔。裾部内外ヨコナデ。脚内ナデ。	摩 1/5
〃	294	SK44	土師質 杯			8.0	灰白色	II期	摩 1/4
〃	295	P522	土師器 甕	25.0			にぶい褐色	口縁ヨコナデ。外面スナ。赤彩等若干含。	1/11
〃	296	SK22	土師器 杯	12.0			橙色 胎土良 長石粒等若干	口縁内沈線。薄手。搬入の可能性あり。	摩 1/8
〃	297	〃	土師器 高杯	9.2			にぶい黄橙色 胎土良	脚部、杯部接合部で剥離。長方形とみられる透孔(4箇所か)。	摩 1/5

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴	備考
				口径	器高	底径			
IV -110	298	SK22	土師器 高杯			12.3	橙色		摩 1/8
〃	299	〃	〃			脚巾 4.5	橙色 胎土やや精	断面八角形。外・ミガキとみられる。石英微細粒含。赤は僅少。	
〃	300	〃	須恵器 皿	14.7	1.75	10.7	灰白色 焼成不良		摩 底 1/4
〃	301	〃	焼塩 土器	12.0			灰～ にぶい橙色 胎土粗	内面布痕。口縁端は内側へ擦り切るように不整形。5mmまでの泥岩円粒多含。	1/8
〃	302	〃	焼塩 土器				橙色 胎土粗粒含		破片
〃	303	SK45	土師器 蓋	14.8	2.1	摘み径 2.0	橙色 胎土良	内外面ミガキ。器表面が橙色。I-5期。	1/10
〃	304	SK74	須恵器 鉢	15.0			灰色 胎土精	口縁内に沈線。接合部で剥離。	1/8
〃	305	P514	黒色 椀	16.7		8.3	にぶい黄褐色 焼成良	内黒。花崗岩細粒や雲母片を含む搬入品。内面・密ミガキ。外面・ミガキ。口縁内面に細い沈線。高台断面は潰れた三角形。外縁ケズリ仕上げか。	1/9
〃	306	P521	須恵器 蓋	11.8			灰色 焼成良	逆皿形。天井外面全面に自然釉。内面ナデ。カエリは明確に突出。I期前～中葉。	1/6
〃	307	〃	土師器 蓋	13.1			橙色 胎土良	内外面・ミガキ。外面・分割ミガキか。	内摩 1/9
IV -111	308	SK10	土錘	残長 4.6	全幅 2.9	全厚 1.9	浅黄褐色 胎土やや精	有溝	21.0g 摩 4/5
〃	309	SK39	須恵器 高杯			13.0	灰白色 胎土良 焼成やや不		摩 脚部
IV -112	310	SK19	土師器 皿	18.2			明赤褐色 胎土やや緻密 焼成やや良	内外面ミガキ。全面および断面も明赤褐色。赤は僅少。極微細な石英、長石粒含。搬入品とみられる。	摩 1/8
IV -113	311	SK53	土師器 皿か杯			16.0	にぶい黄褐色	接合部で剥離した脚部	1/9
〃	312	〃	須恵器 杯 B	15.2	4.9	11.5	灰白色	底部内外に粘土紐痕。底内外ナデ。内底周縁部回転ナデ痕。I-4期頃。	内摩 1/24
〃	313	〃	土師器 甕	15.8			橙色	花崗岩風化礫多含。古代前期。甕 B。	
〃	314	〃	須恵器 壺	11.5			灰色	内面自然釉が降着	
〃	315	P324	土師器 高杯			裾部径 17.4	浅黄褐色 胎土良 焼成良		摩 1/6
〃	316	〃	〃	21.5			灰黄褐色 胎土砂粒多含	内外面・密ミガキ（摩耗により方向等不明瞭）。石英等の粒多含。厚手。赤彩土師器と同種の胎土。口縁の一部が黒変。I期前半。	摩 1/8
IV -114	317	SK33	土師器 皿	16.1	2.5	11.5	橙色 胎土やや良	全面ミガキとみられる。口縁内沈線。I-5期。	外摩 1/4
〃	318	〃	土師器 蓋	19.2			明黄褐色		摩 1/11
〃	319	〃	土師器 杯 A	13.0	4.5	8.4	にぶい橙色	内外面ミガキ。I-5期。	外摩 1/5
〃	320	〃	土師器 椀	9.8	3.0	4.1	にぶい黄褐色	全面ミガキ。口縁外面僅かなヨコナデ痕。I-6期頃。	摩 1/4

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴	備考
				口径	器高	底径			
IV -114	321	SK33	土師器			器厚 0.9	にぶい橙色	籬状の突帯。外面ハケ、内面ハケ+ナデか。内面ややスガ。	
〃	322	〃	須恵器 皿	15.4	1.8	11.1	灰色	外底ナデ。I-6期。	1/5
〃	323	〃	須恵器 杯B			8.8	灰色	外底ナデ。I-4~5期。	1/4
〃	324	P414	須恵器 壺		胴径 10.3	4.3	灰色	胴部に刻書。外面・胴部下半回転ケズリ。肩部火膨れ。	1/4
IV -115	325	P270	土師質 皿	8.6	1.2	6.6	浅黄橙色		摩著 1/2
〃	326	〃	〃	14.0			にぶい黄橙色		摩 1/8
〃	327	〃	土師質 杯			8.5	灰黄褐色		摩著 1/4
〃	328	〃	〃	12.6		7.3	灰白色	口縁内スガ。杯D。	外荒 1/4
〃	329	〃	〃	11.5			にぶい黄橙色	重ね焼斑	摩 1/5
〃	330	〃	〃	13.6	4.5	7.5	橙色 胎土 素地良		摩 1/4
〃	331	〃	〃	14.4		8.0	橙色	ハ切とみられる	摩著 底 1/1
〃	332	〃	土師質 椀	15.1			内外面灰白色	薄手。III-1~2期。	摩著 1/4
〃	333	〃	黒色 椀か杯	15.9			にぶい黄橙色 焼成良	内黒。外面・口縁部のみ黒色。内面密ミガキ。弧状の暗文。外面押圧痕。口縁ヨコナデ。金雲母片・花崗岩風化礫多含の搬入品。径1.8mmの穿孔あり。	摩あり 1/5
〃	334	〃	〃	14.4			にぶい橙色 焼成良	内黒。花崗岩風化礫。雲母片を含む搬入品（花崗岩粒自体に雲母片を含むものあり）。内面・隙間のないミガキ。右下りの上に右上り。ミガキは細かくシャープ。外面・押圧痕、口縁部ヨコナデ痕。口縁部のみ黒色。	1/6
IV -118	335	P181	土師質 皿	7.2	2.2	4.7	浅黄橙色	糸切。口縁部黒変。	摩著 完。
〃	336	〃	土師質 杯	13.8	3.8	7.5	浅黄橙色	内底に回転成形痕。外底糸切。内底スガ。やや厚手。杯E。	完
IV -119	337	P183	〃	16.0			にぶい橙色	外面化粧土の可能性	摩 1/9
〃	338	〃	瓦器 椀			5.4	オリーブ黒色 内面黄灰~ オリーブ黒色	内底平行ミガキ。外底指圧痕。石英・長石粒含。和泉産。	摩 底 1/1
〃	339	P155	土師質 杯	16.3			灰白色	口縁端面が凹面となったのは両側からの回転ナデの結果か	摩 1/6
〃	340	P172	瓦器 椀	15.9			オリーブ黒色	内ミガキ（摩耗）。外指痕。	摩 1/11
〃	341	〃	黒色 甕				黄褐色 内面黒褐色	雲母細片含む搬入品	1/8
IV -121	342	P5	土師質 杯	13.7	3.8	7.0	灰白色	糸切	摩 1/4

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴	備考
				口径	器高	底径			
IV -121	343	P5	土師質 杯	14.8	3.6	6.6	灰白色	内面滑。糸切。	摩 1/4
〃	344	P16	土師質 皿	7.9	1.5	4.9	浅黄橙色		摩著 底 1/1
IV -122	345	SK2	〃	8.1	1.5	5.0	にぶい橙色		摩
〃	346	〃	瓦器 皿	9.7			灰オリーブ色		内摩 1/6
〃	347	〃	〃	8.6			灰色	外底指痕。口縁ヨコナデ。	摩 1/4
〃	348	〃	土師質 杯	15.5	3.6	9.4	浅黄橙色	杯 E	摩 1/3
〃	349	〃	〃	15.1			灰黄色		1/8
〃	350	〃	土師質 椀	15.3	4.2	7.6	橙色	椀 A	摩 1/2
〃	351	〃	土師質 杯			7.5	橙色	杯 F	摩 1/4
〃	352	SK3	土師質 皿	7.8	1.5	4.7	淡赤橙色 胎土やや粗		摩 完
〃	353	〃	〃	7.4	1.3	4.4	にぶい橙色	糸切	摩 完
〃	354	〃	〃	7.5	1.4	4.4	橙色		摩 準完
〃	355	〃	土師質 杯	15.4	3.65	8.8	浅黄橙色	杯 E	摩 底 1/2
〃	356	〃	〃	13.5			灰白色		1/8
〃	357	〃	〃	14.0	4.7	7.0	灰黄色	底中央が円形に剥離。糸切。	内摩 3/4
〃	358	〃	〃	14.0			灰白色	内面・口目状痕	摩 1/4
〃	359	〃	〃	14.7	4.4	7.2	にぶい橙色 内面黄灰色	内面滑らかに仕上げ。外底糸切 + 平行圧痕。内面黒変。杯 F。	底 1/2
〃	360	〃	〃	13.7	3.8	6.9	灰白色	内底面整った螺旋状痕。糸切。	全摩 底 1/1
〃	361	〃	〃			7.5	浅黄橙色	糸切	3/4
〃	362	〃	〃			7.4	灰白色		摩 3/7
〃	363	〃	〃			7.4	灰白色	内底面・同心円痕。外底・立上り部に斜めの皺状痕。外底面糸切 + 平行圧痕。杯 F。	
〃	364	〃	土師質 椀	15.0	4.2	7.0	橙色	椀 A	全摩 底 1/1
〃	365	〃	土師質 椀の杯			7.4		底部円盤。外底に細かい糸切痕。	1/2
〃	366	〃	瓦器 椀			3.8	灰色 胎土良		摩 1/7
〃	367	〃	須恵器 椀の鉢				灰色	整ったナデ	

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特 徴	備 考
				口径	器高	底径			
IV -122	368	SK3	瓦器 椀				内外面灰色	外面・指痕。内面・滑らか。	内外摩
〃	369	〃	〃	13.2	5.1	4.8	内面褐灰色 断面橙色	外面・指痕, 口縁部ヨコナデ。長石微細粒等含。2次被熱により炭素消失か。搬入品とみられる。	摩 1/4
〃	370	〃	土師質 杯			6.1	橙色	糸切	摩 底 1/1
〃	371	〃	土師質 椀			6.8	灰白色	糸切。内底に弱いロコ目状痕, 重ね焼状変色。灰白色の焼成。椀A。	摩 3/5
〃	372	〃	瓦器 椀	15.7			灰色 胎土精	内面・ミガキ。口縁ヨコナデ (弱く2段)。内外面焼し良好。	1/10
IV -123	374	SK24	須恵器 鉢			11.1	灰白色 胎土黒粒含	内面使用摩耗	底 1/4
〃	375	SK35	土師器 杯 A	12.3	3.6	8.0	浅黄橙色 内面灰白色	外底ハ切後処理。外面立上がり部に若干の段。	9C. か 摩著 完
〃	376	〃	土師器		全幅 3.1	全厚 2.15	にぶい橙色	ケズリ	把手か 部分
〃	377	SK40	黒色 椀			8.2	橙色 焼成良	内面・黒色, ミガキ。薄手。長石, 赤礫含。搬入品。	1/8
〃	378	SK41	〃			8.2	にぶい橙色	内面・黒色, ミガキ。金雲母, 赤礫, 長石含。搬入品。	摩 1/4
〃	379	〃	土師器 鉢	21.6			浅黄橙色 胎土良	内外面丁寧仕上げ	摩 1/9
〃	380	〃	須恵器 鉢	19.1			にぶい橙色 焼成不良		摩 1/4
〃	381	〃	須恵器 杯の鉢		(3.5)	9.7	灰白色 焼成不良		摩 1/3
〃	382	〃	土錘	外径 1.1	孔径 0.4		明赤褐色		2.9g
IV -124	383	SK43	土師器 皿	17.6	2.1	14.9	明赤褐色 胎土良	内面・ミガキ。口端内凹線。	外摩 1/11
〃	384	〃	土錘	外径 1.1	孔径 0.44	全長 4.3	黄褐色		3.5g 摩
〃	385	SK48	緑釉 皿	13.2			緑灰色 断面灰色 胎土精	輪花は外側より工具で丁寧には花弁状に押圧。外面下部の7列状痕は施釉前。調整精緻。丁寧。淡緑色で摩耗殆どなし。	1/4
〃	386	〃	土師器 高杯			13.3	橙色		1/10
〃	387	SK54	土師器 甕	25.0			浅黄橙色	外面タケ。口縁端部ヨコナデにて断面方形とし, やや摘み出す。在地産。甕A。	1/10
〃	388	〃	須恵器 蓋			摘み径 2.5	灰色	I期 (8C.代)	
IV -125	389	SK56 I層	緑釉			6.6	内外面灰 オリーブ色 断面黄灰色	外底ケズリ成形, 高台内に螺旋状ケズリ痕。高台内露胎。内ミガキか。素地須恵質。	2/3
〃	390	SK56	黒色 椀			8.8	にぶい黄橙色 内面黒色	内面ミガキ。石英含, 金雲母微細片多含。搬入品。	1/8
〃	391	SK56 II層	緑釉 皿	15.0			オリーブ灰色 断面灰色	内外面ミガキ。素地須恵質。	1/11

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴	備考
				口径	器高	底径			
IV -125	392	SK68	緑釉 皿				内外面 オリーブ黄色 断面灰白色 胎土良	口縁内1条沈線。素地土師質。	口縁部 片
〃	393	SK84	須恵器 長頸壺	9.8	器高 24.8 胴径 15.4	9.0	灰白色 胎土良	胴部は一体的に作り、頸部を接合。接合部の粘土を掻き取って処理。半透明オリーブ色の自然釉が美しく掛かる。肩部、口縁部下方に沈線。	頸1/1
IV -126	394	SD5	須恵器 杯	13.0			灰白色 胎土良	口縁を巻き込む	1/5
〃	395	〃	須恵器 杯B			10.6	灰白色		摩 1/7
〃	396	SD8	須恵器 杯A	12.8	3.4	8.3	灰白色 焼成やや不良	体部や内底に回転ナデ痕。外底へ切後ナデか。I期末頃。	摩 1/6
〃	397	〃	土師器 杯A	17.7	4.15	13.2	橙色 胎土精	全面赤橙色化粧土。口縁屈曲させて内面に凹線。	全摩 1/4
〃	398	〃	須恵器 杯	14.4			灰白色 胎土チャート 角礫等含 焼成不良	体部下位が丸みを有する	摩著 1/8
〃	399	〃	須恵器 杯A	12.5	3.9	9.8	灰白色 焼成やや不良	体部内面下半にワ状調整痕、7～8分割。外底へ切後、ナデ仕上とみられる。I期前半。	全摩 底1/1
〃	400	〃	須恵器 杯B	14.4	3.8	11.9	灰白色	内底・粘土紐痕、ワ、ナデ痕。外周に5分割のワ痕。体部に僅かな回転ナデ痕。外底へ切り、畳付は凹面。均整のとれた形、丁寧な仕上げ。I期前～中頃。	完
IV -127	401	P18	〃	13.2	4.0	9.6	灰白色	立上り外面は回転カキ目状。外底へ切後ナデ仕上。全体に丁寧仕上げ。畳付は凹面。口縁下に回転ナデ又は粘土紐痕跡。I期前半。	1/2
〃	402	P36	〃	14.6	5.6	10.6	灰白色 胎土良	全体に丁寧仕上げ。立上り部の内外に押圧。体部内面にナデ仕上げ痕。立上り外面は丸く仕上げ。口縁端はやや巻込む。I期前～中頃。	2/5
〃	403	〃	須恵器 壺か杯			10.0	灰白色 焼成やや不良	丁寧な仕上げ。外底狭巾の回転ケズリ。内底ナデ。	1/4
〃	404	〃	須恵器 長頸壺				灰色	頸外面に2条の沈線。上下欠損部の周囲を円形に打欠く。	頸1/1
〃	405	P52	土師質 杯	14.9			にぶい橙色		摩 1/11
〃	406	〃	土師質 皿	7.7	1.4	5.4	黄灰色	糸切	摩 1/4
〃	407	〃	土師質 椀か杯			5.8	浅黄橙色		摩 底部片
〃	408	P73	土師質 杯	16.3			浅黄橙色		摩 1/5
〃	409	〃	須恵器 椀			6.3	にぶい黄橙色 焼成不良	一部が還元色。糸切。	摩 底1/1
〃	410	P91	白磁碗	14.8			灰白色	口縁外下回転ケズリ	
〃	411	P98	土師質 皿	7.7			浅黄橙色 胎土砂粒なし	小径厚手。口縁端は僅かに面取り。	摩 1/9
〃	412	P160	須恵器 杯B			9.0	褐灰色 内面灰白色 焼成良	内底多方向ナデ。外底ナデ仕上。畳付は凹面。	1/4

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特 徴	備 考
				口径	器高	底径			
IV -127	413	P204	土師質 杯	11.8	4.3	6.4	橙色 胎土良	へ切とみられる。杯 D。	全摩 底 1/1
〃	414	P257	〃	11.9	3.0	6.2	灰白色		摩著 1/4
〃	415	P264	〃	12.5			橙色		摩 1/5
IV -128	416	P245	須恵器 碗	14.2			灰白色 胎土良	内面ミガキは巾広の帯状。その開始点に坊状に規則的の圧痕残る。胎土良で薄手。丁寧な回転ナデ。Ⅲ - 1 ~ 2 期。	1/7
〃	417	P266	瓦器 碗			5.1	オリーブ黒色 焼成やや不良	高台断面僅かに逆台形か	摩 1/3
〃	418	P275	黒色 杯			5.9	浅黄橙色	在地産内黒。赤い等含。Ⅱ - 2 ~ Ⅲ - 1 期。	摩著 1/8
〃	419	P286	土師質 碗			6.7	橙色		摩著 1/2
〃	420	P296	土師器 甕				明赤褐色	甕 A	
〃	421	P294	土師質			4.9	浅黄橙色		摩著 1/1
〃	422	P300	土師質 杯			7.8	灰黄色	糸切。外底剥離。	摩 1/4
〃	423	P329	瓦器 碗			6.0	内面灰色	高台断面三角。内ミガキ。	摩 1/5
〃	424	P344	土師質 杯	11.7	4.7	8.0	橙色	外面・荒れ。剥離。	摩著 1/5
〃	425	〃	〃	11.3	3.3	6.5	にぶい橙色	小片に分裂	摩著 2/3
〃	426	〃	緑釉 皿	14.5			オリーブ灰色 断面灰色	両面に、釉が薄く均一にかかる。素地須恵質。器厚 2.5mm。外面・口縁部回転ナデ。下部回転ケズリ痕。内面・密ミガキ。底外周に沈線。	1/10
〃	427	〃	緑釉	14.1			浅黄色 断面灰白色	摩耗により、釉は僅かに残るのみ。素地は内外ミガキか。外面回転ナデ痕残る。薄手。	摩 1/8
〃	428	〃	土錘	全長 3.5	外径 1.5	孔径 0.4			4.6g 完
〃	429	P385	〃	全長 6.1	外径 1.9	孔径 0.8		両端摩, 欠。	12.1g 摩
〃	430	P390	土師質 皿	12.5	1.7	8.8	にぶい橙色		摩著 1/4
〃	431	〃	緑釉 碗	13.7			浅黄色 断面灰色	外面・下半は丁寧な回転ケズリ。間隙の広い回転ミガキ。内面・丁寧な回転ナデ及び仕上げにて平滑。成形～仕上げの全作業が繊細かつ上手で、薄手で整美。素地須恵質。釉は残存部が少ないが、素地の状態は良好。	釉剥 1/6
〃	433	P547	土師器 高杯か	19.7			橙色	内外面・ミガキ。下面に竹又は板ナデ痕。	摩 1/8
〃	434	〃	土師 器甕	25.3			内面 にぶい褐色 胎土粗粒多	花崗岩風化礫とみられる角粒多含。甕 A。	1/9
〃	435	〃	土師器 蓋				橙色 胎土良	摘み	摩著
〃	436	〃	須恵器 蓋	14.0			灰白色	内面・ナデ。天井外面に自然釉。	1/11

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴	備考
				口径	器高	底径			
IV -129	438	P604	土師質 杯	13.9	4.5	7.2	浅黄橙色	全体に歪み。内底回転成形痕。糸切。口縁の1ヶ所が被熱変色。杯F。	摩 4/5
〃	439	〃	土師質 椀			7.1	浅黄橙色	糸切	摩 1/4
〃	440	〃	-	14.5			灰黄色 焼成不良	瓦器又は土師質土器。外面・体部押圧痕。口縁ヨコナデか。	摩著 1/8
〃	441	ホI	土師質 杯	14.1	4.7	7.0	灰白色	糸切	全摩 準完
〃	442	〃	須恵器 鉢				灰色	片口部の一部。外面にナデ痕。	
〃	443	〃	瓦器 椀			4.0	灰色	高台断面逆台形	全摩 1/6
〃	444	〃	緑釉 皿	11.8			オリーブ灰色 断面灰色	回転ナデ。素地須恵質。薄い釉。	1/10
〃	445	〃	緑釉			5.9	浅黄色 断面明灰色 胎土良	平高台。下部外面回転成形痕。内底周縁に凹縁巡る。素地須恵質。	摩 1/5
〃	446	〃	灰釉 皿	11.9			灰白～浅黄色 断面灰白色 胎土良	釉は漬け掛け。下部は内外露胎。	1/8
〃	447	ホII	弥生 壺		胴径 17.6	8.0	褐色	花崗岩風化粒。若干の金雲母含む搬入品。下胴部外面・ケズリ状のミガキ。内面胴部最大径部に指痕集中。ごく薄い底部。	1/4
〃	448	〃	土師器 杯	12.9	4.5	9.1	橙色		摩著 1/4
〃	449	〃	土師器 甕	23.6			オリーブ褐色 胎土粗粒多	花崗岩風化角礫多含。搬入品。甕A。口縁内粗目々。	
〃	450	〃	〃	12.8			橙色	花崗岩風化角礫多含。搬入品。甕B。内外被熱赤変。口縁ヌケ。	摩 1/10
〃	451	〃	土師器 甕	23.1			灰黄褐色	外面・上胴部、粗目々々状痕。口縁下ヨコナデ。	摩 1/11
〃	452	〃	瓦器 椀			4.8	灰色	外面・下部にナデ状痕。押圧痕。内面・平滑（摩耗）。畳付は僅かに凹面。和泉型。	摩。1/2
〃	453	〃	黒色 椀	14.0	5.5	7.9	にぶい黄橙色 胎土良	内黒。在地産。	全摩 1/2
〃	454	〃	〃				にぶい橙色	内黒。搬入品。薄手。	摩
〃	455	〃	黒色				黒色	内面・密ミガキ。口縁に弱い凹線。外面・押圧痕。搬入品。	
〃	456	〃	緑釉			9.0	胎土選	外底回転ケズリ。高台は貼付とみられる。内底の段は螺旋状。素地須恵質。	弱摩 1/3
〃	457	〃	緑釉 皿	13.3			明オリーブ灰 色 断面灰白	素地須恵質。外面・密ミガキ。内面の暗文風痕跡。薄い釉。	1/9
〃	458	〃	緑釉				明オリーブ灰 色	素地須恵質	口縁片
〃	459	〃	灰釉			6.4	内面オリーブ 黄色 断面灰白色 胎土良	底部内外面・丁寧な回転ナデにより平滑。露胎。内底の畳付直上に重ね焼痕。	1/3

IV-4区出土遺物（石器）観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm/g)				石材	特徴	備考
				全長	全幅	全厚	重量			
IV -87	139	ST1	石鏃	2.8	1.4	0.35	1.48	サヌカイト		完
〃	140	ST1 1層	砥石	残長 6.6	残幅 6.1	残厚 2.0			主面に研磨溝。二面平滑，細かい擦痕。	
IV -89	150	ST2	石庖丁	残長 7.2	残幅 3.4	残厚 0.7	27.2	頁岩	磨製。主面左側の破断部はやや摩耗。	
IV -92	169	SK57	〃	12.4	4.25	2.2	140	頁岩	両面に自然面残る	完
IV -93	177	SK72	石鏃	2.4	2.0	0.3	1.50	サヌカイト		ほぼ完
IV -94	191	SK76 IV層	石庖丁	9.1	5.4	1.0	(64.4)	頁岩か	打製。両面から穿孔。	一隅欠 損
IV -97	221	SK77	叩石	17.9	残幅 6.0	3.5	残重 538	頁岩	一端に強い敲打痕。一端や各部に弱い敲打痕群。頁岩河 原石，剝離。	一部欠 損
〃	222	〃	石庖丁	11.9	4.5	0.75	70.4	頁岩	未調整面残る	
IV -127	223	SX2	石錘	11.6	4.7	3.8	351	-	河原石を敲打加工	完
IV -101	239	集中1	台石	29.9	25.9	5.2	6250	砂岩	裏面の敲打痕は1ヶ所	
〃	240	〃	剥片	7.6	7.0	1.15	66.9	サヌカイト		
〃	242	〃	石鏃	5.3	1.85		3.89			
〃	243	〃	石鏃	残長 3.05	1.85	0.6	2.87	サヌカイト	先端欠	
IV -104	276	SR3	石庖丁	残長 6.7	4.3	0.7		灰赤色	磨製。変成岩中の質，色ともに均質な部分。	2/3
IV -122	373	SK3	台石	残長 31.45	残幅 25.7	残厚 7.5	6150	砂岩	台面に弱い敲打痕，摩滅。周縁の一部に打痕。斜めに割損。	
IV -128	432	P391	石斧	(10.4)	3.6	2.7	残量 (2/2)	頁岩か	全面磨製。裏面のみに未磨製部分を残す。石材は層状構 理をもつ。	基部欠
〃	437	P573	石庖丁	10.8	4.5	1.2	70.6		裏面に打割時の粗面残す	完

IV-4区出土遺物（鉄器）観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm/g)				特徴	備考
				全長	全幅	全厚	重量		
IV -92	170	SK57	鉄鏃	残長 6.1	1.8	0.5 0.6	(6.3)	先端欠損か。	
IV -101	241	集中1	鉄製品	4.0	7.3	1.4	64.1	両面に付着物。大きな錆膨れ。	

IV-8区出土遺物（土製品）観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴	備考
				口径	器高	底径			
IV -131	460	SK2	弥生 壺	22.4			橙色 焼成やや不良	貼付口縁端面に浮文。頸部突帯に指ナデか。	全摩 1/4
〃	461	〃	〃	22.0	44.4	7.6	暗灰色	外面ミガキ。貼付口縁。一ヶ所に穿孔。底剥離。胴径28.3。	摩 2/3
〃	462	〃	弥生 甕	13.4	胴径 16.5		橙色	外・全面ハケ（口縁部は布等を用いてヨコナデか）、全面ヌケ。	摩 1/5
IV -132	463	SK6	弥生 壺	17.0			橙色 焼成やや良	口縁端面凹線。頸部2段の列点文。内面・横方向の板ナデ状痕。	1/1
〃	464	〃	〃	20.1			浅黄橙色	貼付口縁に斜格子文。頸下部・凹線、断面台形の突帯に規則的な刻目。内面・刻線の性格は不明。	5/6 S X 4 と接合
〃	465	〃	〃	14.0			橙色	凹線文	
〃	466	〃	〃	16.7	器高 40.0 胴径 22.	底径 8.1	にぶい黄橙色	外・ハケ、下部ヌケ。	摩 胴の一 部のみ 欠
〃	467	〃	弥生 鉢	23.7	器高 19.4 胴径 23.8	8.4	にぶい黄橙色	外面粗目のハケ、圧痕。	摩 完
〃	468	〃	〃	10.9	10.6	6.1	にぶい黄橙色	外ハケ	底 1/1
〃	469	〃	弥生 高杯	18.8			にぶい褐色	外面・口縁に凹線。ミガキ。内底・放射状ミガキ。	1/5
〃	470	〃	〃	18.8	14.1	9.3	にぶい黄橙色	閉塞部剥離	全摩 準完
IV -133	472	〃	弥生 甕	13.6			暗灰黄色	頸外面ハケ	摩 1/1
〃	473	〃	〃	17.4			灰黄褐色 焼成やや良	口縁と頸下部に刻目・列点文	摩 1/3
〃	474	〃	〃	14.1			にぶい黄橙色	内外面ナデ痕。内面・板ナデ状痕。胴外ヌケ。	摩 1/4
〃	475	〃	〃	20.8			褐灰色 内面にぶい褐色 焼成良	雲母微細片等含む搬入品。小円けも含。薄手硬質。外面・細目のハケ。屈曲部の上下ヨコナデ。内面・ナデ仕上。	1/9
〃	476	〃	〃	20.6			浅黄橙色	口縁端面に凹線3条	1/5
〃	477	〃	〃	18.8	器高 26.2 胴径 18.0	6.3	にぶい橙色	外面ハケ。貼付口縁下を細目のハケ状原体で菊化状に押圧。胴外面・ヌケ。	摩 準完
〃	478	SK6 Gr3	〃		胴径 18.1	6.6	にぶい橙色	外ハケ、胴部は横位。	摩 口縁 のみ欠
〃	479	SK6	〃	16.4	器高 31.3 胴径 23.2	6.9	橙色 胎土砂粒多	外面・ハケ。上・下部はナデ仕上。口縁ヨコナデ。	胴の一 部のみ 欠

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特 徴	備 考
				口径	器高	底径			
IV -133	480	SK6 Gr3	弥生 甕		胴径 16.4	5.9	暗灰黄色	外面・細目のワ。外底・ケズリとワ。外ヌケ。	摩 胴 1/2
〃	481	SK6	〃	19.6	器高 34.1 胴径 21.3	7.2	にぶい黄橙色	外面・ワ。底部と頸部以外がヌケ。	完
〃	482	〃	〃	19.4	器高 32.3 胴径 21.8	6.9	にぶい橙色	外面・タキ後ナデ仕上げ。口縁ナデ後、細目ワ。後期前葉。	内摩 準完
IV -134	483	SD2	〃		胴径 14.9	2.7	にぶい黄橙色	外面タキ、下部ワ。内面ワ痕。	摩 3/4
〃	484	〃		28.8			橙色		摩著 1/9
〃	485	〃	弥生 鉢	14.0	6.8	3.1	橙色	内面・細目のワ。外面・タキ又はワ後、ナデ仕上。	摩 底 1/1
〃	486	〃	弥生 高杯	14.8			橙色		1/10
〃	487	〃	土師質 椀			6.7	浅黄橙色	平高台。糸切。内面平滑。内底にラセン痕残る。	摩 1/1
〃	488	〃	瓦器 椀	16.2			黒褐色 内面橙色 断面にぶい 橙色	2次被熱か	全摩著 1/5
IV -135	489	SX1	弥生 壺	26.8			にぶい黄橙色	内外ワ。列点文。口縁端面4条の凹線。浮文(剥離)。	摩 1/4
〃	490	〃	〃	7.3	胴径 17.2		にぶい橙色	内外ワ。底部分割ミガキ。口縁に8条の凹線。	底のみ 欠
〃	491	〃	弥生	11.2	15.4	5.3	にぶい橙色	手捏ね成形。薄手。チャート角粒主体に、若干の砂岩円粒含。	準完
〃	492	SX4	弥生 壺	12.9			明黄褐色	頸部に深い凹線。内外ナデ・押圧痕。	摩 1/1
〃	493	〃	弥生 甕		胴径 15.6		にぶい黄橙色 断面暗灰色 胎土粗粒多 焼成良	櫛描。微隆起帯。浮文。高知平野西部以西の胎土。	1/4
〃	494	〃	〃	14.1	胴径 16.3		にぶい黄橙色 胎土円粒多含	外面・オキ、ワ痕。ヌケ。内面ケズリ。	摩 4/5
〃	495	〃	弥生 高杯	22.4	15.9	9.3	橙色 胎土砂粒多	杯部内外ミガキ。内面放射状。脚内面ケズリ。裾部凹線文。	摩 杯 1/2 脚 1/1
IV -136	496	SX5	弥生 壺		胴径 29.8		橙色	外面・ワ、円形浮文。内面・ケズリ後ナデ。	外摩 頸 1/1
〃	497	〃	弥生 甕	13.5			にぶい黄橙色 胎土やや良	貼付口縁に列点。頸外にワ描縦線。器壁薄いために内面に影響。	1/8
〃	498	〃	弥生 甕	21.8			にぶい橙色	貼付口縁に属す。粗目のワ。	1/8
〃	499	〃	〃	17.2			にぶい黄橙色 胎土砂粒多 焼成やや良	ヌケ	1/2

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴	備考
				口径	器高	底径			
IV -136	500	SX5	弥生				にぶい黄褐色		
〃	501	〃	弥生 甕	21.6			浅黄色 断面 オリーブ黒色 胎土砂粒多	口縁下に刻目。微隆起帯。	摩 2/5
〃	502	〃	弥生 鉢	18.0	11.2	6.1	橙色 胎土砂粒多	押圧痕。被熱。	摩著 完
IV -141	504	P583	土師質 皿	7.9	1.4	5.0	にぶい橙色	糸切。口縁1ヶ所被熱変色。	摩 口縁 1点欠
〃	505	〃	〃	8.4	2.0	5.2	灰白色	糸切	口縁一 部のみ 欠
〃	506	〃	瓦器 椀	13.4			灰白色 焼成不良	口縁内に沈線。楠葉型。赤礫, 雲母片含む。	摩著 1/6
〃	507	〃	〃	14.2			黒色 断面 にぶい黄橙色	外面・指圧痕, 口縁に巾広のヨコナデ。内面・平滑, 摩耗。和泉型。	内摩 1/6
IV -143	508	P12	土師質 杯	13.2	4.7	6.6	浅黄橙色	内面滑。糸切。	摩 1/3
IV -145	509	P3	土師器 杯			5.8	にぶい黄橙色	内底に回転成形痕	摩 1/2
〃	510	P11	土師質 皿	8.2	1.5	5.0	灰黄色	糸切	準完
〃	511	〃	〃	8.2	1.3	5.1	にぶい黄橙色	糸切。外面スリか。	1/3
〃	512	〃	〃	9.4	1.2	5.6	浅黄橙色	糸切。外面の一部スリか。	1/4
〃	513	〃	〃	7.8	1.2	4.6	内面にぶい 橙色	内底に回転成形痕。糸切。外底スリ。	底 1/1
〃	514	〃	〃	8.4	1.3	4.6	にぶい橙色	糸切	底 1/1
〃	515	〃	土師質 椀	13.8	4.6	5.5	にぶい橙色 内面にぶい 黄橙色	内面コゲリ痕。滑。平高台。糸切。被熱赤・黒変。Ⅲ-3期。	全摩 2/3
〃	516	〃	〃			5.8	にぶい黄橙色	平高台。内面滑。Ⅲ-3期。	摩 1/5
〃	517	P14	須恵器 椀			5.2	灰白色 焼成不良	内面・ミガキ。外底回転ケズリ。下部厚手。	内摩 1/2
〃	518	〃	須恵器 壺		胴径 10.3	7.4	灰色 焼成良	内面に黒色付着物。外面立上り部をヨコナデ。	底摩 1/2
〃	519	P77	弥生 甕	16.0			にぶい赤褐色	花崗岩風化レキと雲母を多含する搬入品。薄手。外面・整ったため。内面ケズリ+ナデか。	内摩 1/4
〃	520	〃	〃	17.1			にぶい橙色	口縁ヨコナデ。端面の仕上げ。スリ。	摩 1/4

IV-8区出土遺物（石器）観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm / g)				石材	特徴	備考
				全長	全幅	全厚	重量			
IV -132	471	SK6 Gr1	石包丁	10.9	4.9	0.7	61.3	頁岩製か	部分的に研磨	
IV -136	503	SX5	石斧 未製品	21.2	9.1	5.7	1897	御荷鉾緑色岩	敲打痕	

14. IV-5区

1. 調査区の概要

市道の北側に位置する。西は水路と農道を挟んでⅢ-1区、東は畦畔を挟んでⅣ-6区に接している。弥生時代中期末の竪穴建物10軒、土坑30基、後期の溝1条、古代と考えられる溝1条を検出した。調査区北辺は耕作土直下が地山面となっているので基本層序は調査区の南壁で観察した。

2. 基本層序(南壁) (図Ⅳ-146)

第Ⅰ層：現耕作土で層厚は20～30cmである。

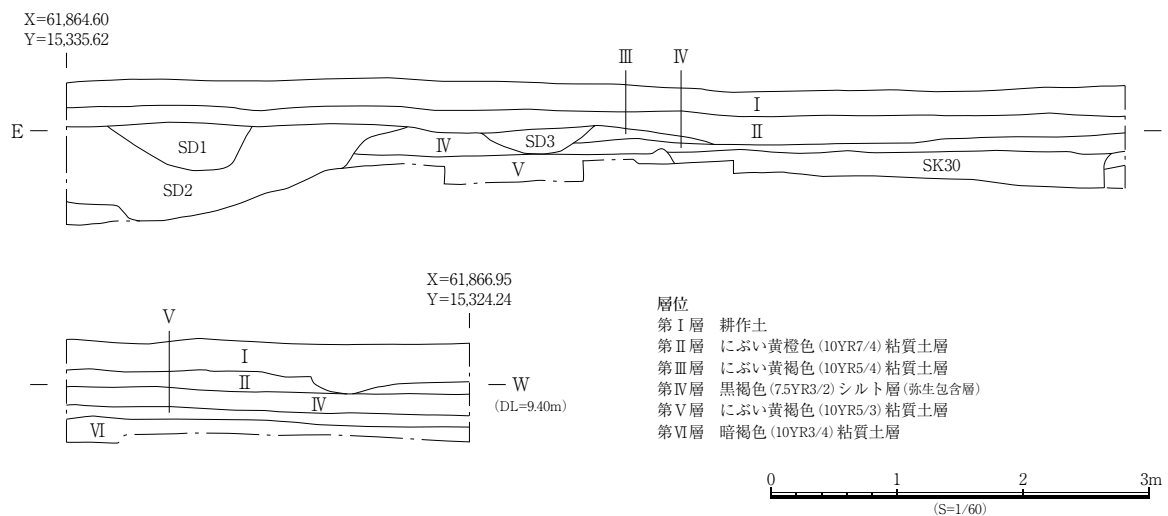
第Ⅱ層：にぶい黄橙色(10YR7/4)粘質土で層厚は10～20cmである。

第Ⅲ層：にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土で極一部にのみ堆積が見られる。

第Ⅳ層：黒褐色(7.5YR3/2)シルト層で層厚10～20cmを測る。弥生時代中期を中心とする遺物包含層で弥生時代後期及び古代の遺構検出面である。

第Ⅴ層：にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土で層厚は10～20cmを測る。弥生時代中期の遺構検出面であり地山を形成している。

第Ⅵ層：暗褐色(10YR3/4)粘質土層で無遺物層である。



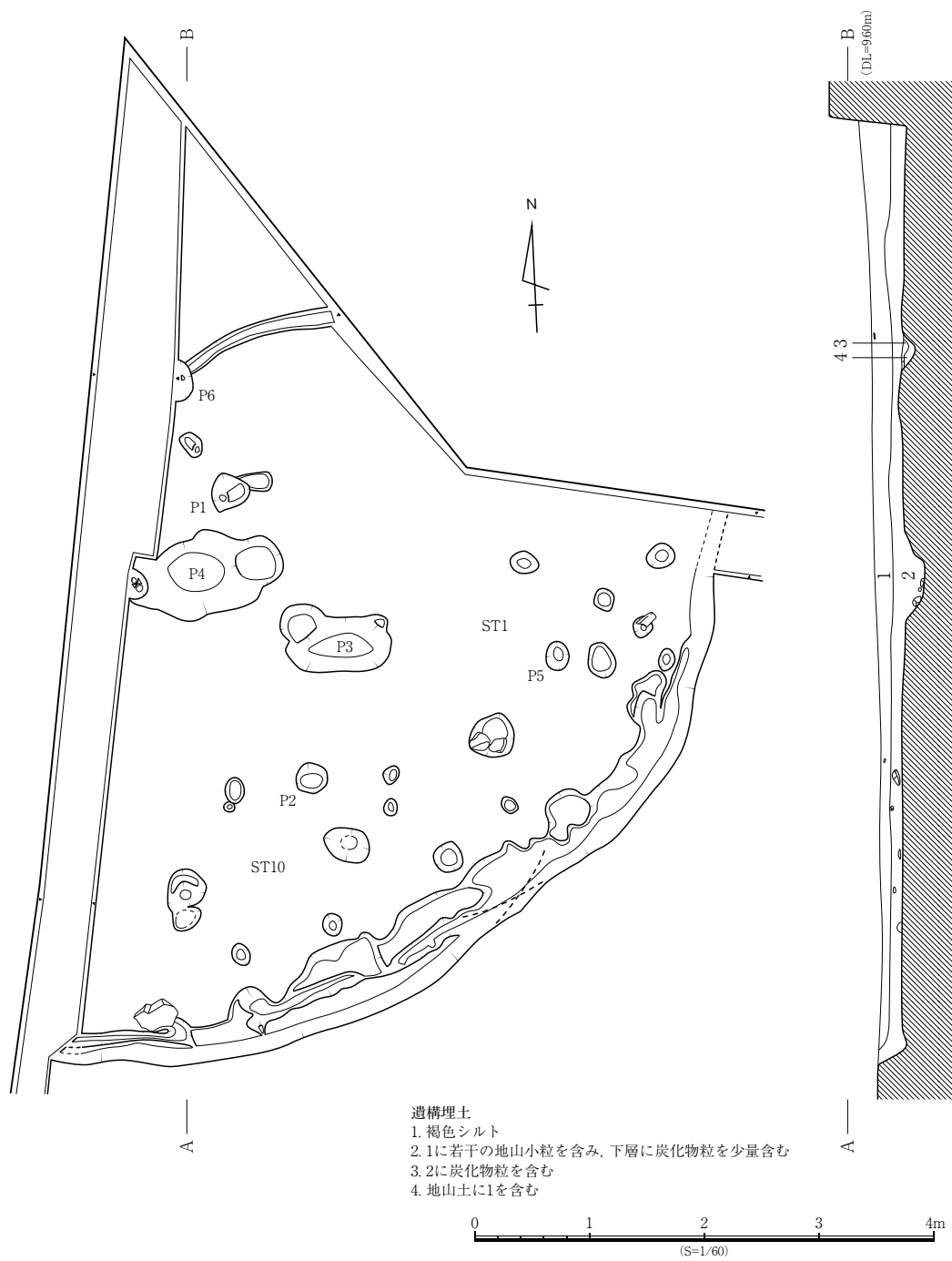
図Ⅳ-146 調査区南壁基本層序

3. 検出遺構と遺物

(1) 竪穴建物

ST1 (図Ⅳ-147・148)

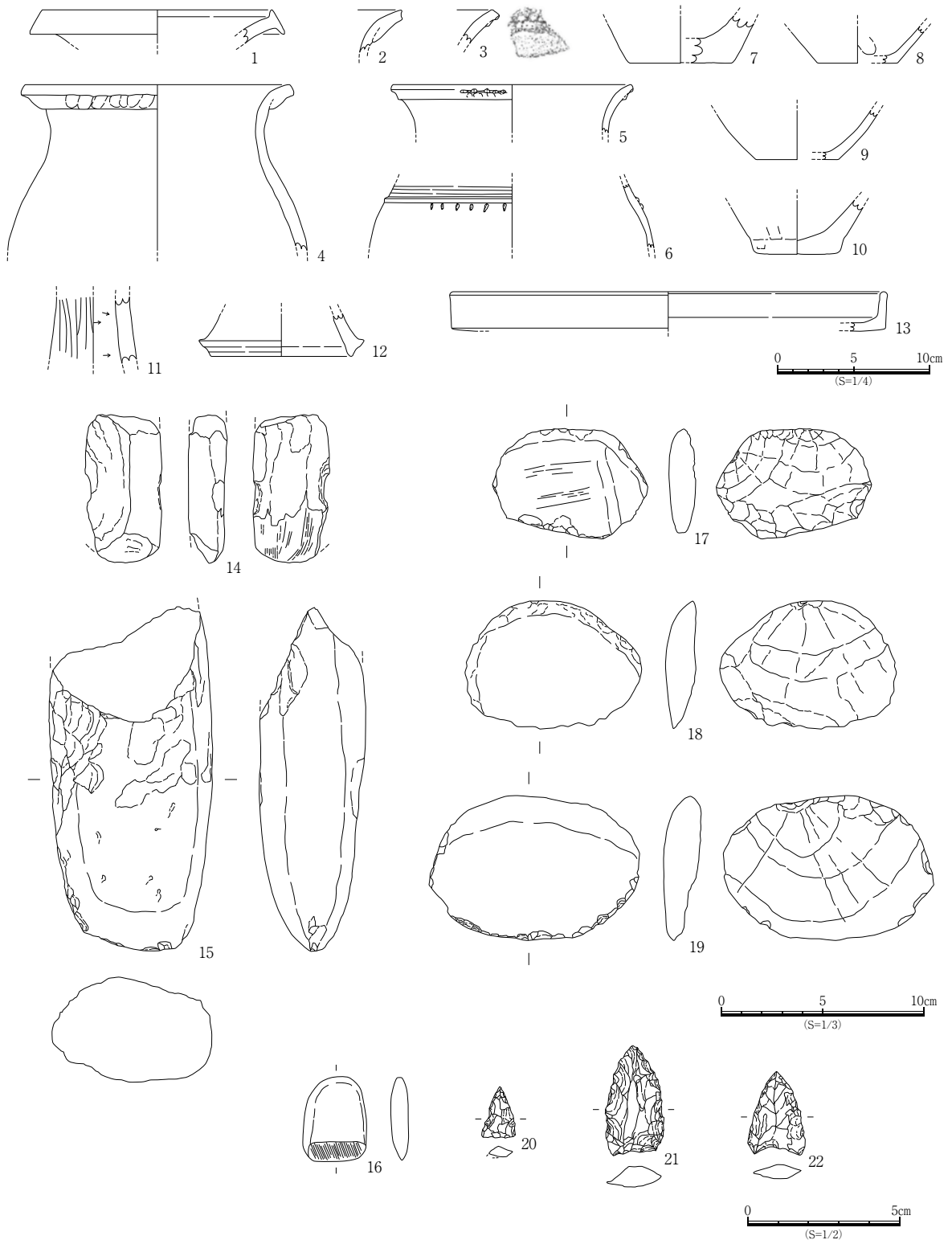
調査区の西北隅に位置する。1基の大型建物として検出したが完掘後に2軒の重複であることが明らかとなった。東側の建物をST1とし西側のものをST10とする。両者の先後関係は不明である。ST1の中央ピットはP3を比定することができる。中央ピットとの位置関係などからST1は径6m前後、北隅の弧状の溝はST1に対応する壁溝である。ST1の面積は28㎡、壁の立ち上がりは20cm前後である。埋土は1層：褐色シルト、2層：1層に地山の黄橙色シルトがブロック状に入り下位には炭化



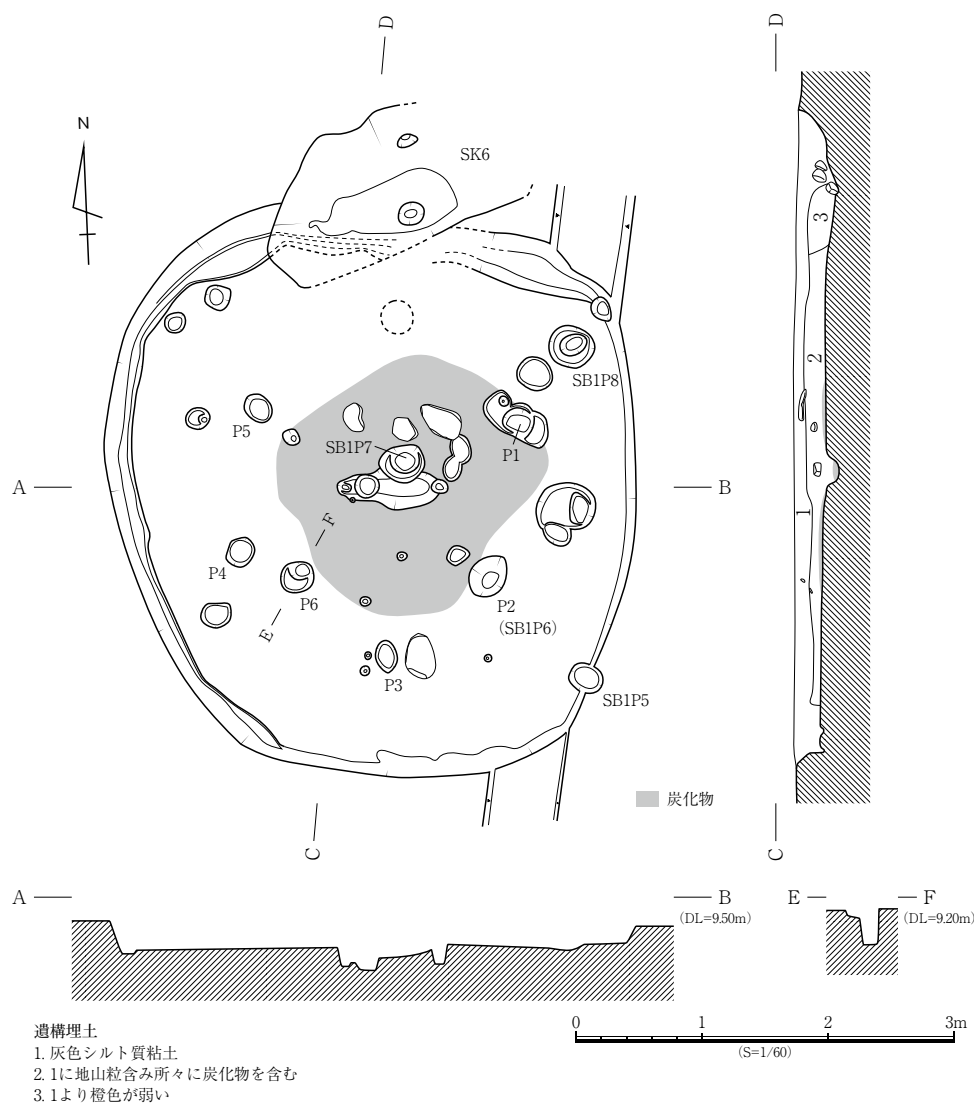
図IV-147 ST1・10平面図・断面図

物が含まれる。中央ピットは楕円形を呈し長軸 0.95m，短軸 0.5m，深さ 17 cmで，主軸を東西方向に有しN-3°-Wである。

遺物は全てST1として取り上げている。ほとんどが埋土からの出土で壺底部の9のみが床面出土である。石器の出土が多いのが特徴で，土器は器表の磨耗が激しく器面調整を観察できないものが多い。1は口縁部を上下に拡張した広口壺で凹線文の有無は磨耗のため確認できない。2～6は南四

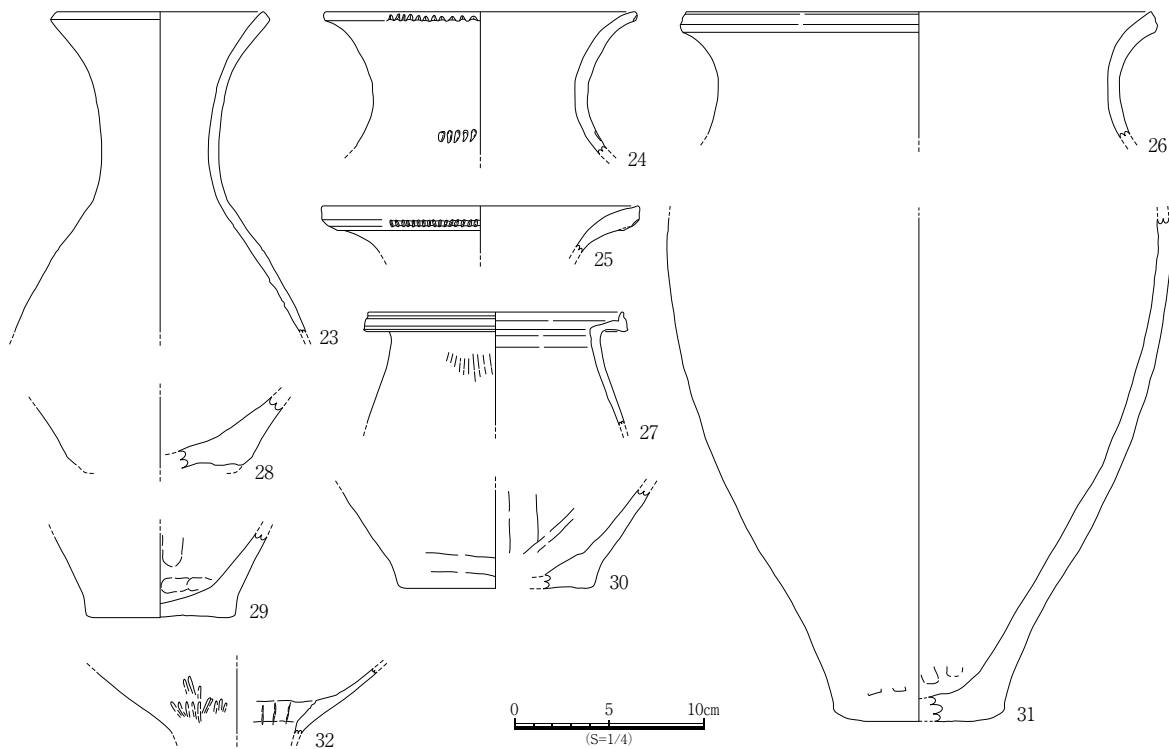


图IV-148 ST1 遗物实测图



図IV-149 ST2平面図・断面図・エレベーション図

国型甕である。12は高杯脚部で端部に2条の凹線が施される。11と13は同一の胎土を有し器台あるいは高杯の脚部と皿部である。14と15は太形蛤刃石斧である。前者は刃部片で結晶片岩製である。後者は基部を欠いているが現存長17cm、1,100g以上の大型品である。刃は斜めを呈し後側縁側が大きく磨耗している。石材は御荷鉾緑色岩である。16は鑿状を呈する扁平片刃石斧である。扁平な自然礫を加工している。石材は頁岩である。17～19は砂岩の円礫を打欠いた刃器である。20～22は石鏃である。20は0.4gと超小型である。21は肉厚に作られ4.8gを測る。22は1.7gである。すべてサヌカイト製である。床面や埋土、壁溝内からサヌカイトのチップが17点、59.9gが出土している。最も大きな破片でも13.2gである。ST1出土の土器は中期末に属するものであり明確に後期とするものはない。中期末の中で推移したものと考えられる。



図IV-150 ST2遺物実測図

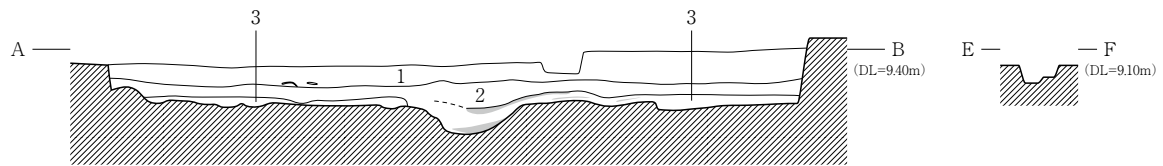
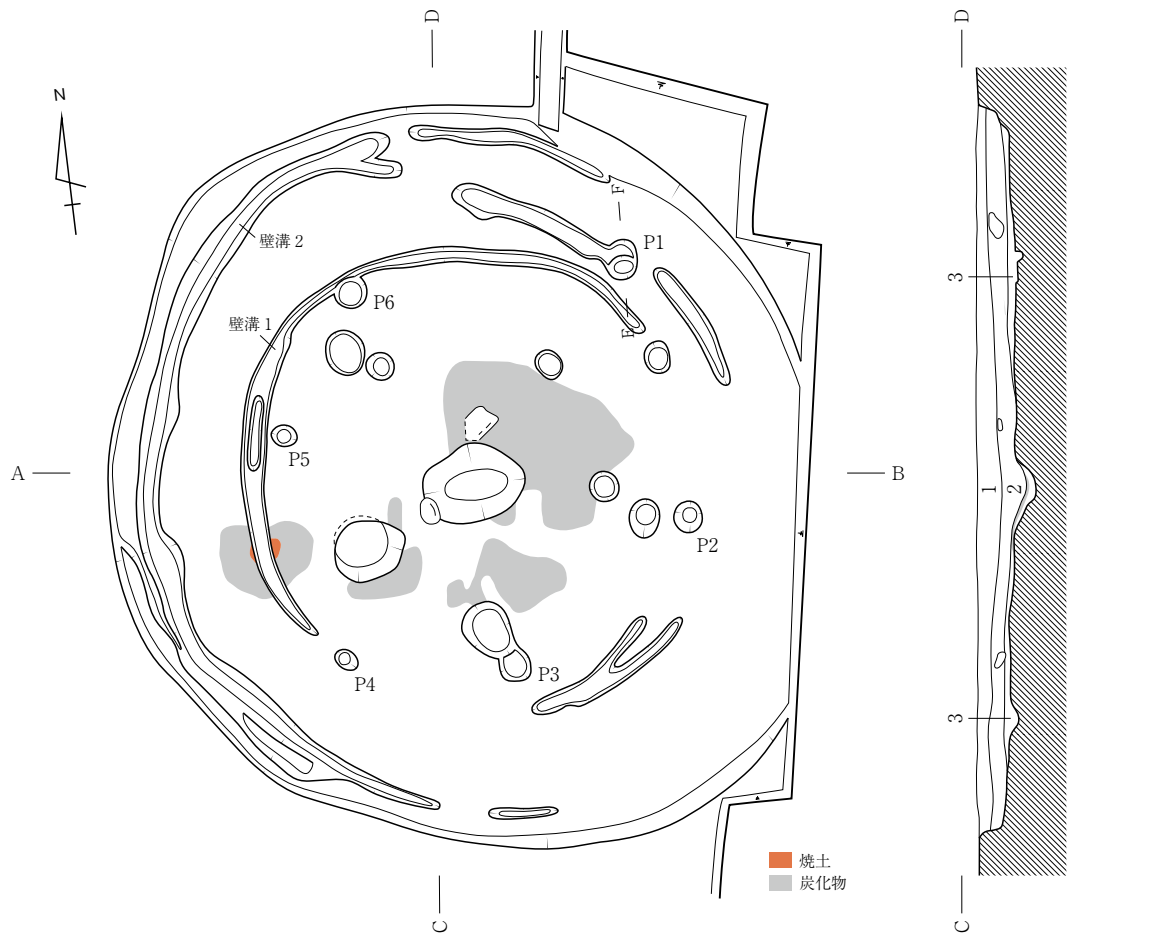
ST2 (図IV-149・150)

調査区西部に位置する。やや不整な隅丸方形を呈し、長軸 4.7m、短軸 4.2m、深さは 20 cm 前後、面積は約 16 m² である。北部を SK6 に、東部は SB1 に切られている。埋土は 1 層：橙色を帯びた灰色シルト質粘土、2 層：1 層に地山土をブロック状に含み炭化物も含む。3 層：橙色が弱い灰色シルト質粘土である。中央ピットは長楕円形を呈し軸方向はほぼ東西を示している。長軸 0.8m、短軸 0.35m、深さ 10 cm である。北壁を掘立柱建物の P7 に切れ、両端部もピットに切られている。支柱穴は P1、P2、P6、P5 の 4 穴と検出できなかったが床面北部に一穴を求め 5 柱としたい。各柱穴間の距離は 1.3 ~ 1.5m である。柱穴の掘り方は P5 が径 25 cm、他は 40 cm 前後である。P6 では径 20 cm 程の柱痕跡を確認することができた。壁溝は西部と北部に設けられている。壁溝の深さは 5 cm 未満と浅い。

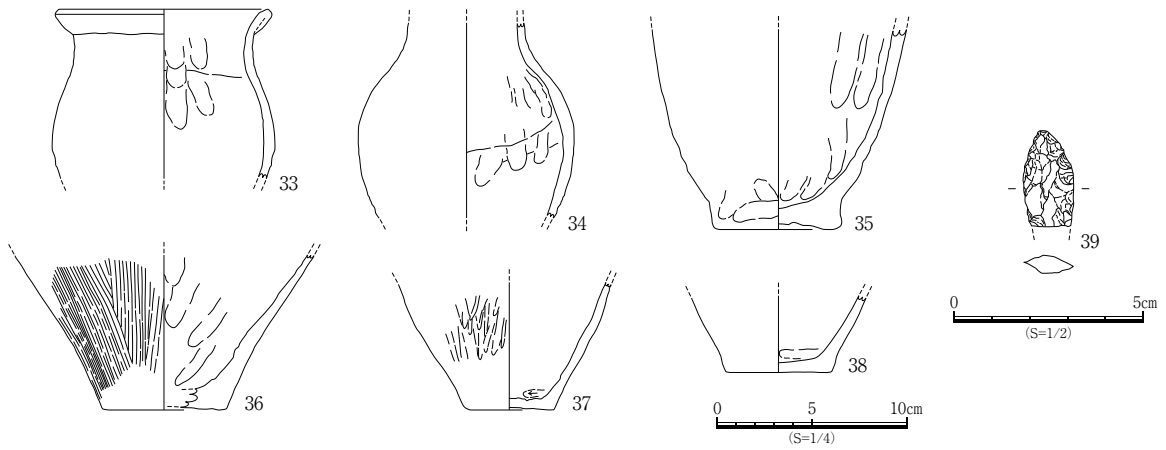
遺物は埋土出土である。壺(23~26・28・30・31)、甕(27・29)、高杯(32)が出土している。23は長頸壺、25は口縁下端に刻みを施し微隆起帯を貼付している。27は上方向に拡張した口縁部に2条の凹線文を巡らしている。32は充填部が剥離欠落している。ST2は中期末に属する。

ST3 (図IV-151)

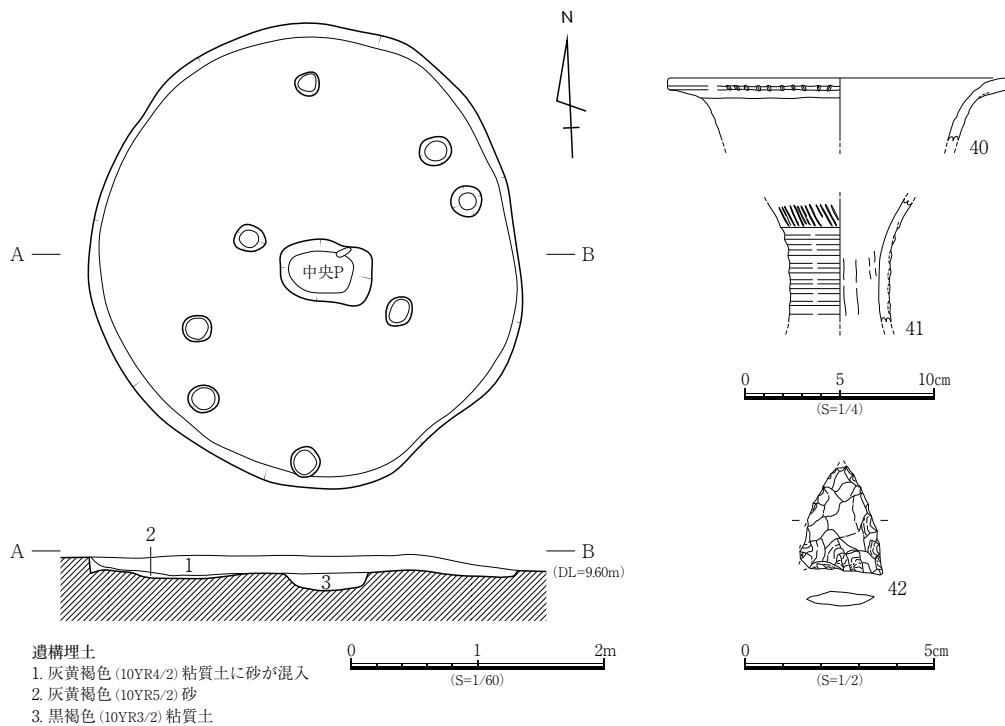
調査区東北隅に位置する。東の一部が調査区外に出ているがほぼ全体を捉えることができる。円形プランを呈し径 6m、深さ 30cm、面積は 28 m² である。埋土は 1 層：褐色シルト、2 層：にぶい黄褐色シルトで所々炭化物の堆積が見られる。3 層：暗褐色シルトに地山のにぶい黄橙色シルトがラミナ状に入っている。中央ピットは楕円形を呈し軸方向は N-3°-W を示している。長軸 0.82m、短軸 0.6m、深さ 23cm で、床には炭化物の薄い堆積が見られる。壁溝が複数存在しており 2~3 回の拡張が考えられる。最初の建物は壁溝 1 に対応するものと考えられ径 3.8m の建物が復元される。次いで 30 cm 程拡



- 遺構埋土
1. 褐色 (10YR4/4) シルト
 2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト
 3. 暗褐色 (10YR3/3) シルトににぶい黄橙色 (10YR7/4) シルトがラミナ状に入る



図IV-151 ST3平面図・断面図・エレベーション図・遺物実測図



図IV-152 ST4平面図・断面図・遺物実測図

張され、最終的には壁溝2に対応する壁面を持つ直径6mの竪穴建物となったものと考えられる。最終的な建物の支柱穴はP1～P6が想定されるが間隔は1.4～2.2mとかなり不揃いである。柱穴規模は径20～25cm、深さ13～20cmである。中央ピット周辺の床には炭化物の広がりが見られ焼土も少量ながら認められる。床面には拳～人頭大の河原石がかなり露呈している。

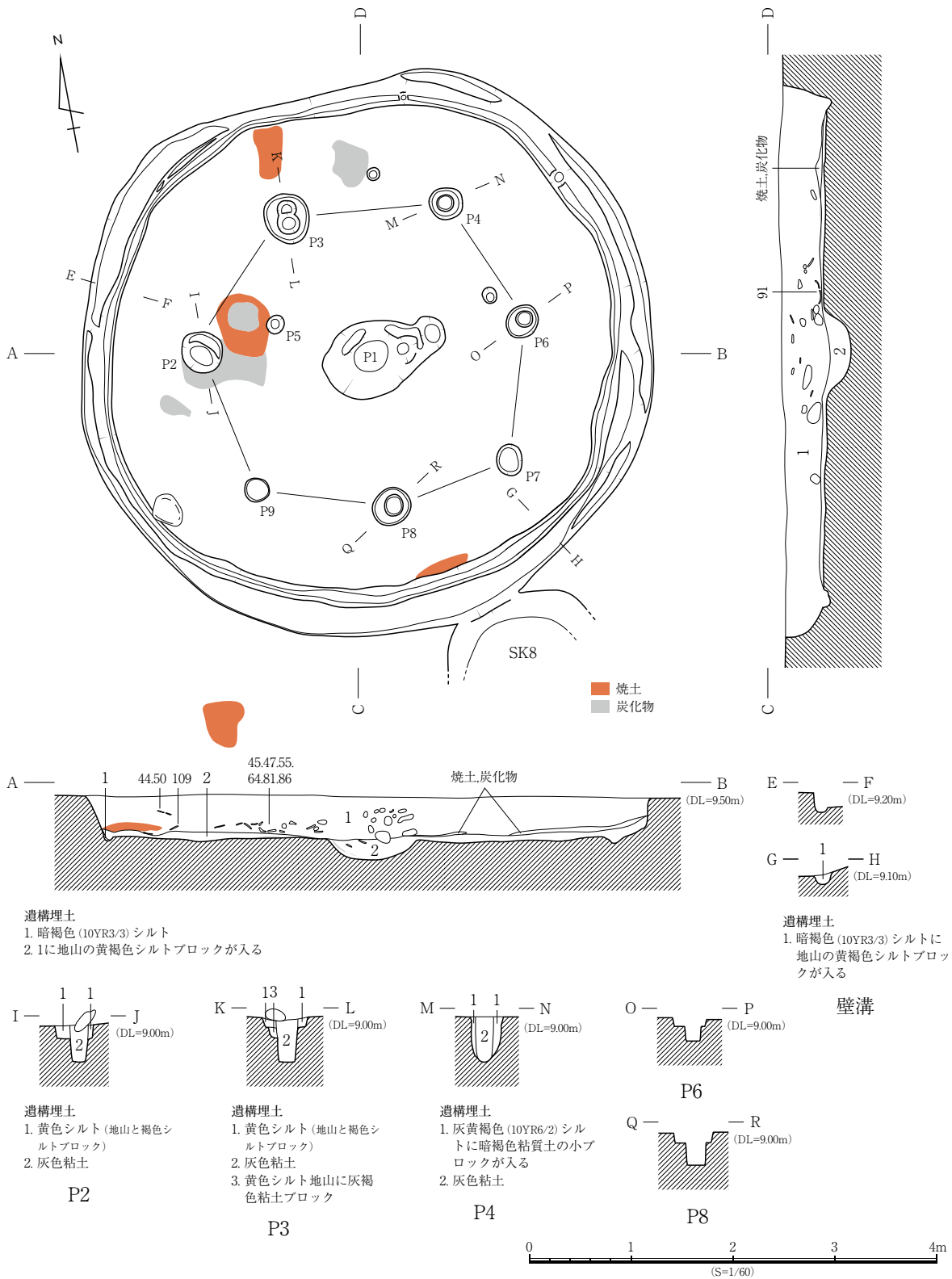
遺物は総じて少ない。33は南四国型甕, 34は壺胴部, 35・36は壺底部, 37・38は甕底部である。石器では石鏃(39)の他、図示できなかったが砂岩の小円礫が多く出土している。石鏃はサヌカイト製で床面から出土している。34・37・38は床面, 他は埋土出土である。図示し得なかったが凹線文口縁部の細片, 中期中葉の指標となる土器の細片が埋土中より、内面ヘラケズリを有する細片が壁溝2から出土している。ST3の最終段階は中期末に属する。

ST4 (図IV-152)

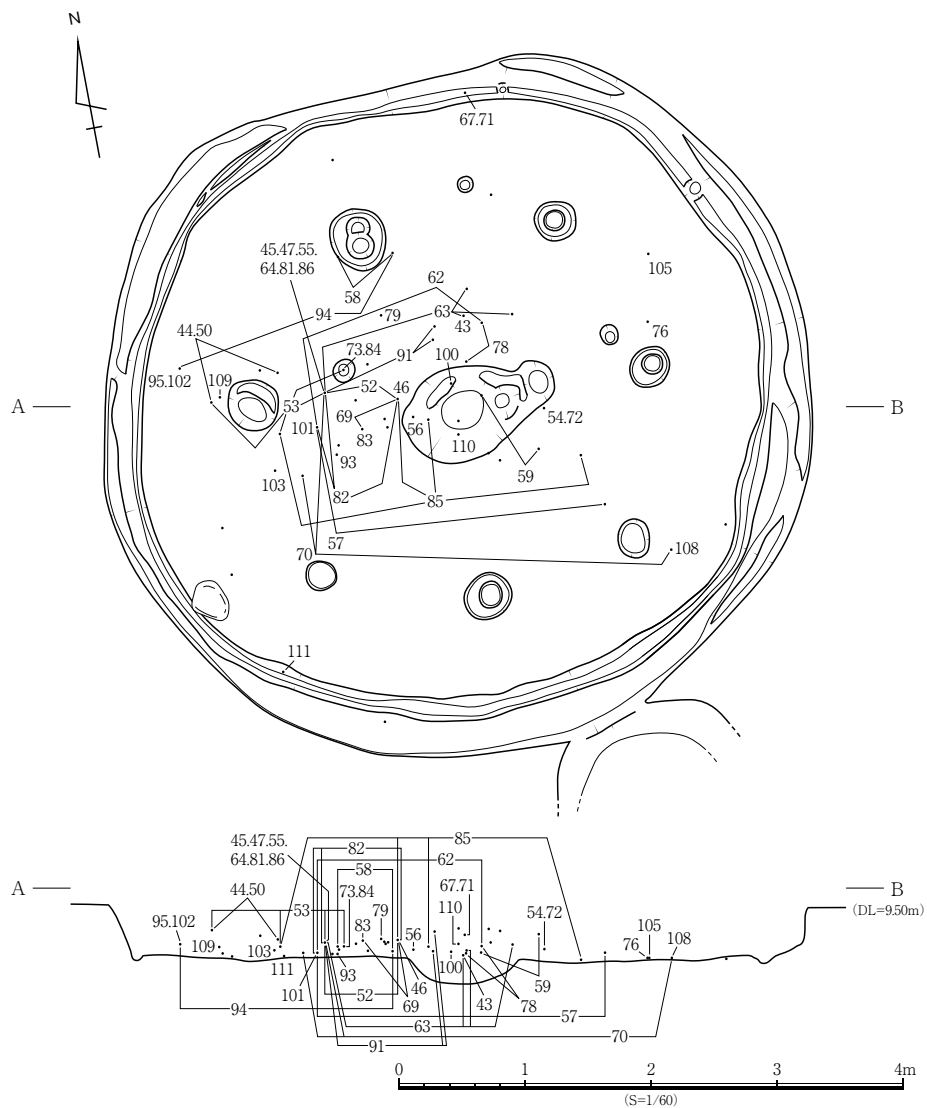
調査区北部に位置する。平面形は円形を呈し直径3.4m、深さは残りの良い部分で15cm、面積は9㎡である。中央ピットは隅丸長方形を呈し長軸0.75m、短軸0.5m、深さ12cmである。軸方向はN-5°-Eである。壁溝は認められない。床面には8個のピットが存在するが支柱穴は比定するのは難しい。埋土は1層：灰黄褐色粘質土に砂が混入, 2層：灰黄褐色砂, 3層：黒褐色粘質土である。遺物は僅少で図示できたのは3点である。40は広口壺, 41は細頸壺頸部で口縁部外面に列点文, 頸部には微隆起帯を6条まで確認することができる。42はサヌカイト石鏃である。内面ヘラケズリや凹線文は全く認められない。ST4は中期中葉の可能性がある。

ST5 (図IV-153～159)

調査区東寄りに位置する。平面形は円形を呈し直径5.7m、深さは残りの良い北部で50cm、他の部



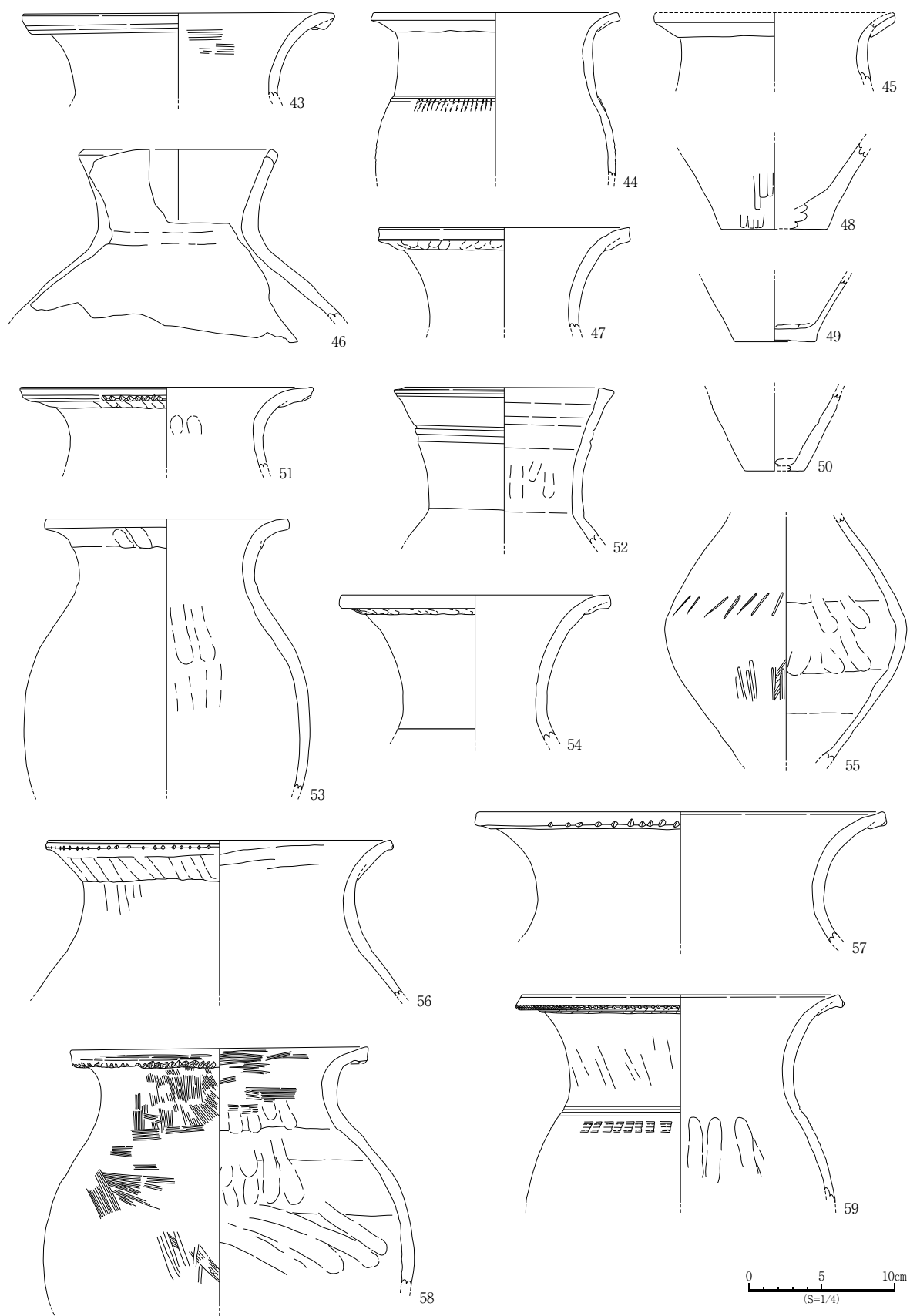
図IV-153 ST5平面図・断面図・エレベーション図



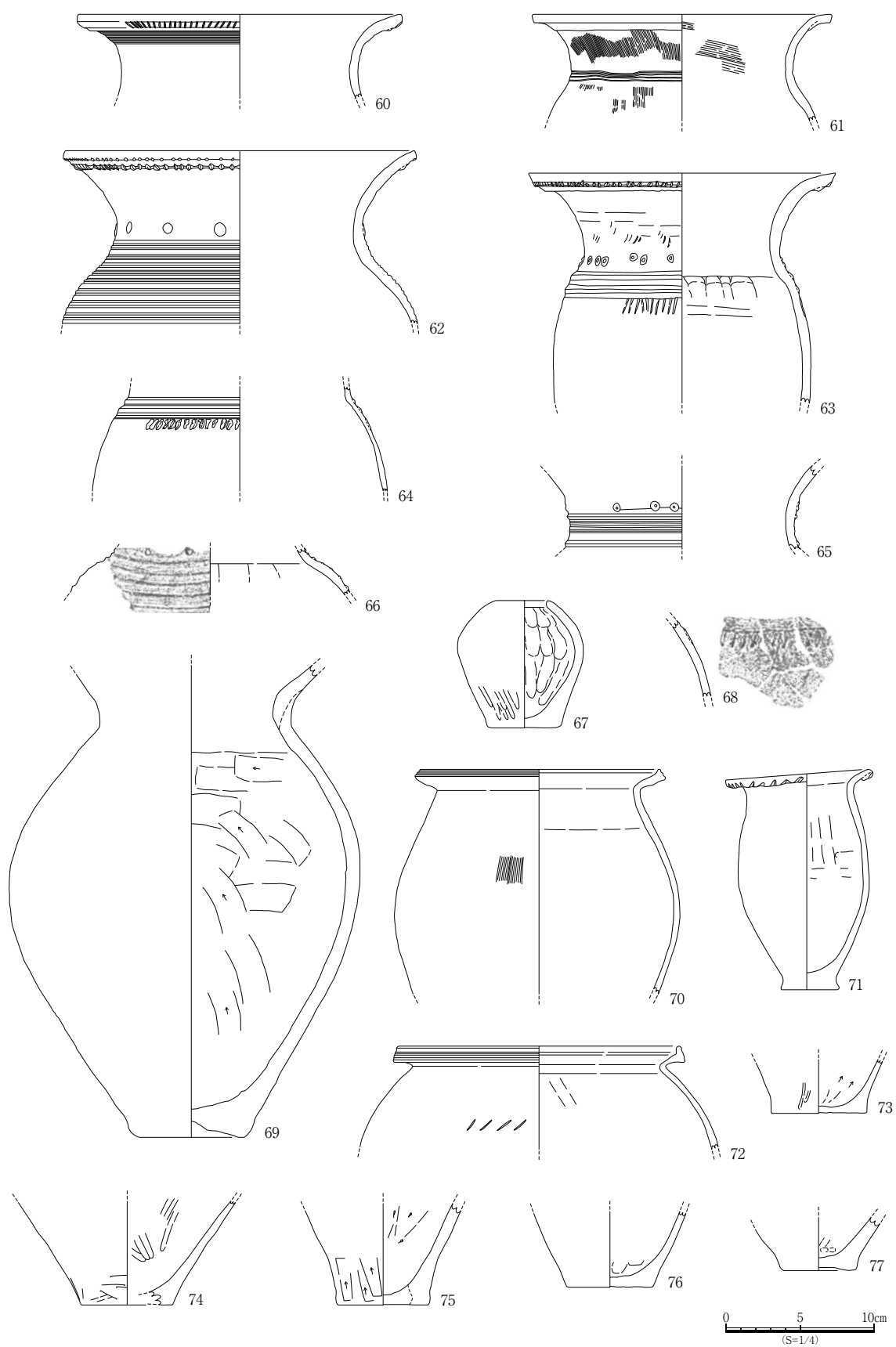
図IV-154 ST5出土遺物位置図

位では40cm、面積は25㎡である。壁の北西部分は細長い平場が認められるが壁の崩落痕跡である。壁溝は全周し幅15～20cm、深さ5～10cmを測る。埋土は1層：暗褐色シルト、2層：1層に地山の黄褐色シルトがブロック状に入る。1層が大半を占め後述するように大量の遺物を包含している。2層上面や床面には随所に炭化物や焼土の広がりが見られる。P1は中央ピットで楕円形状を呈し長軸1.2m、短軸0.85m、深さ30cmを測り、N-11°-Wを示している。中央ピットの埋土は2層が堆積している。

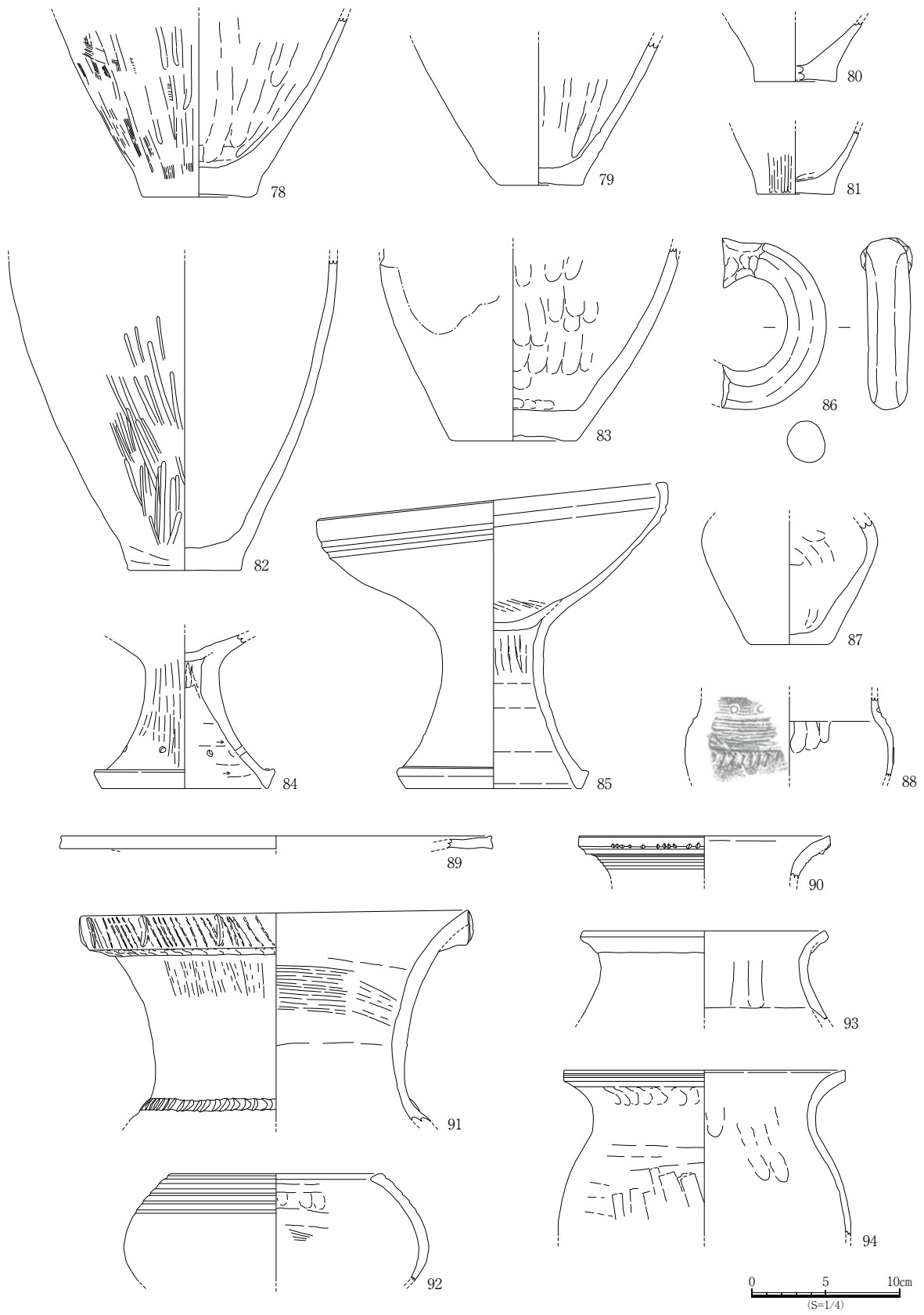
支柱穴はP2～P4、P6～P9の7つを想定することができる。掘り方は円形ないしは楕円形を呈し大きさも不揃いであるが、これらの中でP2～P4、P6、P8では図示したように柱痕跡を検出することができた。柱痕の直径は15～18cmを測る。深さはP6が最も浅く20cm、P3・4が深く48cmとばらつきが見られる。P2～P4の柱痕跡には建物埋土とは全く異なる粘性の強い灰色粘土が見られた。柱抜き取り後に意識的に別の土を用いて埋め戻しが行なわれている。さらにP2とP3にはまるで柱



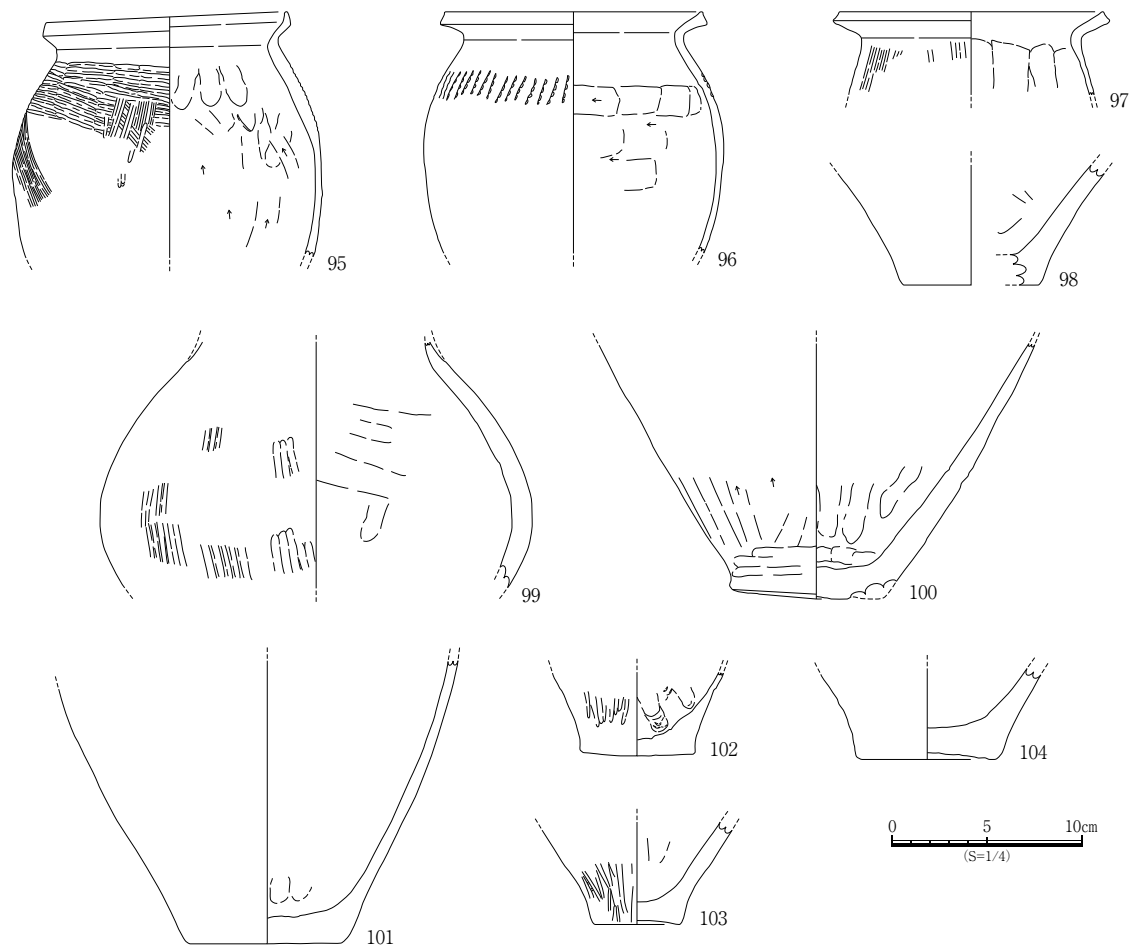
图IV-155 ST5 遺物実測図1



图IV-156 ST5遺物実測図2



图IV-157 ST5 遺物実測図3

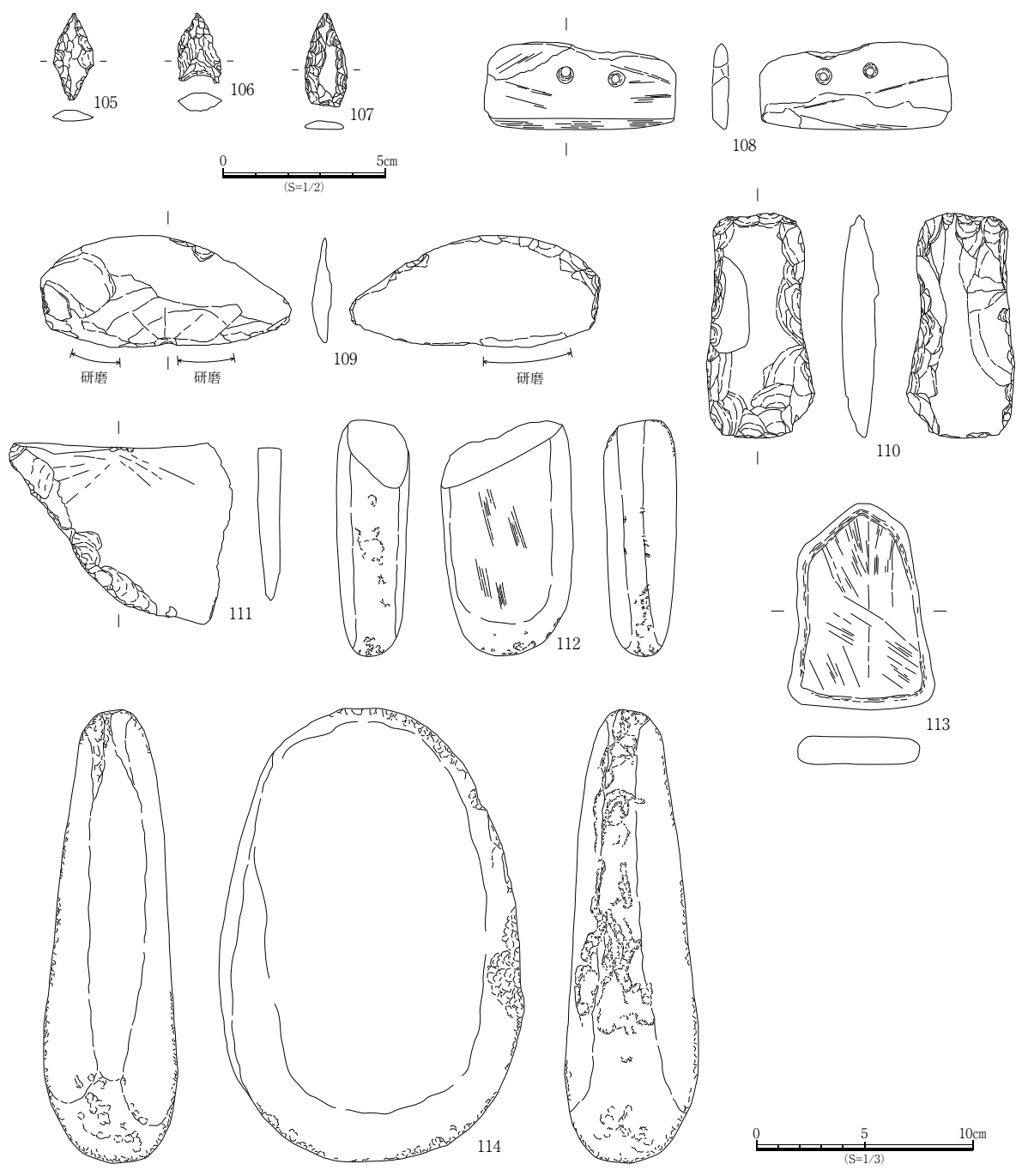


図IV-158 ST5遺物実測図4

穴を封じるように大きな河原石が置かれている。P2は25×20×10cmの河原石が図示したように斜めに入れられ、P3は20×16cmの河原石が柱痕跡の北半分を覆うように置かれていた。本例も柱抜き取りに伴う意識的な行為として理解することができよう。

ST5からは土器を主体に大量の遺物が出土している。中央部分を検出面から10cm程下げたあたりから多くの土器が出土し始め、掘り進むに従いその範囲が広がった。遺物は床面中央部で直径2.1mほどの円形の範囲に広がり、中央部が盛り上がるように半球形状の堆積をしており、下層部ほど遺物量が多くなる。基本的に2層の上面から堆積が始まるが、2層の堆積の見られないところは床面から堆積している。遺物は基本的に上層、下層、床面の三段階にわけて取り上げたが、下層と床面では接合関係にあるものも多く、中には上層、下層、床面で接合関係にあるものも見られる。一括の強い遺物群として把握することができる。

上層出土の土器は43～59である。壺(43・45～48・52～58)、甕(44・49～51・59)が出土している。壺は広口壺(43・45・47・53・54・56～58)と直口縁壺(46・52)が見られ前者は例外なく口縁部外面に粘土帯を貼付した南四国タイプである。後者の52は頸部に2条の凹線文が認められる。55は胴部「く」字状を呈しLの列点文が施されている。胎土にチャートを含んでいない。花崗岩地帯からの搬



图IV-159 ST5 遺物実測図5

入品である。甕も南四国タイプで占められている。44は頸胴部界に小突帯を貼付し列点文を施し、59は口唇部下端に刻目、頸胴部界に櫛描直線文と櫛描波状文を施している。

下層出土の土器は60～86である。壺(65・67・69・78・79・82・83)、甕(60～64・66・68・70～77・80・81)、高杯(84・85)、壺または鉢の把手(86)が出土している。壺は広口壺(65・69)と無頸壺(67)が見られる。他は胴部である。69の内面は頸部直下までヘラケズリが施されている。外面は激しく被熱赤変している。甕は伝統的な南四国タイプ(60～64・66・68・71)と「く」字状口縁の瀬戸内タイプ(70・72)が見られる。南四国タイプは口縁部外面に粘土帯や小突帯を貼付し頸部外面や上胴部に櫛描文(60・62)、小突帯や微隆起帯を貼付(63・64・66・68)、62～64・66・68には浮文を貼付する加飾された甕である。瀬戸内タイプの2例は口唇部に2条の凹線文を施し72の上胴部にはLの列点文が施される。70・73・75の内面はヘラケズリを僅かに観察することができる。72は搬入品である。高杯脚の84は、円盤充填され内面は丁寧なヘラケズリが施されている。下半には径4mmの小孔を約4cmの等間隔で6個穿っている。85は全体形が復元できる。口縁部下半に2条の凹線文が施され、円盤充填底である。84は搬入品である。把手(86)の上部は接合部から剥離している。搬入品である。

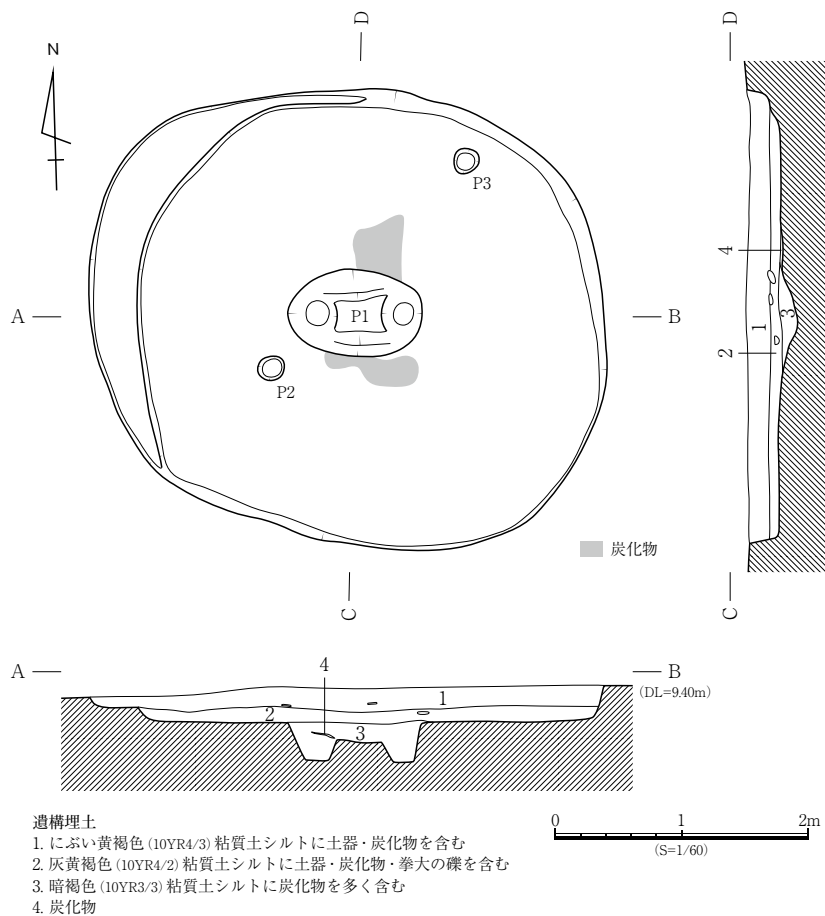
床面出土の土器は87～96、101～103である。壺(87・90～92・101)、甕(88・93～96・102・103)、高杯(89)が見られる。壺は広口壺(90・91)と無頸壺(92)が見られる。前者の90は口縁部外面に小突帯と櫛描直線文を配し、91は粘土帯を貼付した厚い口唇部に列点文と棒状浮文を施し、頸胴部界には刻目突帯を貼付している。92は外面に5条の凹線を施す。角閃石を多く含み搬入品である。甕は南四国タイプ(88・93・94)と瀬戸内タイプ(95・96)が見られる。88は加飾された甕である。95は胴部外面に右下がりの叩き目が見られる。内面上胴部まで下から上へのヘラケズリが施されている。チャートを全く含まない搬入品である。96は上胴部に貝殻腹縁でLの列点文を巡らせ内面は上胴部までヘラケズリが認められる。

97～100・104は中央ピット出土の土器である。先述のように上層から出土したもので97は瀬戸内型の甕、99は壺胴部、98・100・104は壺底部である。これらのうち99と100は下層出土の土器と接合関係にある。

以上土器について見てきたが、これらの土器の殆どは二次的に火を受けて赤変や煤けが見られ器面調整などの観察が十分にできないものが多い。しかしすでに述べたように一括性には富む資料である。

次に石器について見ることにする。石鏃(105～107)、石包丁(108)、打製石斧(110)、スクレイパー(111)、磨石(113)などが出土している。石鏃105は床面、106・107は下層出土である。石材はすべてサヌカイトである。石包丁は床面出土である。平面形は長方形を呈するが非対称である。直線刃片刃で2孔が穿たれる。石材は粘板岩である。打製石斧は短冊状を呈し一方の主面に著しい研磨痕が認められる。石材は頁岩である。スクレイパーは側縁部に刃部を作り出している。サヌカイト製である。112～114は扁平な砂岩の河原石である。112・113は両主面を研磨、114は一方の主面と側縁が研磨され、他方の側縁には敲打痕が見られる。これらの他に特に使用痕跡の認められない河原石が土器集中部分を中心に中央ピットや埋土中から837点出土している。重さは数グラムから最大11.5kgまで見られ合計364.8kgである。ちなみに最大重量の礫は中央ピットから出土している。

以上ST5について詳述した。柱穴埋土やその上に置かれている河原石、大量の遺物などは建物の廃棄に伴う行為の跡を示すものとして理解することができる。先ず柱を抜き取った後、準備された



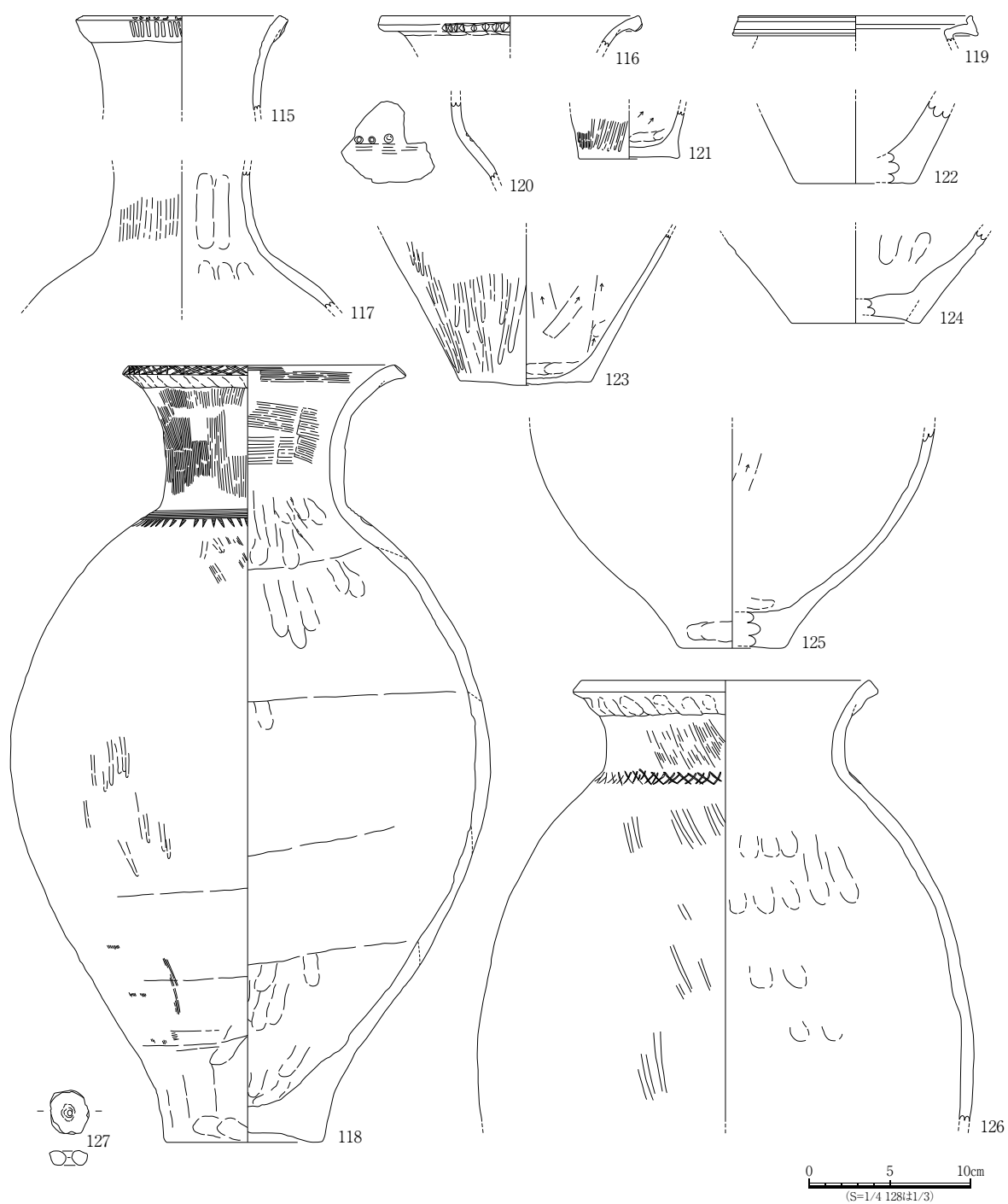
図IV-160 ST6平面図・断面図

粘性の強い土で柱穴を埋め戻しその上に河原石を置いている(P2は一部柱穴の中に入っている)。次いで床面あるいは2層上で火を焚きながら建物の中心部に土器を盛り上げるように投棄した行為を復元することができる。炭化物の状況からみて建物の建築材は含まれていないことから建築材等は柱の抜き取りとともに除去せられ焼却はされていない。ST5は竪穴建物廃棄に伴う行為の一つの形態を復元しうる貴重な資料となろう。

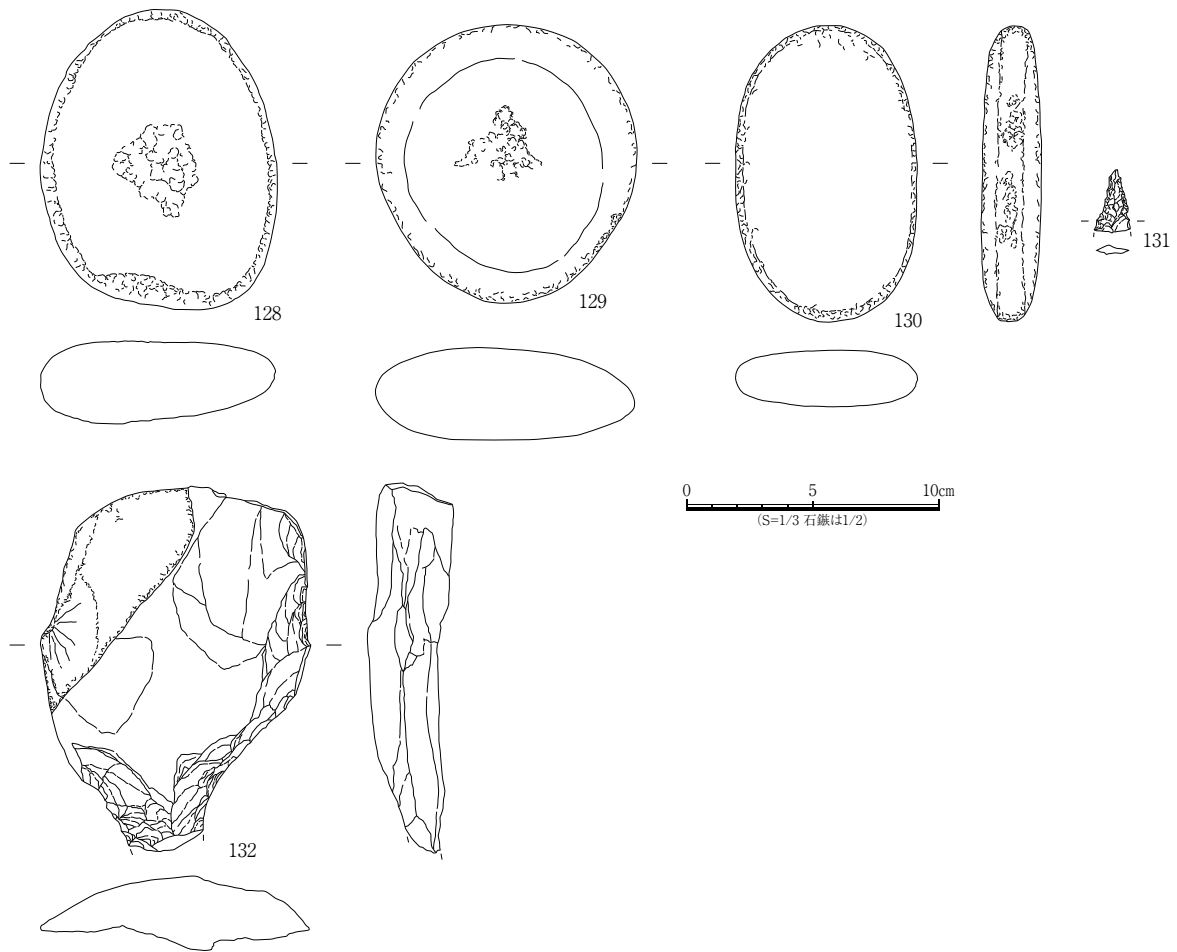
ST6(図IV-160~162)

調査区東南部に位置する。平面形は楕円形を呈し長軸4.1m, 短軸3.6m, 深さは30cm前後を測り, 面積は11.5㎡である。西壁には床面から15cm程の高床部が三日月状に設けられている。壁溝は見られない。中央ピットは隅丸長方形を呈し長軸1.06m, 短軸0.7m, 深さ12cmである。方向はN-0°である。両脇には径30cm, 深さ15cm前後のピット状の掘り込みがある。中央ピットの周辺には炭化物の広がりが見られる。

埋土は1層: にぶい黄褐色シルトに炭化物を含む。2層: 灰黄褐色粘質土シルトに炭化物や拳大の礫を含む。3層: 暗褐色粘質土シルトに炭化物を多く含む。1層が大半を占めており, 1・2層には多くの土器片が含まれている。3層は中央ピットの埋土であり, 数cm~拳大の河原石が多く入っている。床面に主柱穴らしきものは認められない。中央ピットの西南部脇と床面北東部に小ピットP2とP3



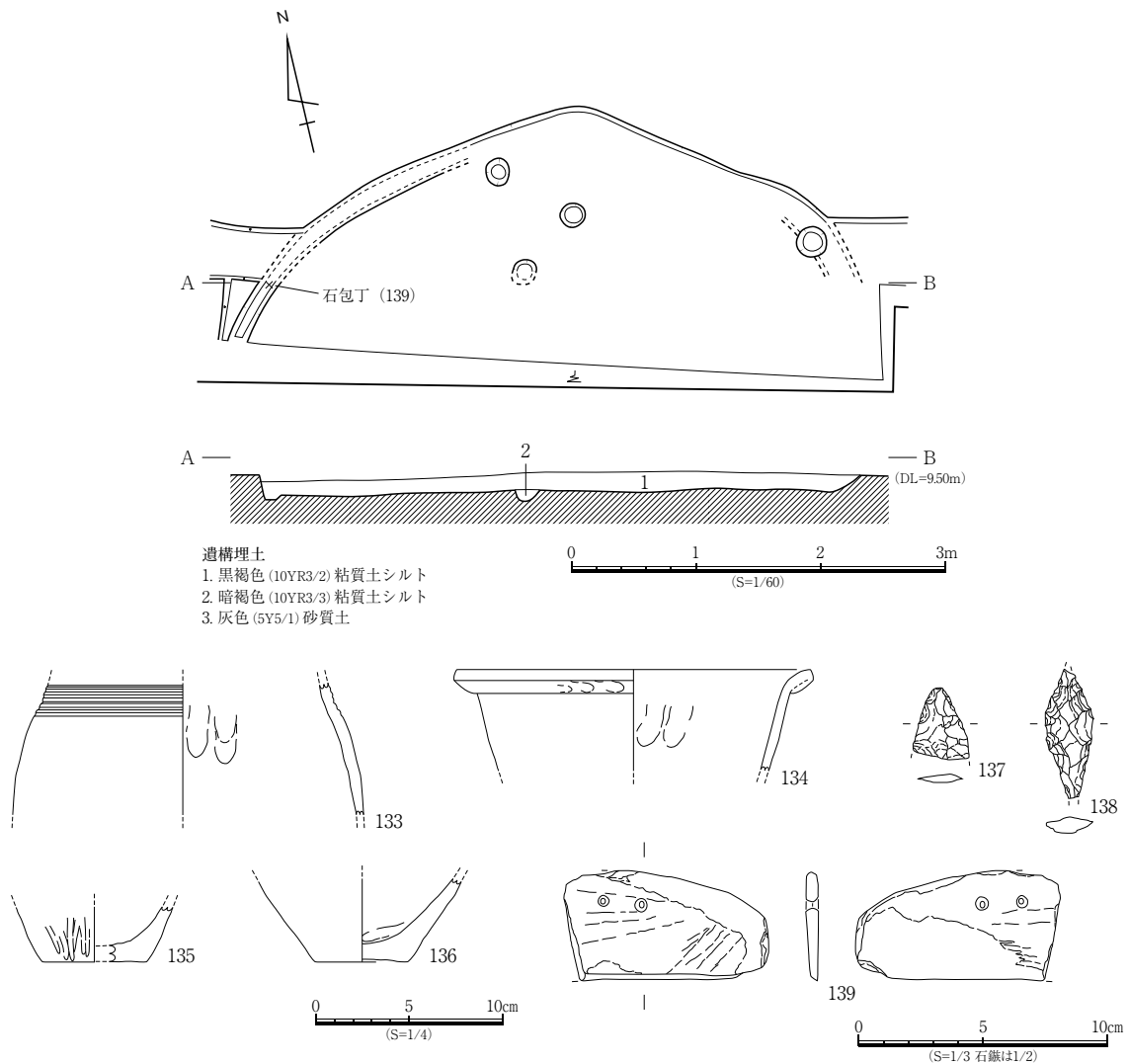
图IV-161 ST6遺物実測図1



図IV-162 ST6遺物実測図2

が見られる。両者とも径20cm前後、深さはP2が33cm、P3が20cmである。

遺物は上層、中層、下層、床面で取り上げた。土器は壺と甕、土製品が出土している。壺は広口壺が7点出土しており6点(115～118・120・126)を図示した。口縁部外面に粘土帯を貼付した南四国タイプが多い。復元完形に近い118は、高さ48.2cmの大型壺である。口唇部にハケ状原体による格子目文、上胴部には櫛描直線文一帯とRの列点文を配している。器表の荒れが激しいが外面にはベンガラ塗布が確認できる。床面・下層・上層で接合関係が認められる。126は頸胴部界にヘラ状原体による格子目文を施している。上層・下層との接合関係にある。壺ではこの他、底部が4点(122～125)出土している。123は床面、他の3点は上層出土である。甕は凹線文を有する口縁部が3点出土しているが1点(119)のみ図示した。下層からの出土である。土製品は土器片転用の紡錘車(127)である。上層から出土している。石器は叩石3点(128～130)、打製石鏃(131)、ドリル状の石器(132)が出土している。128は両主面と側縁の大部分に、129は両主面中心部と側縁の一部、130は長側縁にあばた状の敲打痕が見られる。石材は全て砂岩の河原石である。131は石鏃の先端部としたが石錐の可能性もある。断面は菱形、石材はチャートである。132は先端部が欠損している。結晶片岩である。131は上層、128・130は中層、129・132は下層からの出土である。この他床面や下層、上層からは拳大～人頭大の



図IV-163 ST7平面図・断面図・遺物実測図

河原石が多く出土している。ST5に較べると少ないが意図的に投棄されたものと考えられ、同様の廃棄形態をして捉えることができよう。ST6の遺物は出土状況や接合関係などから見て一括性の高い資料として捉えることができる。中期末の良好な資料として位置付けられる。

ST7 (図IV-163)

調査区の西南部に位置する。大半が調査区外に出ており、北壁側の一部をST8に切られているが床面は残存している。直径5.5m、面積24㎡前後の円形住居と考えられるが、ST8との重複部分の壁面は直線的である。深さは10~15cm、壁溝は幅15cm、深さ3~4cmを測る。

遺物は比較的少なく埋土及び床面から土器、打製石鏃、石包丁が出土している。土器は、床面から壺胴部(133)と鉢(134)が、埋土中から壺底部(135・136)が出土している。133は上胴部に櫛描直線文が配される。134は口縁外面に粘土帯を貼付した南四国タイプである。石器は石鏃2点(137・138)が

床面から出土している。137は基部側が大きく欠損している。共にサヌカイト製である。石包丁(139)は刃部を上にして背部が壁溝埋土中に突き刺さった状態で出土している(写真図版)。片刃で2孔が穿たれている。器壁が薄い作りである。磨製であるが随所に自然面が見られる。石材は頁岩である。この他にサヌカイトのチップが8点出土している。ST7は中期末に属する。

ST8(図IV-164)

調査区南部に位置しST7を切っている。平面形は円形を呈し直径4.4m、深さは10cm前後を測り、面積は15.2㎡である。ST8本体の埋土はにぶい黄褐色粘質土シルトである。壁溝は見られない。中央ピット(P1)は楕円形を呈し長軸0.9m、短軸0.56m、深さ30cmである。方向はN-9°-Eである。中央ピット埋土は上層に褐色粘質土、下層に炭化物と土器片を多く含んだ暗褐色粘質土が堆積し、床には炭化物が薄く見られる。

主柱穴はP2～P5の4個を比定することができる。P2・3は径25cm、深さ15cm、P4・5は長軸35cmの楕円形を呈し深さは30cmである。P4は径15cmの柱痕跡が認められる。柱穴間距離はP2-P3が1.45m、P2-P5が2.05m、P5-P4が1.6m、P3-P4が2.05mである。

遺物は少なく土器や石器が埋土を中心に出土している。土器は壺(140～142・144・145)、甕(143)、高杯(146・147)が出土している。140と141は口縁外面に粘土帯を貼付した南四国タイプ、142は口縁外面に微隆起帯を貼付している。144は上胴部で櫛描直線文間に微隆起帯を貼付し更に円形浮文を配する。145は櫛描直線文間に微隆起帯を貼付、さらに棒状浮文を貼付している。143は瀬戸内のなタイプで内面は上胴部までヘラケズリが認められる。146は高杯杯部、147は脚部で前者は口縁部に3条、後者は脚端部に2条の凹線文が施される。145・146は床面出土、他の土器は埋土出土である。土器の細片を観察したところ他の建物より内面ヘラケズリの事例が多い。148は棒状を呈する用途不明の石製品で全面に研磨されている。砂岩である。149は軽石である。ST8は中期末に属する。

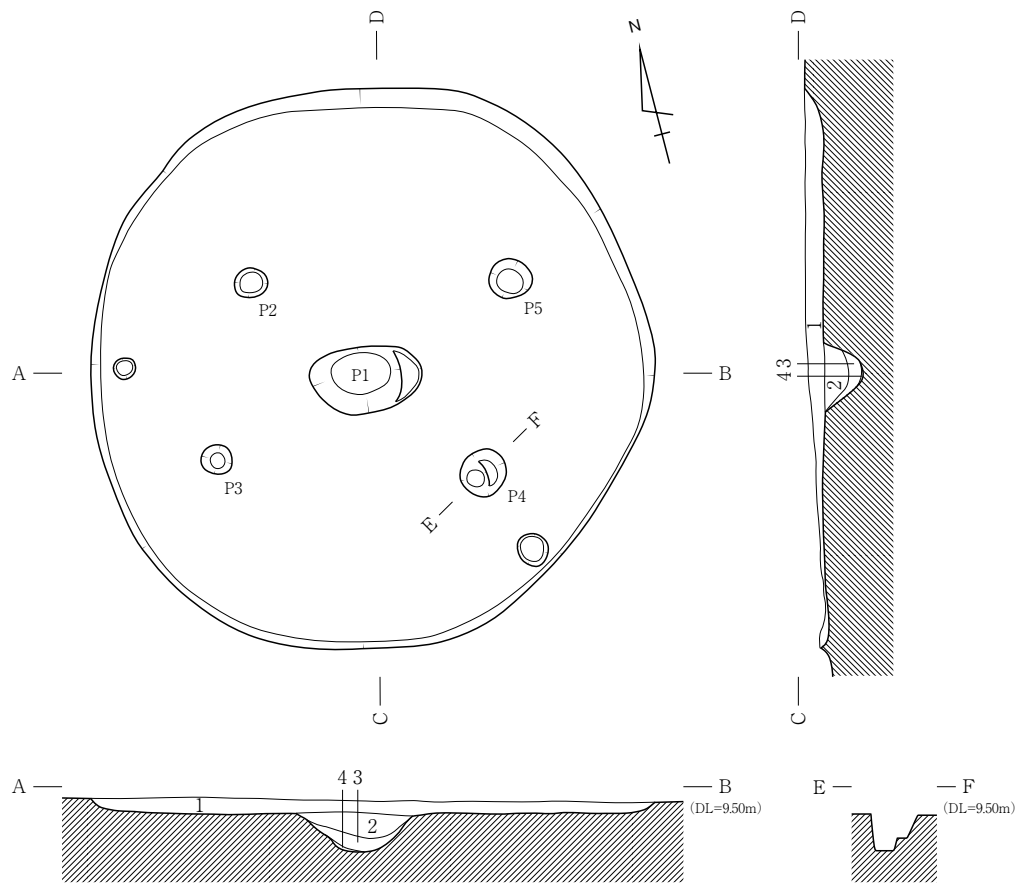
ST9(図IV-165)

調査区中央部に位置する。平面形は楕円形を呈し長軸4.6m、短軸4.4m、深さは20cm前後を測り、面積は16㎡である。壁溝は見られない。埋土は黒褐色粘質土シルトで炭化物を含んでいる。中央ピットは楕円形を呈し長軸0.74m、短軸0.52m、深さ11cmである。方向はN-13°-Wである。中央ピット埋土は黒色粘質土である。主柱穴は位置関係からP2～P7の6個を比定することができる。P6とP7は径20cm、深さ20～25cmと小型、P2～P4は径20～25cm、深さ15～30cm、P5は径30cmの掘り方に径15cmの柱痕跡が見られ深さは24cmである。柱穴間距離はP3-P4-P5が1.5m、P5-P6が1.4m、P6-P7が1.3m、P7-P2が1.55m、P2-P3が1.85mである。

遺物は比較的少なく、主に埋土中から土器と石鏃が出土している。土器の図示し得た口縁部はすべて壺(150～153)である。150と153は広口壺で口縁外面に粘土帯を貼付している。151は受け口状の口縁部を有する。152は長頸の壺で口縁部外面には列点文、頸部には微隆起帯を貼付した加飾された壺である。154・155は壺底部、156は高杯脚部である。157はサヌカイト製の打製石鏃であるが形態的に見て縄文時代に属する。混入品である。

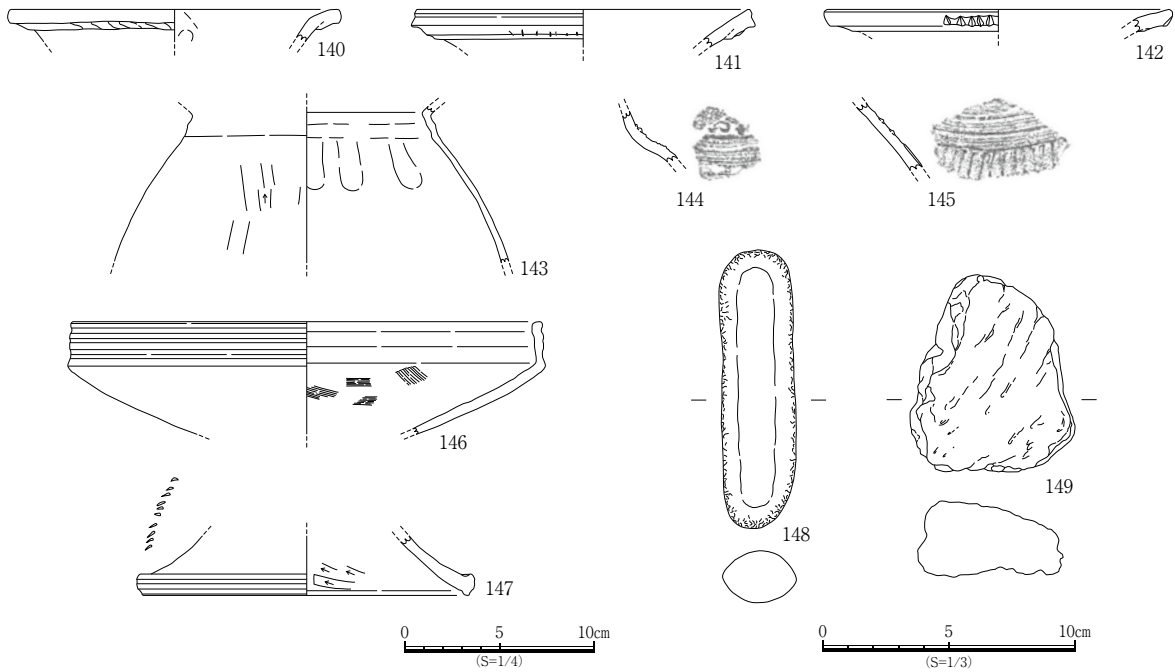
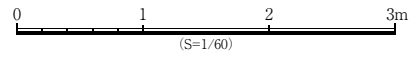
ST10(図IV-147)

先述のようにST1と大きく重複しており、南部壁のプランと中央ピット(P4)の位置関係からすると平面形は円形を呈し直径8m前後、面積約50㎡の竪穴建物を想定することができる。中央ピットは不整楕円形を呈し長軸1.4m、短軸0.7m、深さ15cmを測る。主軸は東西方向でN-4°-Wを示して

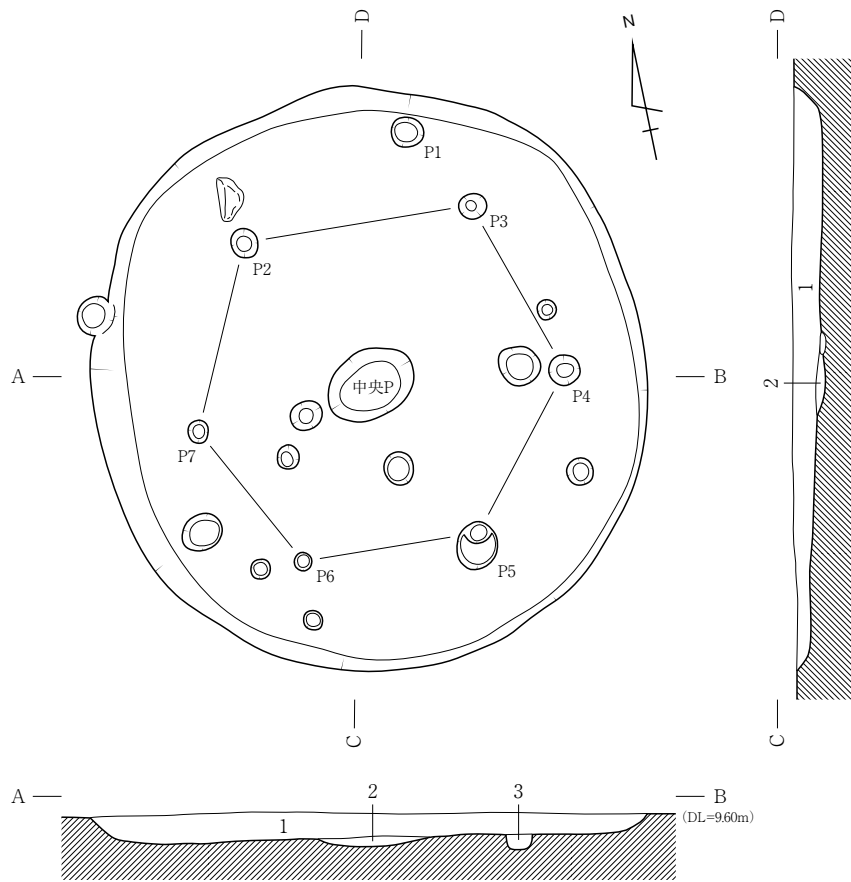


遺構埋土

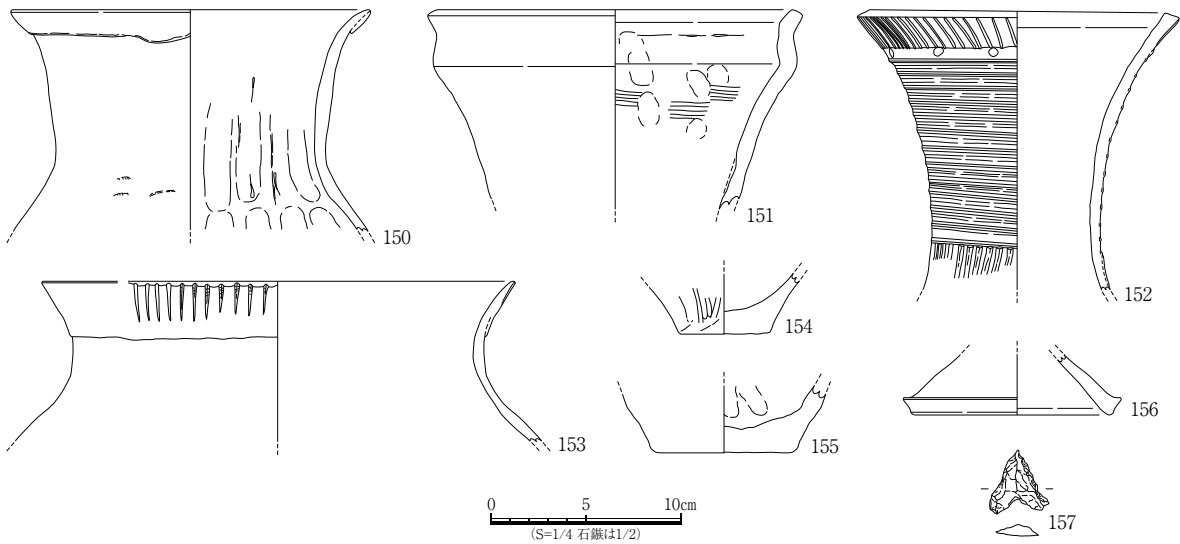
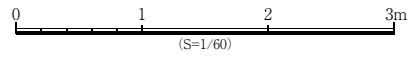
1. にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土シルトに土器を含む
2. 褐色(10YR4/6)粘質土
3. 暗褐色(10YR3/3)粘質土に炭化物を多量に含み土器を少量含む
4. 炭化物



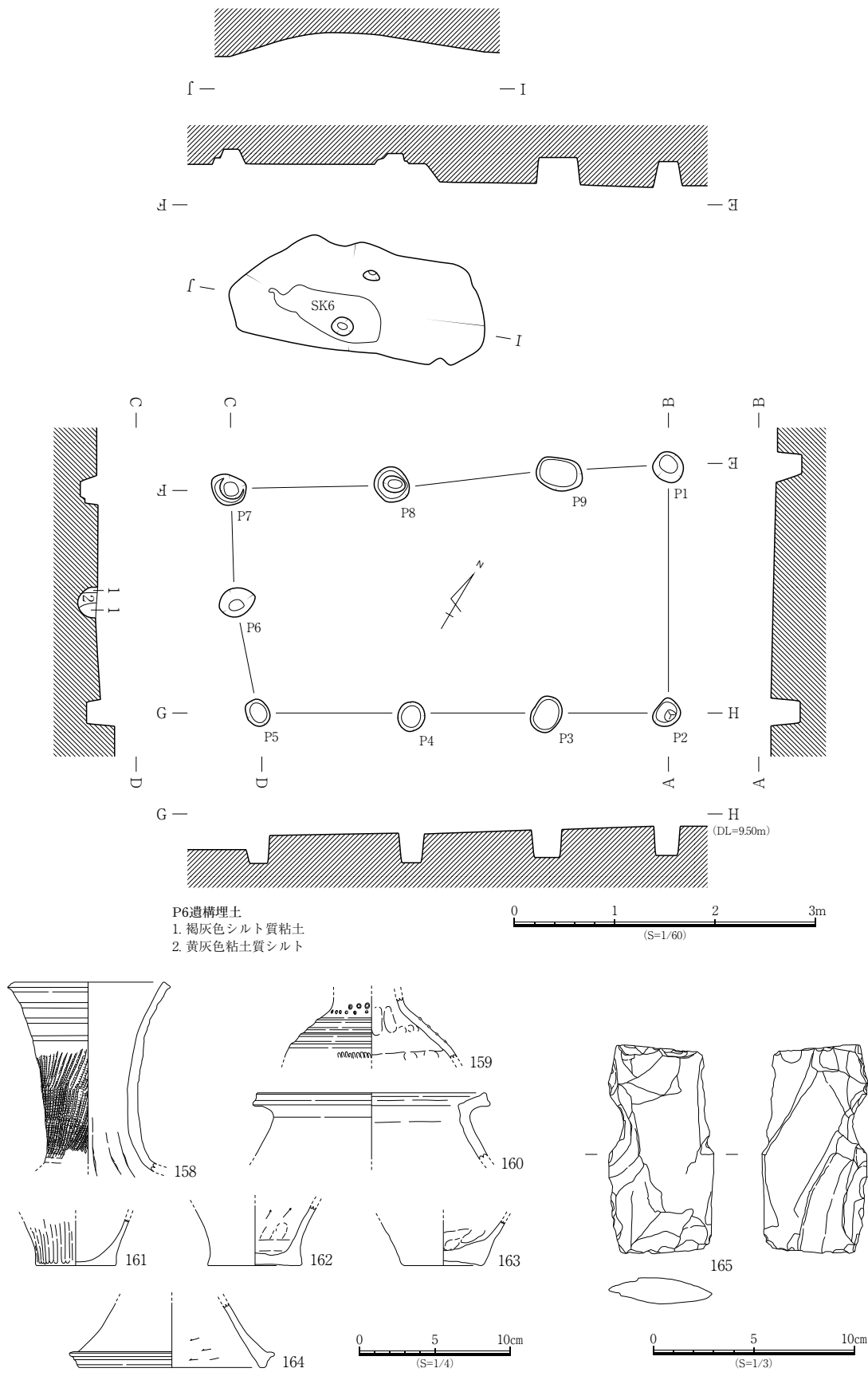
図IV-164 ST8平面図・断面図・エレベーション図・遺物実測図



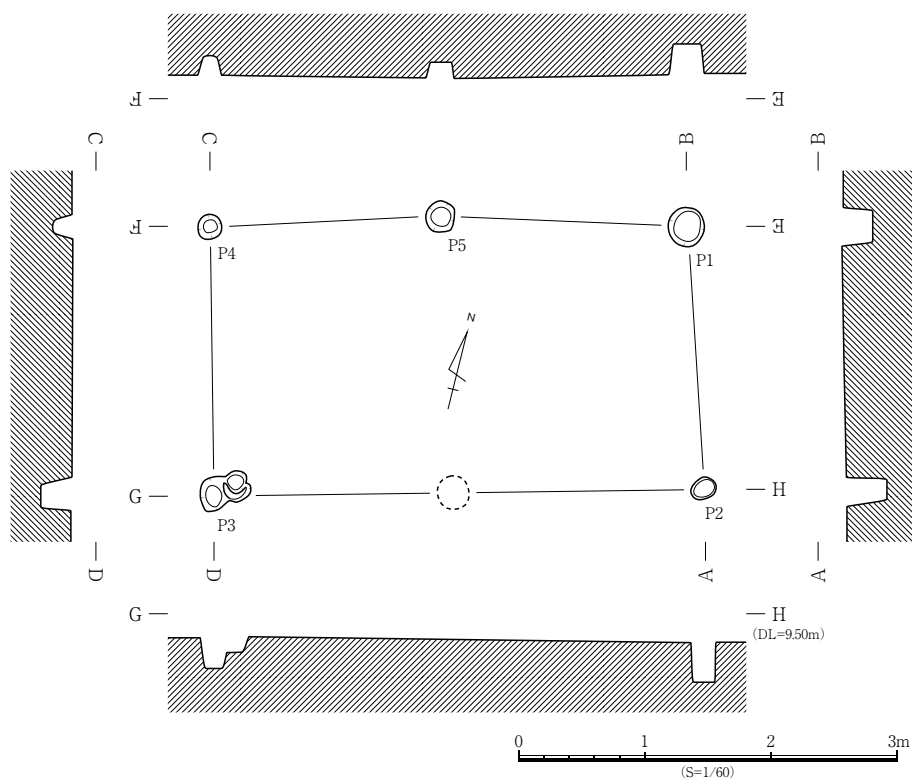
- 遺構埋土
1. 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土シルトに土器・炭化物を含む
 2. 黒色 (10YR2/1) 粘質土
 3. 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土



図IV-165 ST9平面図・断面図・遺物実測図



図IV-166 SB1・SK6平面図・断面図・エレベーション図及びSK6遺物実測図



図IV-167 SB2平面図・エレベーション図

いる。遺物はST1として取り上げているが、すべて中期末に属するものであることから当該期内の重複としなければならない。

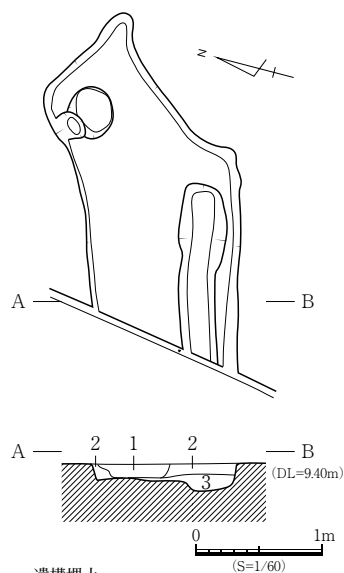
(2)掘立柱建物

SB1 (図IV-166)

調査区西部に位置しST2を切っている。溝状土坑を伴う掘立柱建物で、北側のSK6が伴っている。3間(4.2m)×2間(2.5m)で面積約10㎡、N-31°-Wの東西棟である。掘り方は円形または楕円形を呈し径30～45cmを測る。柱間はP1-P2が2.5m、P2-P3が1.3m、P3-P4が1.4m、P4-P5が1.5m、P5-P6が1.1m、P6-P7が1.1m、P7-P8が1.6m、P8-P9が1.65m、P9-P1が1.1mである。P6・P7・P8には径15～20cmの柱痕跡が認められる。柱穴埋土は褐灰色シルト粘質土である。

SK6 (図IV-166)

SB1の北側1.0mのところを位置しST2を切って

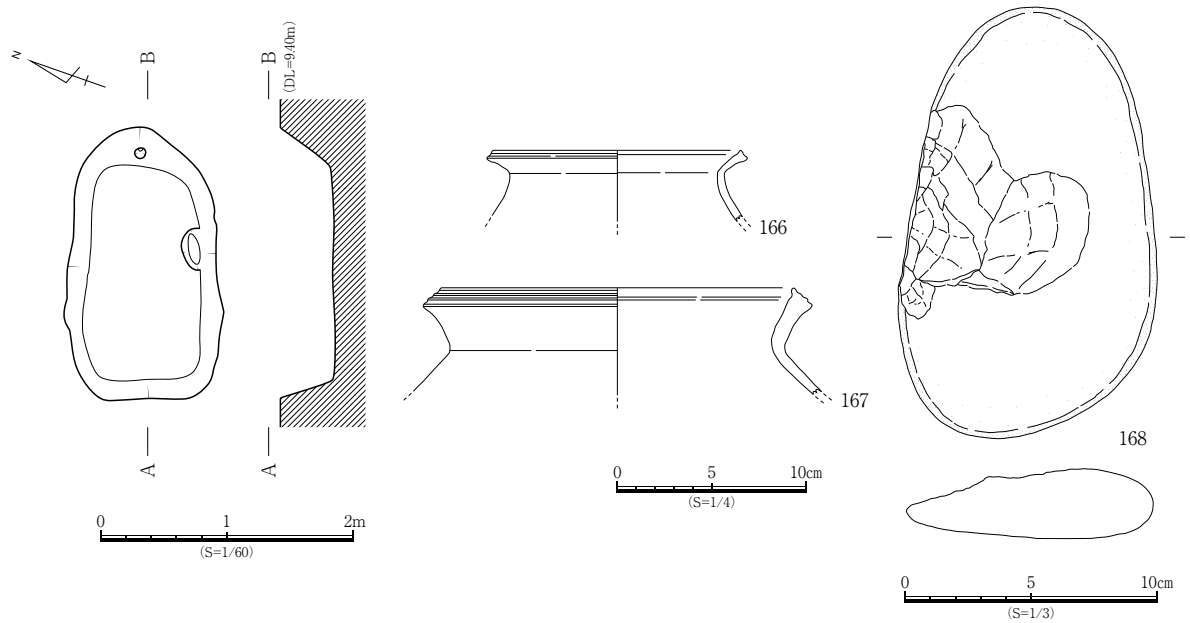


遺構埋土

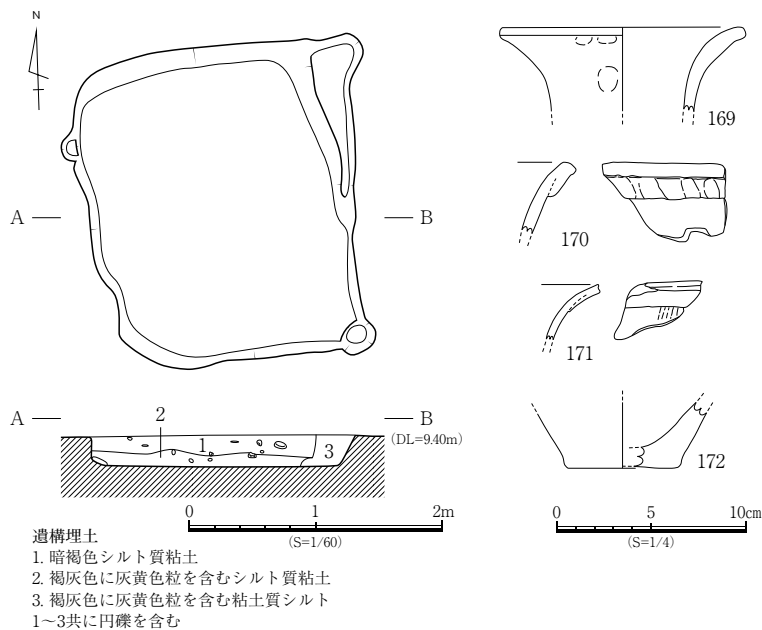
1. 灰色と褐灰色が混ざるシルト質粘土
 2. 褐灰色に灰色を含むシルト質粘土
 3. 灰色に褐灰色を含むシルト質粘土
- 1～3共に数cm～20cm大の円礫を含む

図IV-168 SK1平面図・断面図

いる。長軸2.4m，短軸1.1m，深さは25cmを測り，断面は緩やかな曲線を描いている。埋土は褐色粘質土である。遺物は埋土中から壺(158・159)，甕(160～163)，高杯(164)，打製石斧(165)が出土している。158は細頸壺の口頸部，159は同じく上胴部である。前者は口縁部外面に4条の凹線文，頸部にはハケ状原体小口による連続圧痕が施される。後者は4条の微隆起帯を貼付し竹管文を配する。160は瀬戸内タイプで強い横ナデが施される。161は外面ヘラミガキ，162は内面ヘラケズリが見られる。164は脚部である。端面に2条の凹線文，内面はヘラケズリが認められる。165は短冊形で断面は凸レ



図IV-169 SK2平面図・エレベーション図・遺物実測図



図IV-170 SK3平面図・断面図・遺物実測図

ンズ状を呈する。一方の側縁が大きく抉られている。両主面共に研磨された部位が見られる。SK6は中期末に属する。

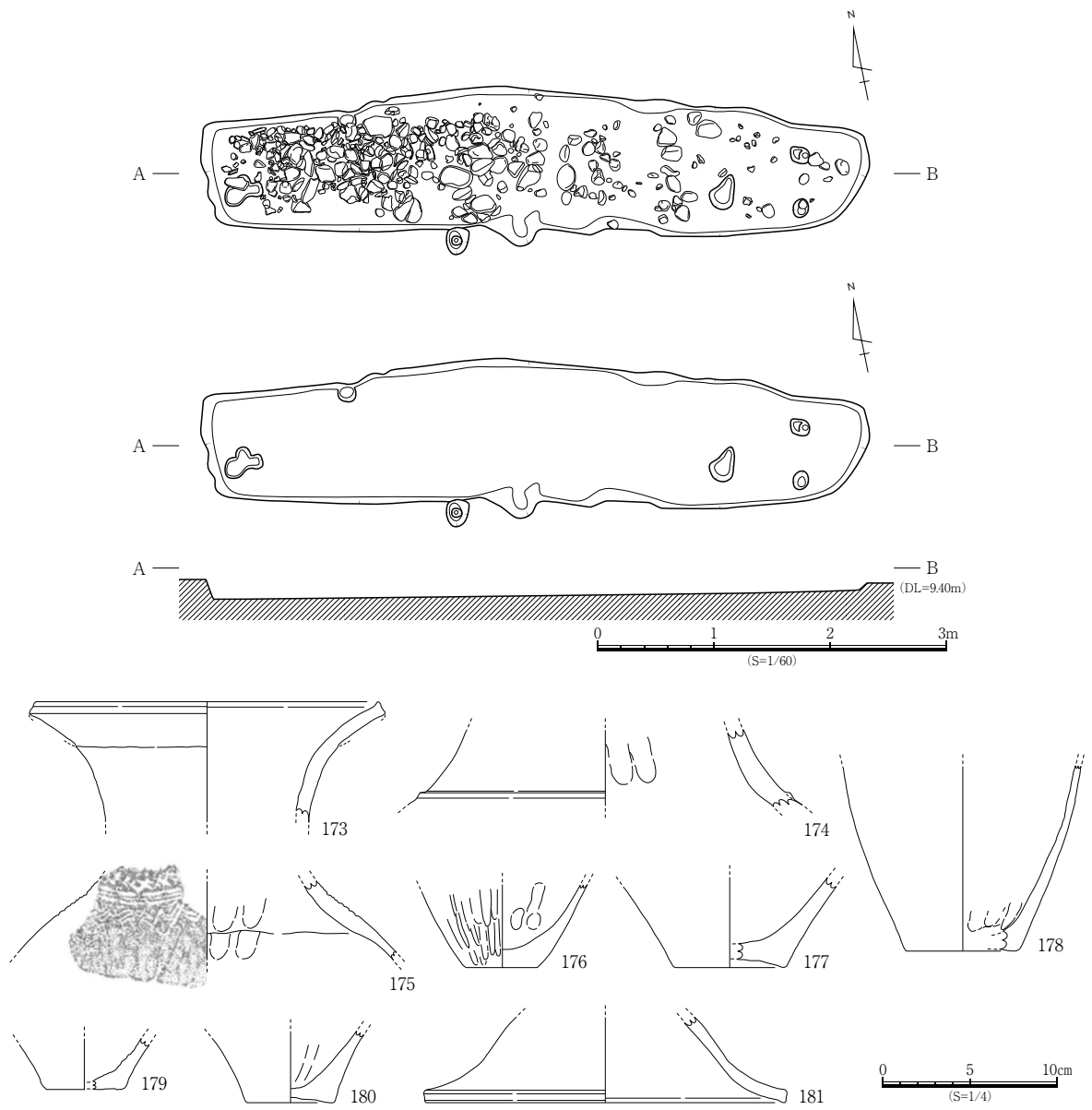
SB2 (図IV-167)

調査区北西部に位置する。2間(4.2m) × 1間(2.5m)で面積約7.9㎡, N-15°-Wの東西棟である。掘り方は概ね円形を呈し径15~30cmを測る。柱間はP1-P2が2.05m, P2-P3が3.8m, P3-P4が2.1m, P4-P5が1.85m, P5-P1が1.95mである。柱穴埋土は暗褐色シルト粘質土である。

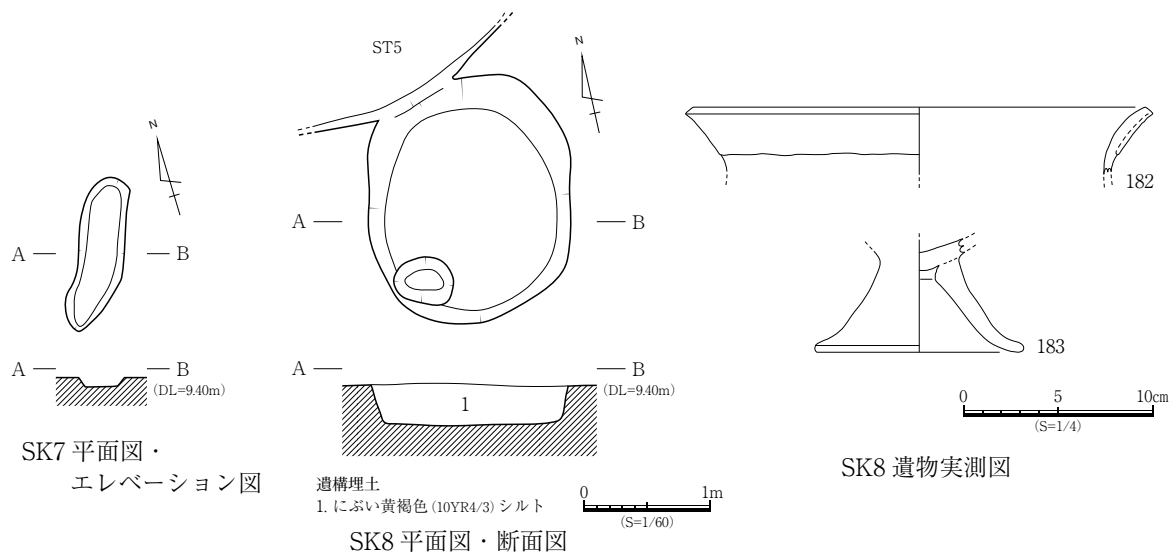
(3)土坑

SK1 (図IV-168)

調査区の西端に位置し大部分が調査区外に出ている。平面は明らかになし得ない。確認長軸2.4m,



図IV-171 SK5平面図・エレベーション図・遺物実測図



図IV-172 SK7平面図・エレベーション図及びSK8平面図・断面図・遺物実測図

短軸 1.25m, 深さ 15cm 前後で床面南部には幅 20cm, 深さ 10cm の溝状の落ち込みがある。埋土は 1～3 層からなる。灰色ないし褐灰色のシルト質粘土で各層に拳大～人頭大の河原石を多く含む。遺物は認められない。

SK2 (図IV-169)

調査区の西南部に位置する。平面形は長楕円形を呈し、長軸 2.05m, 短軸 1.2m, 深さ 40cm, 断面は台形状を呈する。埋土は暗褐色シルトである。遺物は埋土中から甕(166・167)と叩石(168)が出土している。甕は 2 点とも口縁部が「く」字状に屈曲するタイプである。166 は口唇部が凹状, 167 は口唇部に 3 条の凹線文が施されている。168 は一方の主面の中央部が大きく剥離しているが、縁辺には欠損部も含めて敲打痕が見られる。砂岩である。

SK3 (図IV-170)

調査区の西南隅に位置する。平面形は長形状を呈し長軸 2.5m, 短軸 2.3m, 深さ 25cm を測り、東壁の北半分は三角形状に高床部が作られている。埋土は 1～3 層で各層ともに円礫を多く含んでいる。遺物は土器細片が多い。169～171 は壺の口縁部, 172 は甕底部である。170・171 は口縁部外面に粘土帯を貼付した南四国タイプである。

SK5 (図IV-171)

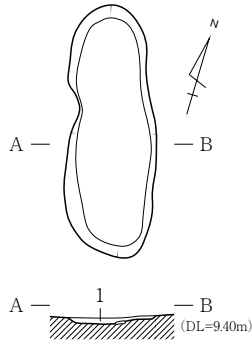
調査区南西部に位置する。平面形は細長い長方形を呈し長軸 5.7m, 短軸 1.2m, 深さ 5～15cm を測る。埋土は暗褐色粘質土シルトで、図示したように床面には大小の河原石の集石が見られた。遺物は主に集石間から出土している。壺(173～178), 甕(179・180), 蓋(181)を図示することができた。173 は南四国タイプで口縁部外面の粘土帯が剥離している。174・175 は上胴部で前者は微隆起帯が貼付され、後者は格子目状の文様, 櫛描直線文, 同波状文が施されている。181 の蓋は傘部がふくらみをもっている。SK5 は中期中葉に属する可能性がある。

SK7 (図IV-172)

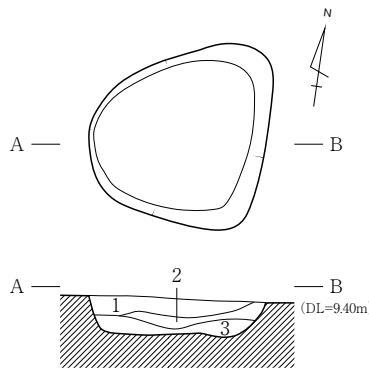
調査区の北西部に位置する。平面形は溝状を呈し長軸 1.2m, 短軸 0.35m, 深さ 10cm を測る。埋土は黒褐色粘質土シルトである。遺物は弥生土器細片が少量出土している。

SK8 (図IV-172)

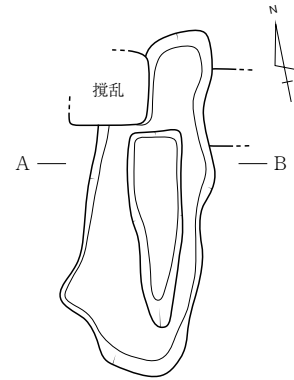
調査区の東部に位置しST5と接しているが先後関係は不明である。平面形は隅丸方形を呈し長軸2.0m, 短軸1.6m, 深さ35cmを測り断面は箱形を呈す。埋土はにぶい黄褐色シルトである。遺物は細片のみで壺(182)と高杯(183)を図示し得たのみである。前者は口縁部外面に粘土帯を貼付した南四国タイプ, 後者の高杯脚はハの字状に踏ん張っている。



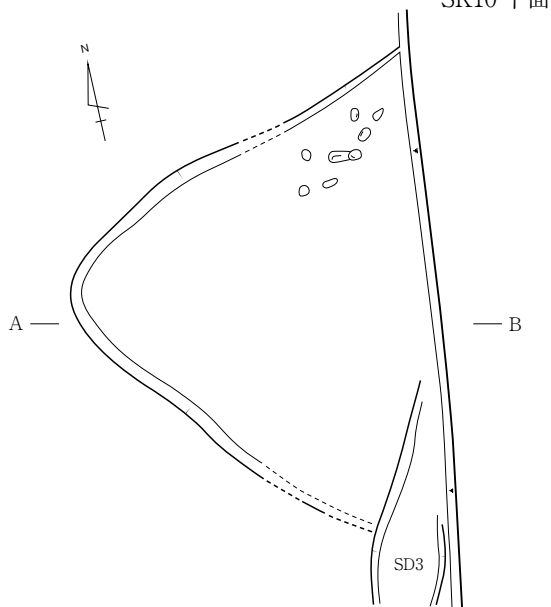
遺構埋土
1. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト
SK9 平面図・断面図



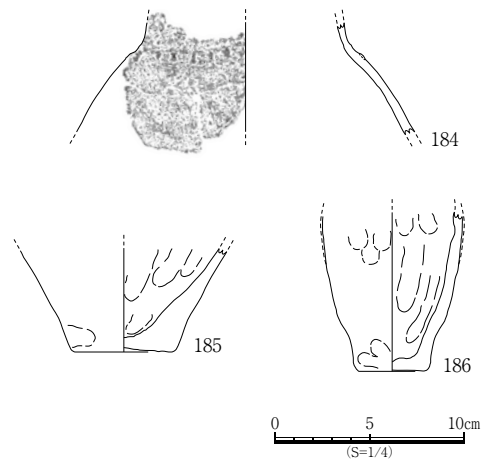
遺構埋土
1. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルトに2cm大の小礫を少し含む
2. 褐色 (10YR4/4) シルトに2cm大の小礫を少し含む
3. 暗褐色 (10YR3/4) シルト
SK10 平面図・断面図



遺構埋土
1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土シルト
SK12 平面図・断面図

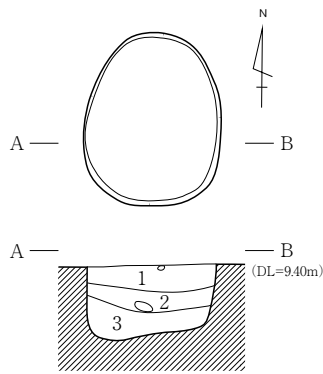


遺構埋土
1. 暗褐色 (10YR3/3) シルト
SK11 平面図・断面図



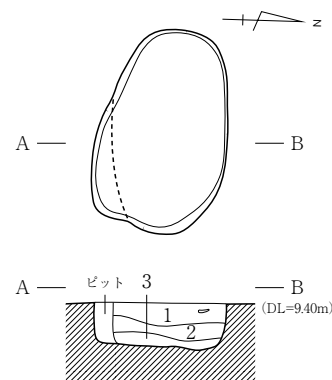
SK12 遺物実測図

図IV-173 SK9~12平面図・断面図及びSK12遺物実測図



遺構埋土
 1. におい黄橙色 (10YR7/4) 粘質土シルト
 2. 1に褐色 (10YR4/4) 粘質土がブロック状に入る
 3. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土

SK13 平面図・断面図



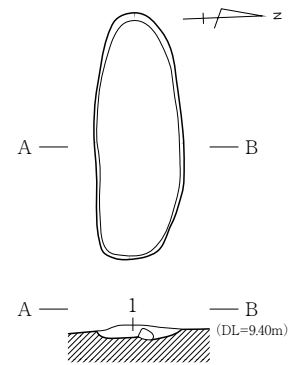
遺構埋土
 1. 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質土シルト
 2. 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土シルトに炭化物・少量の黄褐色粘土を含む
 3. 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土シルトに炭化物を含む

SK14 平面図・断面図



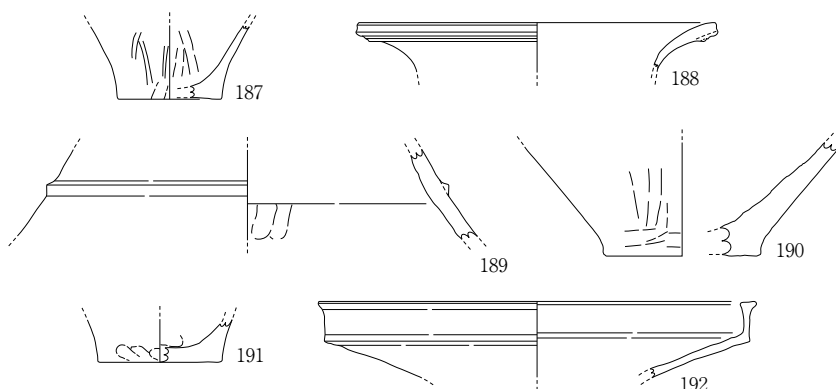
遺構埋土
 1. 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土シルトに礫を含む

SK15 平面図・断面図

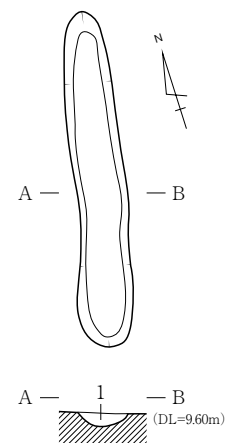
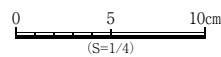


遺構埋土
 1. 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土シルト

SK16 平面図・断面図

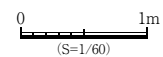


SK13~16 遺物実測図

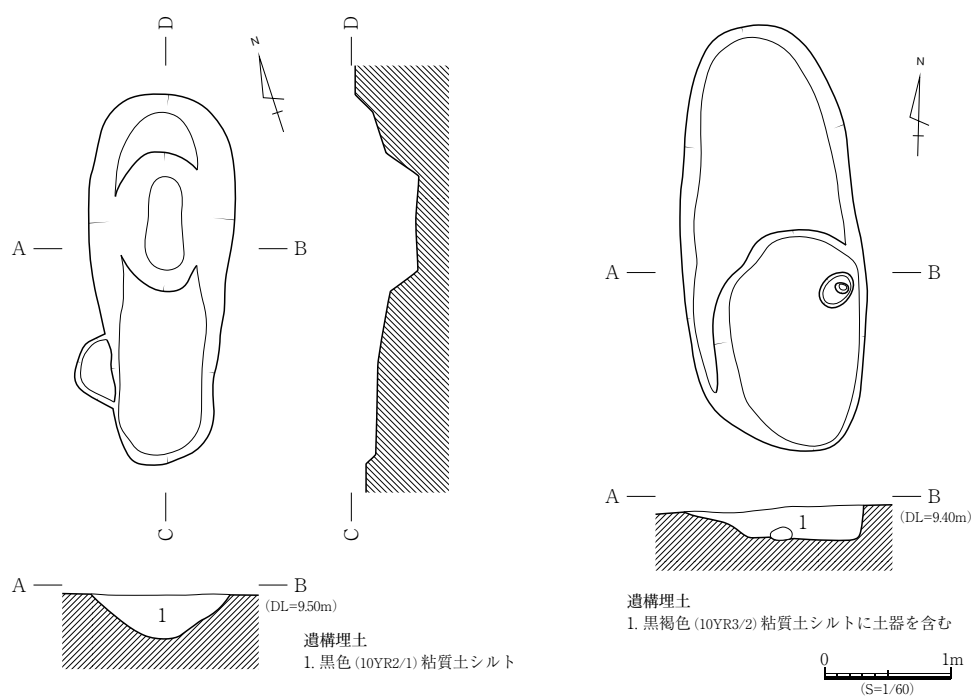


遺構埋土
 1. 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土シルト

SK17 平面図・断面図

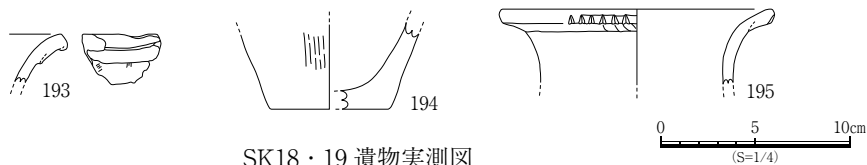


図IV-174 SK13~17平面図・断面図・遺物実測図



SK18 平面図・断面図・エレベーション図

SK19 平面図・断面図



SK18・19 遺物実測図

図IV-175 SK18・19平面図・断面図・エレベーション図・遺物実測図

SK9 (図IV-173)

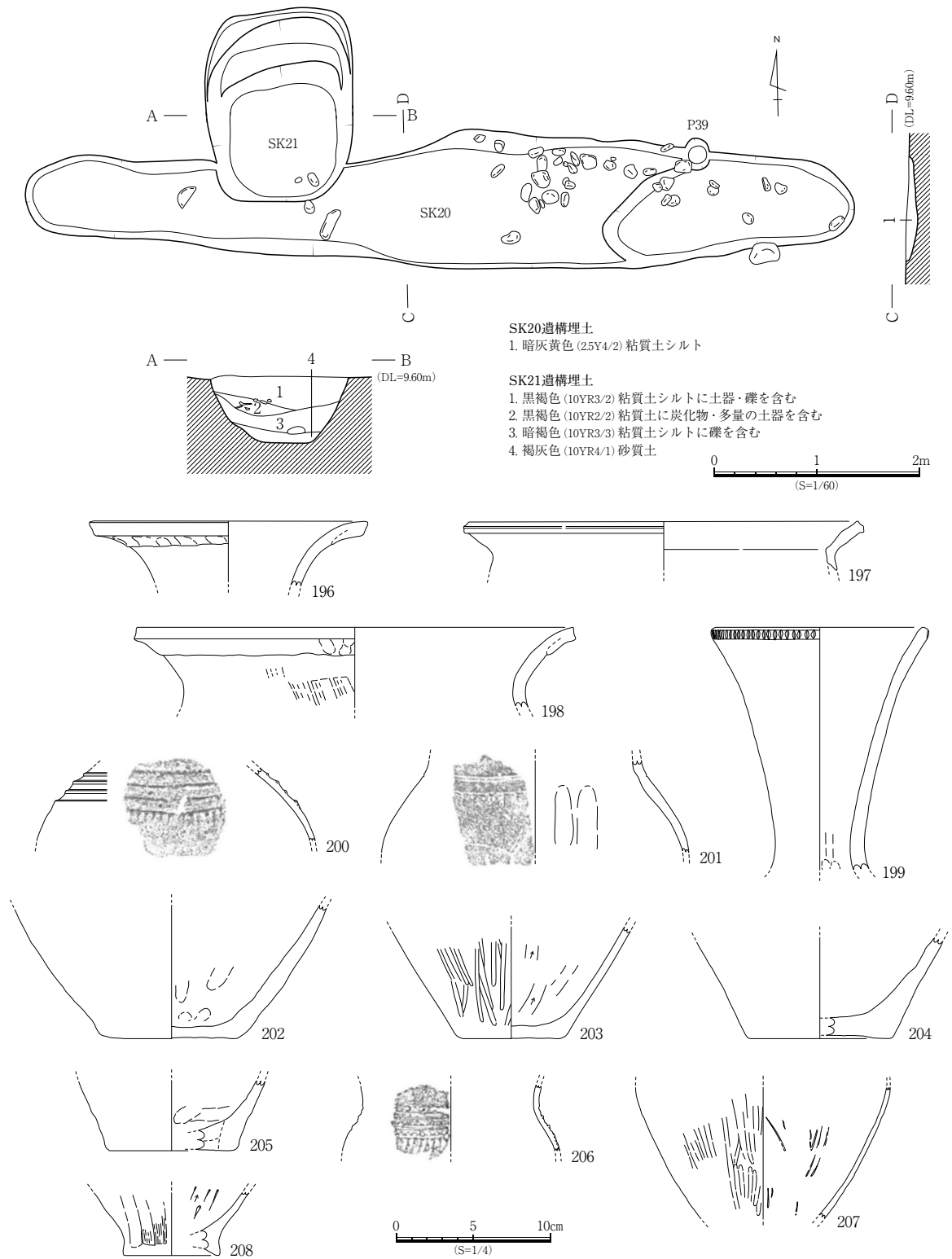
調査区の東部に位置する。平面形は長楕円形を呈し長軸 2.0m，短軸 0.7m，深さ 5 cm 前後である。埋土は灰黄褐色シルトである。弥生土器細片が数点出土しているが図示できるものはない。

SK10 (図IV-173)

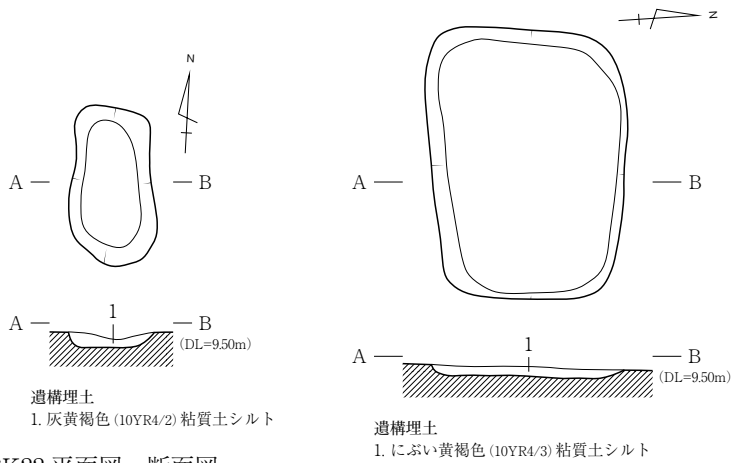
調査区の東部に位置する。平面形は隅丸三角形状を呈し長軸 1.5m，短軸 1.3m，深さ 30cm 前後を測る。埋土は 1 層：灰黄褐色シルト，2 層：褐色シルト，3 層：暗褐色シルトで 1・2 層には小礫を含んでいる。遺物は壺や甕の細片が数点出土している。

SK11 (図IV-173)

調査区東部に位置し大部分が調査区外に出ている。SD3 に切られている。平面形は隅丸方形状を呈するものと考えられる。1 辺 3m 以上を測る。深さは 5 cm 前後と浅い。北壁際の床面には 50×60 cm の範囲に焼土の広がりが見られ，焼土の上や周辺には拳大の河原石が集中して出土している。これらの石は焼けていない。埋土は暗褐色シルトである。遺物は土器細片が 3 点出土しているのみである。

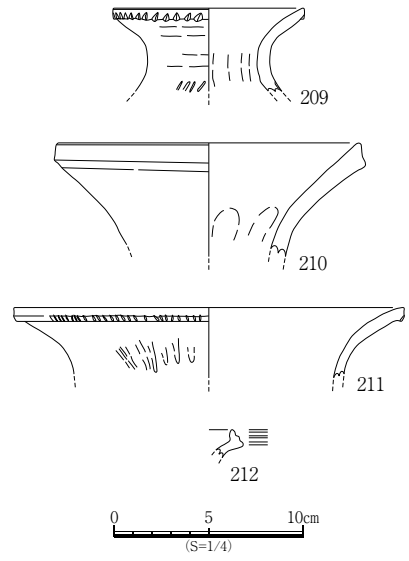


図IV-176 SK20・21平面図・断面図・遺物実測図

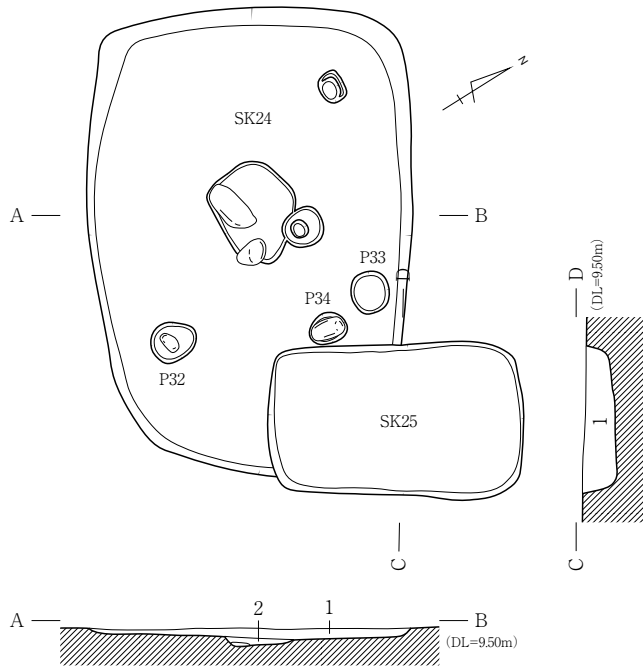


SK22 平面図・断面図

SK23 平面図・断面図



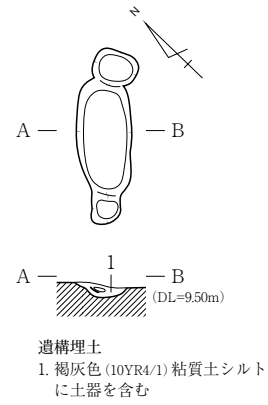
SK23・24 遺物実測図



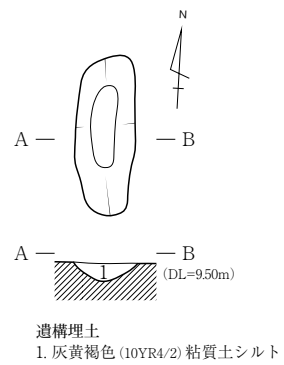
SK24遺構埋土
1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土シルト
2. 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土シルトに炭化物・土器を含む

SK25遺構埋土
1. 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土シルトに炭化物・土器を含む

SK24・25 平面図・断面図

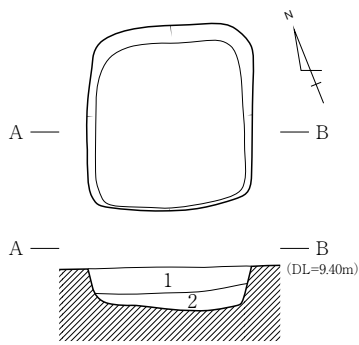


SK26 平面図・断面図



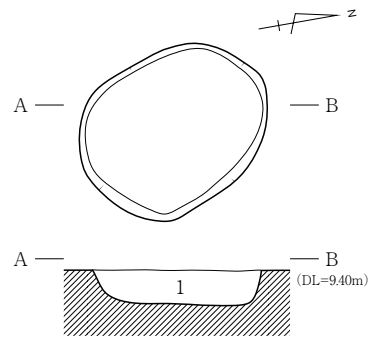
SK27 平面図・断面図

図IV-177 SK22~27平面図・断面図・遺物実測図



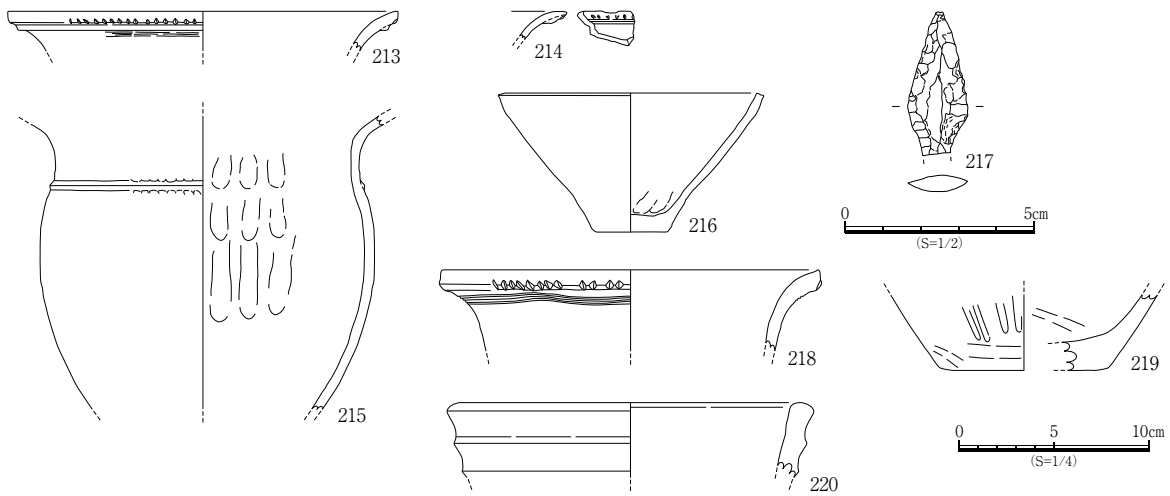
遺構埋土
 1. 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土シルトに土器を含む
 2. 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土シルトに灰黄褐色 (10YR6/2) を少量含む

SK28 平面図・断面図

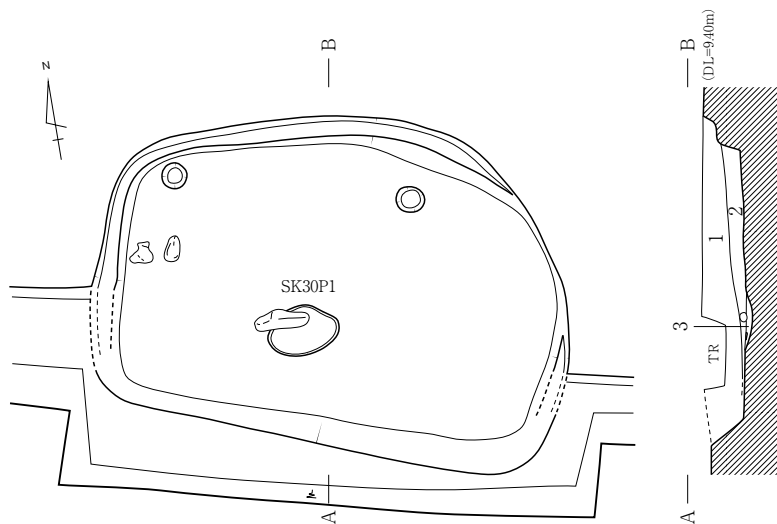


遺構埋土
 1. 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土シルト

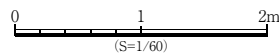
SK29 平面図・断面図



SK28・29 遺物実測図



遺構埋土
 1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土シルトに土器・炭化物を含む
 2. 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土シルトに炭化物・黄褐色粘土を含む
 3. 黒褐色 (7.5YR3/1) 粘質土シルトに炭化物・焼土・土器を含む



SK30 平面図・断面図

図IV-178 SK28~30平面図・断面図及びSK28・29遺物実測図

SK12 (図IV - 173)

調査区の東部に位置する。平面形は不整形で長軸2.7m, 短軸1.1m, 深さ25cmを測る。床面は南北方向に緩い凹みが見られる。埋土はにぶい黄褐色粘質土シルトである。遺物は壺・甕の土器片が出土している。図示したものは甕である。184は上胴部で頸胴部界に微隆起帯と楕円形浮文を貼付した南四国型の飾られた甕である。185・186は被熱赤変し煤けている。図示したもの以外に内面ヘラケズリのある細片が数点認められる。

SK13 (図IV - 174)

調査区の東南部に位置する。平面形は楕円形を呈し長軸1.35m, 短軸1.1m, 深さ50～60cmを測る。埋土は1層：にぶい黄橙色粘質土シルト, 2層：1層に褐色粘質土がブロック状に入る。3層：灰黄褐色粘質土である。遺物は大型壺の胴部片や内面ヘラケズリを有する甕細片が見られるが, 図示できたのは甕底部(187)のみである。

SK14 (図IV - 174)

SK13の南隣にある。平面形は楕円形を呈し長軸1.6m, 短軸1.0m, 深さ35cmを測る。南東隅を新しい時期のピットに切られており平面形が少し変形している。埋土は1層：灰黄褐色粘質土シルト, 2層：褐灰色粘質土シルトに炭化物や少量の黄褐色粘土を含む。3層：褐灰色粘質土シルトに炭化物を含んでいる。遺物は僅少である。188は南四国型甕で口縁部外面に粘土帯を貼付しさらに微隆起帯を貼付している。

SK15 (図IV - 174)

調査区の東部に位置し一部が調査区外に出ている。平面形は楕円形状を呈し長軸は概ね4.0m, 短軸2.4m, 深さ10cmを測る。埋土は暗褐色粘質土シルトである。図示したように床面から1～2cm浮いて3～7cm大の河原石が50点程出土している。意図的に入れられたものであろう。遺物は壺や甕細片が見られる。図示できたのは壺胴部片(189)と同底部(190)のみである。前者は上胴部に断面三角の突帯を貼付している。

SK16 (図IV - 174)

調査区の南部に位置する。平面形は長楕円形を呈し長軸1.95m, 短軸0.7m, 深さ10cmを測る。埋土は黒褐色粘質土シルトである。遺物は壺・甕の細片と共に円礫や砂岩の叩石などが出土している。191は甕底部, 192は高杯杯部である。前者には内面ヘラケズリが見られる。後者は口縁部を外方に拡張している。図示し得なかったが570gの河原石の円礫や叩石が出土している。

SK17 (図IV - 174)

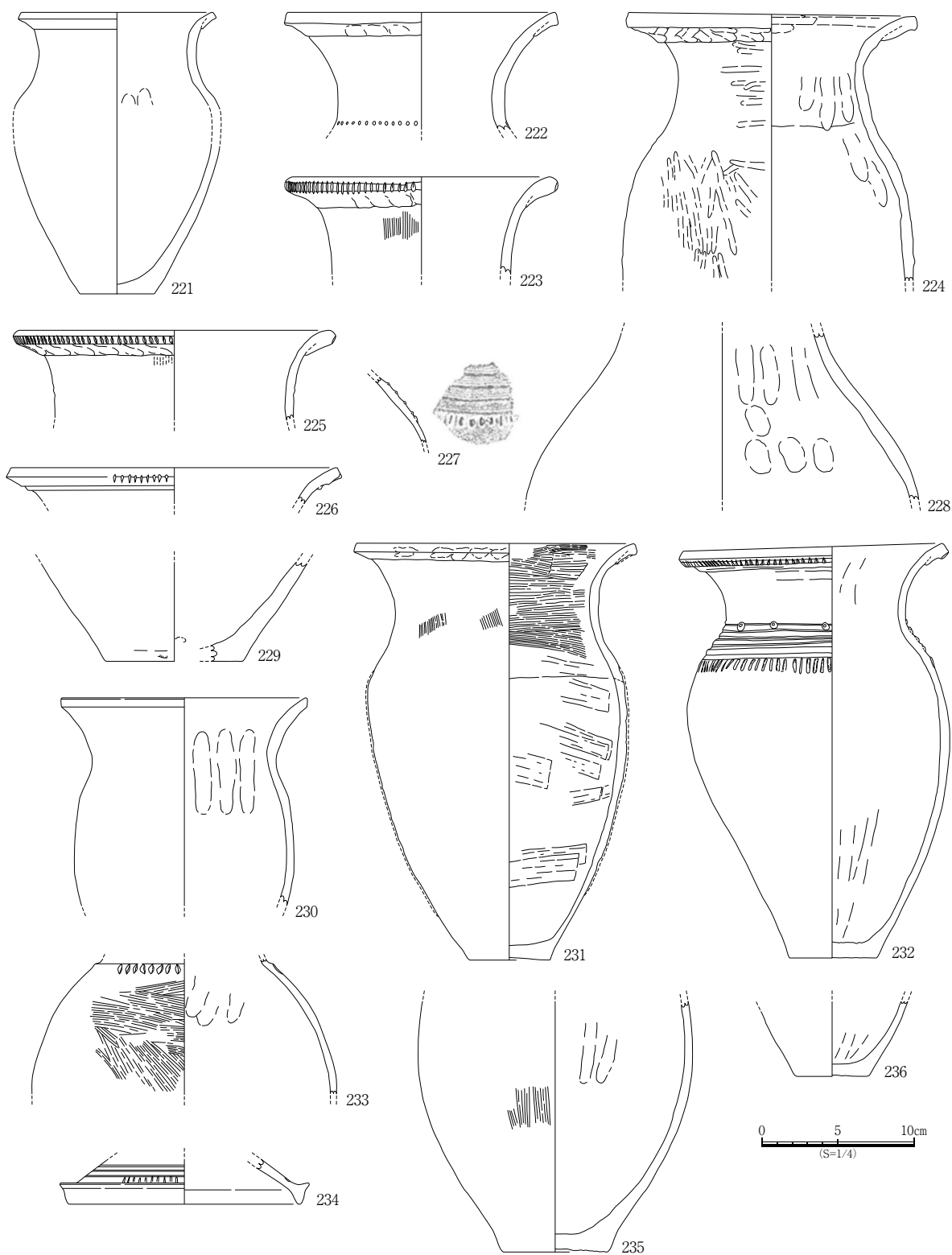
調査区の中央部に位置する。平面形は溝状を呈し長軸2.65m, 短軸0.4m, 深さ10cmを測る。埋土は黒褐色粘質土シルトである。遺物は土器細片が数点出土しているのみである。

SK18 (図IV - 175)

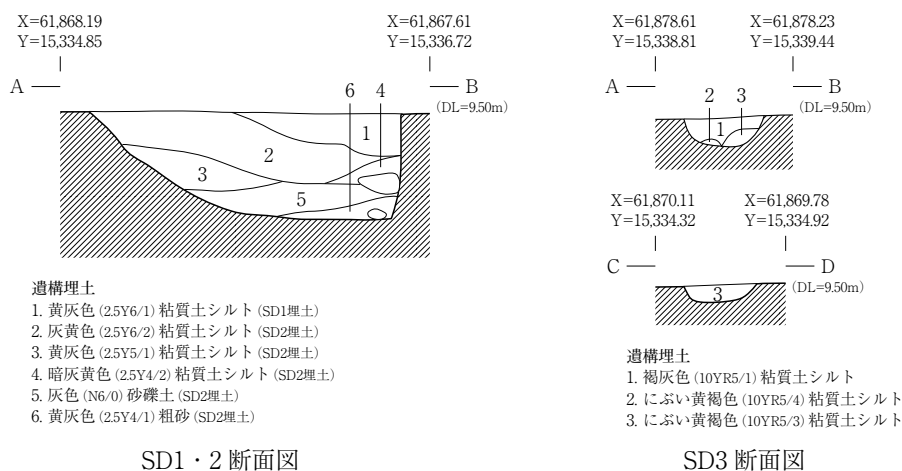
調査区の中央部に位置する。平面形は長楕円形を呈し長軸2.95m, 短軸1.2m, 深さ30cmを測る。埋土は黒色粘質土シルトである。床面北部は南部より10cm程深く掘られている。遺物は土器細片が少量出土している。193は南四国タイプの壺口縁部, 194は甕底部である。

SK19 (図IV - 175)

調査区の西寄りに位置する。平面形は長楕円形を呈し長軸3.3m, 短軸1.45m, 深さ25cmを測る。床面は南部が数cm深くなっている。埋土は黒褐色粘質土シルトである。遺物は図示した南四国タイ

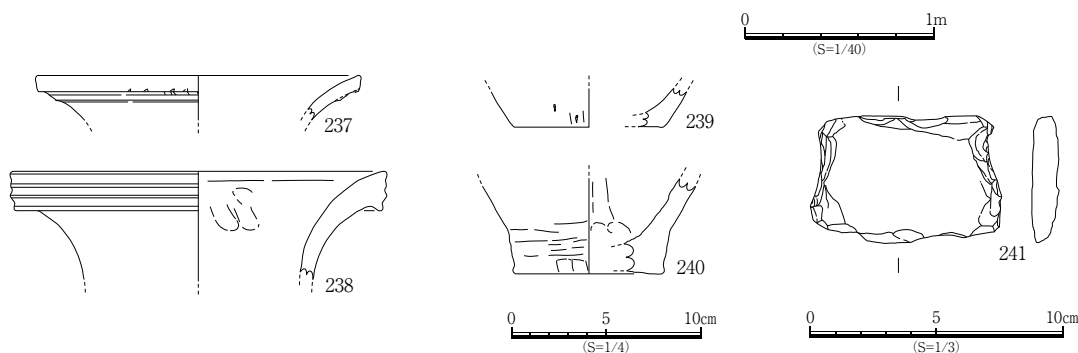


图IV-179 SK30 遺物実測図



SD1・2 断面図

SD3 断面図



SD2・3 遺物実測図

図IV-180 SD1～3断面図及びSD2・3遺物実測図

プの壺(195)以外は細片のみである。

SK20 (図IV-176)

調査区の南部に位置しSK21と切り合いSK22と接しているが先後関係は不明である。平面形は溝状を呈し長軸8.05m, 短軸1.35m, 深さは5～10cmを測るが床面東部は10cmほど深くなっており15～20cmを測る。埋土は暗灰黄色粘質土シルトである。図示したように下層や床面上に拳～人頭大の河原石が多く出土している。遺物は土器細片が多く出土しているが図示できたのは壺口縁部(196)と鉢口縁部(197)である。前者は南四国タイプ, 後者は口唇に2条の凹線文が施される。

SK21 (図IV-176)

調査区の南部に位置する。平面形は長形状を呈し長軸1.85m, 短軸1.5m, 深さ65cmを測り北壁側は階段状に掘り込まれている。埋土は1層: 黒褐色粘質土シルト, 2層: 黒褐色粘質土に炭化物・多量の土器を含む。3層: 暗褐色粘質土シルト, 4層: 褐灰色砂質土である。遺物は比較的多くの土器が出土している。198は南四国タイプの広口壺である。199は長頸の壺で口縁部外面に刻目が施されている。200・201は上胴部である。前者は微隆起帯が貼付され後者は櫛描直線文と櫛描簾状文が施されている。202～205は壺底部である。206は南四国型甕の上胴部で微隆起帯などによって飾られている。207・208は甕底部で内面はヘラケズリが施されている。

SK22 (図IV-177)

調査区の南部に位置する。平面形は楕円形状を呈し長軸 1.25m, 短軸 0.6m, 深さ 10 cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質土シルトである。遺物は弥生土器細片が少量出土している。

SK23 (図IV-177)

調査区の北部に位置する。平面形は隅丸方形を呈し長軸 2.15m, 短軸 1.55m, 深さ 10 cmを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質土シルトである。遺物は広口壺(209)のみである。

SK24 (図IV-177)

調査区の中央部に位置しSK25に切られている。平面形は隅丸方形を呈し長軸 3.7m, 短軸 2.55m, 深さ 5~10 cmを測る。床面中央部に五角形状の浅い掘り込みがある。埋土は1層: 灰黄褐色粘質土シルト, 2層: 黒褐色粘質土シルトである。床面中央部には人頭大の大きな河原石が置かれていた。また床面にはP32~P34などのピットが存在する。遺物は広口壺(210・211), 甕(212)が出土している。211は口縁下端に刻目, 212は口縁部を上にあげし2条の凹線文を巡らしてしる。

SK25 (図IV-177)

SK24を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し長軸 2.1m, 短軸 1.2m, 深さ 20 cmを測る。埋土は暗褐色粘質土シルトである。遺物は弥生土器細片が少量出土している。

SK26 (図IV-177)

調査区の中央部に位置する。平面形は長楕円形を呈し長軸 0.95m, 短軸 0.45m, 深さ 7 cmを測る。両端部にピットが位置するが伴うものかどうか判らない。埋土は褐灰色粘質土シルトである。遺物は弥生土器の細片が僅かに出土している。

SK27 (図IV-177)

調査区の中央部に位置する。平面形は長楕円形を呈し長軸 1.25m, 短軸 0.9m, 深さ 15 cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質土シルトである。遺物は認められない。

SK28 (図IV-178)

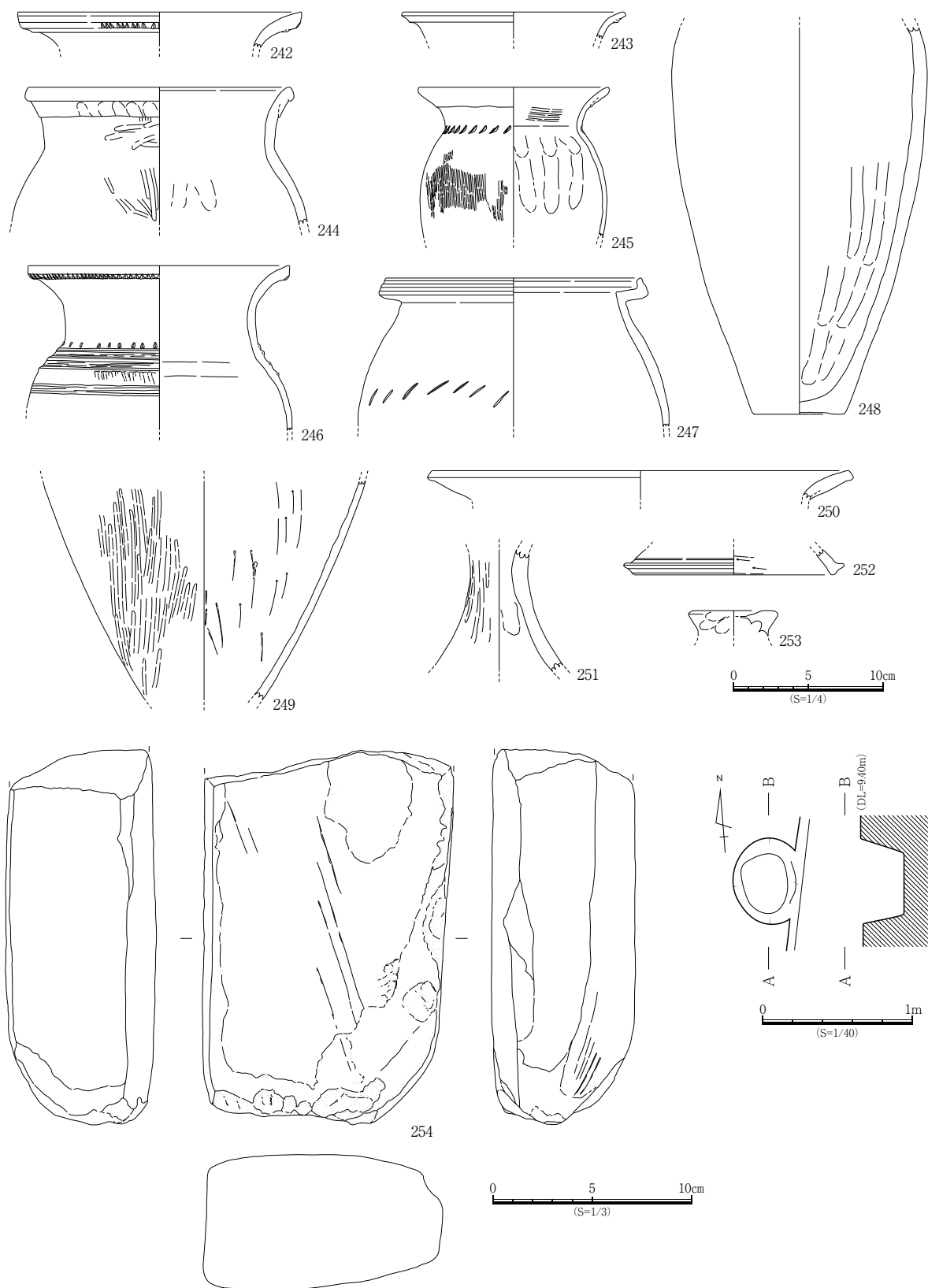
調査区の北部に位置する。平面形は長方形を呈し長軸 1.5m, 短軸 1.3m, 深さ 35 cmを測る。埋土は1層: 黒褐色粘質土シルトで土器片を含む。2層: 黒褐色粘質土シルトに灰黄褐色を少量含む。遺物は1層から出土している。213~215は南四国型甕である。213・214は口縁端部に刻目, 215は頸胴部界に断面三角の小突帯文を貼付している。216は鉢である。217は石鏃である。有莖式で莖端部が欠損している。石材はサヌカイトである。

SK29 (図IV-178)

調査区の西南部に位置する。平面形は楕円形を呈し長軸 1.6m, 短軸 1.2m, 深さ 25 cmを測る。埋土は黒褐色粘質土シルトである。遺物は壺口縁部(218・220)と壺底部(219)が出土している。218は広口壺で口唇下端に刻目, 口縁部外面に櫛描直線文を施す。220は直口壺で外面に凹線文を2条まで認められる。

SK30 (図IV-178・179)

調査区の東南部に位置する。平面形は隅丸方形を呈し長軸 3.8m, 短軸 2.65m, 深さ 35 cmを測る。最初北側を検出した時点では堅穴建物かと思ったが, 南にあげしところ直線的な南壁が直ぐに立ち上がり土坑とした。P1は床面中央部南寄りにあり 58×40 cm, 深さ 5 cmの浅い凹みである。北と西壁に幅 10 cm程の平場が巡っている。北壁際に径 30 cm, 深さ 3 cmの浅いピットが2個見られる。埋土は



図IV-181 P1平面図・エレベーション図及びピット遺物実測図

1層：灰黄褐色粘質土シルトで炭化物や土器を含んでいる。2層：黒褐色粘質土シルトに炭化物や地山の黄褐色粘土を含んでいる。3層：P1の埋土である。黒褐色粘質土シルトで炭化物・焼土・土器を含んでいる。床面の南東部には拳大から人頭大の河原石が多く検出された。意識的に入れられたものである。

遺物は埋土各層や床面から壺、甕、高杯が出土している。222～226・228・229・233・235・236は壺である。口縁部の確認できるものは例外なく粘土帯を有する南四国タイプである。223・225・226は口唇部下端に刻目が、222と233は頸胴部界に施されている。221・227・230～232は甕ですべて南四国型に属する。227と232は上胴部に微隆起帯や浮文で加飾している。231は上胴部に内傾接合痕を明瞭に留めている。また胴部外面は被熱赤変し器表が全面剥離している。234は高杯の脚端部である。外面に沈線を配している。これらの遺物は二次的に火を受けて赤変、煤けているものが多く見られる。223・226・228～232・235は床面出土で、232は中層との接合関係にある。図示し得なかった破片を含めて凹線文や内面ヘラケズリは認められない。中期末の一括性の高い土器群として捉えることができよう。

(4)溝

SD1 (図IV-180)

調査区の東南隅で検出した。後述するSD2の上面で検出した。幅0.8m前後、深さ20cm前後を測り、確認延長は4mである。埋土は黄灰色粘質土シルトで拳～人頭大の河原石が見られる。遺物は弥生土器や土師器の磨耗した細片が数点みられる。SD1は古代に属する。

SD2 (図IV-180)

調査区の東南隅に位置する。極一部を検出したのみであり東隣のIV-8区のSD2に繋がっている。幅は2.5m以上、深さは50cm前後、断面はU字形を呈するものと考えられる。埋土は上層にシルトが、下層には砂礫や粗粒砂が堆積し拳大～人頭大の河原石が含まれている。遺物は少ないが大半は下層の砂礫層から出土している。壺(237～239)と甕(240)、打製石包丁(241)を図示し得た。237は口縁部外面に微隆起帯が貼付され、238の口唇部には3条の凹線文が施されている。240は叩き目が見られる。237・238は中期末～後期前葉に属するが240は後期中葉に比定される。下層には図示したもの以外にも叩きを有する土器片が多く出土している。当調査区で後期の叩き目の残る土器が出土した遺構はSD2のみである。5・6層とした下層の砂礫層は短時間で堆積した洪水砂と考えられる。SD2は田村遺跡が廃絶される要因と考えられている後期中葉の洪水によって埋没した溝として捉えられよう。

(5)ピット

100個近いピットを検出した。この内の43個から土器片などが出土している。古代遺構に属するものが3個、他は弥生中期に属する。図示できた遺物について述べる。

P1 (図IV-181)

調査区の北西部に位置する。平面形は楕円形を呈し長軸40cm、短軸30cm、深さ30cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。埋土中から壺(242・248)、甕(245・249)、蓋(253)が出土している。242は口縁部に微隆起帯を貼付し口唇部に刻目が施されている。248は長胴の壺である。245は南四国型甕で

頸胴部界に列点文を配している。249は内面ヘラケズリが見られる。253は摘みである。中期末に属する。

P5(図Ⅳ-181)

調査区の西南部に位置する。掘立柱建物を構成する柱穴となる可能性もある。径30cm, 深さ20cmを測る。埋土中から数点の弥生土器片が出土している。243は南四国タイプの壺口縁部である。

P9(図Ⅳ-181)

調査区の西南部に位置する。径25cm, 深さ25cmを測る。高杯脚端部(252)が出土している。

P14(図Ⅳ-181)

調査区の西部に位置する。楕円形を呈し長軸25cm, 短軸20cm, 深さ13cmを測る。砥石が1点(254)出土している。4面が研磨され断面は方形を呈する。

P23(図Ⅳ-181)

調査区の東部に位置する。楕円形を呈し長軸50cm, 短軸35cm, 深さ16cmを測る。南四国型甕(246), 高杯脚部(251)が出土している。246は上胴部に微隆起帯と櫛描直線文, 列点文, 浮文などを施した加飾された甕である。

P24(図Ⅳ-181)

調査区の東部に位置する。径40cm前後, 深さ10cmを測る。鉢口縁部(250)が出土している。同一個体と考えられる胴部片も見られる。

P25(図Ⅳ-181)

調査区の東部に位置する。楕円形を呈し長軸25cm, 短軸20cm, 深さ14cmを測る。埋土中から南四国型甕が1点(244)出土している。

P30(図Ⅳ-181)

調査区の東部に位置する。楕円形を呈し長軸40cm, 短軸35cm, 深さ25cmを測り, 径20cmの柱痕跡が認められる。検出面から凹線文を有する瀬戸内型甕(247)が出土している。甕の横には21×10cmの河原石が置かれている。両者とも柱抜き取り後に入れられたものと考えられる。

出土遺物(土器)観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特 徴
				口径	器高	底径		
IV-148	1	ST1 埋土	弥生 壺	15.0	(2.2)		にぶい黄橙色	細粒砂を含む。口縁部を上下に拡張、磨耗が激しく調整不明。
〃	2	〃	弥生 甕		(2.8)		〃	頁岩、チャートの砂粒を含む。口縁部外面 2.5 cm幅の粘土帯貼付。
〃	3	〃	〃		(2.2)		灰黄褐色	チャート、他の砂粒を多く含む。口縁部下端に刻目、断面三角の小突帯を貼付。
〃	4	〃	〃	17.0	(10.9)		灰白色	チャート、他の粗粒砂を多く含む。口縁部外面 2 cm幅の粘土帯貼付、指圧痕顕著。
〃	5	〃	〃	15.6	(3.2)		にぶい黄橙色	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。口縁部下端に刻目、断面三角の小突帯を貼付。
〃	6	〃	〃		(4.2)		〃	頁岩、チャートの砂粒を含む。上胴部に櫛描直線文、断面三角の小突帯、浮文を貼付。
〃	7	〃	弥生 壺		(3.1)	6.8	橙色	チャート、他の砂粒を含む。シャーモットが認められる。内面ナデ、外面磨耗。
〃	8	〃	〃		(2.4)	5.3	褐灰色	チャート、他の砂粒を含む。内外ナデ調整。器壁が薄い。
〃	9	ST1 床面	〃		(3.2)	5.5	灰黄褐色	〃
〃	10	ST1 埋土	弥生 甕		(3.6)	5.3	にぶい黄橙色	チャート、風化礫の砂粒を多く含む。外面縦ハケ、被熱赤変し煤ける。
〃	11	〃	弥生 高杯		(4.4)		にぶい橙色	精土。長石、石英、角閃石を含む。外面縦ヘラミガキ、内面ヘラケズリ+ナデ。器台の可能性あり。
〃	12	ST1 検出面	〃		(2.8)	9.2	橙色	細粒砂を多く含む。端面に2条の凹線文。内面のケズリ不明。
〃	13	ST1 埋土	弥生 器台か	28.0	(2.6)		にぶい橙色	11と同じ胎土。器表は激しく剥離している。
IV-150	23	ST2 埋土	弥生 壺	10.8	(17.0)		黄灰色	チャート、砂岩などの粗粒砂を多く含む。内外面器表の荒れが激しい。
〃	24	〃	〃	16.4	(7.6)		にぶい橙色	チャート、他の粗粒砂を含む。口縁部下半にハケ状原体による刻目、頸胴部界に刺突文。内外面被熱赤変、煤け、器表の荒れが激しい。
〃	25	〃	〃	16.6	(2.5)		オリーブ黒色	チャート、風化礫などの砂粒を多く含む。口唇は凹状、口縁部下端に刻目、微隆起帯を貼付。
〃	26	〃	〃	24.5	(6.7)		にぶい橙色	チャート、他の砂粒を多量に含む。外面煤ける。
〃	27	〃	弥生 甕	13.4	(6.0)		にぶい黄橙色	精土。口縁部は水平に屈曲、上に拡張した口縁部に2条の凹線文。胴部外面縦ハケ。外面煤ける。
〃	28	〃	弥生 壺		(3.8)		橙色	チャート、他の砂粒を多量に含む。内外ナデ。
〃	29	〃	弥生 甕		(4.5)	7.9	にぶい橙色	チャートの砂粒を多量に含む。内面ナデ。外面は磨耗が激しい。
〃	30	〃	弥生 壺		(5.2)	10.3	浅黄橙色	チャートの粗粒砂を多く含む。内外ナデ。
〃	31	〃	〃		(26.7)	9.0	灰黄褐色	チャートの粗粒砂を多く含む。内外面器表の剥離が激しい。底部付近に大きな黒斑。被熱赤変、煤ける。
〃	32	〃	弥生 高杯		(3.4)		浅黄橙色	チャート、他の砂粒を含む。外面ヘラミガキ。充填部剥離。
IV-151	33	ST3 1層	弥生 甕	11.0	(8.9)		〃	赤色風化礫、チャートの粗粒砂を含む。南四国型甕。口縁部外面 1.5 cm幅の粘土帯貼付。内外ナデ。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特 徴
				口径	器高	底径		
IV - 151	34	ST3 床面	弥生 壺		(10.2)		にぶい褐色	チャート, 他の細~粗粒砂を含む。内面指ナデ, 外面は被熱赤変し器表の荒れが激しい。
〃	35	ST3 2層	〃		(10.6)	6.5	浅黄橙色	チャート, 風化礫の砂粒を含む。内外面ナデ。僅かに上げ底。
〃	36	ST3 1層	〃		(8.2)	6.6	〃	チャート, 風化礫の砂粒を含む。外面縦ハケ, 内面指ナデ。底部付近に大きな黒斑。
〃	37	ST3 床面	弥生 甕		(6.7)	4.7	黒褐色	均質な細粒砂を含む。内面ヘラケズリ+ナデ, 外面縦ヘラミガキ。内外面煤ける。底部外面に黒斑あり。
〃	38	〃	〃		(4.1)	5.6	灰黄褐色	細~粗粒砂を多く含む。器壁が薄い。内外ナデ。外面煤ける。
IV - 152	40	ST4 床面	弥生 壺	18.1	(3.3)		にぶい橙色	赤色風化礫, チャート粗粒砂を含む。口縁部下端刻目, 外面 1.8 cm幅の粘土帯貼付。
〃	41	ST4 1層	〃		(6.6)		オリーブ黒色	チャート, 他の粗粒砂を多く含む。口縁部外面 R の列点文, 頸部外面微隆起帯を6条まで認める。
IV - 155	43	ST5 上・下層	〃	21.2	(5.7)		にぶい褐色	チャート, 他の粗粒砂を多く含む。口縁部外面断面三角の粘土帯を貼付, 口頸部内面僅かに横方向のハケ調整。
〃	44	ST5 上層	弥生 甕	16.7	(11.0)		にぶい黄橙色	チャートの粗粒砂を多く含む。内外器表の荒れが激しい。口縁部外面 1.7 cm幅の粘土帯貼付, 頸部界に1条の微隆起帯を貼付し列点文を施す。
〃	45	ST5 上・下層	弥生 壺	16.5	(4.5)		橙色	チャート, 砂岩などの粗粒砂を多く含む。内外面器表の荒れが激しい。口縁部外面 2 cm幅の粘土帯貼付。
〃	46	〃	〃	13.0	(13.0)		明赤褐色	石英砂粒多い。被熱赤変, 器表の荒れが激しい。
〃	47	〃	〃	17.1	(6.8)		浅黄橙色	チャート, 他の砂粒を多量に含む。口縁部外面に 2 cm幅の粘土帯貼付, 指圧痕。口唇は横ナデにより凹状を呈する。
〃	48	ST5 上層	〃		(6.0)	7.3	にぶい褐色	チャートの細・粗粒砂を含む。内面ナデ, 外面縦ハケ。
〃	49	〃	弥生 甕		(4.2)	5.5	にぶい褐色	風化礫の粗粒砂を含む。内外ナデ調整。
〃	50	〃	〃		(5.0)	4.2	にぶい黄橙色	チャートの粗粒砂を多く含む。内外面器表の荒れが激しい。
〃	51	ST5 上・下層	〃	20.0	(5.6)		灰黄褐色	チャートの粗粒砂を多く含む。内外面器表の荒れが激しい。口縁部外面 2.5 cm幅の粘土帯貼付, 下端に刻目。口唇は横ナデにより凹状を呈する。
〃	52	ST5 下層	弥生 壺	13.4	(10.8)		明赤褐色	精土。器表の荒れが激しい。口縁部外面細い凹線1条, 頸部外面凹線文2条, 口唇は横ナデにより凹状。
〃	53	〃	〃	16.5	(18.7)		橙色	チャート, 風化礫の粗粒砂を含む。器表の荒れが激しい。口縁部外面薄い粘土帯貼付。口唇は面取。
〃	54	〃	〃	18.2	(10.0)		にぶい褐色	チャート, 赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。内外面器表の荒れが激しい。口縁部外面 2 cm幅の粘土帯貼付, 頸部界に櫛描直線文。
〃	55	〃	〃		(16.8)		にぶい黄橙色	石英砂粒を多く含みチャートを全く含まない。胴部最大径付近にLの列点文。内面指ナデ痕顕著。搬入品。
〃	56	〃	〃	23.4	(10.7)		にぶい褐色	チャートの細粗粒砂を含む。口縁部外面 3.5 cm幅の粘土帯貼付, 口唇に沈線, 下端に刻目。外面は煤ける。
〃	57	〃	〃	27.8	(9.1)		にぶい褐色	チャート, 他の砂粒を多く含む。口縁部外面 1.3 cmの粘土帯貼付。下端に刻目。
〃	58	〃	〃	20.4	(17.8)		にぶい黄褐色	チャート, 他の細・粗粒砂を含む。口唇は凹状, 下端に刻目。口頸部内面横, 外面縦, 胴部外面右下がりのハケ調整。胴部外面の一部にヘラミガキ。
〃	59	〃	弥生 甕	21.7	(14.3)		にぶい黄橙色	チャート, 他の砂粒を多く含む。口縁部外面 2 cm幅の粘土帯貼付。下端に刻目。頸部界に櫛描直線文と櫛描縞状文を施す。胴部外面煤ける。
IV - 156	60	〃	〃	21.6	(5.7)		褐灰色	チャート, 風化礫, 他の細~粗粒砂を多く含む。黒褐色の胎土。口縁部外面断面三角の微隆起帯を貼付, 櫛描直線文を配する。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-156	61	ST5 下層	弥生 甕	20.1	(7.3)		灰黄褐色	チャートの粗粒砂を多く含む。口縁部外面 2cm幅の粘土帯貼付。口唇強いナデ, 頸胴部界に櫛描直線文。外面縦, 内面横ハケ。外面煤ける。
〃	62	〃	〃	23.5	11.7		黄褐色	頁岩, チャート, 風化礫の細・粗粒砂を多く含む。口唇面取, 下端に刻目, 刻目突帯を貼付。上胴部から頸部にかけて 10 条以上の微隆起帯貼付。
〃	63	〃	〃	20.7	(15.6)		にぶい褐色	チャートの粗粒砂を多く含む。口唇強い横ナデ, 下端に刻目。口縁部外面に 1 条, 上胴部に 2 条の微隆起帯貼付。頸部外面爪跡状の列点文。
〃	64	〃	〃		(7.6)		黒色	チャート, 風化礫の粗粒砂を多く含む。上胴部に 3 条の微隆起帯貼付。その下に楕円形状の浮文。
〃	65	〃	弥生 壺		(5.5)		にぶい橙色	チャート, 頁岩, 赤色風化礫を含む。微隆起帯を貼付しその間に櫛描直線文を施す。円形浮文も見られる。被熱赤変。
〃	66	〃	弥生 甕		(3.1)		にぶい褐色	チャート, 他の細~中粒砂。上胴部に 5 条の微隆起帯貼付, 上位には円形浮文を貼付。
〃	67	〃	弥生 壺	3.0	8.6	5.0	浅黄橙色	精土。内面指圧痕顕著, 外面ヘラミガキ。
〃	68	〃	弥生 甕		(5.1)		灰黄褐色	頁岩, 風化礫の細~粗粒砂。上胴部に微隆起帯, その下に棒状浮文を貼付, 上に櫛描直線文。
〃	69	〃	弥生 壺		(31.9)	7.6	橙色	結晶片岩, 小礫を含む。器表の荒れが激しい。内面頸部直下までヘラケズリ。全面被熱赤変。
〃	70	〃	弥生 甕	16.1	(15.2)		〃	チャートの細~粗粒砂を多く含む。口縁部は上に僅かに拡張し 2 条の凹線文。内面ヘラケズリ, 外面縦ハケ。
〃	71	〃	〃	9.7	14.9	3.8	灰褐色	チャートの粗粒砂を多く含む。口縁部外面 0.8 cm幅の粘土帯貼付。下半に棒状工具による太い刻目。外面煤ける。底部付近が被熱赤変。
〃	72	〃	〃	19.0	(6.9)		にぶい褐色	石英, 風化礫, 結晶片岩の細粗粒砂を含みチャートを全く含まない。口縁部は上に拡張し 2 条の凹線文, 上胴部に L の列点文。搬入品。
〃	73	〃	〃		(3.5)	6.5	にぶい黄橙色	チャート, 頁岩, 風化礫の細粒砂を多く含む。内面ヘラケズリ, 外面ヘラミガキ。
〃	74	〃	〃		(7.0)	6.1	〃	チャートの粗粒砂を含む。内面ヘラミガキ, 外面は縦ハケ+ナデ。
〃	75	〃	〃		(6.8)	6.1	暗灰黄色	チャート, 他の粗粒砂を含む。内面は下→上の強いケズリ, 外面は下→上の弱いケズリ。内外面煤ける。
〃	76	〃	〃		(5.1)	5.8	にぶい褐色	チャートの細~粗粒砂を多く含む。内面は下→上のケズリ+ナデ。外面は器表の荒れが激しい。被熱赤変。
〃	77	〃	〃		(4.6)	5.0	灰黄褐色	チャート, 他の粗粒砂を含む。内外ナデ, 煤ける。
IV-157	78	〃	弥生 壺		(12.5)	7.8	にぶい橙色	風化礫の粗粒砂を多く含む。内面は指圧による縦方向のナデ, 外面は縦ハケ+縦ヘラミガキ。
〃	79	〃	〃		(9.2)	5.8	にぶい黄橙色	チャート, 他の粗粒を含む。外面下→上の弱いケズリ, 内面指ナデ。
〃	80	〃	弥生 甕		(4.0)	5.5	明褐色	チャート, 他の粗粒を含む。内外面器表の荒れが激しい。内面煤ける。
〃	81	〃	〃		(4.3)	5.1	にぶい橙色	チャート, 風化礫の細・粗粒砂を含む。内面は下→上のケズリ+ナデ。外面縦ヘラミガキ。被熱赤変。
〃	82	〃	弥生 壺		(21.0)	7.6	橙色	チャート, 他の細~粗粒砂を含む。内面ナデ, 外面縦ヘラミガキ。
〃	83	〃	〃		(13.0)	8.6	灰黄褐色	チャート, 石英などの砂粒を多く含む。内面指頭によるナデ, 外面は器表の荒れが激しい。被熱赤変, 煤ける。
〃	84	〃	弥生 高杯		(10.4)	11.0	褐灰色	結晶片岩, 石英, 赤色風化礫の細粒を多く含む。円盤充填底。脚内面ヘラケズリ, 外面縦ヘラミガキ。下位に径 4 mm の小孔を等間隔に 6 個穿つ。
〃	85	〃	〃	23.3	20.7	11.8	橙色	石英, 赤色風化礫の砂粒を含む。内外面器表の荒れが激しく調整の観察不可。口縁部下に 2 条の凹線文。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV - 157	86	ST5 下層	弥生 把手		8.7		にぶい黄橙色	石英粒を多く含むチャートなし。上部は挿入部から剥離している。径2.1cm。
〃	87	ST5 床面	弥生 壺		(8.4)	5.3	橙色	チャート, 風化礫の粗粒砂を含む。内外ナデ。
〃	88	〃	弥生 甕		(5.3)		灰黄褐色	チャート, 風化礫の粗粒砂を含む。上胴部に4条の微隆起帯貼付。帯間に櫛描直線文。文様帯の最上面には棒状工具による刺突文。
〃	89	〃	弥生 高杯	29.0	(1.3)		浅黄橙色	高杯の鐔である。チャート, 他の粗粒砂を多く含む。内外横ナデ調整で口唇は凹状を呈す。
〃	90	〃	弥生 壺	16.9	(2.9)		灰黄褐色	チャート, 風化礫の粗粒砂を含む。口縁部外面断面三角の微隆起帯貼付, 口唇下端に刻目。頸部外面櫛描直線文。
〃	91	〃	〃	26.0	(14.3)		にぶい黄橙色	チャート, 他の細~粗粒砂を含む。口縁部外面は底辺2.8cm幅の粘土帯貼付, 口唇は棒状浮文とハケ状原体による列点文。頸胴部界に扁平な刻目突帯を配する。
〃	92	〃	〃	14.1	(7.3)		灰黄色	無頸壺。角閃石, 石英粒を含む。外面上部5条の凹線文。外面はハケ+ナデ。二次的に被熱赤変。搬入品。
〃	93	〃	弥生 甕	16.3	(6.0)		にぶい赤橙色	チャートの粗粒砂を多く含む。口縁部外面1.5cm幅の粘土帯貼付, 口唇面取。内面指頭によるナデ, 外面縦ハケ。被熱赤変し器表の荒れが激しい。
〃	94	〃	〃	18.9	(11.2)		暗灰黄色	チャート, 他の砂粒を含む。口縁部外面は薄い粘土帯を貼付し指頭による押圧。口唇は強い横ナデ, 胴部外面縦ハケ, 内面ナデ。外面煤ける。
IV - 158	95	〃	〃	12.7	(13.0)		橙色	石英砂粒を含み, チャートを含まない。受け口状の口縁部。上胴部外面は右下がりの叩き痕を残す。内面上胴部まで下→上のヘラケズリ。搬入品。
〃	96	〃	〃	13.5	(12.8)		〃	チャート, 赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。口唇面取, 上胴部外面貝殻腹縁によるLの列点文, 内面は上胴部までヘラケズリ。被熱赤変。
〃	97	ST5 P1	〃	13.9	(4.4)		にぶい橙色	チャート, 赤色風化礫の砂粒を含む。口唇面取。胴部外面縦ハケ, 内面は強い縦ナデ。外面煤ける。
〃	98	〃	弥生 壺	(6.4)	7.3		にぶい黄橙色	チャート, 他の粗粒砂を多く含む。内面ナデ。
〃	99	ST5 下層・P1	〃	(13.0)			浅黄橙色	チャートの粗粒砂を多く含む。外面ヘラミガキ, 内面ナデ。
〃	100	〃	〃	(13.5)	(7.0)		にぶい橙色	チャートの粗粒砂を多く含む。外面縦方向の弱いケズリ, 内面指頭によるナデ。
〃	101	ST5 下層・床	〃	(15.0)	8.2		橙色	チャート, 風化礫の粗粒砂を含む。内外器表の荒れが激しい。外面下位から底部にかけて大きな黒斑。
〃	102	ST5 床面	弥生 甕	(4.4)	6.1		〃	95と同一個体。
〃	103	〃	〃	(5.4)	4.5		灰黄褐色	チャートの粗粒砂を多く含む。外面縦ハケ+ヘラミガキ。内外煤ける。
〃	104	ST5 P1	弥生 壺	(4.8)	7.5		明赤褐色	チャート, 頁岩, 他の粗粒砂を多く含む。二次的に被熱赤変, 器表の荒れが激しい。
IV - 161	115	ST6 上層	〃	12.0	(5.8)		橙色	赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。口縁部外面1.5cm幅の粘土帯を貼付し列点文を施す。口唇は半裁竹管状工具で刺突文を配する。
〃	116	〃	〃	15.8	(1.9)		にぶい黄橙色	チャート, 他の粗粒砂が多い。口縁部外面1.2cm幅の粘土帯貼付, 口唇は面取し, 下半に大きな刻目を施す。
〃	117	〃	〃	(8.5)			橙色	チャート, 赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。器表の荒れが激しい。
〃	118	ST6上・下 層・床面	〃	16.5	48.2	9.7	浅黄橙色	チャートの粗粒砂を多く含む。口縁部外面1.5cm幅の粘土帯を貼付し格子目文, 上胴部には櫛描直線文と列点文。外面ベンガラ塗布, 器表が荒れる。
〃	119	ST6 下層	弥生 甕	14.3	(1.6)		灰褐色	細粒砂を含む。口縁部を上へ拡張し外面に2条の凹線文を配する。外面は激しく煤ける。
〃	120	ST6 上層	弥生 壺	(4.8)			にぶい黄褐色	チャート, 他の中粒砂を含む。頸胴部界に竹管文とその下に櫛描直線文を僅かに認める。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特 徴
				口径	器高	底径		
IV-161	121	ST6 上層	弥生 甕		(2.9)	6.1	にぶい黄褐色	赤色風化礫の中・粗粒砂を含む。薄い作り。内面下→上ヘラケズリ、外面ヘラミガキ。外面煤ける。
〃	122	〃	弥生 壺		(5.1)	7.3	にぶい赤褐色	チャート、頁岩、他の粗粒砂を多く含む。内外ナデ。
〃	123	ST6 床面	〃		(9.3)	8.2	にぶい橙色	チャート、他の中・粗粒砂を含む。内面下→上ヘラケズリ、外面は丁寧なヘラミガキ。下胴部外面から底部に大きな黒斑。
〃	124	ST6 上層	〃		(5.7)	8.0	〃	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。内外ナデ、外面被熱赤変。
〃	125	〃	〃		(13.6)	7.0	橙色	チャート、他の中・粗粒砂を多く含む。赤色風化礫の砂粒も目立つ。内外ナデ、器表の荒れが激しい。
〃	126	ST6 上・下層	〃	17.7	(27.4)		浅黄橙色	チャート、赤色風化礫を多く含む。口縁部外面2cm幅の粘土帯を貼付し指頭で押圧。頸胴部界にヘラで格子目文を描く。
〃	127	ST6 上層	弥生 紡錘車				にぶい橙色	径2.0cm、厚さ0.6cm、2.6g。土器転用の紡錘車。チャート、他の中・粗粒砂を含む。中心部に径2mmの孔を両面から穿つ。
IV-163	133	ST7 床面	弥生 壺		(7.1)		灰白色	チャート、他の細・中粒砂を多く含む。上胴部に櫛描直線文を一带巡らす。
〃	134	〃	弥生 鉢	18.9	(5.4)		浅黄色	頁岩、チャート、長石の砂粒を含む。口縁部外面に1.5cm幅の粘土帯貼付、口唇面取。
〃	135	ST7 埋土	弥生 壺		(2.9)	5.6	灰黄褐色	チャート、頁岩の細・中粒砂を含む。外面縦ヘラミガキ。
〃	136	〃	〃		(4.5)	5.1	にぶい橙色	チャートの粗粒砂を多く含む。被熱赤変、内外面器表の荒れが激しい。
IV-164	140	ST8 埋土	〃	17.5	(1.7)		にぶい黄橙色	チャート、他の細・中粒砂を含む。口縁部外面1.2cm幅の粘土帯貼付+指頭圧痕。
〃	141	〃	〃	17.5	(2.0)		にぶい橙色	チャートの粗粒砂を含む。口縁部外面に1.8cm幅の粘土帯を貼付し両側を強くなでることによって中央が隆帯状を呈し、そこに刻目を施す。口唇は凹状。
〃	142	〃	〃	18.1	(1.3)		褐灰色	チャートの粗粒砂を多く含む。口唇下半刻目、口縁部外面に微隆起帯貼付。
〃	143	〃	弥生 甕		(8.2)		にぶい橙色	チャート、他の細・中粒砂を多く含む。内面は下→上のヘラケズリ+ナデ。外面にも弱いケズリが認められる。外面煤ける。
〃	144	〃	弥生 壺		(2.5)		黒褐色	チャート、他の細～粗粒砂を多く含む。上胴部外面櫛描直線文間に微隆起帯を貼付、径5mmの円形浮文を貼付し刺突。
〃	145	ST8 床面	〃		(3.4)		灰色	チャート、他の細～粗粒砂を多く含む。櫛描直線文3条、微隆起帯3条、棒状浮文貼付。
〃	146	〃	弥生 高杯	24.7	(5.9)		浅黄橙色	チャートの細・中粒砂を多く含む。口縁部外面3条の凹線文、内外ハケ+ヘラミガキ。
〃	147	ST8 埋土	〃		(3.1)	(17.0)	にぶい黄褐色	チャートの中・粗粒砂を多く含む。内面左←右のヘラケズリ。端部は僅かに上下に拡張、端面に2条の凹線文。裾にはノ字状列点文。
IV-165	150	ST9 上層	弥生 壺	19.0	(13.0)		〃	チャートの粗粒砂、赤色風化礫を多く含む。口縁部外面2～2.5cm幅の粘土帯貼付。外面はハケ+ヘラミガキ、一部にハケ原体の圧痕が残る。内面ナデ。
	151	〃	〃	18.7	(10.5)		にぶい橙色	チャートの砂粒を含む。受け口状口縁を呈する。内面横方向のハケを僅かに認める。外面は荒れが激しい。
	152	ST9 下層	〃	15.5	(14.8)		浅黄色	チャートや風化礫の細・中粒砂を多く含む。口縁部外面に列点文と円形浮文、頸部に13条の微隆起帯を貼付しその間には櫛描直線文を配する。
	153	ST9 上層	〃	25.5	(8.5)		〃	チャート、他の細粗粒砂を多く含む。口縁部外面3cm幅の粘土帯貼付。口唇面取、口縁部ハケ状原体による列点文。内外器表の荒れが激しい。
	154	ST9 下層	〃		(3.2)	4.7	〃	チャート、他の粗粒砂を多く含む。内面ナデ、外面ハケ+ヘラミガキ。
	155	ST9 上層	〃		(3.5)	7.8	橙色	チャート、他の粗粒砂を多く含む。内外面器表の剥離が激しい。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-165	156	ST9 上層	弥生 高杯		(3.2)	10.3	にぶい橙色	チャート, 雲母, 石英などの細~粗粒砂を多く含む。裾端部は強い横方向のナデ。
IV-166	158	SK6	弥生 壺	10.0	(12.1)		橙色	チャート, 他の砂粒を含む。口縁部外面4条の凹線文, ハケ状原体による連続圧痕。
〃	159	〃	〃		(4.5)		にぶい黄橙色	チャート, 頁岩などの細~粗粒砂を多く含む。上胴部を微隆起帯4条, 櫛描直線文, 竹管文などで飾る。
〃	160	〃	弥生 甕	15.4	(4.4)		灰白色	チャート, 赤色風化礫の砂粒を多く含む。口縁部内外面強い横ナデ。
〃	161	〃	〃		(3.0)	5.3	〃	チャート, 他の細粒砂を多く含む。外面ヘラミガキ, 内面ナデ。内面は底部以外煤ける。外面も煤ける。
〃	162	〃	〃		(4.0)	6.1	にぶい黄橙色	赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。内面下→上のヘラケズリ。外底はドーナツ状に煤ける。
〃	163	〃	〃		(3.0)	5.5	〃	チャートの粗粒砂を含む。内面は底部から1cm程上が全体に焦げている。
〃	164	〃	弥生 高杯		(4.3)	12.0	浅黄褐色	チャートの粗粒砂を多く含む。内面左←右のヘラケズリ。端部に凹線, 上方に拡張。
IV-169	166	SK2	弥生 甕	13.1	(3.7)		黄灰色	チャート, 頁岩の細・中粒砂を含む。口縁部内外横方向ナデ, 口唇は凹状を呈する。
〃	167	〃	〃	18.7	(5.7)		にぶい褐色	チャートの細~粗粒砂を多く含む。口縁部端部は上方に拡張され3条の凹線文が施される。
IV-170	169	SK3	弥生 壺	12.8	(4.4)		にぶい橙色	チャート, 風化礫などの粗粒砂を多く含む。器表の荒れが激しい。
〃	170	〃	〃		(3.8)		にぶい褐色	チャート, 粗粒砂を多く含む。口縁部外面1.8cm幅の粘土帯貼付。
〃	171	〃	〃		(3.1)		明黄褐色	チャートの粗粒砂を含む。口縁部外面1.8cm幅の粘土帯貼付。口唇は強い横ナデ。
〃	172	〃	弥生 甕		(3.4)	6.0	にぶい黄橙色	チャートの粗粒砂を多く含む。内外ナデ。
IV-171	173	SK5	弥生 壺	19.6	(6.9)		灰白色	チャートの粗粒砂を多く含む。口縁部端部を僅かに上方に拡張。口縁部外面の貼付粘土帯が剥離欠損。
〃	174	〃	〃		(4.4)		〃	チャートの粗粒砂を多く含む。上胴部に断面三角形突帯。
〃	175	〃	〃		(4.6)		〃	チャートの中・粗粒砂を多く含む。上胴部外面格子目状の文様, 櫛描直線文, 同波状文を施す。
〃	176	〃	〃		(4.7)	4.1	にぶい黄褐色	チャートの細~粗粒砂, 雲母を含む。外面ヘラミガキ, 内面ナデ。外面煤ける。
〃	177	〃	〃		(5.2)	6.2	橙色	チャート, 他の粗粒砂を多く含む。外面被熱赤変。器表の荒れが激しい。
〃	178	〃	〃		(10.6)	6.3	にぶい黄橙色	頁岩, チャートなどの中粒砂を含む。内外面器表の荒れが激しい。
〃	179	〃	弥生 甕	(3.0)	4.3		灰黄褐色	チャートの粗粒砂を含む。外面煤ける。
〃	180	〃	〃		(4.1)	5.0	にぶい黄橙色	チャート, 他の細~粗粒砂を含む。外面ヘラミガキ, 内面指ナデ。
〃	181	〃	弥生 蓋	20.5	(4.9)		にぶい橙色	チャート, 風化礫を多く含む。口縁部内面が環状に煤ける。
IV-172	182	SK8	弥生 壺	23.9	(3.5)		浅黄褐色	チャート, 頁岩, 風化礫を多く含む。口縁部外面に3cm幅の粘土帯貼付。
〃	183	〃	弥生 高杯		(6.0)	11.1	橙色	チャート, 風化礫を多く含む。内外面ナデ。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特 徴
				口径	器高	底径		
IV-173	184	SK12	弥生甕		(5.9)		オリーブ黒色	頸胴部に微隆起帯を貼付し楕円形浮文を貼付。
〃	185	〃	〃		(5.5)	5.6	にぶい黄橙色	チャート, 他の細~粗粒砂を多く含む。外面は被熱赤変+煤ける。器表の荒れが激しい。
〃	186	〃	〃		(8.4)	3.8	〃	チャート, 風化礫の粗粒砂を多く含む。外面は被熱赤変+煤ける。器表の荒れが激しい。
IV-174	187	SK13	〃		(3.9)	5.5	褐色	精土, 砂粒を含まず, シャーモットを認める。内面下→上へラケズリ。外面縦ハケ。搬入品。
〃	188	SK14	〃	18.8	(2.6)		灰黄褐色	チャート, 風化礫の粗粒砂を多く含む。口縁部外面 1.2 cm幅の粘土帯を貼付し更に微隆起帯 1 条を巡らす。内外面器表の荒れが激しい。
〃	189	SK15	弥生壺		(4.8)		赤褐色	チャート, 風化礫の粗粒砂を多く含む。上胴部に断面三角の突帯。内外器面の荒れが激しい。
〃	190	〃	〃		(6.0)	8.0	にぶい黄橙色	チャート, 頁岩の砂粒を含む。内外ナデ。
〃	191	SK16	弥生甕		(2.3)	6.6	灰黄褐色	チャート, 赤色風化礫の粗粒砂を含む。内面へラケズリ。
〃	192	〃	弥生高杯	23.0	(4.0)		にぶい黄橙色	チャート, 頁岩などの細・中粒砂を含む。口縁部を外方に拡張。器表剥離。
IV-175	193	SK18	弥生壺		(2.5)		灰白色	チャート, 頁岩, 風化礫の粗粒砂。口縁部外面に 1.8 cm幅の粘土帯貼付。
〃	194	〃	弥生甕		(4.0)	6.4	褐灰色	チャートの粗粒砂を含む。外面煤ける。
〃	195	SK19	弥生壺	14.2	(4.0)		にぶい橙色	チャート, 頁岩, 風化礫の粗粒砂を多く含む。口縁部外面に幅 1.2 cmの粘土帯貼付。口唇下半に太い刻目。器表の荒れが激しい。
IV-176	196	SK20	〃	18.0	(4.0)		〃	チャート, 赤色風化礫の粗粒砂を含む。口縁部外面に 3 cm幅の粘土帯貼付。口唇強い横ナデ。
〃	197	〃	弥生鉢	25.2	(3.1)		明灰褐色	チャートの粗粒砂を多く含む。口唇に 2 条の凹線文。
〃	198	SK21	弥生壺	28.2	(5.2)		浅黄橙色	チャートの小礫~粗粒砂を含む。口縁部外面に 2.3 cm幅の粘土帯貼付。頸部外面縦ハケ, 内面は横へラミガキ。
〃	199	〃	〃	13.5	(15.8)		にぶい橙色	チャート, 風化礫の粗粒砂を多く含む。口縁部に刻目。器表の荒れが激しい。
〃	200	〃	〃		(4.6)		灰白色	チャート, 風化礫の粗粒砂を含む。胴部外面 4 条まで微隆起帯を認む。微隆起帯間には櫛描直線文があったものと考えられる。外面煤ける。
〃	201	〃	〃		(6.0)		にぶい黄橙色	チャートの粗粒砂を多く含む。上胴部に櫛描直線文と櫛描簾状文を配する。内外面器表の荒れが激しい。
〃	202	〃	〃		(8.7)	8.8	〃	チャートの粗粒砂を多く含む。内外面器表の剥離が激しい。
〃	203	〃	〃		(7.3)	7.0	オリーブ黒色	チャートを含まない。石英, 雲母を含む。外面縦へラミガキ, 内面下→へラケズリ。搬入品。
〃	204	〃	〃		(6.6)	9.2	橙色	チャート, 風化礫の砂粒を含む。内外面器表の荒れが激しい。
〃	205	〃	〃		(4.6)	8.6	灰白色	チャート, 頁岩の粗粒砂を含む。内外面器表の荒れが激しい。
〃	206	〃	弥生甕		(4.2)		黒色	風化礫, チャートの粗粒砂を多く含む。上胴部の上から刺突を施した円形浮文, 微隆起帯 2 条と刺突文, 更にその下に棒状浮文。
〃	207	〃	〃		(8.6)		褐灰色	チャート, 頁岩の砂粒を含む。内面は下→上のへラケズリ, 外面縦へラミガキ。
〃	208	〃	〃		(4.1)	6.2	にぶい橙色	チャートの粗粒砂を多く含む。内面は下→上へラケズリ, 外面縦ハケ。外面被熱赤変, 内面煤ける。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-177	209	SK23	弥生壺	10.0	(4.4)		黄灰色	チャート, 他の粗粒砂を含む。口唇面取, 下半に刻目, 上胴部には列点文を配する。
〃	210	SK24	〃	16.0	(6.2)		浅黄橙色	チャート, 頁岩の細~中粒砂を含む。器表の荒れが激しい。
〃	211	〃	〃	20.6	(3.7)		灰黄褐色	チャートの粗粒砂を多く含む。口唇は横ナデにより凹状をなし下半に刻目。外面縦ヘラミガキ, 煤ける。
〃	212	〃	弥生甕		(1.5)		〃	チャート, 頁岩, 風化礫の粗粒砂を含む。口縁部を上へ拡張し2条の凹線を配する。
IV-178	213	SK28	〃	20.7	(2.1)		にぶい褐色	チャート, 風化礫の砂粒を多く含む。口唇下半に刻目, 口縁部外面に断面三角突帯貼付。
〃	214	〃	〃		(1.5)		黒褐色	チャート, 他の砂粒を含む。口唇下端に細い刻目。口縁部外面に1cm幅の粘土帯貼付。
〃	215	〃	〃		(15.6)		にぶい黄橙色	赤色風化礫, チャートの中~粗粒砂を多く含む。上胴部に断面三角の小突帯を貼付。口縁部・胴部外面煤ける。
〃	216	〃	弥生鉢	13.1	7.4	3.9	灰黄褐色	チャート, 他の粗粒砂が多い。内外器面が荒れる。外面が焦げる。
〃	218	SK29	弥生壺	20.0	(4.3)		にぶい褐色	チャート, 石英の中~粗粒砂を多く含む。口唇は強い横ナデ, 下半に刻目。口縁部外面は櫛描直線文。外面に黒褐色物塗布。
〃	219	〃	〃		(4.0)	9.0	にぶい橙色	チャートの中~粗粒砂を多く含む。外面縦ヘラミガキ。
〃	220	〃	〃	18.0	(3.9)		灰白色	チャート, 他の砂粒を含む。外面に凹線文。
IV-179	221	SK30 上層	弥生甕	12.6	18.5	4.8	橙色	チャート, 他の粗粒砂を多く含む。口唇面取, 口縁部外面に1.3cm幅の粘土帯貼付。内外ナデ。器表剥離が顕著。
〃	222	SK30 下層	弥生壺	17.5	(7.8)		明赤褐色	赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。口縁部外面に2.7cm幅の粘土帯貼付。頸胴部界に刺突文。器表の荒れが激しい。
〃	223	SK30 床	〃	17.8	(6.2)		橙色	チャート, 赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。口縁部外面2cm幅の粘土帯貼付, 口唇下半に刻目。
〃	224	SK30 下層	〃	18.8	(17.7)		浅黄橙色	チャートの粗粒砂を多く含む。口唇面取, 口縁部外面に2.5cm幅の粘土帯貼付。頸部外面横ヘラミガキ, 胴部外面縦ヘラミガキ。
〃	225	〃	〃	20.4	(5.9)		にぶい黄橙色	チャート, 赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。口縁部外面2cm幅の粘土帯貼付。口唇下半に刻目。
〃	226	SK30 床	〃	21.2	(2.2)		明赤褐色	チャート, 他の粗粒砂を多く含む。口唇面取, 下端に刻目。口縁部外面断面三角突帯。外面煤ける。
〃	227	SK30 中層	弥生甕		(4.5)		灰黄褐色	チャートの細~粗粒砂を含む。上胴部に微隆起帯を貼付しその間に櫛描直線文, 最下段に楕円形浮文を貼付。
〃	228	SK30 床	弥生壺		(11.0)		にぶい橙色	チャート, 他の粗粒砂を多く含む。外面は器表の荒れが激しい。
〃	229	〃	〃		(6.5)	9.0	橙色	チャート, 風化礫の粗粒砂を多く含む。外面ハケ。
〃	230	〃	弥生甕	19.2	(14.0)		にぶい黄橙色	チャート粗粒砂を多く含む。内外面器表の荒れが激しい。外面煤ける。被熱赤変による剥離が激しい。
〃	231	SK30 下層・床	〃	18.2	27.4	5.3	灰黄褐色	チャートの粗粒砂を多く含む。口縁部外面2cm幅の粘土帯貼付。上胴部断面に接合痕。外面縦ハケ, 内面横ハケ。外面は被熱赤変, 剥離顕著。
〃	232	SK30 中層・床	〃	17.1	27.3	5.8	にぶい黄褐色	チャート, 他の砂粒を含む。口縁部外面1.7cm幅の粘土帯貼付, 口唇下端に刻目。上胴部に3条の微隆起帯, 列点文。外面被熱赤変, 剥離顕著。
〃	233	SK30 埋土	弥生壺		(8.9)		灰黄褐色	チャート, 頁岩の粗粒砂を含む。上胴部外面に列点文。外面煤ける。胴部内面は焦げる。
〃	234	SK30 中層	弥生高杯		(3.0)	15.4	橙色	チャート, 赤色風化礫, 雲母を含む。脚端面と内面強い横ナデ。外面は2~3条の沈線と縦の短沈線を配する。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-179	235	SK30 床	弥生 壺		(16.5)	6.8	にぶい黄橙色	チャート, 他の粗粒砂~小礫を含む。外面縦ハケ。外面被熱赤変, 器表剥離。
〃	236	SK30	〃		(5.0)	4.8	暗灰黄色	チャート, 他の砂粒を含む。外面器表剥離, 煤ける。
IV-180	237	SD2 砂礫層	〃	17.0	(2.4)		にぶい黄橙色	チャート, 他の砂粒を含む。口唇面取, 下端に細い刻目。口縁部外面に微隆起帯。
〃	238	〃	〃	19.8	(5.8)		にぶい橙色	チャートの細~粗粒砂を多く含む。口縁部下方に拡張し口唇に凹線文3条を配する。
〃	239	〃	〃		(2.1)	7.9	〃	チャート, 風化礫を含む。外面下→上の弱いケズリ。
〃	240	〃	弥生 甕		(5.1)	7.7	にぶい黄橙色	チャートの細~粗粒砂を含む。外面に叩き+ナデ。
IV-181	242	P1	弥生 壺	19.0	(2.3)		灰色	風化礫の細粗粒砂を多く含む。口唇下端に刻目, 微隆起帯を貼付。
〃	243	P5	〃	14.9	(1.8)		にぶい黄褐色	チャート, 風化礫の砂粒を多く含む。口縁部外面微隆起帯を貼付。
〃	244	P25	弥生 甕	17.5	(9.3)		にぶい黄褐色	風化礫, チャートの中粒砂を多く含む。口縁部外面2cm幅の粘土帯貼付, 内面は横ハケ+横ヘラミガキ, 外面は縦ハケ+縦ヘラミガキ。
〃	245	P1	〃	12.6	(10.2)		〃	チャートの細~粗粒砂を多く含む。口縁部外面に1.5cm幅の粘土帯貼付。頸胴部界に列点文。胴部外面ハケ。外面煤ける。
〃	246	P23 検出面	〃	17.4	(11.1)		にぶい橙色	チャート, 他の細~粗粒砂を多く含む。口唇強い横ナデ, 下端刻目。上胴部を楕円形浮文, 櫛描直線文, 微隆起帯で飾る。被熱赤変, 器表の荒れが激しい。
〃	247	P30	〃	17.1	(10.1)		灰黄褐色	チャートの粗粒砂を多く含む。口縁部を上方に拡張し2条の凹線文を配する。胴部外面に列点文。内外面被熱のため器表の剥離が激しい。
〃	248	P1	弥生 壺		(26.0)	6.2	橙色	チャート, 頁岩の細~粗粒砂を含む。内面は指ナデ痕が顕著, 外面は器表の剥離が著しい。
〃	249	〃	弥生 甕		(14.3)		にぶい褐色	チャート, 他の中粒砂を多く含む。内面は下→上ヘラケズリ, 外面縦ヘラミガキ。
〃	250	P24	弥生 鉢	27.8	(2.0)		にぶい橙色	赤色風化礫の中~粗粒砂を多く含む。口縁部外面3.5cm幅の粘土帯貼付。
〃	251	P23	弥生 高杯		(8.2)		橙色	チャートの中粒砂を多く含む。外面縦ハケ, 内面ナデ。
〃	252	P9	〃		(1.7)	13.4	浅黄褐色	チャート, 他の中粒砂を多く含む。内面は左←右ヘラケズリ。端部を摘まみ上げる。
〃	253	P1	弥生 蓋		(1.7)		灰黄褐色	天井外面が凹状。外面被熱赤変。

出土遺物(石器)観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種	法量 (cm/g)				石材	特徴
				長さ	幅	厚さ	重さ		
IV-148	14	ST1 埋土	太形蛤 刃石斧	(7.3)	(3.8)	(1.9)	(72)	結晶片岩	刃部の細片。研磨痕が見られる。
〃	15	〃	〃	(17.0)	8.0	5.2	(1120)	御荷鉾緑色岩	基部側が1/3ほど欠損。刃部は斜めで後側縁側が大きく磨耗。
〃	16	〃	扁平片 刃石斧	2.8	2.1	0.6	5.8	頁岩	扁平な自然礫に刃部をつける。
〃	17	〃	刃器	5.5	7.7	1.3	66.6	砂岩	扁平な河原石を打割。打面の反対側に両側から刃部が付けられている。
〃	18	〃	〃	6.3	8.7	1.5	96.7	〃	〃

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種	法量 (cm/g)				石材	特徴
				長さ	幅	厚さ	重さ		
IV-148	19	ST1 壁溝	刃器	10.5	7.2	1.8	143	砂岩	扁平な河原石を打割。打面の反対側に両側から刃部が付けられている。
〃	20	ST1 埋土	石鏃	1.7	1.1	0.4	0.4	サヌカイト	小型。平基式。
〃	21	〃	〃	3.5	1.9	0.7	4.8	〃	断面台形状、平基式。
〃	22	ST1 検出面	〃	3.7	1.9	0.5	1.7	〃	凹基式。
IV-151	39	ST3 床面	〃	(2.5)	1.8	0.5	1.7	〃	基部欠損。
IV-152	42	ST4 埋土	〃	2.9	2.2	0.4	2.1	〃	平基式。
IV-159	105	ST5 床面	〃	2.7	1.2	0.3	1.0	〃	凸基式、片面に主剥離面を広く残す。
〃	106	ST5 トレンチ	〃	2.2	1.3	0.5	1.3	〃	凹基式。
〃	107	ST5 下層	〃	2.9	1.3	0.3	1.2	〃	平基式、片面に主剥離面を広く残す。
〃	108	ST5 床面	石包丁	8.8	4.0	0.7	48.5	粘板岩	長方形を呈するが非対称。直線刃片刃、2孔、両方から穿孔。背部に敲打痕がある。
〃	109	ST5 下層	不明	11.6	5.2	0.9	63.2	頁岩	石包丁状を呈し一部に研磨痕が見られる。
〃	110	〃	打製 石斧	10.5	5.0	1.7	107.7	〃	短冊形。弧状をなす一方の主面は著しく研磨されている箇所がある。
〃	111	ST5 上層	スクレイパー	(10.3)	8.4	1.1	(94.5)	サヌカイト	斜めの側縁に刃部が造り出されている。
〃	112	ST5 下層	不明	(10.8)	6.0	3.3	271	砂岩	側縁部に敲打痕、主面は研磨される。
〃	113	〃	〃	9.5	6.8	1.3	150	〃	両主面研磨。
〃	114	〃	〃	21.0	14.1	6.2	2,300	〃	一方の主面と側縁は研磨され、他の側縁には敲打痕が見られる。
IV-162	128	ST6 中層	叩石	11.9	9.4	3.3	534	〃	両主面中央部及び側縁部の大部分に敲打痕。
〃	129	ST6 下層	〃	11.0	10.3	3.7	662	〃	両主面の中央部と側縁の一部に敲打痕。
〃	130	ST6 中層	〃	11.8	7.2	2.3	323	〃	長側縁にあばた状の敲打痕。
〃	131	ST6 上層	石鏃か 石錐	(1.6)	(0.9)	(0.25)	(0.29)	チャート	基部側が大きく欠落。断面菱形。
〃	132	ST6 下層	石錘	(14.5)	10.7	3.4	(508)	結晶片岩	先端全部が欠損、両側から抉るようにして刃部をつくり出している。
IV-163	137	ST7 床面	石鏃	(1.95)	(1.5)	0.2	(0.7)	サヌカイト	基部側が大きく欠損。
〃	138	〃	〃	(3.4)	1.3	0.4	1.67	〃	基部端が僅かに欠落、断面は平行四辺形。
〃	139	ST7 壁溝	石包丁	(4.5)	(8.2)	(0.5)	34.5	頁岩	直線刃、片刃、刃部幅は狭い。2孔を両側から穿つ。表面は研磨されているが随所に自然面が見られる。
IV-164	148	ST8 床面	不明	11.1	3.1	2.1	115.9	砂岩	全面研磨されている。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種	法量 (cm/g)				石材	特徴
				長さ	幅	厚さ	重さ		
IV- 164	149	ST8 埋土	不明	7.8	6.6	3.3	46.7	軽石	特に使用痕を認めず。
IV- 165	157	ST9 上層	石鏃	1.6	1.6	0.3	0.5	サヌカイト	基部は二股を呈する。表面は風化して白色。
IV- 166	165	SK6	打製 石斧	10.4	5.3	1.3	82.2	頁岩	両主面ともに研磨面が見られる。一方の側縁が敲打によって大きく抉られている。紐掛けのためか。
IV- 169	168	SK2	叩石	17.2	10.3	2.8	763	砂岩	一方の主面中央部を大きく打欠いている。欠損部も含めて側縁は全面に敲打痕あり。
IV- 178	217	SK28	石鏃	3.8	1.6	0.4	2.4	サヌカイト	基部の先端が欠損している。
IV- 180	241	SD2 上層	打製 石包丁	7.6	5.1	1.1	61.4	頁岩	両側縁に弱い抉り。
IV- 181	254	P14	砥石か	18.9	12.6	6.8	2,850	砂岩	4面を研磨し断面は方形を呈する。

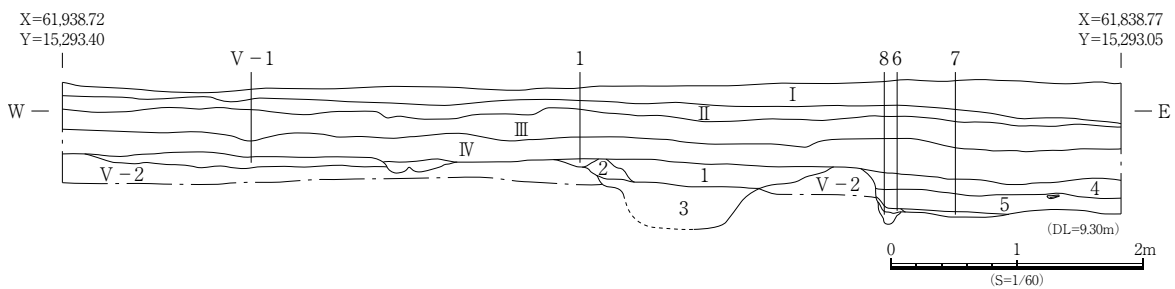
15. IV-6区

1. 調査区の概要

IV-6区はIV区の南西部に位置する。仮設水路が2本設置されていたため、西区・中央区・東区の3調査区に分け調査を実施した。遺構番号・遺物番号はIV-6区内で連番とした。弥生時代の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、溝状土坑などの遺構を検出した。隣接する調査区とともに弥生時代の居住域となっていたと推測される。

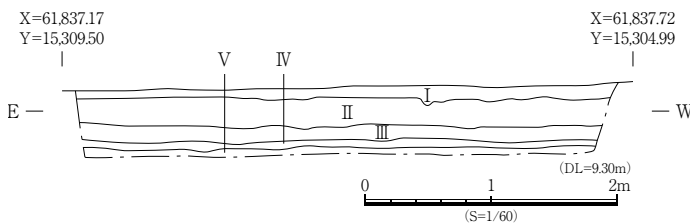
2. 基本層序(図IV-182)

基本層序は西区と中央区の調査区南壁で確認した。西区南壁では2枚の黒色土層を確認した。2枚の黒色土層の間には褐灰色粘土混じりシルト層(第II層)と黄灰色細粒砂混じりシルト層(第III層)を挟む。中央区南壁では下層の黒色土層のみを確認した。中央区のほうが西区に比べ、下層の黒色土層上面の標高は高い。



- | | |
|---|--|
| <p>層位</p> <ul style="list-style-type: none"> 第 I 層 耕作土 第 II 層 1枚目の黒色層 第 III 層 褐灰色(10YR4/1)粘土混じりシルト層 第 IV 層 黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂混じりシルト層 第 V-1層 黒褐色(10YR3/2)粘土混じりシルト層 第 V-2層 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂混じりシルト層(2枚目の黒色層) | <p>遺構埋土</p> <ul style="list-style-type: none"> 1. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂混じりシルト_微細炭化物を含む(SK9) 2. 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂混じりシルト_焼土ブロックを多く含む(SK9) 3. 黒褐色(7.5YR3/2)粘土混じりシルト_全体的に炭化物を含む(SK9) 4. 褐灰色(10YR4/1)粘土混じりシルト(ST2) 5. 黒褐色(10YR3/1)粘土混じりシルト_全体的にレンズ状に微細炭化物の堆積がある(ST2) 6. 黒褐色(10YR3/1)粘土混じりシルト(ST2) 7. 灰黄褐色(10YR5/2)粘土混じりシルト_黒褐色(10YR3/1)シルトをブロック状に含む(ST2) 8. 黒色(7.5YR2/1)粘土混じりシルト(ST2_壁溝埋土) |
|---|--|

西区



- 層位**
- 第 I 層 灰色(5Y5/1)細粒砂混じりシルト層(耕作土)
 - 第 II 層 黄灰色(2.5Y6/1)細粒砂混じりシルト層
 - 第 III 層 褐灰色(10YR4/1)細粒砂混じりシルト層
 - 第 IV 層 黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂混じり粘土層
 - 第 V 層 黒褐色(7.5YR3/1)細粒砂混じりシルト層(当該層上面で検出を行う)

中央区

図IV-182 調査区南壁基本層序

西区層位

第 I 層	耕作土
第 II 層	1 枚目の黒色層
第 III 層	褐灰色 (10YR4/1) 粘土混じりシルト層
第 IV 層	黄灰色 (2.5Y4/1) 細粒砂混じりシルト層
第V-1層	黒褐色 (10YR3/2) 粘土混じりシルト層
第V-2層	灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト層 (2 枚目の黒色層)

中央区層位

第 I 層	灰色 (5Y5/1) 細粒砂混じりシルト層 (耕作土)
第 II 層	黄灰色 (2.5Y6/1) 細粒砂混じりシルト層
第 III 層	褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂混じりシルト層
第 IV 層	黄灰色 (2.5Y4/1) 細粒砂混じり粘土層
第 V 層	黒褐色 (7.5YR3/1) 細粒砂混じりシルト層 (当該層上面で検出を行う)

3. 検出遺構と遺物

(1)ST

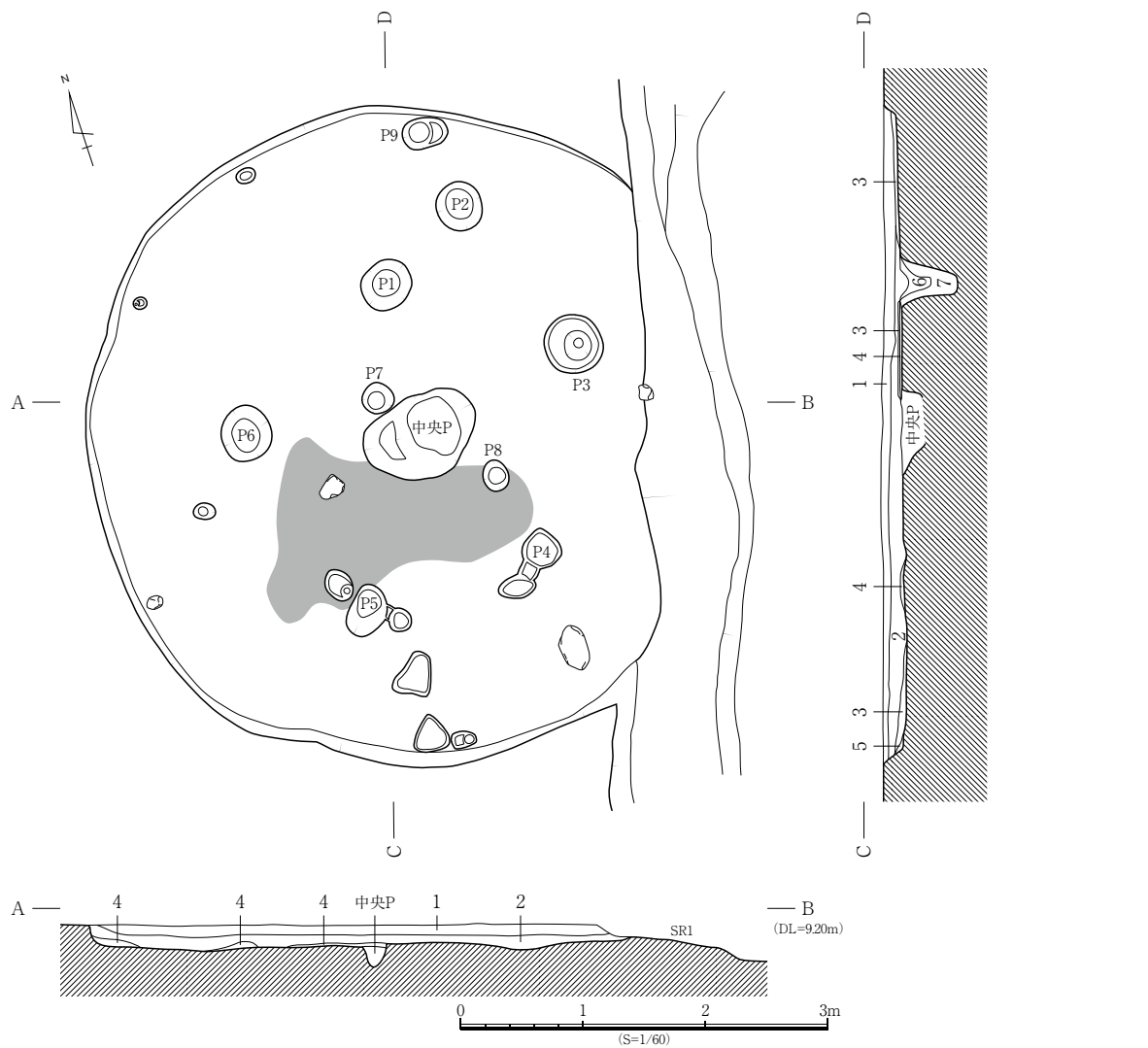
ST1 (図IV - 183)

調査区の南部に位置する円形の堅穴建物跡である。SR1 に切られる。長軸約 5.3m, 短軸 4.6m 以上, 検出面からの深さは 14cm である。埋土は 3 層に分層できる。1 層は 3cm 大の円礫をまばらに含み細粒砂混じる黒褐色シルト, 2 層は褐灰色シルトを含み細粒砂混じる褐灰色シルト, 3 層は微細炭化物を多く含み粘土混じる黒色シルトである。床面で中央ピット, ピットを検出した。中央ピットは床面のほぼ中央で検出した。長軸約 1.0m, 短軸約 0.7m の不整形を呈する。床面からの深さは 33cm であり, 西側にテラスを有する。中央ピットの埋土は 4 層に分層できる。1 層は, にぶい褐色粘土をブロック状に含み粘土混じる黒褐色シルト, 2 層は 5 ~ 10cm 大の炭化物を含みシルト混じる黒褐色粘土, 3 層はシルト混じり黒褐色粘土, 4 層はシルト混じり暗灰黄色粘土である。ST1_P1, ST1_P3, ST1_P4, ST1_P5, ST1_P6 が支柱穴と考えられる。床面の中央ピット南側には炭化物層が 2×1m の範囲に分布している。

図示した出土遺物は, 弥生土器の壺・甕である。1 は壺である。頸部には櫛描直線文, 上胴部には断面三角形の貼付突帯を施す。また, 双線による縦方向の直線文を施す。2 は甕である。口唇部は丸みを持たせ, 口縁部下端には刻目を施す。微隆起突帯を巡らせる。仁淀川流域からの搬入品である。3 は甕である。横方向の櫛描直線文を強く施すことで, 単位境は突帯状を呈する。また, 櫛描直線文帯の下には上下に短く工具を動かし刻目とする。4 は底部である。ごくわずかな上げ底となり, 外底面にはナデ調整を施す。断面には粘土紐の接合痕跡が認められる。外面はミガキ調整, 内面はナデ調整である。ST1 は弥生時代中期末に属する。

ST2 (図IV - 184)

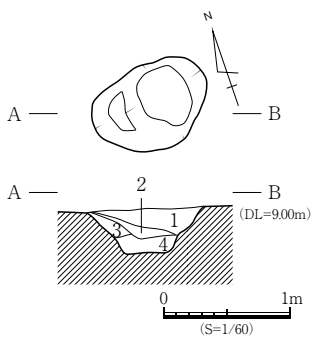
調査区の南西部に位置する。大部分は調査区外である。「L」字状に壁溝が巡っている。壁溝の幅約 0.15m, 検出面からの深さは 3cm である。検出長は東西約 1.5m, 南北約 1.1m である。



遺構埋土

1. 3cm大の円礫を含む黒褐色 (7.5YR3/2) 細粒砂混じりシルト
2. 褐灰色 (10YR5/1) シルトを含む褐灰色 (7.5YR4/1) 細粒砂混じりシルト
3. 微細炭化物を多量に含む黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土混じりシルト
4. 微細炭化物を多量に含む黒色 (2.5Y2/1) 粘土混じりシルト
5. 黒褐色 (7.5YR2/2) シルトを含む黒褐色 (7.5YR3/2) 細粒砂混じりシルト
6. 褐灰色 (10YR4/1) 粘土混じりシルト (P1)
7. 黒褐色 (10YR3/2) 粘土混じりシルト (P1)

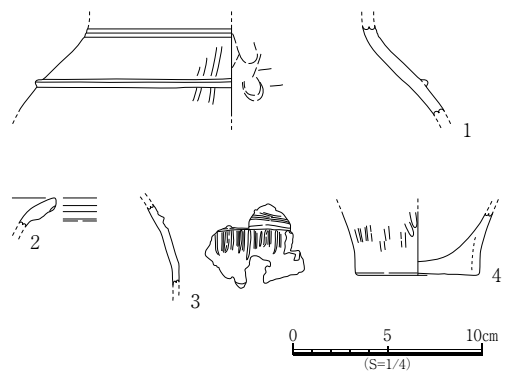
■ 炭化物



中央ピット

遺構埋土

1. にぶい褐色 (7.5YR5/4) 粘土をブロック状に含む黒褐色 (7.5YR3/2) 粘土混じりシルト
2. 5-10cm大の炭化物を含む黒褐色 (7.5YR3/1) 細粒砂混じり粘土
3. 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト混じり粘土
4. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト混じり粘土



図IV-183 ST1平面図・断面図・遺物実測図

図示した出土遺物は、弥生土器の底部(5)である。ごくわずかな上げ底となり、外底面にはナデ調整を施す。外面はミガキ調整,内面はナデ調整である。ST2は弥生時代中期末か。

(2)SB

SB1 (図IV-185)

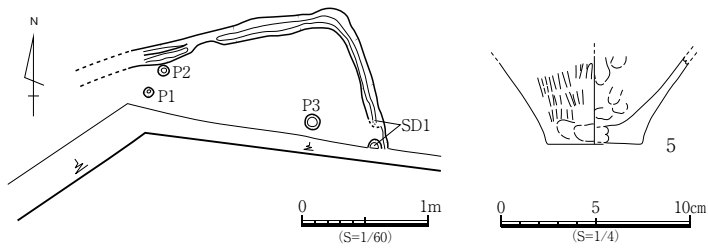
調査区北東部に位置する。桁行2間,梁行1間の南北棟の建物跡である。棟方向は、 $N-10^{\circ}17'-E$ である。すべての柱穴で柱痕跡を確認した。また、P36では根石がみられた。

SB2・SK4 (図IV-186)

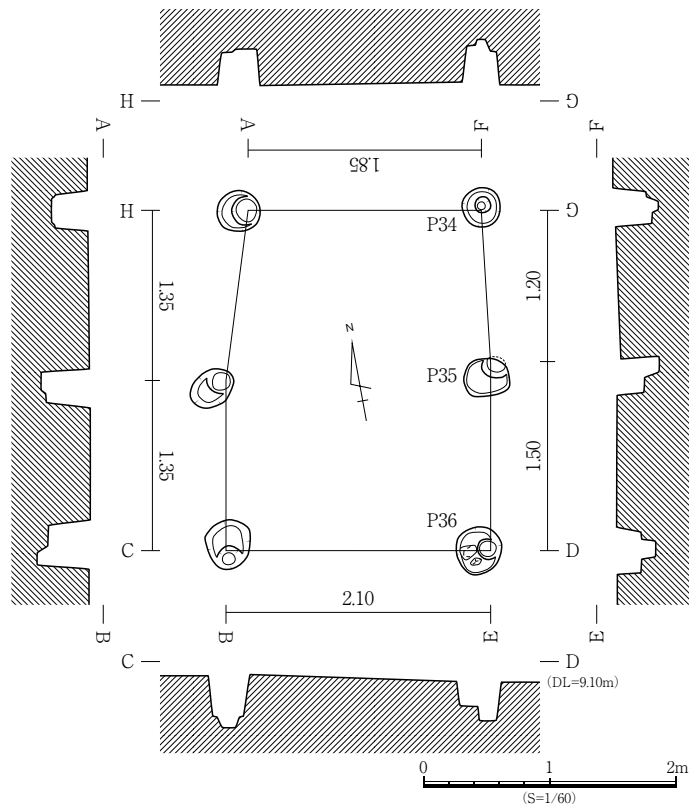
調査区南部に位置し、北側に溝状土坑(SK4)を伴う。ST1の床面でSB2を構成する柱穴を検出したことから、掘立柱建物の廃絶後に竪穴建物を構築していると考えられる。桁行3間以上,梁行1間あるいは2間の東西棟の建物跡である。棟方向は、 $N-63^{\circ}02'-W$ である。

SK4の一部は調査区外である。長軸4.6m以上,短軸約0.9m,検出面からの深さは22cmである。埋土は7層に分層できる。1層は細粒砂混じり黒褐色シルト,2層は黒褐色シルトを含む細粒砂混じりにぶい褐色シルト,3層は細粒砂混じり灰褐色シルト,4層は細粒砂混じりにぶい褐色シルト,5層は黒褐色シルトを含む細粒砂が混じりにぶい黄褐色シルト,6層は褐灰色シルトを含む細粒砂が混じるにぶい褐色シルト,7層は微細炭化物をわずかに含み黒褐色シルトを含む細粒砂が混じるにぶい褐色シルトである。

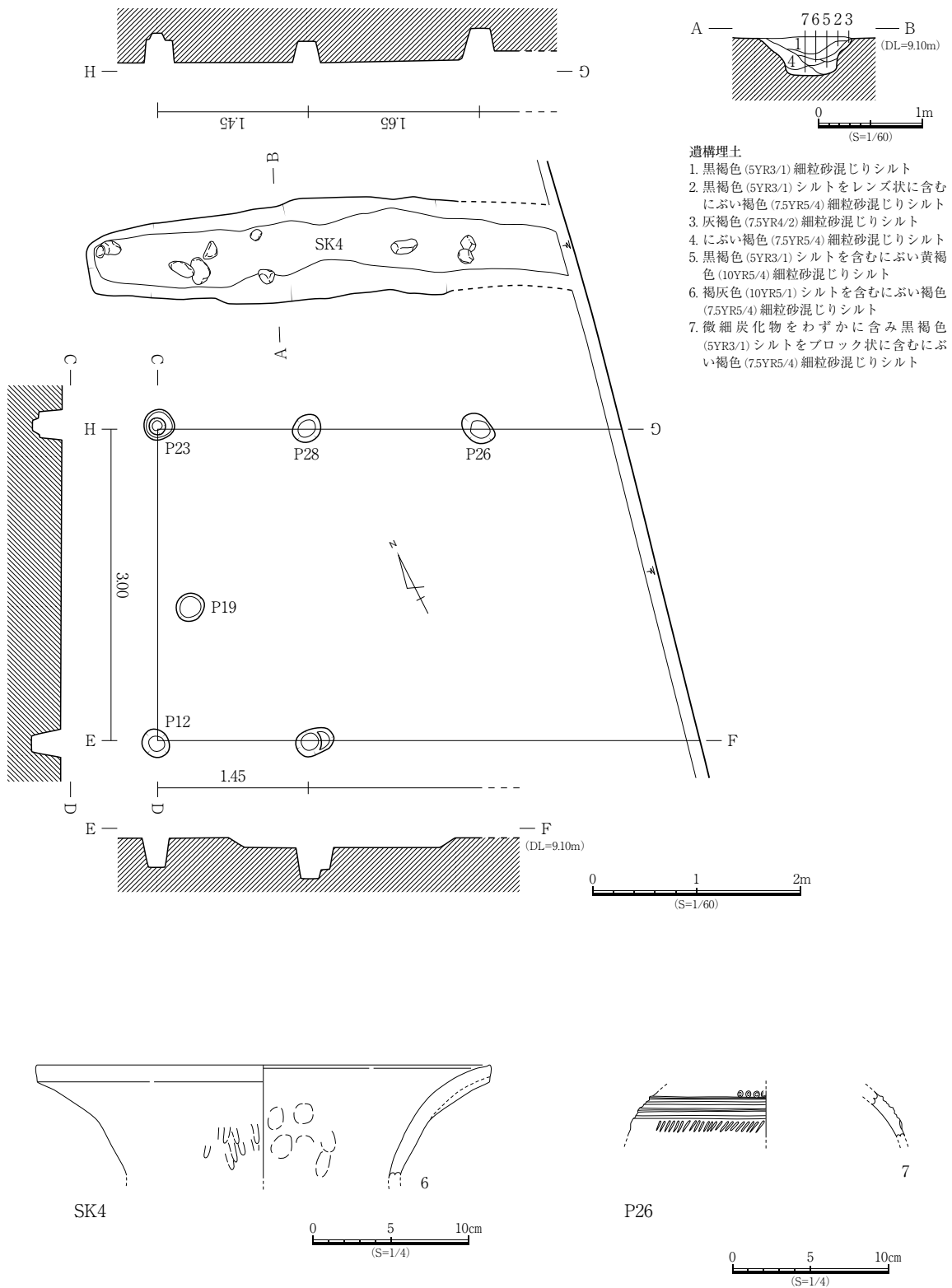
図示した出土遺物は、弥生土器の壺である。6はSK4から出土した。外面には粘土帯



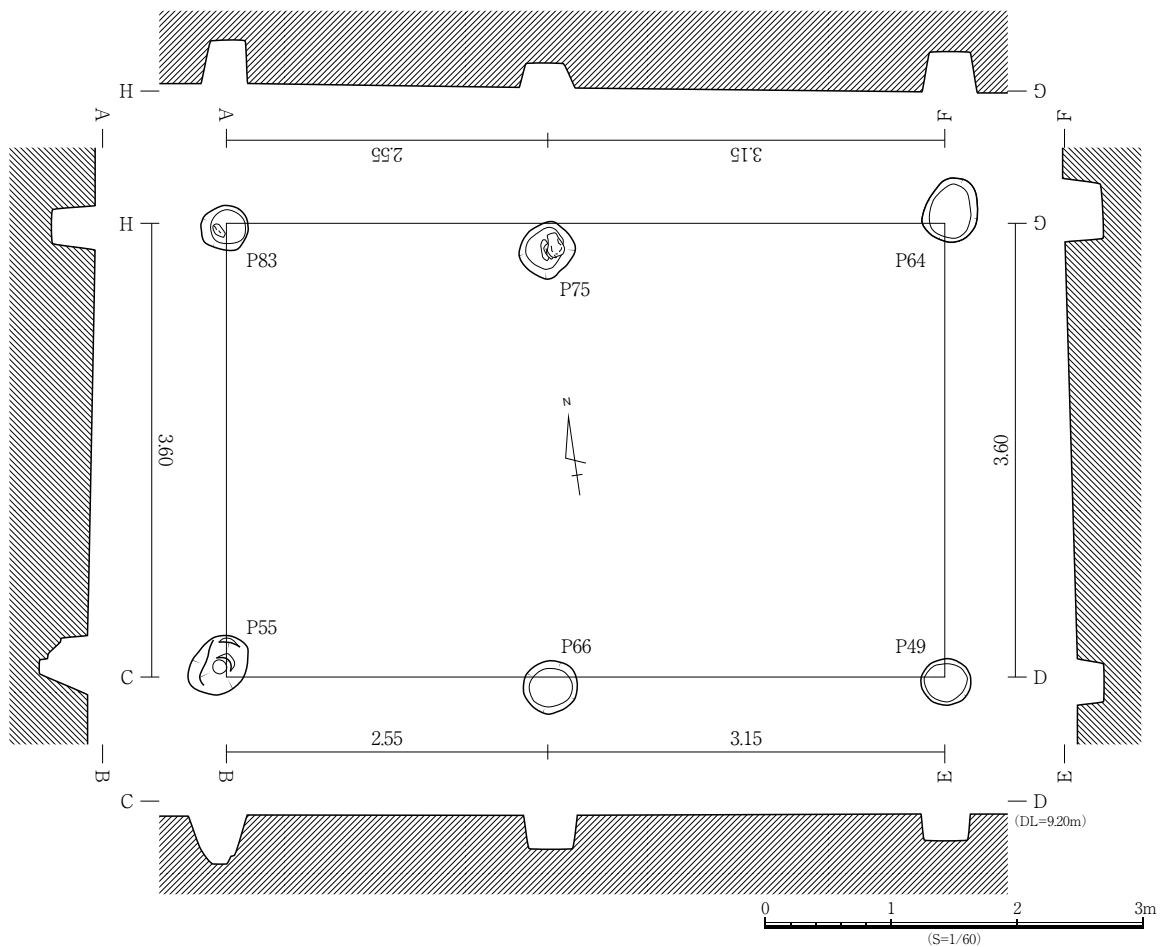
図IV-184 ST2平面図・遺物実測図



図IV-185 SB1平面図・エレベーション図



図IV-186 SB2・SK4・P26平面図・断面図・エレベーション図・遺物実測図



図IV-187 SB3平面図・エレベーション図

接合痕跡はなく、破断面の観察から貼付口縁とした。口唇部には面取りを施し、上方へつまみ上げる。頸部外面はミガキ調整であり、内面はナデ調整である。7はP26から出土した。上胴部を文様帯とする。上から竹管文、2単位の櫛描直線文、刻目を配置する。櫛描直線文の単位境は微隆起突帯状を呈する。仁淀川流域からの搬入品である。SB2・SK4は弥生時代中期末に属する。

SB3(図IV-187)

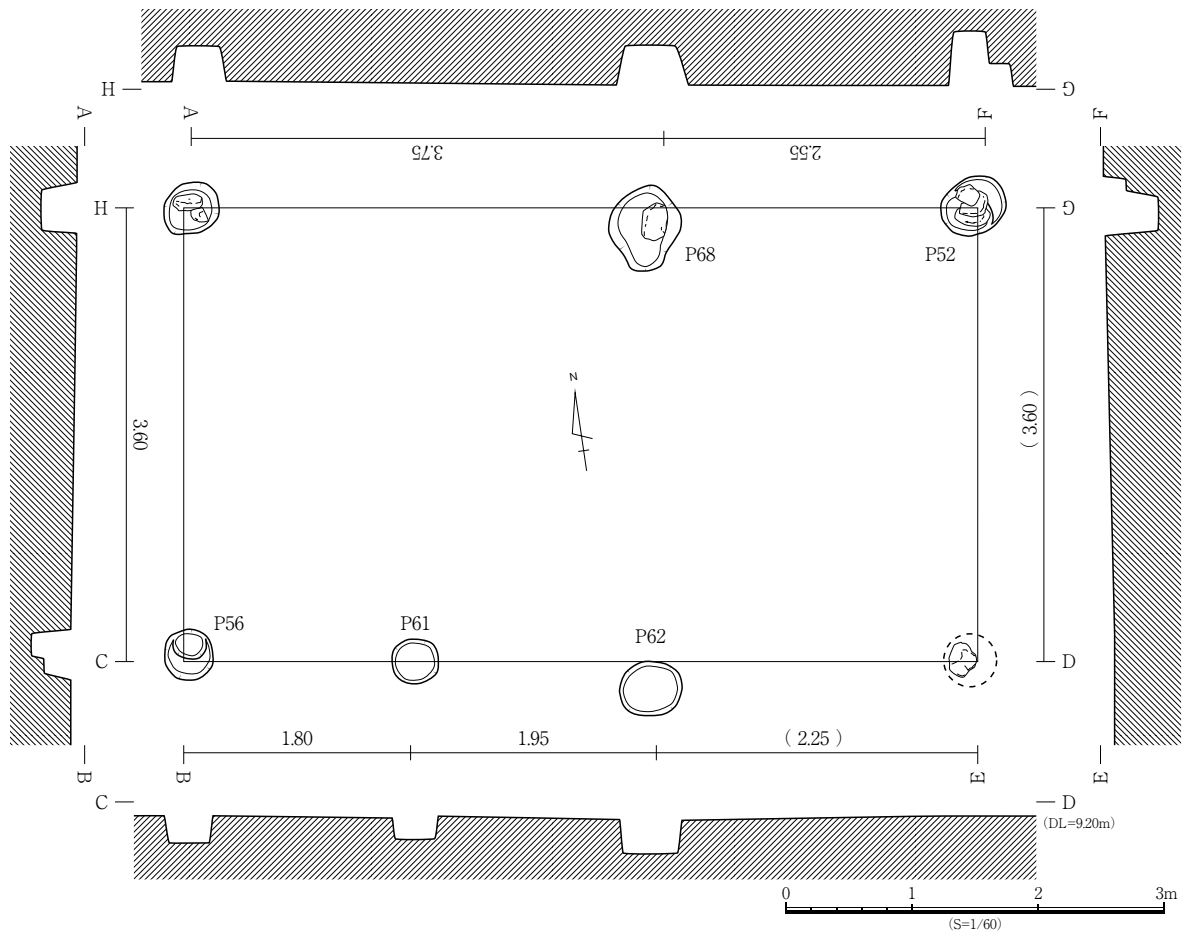
調査区東部に位置する。SB4と重複するが新旧関係は不明である。桁行2間、梁行1間の東西棟の建物跡である。棟方向は、 $N-81^{\circ}44'-W$ である。P75・83で根石がみられた。

SB4(図IV-188)

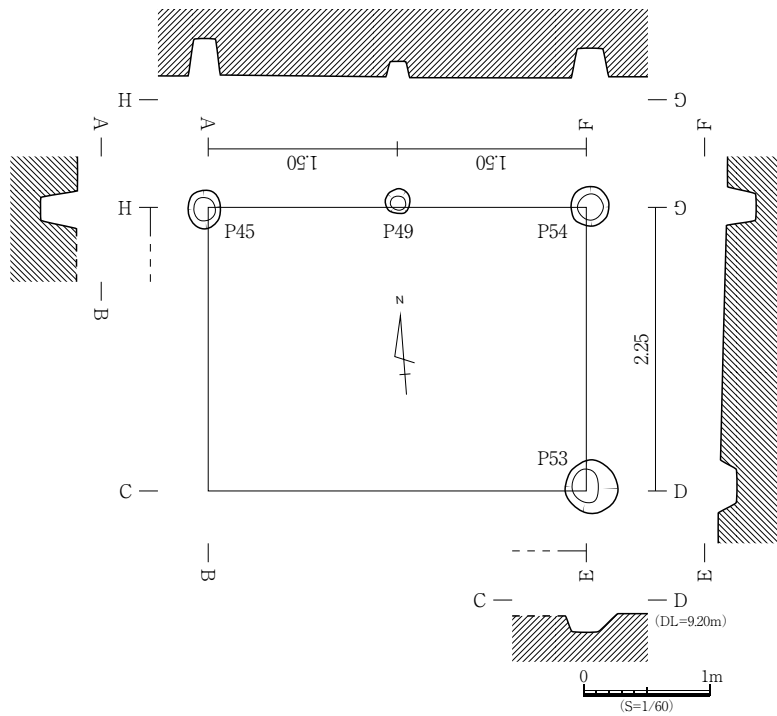
調査区東部に位置する。SB3と重複するが新旧関係は不明である。桁行3間、梁行1間の東西棟の建物跡である。棟方向は、 $N-81^{\circ}38'-W$ である。P52・68等で根石がみられた。また、南東隅部は根石のみを検出した。

SB5(図IV-189)

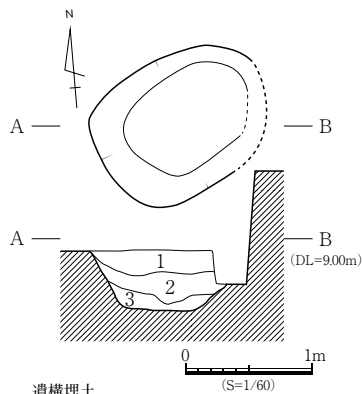
調査区東部に位置する。桁行2間、梁行1間の東西棟の建物跡である。棟方向は、 $N-85^{\circ}35'-W$ である。



図IV-188 SB4平面図・エレベーション図



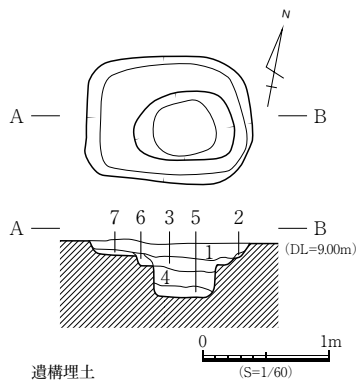
図IV-189 SB5平面図・エレベーション図



遺構埋土

1. 黄灰色 (2.5Y4/1) 細粒砂混じりシルト
2. 明赤褐色 (5YR5/6) シルトを含む褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂混じりシルト
3. 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土混じりシルト

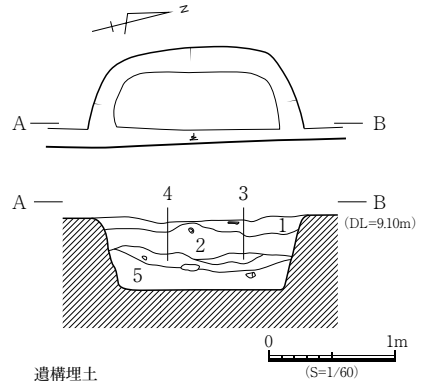
SK1



遺構埋土

1. 黒褐色 (10YR3/2) 中粒砂混じりシルト
2. 黒褐色 (7.5YR3/1) 細粒砂混じりシルト
3. 灰黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂混じりシルト
4. 5cm大の円礫を含む黄灰色 (2.5Y5/1) 細粒砂混じりシルト
5. 黄灰色 (2.5Y4/1) 中粒砂混じりシルト
6. 明褐色 (7.5YR5/6) 細粒砂混じりシルト
7. 褐色 (7.5YR4/6) 細粒砂混じりシルト

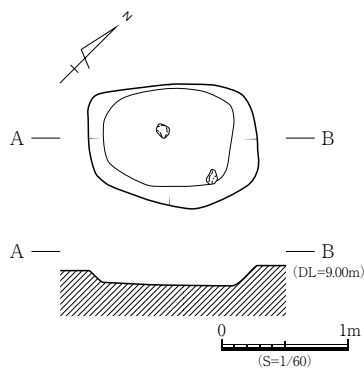
SK2



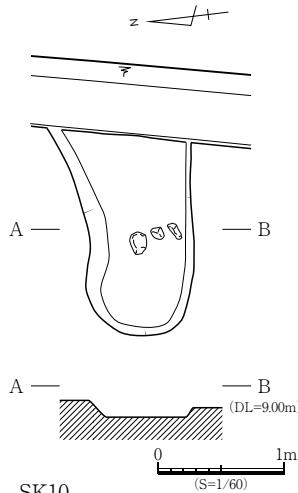
遺構埋土

1. 明褐色 (7.5YR5/6) シルトを含む褐色 (7.5YR4/6) 細粒砂混じりシルト
2. 褐灰色 (10YR5/1) 粘土を含み30cm大の円礫を極少量含む灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト
3. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土混じりシルト
4. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂混じりシルト
5. にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルトをブロック状に含む黒褐色 (10YR3/1) 細粒砂混じりシルト

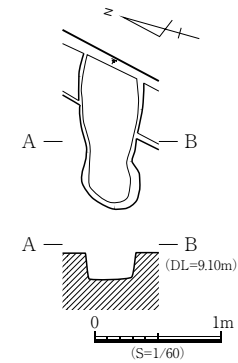
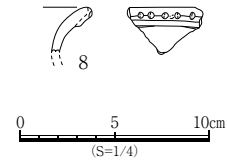
SK3



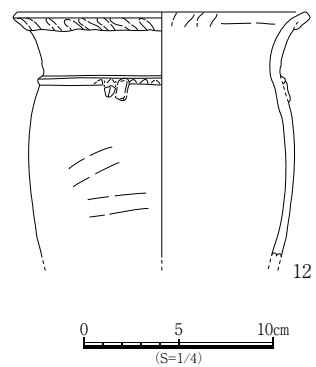
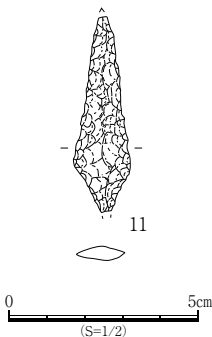
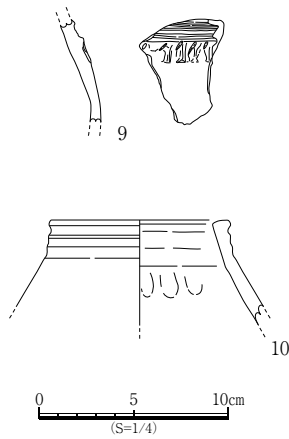
SK8



SK10



SK15

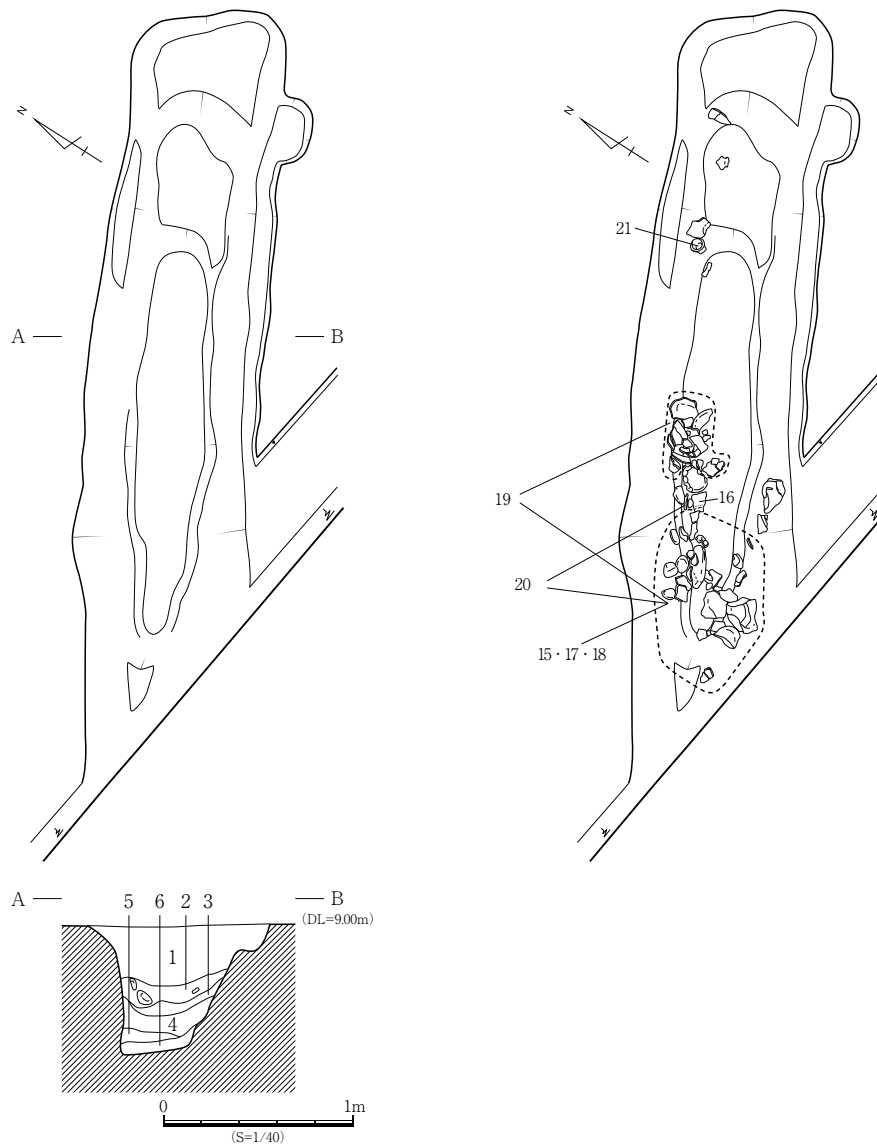


図IV-190 SK1~3・8・10・15平面図・断面図・エレベーション図・遺物実測図

(3)SK

SK1 (図IV-190)

調査区の北部で検出した隅丸長方形の土坑である。一部は調査区外である。長軸約 1.4m, 短軸約 1.0m, 検出面からの深さは 46 cmである。埋土は 3層に分層できる。1層は細粒砂混じり黄灰色シルト, 2層は明赤褐色シルトをスポット状に含む細粒砂混じり褐灰色シルト, 3層は粘土混じり黒褐色シルトである。



- 遺構埋土
1. 土器片・焼土塊を多く含む粘土混じり黒褐色 (7.5YR3/2)シルト
 2. 明黄褐色 (2.5Y6/6)シルトをブロック状に含む細粒砂混じり褐灰色 (7.5YR4/1)シルト
 3. 細粒砂混じり褐灰色 (7.5YR4/1)シルト
 4. 細粒砂混じり灰褐色 (7.5YR4/2)シルト
 5. シルト混じり灰褐色 (7.5YR4/2)粘土
 6. シルト混じりにぶい黄褐色 (10YR4/3)粘土

図IV-191 SK9平面図・断面図・遺物出土状況図

SK2 (図IV - 190)

調査区の北部で検出した隅丸長方形の土坑である。長軸約1.3m, 短軸約1.0m, 検出面からの深さは47cmである。埋土は7層に分層できる。1層は中粒砂混じり黒褐色シルト, 2層は細粒砂混じり褐色シルト, 3層は細粒砂混じり明褐色シルト, 4層は細粒砂混じり黒褐色シルト, 5層は中粒砂混じり灰黄褐色シルト, 6層は5cm大の円礫を含む細粒砂混じり黄灰色シルト, 7層は中粒砂混じり黄灰色シルトである。

SK3 (図IV - 190)

調査区の中央部で検出した隅丸長方形の土坑である。東半分は調査区外である。長軸約1.7m, 短軸0.6m以上, 検出面からの深さは59cmである。埋土は5層に分層できる。1層は明褐色シルトを含む細粒砂混じり褐色シルト, 2層は褐灰色粘土を含み30cm大の円礫を極少量含む細粒砂混じり灰黄褐色シルト, 3層は粘土混じり灰黄褐色シルト, 4層は細粒砂混じりにぶい黄褐色シルト, 5層はにぶい黄褐色シルトをブロック状に含む細粒砂混じり黒褐色シルトである。

図示した出土遺物は、弥生土器の甕(8)である。貼付口縁であり、口唇部には丸みを持たせる。口縁部下端には刻目を施し、微隆起突帯を巡らせる。内外面ともナデ調整である。

SK5

調査区の中央部で検出した不整形の土坑である。西半分は調査区外である。長軸約1.2m, 短軸0.6m以上, 検出面からの深さは16cmである。埋土は2層に分層できる。1層は細粒砂混じり暗灰黄色シルト, 2層は細粒砂混じり黒褐色シルトである。

SK6

調査区の北東部で検出した楕円形の土坑である。長軸約0.8m, 短軸約0.5m, 検出面からの深さは16cmである。埋土は灰褐色(7.5YR4/2)細粒砂混じりシルトである。

SK7

調査区の北東部で検出した隅丸長方形の土坑である。長軸約1.1m, 短軸約0.8m, 検出面からの深さは11cmである。埋土は灰褐色(7.5YR4/2)細粒砂混じりシルトである。

SK8 (図IV - 190)

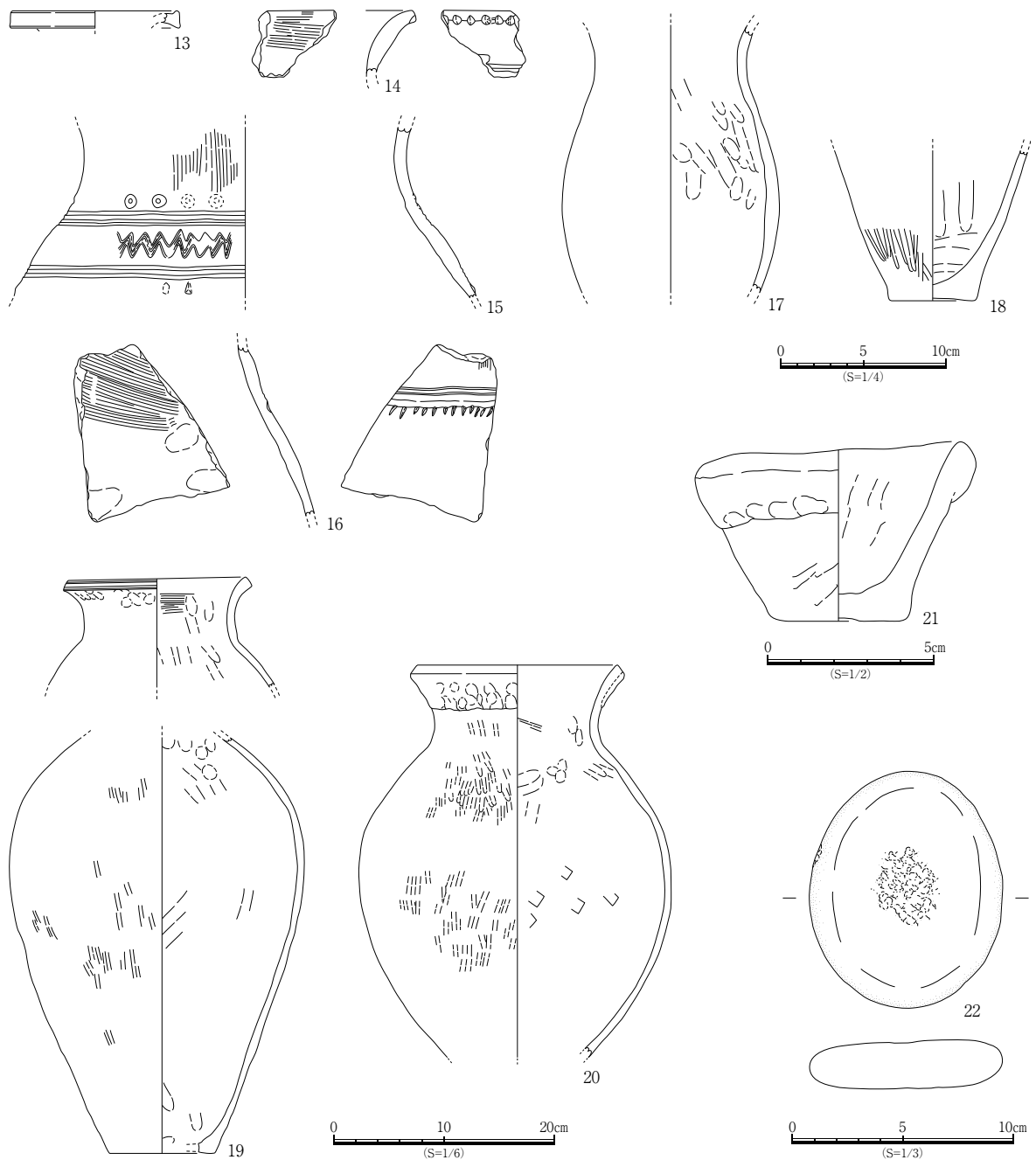
調査区の北東部で検出した隅丸長方形の土坑である。長軸約1.3m, 短軸約0.9m, 検出面からの深さは17cmである。埋土は灰褐色(7.5YR4/2)細粒砂混じりシルトである。

図示した出土遺物は、弥生土器の体部・水差形土器である。9は体部片である。櫛描直線文を強く施し、上下端は微隆起突帯状を呈する。また、方向を変えた刻目を上下に施し、1単位の文様帯とする。10は水差形土器である。肩部から直線的にすぼまり、口縁部は若干立たせる。口唇部には面取りを施す。口縁部には3条の凹線文を巡らせる。

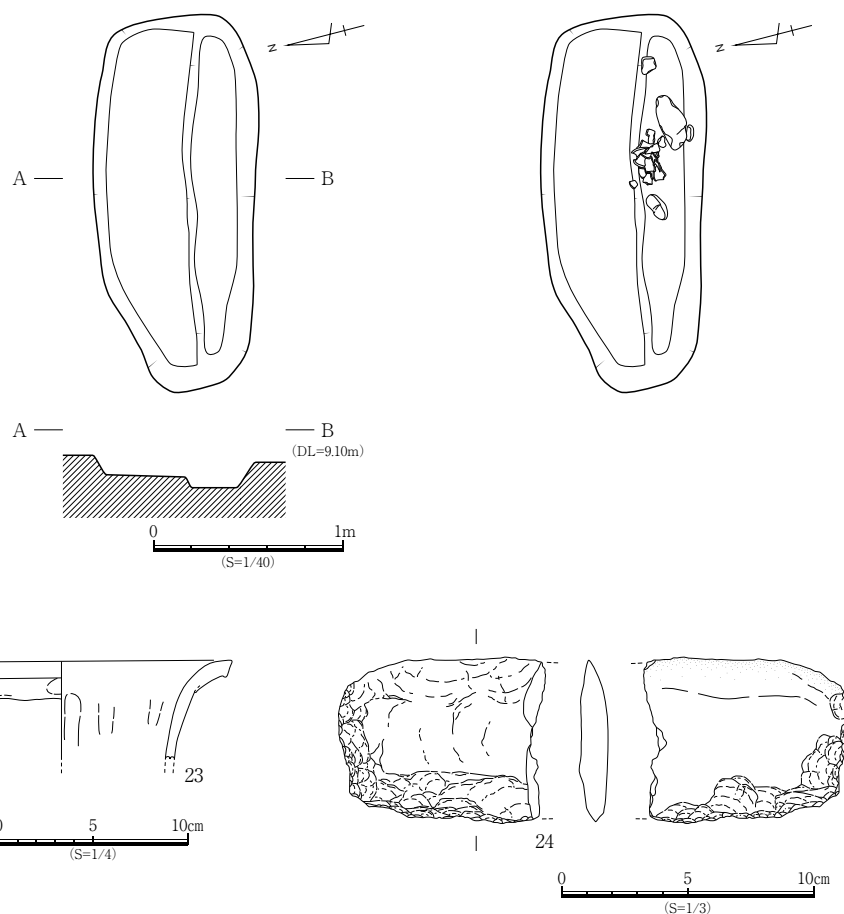
SK9 (図IV - 191・192)

調査区の南西部で検出した溝状土坑である。長軸4.0m以上, 短軸約0.9m, 検出面からの深さは69cmである。埋土は6層に分層できる。1層は土器片・焼土塊を多く含む粘土混じり黒褐色シルト, 2層は明黄褐色シルトをブロック状に含む細粒砂混じり褐灰色シルト, 3層は細粒砂混じり褐灰色シルト, 4層は細粒砂混じり灰褐色シルト, 5層はシルト混じり灰褐色粘土, 6層はシルト混じりにぶい黄褐色粘土である。

図示した出土遺物は、弥生土器の壺・甕・ミニチュア土器、叩石である。13は壺である。口唇部はヨコナデ調整により上方へ拡張させる。讃岐からの搬入品である。14は甕である。貼付口縁である。口唇部には面取りを施し、下端には大きめの刻目を入れる。外面はナデ調整、内面はヨコハケ調整である。15は体部片である。頸部から上胴部を文様帯とする。上からドーナツ状浮文、櫛描直線文、櫛描波状文、櫛描直線文、楕円形浮文である。頸部外面はタテハケ調整である。16は体部片である。頸部から上胴部を文様帯とする。上から櫛描直線文、ハケ状原体による刺突文を配置する。頸部外面はハケ調整、体部外面はナデ調整である。頸部内面はハケ調整、体部内面はナデ調整である。17は甕の



図IV-192 SK9 遺物実測図



図IV-193 SK13平面図・エレベーション図・遺物出土状況図・遺物実測図

体部と考えられる。長胴で、頸部はあまり締まらない。内外面ともナデ調整である。内面には縦方向の強いナデ調整の痕跡が認められる。全体的に器面には凹凸がみられる。19は壺である。上胴部に最大径部を持ち、頸部は短く直立し、口縁部は外反する。口唇部をわずかに肥厚させ、2条の凹線文を巡らせる。磨耗しており、調整等の観察は困難であるが、外面にはミガキ状の痕跡が認められる。底の粘土盤が欠落し、破断面は擬口縁となる。20は壺である。体部中位に最大径部を持ち、頸部から口縁部は直線的にひらく。貼付口縁であり、口唇部には面取りを施し、凹面状を呈し上端をつまみ上げる。外面はミガキ調整、内面はナデ調整である。ベンガラ塗布か。21はミニチュア土器である。平底の底部から口縁部まで直線的に外上方へひろがる。貼付口縁である。底部は粘土紐を渦巻き状に巻き成形する。内外面ともナデ調整である。内面には工具の静止痕跡が認められる。完存である。22は砂岩製の叩石である。楕円形の扁平な川原石を使用する。両面の中央部、側面に使用痕跡が認められる。完存である。

SK10 (図IV-190)

調査区の南西部で検出した溝状の土坑である。SD1と一連の可能性がある。長軸1.6m以上、短軸約1.0m、検出面からの深さは9cmである。

図示した出土遺物は、打製石鏃(11)である。有茎式であり、先端部と茎部が欠損する。両側面から

の調整剥離により鎗状となる。断面形は扁平な菱形である。

SK11

調査区の南西部で検出した溝状土坑である。長軸約1.4m, 短軸約0.4m, 検出面からの深さは10cmである。南端部はピットと重複する。ピットは直径約0.3m, 検出面からの深さは20cmである。埋土は灰褐色細粒砂混じりシルトである。

SK12

調査区の南西部で検出した隅丸長方形の土坑である。長軸約1.6m, 短軸約0.7m, 検出面からの深さは約15cmである。埋土は灰褐色細粒砂混じりシルトである。

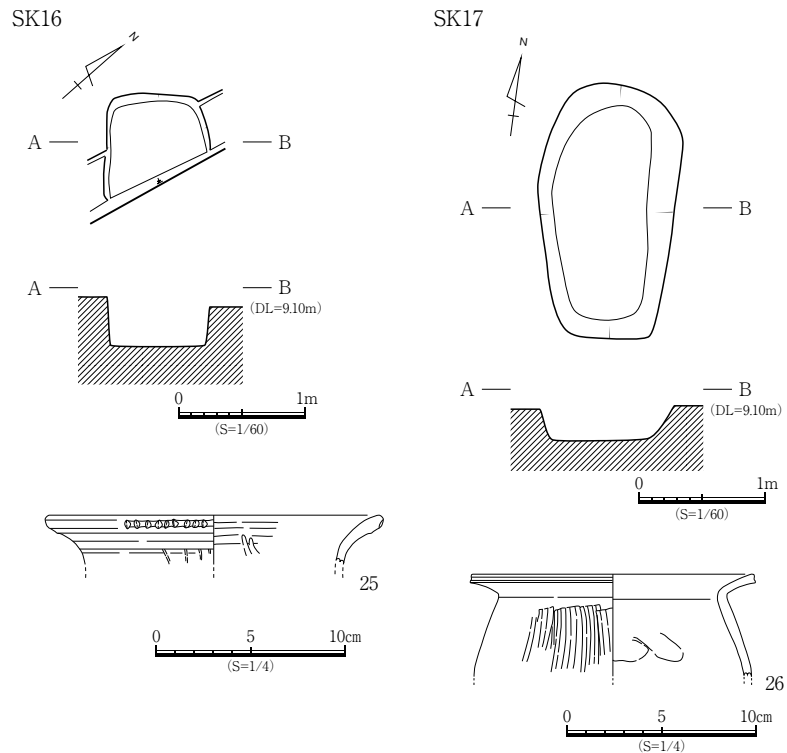
SK13

調査区の南西部で検出した不整長方形の土坑である。長軸約2.0m, 短軸約0.8m, 検出面からの深さは11cmである。北半分は床面と5cmの高低差を持ったテラス状となる。埋土は灰褐色細粒砂混じりシルトである。

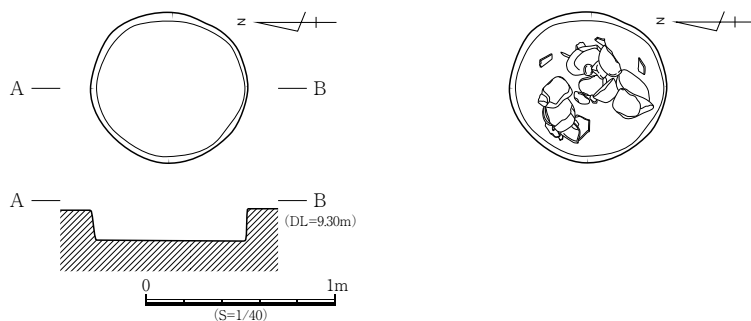
図示した出土遺物は、弥生土器の壺(23), 石包丁(24)である。23は貼付口縁であり, 粘土帯外面には弱い指頭圧痕がみられる。接合痕跡が器面調整により消えている部分がある。口唇部には面取りを施し, 上端部をつまみ上げる。24の表面は主要剥離面を大きく残し, 裏面は自然面を大きく残す。長辺, 短辺に調整剥離を施す。石包丁の未成品か。

SK14

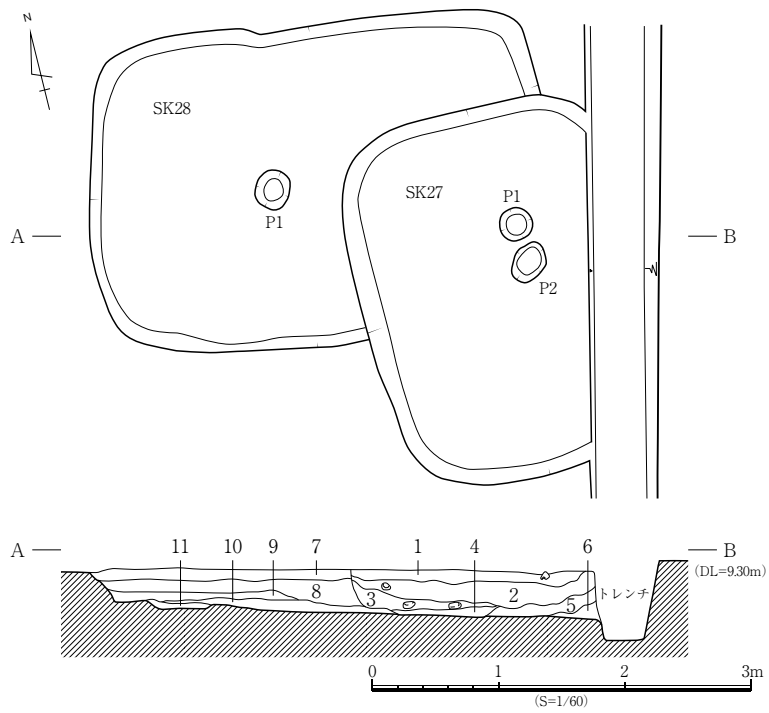
調査区の南西部で検出した円形の土坑である。直径約1.1m, 検出面からの深さは



図IV-194 SK16・17平面図・エレベーション図・遺物実測図

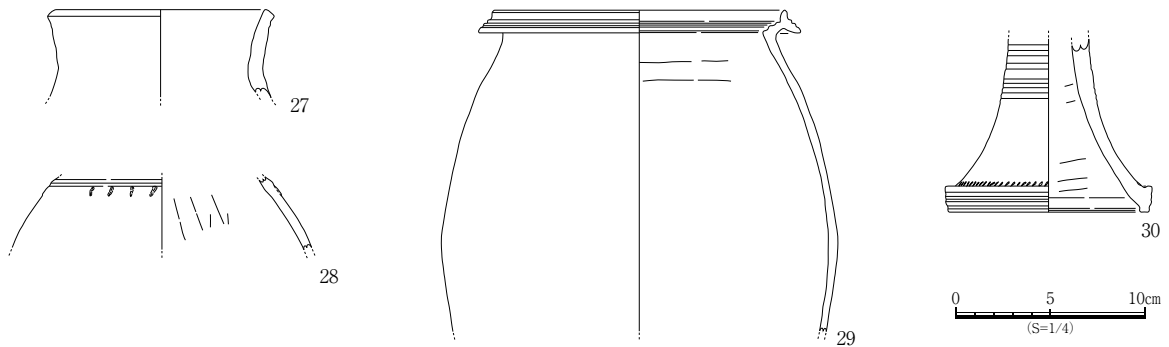


図IV-195 SK20平面図・エレベーション図・遺物出土状況図



遺構埋土

1. 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂混じりシルト
2. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細粒砂混じりシルト
3. 褐鉄銅を含む褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂混じりシルト
4. 褐鉄銅を含む黒褐色 (10YR3/2) 細粒砂混じりシルト
5. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト
6. 黒褐色 (10YR3/1) 粘土混じりシルト
7. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト
8. 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂混じりシルト
9. 褐鉄銅を含む黄灰色 (2.5Y4/1) 細粒砂混じりシルト
10. 全体的に褐鉄銅を含む灰色 (5Y4/1) 細粒砂混じりシルト
11. 褐鉄銅を含む褐灰色 (10YR4/1) 中粒砂混じり細粒砂



図IV-196 SK27・28平面図・断面図・遺物実測図

14cmである。埋土は黒褐色シルトをブロック状に含む灰色粘土混じりシルトである。SK25を切る。

SK15 (図IV-190)

調査区の西部で検出した溝状の土坑である。一部は調査区外である。長軸 1.1m 以上、短軸約 0.5m である。検出面からの深さは 28cm である。

図示した出土遺物は、弥生土器の甕(12)である。貼付口縁であり、粘土帯外面には弱い指頭圧痕がみられ、口唇部には面取りを施す。頸部には断面三角形の突帯を貼付ける。突帯の下端に接して 2 本 1 単位の棒状浮文を貼付ける。幅 4～5cm の帯状に割れており、粘土紐の幅を反映していると考えられる。

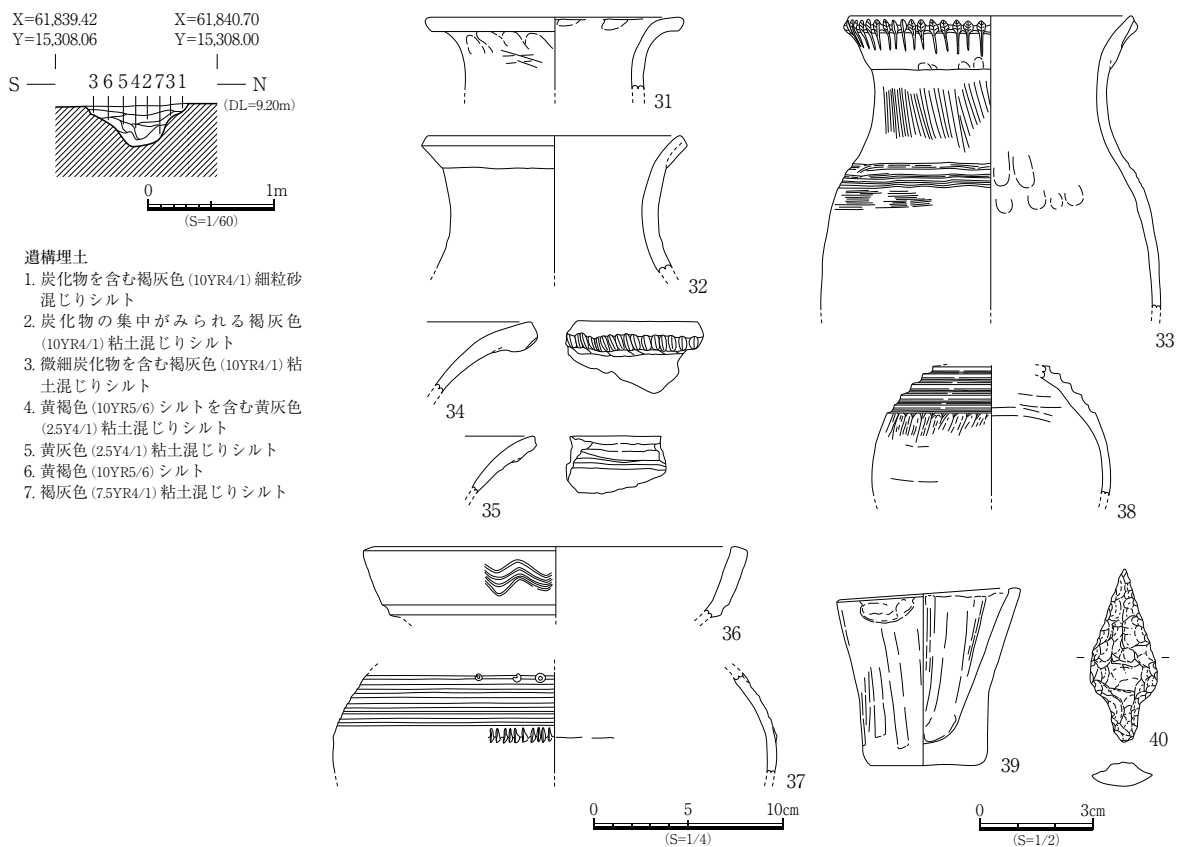
SK16 (図IV-194)

調査区の西部で検出した土坑である。一部は調査区外であるが隅丸長方形を呈すると推測される。長軸 0.8m 以上、短軸約 0.7m である。検出面からの深さは 35cm である。

図示した出土遺物は、弥生土器の甕(25)である。口唇部は丸みを持ち、下端には刻目を施す。微隆起突帯、櫛描直線文を巡らせる。また、縦方向の沈線がみられるが、文様か、調整の痕跡なのか不明瞭である。内外面ともナデ調整である。仁淀川流域からの搬入品である。

SK17 (図IV-194)

調査区の西部で検出した不整長方形の土坑である。長軸約 2.0m、短軸約 1.1m、検出面からの深さは 25cm である。埋土は灰褐色細粒砂混じりシルトである。



図IV-197 SD1 断面図・遺物実測図

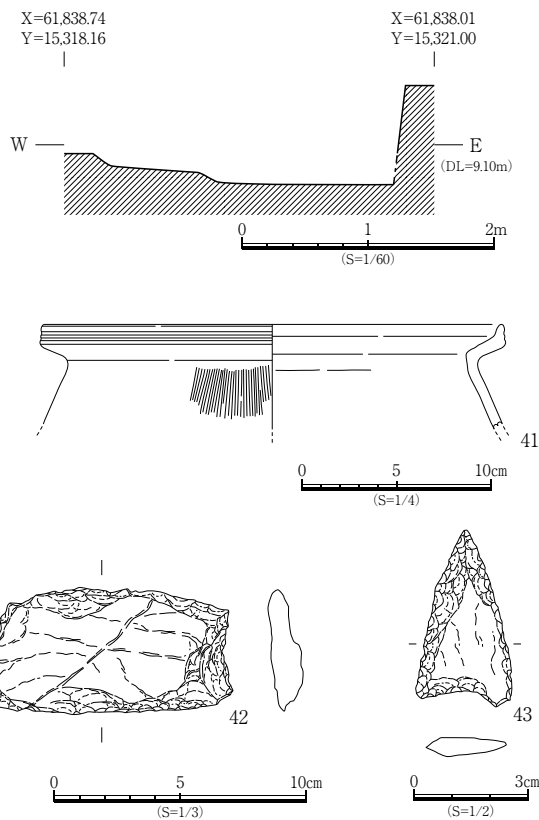
図示した出土遺物は、弥生土器の甕(26)である。口縁部は強く外反し、口唇部は凹面状を呈する。外面は粗いタテハケ調整、内面はナデ調整である。煤が付着する。

SK18

調査区の西部で検出した不整形の土坑である。一辺約 1.9m, 検出面からの深さは 28 cm である。埋土は黒褐色シルトをブロック状に含む灰色粘土混じりシルトである。

SK19

調査区の西部で検出した楕円形の土坑である。SK23 を切る。長軸約 0.8m, 短軸約 0.7m, 検出面からの深さは 24 cm である。埋土は黒褐色シルトをブロック状に含む灰色粘土混じりシルトである。



図IV-198 SR1エレベーション図・遺物実測図

SK20 (図IV-195)

調査区の北西部で検出した円形の土坑である。直径約 0.8m, 検出面からの深さは 16 cm である。埋土は黒褐色シルトをブロック状に含む灰色粘土混じりシルトである。

SK21

調査区の西部で検出した不整形の土坑である。SK23 を切る。長軸約 1.7m, 短軸約 0.6m, 検出面からの深さは 19 cm である。

SK22

調査区の西部で検出した隅丸長方形の土坑である。長軸約 2.9m, 短軸約 1.6m, 検出面からの深さは 12 cm である。埋土は黒褐色シルトをブロック状に含む灰色粘土混じりシルトである。

SK23

調査区の西部で検出した不整形の土坑である。SK19・21 に切られる。長軸約 1.5m, 短軸約 1.4m, 検出面からの深さは 43 cm である。埋土は灰褐色細粒砂混じりシルトである。

SK24

調査区の西部で検出した隅丸長方形の土坑である。長軸約 1.4m, 短軸約 1.1m, 検出面からの深さは 29 cm である。埋土は黒褐色シルトをブロック状に含む灰色粘土混じりシルトである。

SK25

調査区の西部で検出した不整形の土坑である。一辺約 1.5m, 検出面からの深さは 28 cm である。埋土は灰褐色粘土をブロック状に含む灰色粘土混じりシルトである。

SK26

調査区の北西部で検出した不整形の土坑である。長軸約0.7m，短軸約0.6m，検出面からの深さは8cmである。南側に長軸0.3m，短軸約0.2m，検出面からの深さ14cmの楕円形のピットが有る。土坑の埋土は黒褐色シルトをブロック状に含む灰色粘土混じりシルトである。

SK27 (図IV-196)

調査区の北西部で検出した隅丸長方形の土坑である。SK28を切る。一部は調査区外である。長軸約3.0m，短軸2.0m以上，検出面からの深さは31cmである。床面に2基のピットが有る。ピットの直径約0.3m，床面からの深さは20～27cmである。土坑の埋土は6層に分層できる。1層は細粒砂混じり褐灰色シルト，2層は細粒砂混じり灰褐色シルト，3層は細粒砂混じり灰黄褐色シルト，4層は粘土混じり黒褐色シルト，5層は褐鉄鋼をシミ状に全体に含む細粒砂混じり褐灰色シルト，6層は褐鉄鋼をシミ状に含む粗粒砂混じり黒褐色シルトである。

図示した出土遺物は、弥生土器の壺・甕である。27は壺である。口縁部はあまりひらかず直線的にのびる。口唇部には面取りを施す。28は甕である。微隆起突帯，楕円形浮文を配置する。仁淀川流域からの搬入品である。

SK28 (図IV-196)

調査区の北西部で検出した隅丸長方形の土坑である。SK29を切り，SK27に切られる。長軸約3.6m，短軸約2.5m，検出面からの深さは28cmである。床面に直径約0.3m，床面からの深さ8cmのピットが有る。土坑の埋土は5層に分層できる。1層は細粒砂混じり灰黄褐色シルト，2層は5cm大の円礫をまばらに含む細粒砂混じり褐灰色シルト，3層は褐鉄鋼をシミ状に含む細粒砂混じり黄灰色シルト，4層は全体的に褐鉄鋼のシミを含む細粒砂混じり灰色シルト，5層は褐鉄鋼を斑点状に含む中粒砂混じり褐灰色細粒砂である。

図示した出土遺物は弥生土器の甕(29)である。口縁部を上方へ拡張し，下方へ引っ張り出し，3条の凹線文を施す。内外面ともナデ調整である。器壁は薄く，全体的にシャープな作りである。

SK29

調査区の北西部で検出した溝状の土坑である。SK28に切られる。長軸約2.0m，短軸約0.4m，検出面からの深さは17cmである。埋土は黒褐色シルトをブロック状に含む灰色粘土混じりシルトである。

(4)SD

SD1 (図IV-197)

調査区南部で検出した東西方向の溝跡である。SK10と接続する可能性がある。幅0.3～1.4m，検出長は約4.3mである。検出面からの深さは47cmである。P2・3で構成される掘立柱建物跡に伴う溝状土坑である可能性がある。埋土は7層に分層できる。1層は褐灰色細粒砂混じりシルト，2層は遺物・炭化物を多く含む褐灰色粘土混じりシルト，3層は褐灰色粘土混じりシルト，4層は黄褐色シルトをシミ状に含む黄灰色粘土混じりシルト，5層は黄灰色粘土混じりシルト，6層は黄褐色シルト，7層は褐灰色粘土混じりシルトである。

図示した出土遺物は、弥生土器の壺・甕・ミニチュア土器，石鏃である。31は壺である。貼付口縁であり，大きく外反する。口唇部には面取りを施すが，やや丸みを帯びる。磨耗のため，調整等の観

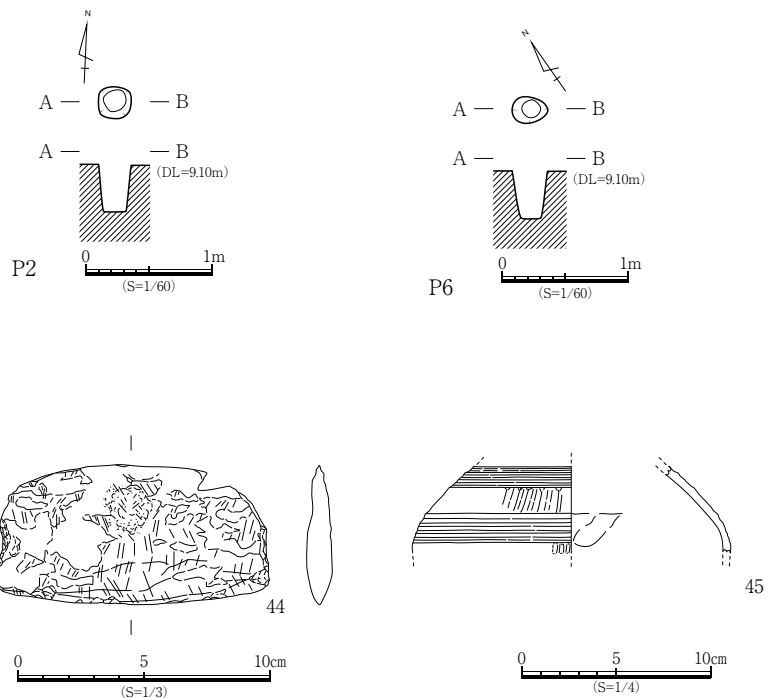
察は困難である。32は壺である。貼付口縁であり、口唇部には面取りを施す。33は甕である。頸部はあまり締まらず、上胴部から口縁部にかけて緩やかな「S」字を描く。貼付口縁であり、口唇部に面取りを施し、下端に長めの刻目を入れる。粘土帯外面にはヨコナデ調整を施す。上胴部には櫛描直線文を巡らせる。頸部外面にはタテハケ調整、胴部にはヨコハケ・ナデ調整を施す。34は壺である。貼付口縁であり、粘土帯外面には弱い指頭圧痕がみられる。口唇部は面取りされ、上端をつまみ上げる。下端には刻目を施す。口縁端部の形状・刻みの入れ方は仁淀川流域の特徴であるが、胎土・粘土帯貼付手法は物部川流域の特徴を有している。35は甕である。口唇部は面取りされ凹面状を呈する。土器本体とは異なる精製された粘土を貼付し微隆起突帯とする。36は壺である。口唇部に面取りを施す。外面には櫛描波状文・太めの凹線文を配置する。37は甕である。上胴部を文様帯とする。上からドーナツ状浮文、4単位の櫛描直線文、刻目を施す。刻目は方向を変えた上下2段の可能性がある。38は壺である。上胴部を文様帯とする。5単位以上の櫛描直線文を巡らせる。櫛描直線文を強く施すことで単位境は微隆起突帯状を呈する。櫛描直線文下には刻目を施す。内面上半部はヨコナデ調整である。39はコップ形のミニチュア土器である。内外面ともナデ調整である。ほぼ完存である。二次被熱により変色する。40は有茎式の打製石鏃でありサヌカイト製である。主要剥離面を残し、縁辺部に調整剥離を加える。

(5)SR

SR1 (図IV-198)

調査区南東部で検出した溝跡である。東肩は調査区外である。深さは検出面から29cmである。南は調査区外へのび、北はIV-5・8区でも検出され、さらに北側にのびる。他の調査区の状況から、複数の溝跡が重複していると考えられる。埋土は3層に分層できる。1層は黄褐色シルトをレンズ状に含む灰色極細粒砂層、2層は黄褐色シルトを縞状にわずかに含む灰色極細粒砂層、3層は礫混じり粗粒砂層である。

図示した出土遺物は弥生土器の甕(41)、石包丁(42)、石鏃(43)である。41は口縁部を上方へ拡張し、2条の凹線文を施す。外面はタテハケ調整、内面はナデ調整である。42は打製石包丁である。両面とも主要剥離面を大きく残す。短辺に紐掛け用の抉りを入れる。片刃である。43は凹基式の打製石鏃である。サヌカイト製である。主要剥離面を残し、縁辺部に調整剥離を加える。



図IV-199 P2・6平面図・エレベーション図・遺物実測図

(6)P (ピット)

P2 (図IV-199)

中央区南端部に位置する。直径約0.3mの円形を呈する。検出面からの深さは37cmである。

図示した出土遺物は石包丁(44)である。頁岩製の磨製石包丁である。中央部には両面とも敲打痕跡が認められ、穿孔を試みる。短辺に紐掛け用の抉りを入れる。当初は中央1穴の磨製石包丁を製作しようとするが、短辺に抉りを入れ紐掛けとして使用している。

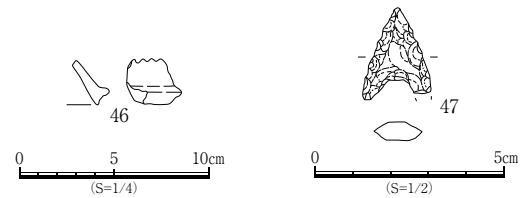
P6 (図IV-199)

中央区中央部に位置する。長軸約0.3m、短軸約0.2mの楕円形を呈する。検出面からの深さは37cmである。

図示した出土遺物は弥生土器の壺(45)である。上胴部を文様帯とする。上から3単位の櫛描直線文、縦方向の短い櫛描直線文、3単位の櫛描直線文、刻目である。櫛描直線文の単位境は微隆起突帯状を呈する。仁淀川流域からの搬入品である。

(7)遺構外出土遺物(図IV-200)

図示した出土遺物は弥生土器の高杯(46)、石鏃(47)である。46の脚端部を上方へ拡張し、凹面状を呈する。下辺が鋸歯状を呈する透孔を穿つ。内面は横方向のヘラケズリ調整である。47は凹基式の打製石鏃である。サヌカイト製である。縁辺部に調整剥離を施す。ほぼ完存である。



図IV-200 遺構外出土遺物実測図

竪穴建物跡計測表 (IV-6区)

遺構名	平面形	規模 (m)			床面標高 (m)	面積 (㎡)	長軸方向 (NはGN)	時期
		長軸/検出長	短軸/幅	深さ (cm)				
ST1	円形	5.3	(4.6)	14	8.8	(22.5)	-	弥生時代中期末
ST1_中央P	不整形	0.9	0.7	35	8.5	-	-	
ST1_P1	楕円形	0.4	0.4	48	8.4	-	-	
ST1_P2	〃	0.4	0.4	24	8.7	-	-	
ST1_P3	円形	0.5	0.5	47	8.4	-	-	
ST1_P4	不整形	0.3	0.3	9	8.7	-	-	
ST1_P5	〃	0.4	0.3	31	8.5	-	-	
ST1_P6	楕円形	0.4	0.4	47	8.3	-	-	
ST1_P7	円形	0.2	0.2	19	8.6	-	-	
ST1_P8	楕円形	0.2	0.2	10	8.7	-	-	
ST1_P9	〃	0.3	0.2	21	8.7	-	-	
ST2	隅丸方形か	(2.1)	(1.2)	22	8.5	(9.0)	N - 11° - W	弥生時代中期末
ST2_P1	円形	0.1	0.1	13	8.3	-	-	
ST2_P2	〃	0.1	0.1	14	8.3	-	-	
ST2_P3	〃	0.1	0.1	14	8.3	-	-	
ST2_SD1	-	(2.4)	0.1	5	8.5	-	-	

土坑計測表 (IV-6区)

遺構名	平面形	規模			床面標高 (m)	主軸方向 (NはGN)	時期
		長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)			
SK1	隅丸長方形	1.4	1.0	46	8.4	N - 63° - E	時期不明
SK2	〃	1.3	1.0	47	8.4	N - 78° - E	〃
SK3	不整形	1.7	(0.6)	60	8.4	N - 13° - E	弥生時代中期末
SK4	溝状	4.6	0.9	27	8.7	N - 64° - W	〃
SK5	不整形	1.2	(0.6)	17	8.9	N - 18° - E	時期不明
SK6	楕円形	0.8	0.5	16	8.7	N - 8° - W	〃
SK7	隅丸長方形	1.1	0.8	11	8.7	N - 10° - W	〃
SK8	〃	1.3	0.9	17	8.7	N - 42° - E	弥生時代中期末
SK9	〃	(4.0)	0.9	69	8.6	N - 60° - E	弥生時代中期末か
SK10	不整形	(1.6)	1.0	13	8.7	N - 88° - W	弥生時代中期
SK11	溝状	1.4	0.4	18	8.8	N - 10° - W	時期不明
SK12	隅丸長方形	1.6	0.7	15	8.7	N - 9° - E	〃
SK13	不整長方形	2.0	0.8	11	8.8	N - 76° - W	弥生時代中期か
SK14	円形	1.1	1.1	14	8.8	-	近世
SK15	溝状	(1.1)	0.5	23	8.8	N - 76° - E	時期不明
SK16	隅丸長方形か	(0.8)	0.7	39	8.6	N - 47° - W	弥生時代中期末
SK17	楕円形	2.0	1.1	27	8.7	N - 6° - W	弥生時代中期
SK18	隅丸長方形	1.9	1.8	28	8.7	N - 11° - E	中世か
SK19	楕円形	0.8	0.7	24	8.8	N - 12° - W	時期不明
SK20	円形	0.8	0.8	16	9.1	-	近世
SK21	不整形	1.7	0.6	16	8.9	N - 86° - E	時期不明
SK22	隅丸長方形	2.9	1.6	12	8.9	N - 78° - W	近世
SK23	不整形	1.5	1.4	43	8.6	N - 47° - E	時期不明
SK24	隅丸長方形	1.4	1.1	29	8.8	N - 28° - E	弥生時代中期末

遺構名	平面形	規 模			床面標高 (m)	主軸方向 (NはGN)	時 期
		長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)			
SK25	不整形	1.5	1.4	25	8.7	N - 10° - E	時期不明
SK26	不整形	0.7	0.6	8	9.2	N - 27° - E	弥生時代中期末
SK27	隅丸長方形	3.0	(2.0)	31	8.7	N - 1° - W	〃
SK27 P1	円形	0.2	0.2	28	8.4	-	
SK27 P2	不整楕円形	0.3	0.2	20	8.5	-	
SK28	隅丸長方形	3.6	2.5	30	8.8	N - 82° - W	弥生時代中期末
SK28 P1	不整楕円形	0.3	0.2	11	8.7		
SK29	溝状	2.0	0.4	28	8.7	N - 1° - W	時期不明

出土遺物(土器)観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-183	1	ST1 II層	弥生 壺		(4.8)		にぶい褐色	櫛描直線文, 突帯。双線による文様。外面, 磨耗。内面, ナデ。
〃	2	ST1 I層	弥生 甕		(1.5)		黒色	口縁部下端, 刻目。微隆起突帯。仁淀川流域からの搬入品。
〃	3	〃	〃		(4.4)		にぶい黄褐色	櫛描直線文, 刻目。内外面, ナデ。
〃	4	ST1 中央ビット	弥生 底部		(3.4)	6.4	橙色	ごくわずかな上げ底, ナデ。外面, ミガキ。内面, ナデ。煤付着。
IV-184	5	ST2	〃		(4.7)	4.9	にぶい黄橙色	ごくわずかな上げ底, ナデ。外面, ミガキ。内面, ナデ。煤付着。
IV-186	6	SK4 (SB2)	弥生 壺	(29.0)	(7.3)		橙色	貼付口縁か。外面, ミガキ・ナデ。内面, ナデ。
〃	7	P26 (SB2)	〃		(3.0)		暗灰黄色	竹管文, 2単位の櫛描直線文, 刻目。櫛描直線文の単位境は微隆起突帯状。仁淀川流域からの搬入品。内面, ナデ。
IV-190	8	SK3	弥生 甕		(2.4)		にぶい黄橙色	貼付口縁。口縁部下端, 刻目。微隆起突帯。内外面, ナデ。
〃	9	SK8	弥生 体部		(5.5)		にぶい橙色	櫛描直線文。微隆起突帯状。刻目。煤付着。
〃	10	SK8 床	弥生 水差形	9.5	(5.6)		浅黄色	口唇部, 面取り。口縁部外面, 3条の凹線文。内外面, 磨耗, 調整不明瞭。
〃	12	SK15 床	弥生 甕	15.3	(13.0)		灰黄褐色	貼付口縁。頸部, 突帯。内外面, ナデ。煤付着。
IV-192	13	SK9	弥生 壺	10.0	(1.0)		にぶい褐色	口唇部, 面取り。上方へわずかに拡張。内外面, ヨコナデ。讃岐からの搬入品。
〃	14	〃	弥生 甕		(4.0)		にぶい黄橙色	貼付口縁。口唇部, 面取り, 下端, 刻目。外面, ナデ。内面, ヨコハケ。
〃	15	〃	弥生 体部		(10.4)		橙色	ドーナツ状浮文, 櫛描直線文, 櫛描波状文, 櫛描直線文, 楕円形浮文。外面, タテハケ。内面, 磨耗。
〃	16	〃	〃		(10.7)		にぶい黄褐色	櫛描直線文, ハケ状原体による刺突文。外面, ナデ。内面, ハケ・ナデ。
〃	17	〃	弥生 甕		(16.3)		明赤褐色	内外面, ナデ。黒斑有り。煤付着。
〃	18	〃	弥生 底部		(9.1)	5.2	にぶい黄橙色	ごくわずかな上げ底, ナデ。外面, ミガキ。内面, ナデ。煤付着。
〃	19	〃	弥生 壺	16.0	(43.6)	9.4	橙色	2条の凹線文。平底, 擬口縁。磨耗, 調整不明瞭。外面, ミガキか。
〃	20	〃	〃	18.2	(35.5)		にぶい黄褐色	貼付口縁。外面, ミガキ。内面, ナデ。ベンガラ塗布か。黒斑有り。SD1出土の破片と接合。
〃	21	〃	弥生 ミニ	7.8	5.4	4.1	にぶい橙色	貼付口縁。内外面, ナデ。黒斑, 有り。完存。
IV-193	23	SK13	弥生 壺	17.4	(5.3)		〃	貼付口縁。粘土帯外面, 弱い指頭圧痕。口唇部, 面取り。磨耗, 調整等, 不明瞭。
IV-194	25	SK16	弥生 甕	17.4	(2.6)		にぶい黄橙色	口唇部は丸みを帯びる。下端, 刻目。微隆起突帯。櫛描直線文。内外面, ナデ。仁淀川流域からの搬入品。
〃	26	SK17	〃	15.0	(5.4)		にぶい褐色	口縁部, 強く外反。口唇部, 凹面状。外面, 粗いたてハケ。内面, ナデ。煤付着。
IV-196	27	SK27	弥生 壺	11.0	(4.7)		橙色	口唇部, 面取り。磨耗, 調整不明瞭。

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-196	28	SK27	弥生甕		(3.9)		黒褐色	微隆起突帯, 楕円形浮文。仁淀川流域からの搬入品。
〃	29	SK28	〃	15.3	(17.0)		にぶい褐色	口縁部, 上方へ拡張, 下方へ引っ張り出す。3条の凹線文。外面, ナデ。内面, ナデ。器壁, 薄い。
〃	30	SK27・28	弥生高杯		(9.2)	10.5	橙色	脚端部, 上下に拡張。3条の凹線文。脚部, 多条沈線文。裾部, 刻目。磨耗, 調整不明瞭。
IV-197	31	SD1	弥生壺	12.9	(3.9)		にぶい橙色	貼付口縁。口唇部, ヨコナデ。磨耗, 調整不明瞭。
〃	32	〃	〃	13.3	(7.2)		橙色	貼付口縁。口唇部, 面取り。磨耗, 調整不明瞭。
〃	33	〃	弥生甕	14.9	(15.6)		オリーブ黒色	貼付口縁。粘土帯外面, ヨコナデ。口唇部, 面取り, つまみ上げ。下端, 長い刻目。上胴部, 櫛描直線文。頸部外面, タテハケ。胴部外面, ヨコハケ・ナデ。内面, ナデ。
〃	34	〃	弥生壺		(3.8)		橙色	貼付口縁。粘土外面, 弱い指頭圧痕。口唇部, 面取り, つまみ上げ。下端, 刻目。磨耗, 調整等不明瞭。口縁部の形状, 刻みの入れ方は仁淀川流域の手法。貼付方法・胎土は物部川流域。
〃	35	〃	弥生甕		(3.1)		オリーブ黒色	口唇部, 面取り。微隆起突帯。櫛描直線文か。磨耗, 調整等不明瞭。仁淀川流域からの搬入品。
〃	36	〃	弥生壺	18.9	(3.8)		灰黄褐色	口唇部, 面取り。外面, 櫛描波状文。1条の凹線文。磨耗, 調整等不明瞭。
〃	37	〃	弥生甕		(5.3)		黄灰色	ドーナツ状浮文, 4単位の櫛描直線文, 刻目。内面, ナデ。
〃	38	〃	弥生壺		(6.9)		にぶい黄橙色	5単位以上の櫛描直線文。単位境は微隆起突帯状。刻目。煤付着。内面, ナデ。
〃	39	〃	弥生ミニ	4.9	4.7	3.1	〃	コップ形。内外面, ナデ。ほぼ完存。
IV-198	41	SR1 II層	弥生甕	24.1	(5.6)		橙色	口縁部, 上方へ拡張。2条の凹線文。外面, タテハケ。内面, ナデ。
IV-199	45	P6	弥生壺		(4.6)		にぶい橙色	3単位の櫛描直線文, 縦方向の櫛描直線文, 3単位の櫛描直線文, 刻目。櫛描直線文の単位境は微隆起突帯状。仁淀川流域からの搬入品。内面, ナデ。
IV-200	46	遺構外	弥生高杯		2.3		浅黄橙色	脚端部, 上方へ拡張, 凹面状。下辺が鋸歯状の透孔。内面, 横方向のケズリ。

出土遺物(石器)観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm/g)				石 材	特 徴
				全長	全幅	全厚	重量		
IV-190	11	SK10	石鏃	(5.2)	1.5	0.4	(2.3)	サヌカイト	有茎式打製石鏃。先端部, 茎部, 欠損。調整剥離。断面, 扁平な菱形。
IV-192	22	SK9	叩石	10.8	8.8	2.2	340	砂岩	楕円形の平面な川原石。両面の中央部, 側面に使用痕跡。完存。
IV-193	24	SK13	石包丁	(8.2)	6.6	1.1	(97.0)	頁岩	表面は主要剥離面を大きく残し, 裏面は自然面を大きく残す。未成品か。欠損。
IV-197	40	SD1 II層	石鏃	4.6	1.8	0.6	(3.2)	サヌカイト	有茎式の打製石鏃。主要剥離面を残す。縁辺部, 調整剥離。茎部の一部, 欠損。
IV-198	42	SR1 II層	石包丁	10.2	5.1	1.4	85.0	結晶片岩	打製石包丁。両面とも主要剥離面を大きく残す。短辺に紐掛け用の抉りを入れる。片刃。完存か。
〃	43	〃	石鏃	4.7	2.5	0.5	5.4	サヌカイト	凹基式の打製石鏃。両面とも主要剥離面を大きく残す。縁辺部, 調整剥離。大型。
IV-199	44	P2	石包丁	10.9	5.6	1.0	96.5	頁岩	磨製石包丁。片刃。中央部には両面から敲打痕跡。短辺に紐掛け用の抉り。
IV-200	47	遺構外	石鏃	2.4	1.8	0.5	(1.5)	サヌカイト	凹基式の打製石鏃。両面とも主要剥離面を残す。縁辺部, 調整剥離。ほぼ完存。

16. IV-7区

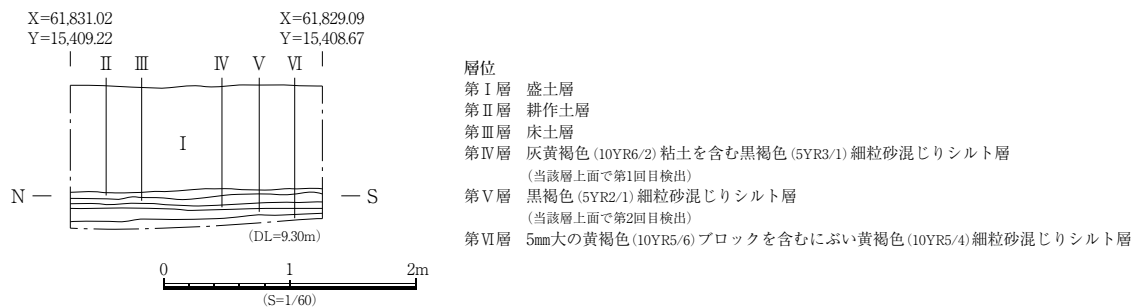
1. 調査区の概要

県道に面した面積の狭い調査区である。弥生時代の竪穴建物跡・土坑などを検出した。弥生時代の明確な竪穴建物跡を検出した調査区では最も東に位置しており、居住域の東端の様相を示す調査区である。

2. 基本層序(図IV-201)

基本層序は調査区東壁で確認した。調査前には建物が建っていたため旧耕作土上に約0.8mの盛土が行われていた。盛土の下には旧耕作土、旧床土があり、それらを除去した黒褐色細粒砂混じりシルト上面(標高9.26m)で上面遺構(P1~5, SK1・2)を検出した。そして、6cm掘削した黒褐色細粒砂混じりシルト上面(標高9.20m)で下面遺構(上記以外の遺構)を検出した。

第Ⅰ層	盛土層
第Ⅱ層	耕作土層
第Ⅲ層	床土層
第Ⅳ層	灰黄褐色(10YR6/2)粘土を含む 黒褐色(5YR3/1)細粒砂混じりシルト層(当該層上面で第1回目検出)
第Ⅴ層	黒褐色(5YR2/1)細粒砂混じりシルト層(当該層上面で第2回目検出)
第Ⅵ層	5mm大の黄褐色(10YR5/6)ブロックを含む にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂混じりシルト層



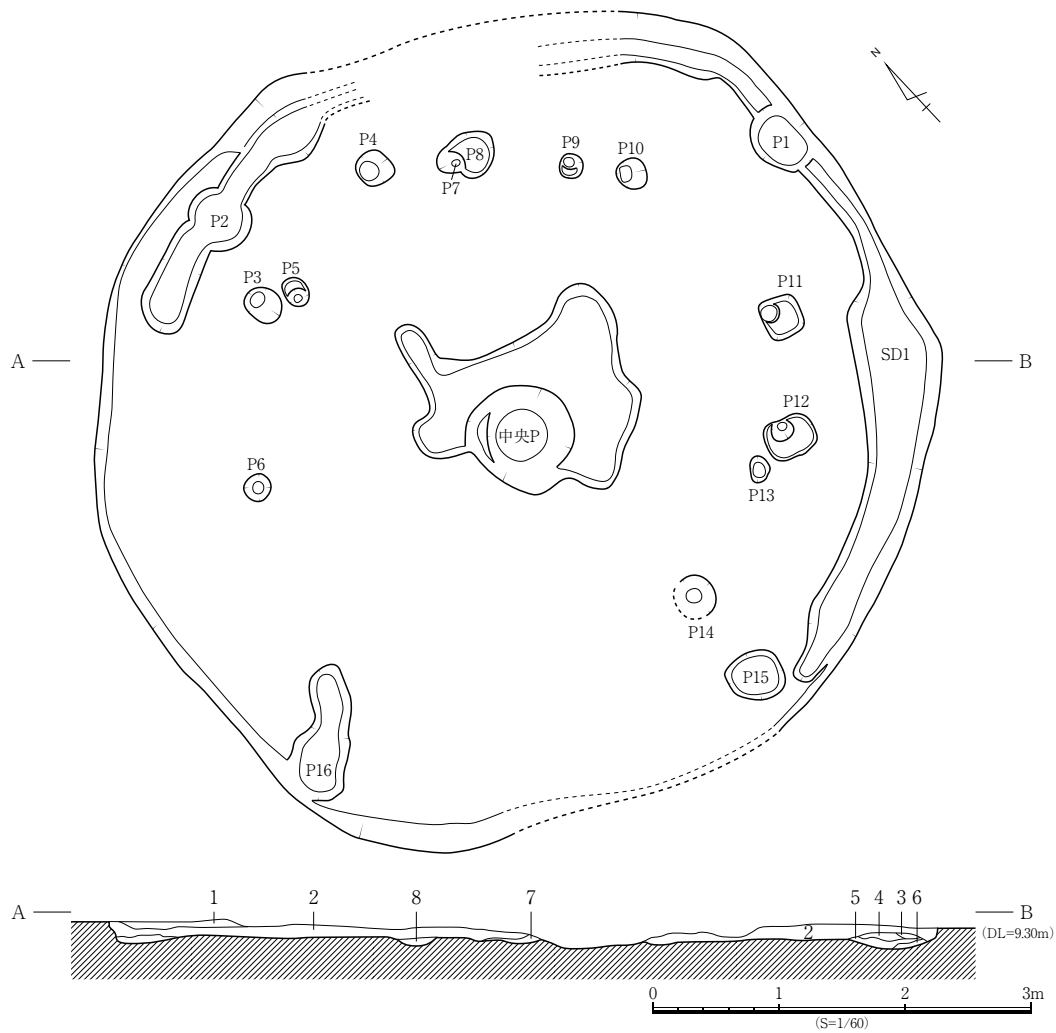
図IV-201 調査区東壁基本層序

3. 検出遺構と遺物

(1) ST

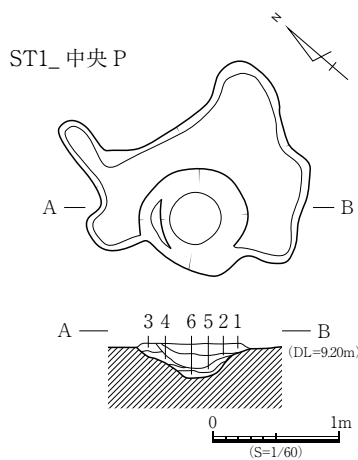
ST1(図IV-202・203)

多角形状を呈する直径約6.6mの円形の竪穴建物跡である。SK4に切られる。また、大きく攪乱され、攪乱は床面まで達している部分がある。検出面からの深さは26cmである。主要な埋土は細粒砂混じり灰褐色シルト、褐灰色シルトをブロック状に含む細粒砂混じり黒褐色シルトである。床面では中央ピット、ピット、壁溝を検出した。中央ピットは床面の中央で検出した。長軸約0.9m、短軸約0.8m



遺構埋土

- | | |
|--|-----------------------------------|
| 1. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細粒砂混じりシルト | 5. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細粒砂混じりシルト (SD1) |
| 2. 褐灰色 (7.5YR4/1) シルトをブロック状に含む黒褐色 (7.5YR3/2) 細粒砂混じりシルト | 6. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト (SD1) |
| 3. 黄褐色 (10YR5/6) をブロック状に含む褐灰色 (7.5YR4/1) シルト (SD1) | 7. 微細炭化物に粘土が混じる黒色 (10YR2/1) 炭層 |
| 4. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細粒砂混じりシルト (SD1) | 8. 黒褐色 (10YR3/2) 細粒砂混じりシルト |



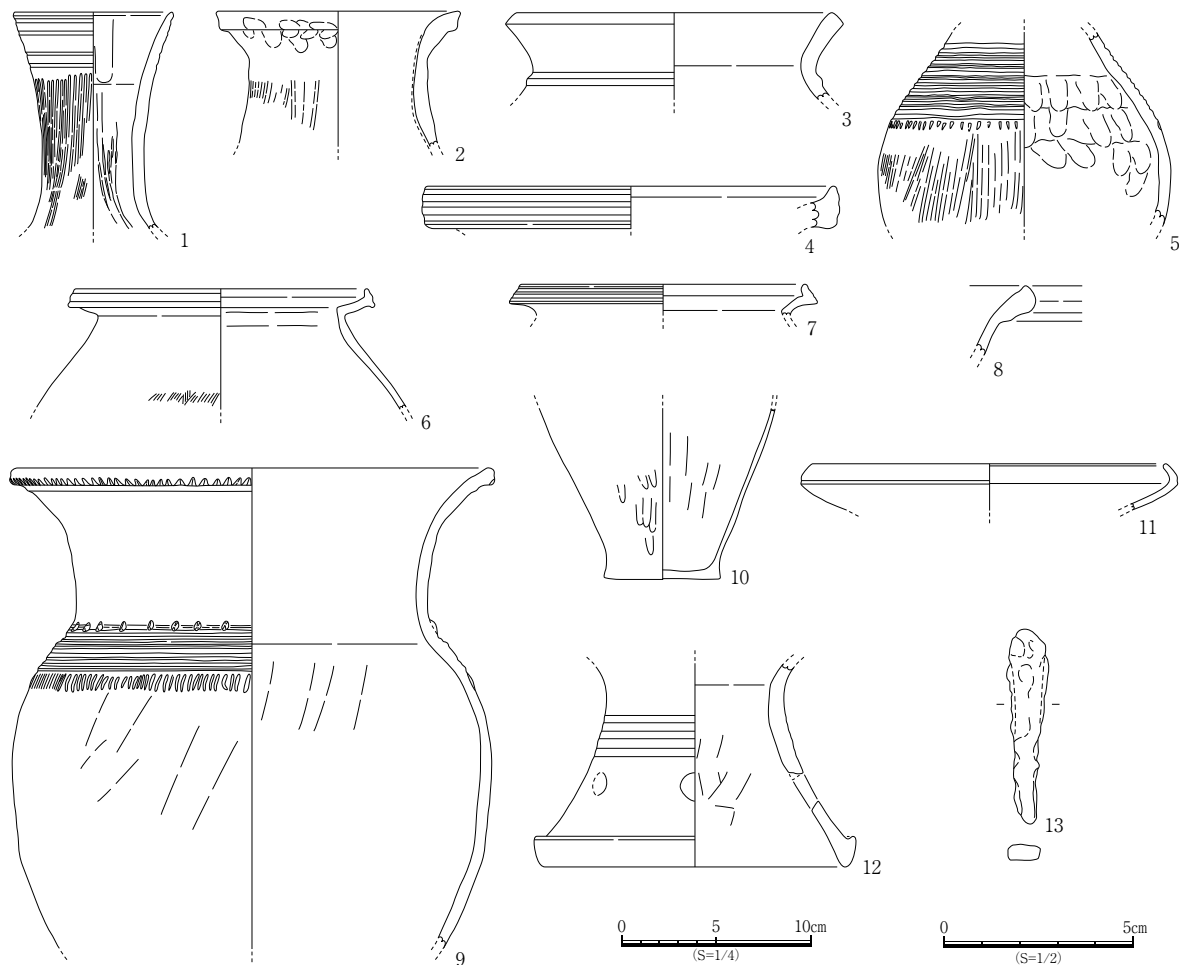
遺構埋土

- | |
|--|
| 1. 黒褐色 (10YR3/2) 細粒砂混じりシルト |
| 2. 5mm大の褐灰色 (10YR5/1) 粘土を含む黒褐色 (10YR3/2) 細粒砂混じりシルト |
| 3. 褐灰色 (10YR5/1) 粘土をシミ状に含む褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂混じりシルト |
| 4. 5mm大の炭化物をわずかに含む黒褐色 (7.5YR3/1) 細粒砂混じりシルト |
| 5. 微細炭化物をわずかに含む微細焼土をまばらに含む黒褐色 (10YR3/1) 細粒砂混じりシルト |
| 6. 微細炭化物をわずかに含む黒褐色 (10YR3/2) 粘土混じりシルト |

図IV-202 ST1_中央P平面図・断面図

の楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、埋土は細粒砂混じり黒褐色シルト、5mm大の褐灰色粘土を含む細粒砂混じり黒褐色シルト、褐灰色粘土を含む細粒砂混じり褐灰色シルト、5mm大の炭化物をわずかに含む細粒砂混じり黒褐色シルト、微細炭化物・微細焼土をわずかに含む細粒砂混じり黒褐色シルト、微細炭化物をわずかに含む粘土混じり黒褐色シルトである。また、中央ピットの北東の床面には炭化物層がひろがる。炭化物層を除去すると床面は数cm凹む。壁から約1.2m内側の円周上でピットを11基検出した。建物跡の規模からするとピットの数は多く、上屋構造のみが建替えられた可能性がある。

図示した出土遺物は弥生土器の壺・甕・高杯・器台、鉄鏃である。1は細頸壺である。口縁部に2条1単位の凹線文を2単位巡らせる。外面は縦方向のミガキ調整である。内面はナデ調整で、しぼり目がみられる。2は壺である。口唇部には面取りを施し、凹面状を呈し、上端部をつまみ上げる。頸部外面は縦方向のハケ調整を施す。3は壺か。口縁部は短く外反し、口唇部は平坦面を成す。頸部は突帯状に見えるが、残存部位が少なく突帯かどうか不明瞭である。4は壺である。口縁部を上方へ拡張し、3条の凹線文を施す。5は壺である。上胴部に文様帯を持つ。4単位の櫛描直線文、刻目を配置する。櫛描直線文の条線は太めである。外面はミガキ調整か。内面はナデ調整である。6は甕である。口縁部

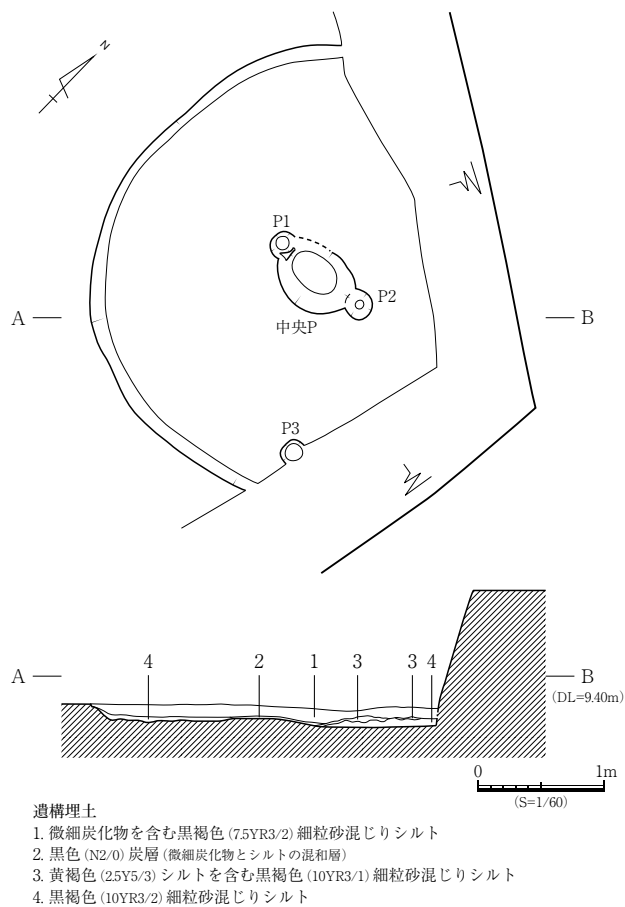


図IV-203 ST1遺物実測図

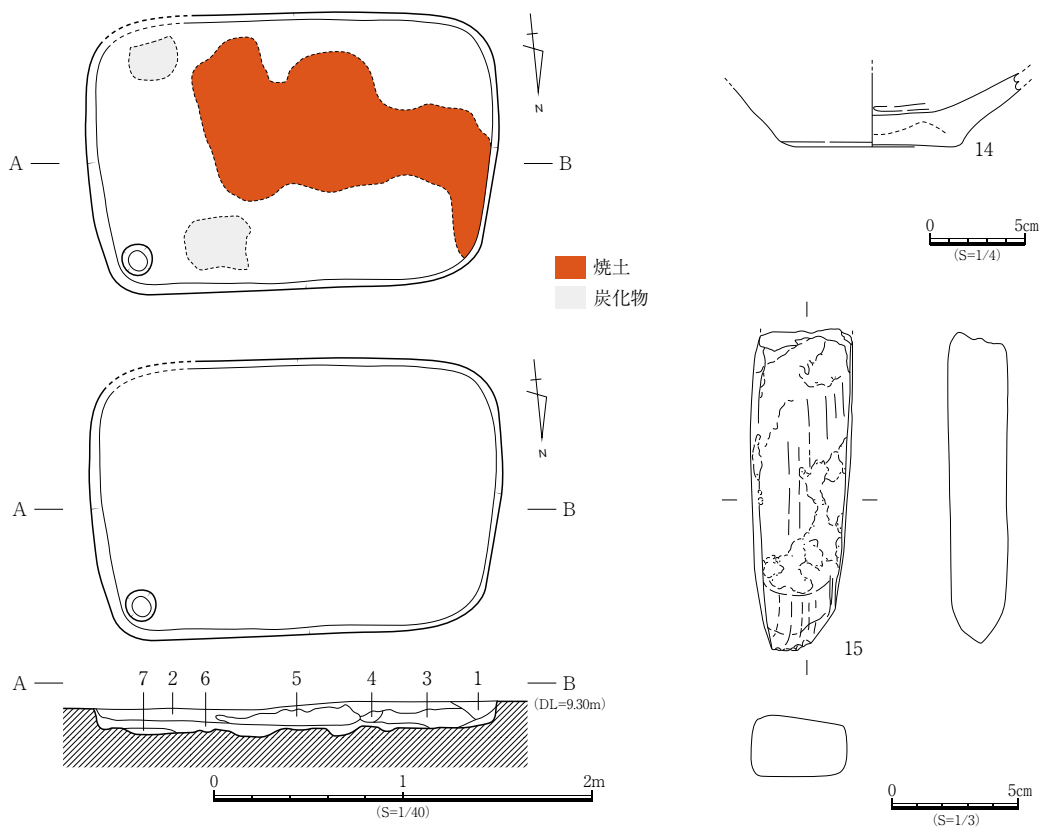
を強く外反させる。口唇部を上下に拡張し、2条の凹線文を巡らせる。器壁は薄い。全体的にシャープな作りである。7は甕である。口唇部を上方へ拡張し、横方向へつまみ出す。3条の凹線文を巡らせる。シャープな作りである。8は甕である。口唇部に面取りを施し、端部をつまみ上げる。磨耗のため下端の刻目の有無を確認できない。微隆起突帯を巡らせる。仁淀川流域からの搬入品である。9は甕である。頸部から口縁部は大きくひろく。口縁部径と胴部最大径はほぼ同じである。口唇部はヨコナデ調整により上端部をつまみ上げ、下端部に刻目を施す。微隆起突帯を巡らせる。上胴部に文様帯を持ち、上から楕円形浮文、4単位の櫛描直線文、刻目を配置する。櫛描直線文の単位境は微隆起突帯状を呈する。内外面ともナデ調整である。仁淀川流域からの搬入品である。10は甕の底部である。平底であり下端部はわずかに突出する。外面は縦方向のミガキ調整、内面はケズリ調整である。器壁は薄い。11は高杯である。口縁部は巻き込み、端部は丸くおさめる。内面、ミガキか。讃岐からの搬入品である。12は器台である。磨耗のため、調整等の観察は困難である。脚端部を上方へ拡張させる。脚部に数条の凹線文を巡らせる。また、円孔を穿つ。13は柳葉形の鉄鏃である。断面形は長方形を呈する。完存か。ST1は弥生時代中期末。

ST2 (図IV-204)

一部は調査区外であるが直径約3.6mの円形の竪穴建物跡と推測される。検出面からの深さは42cmである。主な埋土は細粒砂混じり灰褐色シルト、微細炭化物を含む細粒砂混じり黒褐色シルトである。床面で中央ピット、ピットを検出した。中央ピットは床面の中央に位置し、長軸脇に直径約0.20mの小ピットを伴う、いわゆる松菊里型である。小ピットの深さは32cmと39cmである。出土遺物は弥生土器片が数点のみである。ST2は弥生時代中期末か。



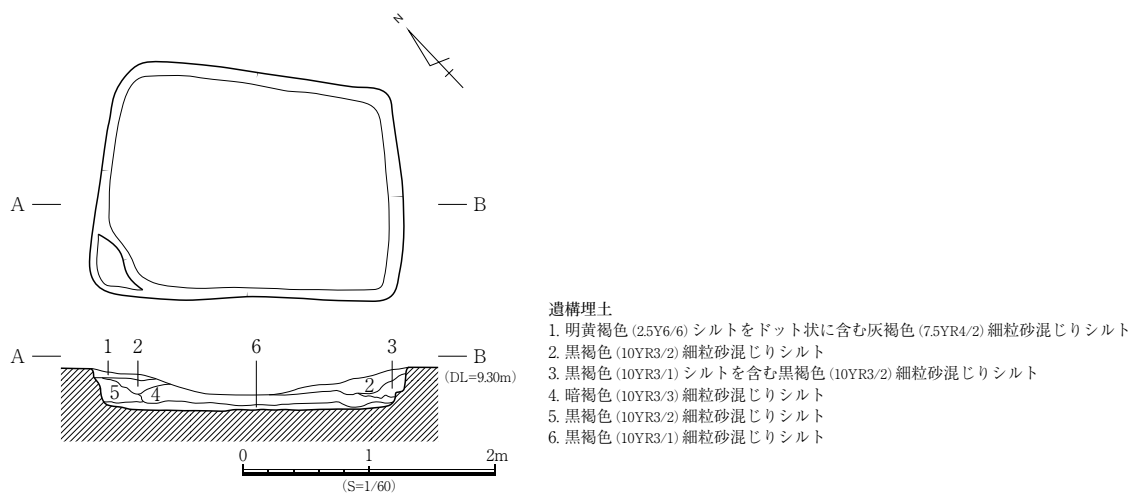
図IV-204 ST2平面図・断面図



遺構埋土

1. 焼土を含む細粒砂混じり褐灰色 (7.5YR4/1) シルト
2. 細粒砂混じり黒褐色 (7.5YR3/2) シルト
3. 黄褐色 (10YR5/6) シルトを含む細粒砂混じり灰褐色 (7.5YR4/2) シルト
4. 細粒砂混じり暗赤褐色 (5YR3/2) シルト (3層と5層の混和層)
5. 微細炭化物を含み細粒砂混じる赤褐色 (2.5YR4/6) シルト
6. 細粒砂混じり黒褐色 (5YR2/1) シルト
7. 黒褐色 (5YR2/1) シルト・5mm大の黄褐色 (10YR5/6) ブロックを含み細粒砂混じるにぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト

図IV-205 SK3平面図・断面図・焼土分布図・遺物実測図



遺構埋土

1. 明黄褐色 (2.5Y6/6) シルトをドット状に含む灰褐色 (7.5YR4/2) 細粒砂混じりシルト
2. 黒褐色 (10YR3/2) 細粒砂混じりシルト
3. 黒褐色 (10YR3/1) シルトを含む黒褐色 (10YR3/2) 細粒砂混じりシルト
4. 暗褐色 (10YR3/3) 細粒砂混じりシルト
5. 黒褐色 (10YR3/2) 細粒砂混じりシルト
6. 黒褐色 (10YR3/1) 細粒砂混じりシルト

図IV-206 SK4平面図・断面図

SK2

調査区北東部で検出した遺構である。大部分が調査区外のため、形状・規模は不明である。検出面からの深さは9cmである。

SK3 (図IV - 205)

調査区北部で検出した隅丸長方形の土坑である。SK4に切られる。長軸約2.1m，短軸約1.4m，検出面からの深さは13cmである。埋土は焼土を含む細粒砂混じり褐灰色シルト，細粒砂混じり黒褐色シルト，黄褐色シルトを含む細粒砂混じり灰褐色シルト，細粒砂混じり暗赤褐色シルト，微細炭化物を含む細粒砂混じり赤褐色シルト，細粒砂混じり黒褐色シルト，黒褐色シルト・黄褐色ブロックを含む細粒砂混じりにぶい黄褐色シルトである。

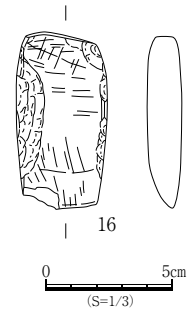
図化した出土遺物は弥生土器の壺の底部(14)，石斧(15)である。15は元は伐採斧であり，欠損あるいは打割後，側面を磨き，幅の狭い斧として再利用したと推測される。蛇紋岩製である。

SK4 (図IV - 206)

調査区北部で検出した隅丸長方形の土坑である。SK3を切る。長軸約2.4m，短軸約1.8m，検出面からの深さは32cmである。埋土は明黄褐色シルトをドット状に含む細粒砂混じり灰褐色シルト，細粒砂混じり黒褐色シルト，黒褐色シルトをシミ状に含む細粒砂混じり黒褐色シルト，細粒砂混じり暗褐色シルト，細粒砂混じり黒褐色シルト，細粒砂混じり黒褐色シルトである。

(3)遺構外出土遺物(図IV - 207)

図化した出土遺物は蛇紋岩製の扁平片刃石斧(16)である。基部は斜めであり，両側面はややふくらみ，全体的にいびつである。刃部は鋭い。



図IV - 207 遺構外出土遺物実測図

竪穴建物跡計測表 (IV-7区)

遺構名	平面形	規 模 (m)			床面標高(m)	面積 (㎡)	長軸方向 (NはGN)	時 期
		長軸/検出長	短軸/幅	深さ (cm)				
ST1	円形	6.6	6.4	21	9.0	32.1	-	弥生時代中期末
ST1 _中央P	楕円形	0.9	0.8	28	8.8	-	-	
ST1_P1	〃	0.5	0.4	23	8.8	-	-	
ST1_P2	〃	0.5	0.4	11	8.9	-	-	
ST1_P3	〃	0.3	0.2	22	8.3	-	-	
ST1_P4	〃	0.3	0.2	12	8.8	-	-	
ST1_P5	〃	0.2	0.2	34	8.7	-	-	
ST1_P6	円形	0.2	0.2	27	8.8	-	-	
ST1_P7	〃	0.2	0.2	30	8.7	-	-	
ST1_P8	不整楕円形	0.3	0.3	6	8.9	-	-	
ST1_P9	円形	0.2	0.2	17	8.8	-	-	
ST1_P10	不整円形	0.2	0.2	26	8.8	-	-	
ST1_P11	方形	0.3	0.3	35	8.9	-	-	
ST1_P12	隅丸方形	0.4	0.3	42	9.0	-	-	
ST1_P13	不整楕円形	0.2	0.1	6	9.0	-	-	
ST1_P14	円形	0.3	(0.2)	18	8.9	-	-	
ST1_P15	不整方形	0.4	0.4	6	9.0	-	-	
ST1_P16	〃	0.6	0.4	14	8.9	-	-	
ST1_SD1	-	(8.5)	0.2	10	8.9	-	-	
ST2	円形	3.6	-	15	9.0	(10.1)	-	
ST2 _中央P	楕円形	0.6	0.5	28	8.7	-	-	
ST1_P1	〃	0.2	0.1	32	8.6	-	-	
ST1_P2	円形	0.2	0.2	39	8.6	-	-	
ST1_P3	〃	0.2	(0.1)	18	8.8	-	-	

土坑計測表 (IV - 7 区)

遺構名	平面形	規 模			床面標高 (m)	主軸方向 (N は GN)	時 期
		長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)			
SK1	不整形	(1.1)	0.4	10	9.2	N - 16° - E	弥生時代中期末
SK2	円形	-	-	9	9.2	-	時期不明
SK3	隅丸長方形	2.1	1.4	16	9.0	N - 84° - W	古代
SK4	◇	2.4	1.8	33	8.8	N - 41° - W	弥生時代中期末

出土遺物(土器)観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm)			色調 (外面)	特徴
				口径	器高	底径		
IV-203	1	ST1	弥生壺	8.4	(11.5)		浅黄橙色	細頸壺。口縁部, 2条1単位の凹線文, 2単位。外面, ミガキ。内面, ナデ。しぼり目。
〃	2	〃	〃	12.7	(7.2)		〃	貼付口縁か。口唇部, 面取り, つまみ上げる。磨耗, 調整不明瞭。外面, タテハケ。
〃	3	ST1 I層	弥生壺か	16.7	(4.6)		にぶい橙色	口唇部, 面取り。内外面, ヨコナデ。
〃	4	ST1	弥生壺	21.6	(2.3)		にぶい黄橙色	口縁部, 上方へ拡張。3条の凹線文。
〃	5	〃	〃		(10.3)		浅黄橙色	4単位の櫛描直線文, 刻目。外面, ミガキか。内面, ナデ。
〃	6	ST1 I層	弥生甕	15.3	(6.4)		橙色	口唇部, 上下へ拡張。2条の凹線文。外面, ミガキか。内面, ナデ。器壁, うすい。煤付着。シャープな作り。
〃	7	〃	〃	15.0	(1.7)		にぶい黄橙色	口唇部, 上方へ拡張, 横方向へ引っ張り出す。3条の凹線文。シャープな作り。
〃	8	〃	〃		(3.7)		オリーブ黒色	口唇部, 面取り。端部, つまみ上げ。下端, 刻目か。微隆起突帯。外面, 磨耗。内面, ナデ。仁淀川流域からの搬入品。
〃	9	〃	〃	24.9	(25.5)		にぶい黄橙色	口唇部, 面取り。端部, つまみ上げ。下端, 刻目。微隆起突帯。上胴部, 楕円形浮文, 4単位の櫛描直線文, 刻目。内外面, ナデ。仁淀川流域からの搬入品。
〃	10	〃	〃		(9.1)	6.2	〃	平底, 下端部, 突出。外面, ミガキ。内面, ケズリ。器壁は薄く, 軽い。シャープな作り。煤付着。被熱変色。
〃	11	〃	弥生高杯	18.6	(2.4)		〃	口縁部は巻き込み, 端部は丸くおさめる。磨耗, 調整等不明瞭。讃岐からの搬入品。
〃	12	〃	弥生器台		(10.8)	(16.0)	にぶい橙色	脚端部, 上方へ拡張。多条の凹線文。円孔。磨耗, 調整等不明瞭。
IV-205	14	SK3	弥生壺		(3.9)	9.5	浅黄橙色	壺の底部。磨耗, 調整等不明瞭。

出土遺物(鉄器)観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm/g)				特徴
				全長	全幅	全厚	重量	
IV-203	13	ST1	鉄鎌	5.2	1.1	0.4	3.5	柳葉形。断面長方形。完存か。

出土遺物(石器)観察表

挿図 番号	図版 番号	出土場所 (遺構)	器種 器形	法量 (cm/g)				石材	特徴
				全長	全幅	全厚	重量		
IV-205	15	SK3	石斧	(12.8)	4.0	2.4	(288)	蛇紋岩	磨製石斧。両刃。伐採斧の再利用。基部, 欠損。
IV-207	16	遺構外	〃	7.0	3.6	1.4	(69.4)	〃	扁平片刃石斧。基部は斜め。両側面は丸みを持ち, ややいびつ。刃部, 側面の一部は欠損。

第IV章 田村遺跡群Ⅲの自然科学分析

1. はじめに

本報告では、田村遺跡群Ⅲの発掘調査にともない実施した、現地調査による堆積層観察、放射性炭素年代測定、珪藻分析、植物珪酸体分析、種実遺体分析、炭化材同定に関する自然科学分析について述べる。以下の報告では、古環境復元と植物利用の2つのパートに分けて検討を行う。

2. 田村遺跡群Ⅲの古環境復元

(1) 分析目的

ここでは、現地調査による堆積層観察、放射性炭素年代測定、珪藻分析、植物珪酸体分析にもとづく調査区とその周辺古環境と古植生復元に関する検討結果を述べる。

(2) 試料

図1に試料採取層準を示す。放射性炭素年代測定は、I-1-3区(5地点)の試料番号1、Ⅲ-4E区(1地点)の試料番号1、Ⅲ-3-7区(3地点)の試料番号2の3点が土壤腐植、Ⅲ-4E区(1地点)の試料番号1を覆う砂層中の年代試料とⅣ-2区(6地点)の試料番号1の2点が炭化材片である。

植物珪酸体分析は、I-1-1区(4地点)の試料番号1~6、Ⅲ-4E区(1地点)の試料番号1・2、Ⅲ-3-6区(2地点)の試料番号1~5、Ⅲ-3-7区(3地点)の試料番号1~3、Ⅲ-4E区の水田状遺構の平面から採取された試料番号0・1・3である。水田状遺構では、珪藻分析も併せて実施する。

水田状遺構の試料番号0・1・3については、土色が異なるものの、粒度組成は共通しており、中粒砂混じり粘土質シルトである。水田状遺構0は黒褐色を呈し、細い根の痕跡が多く、酸化鉄粒子が認められる。水田状遺構2は黒褐色を呈し、植物遺体を含み、糸根状酸化鉄が多い。水田状遺構3は灰褐色を呈し、水田状遺構2と同様に分解の進んだ植物遺体を含み、糸根状酸化鉄が多い。分析の際は、同一試料を分割して用いた。なお、Ⅲ-4E区試料採取位置については本文同区「3.遺構と遺物」参照。

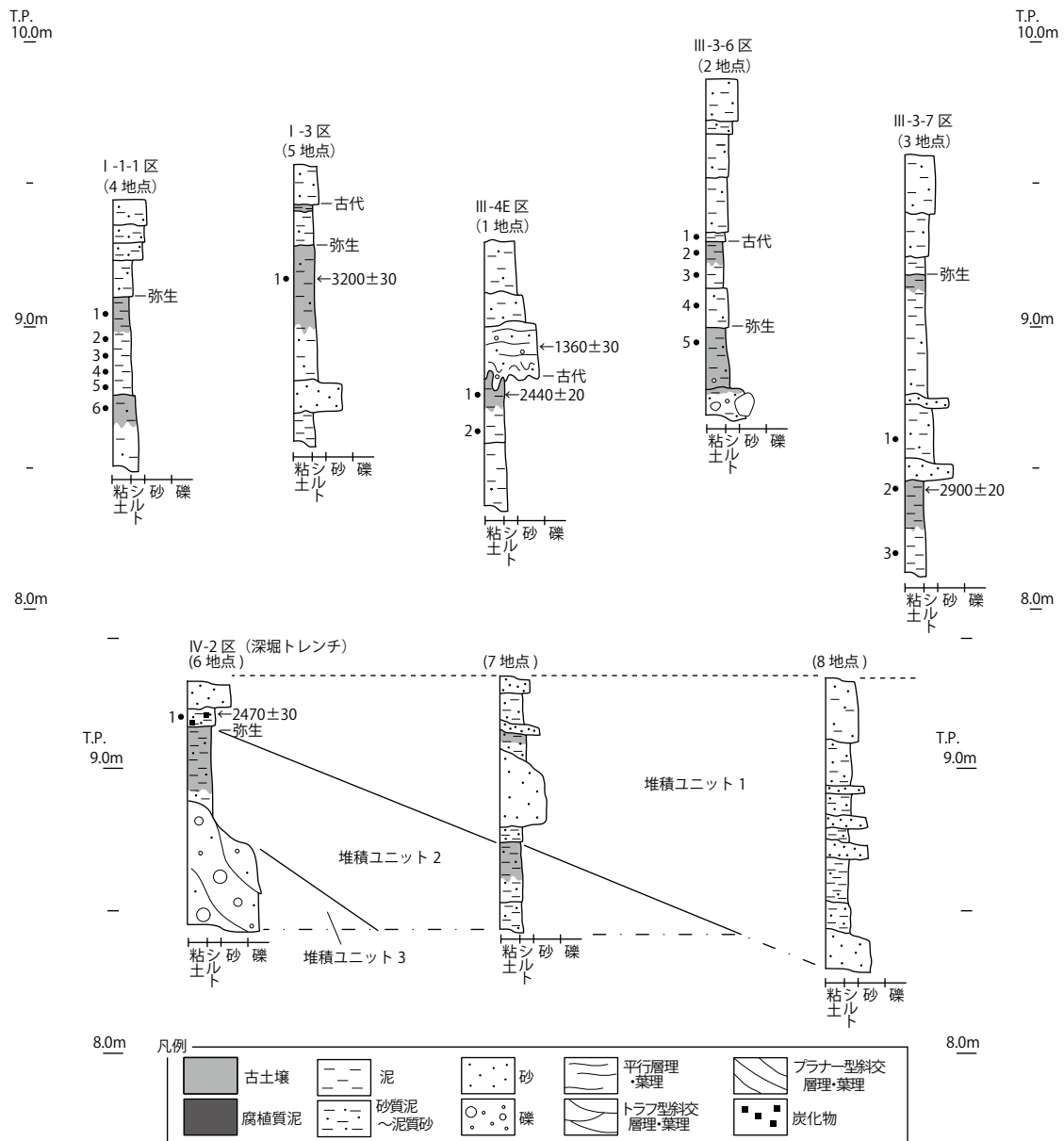
(3) 分析方法

① 放射性炭素年代測定

試料の前処理については、木炭、炭質物、木材が、試料に土壤や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをメス・ピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。

なお、AAA処理でのHClによる酸処理では、通常1mol/l(1M)を用いる。アルカリ処理でのNaOHは、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表記する。

腐植については、メス・ピンセットを使い石などの混入物を取り除き、残りの全試料をすりつぶす(Bulk)。酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には1mol/l(1M)のHClを用い、処理として「HCl」と表記する。



←で示した数値は、放射性炭素年代値 (yrs BP)
 -で示した層準は遺構確認。弥生は弥生時代ないしそれ以降、古代は古代ないしそれ以降の遺構が検出される。

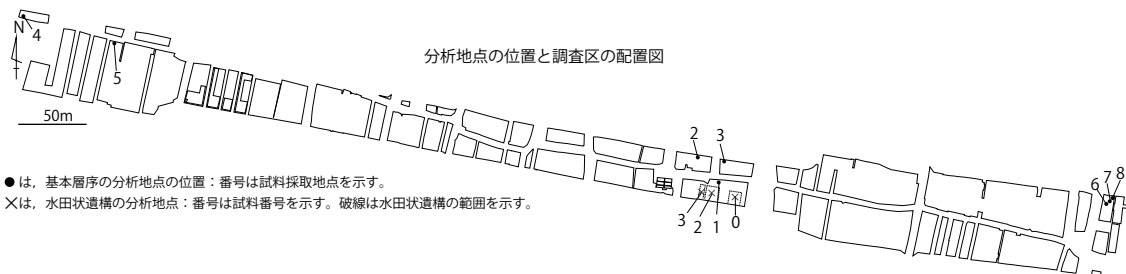


図1 分析試料採取地点の柱状図

処理を終えた試料については、試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて δ 13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。

暦年較正に用いるソフトウェアはCALIB var.7.0である。また、このソフトウェアで用いられる較正曲線はIntCal13(Reimer et al,2013)である。

②珪藻分析

各試料について湿重約3gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4~5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリユラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1,000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が検出できた後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群の80%以上が把握できるように努めた。珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange - Bertalot (2000), Hustedt (1930 - 1966), Krammer & Lange - Bertalot (1985 ~ 1991), Desikachary (1987)などを参考にした。

群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水~汽水生、汽水生、淡水生に生態分類した。さらに、淡水生種については塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類した。検出された種類とその個数を、表2に示した。

③植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。結果は、検出された分類群とその個数の一覧表(表3)で示す。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作製に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算)を求める。結果は、植物珪酸体含量の一覧表(表 3)で示す。その際、100 個/g 未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸め(100 単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、植物珪酸体含量を試料ごとに図示する(図 2)。

(4)結果

①放射性炭素年代測定

年代測定結果を示す(表 1)。同位体効果による補正を行った測定結果は、IV - 2 区(6 地点)の試料番号 1 が 2,470 ± 30 yrs BP, III - 4E 区(1 地点)の試料番号 1 が 2,440 ± 20 yrs BP, それを覆う砂層中の炭化材片が 1,360 ± 30 yrs BP, III - 3 - 7 区(3 地点)の試料番号 2 が 2,900 ± 20 yrs BP, I - 1 - 3 区(5 地点)の試料番号 1 が 3,200 ± 30 yrs BP である。

表 1 放射性炭素年代測定結果

試料名	前処理種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	較正用年代値	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.						
					σ	2σ										
IV - 2 区 (6 地点) 試料番号 1	AaA 炭化材	2,470 ± 30	-26.47 ± 0.39	2,465 ± 26	σ	cal BC 751 - cal BC 686	cal BP 2,700 - 2,635	0.395	IAAA-123065							
						cal BC 667 - cal BC 638	cal BP 2,616 - 2,587	0.168								
						cal BC 619 - cal BC 615	cal BP 2,568 - 2,564	0.021								
						cal BC 594 - cal BC 516	cal BP 2,543 - 2,465	0.416								
						2σ	cal BC 758 - cal BC 683	cal BP 2,707 - 2,632		0.306						
						cal BC 670 - cal BC 486	cal BP 2,619 - 2,435	0.598								
III - 4E 区 (1 地点) 試料番号 1 を 被覆する砂層	AAA 炭化材	1,360 ± 30	-24.39 ± 0.46	1,361 ± 25	σ	cal AD 650 - cal AD 669	cal BP 669 - 1,281	1.000	IAAA-123066							
						2σ	cal AD 635 - cal AD 689	cal BP 689 - 1,261		0.991						
						cal AD 754 - cal AD 760	cal BP 760 - 1,190	0.009								
						III - 4E 区 (1 地点) 試料番号 1	HCl 土壤腐植	2,440 ± 20		-22.89 ± 0.31	2,443 ± 24	σ	cal BC 730 - cal BC 692	cal BP 2,679 - 2,641	0.264	IAAA-123067
													cal BC 659 - cal BC 652	cal BP 2,608 - 2,601	0.049	
													cal BC 543 - cal BC 484	cal BP 2,492 - 2,433	0.401	
2σ	cal BC 464 - cal BC 416	cal BP 2,413 - 2,365	0.286													
cal BC 750 - cal BC 687	cal BP 2,699 - 2,636	0.251														
cal BC 666 - cal BC 641	cal BP 2,615 - 2,590	0.075														
cal BC 593 - cal BC 408	cal BP 2,542 - 2,357	0.674														
III - 3 - 7 区 (3 地点) 試料番号 2	HCl 土壤腐植	2,900 ± 20	-24.55 ± 0.28	2,903 ± 24	σ	cal BC 1,127 - cal BC 1,880	cal BP 3,076 - 3,829	1.000	IAAA-1230678							
						2σ	cal BC 1,194 - cal BC 2,004	cal BP 3,143 - 3,953		0.141						
						cal BC 1,133 - cal BC 1,869	cal BP 3,082 - 3,818	0.859								
						I - 1 - 3 区 (5 地点) 試料番号 1	HCl 土壤腐植	3,200 ± 30		-25.34 ± 0.24	3,201 ± 25	σ	cal BC 1,495 - cal BC 1,447	cal BP 3,444 - 3,396	1.000	IAAA-123069
2σ	cal BC 1,516 - cal BC 1,426	cal BP 3,465 - 3,375	1.000													

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
- 2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。
- 4) 暦年計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV60 (Copyright 1986 - 2010 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。
- 5) 暦年計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 6) 暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 桁目を丸めていない。
- 7) 統計的に真の値が入る確率は σ は 68%、 2σ は 95% である。
- 8) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

表2 珪藻分析結果

種 類	生 態 性			環 境 指 標 種	水田状遺構		
	塩分	pH	流水		試料番号		
					0	2	3
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	1	
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	
unknown	Ogh-unk	unk	unk	1	-	1	
海水生種				0	0	0	
海水～汽水生種				0	0	0	
汽水生種				0	0	0	
淡水～汽水生種				0	0	0	
淡水生種				1	0	2	
珪藻化石総数				1	0	2	

凡例

塩分:pH:流水に対する適応性

H.R.:塩分濃度に対する適応性

pH:水素イオン濃度に対する適応性

C.R.:流水に対する適応性

Ogh-unk:貧塩不明種

unk:pH不明種

unk:流水不明種

表3 植物珪酸体含量

(個/g)

分類群	1地点		2地点					3地点	水田状遺構				
	1	2	1	2	3	4	5	1	2	3	0	2	3
イネ科葉部短細胞珪酸体													
イネ族イネ属	200	<100	<100	<100	-	-	-	-	-	-	<100	<100	100
メダケ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	<100	800
メダケ属ネザサ節	300	<100	<100	<100	<100	<100	<100	<100	<100	-	-	-	-
メダケ属メダケ節	300	100	<100	<100	<100	<100	<100	<100	<100	-	-	-	-
タケ亜科	2900	1200	1400	500	300	200	700	900	1,400	<100	200	200	2,000
ヨシ属	<100	<100	100	<100	<100	-	<100	-	-	-	-	-	-
ウシクサ族コブナグサ属	<100	<100	<100	-	-	-	-	-	-	-	-	<100	<100
ウシクサ族ススキ属	100	-	<100	<100	-	-	-	-	-	-	<100	<100	<100
イチゴツナギ亜科	100	<100	<100	<100	<100	<100	-	-	<100	-	-	-	-
不明	1800	200	700	400	400	400	800	200	600	100	100	200	600
イネ科葉身機動細胞珪酸体													
イネ族イネ属	600	300	100	100	<100	<100	-	-	-	-	<100	<100	600
メダケ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	900
メダケ属ネザサ節	300	100	<100	<100	<100	<100	<100	<100	<100	-	-	-	-
メダケ属メダケ節	400	100	<100	<100	<100	<100	<100	<100	<100	-	-	-	-
タケ亜科	3800	1600	1900	700	800	700	1800	1300	2200	100	<100	400	2200
ヨシ属	100	<100	100	<100	<100	<100	<100	-	-	-	-	-	-
ウシクサ族	100	-	<100	<100	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	2000	1100	1000	600	500	500	800	500	900	100	<100	300	1900
合 計													
イネ科葉部短細胞珪酸体	5800	1900	2500	1000	700	700	1500	1200	2100	200	400	500	3600
イネ科葉身機動細胞珪酸体	7300	3200	3300	1700	1400	1300	2600	1700	3100	200	200	1000	5500
植物珪酸体含量	13100	5100	5800	2700	2100	2000	4100	2900	5200	400	600	1500	9100
珪化組織片													
イネ属短細胞列	*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他													
海綿骨針	*	-	**	*	*	-	-	-	-	-	*	*	*

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)

<100:100個/g未満

-:未検出, *:検出, **:多い

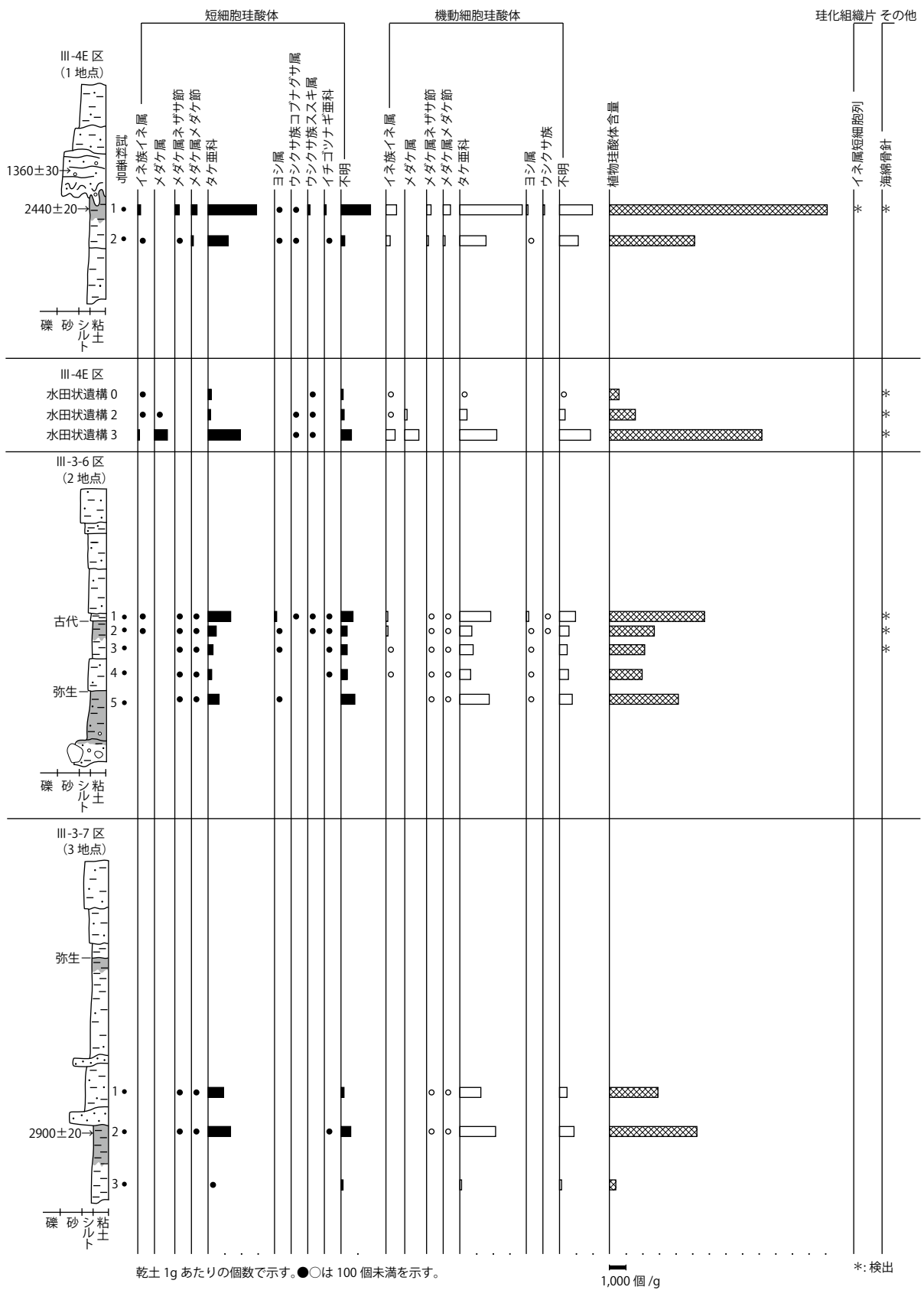


図2 植物珪酸体含量

暦年較正值は、測定誤差が 2σ の場合で、IV-2区(6地点)の試料番号1がcal BC 758 - 415, III-4E区(1地点)の試料番号1がcal BC 750 - 408, それを覆う砂層中の炭化材片がcal AD 635 - 760, III-3-7区(3地点)の試料番号2がcal BC 1,194 - 1,869, I-1-3区(5地点)の試料番号1がcal BC 1,516 - 1,426である。

②珪藻分析

結果を表2に示す。水田状遺構2では、珪藻化石が全く検出されない。水田状遺構0と水田状遺構3からは淡水生種がわずかに見られる。しかし、保存状態としては極々不良であり、珪藻殻が全て半壊し、溶解の痕跡が認められる。汽水あるいは海水生種などは認められない。

③植物珪酸体分析

結果を表3, 図2に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、概して保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、各地点の産状を述べる。

・1地点

本地点での植物珪酸体含量は、下位の試料番号2で約5,100個/g, その上位の古土壌から採取された試料番号1で約13,000個/gである。植物珪酸体の産状は、植物珪酸体含量が異なるものの、いずれも同様であり、メダケ節やネザサ節などを含むタケ亜科の産出が目立ち、コブナグサ属やススキ属、ヨシ属、イチゴツナギ亜科がわずかにあるいは稀にみられる。また、栽培植物であるイネ属も産出する。その含量は、葉部の短細胞珪酸体で100未満~200個/g程度、機動細胞珪酸体で300~600個/g程度である。試料番号1では、短細胞列も認められる。植物珪酸体の他に、試料番号1では海綿骨針も検出される。

・2地点

植物珪酸体含量は層位的に異なり、下位の古土壌から採取された試料番号5で約4,100個/g, その上位の試料番号4や3で2,000個/g程度、さらに上位の古土壌から採取された試料番号2で2,700個/g, 最上位の試料番号1で約5,800個/gである。植物珪酸体の産状は、いずれも同様であり、メダケ節やネザサ節などを含むタケ亜科の産出が目立ち、コブナグサ属やススキ属、ヨシ属、イチゴツナギ亜科がわずかにあるいは稀にみられる。また、イネ属も試料番号4で出現し、上位にかけて連続的に産出する。ただし、その含量は概して少なく、試料番号4と3で機動細胞珪酸体のみがみられて、それぞれ100個/g未満である。試料番号2と1では短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体のみがみられるものの、短細胞珪酸体が100個未満、機動細胞珪酸体が100個/g程度である。植物珪酸体の他に、試料番号1~3では海綿骨針も検出される。

・3地点

植物珪酸体含量は層位的に異なり、下位の試料番号3で400個/g程度、古土壌から採取された試料番号2が約5,200個/gと多く、上位の試料番号1は約2,900個/gと少なくなる。

試料番号3では、タケ亜科などがわずかにみられるに過ぎない。試料番号2と1では、他2地点と比較して検出される分類群が少なく、メダケ節やネザサ節などを含むタケ亜科の産出が目立つ。

なお、いずれの試料からもイネ属は認められない。

・水田状遺構

水田状遺構0が約600個/g, 水田状遺構2が約1,500個/g, 水田状遺構3が最も多く約9,100個/gである。検出された分類群の産状は、いずれの試料も同様である。すなわち、タケ亜科の産出が目立

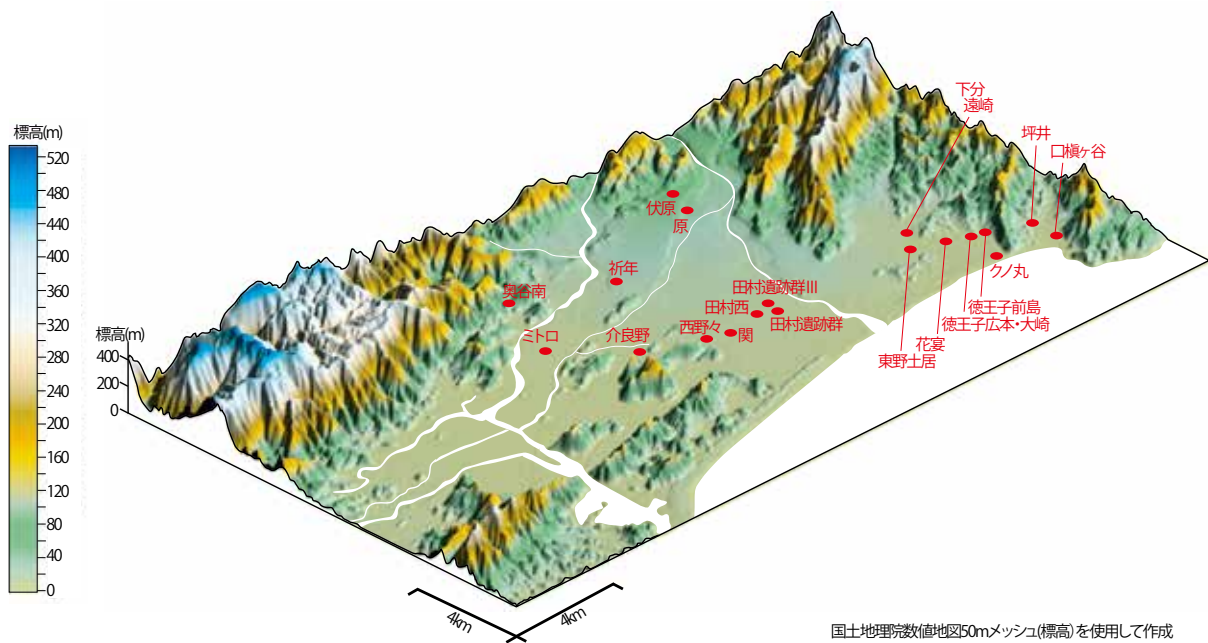


図3 調査地点周辺の地形起伏と自然科学分析が実施された主要な周辺遺跡

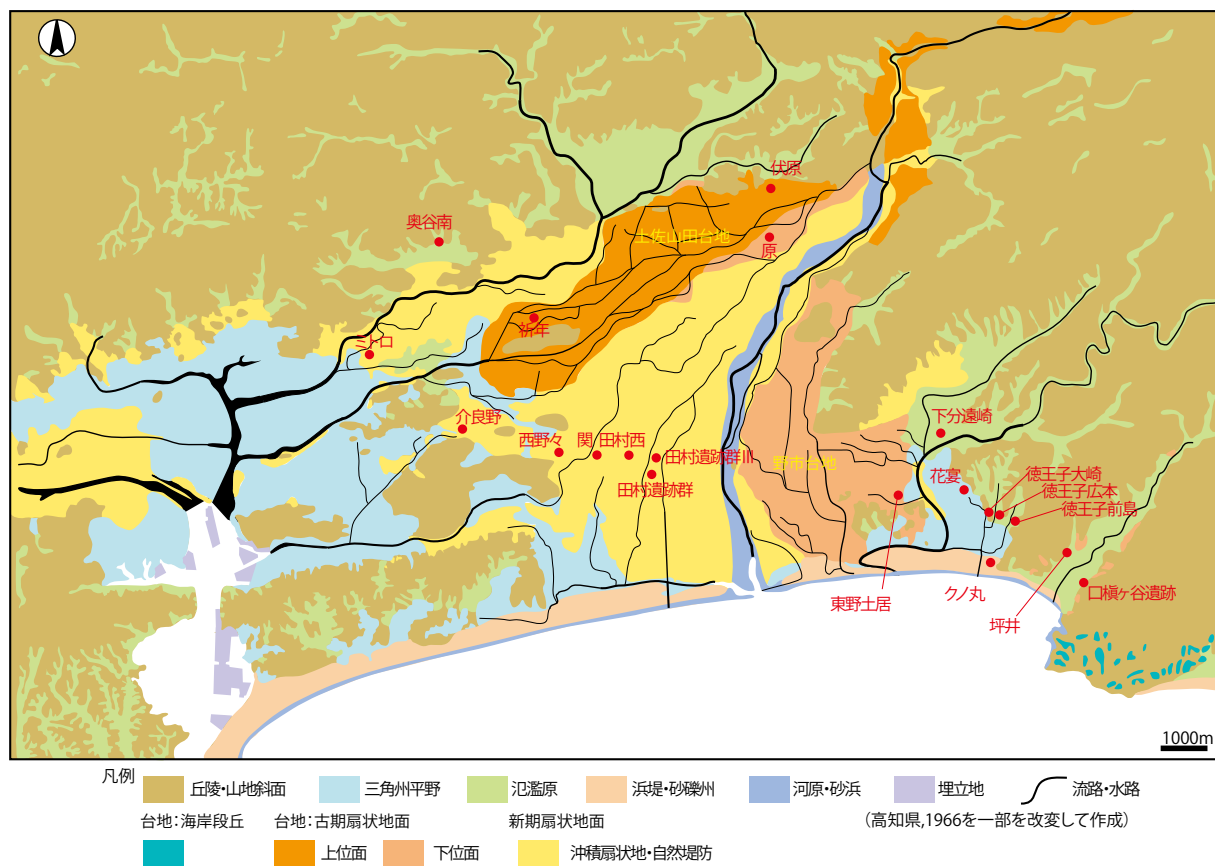


図4 遺跡の位置図と自然科学分析が実施された主要な周辺遺跡

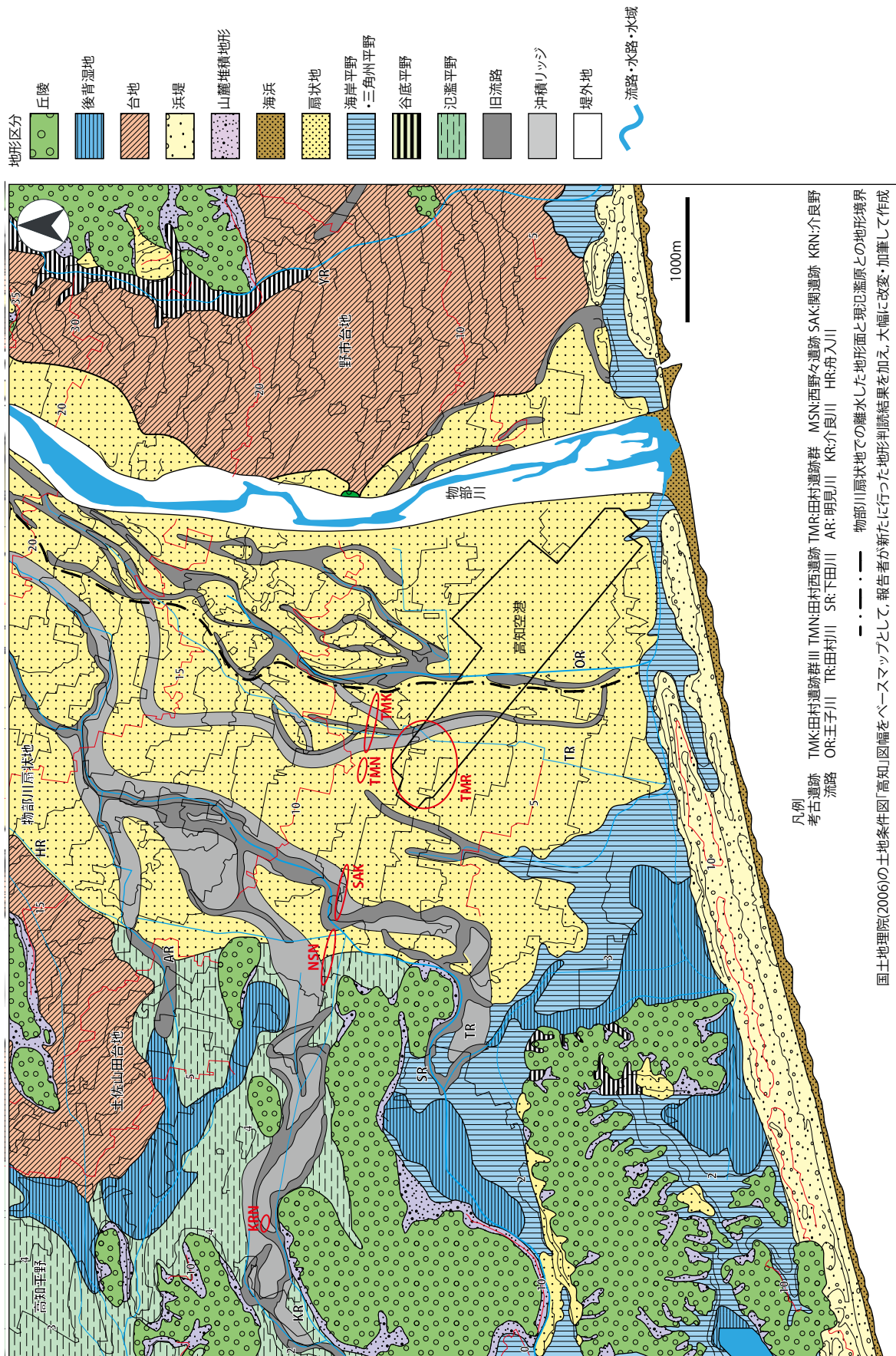


図5 田村遺跡群周辺地形分類図

ち、コブナグサ属やススキ属がわずかあるいは稀にみられる。各試料からは栽培植物であるイネ属が産出し、短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が認められる。その含量は水田状遺構0と水田状遺構2でいずれも100個/g未満であり、水田状遺構3が最も多く、短細胞珪酸体が100個/g程度、機動細胞珪酸体が600個/g程度である。また各試料からは、植物珪酸体の他に海綿骨針も検出される。

(5)考察

①遺跡の立地環境と層序

1)地形

田村遺跡群Ⅲは、物部川が形成した沖積扇状地面上に立地する(図3・4)。物部川沖積扇状地は、開析扇状地(古期扇状地面)と現成の扇状地(新規扇状地面)に大別される(平井,2004)。開析扇状地は、沖積面との比高とその発達程度にもとづき、大きく上下2面に区分される(平井,2004)。これらの開析扇状地面は、現物部川の右岸と左岸にそれぞれ分布している。物部川右岸の開析扇状地面は、土佐山田台地と呼ばれており、相対的に上位の地形面(上位面)に相当する。本地形面は、標高50～15mに分布しており、その南端が後免付近で沖積扇状地面下に埋没する(平井,2004)。物部川左岸の開析扇状地面は、野市台地と呼ばれており、相対的に下位の地形面(下位面)に相当する。地形面は、標高30～5mに分布しており、その南端が現海岸線付近にまで達する。この部分の地形面は、砂丘もしくは浜堤堆積物に覆われている。なお、開析扇状地面では、形成時期や離水時期に関する年代値がほとんど得られていない。

現成の扇状地面の物部川沖積扇状地は、開析扇状地に挟まれた領域に発達する。本地形面は、山田堰が築かれた土佐山田町の神母ノ木付近を扇頂部として、扇端部が海岸線に並行する浜堤の後背低地近くまでの標高50～5mまでの広い範囲に広がっている(満塩・阿子島,1991;平井,2004)。扇状地面の堆積平均勾配は、0.2°(3.5%)前後である(図5)。

物部川沖積扇状地では、田村遺跡群Ⅲの南側に隣接する田村遺跡群において、弥生時代前期以降の遺構が検出される検出面構成層の基盤層中(以下、遺構検出面基盤層と略す)の流路堆積物から、縄文時代前期や中期の土器が検出されている(小野,2002)。その流路堆積物の上部に存在する遺構検出面基盤層中の洪水堆積層では、縄文時代後期の包含層が挟在する(小野,2002)。田村北遺跡、田村遺跡群では、旧流路部分を除き、縄文時代前期～後期の遺物が含まれる遺構検出面基盤層を被覆する弥生時代およびそれ以降の堆積層(以下、遺構検出面被覆層と略す)において、流路堆積物や洪水堆積物の厚い累重がほとんど認められない。このような遺構検出面被覆層では、古代以降の耕作土を主体とする堆積層が被覆する。砂礫層が上に凸状をなして堆積する地形的に高い場所では、現在の耕作土からなる表土直下が遺構検出面となり、遺構検出面被覆層の堆積がほとんど認められない。

上記のような層序的特徴を示す田村遺跡群Ⅲ、田村遺跡群Ⅰ・Ⅱについては、いくつかの地点において遺構検出面基盤層から縄文土器の検出が報告されているものの、これまでに沖積扇状地面の形成年代に関する地質学的な情報がほとんど得られていなかった。しかし、近年の周辺遺跡の発掘調査とこれに伴う自然科学分析により、田村遺跡群Ⅲ、田村遺跡群Ⅰ・Ⅱが立地する沖積扇状地面では、堆積年代に関する資料が得られるようになってきており、この成果にもとづき層序や地形発達に関する検討が行われるようになってきた(パリノ・サーヴェイ(株),2011・2014)。田村遺跡群Ⅲの西側に存在する西野々遺跡では、深掘断面調査と放射性炭素年代測定による自然科学分析結果から、

網状河川の堆積システムで形成された、砂礫を主体とする扇状地堆積物で構成される遺構検出面基盤層最上部に含まれる木材や炭の年代試料が6,400～5,900年前(2σの暦年代値で、以下に示す放射性炭素年代も同様)、その直上の古土壌の腐植が6,200～5,900年前を示す。この成果から、西野々遺跡の扇状地堆積物は、6,000年前後の縄文時代前期頃までに累重したことが明らかとなった(図6:パリノ・サーヴェイ(株),2011)。同様の堆積状況は、西野々遺跡の西方約2.5kmに位置する介良野遺跡でも確認されており、扇状地堆積物上部に含まれる木材から6,200～5,900年前、この堆積物を侵食して形成された放棄流路堆積物基底部の植物遺体が5,600～5,500年前を示す(図7:パリノ・サーヴェイ(株),2007)。上記のような成果が得られた西野々遺跡および介良野遺跡での遺構検出面被覆層の累重状況は、田村遺跡群Ⅲ、田村遺跡群Ⅰ・Ⅱと同様である。また、介良野遺跡の成果からは、堆積層の累重パターンが遺構検出面基盤層と放棄流路内で明瞭に異なることが確認される。遺構検出面基盤層では、流路河床堆積物と洪水堆積物の顕著な上方付加が生じている。これに対し、放棄流路内では、流路内の堆積空間のみが充填され、周囲の氾濫原面の埋積がほとんど生じていない。放棄流路の埋積時期と放棄流路埋没後に被覆する堆積層は、泥質堆積物を主体としており、土壌発達層準の挾

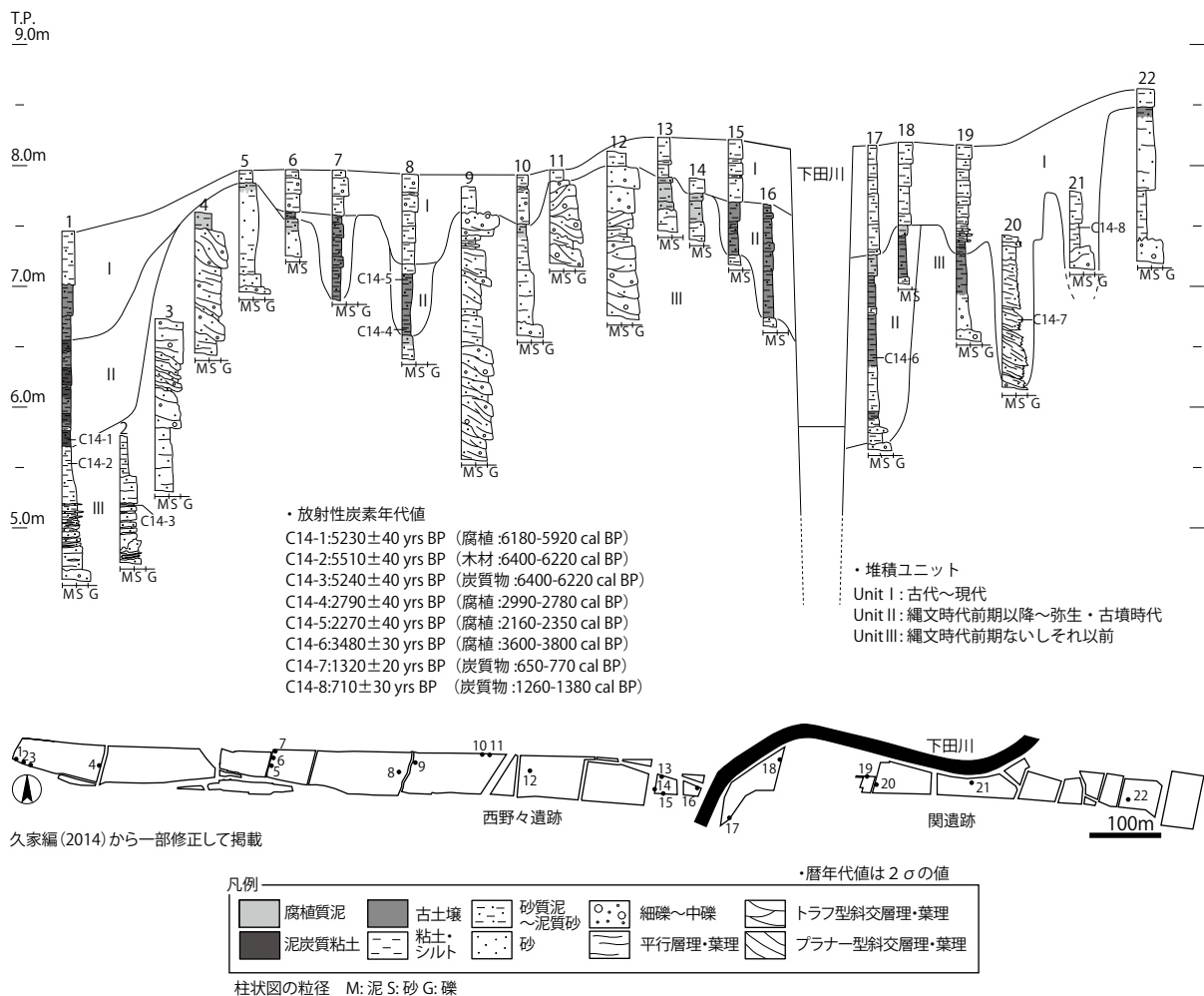


図6 西野々・関遺跡の堆積層の累重状況

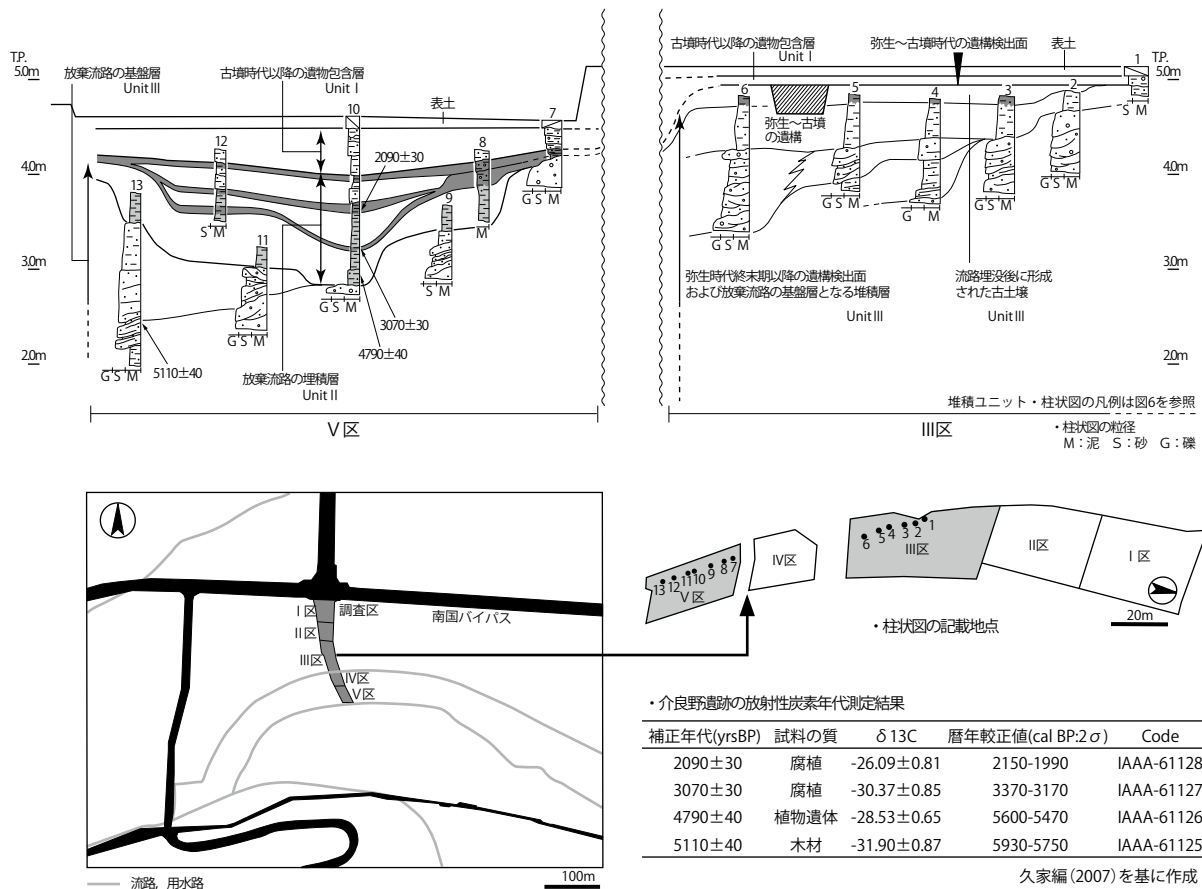


図7 介良野遺跡の層序と年代

在も認められる。

このような堆積・土壌形成パターンにもとづくと、遺構検出面基盤層の累重段階は、扇状地氾濫原の発達時期を示すと判断される。放棄流路の形成時期については、それまで付近を流下していた河川堆積作用を活発に行う主要な分流路が、主流路の流路移動や切断によって切り離されることによって、堆積環境が静穏化した段階を示すものと理解される。放棄流路内や埋没後に被覆する堆積層では、扇状地発達段階に比べ、細粒で層厚も薄く堆積速度も相対的に小さく、土壌生成作用も強まることから、放棄流路形成段階以降に遺跡周辺の氾濫原が離水傾向へ転じたと解釈される。

以上のことから、物部川が形成した沖積扇状地面のうち、介良野遺跡から田村遺跡群付近の氾濫原は、6,000年前頃までに活発な堆積作用があり、その後に河川堆積作用が静穏化するともに地形面が離水傾向へ転じたと考えられる。

上記のような地形発達史が認められる物部川沖積扇状地面上では、下田川や田村川などの小河川が流下する。このうち下田川では、現流路沿いに帯状の微高地が存在することが、空中写真判読により確認される(図5)。このような周囲の氾濫原をなす低地に対して尾根状をなす微高地は、地形的特徴から自然堤防や流路堆積物の高まりによって形成されたことが予想される沖積リッジ(aluvial ridge:Bridge,2003)と呼ばれる河川堆積地形に相当すると認識される。また、この沖積リッジ上やそ

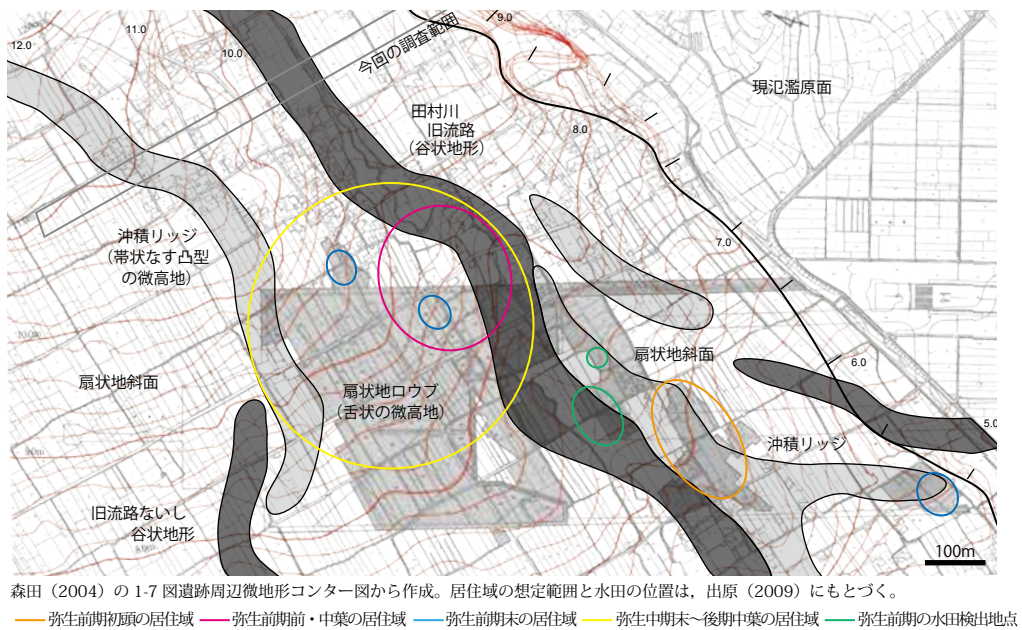


図8 田村遺跡群周辺の微地形

の近傍では、旧流路による連続的な凹地をなす侵食痕跡が認められる(図5)。これまでの発掘調査と現地での層相観察結果からは、沖積リッジが遺構検出面基盤層の砂礫からなる河床堆積物の高まり、旧流路が遺構検出面基盤層の砂礫を侵食して形成された流路状の凹地からなり、腐植質の泥によって埋積されることが確認される(図6・7:パリノ・サーヴェイ(株),2007・2011・2014)。地形判読結果と発掘調査で確認される堆積層の累重状況からは、沖積リッジが扇状地発達段階での主要な分流路が形成した河床堆積物からなる高まり、旧流路が沖積リッジを形成した分流路埋没後に侵食的に形成された流路跡であると判断される。

なお、扇状地を流下する現在の小河川をなす流路は、沖積リッジ上と旧流路内もしくはこれらに添うようにして存在している。このような地形的特徴をふまえると、扇状地上の現流路の多くは、本流の転流などによって新たな本流と切り離されたことや、地形面が離水傾向へと転じたことを契機として、それまで本流であった流路への河川水と堆積物の供給が急激に減少して、穏やか河川堆積作用に変化するとともに、流路も固定的となったかつての本流の痕跡とみなされる。このような本流転流後にその旧流路を流れる河川は名残川と呼ばれ、転流(流路変更)や流路切断が生じやすい扇状地でよくみられる地形である(鈴木,1998)。

田村遺跡群Ⅲ、田村遺跡群Ⅰ・Ⅱを流下する田村川では、下田川に比べ発達程度が小さいものの、沖積リッジと旧流路が形成されている。この地形は、森田(2004)による田村遺跡群周辺の等高線図においても明瞭に認められる(図8)。現田村川沿いでは、旧流路痕跡に相当する凹地をなす明瞭な谷状地形が確認される。扇状地が離水傾向を強め名残川化した以降から現在の位置に人工的に固定される以前までの古田村川は、この旧流路内で侵食と堆積を繰り返しながら流下していたと考えられる。古田村川の旧流路痕跡から西側350m付近には、幅50m前後で南北方向にのびる帯状の高まりである沖積リッジが存在する。また、この沖積リッジと古田村川旧流路痕跡である谷状地形の間には、

南側の下流方向に舌状もしくは紡錘状に張り出すようにして発達する微高地が形成されている。この微高地は、舌状堆積体と呼ばれる氾濫原上の微地形に相当してしており、その詳細は後述する標高分布図による地形解釈において示している。なお、沖積リッジについては、古田村川旧流路の東側に沿って、幅50m前後のものも存在している。これら沖積リッジと舌状堆積体の周囲には、相対的に地表の起伏が平坦な氾濫原面である緩傾斜の扇状地斜面が広がっている。

上記のような田村遺跡群周辺の古地形をふまえ、弥生時代の遺構についてみると、弥生時代中期までにほぼ埋没する弥生時代前期～中期の流路(小野,2002)は、古田村川旧流路内に位置することが判る。弥生時代前期の水田は、古田村川旧流路内とその東側の肩部に沿って伸びる沖積リッジ上にかけて存在することが読みとれる。水田検出地点および上流側の古田村川旧流路では、現状の等高線において、相対的に幅の広い谷状地形が形成されていることに着目される。また、この部分では、東側に沿うようにして形成されている沖積リッジの幅が相対的に狭い。このような地形からは、古田村川の河川活動によって沖積リッジの一部が侵食された可能性が想定される。上記のような弥生時代前期の水田検出地点とその周辺の現地形をふまえると、水田の検出地点は、古田村川旧流路から水田への導水において有利な立地条件を有していると解釈される。この点については、現状において現地表面の起伏のみからの推論であるため、当該領域の詳細な発掘調査結果や地形発達史とふまえ検証していく必要がある。弥生時代の居住域については、森田(2004)の等高線図と、後に示す標高分布図にもとづくと、沖積リッジ上やその周囲に広がる微高地をなす舌状堆積体上に存在する傾向が認められる。

ところで、高知空港第2次拡張事業に伴う調査区では、この舌状堆積体頂部付近を縦断するように北から南へ伸びる弥生時代中期～後期の幅2～4m、深さ0.6～1.0m前後の溝群が検出されている(久家他,2006)。これらの溝群は、居住域を視覚上で大きく区画するものであり、4条の大溝で構成される(前田,2006)。大溝のなかには、堰状遺構を伴うものも存在する。その走向方向から、北側は古田村川旧流路内へ接続すると考えられる。また、一部の溝は、調査区の南ないし南西方向へ調査区外の舌状堆積体の末端部へ続いていくものも存在している。大溝が居住域の区画以外に水田への導水のための水路としての機能も有していたとするなら、弥生時代中期～後期の生産域は、居住域が集中する舌状堆積体南側の微高地縁辺部の斜面から扇状地斜面にかけて存在していた可能性が示唆される。

なお、田村遺跡群Ⅲ、田村遺跡群Ⅰ・Ⅱの東端部では、現物部川に並行する南北方向に連続する小崖が認められる(図8)。この小崖の直下には、王子川が流下する。現地形および空中写真判読から、小崖下から現物部川の流路までの領域には、本遺跡が立地する地形面より一段低い地形面をなすことが認識される。この一段低い地形面では、網状流路をなす旧流路の痕跡が発達する。これらの旧流路は、江戸時代以降の現流路への固定化により切り離された分流路と考えられる。この一段低い地形面では、西側の一段高い地形面に分布する条里地割が形成されていない。このような特徴から、一段低い地形面は、物部川の現氾濫原に相当すると判断される。

2) 層序

今回の発掘調査区では、上記のような扇状地面の微地形と対応した堆積層の累重が確認される(図1)。沖積リッジ上では、表土直下において弥生時代以降の遺構検出面の砂礫層が検出される。ここでは、腐植質に富む古土壌が認められず、古代以降の耕作土によって直接覆われる。古土壌については、

古代以降の耕作地開発等によって削平されたと考えられる。旧流路内では、弥生時代ないしそれ以前から古代までの泥質堆積物が比較的厚く累重する傾向がうかがえる。これ以外の領域では、遺構検出面が発達した腐植質に富む泥質堆積物からなる古土壤で構成される。

相対的に削平の影響の小さい旧流路内や扇状地斜面では、黒褐色を呈す土色と、下位に向かって漸移的に薄くなるその土色境界の特徴から、腐植が蓄積しているとみなされる2枚の古土壤が形成される。下位の古土壤は、弥生時代の遺構検出面を構成する。この古土壤を構成する腐植からは、I-1-3区で $3,200 \pm 30$ yrs BP、III-3-7区で $2,900 \pm 30$ yrs BPの年代値が得られている。相対的に古い年代値を示すI-1-3区の試料採取層準は、表層に近い部分で採取したIII-3-7区よりも深度が深い。両地点の年代値の差違は、古土壤表層からの深度と関係していることが推定される。I-1-3区の古土壤は、年代試料を採取した層準よりもさらに下位まで土壤が形成されている。これらの年代値と土壤の発達程度から、弥生時代の遺構検出面をなす古土壤は、放射性炭素年代値で3,200年前より以前に既に発達を開始していたと考えられる。この古土壤は、場所によってある程度の層厚があることをふまえると、泥質堆積物を主とした洪水堆積物の供給によって、上方付加的に発達した累積性の土壤とみなされる。また、今回得られた放射性炭素年代値と発掘結果からは、3,000年前前後頃から2,000年前頃にかけては、扇状地氾濫原の堆積物供給が相対的にさらに減少して、地表環境がより安定した状態になったことが推定される。黒褐色を呈す腐植が蓄積する古土壤は、一般的に草原的な植生環境下で生成(三浦,2011)と言われるが、林床に十分に日光が届く疎林にも認められる(鳥居,2007)。これらの研究成果にもとづくと、古土壤の発達状況からは、少なくともこの段階に、扇状地上において林冠が閉ざされるような暗い林床を持つ照葉樹を主体とする林分が生育しておらず、草原ないし疎林が広がるような植生景観であったことが推測される。後述の植物珪酸体分析結果からは、草原や疎林の林床には、タフオノミーを考慮する必要があるものの、ネザサ節やメダケ節などを含むタケ亜科が多く生育していた可能性が示唆される。このような古植生は、古土壤が洪水による堆積物供給で累積的に生成されており、河川攪乱の影響があったことがうかがえることも調和的である。

周辺遺跡では、田村遺跡群Ⅲの西側の下田川東岸に位置する関遺跡では、下田川の旧流路堆積物が3,800～3,600年前より以前に既に埋没傾向となっていたことが確認される(図4:パリノ・サーヴェイ(株),2014)。また、西野々遺跡では、流路と接続する浅谷と推測される流路状の凹地が3,000～2,800年前頃から埋没傾向へ転じたことが明らかとなっている(図4:パリノ・サーヴェイ(株),2011)。これらのことから、縄文時代晩期頃から弥生時代前期～中期のある段階までは、田村遺跡群Ⅲ、田村遺跡群とその西側の田村西遺跡、関遺跡、西野々遺跡の広い範囲で土壤生成が卓越するような状況にあったことが推定される。ただし、このような扇状地氾濫原の堆積・土壤環境変化を生じさせた要因については、現段階において不明である。

旧流路など地形的に低い場所の弥生時代の遺構検出面をなす古土壤については、弥生時代中期のある段階以降から後期頃と推定される碎屑物主体の堆積層に被覆される。この直上には、弥生時代後期頃から古代にかけて発達したと考えられる上位の古土壤が存在する。よって、弥生時代中期のある段階以降から後期の時期に、田村遺跡群Ⅲ周辺では、地形的に低い場所を中心に氾濫原の埋積が生じるような堆積環境変化があった可能性が指摘される。当該期の堆積環境変化の要因についても、現段階において不明な点が多い。上位の古土壤については、場所によって古代以降の耕作地開発

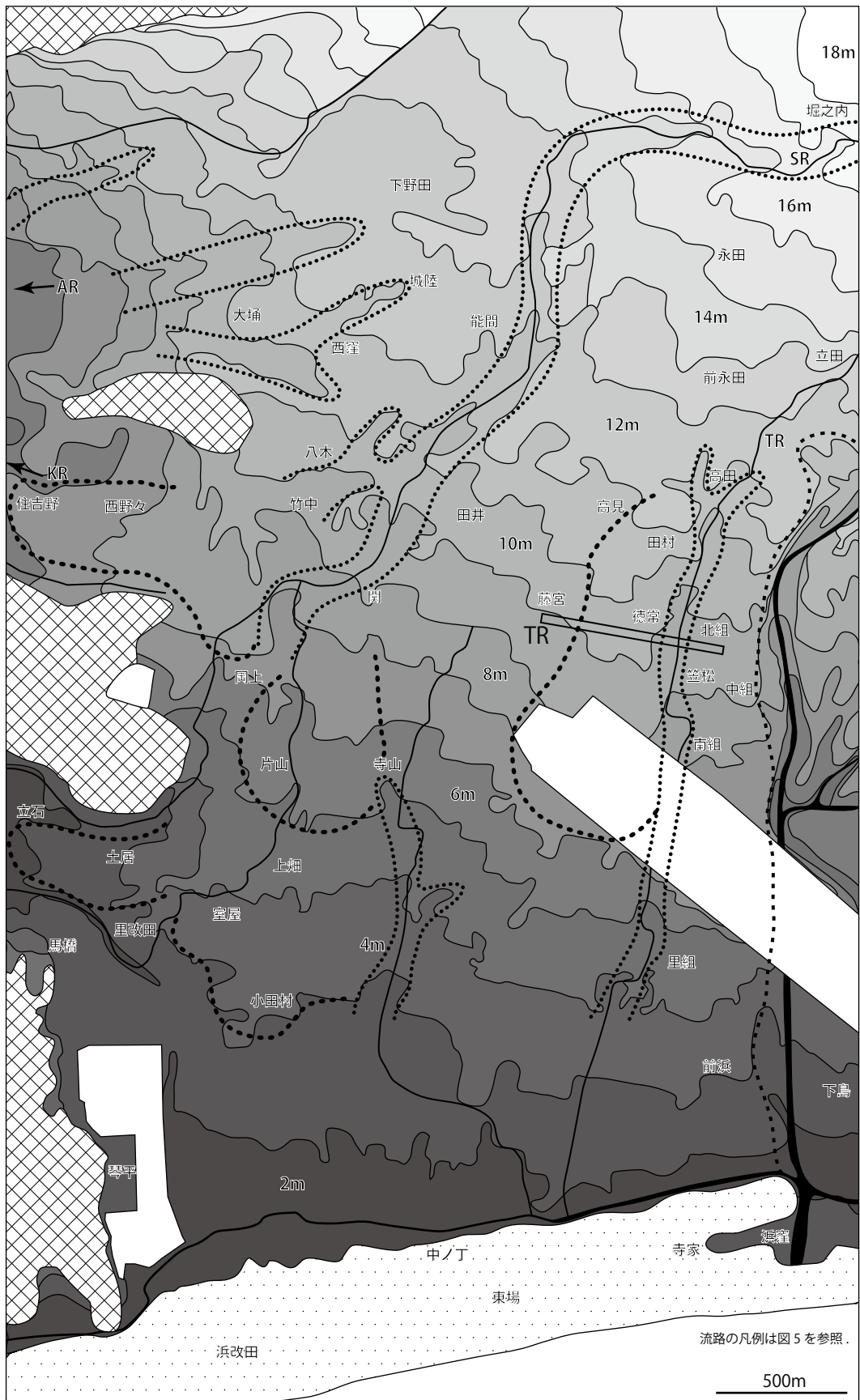


図9 物部川扇状地の標高分布図

により削平され、残存していない。Ⅲ-4E区では、上位の土壤腐植から、 $2,440 \pm 20$ yrs BPと、考古学的に確認される年代よりもかなり古い年代値が得られた。これについては、年代試料が古い腐植の影響を受けているなどの可能性が想定される。この土壤を覆う葉理の発達する細礫混じりの極粗粒砂層中の炭化物からは、 $1,360 \pm 30$ yrs BPと発掘結果と調和的な年代値が得られている。

なお、今回の調査範囲の東端部に位置するⅣ-2区では、弥生時代の遺構検出面を構成する古土壌とその形成層(堆積ユニット2)を被覆する流路ないし洪水堆積物中(堆積ユニット1)の炭化材から、 $2,470 \pm 30$ yrs BPの年代値が得られた。この流路堆積物は、弥生時代の遺構検出面の古土壌を侵食して、東側へ厚く累重する。

物部川沖積扇状地を構成する堆積層のうち、発掘調査によって直接確認される堆積層と古土壌のほとんどは、本遺跡が立地する沖積扇状地面の離水傾向が強まった縄文時代前期～中期以降の氾濫原の地形発達によって形成されたものとみなされる。今回の自然科学分析では、この氾濫原の地形形成やそのメカニズムについて、ほとんど検討を加えることができなかった。この点は、反省点として今後の課題としたい。

3) 立地環境

上記で確認されたように、物部川沖積扇状地では、緩傾斜の氾濫原上に名残川、沖積リッジ、旧流路などの微地形が存在する。このうち沖積リッジについては、明瞭なものとして下田川と田村川沿いに発達した2条が確認される(図5)。この沖積リッジ周辺では、下流側に舌状ないし紡錘状に広がり、上に凸型をなす微高地である舌状堆積体(lobe:ロウブ)が点在することが、1m間隔の等高線図から作成した標高分布図において明瞭に読みとれる(図9)。上記のような地形的特徴と上述の遺構検出面基盤層の形成過程にもとづくと、舌状堆積体は、扇状地発達段階の主要な分流路の1つであった破堤した洪水堆積物によって形成されたことが推測される。下田川では、標高7～8m付近の西野々から住吉野へ、東西方向に伸びる舌状堆積体が認識される。田村川では、標高9～12m付近の高見から南組へ、東西方向に伸びる舌状堆積体が認識される。これらの舌状堆積体上では、居住域が検出された考古遺跡が立地しており、下田川で西野々遺跡、田村川で田村遺跡群Ⅲ、田村遺跡群が存在する。

また、図9からは、上述の地形の検討において示した旧流路(図5・8)に対応する谷状の凹地を反映した微地形も明瞭に認められる。下田川では、下野田、大桶付近で西側へ延びる谷状の凹地の発達も認められる。標高分布図と地形判読による旧流路の分布状況をふまえると、下田川では下野田、大桶付近において、明見川、介良川の現流路方向へ分流していたことが推測される。さらに、この下流側では、竹中付近においても介良川の現流路方向への分流もうかがわれる。

下田川と田村川沿いの2条の沖積リッジ(図5)や舌状堆積体(図8)に挟まれた領域では、相対的に地表起伏が少なく、緩やかに凹地をなす地形が広がる。この凹地状の地形は、上述の地形の検討において示した扇状地斜面(図8)に対応する地形領域である。扇状地斜面は、扇状地上で微高地をなす沖積リッジと舌状堆積体に囲まれた低地部分に相当している。下田川と田村川に挟まれた扇状地斜面の下流側では、排水流路と推測される旧流路が、中央部の下流側の最低部を通るように南北方向に形成され、浜堤背後の後背湿地と繋がっている(図5)。このような地形的特徴から、この部分の扇状地斜面は、洪水時に周囲の名残川となった旧流路からの氾濫水が集中する場所となっていたことが推察される。よって、扇状地斜面は、微高地部分よりも冠水頻度が高かったことが想定される。ただし、過去の洪水履歴や現在のハザードマップの浸水想定範囲にもとづくと、沖積扇状地面上は、大規

模な洪水時に微高地と低地を含め、広い範囲で冠水すると考えられる(国土交通省四国地方整備局・高知県,2010)。このような堆積環境が過去にも存在したことは、層序で述べたような弥生時代の遺構基盤層をなす累積性の古土壌や、それら被覆する包含層をなす堆積層の存在からもうかがえる。地形的には、このような大規模出水時に、微高地部分よりも低地部分に相当する扇状地斜面において、相対的に洪水時の水位が高く、洪水流の流れも強くなる傾向があったことがうかがえる。これらのことから、扇状地斜面は、沖積リッジと舌状堆積体および縁辺部の斜面に比べ、居住域としては不適な地表環境であった可能性が指摘される。田村遺跡群Ⅲ周辺では、舌状堆積体間低地を含む領域に立地する遺跡として田村西遺跡、関遺跡が存在する。田村西遺跡と関遺跡では、堆積層の累重状況が田村遺跡群Ⅲ、田村遺跡群と同様であり、弥生時代以降に活発な河川堆積作用が認められない。また、調査区内では、小規模な埋没流路堆積物による帯状の微高地が分散的に存在することが発掘調査などから確認される。これらの埋没流路は、下田川と田村川の現流路沿いに沖積リッジを発達させた、扇状地発達段階の主要な流路からの一時的な分流路であると想定される。このうち田村西遺跡では、中小規模をなす弥生時代後期末～古墳時代初頭の住居が、埋没流路の高まりを中心とする部分から検出されている。この発掘結果から、扇状地斜面ではすべての領域が居住に不適ではなく、小規模な埋没流路に由来する微高地において、中小規模の居住域が展開していたと認識される。

上記のような土地条件をなす扇状地斜面では、その周囲に古下田川、古田村川といった名残川が沖積リッジ上やその縁辺部を流下している。このため、名残川の河床底と扇状地斜面の比高は小さく、周囲の名残川から水を集めやすい地形であり、これら物部川の分流路からの洪水の影響も強く受けるような場所であったと推定される。ただし、田村西遺跡の発掘結果では、弥生時代以降の洪水堆積物がほとんど累重していないことが確認されることから、砂礫質の粗粒の洪水堆積物が頻繁に流入するような不安定な土地条件ではなかったと考えられる。このような堆積状況から、田村遺跡群Ⅲ、田村遺跡群周辺の扇状地斜面では、上記したように河川氾濫の影響を受けていた可能性が高いものの、その頻度や強度は小さかったとみなされる。よって、微高地部分よりも相対的に不安定で水位も高かったと考えられるものの、地表環境は扇状地斜面でも比較的安定したことが想定される。このような扇状地斜面では、田村西遺跡、関遺跡の発掘調査(久家編,2013・2014)から、沖積リッジや舌状堆積体とその近傍と比較して、相対的に地表の起伏に乏しいことがうかがえる。

これらの地形、堆積条件をふまえると、田村西遺跡、関遺跡周辺とその下流側の扇状地斜面では、沖積扇状地の氾濫原において水田の立地として適した土地条件であるとみなされ、周囲の名残川から導水することによって、安定した水田耕作が行いやすい場所であることが指摘される。しかしながら、田村西遺跡、関遺跡では、これまでのところ弥生時代や古墳時代の水田が確認されていない。これについては、上述の層序をふまえると、古代以降の開発による削平の影響があると認識される。そのため、水田に関係する遺構が存在する場合には、灌漑水路などの地表を掘削して形成される遺構のみが残存すると判断される。田村西遺跡、関遺跡では、検出状況から水路の可能性も想定される弥生時代後期末～古墳時代初頭の溝が複数検出されている(久家編,2013・2014)。また、西野々遺跡では、灌漑水路の蓋然性が極めて高い弥生時代中期前半～後期後半に連綿と掘削された溝群が検出されている(廣田編,2011)。この西野々遺跡では、溝の走行方向から、水田域は本遺跡の居住域が載る東西方向の舌状堆積体の北から北東側にかけての微高地斜面から低地部に存在していたと考えられる。これらの遺跡から検出された水路と思われる弥生時代～古墳時代の溝については、上述した

層序と地形と溝の走向方向をふまえると、当該期には既に埋没傾向となり、穏やか流況であったことが推定される、旧流路を流下していた名残川をなす古下田川や古田村川から取水していた可能性が高いと考えられる。

以上、田村遺跡群Ⅲとその周辺での先史時代の土地利用に関する若干の検討を試みた。その結果、沖積扇状地の氾濫原上では、微高地をなす沖積リッジに囲まれた領域および舌状堆積体の前面に広がる氾濫低地に相当する扇状地斜面が、田村遺跡群で検出された旧流路内の氾濫原とともに、弥生時代～古墳時代前半の主要な水田耕作領域であった可能性が示唆された。また、発掘調査結果からは、耕作地を維持・管理した人間が、沖積リッジとそれに沿って部分的に発達する舌状堆積体からなる微高地上に居住域を形成していたことが確認される。田村遺跡群で集落の最盛期を示す弥生時代中期～後期の居住域については、舌状堆積体が広く発達する領域に集中的に検出されることが、高知空港第2次拡張事業の発掘調査結果からうかがえる。

遺構・遺物が空白地帯となる部分が多い扇状地斜面の氾濫低地が、弥生時代～古墳時代前半の生産域であった可能性は、久家(2014)が遺跡の動態にもとづき既に指摘している。久家(2014)の指摘は、古地形復元の観点からも蓋然性が高いと判断される。なお、これまでの発掘調査結果では、扇状地斜面で検出される耕作に係する水路とみられる溝が、弥生時代後期末～古墳時代初頭の時期に集中し、田村遺跡群と隣接する遺跡において集落の最盛期を挟在する弥生時代中期～後期の時期のものがほぼ確認されない。このような発掘調査結果からは、田村西遺跡付近の扇状地斜面の氾濫低地が周囲の集落の最盛期段階に、生産域として利用されていなかった可能性も示唆される。しかし、水路のような遺構は、時期による水利のあり方の違いなどにも影響を受けることも想定されるため、弥生時代における田村遺跡群周囲の生産域の評価については、今後さらに多方面の検討を進めていく必要があるものと認識される。

弥生時代～古墳時代前半にこのような人間活動が展開した扇状地上の微地形については、6,000年前頃に離水傾向へと転じた扇状地発達段階に基本的な骨格が形成された後、現下田川や現田村川といった名残川化した小河川の流路により部分的な侵食と堆積を受けたものであることが確認された。地表水が集積するとともに地下水でも涵養される扇状地上の名残川は、流路の堆積環境が穏やかで、大規模な洪水が起りにくく、一定量の水量が見込まれることから、灌漑など農業の利用に適した流路である(鈴木,1998)。このような名残川における静穏な河川堆積作用は、旧流路内が腐植質に富む泥層を中心に埋積されることが、西野々遺跡と関遺跡や介良野遺跡の発掘調査結果から明らかとなった(図6・7:パリノ・サーヴェイ(株),2007・2014)。また、地形学・地質学的特徴にもとづくと、扇状地斜面とその周囲を流下する名残川をなす物部川の分流路のセットは、水田耕作を行う場合にかなり適した自然環境条件であった可能性が示唆された。

なお、田村遺跡群とその周辺での先史時代の土地利用については、空中写真判読では確認することが難しい、より詳細な遺跡発掘レベルの空間スケールの微地形に大きく規定されていることが、発掘調査結果からうかがえる。このため、今後については、より詳細な空間スケールでの地形、地質と発掘結果を総合した遺跡形成過程をふまえ、先史時代のより具体的な土地利用の検討を進めていくことが必要と考えられる。ただし、弥生時代以降の堆積作用が全体期に不活発であるため、弥生時代の地形の基本的骨格は、古代以降の削平を考慮する必要があるものの、現在の標高にもとづく地形起伏をほぼ踏襲しているものと予想される。このため、弥生時代の古地形と土地利用や景観的研

究については、現在の地形起伏を参照することに可能である。このような特性を生かして、物部川沖積扇状地面では、国土地理院の5mメッシュの標高データや森田(2004)の等高線復元の情報と、GISによって生成される地形・水文的パラメーターにもとづく地表環境因子にもとづく古地理復元を行える可能性がある。このような古地理情報をふまえ、物部川沖積扇状地面においては、沈降域の河内低地東縁部を対象として実施された大庭(2014)のような、古地形変化、古地表環境変化と発掘調査結果とを複合させた先史時代の土地利用的研究が展開していくことが今後の研究課題の1つではないかと思われる。また、現段階では、物部川の沖積扇状地面上において人間活動が活発化して、広い範囲で土地利用が展開した弥生時代前期～中期の前段階である縄文時代晩期や後期の古植生に関して不明な点が多いことも課題である。居住域や耕作地の開発にあたっては、その領域の植生も選択条件の1つであったと思われる、この点に関しても今後の遺跡での自然科学分析で必要となる情報である。

②古環境と古植生

1) 基本層序のイネ科植物相について

ここでは、植物珪酸体分析結果にもとづく、基本層序でのイネ科を中心した古植生に関する検討を行う。植物珪酸体は、含量の変動量が層位によって幅がある。植物珪酸体で検出されるいずれの種類も、増減に正の相関があり、植物珪酸体含量が多い試料では全ての種類で多く、少ない試料では少ない。このことから、植物珪酸体の増減は、堆積および堆積後作用に関連する化石化の過程(タフオノミー)に由来すると考えられる。よって、植物珪酸体群集からみた周辺植生は、弥生時代から古代にかけて大きく変化していないと考えられる。植物珪酸体群集は、メダケ節やネザサ節などを含むタケ亜科の産出が目立ち、コブナグサ属やススキ属、ヨシ属、イチゴツナギ亜科がわずかあるいは稀にみられる。本遺跡の南側に隣接する田村遺跡群では弥生時代前期にメダケ節やネザサ節などタケ亜科を主体としたイネ科植生が存在し、比較的乾燥した環境であった可能性が指摘されている((株)古環境研究所,2004)。また、本遺跡の北西に位置し、沖積扇状地末端部に立地する西野々遺跡では、弥生時代～中世に乾燥した土壌環境にネザサ節やススキ属などのイネ科植物が生育する明るく開けた植生景観が広がっていた可能性が示唆されている(パリノ・サーヴェイ(株),2008・2014など)。これらの既往の分析結果をふまえると、本遺跡において古土壌が形成される過程では、周辺遺跡と同様にタケ亜科などを含むイネ科植生が存在していたと考えられる。なお、タケ亜科に随伴するコブナグサ属やヨシ属は、湿潤な場所に生育する種類を含むことから、周辺にこれらが生育するような湿性な場所も存在したことがうかがえる。

2) 水田状遺構の古環境と土地利用

a. 珪藻分析結果

水田状遺構は、高さ数～10cmの畦畔状遺構に囲まれた矩形の領域に相当する。分析試料は、この領域から採取されたものである。畦畔状遺構は、黒褐色の土色を主体とする泥質堆積物において検出されている。黒褐色を呈す土色は、腐植とみなされる物質の蓄積によるものと思われる。このような黒褐色を呈する層準の土色境界は、層理面や層理面に沿ったものでなく、さらに下位に向かって漸移的に薄くなる特徴がみられる。また、層内には、未分解の植物遺体の挟在がほとんど認められない。これらの特徴から、畦畔状遺構の検出面をなす黒褐色を呈す泥質堆積物は、土壌層位A層に相当する古土壌であり、有機物の分解が速やかに進行していくような好氣的土壌環境下で生成されたと

判断される。

分析試料では、珪藻化石がほとんど産出しなかった。地表付近が常時乾燥し、土壤環境が好氣的(酸化的)状態になる堆積物では、珪藻化石、花粉化石、種実遺体の分解消失が著しいことが経験的に知られる。植物珪酸体については、上記の化石よりも風化に対する耐性があるものの、水浸かりの嫌氣的(還元的)状態よりも好氣的状態におかれると、相対的に保存状態が不良となる傾向となることが経験的に知られる他、近藤(1988)によっても指摘されている。

なお、同一試料で実施した植物珪酸体分析結果では、湿った場所を好むヨシ属が産出せず、乾いた場所を好むタケ亜科が多産する。ただし、タケ亜科については、他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており(近藤,1982;杉山・藤原,1986)、他の種類よりも残留しやすいと考えられる。よって、タケ亜科の多産は、当時の植生量を示しているのではなく、堆積過程および堆積後の風化等の様々な要因によって規定されるタフオノミー(化石成因論)を強く反映したものとみなされる。このようにタフオノミーについて考慮する必要があるものの、いずれの試料でもヨシ属が産出しない点は、当時の地表環境の一端を示すものとして捉えられる。

以上のように今回の分析では、珪藻化石の産出状況が極めて不良であり、化石群集から分析試料の古環境を検討することはできない。しかし、植物珪酸体の産出および分析試料の堆積物ないし土壤としての特徴を併せて検討することにより、畦畔状遺構については、地表付近が水で飽和されるような湿地ではなく、基本的に適湿ないし半乾状態の好氣的土壤環境下で形成された可能性が指摘される。分析を行った調査区は、現田村川沿いの周囲の地形的に低い谷状をなす領域に位置する。古代には、旧田村川の河床が低かったなどの理由により、このような氾濫原で地下水位が低い状態にあったことが想定される。

b. 植物珪酸体分析結果

植物珪酸体分析結果については、全体的に含量密度が低いことと、地点によって大きく異なることが指摘される。植物珪酸体は、土壤の風化によって溶解する可能性が指摘されている(近藤, 1988)ほか、pH値が高い場所や乾湿を繰り返すような場所において風化が進みやすいと考えられている(江口, 1994,1996)。また、植物珪酸体は、その粒径からシルトと挙動をとると考えられる。シルトよりも粗粒な砂や礫では、堆積物中に取り込まれる植物珪酸体の含量密度が低くなる。今回の分析試料で植物珪酸体含量は、試料確認時の観察により泥分が多く含まれていることが確認される。よって、今回確認されたような植物珪酸体含量の低さについては、少なくとも試料の粒度組成が要因とは考えられない。このため、含量密度の低さと地点間の差違は、植物珪酸体が堆積物中に取り込まれた後からの土壤化に伴う物理的、化学的な風化作用に起因している可能性がある。

水田耕作領域と考えられている水田状遺構では、0・1・3の全ての試料から栽培種のイネ属が産出している。ただし、その含量は極めて低く、最も高いのが水田状遺構3の機動細胞珪酸体600個/g程度で、その他は100個/g前後程度の含量密度しか示さない。水田状遺構0・1・3のイネ属含量密度については、植物珪酸体含量や他の種類の含量と同調的な変動を示す。このことから、イネ属が100個/g前後程度を示す水田状遺構0・1は、水田状遺構3に比べ何らかの理由で、植物珪酸体の風化が進行する状態にあったと考えられる。従って、水田状遺構0・1・3のイネ属珪酸体の含量は、イネの生育状況やその分布密度を示すものではないと判断される。

なお、イネ属とともに植物珪酸体含量が相対的に最も多産する水田状遺構3は、試料の記載から土

色が他の試料のように黒褐色でなく灰褐色を呈することが確認される。土色からは、水田状遺構3が他の試料よりも土壌化の影響を受けにくい状況下にあったことが推測される。分析試料の土色と植物珪酸体含量については、何らかの関係がある可能性が疑われるものの、水田状遺構での詳細な堆積状況を把握していないため、この点に関して議論を進めることができない。

イネ属以外としては、コブナグサ属がすべての試料に随伴することが着目される。この傾向は、Ⅲ-4E区での水田状遺構相当層準での1地点の分析結果でも確認される。既往の田村遺跡群Ⅲの植物珪酸体分析では、コブナグサ属が弥生時代ないしそれ以前の層準で産出しない傾向がある。コブナグサ属は、湿った場所に多く生育しており、水田雑草としても普通にみられる種類である。江口(2005)では、埋没水田土壌において、イネ属(イネ型)とともに、水田雑草としてよくみられる分類群を含むコブナグサ属(コブナグサ型)とヒエ属(ヒエ型)が双方ないしいずれか一方が随伴する傾向にあることを指摘している。

以上のような植物珪酸体分析結果から、水田状遺構の形成時期には、イネ属とコブナグサ属が調査区内に供給される状況下にあったことがうかがえる。分析試料が土壌相を示す泥質堆積物であることから、今回の分析で産出した植物珪酸体については、局地性が高いものも含まれると解釈される。よって、イネ属とコブナグサ属は、水田状遺構内ないしその近傍で生育していたものに由来する割合が高いとみなされる。ただし、分析結果からは、遺構内に生育していたイネ属とコブナグサ属の割合やその生産量、さらに風化により消失した絶対量がどの程度であったかを知ることができない。よって、イネ属植物珪酸体の含量密度の多寡をもって、水田状遺構における稲作の有無を指摘することは不可能である。

なお、分析地点で稲作が行われたかどうかの判断については、その相当層においてイネの栽培に由来すると思われる人為的な攪乱の痕跡を見出すことが必要である。今回の分析試料は、不攪乱で採取されていなかったため、肉眼観察による土色や粒度の記載は行えたものの、土壌構造の観察を行うことができなかった。そのため、分析試料では、薄片作成による土壌微細構造からの詳細な土壌構造の把握を行うことも不可能であった。ただし、分析地点での水田耕作の有無は、地震動の変形構造や後世の土壌化、生物擾乱といった堆積後作用により、土壌微細構造でも把握することが難しい場合があることが、報告者のこれまでの分析事例から認識される。よって、過去の耕作の判断については、遺跡において様々な情報をふまえ、その蓋然性を議論していくことが重要であると考えられる。これまでに得られた現地調査での堆積層観察、今回の分析試料の記載、植物珪酸体、珪藻分析などの分析結果をふまえると、現段階までの自然科学分析と調査・観察結果からは、水田状遺構において稲作が行われていたことを強く否定する結果を得られていない。一方で、その可能性を強く示唆する分析や観察結果も、得られていない状況である。

(辻 康男・馬場健司・堀内誠示)

3. 田村遺跡群Ⅲの植物利用

(1)分析目的

ここでは、遺構埋土の水洗別による種実遺体分析で検出した炭化種実と、発掘調査で取り上げられた炭化材の同定結果にもとづき植物利用に関する検討結果を示す。

(2)試料

種実遺体分析試料は、弥生時代中期末のIV-5区のST1, ST6の中央ピット内、弥生時代終末期のI-4-1区のST1_P1 (No.1)と、弥生時代中期末のIII-1-2区のST1 中央ピット (No.2), ST1_中央ピット南 (No.3), IV-1区のSK9 (No.4), IV-5区のST1_P3 (No.5), ST8_P1 (No.6), IV-8区のSK6_図IV-133-481 (No.7)より採取された炭混じりの堆積物9点である。炭化材同定は、弥生時代中期末のIV-4区のST1, IV-5区のST2の床面直上で検出された採取試料について同定を行う。

(3)分析方法

①種実遺体分析

泥質堆積物から脆弱な炭化種実を分離・抽出するために、以下の方法を実施する。

水を満たした容器に試料を入れ、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内に水を入れて静かに攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(約30回)。残土を粒径0.5mmの篩に通し、静かに水洗する。水洗後の試料を粒径別にシャーレに集め、常温で乾燥させる。粒径の大きな試料から双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実を抽出する。

種実の同定は、現生標本と岡本(1979)、石川(1994)、中山ほか(2000)、小畑(2008;2011)等を参考に実施し、状態別の個数と乾燥重量(表面に付着する泥の重量を含む)を求めて結果を一覧表(表4)で示す。種実以外の抽出物は、重量と最大径を表示する。分析残渣は、炭化物主体と砂礫主体に大まかに分け、重量を表示する。分析後は、抽出物と分析残渣を容器に入れて保管する。

②炭化材同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

(4)結果

①種実遺体分析

全9試料を通じて、被子植物10分類群〔イチイガシ、コナラ属、ハギ属、フユザンショウ、イネ、アワ、キビ、マメ科(アズキ類、ダイズ類、ダイズ類?)〕5,449個の炭化種実が同定された(表4, 図10~12)。

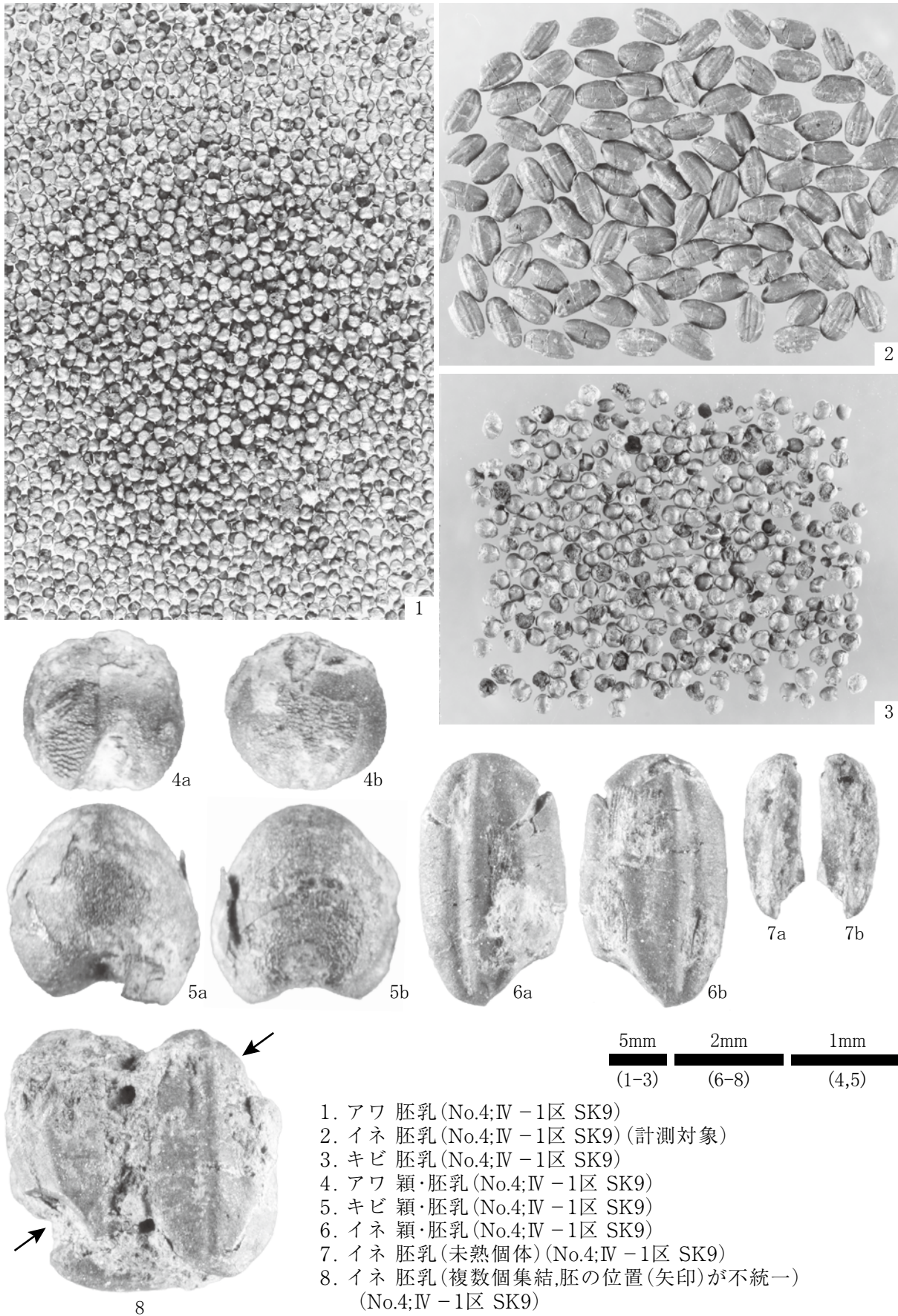
炭化種実の出土個数は、IV-1区 SK09 (No.4)が5,446個と全体の99.9%を占め、IV-5区 ST1_P3 (No.5)が残りの3個であった。栽培種は、イネ、アワ、キビと、栽培種の可能性があるマメ科(アズキ類、ダイズ類、ダイズ類?)が5,410個確認され、全体の99.3%を占める。一方、他の7試料は、試料全量で処理したが、炭化種実が1個も検出されず、炭化材がわずかに確認されるのみであった。分析残渣は砂礫を主体とし、IV-5区 ST8_P1 (No.6)が最も多く(29.0g/試料150cc)、IV-8区 SK6_図IV-133-481 (No.7)が次いで多い(26.5g/試料350cc)。以下に、炭化種実検出試料の状況を述べる。

表4 炭化種実同定結果

分類群 栽培種(可能性を含む) イネ	部位 状態	I-4-1区			III-1-2区			IV-1区			IV-5区			IV-8区		備考 (計測値はデジタルノギスによる)
		ST1			ST1			SK9			ST1			ST8		
		中央P			中央P南			-			P3			PI		
		個数	乾重(g)	個数	乾重(g)	個数	乾重(g)	個数	乾重(g)	個数	乾重(g)	個数	乾重(g)	個数	乾重(g)	
イネ	穎・胚乳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	完形未満	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アワ	胚乳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	完形(未熟)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	完形未満	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キビ	穎・胚乳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	胚乳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科(アズキ類)	穎乳	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科(ダイズ類)	完形(貯蔵存)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	完形(貯蔵損)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	半分	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	完形(貯蔵存)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	完形(貯蔵損)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	塊状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アワ	塊状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	塊状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	塊状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	塊状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科(アズキ類)・イネ	塊状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	塊状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	塊状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	塊状	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	イチャイガン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	子葉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属	子葉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハギ属	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	完形(貯蔵存)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
種実合計	完形(可能性を含む)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	栽培種(可能性を含む)が複数集結した塊状物	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	種実合計(塊状物を除く)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
種実以外	不明炭化物	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	炭化材	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	タイ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	岩片(岩片類?)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
分析残渣	分析残渣	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	炭化物主体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	砂礫主体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	分析重量(容積)・湿重(g)	150cc	247.8	200cc	332.9	200cc	399.2	50cc	70.7	550cc	802	150cc	700	100cc	165	350cc

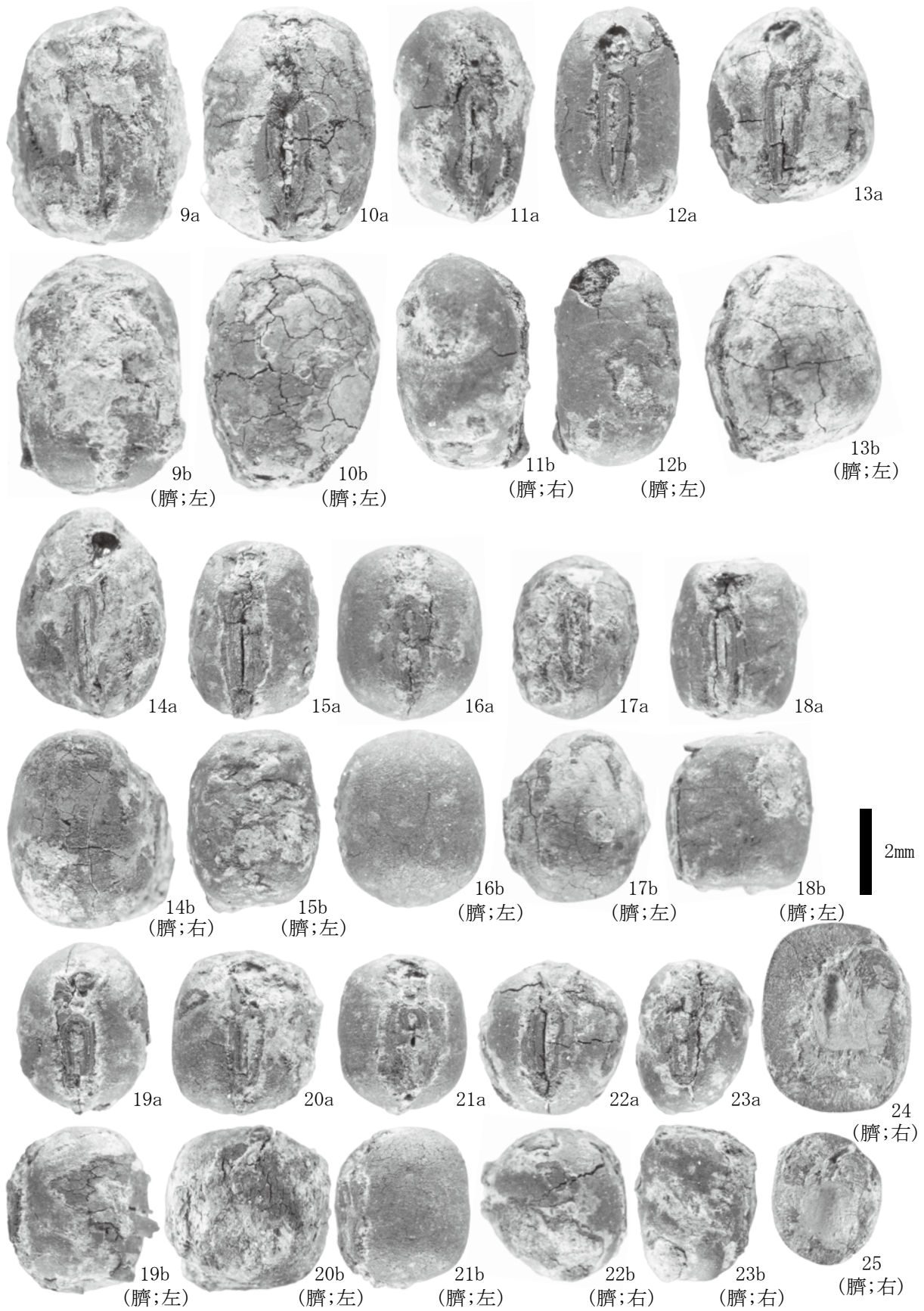
注)炭化種実の重量には表面に付着する泥の重量を含む。SK9 (No.4)の試料550ccは、イネ・アワ・キビ以外の分類群を抽出対象としている。

注)Pはピットの略。



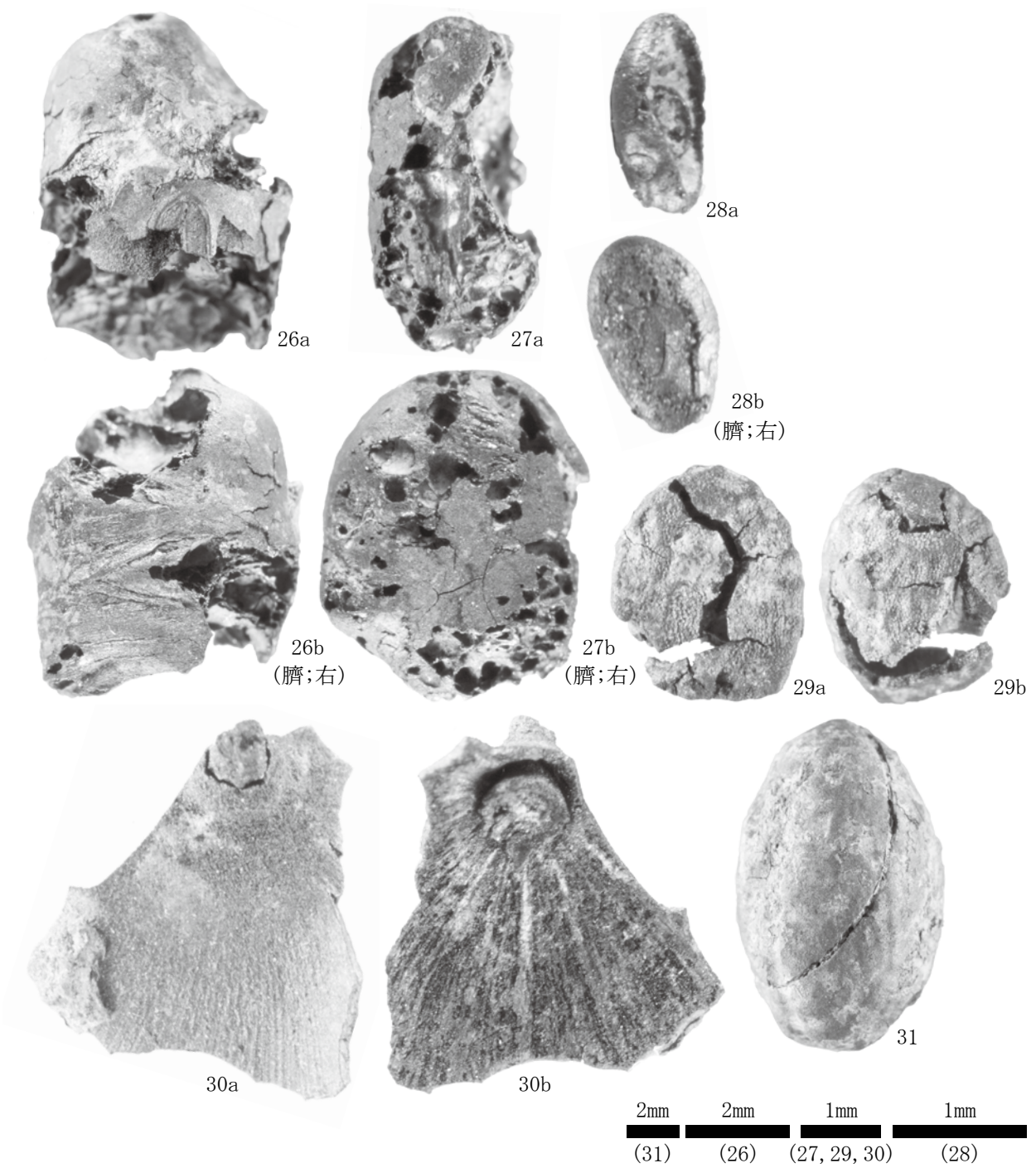
1. アワ 胚乳 (No.4;IV-1区 SK9)
2. イネ 胚乳 (No.4;IV-1区 SK9) (計測対象)
3. キビ 胚乳 (No.4;IV-1区 SK9)
4. アワ 穎・胚乳 (No.4;IV-1区 SK9)
5. キビ 穎・胚乳 (No.4;IV-1区 SK9)
6. イネ 穎・胚乳 (No.4;IV-1区 SK9)
7. イネ 胚乳 (未熟個体) (No.4;IV-1区 SK9)
8. イネ 胚乳 (複数個集結, 胚の位置 (矢印) が不統一)
(No.4;IV-1区 SK9)

図10 炭化種実画像(その1)



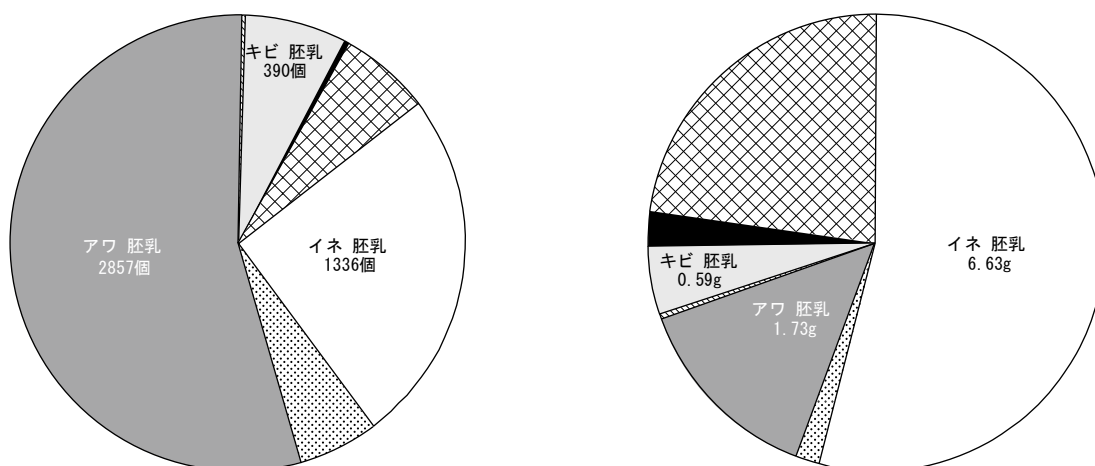
9-25. マメ科(アズキ類) 種子 (No. 4; IV-1区 SK9) (9-23: 計測No. 1-15, 24, 25: 半割)

図11 炭化種実画像(その2)



26. マメ科(ダイズ類) 種子(No.4;IV-1区 SK9) 27. マメ科(ダイズ類?) 種子(No.4;IV-1区 SK9)
 28. ハギ属 種子(No.4;IV-1区 SK9) 29. フユザンショウ 種子(No.4;IV-1区 SK9)
 30. イチイガシ 果実(頂部)(No.4;IV-1区 SK9) 31. イチイガシ 子葉(No.4;IV-1区 SK9)

図12 炭化種実画像(その3)



凡例 左：堆積物50cc(70.7g)に含まれる個数(計5,247個) 右：乾燥重量(計12.27g)
 ☒ イネ 穎・胚乳 □ イネ 胚乳 ☐ アワ 穎・胚乳 ■ アワ 胚乳 ▨ キビ 穎・胚乳 ◻ キビ 胚乳 ■ マメ科(アズキ類) 種子

図13 IV-1区SK9の炭化種実組成

・IV-1区 SK9 (No.4)

本試料からは、多量の炭化種実が検出されたため、分析量と抽出を以下の2段階に分け、一部の炭化種実を対象に計測を実施した。

1) 試料50cc (70.7g)

栽培種のイネの胚乳が1,672個(9.42g)、アワの胚乳が3,154個(1.94g)、キビの胚乳が401個(0.61g)と、栽培種の可能性があるマメ科(アズキ類)の種子が20個(0.30g)の計5,247個(12.27g)が検出された(図8)。この他に、複数個のイネが泥に密着して、集結した塊状物が5個(0.13g)、イネとアワの塊状物が13個(0.14g)、アワの塊状物が3個(0.04g)、アワとキビの塊状物が1個(0.01g)検出された。

種実以外では、不明の炭化物の破片が1個(0.04g)、炭化材が25個(0.04g)確認された。分析残渣は、イネ・アワ・キビなどの炭化物主体の微細片が2.1g、砂礫主体が2.5gを量る。

炭化種実の出土個数は、アワが最も多く(60%)、イネ(32%)、キビ(8%)と次ぐ。重量ではイネが最も多く(77%)、アワ(16%)、キビ(5%)と次ぐ(図13)。炭化種実の保存状態は良好で、成熟した完形個体が多い。未熟個体と考えられる分類群は、イネが3個(0.004g)のみであった(図10の写真7)。種実表面も明瞭で、イネ・アワ・キビには穎(果)が残る胚乳も多く確認された(図10の写真4~6)。

塊状物の炭化種実には泥で密着し、個々の種実が火を受けて癒着した状態は認められない。配列にも規則性が確認されず、果序(穂)の可能性を示唆するには至らなかった(図10の写真8)。

2) 試料550cc (802g)

1)で多量検出されたイネ・アワ・キビ以外の分類群を抽出対象とした結果、栽培種の可能性があるマメ科(アズキ類)の種子が157個(4.08g)、マメ科(ダイズ類)の種子が1個(0.03g)、マメ科(ダイズ類?)の種子が2個(0.02g)の計160個(4.13g)の他に、マメ科(アズキ類)の種子とイネが複数個密着して集結した塊状物が2個(0.09g)、アワとの塊状物が4個(0.13g)検出された。

その他の分類群は、広葉樹で常緑高木のイチイガシの子葉が1個(0.39g)、果実の破片が2個(0.01g)、常緑または落葉高木のコナラ属の子葉の破片が2個(0.1g)、果実の破片が3個(0.01g)、低木または多

表5 炭化米の大きさ・重量

乾重 (g)	計測値 (mm)			粒大	粒形	備考
	長さ	幅	厚さ	長さ×幅	長さ/幅	
0.87	3.8	2.1	1.4	9.0	1.4	最小
	5.0	2.9	2.0	13.7	2.1	最大
	4.47	2.57	1.74	11.51	1.74	平均
	0.26	0.17	0.15	1.11	0.14	標準偏差
100	100	100	100	100	100	標本数
				0	0	円粒(1.0 - 1.4)
				60	98	短粒(1.4 - 2.0)
				38		小型(12 - 16)
				2	2	長粒(2.0 -)
						極小(8 - 12)
						小型(12 - 16)
						極小(8 - 12)

注)計測値はデジタルノギスによる。
 注)粒大(長さ×幅),粒形(長さ/幅)は,佐藤(1988)の定義に従う。

表6 アワ・キビ炭化胚乳の大きさ・重量

種名	乾重(g)*		胚乳						胚乳基部の胚の窪み				胚長/ 胚乳長	備考
			計測値(mm)			長さ×幅	長さ/幅	長さ/厚さ	背面(mm)		腹面(mm)			
			長さ	幅	厚さ				長さ	幅	長さ	幅		
アワ	0.07	0.01	1.1	1.0	0.7	1.2	0.9	1.0	0.6	0.4	0.2	0.2	0.5	最小
			1.4	1.4	1.3	1.9	1.2	1.8	0.9	0.6	0.3	0.3	0.8	最大
			1.23	1.20	0.93	1.48	1.03	1.35	0.80	0.50	0.25	0.21	0.65	平均
			0.07	0.08	0.12	0.15	0.07	0.17	0.09	0.06	0.02	0.03	0.09	標準偏差
	100	10	100	100	100	100	100	100	10	10	10	10	10	標本数
キビ	0.18	0.03	1.6	1.5	1.3	2.5	0.8	1.0	0.5	0.6	0.2	0.3	0.3	最小
			2.1	2.0	1.8	3.9	1.3	1.4	1.1	0.9	0.4	0.3	0.6	最大
			1.80	1.79	1.55	3.22	1.01	1.17	0.70	0.77	0.30	0.29	0.39	平均
			0.10	0.10	0.11	0.29	0.07	0.08	0.20	0.01	0.05	0.03	0.11	標準偏差
	100	10	100	100	100	100	100	100	10	10	10	10	10	標本数

注) 計測値はデジタルノギスによる。
 「*」: 計測100個と,そのうち胚計測10個の重量を分けて示している。

表7 マメ科炭化種子の大きさ・重量

分類群	乾重(g)*			種子							臍		臍長/ 種子長	備考
				乾重(g)	計測値(mm)			長さ×幅	長さ/幅	長さ/厚さ	臍(mm)			
					長さ	幅	厚さ				長さ	幅		
アズキ類	3.31	0.82	0.48	0.02	3.0	2.6	2.0	8.2	0.9	1.0	2.0	0.4	0.5	最小
				0.05	5.6	4.2	4.3	22.1	1.6	2.0	3.5	1.0	0.7	最大
				0.03	4.15	3.34	3.12	13.96	1.24	1.35	2.65	0.64	0.61	平均
				0.01	0.52	0.32	0.44	2.77	0.13	0.19	0.53	0.16	0.06	標準偏差
	128	36	15	15	128	128	127	128	128	127	15	15	15	標本数
ダイズ類	0.03			0.03	6.2+	5.3	4.8	-	-	-	1.2+	1.1	-	「+」: 残存値
				-	9.0	-	-	47.7	1.7	1.9	3.0	-	0.3	復元値を適用
	1			1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	標本数
ダイズ類?	0.02			0.01	4.0	3.4	2.1	13.6	1.2	1.9	-	-	-	幼根:長さ1.2mm,幅1.0mm
				0.01	3.5	3.0	2.5	10.5	1.2	1.4	-	-	-	幼根:長さ1.7mm,幅1.2mm
	2			2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	標本数

注) 計測値:アズキ類はデジタルノギス,他は写真からの計測による。
 「*」:アズキ類の重量は,計測128個と,そのうち臍残存36個,36個のうち臍計測対象15個の重量を分けて示している。

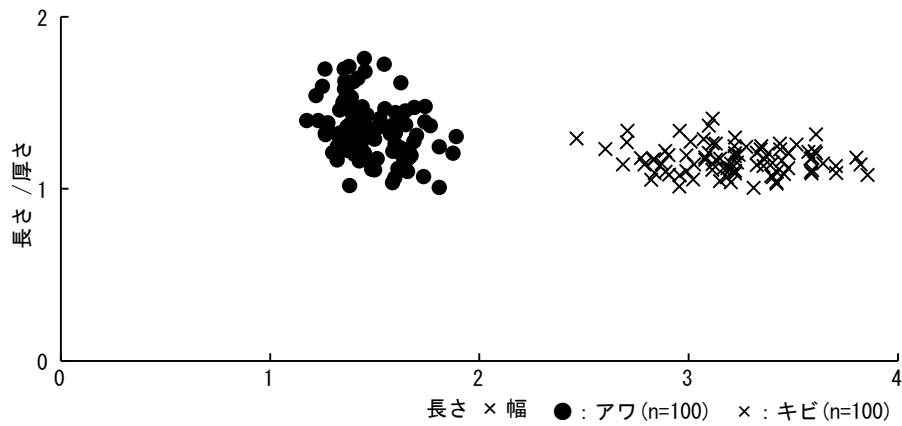


図14 アワ・キビ炭化胚乳の大きさ

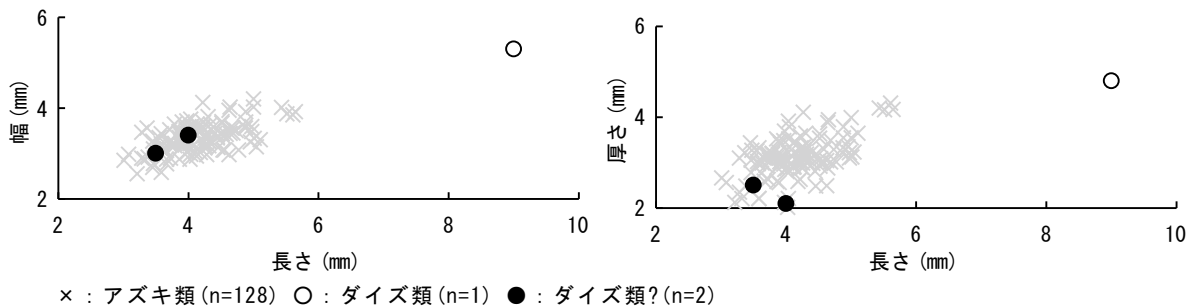


図15 マメ科炭化種子の大きさ

年草のハギ属の種子が1個(0.001g未満)、常緑低木のフユザンショウの種子が2個(0.01g)の、計11個(0.51g)が検出された。種実以外では、タイ科の歯(臼歯状)が1個(0.02g)確認された。分析残渣は、イネ・アワ・キビなどの炭化物主体が137.7g、砂礫主体が22.2gを量る。

3) 炭化種実の計測

栽培種(可能性を含む)の炭化種実の同定根拠と傾向を示すために、保存状態が良好なイネの胚乳(炭化米)100個(図10の写真2)の計測結果を表5に、アワとキビの胚乳各100個の計測結果を表6、図14に、マメ科(アズキ類)の種子128個(図11の写真9~25)、マメ科(ダイズ類)の種子1個(図12の写真26)、マメ科(ダイズ類?)の種子2個(図12の写真27)の計測結果を表7、図15に示す。その他の分類群(図12の写真28~31)は、計測値を表4に示す。

炭化米の粒大(長さ×幅)、粒形(長さ/幅)(佐藤,1988)は、短粒で極小型が60個、小型が38個と短粒が大部分(98%)を占め、長粒で極小型が2個(2%)、円粒は0個(0%)であった。アワとキビには、大きさと胚乳の長さにおける胚の長さの比率に明瞭な違いが確

表8 炭化材同定結果

調査区	遺構	試料名	点数	種類
IV-4	ST1	炭化物1	1	モミ属
		炭化物2	1	モミ属
IV-5	ST2	床面炭化物層	3	ヒノキ科
				コナラ属アカガシ亜属
				シイ属

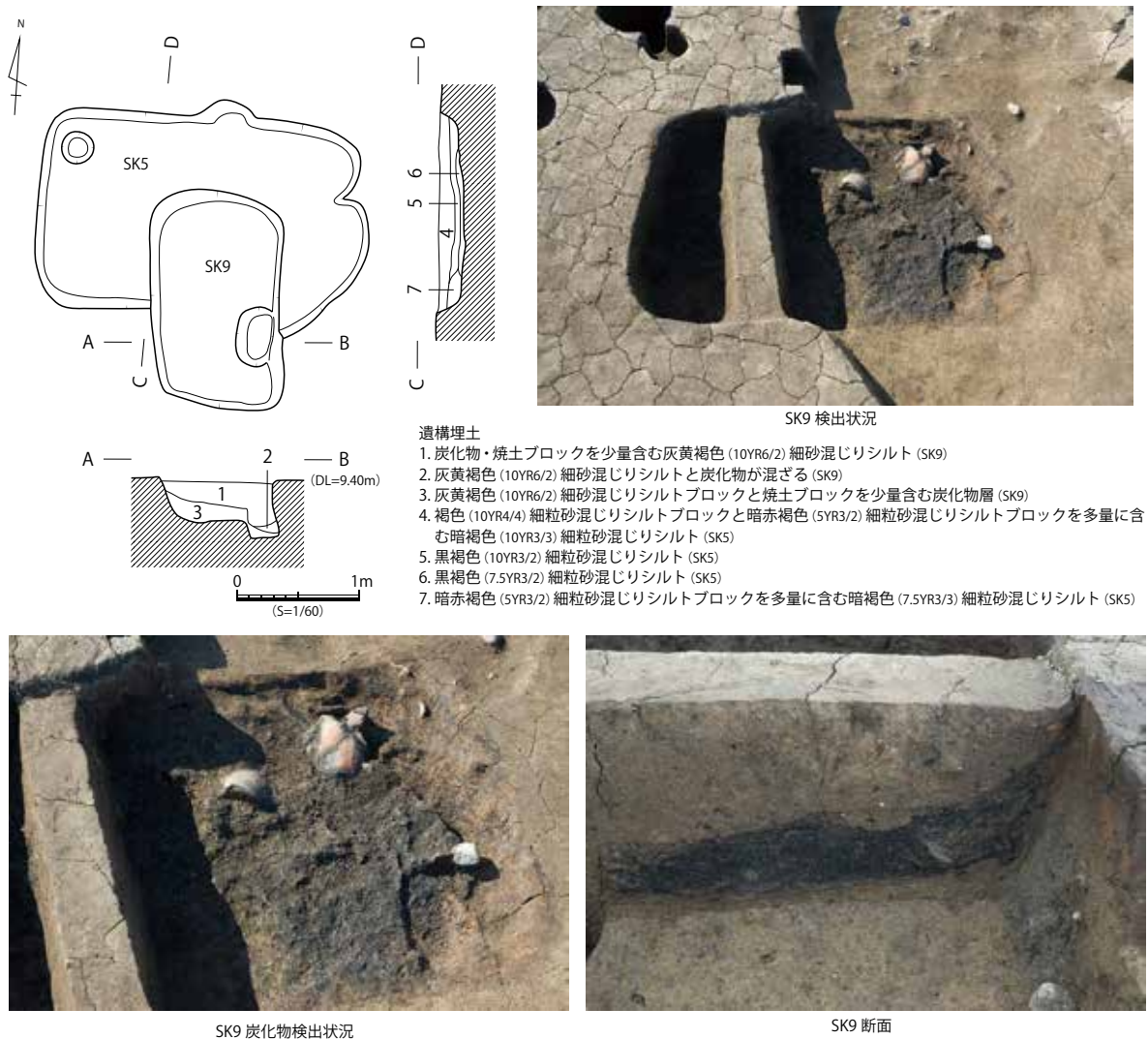


図16 IV-1区SK5・9遺構平面図と断面図および検出状況写真

認められた。マメ科には、アズキ類の特徴を示す種子が多く確認される他に、アズキ類よりも明らかに大型で、ダイズ類の特徴を示す種子と、それよりも小型で偏平なダイズ類と考えられる種子が確認された。

・IV-5区 ST1_P3 (No.5)

試料全量 150cc (258.1g)からは、炭化種実はいネの胚乳の破片が1個(0.001g未満)と、アワの胚乳が2個(0.001g)検出された。種実以外では、炭化材が5個(0.001g)、タイ科の歯(臼歯状)が1個(0.02g)、岩片(剥片類?)が18個(0.17g)確認された。分析残渣は、砂礫主体で3.9gを量る。

②炭化材同定

結果を表8に示す。炭化材は、針葉樹2分類群(モミ属・ヒノキ科)と広葉樹2分類群(コナラ属アカガシ垂属・シイ属)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属(Abies) マツ科

試料は、全て年輪界で割れており、割れた部分には土壌が流入し、固化している。軸方向組織は仮

道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁には数珠状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・ヒノキ科(Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型またはスギ型であるが、保存状態が悪い。放射組織は単列、1～10細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属(Quercus subgen. Cyclobalanopsis) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・シイ属(Castanopsis) ブナ科

試料は保存状態が悪く、電子顕微鏡による観察はできなかった。環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1～2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高

(5)考察

遺構埋土の炭化種実同定(土壌試料洗い出し)の結果、弥生時代中期末のIV-1区のSK9から、多量の栽培種の炭化種実が検出された。その他の遺構では、IV-5区のST1_P3からイネ1個、アワ2個が検出されるのみで、その他の遺構からは、炭化種実が全く検出されなかった。

これに対し、IV-1区のSK9からは、多量の炭化種実が検出された。図16に遺構平面図と断面図及び検出状況を示す。分析層準は、土坑底部に堆積した焼土ブロックや基盤層に類似する土色、粒度組成を示す堆積物の偽礫を含む炭化物層(土坑埋土の3層)である。この炭化物層は、土坑底部に一様に平坦的に堆積するのではなく、底部が窪地となった相対的に低い場所に向かって緩やかに斜面をなすようにして存在する。炭化物層は、遺構基盤層と類似する土色と粒度組成を示す黄灰色の砂混じりシルトを主体とする土坑埋土の1層によって被覆される。土坑埋土の1層では、古土壌および土坑基盤層の偽礫が多く含まれることが断面写真の観察によって認識されることから、人為的な埋め戻し土の可能性がある。このような埋土で充填されるSK9では、側壁や底部が熱を受けた痕跡が認められない。上記のSK9の検出状況からは、炭化物層が周囲から弱い堆積営力によって局所的な凹地となる土坑底部へ再堆積した後に、人為的に埋め戻された埋没過程が推測される。なお、発掘調査では、SK9周辺の土坑や建物跡において、火を受けた痕跡が認められることが確認されている。

分析試料では、栽培種のイネ、アワ、キビと、栽培種の可能性があるマメ科(アズキ類、ダイズ類、ダイズ類?)、木本のイチイガシ、コナラ属、フユザンショウ、木本または多年草のハギ属の炭化種実の他に、炭化材、タイ科の歯(臼歯状)が確認された。以下に、SK9の炭化種実について、種類ごとに検討を行う。

炭化種実群の大半は、栽培種の穀粒から構成される。その個数は、埋土50ccから5,000個を超える。出土穀粒の重量はイネが最も多く、アワ、キビと次ぐが、個数はアワがイネを上回り、後述するような既往の分析事例と異なる結果が得られた。さらに、埋土550ccを洗い出すことで、マメ科(アズキ類、

ダイズ類, ダイズ類?)やイチイガシ, コナラ属, フユザンショウ, ハギ属が確認された。

今回計測を実施したイネ(炭化米)は, 大部分を短粒が占めた。イネをはじめ, 多くの出土穀粒の保存状態が良好で, 成熟した完形個体が多く, 表面に穎(籾)が残る個体も確認されたことから, 籾がついた生の段階で火を受け炭化したものとみなされる。

一方, これらの穀粒が集結した塊状物(泥塊)には, 火を受けて癒着し炭化した状態は認められず, 個々の配列にも規則性が確認されないことから, 果序(穂)の状態ですべて火を受けた可能性は低いと考えられる。

マメ科は, アズキ類の特徴をもつ種子が主体で, ダイズ類の特徴を持つものが含まれる。従って, マメ科については, 少なくとも2系統の種子の存在が確認される。アズキ類やダイズ類は, 近年の土器圧痕調査や種実遺体の研究で, 縄文時代における栽培の可能性が検討されている(小畑,2008;2011;西本ほか,2012など)。今回確認されたアズキ類やダイズ類は, 周辺で栽培されていたか, 近辺より持ち込まれたかは不明であるが, 当時利用された植物質食料と示唆され, 複数の系統の利用が考えられる。

栽培種(可能性を含む)を除いた分類群では, 常緑高木のコナラ属イチイガシは, 湿潤, 肥沃で深い土壌を持つ内陸平坦地と後傾斜に極相林として発達し, 常緑低木のフユザンショウ, 木本または多年草のハギ属は, 伐採地や崩壊地, 森林の林縁などの明るく開けた場所に生育する分類群で, 現在の本地域にも分布している。これらは, 当時の遺跡周辺域の照葉樹林やその林縁等に生育していたと考えられる。

このうち, イチイガシについては, 子葉があく抜きせずに生食可能で収量も多い有用植物であることから, 縄文時代以降における果実や子葉の遺跡出土事例も多い(岡本,1979など)。今回確認された子葉・果実は, 当時の遺跡周辺域の照葉樹林から居住域内へ持ち込まれ, 上述の栽培種とともに利用された植物質食料と示唆される。

なお, 周辺遺跡における竪穴建物跡の炉跡を中心とした炭化穀粒の洗い出し事例(位置については図3・4参照)では, 物部川扇状地末端近傍の氾濫原上の介良野遺跡(高知市)の弥生時代終末期～古墳時代初頭でイネ, アワーヒエ, マメ類(パリノ・サーヴェイ(株),2007), 物部川扇状地地面の田村西遺跡(南国市)でイネ(パリノ・サーヴェイ(株),2013a), 土佐山田台地上の伏原遺跡(香美市)の弥生時代終末期～古墳時代初頭で, イネ, アワーヒエ(パリノ・サーヴェイ(株),2010), 徳王子丘陵南縁部の台地上と開析谷の徳王子前島遺跡(香南市)の弥生時代後期後半～終末期でイネ(パリノ・サーヴェイ(株),2013b), 物部川沖積扇状地上の西野々遺跡(南国市)の弥生時代中期で, イネとコムギが確認されている(パリノ・サーヴェイ(株),2011)。

上記のこれまでの分析結果については, いずれも出土個数も少なく, さらに保存状態もかなり不良であった。また, 試料の時期は, 弥生時代後期終末期～古墳時代初頭に偏っていた。今回の分析では, 弥生時代中期末の良好な炭化種実の同定結果を得ることができ, 弥生時代の生業を考える上で重要でかつ貴重な結果が得られたと判断される。これまでの分析事例をふまえると, 炭化種実については, 炉跡埋土よりも炭化物が充填された土坑埋土の方が回収率が高くなる傾向がうかがえる。このような傾向は, 大阪府河内低地に立地する久宝寺遺跡での発掘および自然科学分析の調査事例からも確認される(福佐編,2013)。福佐編(2013)では, 古墳時代前期を中心とする土坑, 溝, 井戸, 建物跡に伴う炉跡といった系統的な遺構の炭化種実の回収とその同定によって, 埋土に炭が多く含ま

れる土坑から、多くの炭化種実が検出されることが明らかにされている。

なお、上述してきたSK9で検出された炭化種実の生成過程および土坑内への埋没過程については、調査区の遺構形成過程などをふまえ、さらに検討を進めていくことが課題として認識される。このような検討は、炭化種実を多く含む土坑が人間活動のどのような過程において形成されるかという課題を含んでおり、居住域での生活を考えるうえにおいても大切な視点であると思われる。

炭化材については、ST1の2点が針葉樹のモミ属、ST2がヒノキ科、アカガシ亜属、シイ属に同定された。モミ属は、木理が通直で割裂性が高く、加工は容易であるが保存性は低い。ヒノキ科は、木理が通直で割裂性・耐水性が高く、加工は容易である。アカガシ亜属とシイ属は、比較的重硬で強度が高い。これらの樹種は、遺跡周辺の丘陵などに当時普通に生育していたと考えられる。

(松元美由紀・高橋 敦・辻 康男)

引用文献

- Bridge, J.S., 2003, Rivers and Floodplains: Forms, Processes, and Sedimentary Record. Wiley – Blackwell, 504p.
- 出原恵三, 2009, 南国土佐から問う弥生時代像 田村遺跡. 新泉社, 93p.
- Desikachary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at T.T. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras – 600044. 1 – 13, Plates : 401 – 621.
- 江口誠一, 1994, 沿岸域における植物珪酸体の分布千葉県小櫃川河口域を例にして. 植生誌研究, 2, 19 – 27.
- 江口誠一, 2005, 水田雑草の植物珪酸体形態とその遺跡からの産状. 考古学と自然科学, 51, 1 – 9.
- 江口誠一, 1996, 沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値. ペドロジスト, 40, 81 – 84.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 平井幸弘, 2004, 外帯河川をつくる沖積低地. 日本の地形 6 近畿・中国・四国, 東京大学出版会, 318 – 325.
- 廣田佳久編, 2011, 西野々遺跡Ⅲ, 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター, 312p.
- Horst Lange – Bertalot., 2000, ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA : Annotated diatom micrographs. Witkowski, A., Horst Lange – Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 plts. 4504 figs, 925 pgs.
- 福佐美智子編, 2013, 久宝寺遺跡2. 公益財団法人大阪府文化財センター, 204p.
- Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.
- Hustedt, F., 1937 – 1938, Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen – Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131 – 809p, 1 – 155p, 274 – 349p.
- Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.
- Hustedt, F., 1961 – 1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres – gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.

- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81 - 181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66 - 176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83 - 201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30 - 166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47 - 216.
- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- (株)古環境研究所,2004,高知県,田村遺跡群における自然科学分析.田村遺跡群Ⅱ.第8分冊 自然科学編,高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,283 - 288.
- 国土交通省四国地方整備局・高知県,2010,物部川水系河川整備計画,217p.
- 近藤鍊三,1982,Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究.昭和56年度科学研究費(一般研究C)研究成果報告書,32p.
- 近藤鍊三,1988,植物珪酸体(Opal Phytolith)からみた土壌と年代.ペドロジスト,32,189 - 202.
- 近藤鍊三,2010,プラント・オパール図譜.北海道大学出版会,387p.
- 高知県,1966,土地分類基本調査 高知5万分の1国土調査.経済企画庁.
- Krammer, K. and H. Lange - Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica, vol. 9, p. 250. Krammer, K. and H. Lange - Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2 (1) : 876p.
- Krammer, K. and H. Lange - Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2 (2) : 596p.
- Krammer, K. and H. Lange - Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2 (3) : 576p.
- Krammer, K. and H. Lange - Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2 (4) : 437p.
- 久家隆芳,2014,まとめ.関遺跡,高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,113 - 114.
- 久家隆芳・小野由香・前田光雄,2006,まとめ.田村遺跡群Ⅱ 第9分冊 総論,高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,387 - 454.
- 久家隆芳編,2007,介良野遺跡,(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,200p.
- 久家隆芳編,2013,田村西遺跡,高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,115p.
- 久家隆芳編,2014,関遺跡,高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,137p.
- 前田光雄,2006,田村遺跡群弥生時代中後期の集落.田村遺跡群Ⅱ 第9分冊 総論,高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,97 - 136.
- 満塩大洗・阿子島 功,1991,高知県の完新統.日本の地質8 四国地方,日本の地質「四国地方」編集委員会編,共立出版株式会社,47 - 149.
- 三浦英樹,2011,第四紀の環境変動と人為活動を読みとるための土壌研究の方法論:「堆積土壌」における土壌断面の見方と考え方.地球環境,16,139 - 150.
- 森田尚宏,2004,遺跡の位置と環境.田村遺跡群Ⅱ 第1分冊 A・B区の調査,高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,7 - 34.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p.
- 西本豊弘・住田雅和・竜子正彦・高橋 潔・近藤奈央・吉崎 伸,2012,縄文時代のアズキについて - 京都市上里遺跡出土のアズキ類の検討 -.動物考古学,第29号,45 - 53.

- 小畑弘巳,2008,マメ科種子同定法.「極東先史古代の雑穀3」,日本学術振興会平成16～19年度科学研究費補助金(基盤B-2)(課題番号16320110)「雑穀資料からみた極東地域における農耕受容と拡散過程の実証的研究」研究成果報告書,小畑弘巳編,熊本大学埋蔵文化財調査室,225-252.
- 小畑弘巳,2011,東北アジア古民族植物学と縄文農耕.同成社,309p.
- 岡本素治,1979,遺跡から出土するイチイガシ.大阪市立自然史博物館業績,第230号,31-39.
- 小野由香,2002,田村遺跡発掘調査概報.(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,36p.
- 大庭重信,2014,河内平野南部の弥生時代集落景観と土地利用.日本考古学,考古学協会,47-65.
- パリノ・サーヴェイ(株),2007,介良野遺跡の自然科学分析.介良野遺跡,高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第100集,(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,163-194.
- パリノ・サーヴェイ(株),2008,西野々遺跡の自然科学分析(1).西野々遺跡Ⅰ,高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,185-206.
- パリノ・サーヴェイ(株),2010,伏原遺跡Ⅱ自然科学分析.伏原遺跡Ⅱ,(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,271-280.
- パリノ・サーヴェイ(株),2011,自然科学分析.西野々遺跡Ⅲ,高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,357-391.
- パリノ・サーヴェイ(株),2013a,自然科学分析.田村西遺跡,高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,63-76.
- パリノ・サーヴェイ(株),2013b,自然科学分析.徳王子大崎遺跡,高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,65-82.
- パリノ・サーヴェイ(株),2014,関遺跡の自然科学分析.関遺跡,高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,95-112.
- 佐藤敏也,1988,弥生のイネ.弥生文化の研究2 生業,金関 怨・佐原 真編,雄山閣,97-111.
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- 杉山真二・藤原宏志,1986,機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-.考古学と自然科学,19,69-84.
- 鈴木隆介,1998,建設技術者のための地形図読図入門 第2巻 低地.古今書院,554p.
- 鳥居厚志,2007,花粉分析と環境復元.土壌を愛し,土壌を守る,博友社,343-348.
- Reimer J Paula et al,2013,Intcal13 and Marine13 Radiocarbon age Calibration curves 0-50,000 years cal BP.RADIOCARBON,55,1869-1887.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p.[Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- Stuiver Minze and Polach A Henry,1977,Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon,19,355-363.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p.[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]

第V章 考察

1. 中期末の土器と弥生時代の遺構と田村遺跡の消長

1. 中期末(Ⅳ期)の土器

今次調査では、竪穴建物や土坑などから中期末(以下Ⅳ期)の一括性の高い出土遺物を得ることができた。当該期の土器は1・2次調査でも多く出土しているが、今次資料は遺構の切り合いや攪乱が少なくより一括性に富むもので、今後の土器編年の基準資料として位置付けられよう。Ⅳ期の土器編年は、岡本健児(岡本1989)以降、1次調査(出原2000)、2次調査(坂本2006)に基づき2～3小期に編んできたが、最近の資料増加により細分の整合性が保たれなくなっている。今次調査は、遺構の位置関係などから見て2～3小期の存在が考えられるが、遺構の変遷に対応する編年を明示し得ない。従ってここでは、小期区分をせずⅣ期として提示し、細分編年については再構築を将来に委ねたい。

器種組成は壺、甕、鉢、高杯、蓋などから構成されており、図示可能な口縁部点数で組成比を見ると壺199点(42.4%)：甕203点(43.3%)：鉢34点(7.2%)：高杯27点(5.8%)：蓋6点(1.3%)である。以下各器形別に主として口縁部形態の特徴から分類を行なった上で、1次・2次調査資料や近年良好な資料の出土している上ノ村遺跡、バーガ森北斜面遺跡、御手洗遺跡、西野々遺跡出土の資料との比較検討を行い今次調査出土土器の特徴を抽出したい。

(1) 壺

① 分類

口縁部と頸部の形態から大きくⅠ～Ⅶ類に分類され、口縁部の細かな形態や手法から更に細分される(図1)。

Ⅰ類：広口壺である。ラッパ状に開く口頸部を有する。外反の強弱や頸部の長短などバリエーションがある。口縁部や口唇部の特徴によって以下のように細分される。

A類：口縁部外面に粘土帯を貼付する南四国特有のタイプである。

B類：口縁部外面に微隆起帯を貼付する。

C類：口縁部に凹線文を施す。

D類：口縁部に粘土帯や微隆起帯、凹線文を施さないシンプルなタイプ。

①類：口唇部を拡張しない。

②類：口唇部を上方に拡張する。

③類：口唇部を上・下に拡張する。

④類：口唇部を下方に拡張する。

Ⅱ類：口縁部が外反する広口壺であるが、頸部が内傾して立ち上がるタイプである。細分にはⅠ類のA～D類、①～④類が適応される。

Ⅲ類：口縁部が短い頸部から「く」字状に屈曲して外反するタイプである。細分にはⅠ類のA～D類、①～④類が適応される。

Ⅳ類：細頸壺である。口頸部の特徴から以下のように細分される。

A類：口頸部に微隆起帯や粘土帯を貼付して著しく加飾されたタイプ。

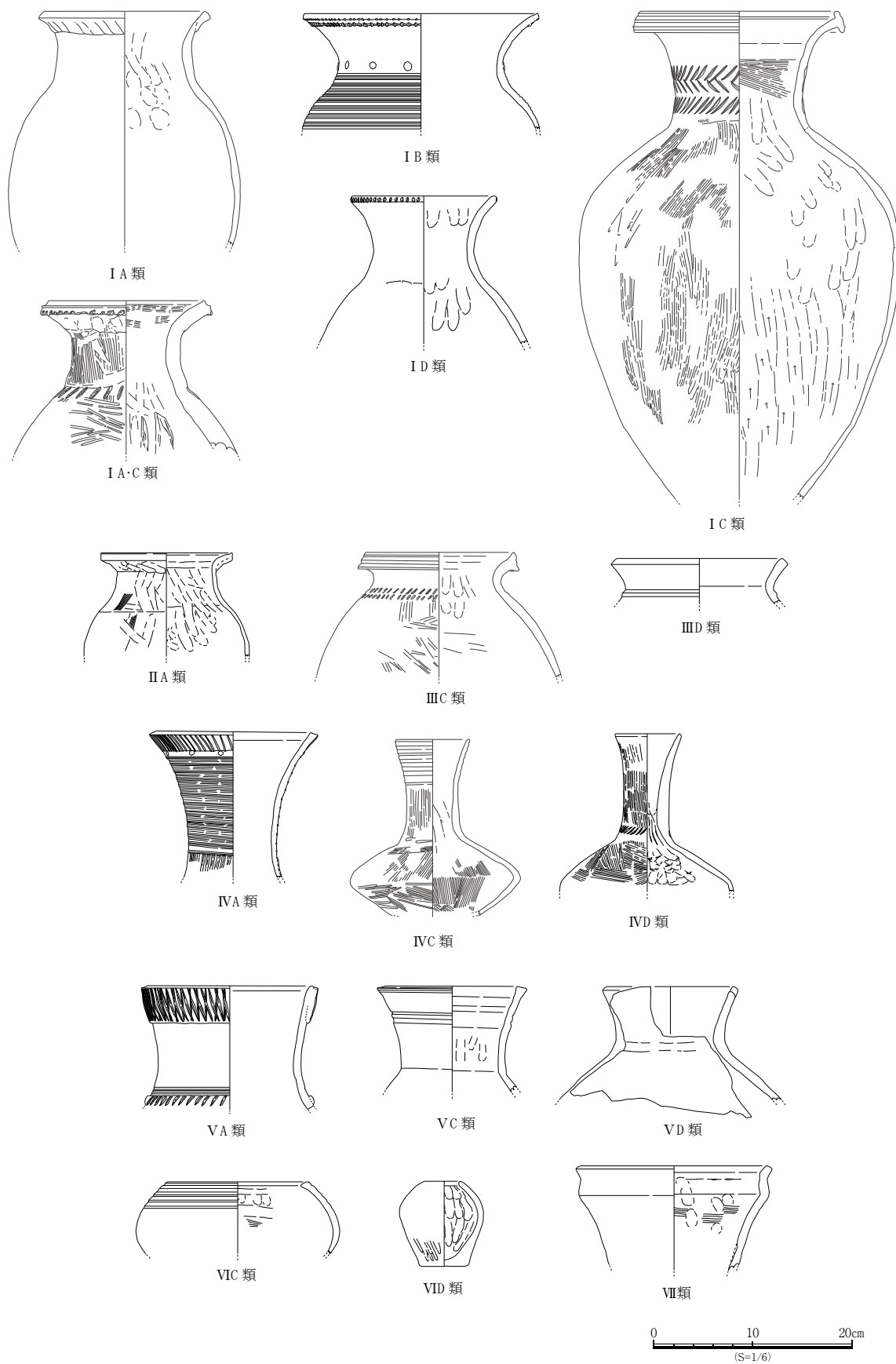


图1 壺分類

C類：口頸部に凹線文を施す。

D類：微隆起帯や凹線文を施さないシンプルな作りである。

V類：直口壺である。I類のA～D類の細分が適用される。

VI類：無頸壺である。I類のA～D類の細分が適用される。

VII類：二重口縁を有する。

②分析

広口壺のI類は、147点と最も多く全体の7割以上を占める。次いで細頸壺のIV類が22点で約1割、直口壺のV類が11点で5.5%、他はどれも僅少である。口縁部外面に粘土帯を貼付するA類と微隆起帯を貼付するB類は、前期末から見られ中期を通して盛行する南四国特有の手法である(出原1990)。C類とした凹線文は、瀬戸内から伝わった手法で高知平野ではⅢ-3期に登場しIV期に盛行期を迎える。

I類の口縁部手法は、I A類87点(59.2%)、I B類3点(2%)、I C類31点(21%)、I D類26点(17.7%)で、南四国タイプのI A類が大半を占めている。B類は本来南四国型甕に多用される手法である。またI C類としたものの中にはA類の貼付手法を有する折衷タイプと称する例が3点(Ⅳ-1区SK29-82、Ⅳ-4区SK52-161など)含まれる。これまでⅢ-3期の指標とされてきたものであるが、出土状況からIV期にも見られることが確認された。口唇部の文様を見るとI A類では刻目を施す例24点(27.6%)、次いで格子目文が6点(7%)、刺突文が3点(3%)で、無文のものが54点(62%)と大半を占めている。I B類は全て刻目が施される。I C類では浮文と刻目文が各2点見られる。I D類では無文が14点(53.8%)、次いで刻目を施す例が9点(34.6%)、刺突文が2点(7.7%)、浮文が1点(3.8%)である。I A・D類の口唇部は無文が大半を占めているが、刻目を施す例が2～3割、I C類では僅少なから浮文と刻目文を挙げることができる。またI C類では口縁を上下に拡張するものが12点と最も多く、次いで上方に拡張するものが10点、拡張しないものが8点、下方に拡張するものが4点見られる。

Ⅱ類は8点(4%)である。南四国タイプのⅡ A類が7点、凹線文との折衷タイプが1点で、口唇部はⅡ A類の2点に刻目が施され、他は無文である。Ⅲ類は5点(4%)である。Ⅲ C類が2点、Ⅲ D類が3点と凹線文の比率が高い。

Ⅳ類は22点(11.1%)である。Ⅳ A類が6点、Ⅳ C類が5点、Ⅳ D類が11点である。Ⅳ A類は頸部に微隆起帯、口縁部に浮文を貼付するなど繁縟なまでに加飾されたものが多い。

V類はV A類が3点、V C類が5点、V D類が3点、凹線文のV C類の占める割合が45.5%と高い。V類にはⅣ-1区SK29-85のような水差し形土器も含まれる。VI類の無頸壺も点数は少ないが3点中2点がC類の凹線文土器である。VII類は口縁部が外反するタイプ(Ⅳ-5区151)と内傾するタイプ(Ⅳ-1区10)が見られる。

壺全体でA類は103点(51.8%)、B類は3点(1.5%)、C類は47点(23.6%)、D類は46点(23.1%)である。表1に他遺跡の例を示した。田村遺跡2次調査に対してA類は約10%高く、C類は逆に10%減少している。

(2)甕

①分類

全体の形状や凹線文の有無などから大きくI～Ⅲ類に分類し、口縁部の成形手法や文様などに

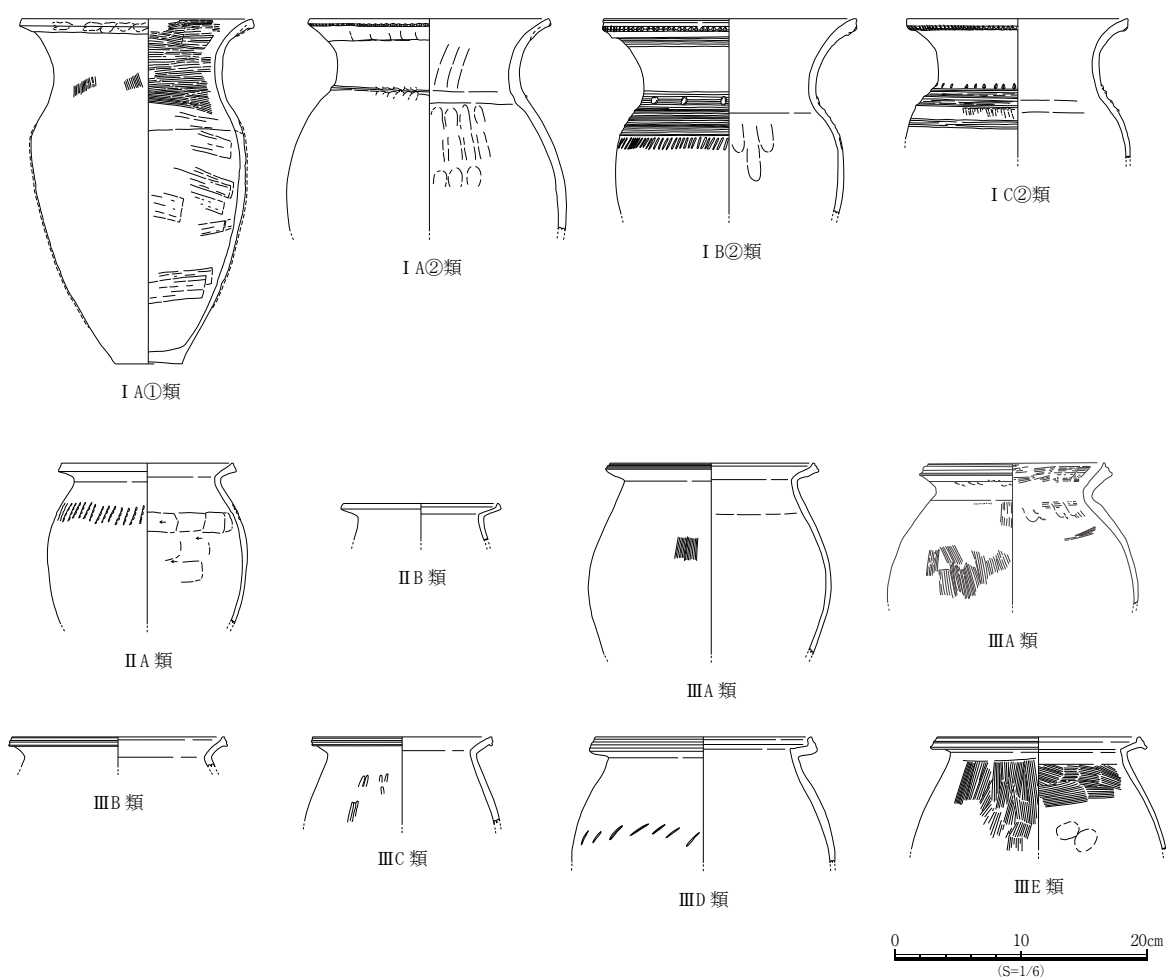


図2 甕分類

よって細分することができる(図2)。

I類：上胴部から頸部に向かって緩やかに窄まり、口縁部に向かって外反する。在地色の濃厚な南四国型甕である。以下のように細分される。

A類：口縁部外面に粘土帯を貼付する。典型的な南四国型甕である。

B類：口縁部外面に微隆起帯を貼付する。

C類：A類やB類のような加飾を施さない。シンプルな作りである。

①類：口唇部無文。②類：口唇部に刻目を施す。③類：口唇部に格子目文を配する。

II類：口縁部が「く」字状に外方に屈曲する。以下のように細分される。

A類：口縁部が拡張されず口唇部は強い横ナデによって凹状を呈する。

B類：口縁部は僅かに上に拡張される。

C類：口縁部は上方に大きく拡張される。

D類：口縁部は上方に大きく拡張され受け口状を呈する。

E類：口縁部は下方に拡張される。

III類：口縁部が「く」字状に外方に屈曲し口唇部には凹線文が施される。口唇部の形態によって以下のように細分される。

- A類：口唇部を上方に僅かに拡張する。
 B類：口唇部を上・下に僅かに拡張する。
 C類：口唇部を下方に僅かに拡張する。
 D類：口唇部を上方に大きく拡張する。
 E類：口唇部を上・下に大きく拡張する。

②分析

I類 122点 (60.1%)：II類 25点 (12.3%)：III類 56点 (27.6%) でおおよそ6：1：3である。I類はA類が60点 (49.2%)、B類が28点 (23.0%)、C類34点 (27.9%)でA類の典型的な南四国型甕が最も多くを占める。I A類の口唇部は無文の①類が28点 (63.35%)、刻目の②類が21点 (35%)、③類が1点である。I A①類で胴部から口縁部まで把握できるものは30点であるが、その内11点には上胴部に小突帯や櫛描文、列点文、浮文などが施されている。I A②類では16点中11点に同様の文様が確認される。口唇部に刻目を有する②類に有文土器が多い。I B類は28点中24点 (85.7%)が口唇部に刻目の②類である。I B②類は細片が多く上胴部が把握できる個体は4点であるが、その全てに微隆起帯、櫛描文、浮文などの文様が施され、口縁部の微隆起帯下に櫛描直線文を施文する例が7点見られる。I B②類は加飾された甕である。I C類は34点中24点 (70.6%)が①類、②類は8点 (23.5%)である。I C①類は上胴部を確認できるものが多くその内6点 (約25%)に沈線、隆帯、列点文などの加飾が見られ、I C②類は8点中5点 (62.5%)の上胴部に加飾が施される。

I A類とI C類は①が、I B類では②が多くを占めている。I B類とI A・C②類は加飾された甕であり、②類で胴部文様の無いものは加飾の省略として解釈することもできよう。I類にはII・III類に見られる内面へら削りは認められない。I A類のIV-4区231やIV-6区10に見られる断面三角の小突帯はIII期に特有の文様であったが、IV期に存続することが今回明らかとなった。

II類はA類：B類：C類：D類：E類 = 17点：4点：2点：1点：1点である。これらの内II C類の1点 (IV-5区ST5-95)には叩きが認められる。IV期における叩きは1次調査時のLoc.45ST9出土の甕に継ぐ2例目であり、高知平野では田村遺跡以外には見られない。またII類25点中6点に内面へら削りが認められる。削りのほとんどは中位までであるが中には頸部近くまで施される例も見られる。文様を有する例は僅少でIV-5区ST5-96は上胴部外面に貝殻腹縁による列点文が見られるのみである。

III類はA類：B類：C類：D類：E類 = 7点 (12.5%)：5点 (8.9%)：0点：39点 (69.6%)：5点 (8.9%)で、上方に大きく拡張するタイプが7割を占める。口縁部のみの破片が多く内面調整を観察できる個体が少ないが、10点で内面へら削りを認める。D類は殆どが内面中位あたりまでへら削りが施されているものと考えられる。上胴部外面にへら原体による列点文が僅少ながら認められる (IV-5区ST5-72, P30-247)。

(3)鉢

①分類(図3)

I類：椀状を呈し口縁部に向かって直線的あるいは内湾気味に立ち上がる。以下に細分される。

- A類：口縁部外面に粘土帯を貼付する。
 B類：口縁部外面に凹線文を施す。

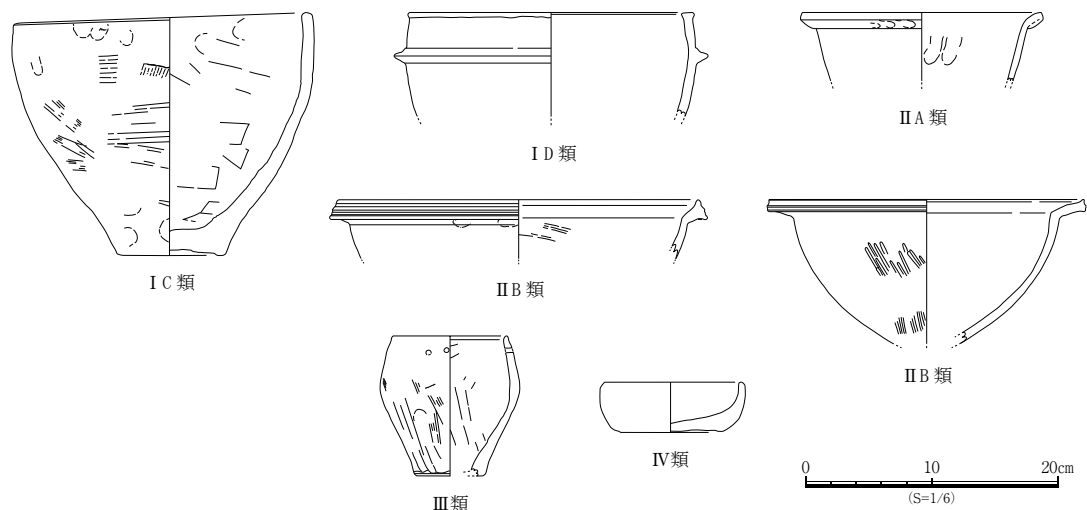


図3 鉢分類

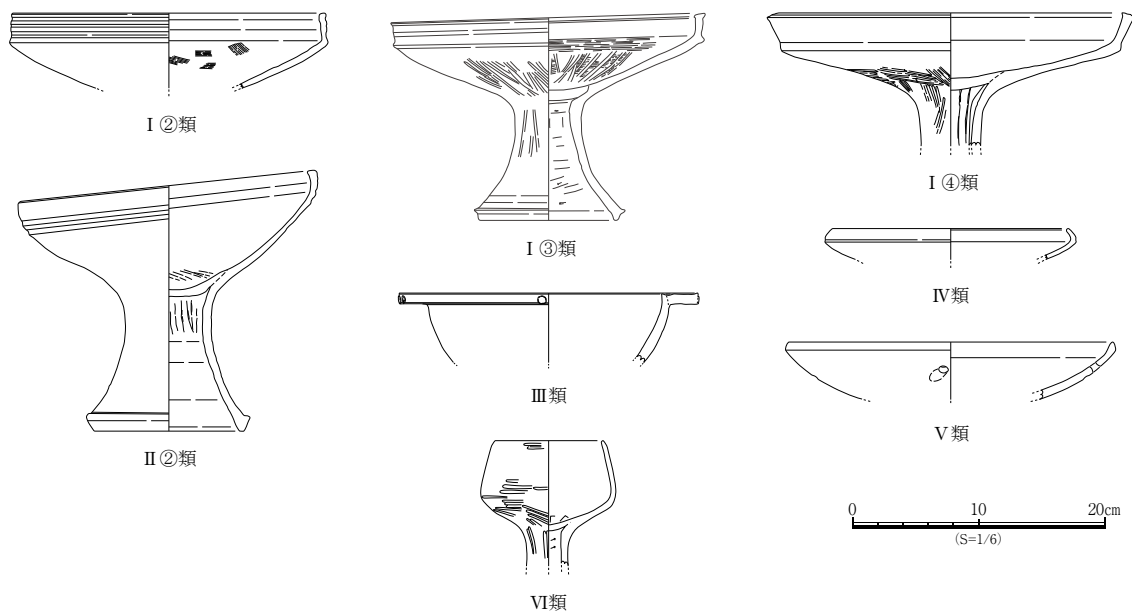


図4 高杯分類

C類：口縁部に文様を施さない。

D類：口縁部下に断面三角の突帯を巡らす。

II類：口縁部が外反する。I類のA～D類に細分される。

III類：上胴部で大きく内側に屈曲する。

IV類：皿状を呈する。

②分析

I類 13点 (38.2%) : II類 19点 (55.9%) : III類 1点 (2.9%) : IV類 1点 (2.9%) でII類が半数以上を占める。鉢の口縁部にも伝統的な粘土帯貼付のA類と凹線文のB類が見られる。II類には両者が見られA類 : B類 : C類 = 6点 (31.6%) : 5点 (26.3%) : 8点 (42.1%) の比率で展開しており、3者がほぼ拮抗して展開している。I類にはB類が見られないが他の調査区 (Loc.49SK14) からは出土が確認されている。突帯を有するI D類はこれまでに出土例を見ないものである。

(4)高杯

①分類(図4)

I類：口縁部が杯部底から稜線をもって立ち上がり，口縁部外面には凹線文が施される。口唇部の形態によって以下のように細分される。

①類：口唇部が丸い。②類：口唇部面取り。③類：口唇部を外方に摘み出し拡張される。

④類：口唇部に弱い凹線が施される。

II類：杯部が椀状を呈する。

III類：椀状の杯部に幅広い口縁部が水平に開く。

IV類：口縁部が強く内傾する。

V類：杯部が皿状を呈する。

VI類：杯部がブランデーグラス状を呈する。

②分析

I類 19点 (70.4%)：II類 3点 (11.1%)：III類 1点 (3.7%)：IV類 1点 (3.7%)：V類 1点 (3.7%)：VI類 2点 (7.4%)である。当該期の高知平野で最も一般的なI類が7割を占める。I類の内訳は①：②：③：④ = 3点 (15.8%)：9点 (47.4%)：4点 (21.1%)：3点 (15.8%)で②類が最も多い。口唇部に凹線を施す④類は瀬戸内では後期初頭の目安とされる特徴であるが，IV-4区 238などの出土状況と共伴遺物を見る限りではIV期に置かざるを得ない。IV類はこれまで高知平野では出土例がなかったタイプで，四国では瀬戸内側で散見される。高杯は前期（I期）前半に1%前後の組成比率を占めるが，それ以降はIII期まで皆無に近い状況である。IV期に至って俄に主要器種となるがその要因は中部瀬戸内からのインパクトによるもので，I類をその典型として位置付けることができる。またVI類のIII-2区 14は外面に粘土帯を貼付しており在地の特徴が現れている。

(5)蓋

①分類

I類：体部が「ハ」字状に直線的に下がり口縁部は外反する。

II類：体部が膨らみをもって下がり口縁部は外反する。

②分析

全体を捉えることのできる個体が少ないがI類が多い傾向にある。蓋はI期に数%～10%の組成を占めていたが，II・III期を通してほとんど見られなかった。IV期に至って1.3%と極めて僅少ではあるが土器組成に復活を果たしている。

(6)まとめ

高知平野のIV期は土器様式においても大きな変革期として位置付けられている。高杯や器台などIII期まではほとんど見られなかった器種の登場，水差し形土器や無頸壺，長胴壺などの出現に見られるように各器種内における分化，南四国型甕による独占構成の崩壊などとして現れる。II・III期を通して比較的単純であった組成が複雑となるのである。IV期の変革は新器種の登場や分化に留まらず，凹線文や内面ヘラ削りなど土器製作に見られる新たな手法が伴うことも極めて重要な特徴として挙げなければならない。周知のように一連の変革は，中部瀬戸内からの強力なインパクトのもとに達成せられたものであり当該期における両地域間の関係が現れている。今次調査における凹線文土器の割合は壺 23.6%，甕 27.6%であり，1次・2次調査の3割前後に較べるとやや減少してい

表1 遺跡別壺組成

	I類	II類	III類	IV類	V類	VI類	VII類	計	A類	B類	C類	D類
田村3次調査	147点 (73.9)	8点 (4)	5点 (2.5)	22点 (11.1)	11点 (5.5)	3点 (1.5)	3点 (1.5)	199点	103点 (51.8)	3点 (1.5)	47点 (23.6)	46点 (23.1)
田村2次調査	143点 (86.1)	2点 (1.2)	3点 (1.8)	9点 (5.4)	7点 (4.2)	1点 (0.6)	1点 (0.6)	166点	77点 (46.4)		56点 (33.1)	33点 (19.9)
西野々遺跡	65点 (85.5)	1点 (1.3)	3点 (3.9)	3点 (3.9)	1点 (1.3)	2点 (2.6)	1点 (1.3)	76点	54点 (71)	1点 (1.3)	6点 (7.9)	15点 (19.8)
御手洗遺跡	40点 (72)			15点 (27.3)				55点	40点 (72.7)		9点 (16.4)	6点 (10.9)
上ノ村遺跡	14点 (56)			8点 (32)	2点 (8)		1点 (4)	25点	9点 (36)	4点 (16)	5点 (20)	7点 (28)
バーガ森 北斜面遺跡	40点 (71)			15点 (26.8)	1点 (1.8)			56点	4点 (80.4)	1点 (1.8)	5点 (9.1)	5点 (8.9)

(()内は%)

表2 遺跡別甕組成

	I A類	I B類	1 C類	I D類	II類	III類(凹線)	計
田村3次調査	60点 (29.6)	28点 (13.8)	34点 (16.7)		25点 (12.3)	56点 (27.6)	203点
田村2次調査	24点 (20.9)	2点 (1.7)	35点 (30.4)	1点 (0.9)	18点 (15.7)	35点 (30.4)	115点
西野々遺跡	26点 (36.6)	6点 (8.5)	4点 (5.6)		13点 (18.3)	22点 (31)	71点
御手洗遺跡	16点 (37.2)		2点 (4.7)		9点 (20.9)	16点 (37.2)	43点
上ノ村遺跡	38点 (95)					2点 (5)	40点
バーガ森北斜面遺跡	61点 (60)	14点 (14)	14点 (14)		6点 (6)	5点 (5)	100点

(()内は%)

るものの、全体的には今次調査結果においても変革期の動向は各器種ともに見事に投影されている。

変革期の動向を在地土器の視点で見れば、南四国型甕の減少など伝統的な手法や器種組成の後退として見ることができよう。しかし今次調査において伝統的なI A類甕は、甕の中で半数近くを占めている。かつて1次調査の成果をもとに編んだ編年(『弥生土器の様式と編年 四国編』)では、IV期には「〈土佐型〉甕はほとんど見られなくなる」(出原2000)と述べたが、この見解は訂正しなければならない。

凹線文土器の普及は進むが、ベースには伝統的な南四国型甕があり、壺においてもA類は半数を占めている。

表1と表2は当該期の高知平野における主要遺跡の壺と甕について型態別に組成比を出したものである。高知平野では田村遺跡から遠くなるほど凹線文土器の比率が減少するとの指摘があったが、今回数値化することによってより明確となった。西部の仁淀川流域の上ノ村遺跡やバーガ森北斜面遺跡では1割代或はそれ以下で推移している。また壺の中でII・III・VI類など田村遺跡に存在するが西部の遺跡には存在しない型態のあることも明らかとなった。田村遺跡の土器に見られるバリエーションの豊かさは、高知平野における田村遺跡の中心的な存在をそのまま投影しているもの

と考えられる。

田村遺跡はⅣ期に至って集落規模を飛躍的に拡大する。周辺部においてもこれに照応するように集落数が増加し高知平野は弥生時代最大の盛行期を迎える。このような動向の要因についてこれまでは中部瀬戸内からのインパクトに求めていたが、土器に見る限り伝統的な要素をベースに新たな中部瀬戸内からのインパクトが加わったことによって生じた飛躍、発展として捉え直すことができよう。

2. 弥生時代の遺構と田村遺跡の消長

田村遺跡は1980年代前半（1次調査）、1990年代後半（2次調査）の2回の大規模調査が実施されてきた。今次調査は、1・2次調査に較べると小規模ではあるが、遺跡の北部に東西方向に800m程の大きなトレンチ状の調査区を設定したことになり3次調査として位置付けることができよう。

ここでは、検出遺構から遺跡の変遷を辿るが、最初に地形的な概要について少し触れておきたい。西端部のⅠ-1～4区は耕作土下に黄褐色シルト層が形成され中期中葉の遺構検出面となっているが、そこから東、Ⅱ区までの100m程の間は黒褐色粘土の堆積が見られ弥生時代を含めて無遺構地帯となる。その東のⅡ区は標高10mほどの微高地となっており調査区内で最も高い地点で、現在の徳常集落が営まれている。Ⅱ-3区にピークがあり東に向かって緩やかに下降している。田村川を越えたⅢ-1・2区から県道までの230mの間は黄褐色シルト層が広がりⅣ期の遺構が集中分布している。県道を東に越えると30m程で王子川の氾濫原が広がる。

(1)前期の遺構

調査区のほぼ中央部のⅡ-4-1・3区から前期中葉（前期Ⅰc期）に遡る溝1条が検出された。調査区の中では最も高い地点に位置しておりかなり削平を受けていることが考えられる。前期Ⅰc期は田村遺跡の前期の盛行期でその中心は2次調査時のC・E・F区にあるが、前期遺構の北限は確認できていなかった。今回検出した溝からの遺物は僅少であり、溝の性格についても不明であるが、今次調査において前期中葉の遺構の広がりが北に500m以上広がることが明らかになった。

(2)中期中葉(Ⅲ期)の遺構

調査区の西端部（Ⅰ-2・3区）において竪穴建物1軒（ST1）と土坑9基、溝3条が検出された。溝はⅢ-1・2期に属するもので、他の遺構はⅢ-3期に位置付けることができる。田村遺跡は前期末以降、集落規模が縮小し散村的な景観を呈するようになり、その状況はⅢ-1・2期まで続き凹線文が登場し始めるⅢ-3期になると拡大に向かって動き始めるが、ST1と周辺の土坑はその時期に該当する遺構である。しかしこの地点ではⅢ-3期以降は継続しない。再び遺構が登場するのは古墳時代前期を待たなければならない。

(3)中期末(Ⅳ期)の遺構

調査区東よりの田村川から県道までの約230mの範囲に集中して展開している。竪穴建物30軒、掘立柱建物20棟、土坑144基、井戸1基を検出した。竪穴建物はⅣ-5区で最も多く10軒を検出し、次いでその西側のⅢ-1区で6軒と市道の北側の調査区に多く南側には少ない。平面形は円形が殆どで楕円形や隅丸方形が少し見られる。面積はⅣ-5区ST10が50㎡と推定される以外は、10㎡～30㎡未満の小型・中型が7割を占める。構造的な特徴を見れば、床面中央部に円形または楕円形の中央土坑と壁溝を有する。壁溝は全周する例はみられない。主柱穴は4個～7個が認められる。Ⅲ-2区ST2、Ⅳ-5区ST4、Ⅳ-6区ST2は10㎡未満の超小型に属し、Ⅲ-2区ST2は中央

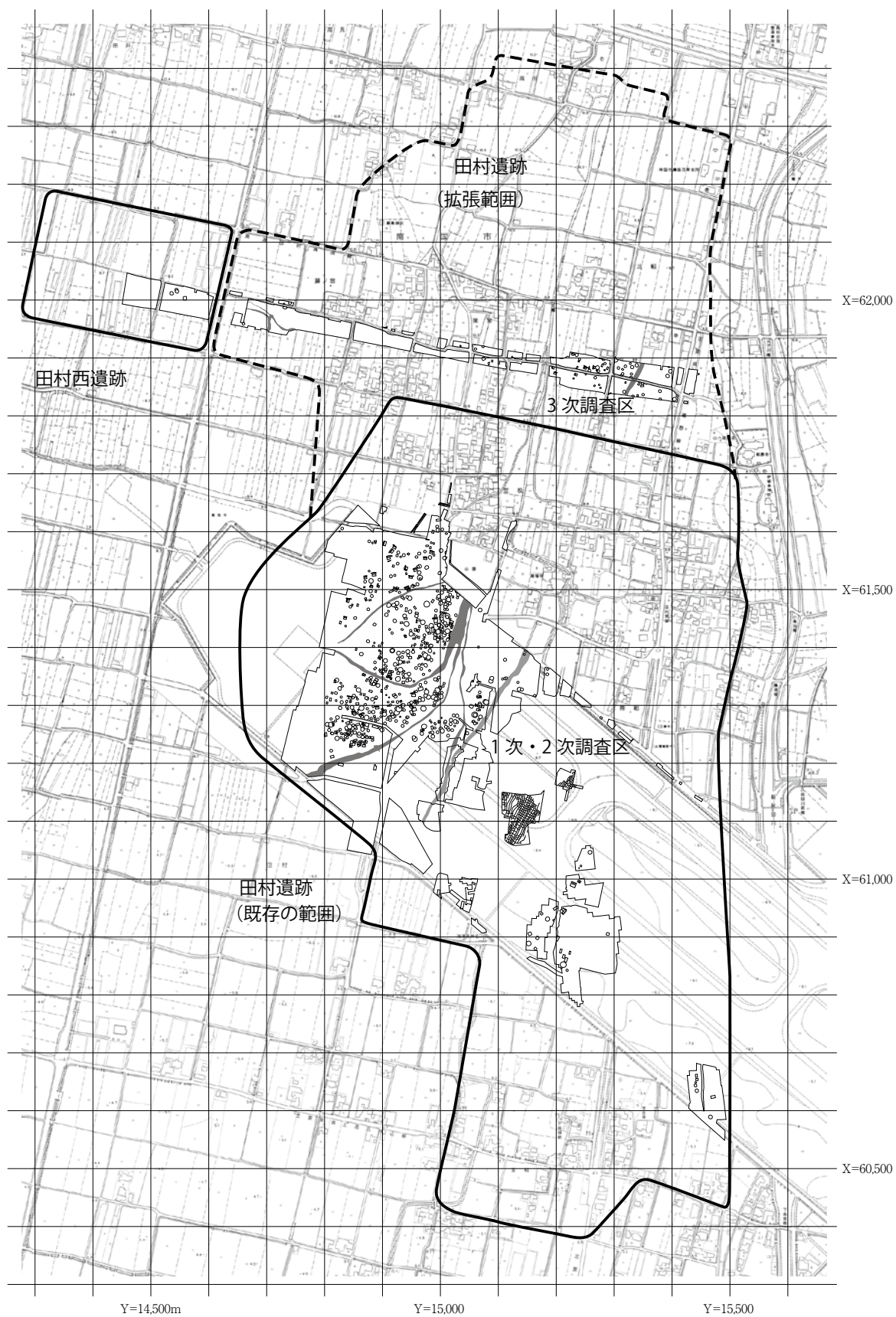


図5 田村遺跡群位置図(S=1/10,000)

土坑の両脇に小ピットを有する前期のいわゆる「松菊里型住居」に類似している。IV-7区ST2も10.17㎡の小型で同様の構造を有する。1・2次調査においてIV期に比定できる竪穴建物は115軒前後を数え、その内8割は円形を呈し、面積は小中型が75%を占めており今次調査結果に類似する。しかしながら集落の中核部と考えられる地点からは40～60㎡の大型の竪穴建物13軒が存在している。

掘立柱建物は20棟を数える。Ⅲ-1区に11棟と最も多く、次いでその南側のⅢ-2区で5棟と西部に多く分布している。遺物が僅少で時期比定の難しいものや柱穴の並びを捉え難いものもある。規模は1間×1間から1間×4間が見られ、面積も4㎡から15㎡前後まで認められる。これらの建物は長軸を南北方向に有するものと東西方向に有するものと2群に大きく分けることができる。また桁行2間以上の建物は長軸に平行する溝状土坑を伴っている。その場合、原則として南北棟には西側に、東西棟には北側に溝状土坑が位置するという規則性が指摘されていたが、今次に置いても同様な状況を示している。

このような掘立柱建物は田村遺跡では2次調査において188棟が検出されている。大きさはさまざまであるが1間×3間が約4割を占める（前田・坂本2006）。西野々遺跡や北高田遺跡でも多く見られる。掘立柱建物は竪穴建物とともに高知平野のIV期集落を構成する主要な遺構として位置付けられる。2次調査では、この種の掘立柱建物が集中的に展開している地区もあったが、今次は竪穴建物と混在している。溝状土坑の中には掘立柱建物とセットにならないものも多いが、それらの中には竪穴建物に付属する存在も考えられる（出原1998）。

土坑の中には性格不明のものも多いが、貯蔵穴と考えられる方形や円形プランの土坑が多く見られ中には多量の土器が出土している。その他、土坑で注目すべきものとしてⅢ-1区で検出したSK61を挙げなければならない。井戸或は水汲み場と考えられる。5～6段の階段が弧状をなして下降し、床は砂礫層を深く掘り込んでおり深さは1.85mを測る。類似例としては2次調査のC3区で検出したSK301～306など10基を挙げることができる。竪穴建物などが展開する集落を切るように南北に走る窪地（C区大溝1）に集中して分布している。長楕円形状の平面プランを呈し階段状の遺構を有する。長さは2m前後～6.4m、幅は総じて階段の降り口部分が狭く、床面部（最深部）が大きく作られ、深さは最も深いものでは2mを測る。時期は前期末～中期初めが多いが1基はⅢ期に属するもの見られる（前田・坂本2006）。また西野々遺跡からは、かなり小振りではあるが同様の構造をもった遺構が4基認められ、全てIV期に属する（廣田2011）。西野々遺跡例は竪穴建物など集落遺構の存在する平坦部に他の遺構と混在して存在しており、田村遺跡2次例とは異なる分布、立地を示している。今次SK61は西野々遺跡例に近い。2次調査例との違いは時期差によるものだろうか。このような階段を伴う楕円形状遺構は高知平野の井戸或は水汲み遺構の特徴として理解することができよう。系譜がどこにあるのか興味深いところである。

(4)後期の遺構

IV-8区(SD2)からIV-1区を南北に貫く溝1条のみである。後期末に属する。

(5)まとめ

今次調査では、調査区西端部にⅢ期の小規模な集落遺構と溝を確認し、IV期に至って東部で竪穴建物30軒、掘立柱建物20棟、貯蔵穴、井戸などからなる集落が営まれる。1・2次調査の集落跡からは北に400m程離れているが同一の集落を形成しているものと考えられる。これまで田村遺跡

の範囲はおおよそ図示したようなラインで86万㎡程の広がりと考えられていた。今次調査によって更に北方に広がる事が明らかとなり、地形などを参考に拡張範囲を求めれば破線のようなラインが描け、新たに42万㎡ほど広がり、合計で126万㎡を想定することができる。1・2次調査で確認した弥生時代の竪穴建物は465軒で、今次調査分を加えると495軒となる。

これまで田村遺跡の最盛期は、中期末から後期初頭と考えられており、その中心地は1・2次調査地点及びその周辺部と考えられていた。今次調査の東部で確認された集落関連遺構は悉くIV期に属し、後期に属するものは溝1条であった。今次調査結果から見れば、IV期に集落が北に向かって広がり最大規模に達することが明らかとなった。V期に入るとその規模が縮小し中心部に向かって集約される可能性を指摘できよう。ピーク時のIV期には、前期初頭（I a期）の集落が展開した遺跡南部に遺構が見られないことから、その部分の面積を引き算すると100万㎡前後の集落規模を想定することができる。中心部では、溝で区画された26000㎡程の居住区が4個あるいは5個まで確認され、竪穴建物群や掘立柱建物群が展開している（前田2006・出原2006）。未調査域の調査が進めばさらに増加するであろう。

田村遺跡はIV期に至ってピークを迎え列島屈指の大規模集落となる。太平洋沿岸地域においてかかる規模を有する遺跡を求めれば愛知県の朝日遺跡を挙げられる（原田2013）。朝日遺跡は墓域がかなりの面積を占めており居住域の範囲では田村遺跡が大きい可能性もある。両者の盛行期は微妙に違ってはいるが、「凹線文土器文化」が大きな契機となって集落に変化をもたらし、後期になると集落規模が縮小するなど共通点も多く見られる。直線距離で350kmを隔てた列島の東海と南海にこのような巨大集落が出現した背景には、東西あるいは南北の交流の要衝を占めていたことと共に「統合」に向かって胎動を始めた弥生社会の変化に求められよう。わけても田村遺跡の出現と巨大集落へと成長を遂げる歴史的必然性の追究は、先史における高知平野の果たした役割を明らかにする上で必須である。

引用文献

- 岡本健児1989年「四国の弥生土器の編年と年代」『高地性集落と倭国大乱』雄山閣
- 坂本憲昭2006年「弥生時代中後期の土器群」『田村遺跡群Ⅱ』第9分冊高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 出原恵三1990年「〈土佐型〉甕の提唱とその意義」『遺跡』遺跡刊行会
- 出原恵三1998年「下ノ坪遺跡の弥生後期土器と集落」『下ノ坪遺跡Ⅱ』高知県野市町教育委員会
- 出原恵三2000年「土佐地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』木耳社
- 出原恵三2006年「田村遺跡弥生時代中期から後期の集落変遷」『日本考古学協会2006年度愛媛大会 研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会
- 出原恵三2009年「南国土佐から問う弥生時代像 田村遺跡」新泉社
- 原田幹2013年『東西弥生文化の結節点 朝日遺跡』新泉社
- 廣田佳久2011年『西野々遺跡Ⅲ』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 前田光雄2006年「田村遺跡群弥生時代中後期の集落」『田村遺跡群Ⅱ』第9分冊高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 前田光雄・坂本裕一2006年「弥生時代の遺構」前掲『田村遺跡群Ⅱ』

2. 古代を中心とした田村遺跡群北部の様相 —古墳時代末から中世前期—

はじめに

今次調査成果の主要な時期の1つに古代～中世があり、古墳時代後期から連続的に辿ることができる点において当地域で希少な事例である。ここでは出土土器の位置付けと、それに基づいた遺構群の消長や特徴について概要を記す。

1. 周辺地域の基準資料

土佐における古墳時代末～古代～中世の土器編年については、「期」を想定した案が発表されている(池澤1998～2004)。ここではそれに準拠しながら概要を確認し、今次出土遺物および遺構を位置付けるための基準とする。

下ノ坪遺跡は今次調査区より物部川対岸のやや川上側に位置し、弥生以降各時代の集落や建物群跡が検出されている。古墳後期の竪穴建物跡から図1のような煮炊具が須恵器杯と共に出土しており、Ⅲ-3区の該期遺構群の指標となる。口縁部にカエリの付く蓋およびその時期の資料は本県では充実していないが、今次調査では若干数が出土している。共伴遺物が少ないため位置付けが難しいが、図示した他遺跡の資料が参考となる。これら古墳時代および飛鳥期の型式を有する時期を0期と称しておく。須恵器杯が例示したような口径と口縁部のカエリ形状を持つものを主体とする段階を0-1期、小径でカエリの退化が著しい杯H、あるいはそれと杯Gが共存する段階を0-2期、杯Gと最古相の杯Bが共存する段階を0-3期とする。但し、現在の資料状況では便宜上の設定である。

I期は「当地における律令的土器様相」(池澤1998)を示す時期で、下ノ坪遺跡資料群のうち最古段階のものをI-2期としている。今回は図示していないが、I-3～4期頃に該当する資料に平城宮Ⅲ～Ⅳ期頃の畿内系搬入品を含む例があり、年代観の指標となる。下ノ坪遺跡SK30は図示可能な遺物が84点出土した長方形の土坑で、重要な基準資料の1つである。I-6期の下ノ坪遺跡SD40資料は、土師器碗の形態や搬入土師器より長岡京期に比定される。I-7期は次期との過渡的様相を呈する。I-6～7期に下ノ坪遺跡では搬入品の土師器や黒色土器の共伴例があり、II期では黒色土器や緑釉陶器が土佐全域的に出土するようになる。

当地域としての律令的土器様式の崩壊という画期をもってII期とする。現象的には食膳具から須恵器が急減、消滅に向かい、土師器で構成されるようになるが、その土師器はI期のミガキ手法や口縁部の沈線といった属性が抜け落ちたものである。土師器甕も、形態と調整に変化を指摘できる。II-2期には新たな杯Dが確立する。皿の口径が順次縮小し始める。律令期以来の系譜にある杯Aも縮小していく。小籠遺跡例のような河内方面産の煮炊具甕が、該期以降の諸遺跡で少数だが散見される。

II期の開始は、遺跡の消長においても土佐全域的な画期で、繁栄した下ノ坪遺跡も急速に衰退する。但し、同遺跡に近接する河岸段丘上の北地遺跡でI期の建物跡及び遺物に加えて後続期の遺物・遺構が検出されており、一体的に動向を考える必要がある。

III期はいわゆる深碗の出現が指標となる。土佐では大きくは2種で展開し、碗Aは平高台でミガキを施さない。碗Cは貼付輪高台で、古相のものは外面に回転ケズリ、内外面にミガキを施す。いず

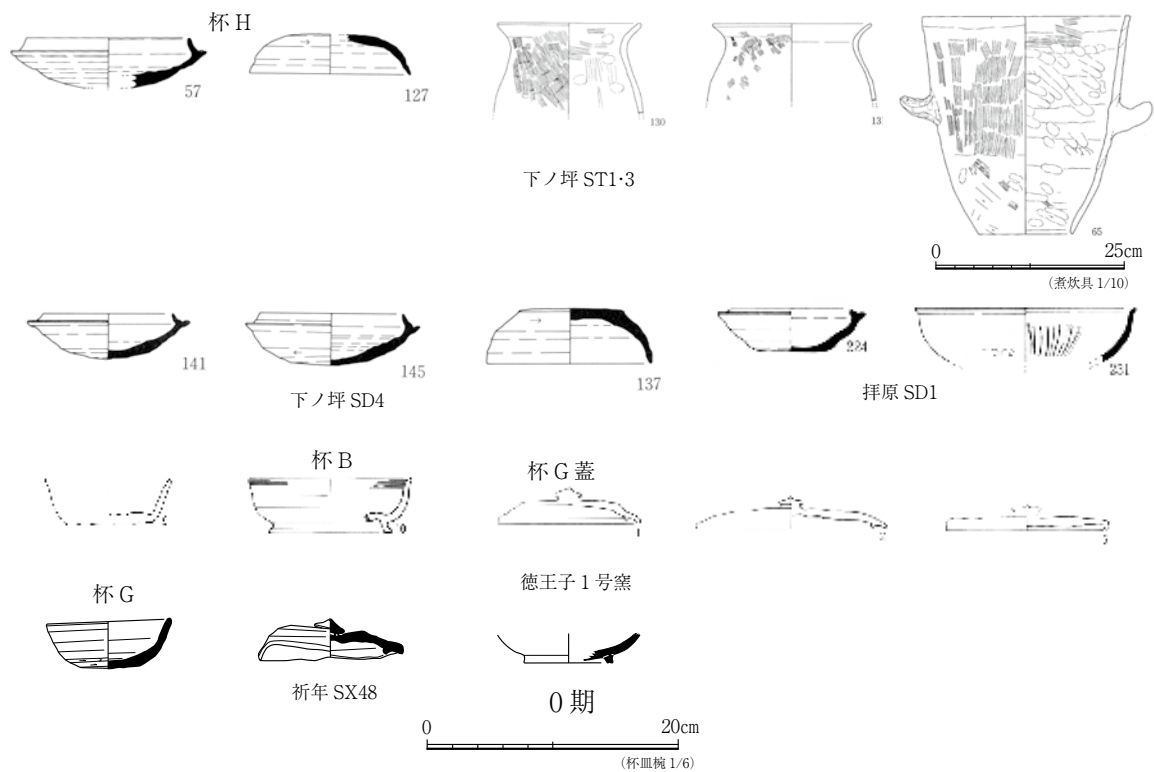


図6 周辺遺跡遺物資料 0期

れにも土師質のものと還元雰囲気焼成のものがある。土佐ではみられなかった底部糸切りも、これらの椀にいち早く現出する。時期が下るとともに、椀Aは高台や丸みのある深い形態が退化し、Ⅲ-3期末には杯形化したものがある。同じく椀Cは既述した調整が簡略化し、高台は退化、器高は低下する。なお、椀の中に、基本的に平高台だが内面にコテやハケを施す椀Bが稀に存在する。Ⅲ-2期には杯Eが出現する。ひびのきサウジ遺跡SE1例のような羽釜がⅢ期より普及する。皿の口径は順当に縮小を続ける。今次Ⅱ-3-1区SK13ではⅢ-2期古相の椀Aと、いわゆる楠葉型黒色土器椀が供伴している。後者は残存度が比較的良好で、在地土器と畿内産土器の並行関係及び年代観が知られる希少な資料である。

Ⅳ期への画期は、在地産土器椀の消滅と和泉型瓦器椀の急増をみる。貿易陶磁器も先期とは次元の異なる急増を示し、土器・陶磁器流通の大きな画期としても認識される。皿、杯Eの口径も縮小している。香長平野及びその周辺では、いわゆる手捏ね成形とみられる「皿」が加わる。

実年代あるいは畿内との並行関係については、0～Ⅰ期は既述のとおりで、Ⅰ期がほぼ平城期～平安初期に該当するとみられる。Ⅰ期末以降は、Ⅰ-6、7期の下ノ坪遺跡資料に各々平安Ⅰ期中、平安Ⅰ期新頃とみられる搬入品がある。Ⅲ-1期は灰釉陶器椀の伴出例、Ⅳ-1期は急増している瓦器椀を指標にできる。

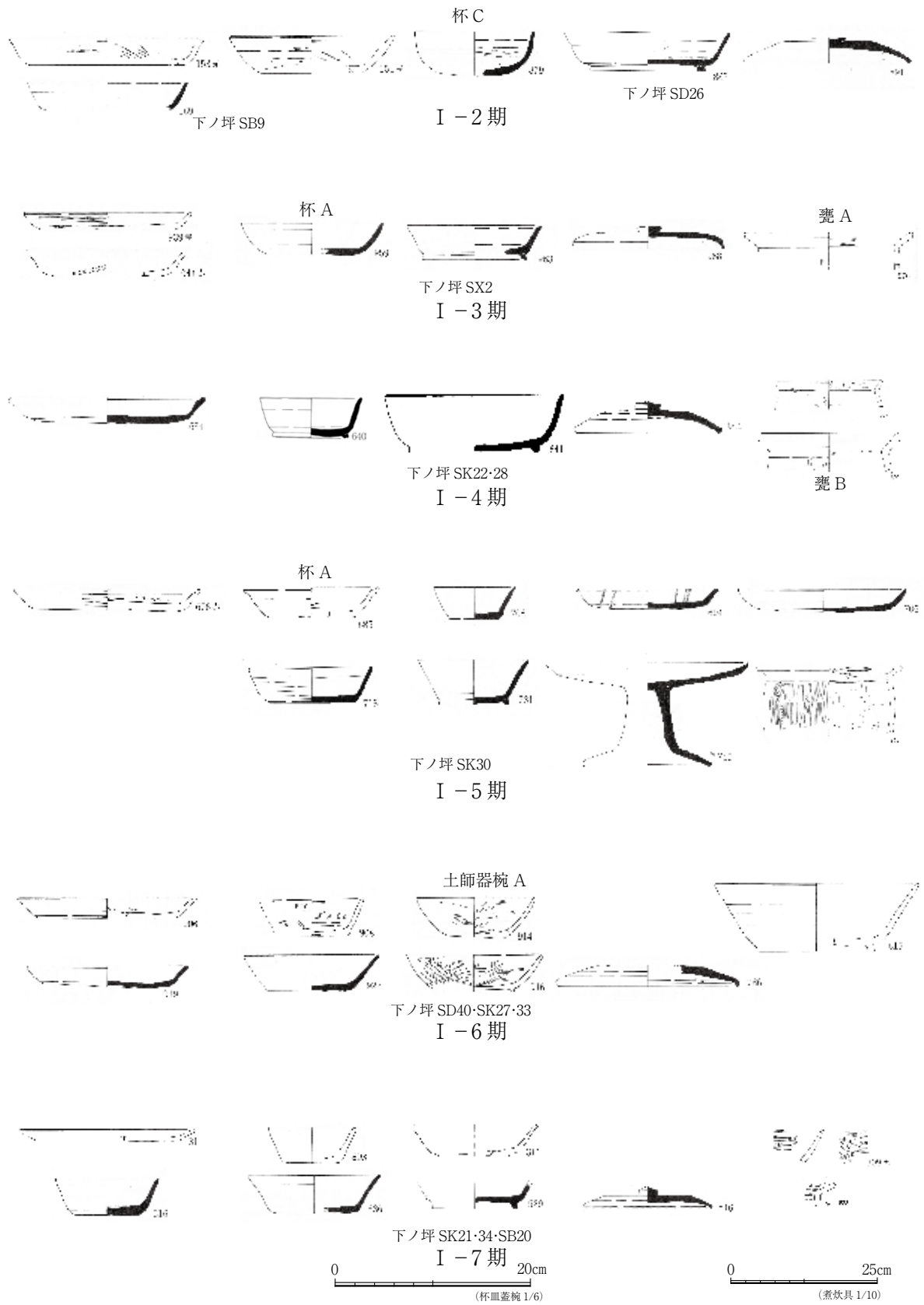


図7 周辺遺跡遺物資料 I期

2. 今次出土遺物について

(1) 概要

既述した資料群を比較資料として、今次出土遺物のうち、時期を比定できる主な遺物（群）が表1に現れている。最も遡る遺物群は古墳時代後期～末葉で、Ⅲ区西端部の溝跡や竪穴建物が該当する。古代初期にかけての遺物も同区やⅡ-4-1区で散見され、遺構からも一定出土している点が留意される。編年Ⅰ期に入ると、Ⅲ区西端部で掘立柱建物が構築されており、Ⅰ期前半～中頃にはⅣ区の流路跡やピットからも遺物が出土ようになる。

Ⅰ期後半以降はⅡ-4-1区やⅢ区西部では遺構・遺物が途絶へ向かい、Ⅳ区へ移る。Ⅳ区はⅣ期まで継続する。ピットに皿等を埋納したとみられる事例が、Ⅳ区でⅢ期を中心に散見される。

古代後期に属するⅡ～Ⅲ期について当遺跡群の過去の調査も含めてみた場合、該期の土器の出土自体は既往調査の各所で例があるが、遺構出土分をはじめとする量は今次成果が最も充実しているとみられる。また、今次のⅣ区及びⅡ区東部～Ⅲ区西端のような、畿内産黒色土器や施釉陶器が在地産土器とともに一定数出土しているような状況は他地区の調査ではみられず、今次調査区の特性として把握しなければならない。

Ⅲ期では、Ⅱ区を東西に縦断する溝跡出土遺物がある（図Ⅱ-45～50）。そのうちの土師質土器皿の口径はⅡ-3期からⅢ-1・2期に該当する。青磁図Ⅱ-47(145)は、籠状工具によるとみられる「押圧縦線文」がみられ、手法は第三章遺物観察表のごとく丁寧である。越州窯系青磁の碗とみられ（太宰府市教委2000）、現在確認できる県下唯一の越州窯系青磁出土例である。

(2) Ⅳ区SR1出土土器について

古代前期の土器が多量に出土したⅣ-2・3区SR1について既述の基準資料と比較すると、図Ⅳ-62(61・65)、図Ⅳ-76(40)、図Ⅳ-78(74～78)、図Ⅳ-77(54・59)、図Ⅳ-79(82・84・86・89・95・96・99・101・106)はⅠ期前半、図Ⅳ-61(39・54)、図Ⅳ-66(120・121・124・130～133)、図Ⅳ-65(99・102)、図Ⅳ-76(36・39)、図Ⅳ-77(49・50・53・56・60)はⅠ-4期頃以前に比定できる。Ⅳ-3区での上層出土分やⅣ-2区分には後続期の土器群を伴うが、Ⅳ-3区での下層出土群にはⅠ-5期以降に比定すべきものが存在せず、Ⅰ期前半～Ⅰ-4期に比定される資料とみられる。なお、これらの土器には概して顕著な摩耗等は認められず、廃棄地点から大きく移動していないものと考えられる。以下、上にあげた遺物群及びそれらと同時期とみられる遺物群、すなわち当SR1の下層及び古相の土器群について検討する。

器種は杯類を中心とした食膳具が多い他、高杯や長頸壺を含む。杯Bの数が杯Aを凌駕し、蓋も相当数存在する点は、上記した時期の特徴に合致する。須恵器が多いが、土師器の杯身や蓋、高杯、盤等もあり、手法では赤彩したものや暗文、ミガキを施すもの、高杯の脚透かしがある。法量分化は、下ノ坪遺跡出土土器群のような多種の分化は明確には指摘できない。

上より、Ⅳ区東部でⅠ期前半～Ⅰ-4期に、一定の量と器種からなる土器食膳具が存在したことが認められる。また、暗文や赤彩、透かし付き高杯や盤の存在、同形の食器に須恵器と土師器が存在する点は、「律令的」・「官衙的」な要素と認識される。

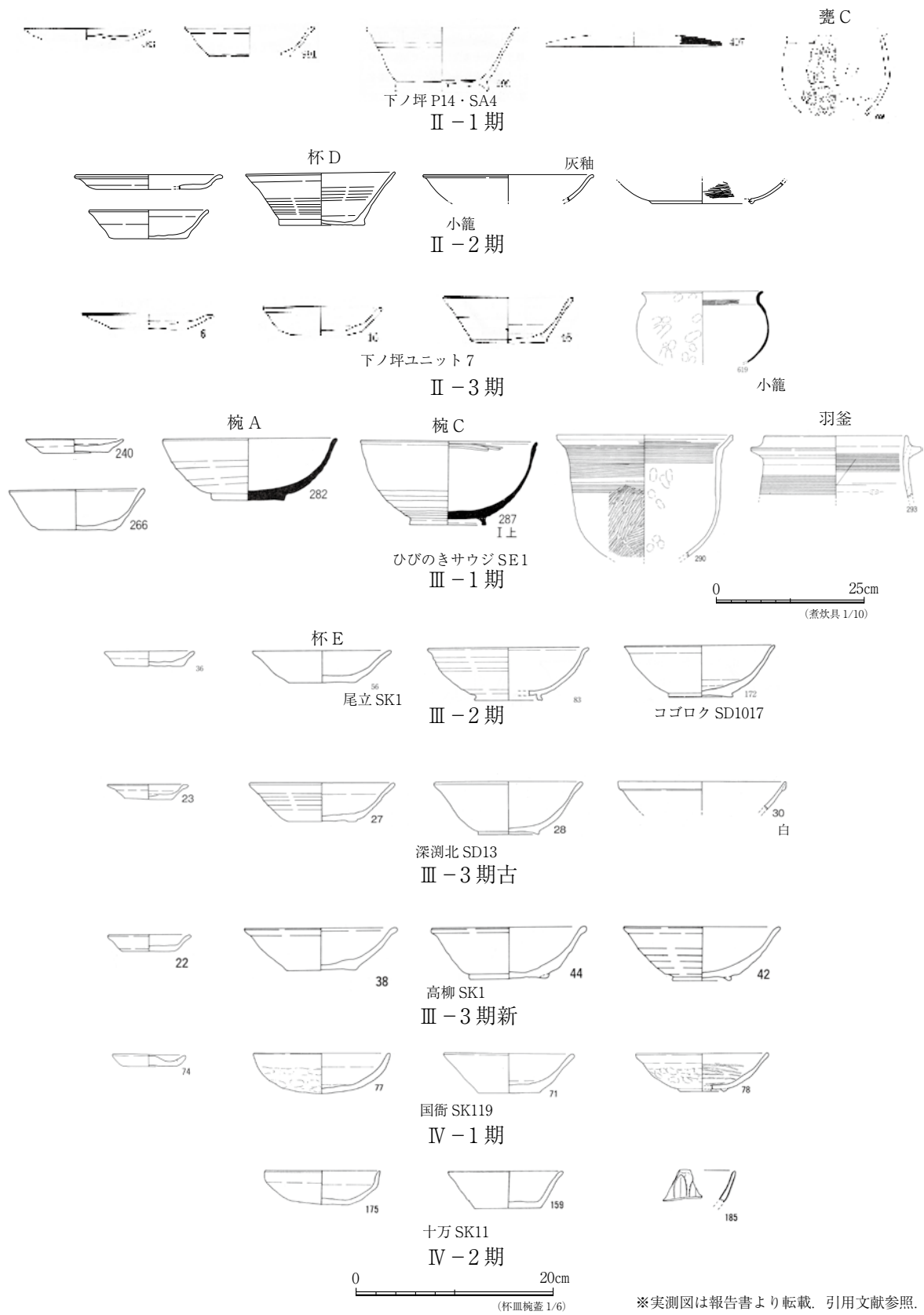


図8 周辺遺跡遺物資料 II～IV期

表3 検出遺構の方位と出土遺物・時期

区	遺構	器種・形式	時期	搬入品他	方位
Ⅲ-3-3	SD1	杯 H	0-1期以前		-33.8
Ⅲ-4W	SD6	土甕・甌	0期		-33.8
Ⅲ-3-1・2	ST3	杯 H	0-1~2期		-47
Ⅲ-3-1	ST4	壺/竈	0期		-24
Ⅲ-3-3	ST1	杯 H,G 蓋	0-2期		4~7
Ⅲ-4E	波板状遺構 6	杯 H	0-1期		-
Ⅲ-4W	ST1	土甕	0期		4.4
Ⅲ-4W	ST2	杯 H/竈	0期		-8.6
Ⅲ-4W	ST3	杯 H/竈	0期		-24.2
Ⅱ-4-1	P286 (SB)	高杯	0期		-8.4
Ⅱ-4-1	SB5	杯 H 他	0期		-4.0
Ⅲ-4E	SD4	杯 B' 又は G 蓋	0-2~3期		10.5
Ⅲ-4E	包含層Ⅲ層	杯 G (か) 蓋・B 蓋 (図2・17) 他	0-3~I期前半他		-
Ⅲ-3-3	ST2	須杯 B	I期初頭頃		-
Ⅲ-3-3	SB3	須杯 B	I-3頃~4期		2
Ⅲ-3-3	SB10	須杯・蓋, 土甕 B	I-3頃~4期		0.6
Ⅲ-3-3	SB1	土杯 B	I期		3.5
Ⅲ-4W	P126	須杯 B	I-2~4期		-
Ⅱ-4-1	SB2	須杯	I期前半頃		2.0
Ⅱ-4-1	SB3	須蓋・杯 B	I期前半~中頃		0
Ⅳ-4	SK53 (SB9)	須杯 B, 土皿 B・高杯・土甕 B	I-3~4期		18~19
Ⅳ-4	P18	須杯 B	I期前半		-
Ⅳ-3	SR1 下層	諸器種・器形	I期前半~中頃		-
Ⅳ-1	SD2	須杯 B, 土甕 A	I期中頃~後半		7.0
Ⅳ-4	SB6	土杯 B・高杯・蓋, 赤, 須他	I-5期頃		18.3
Ⅱ-4-1	SB4	甕 B, 杯	I期		5.0
Ⅲ-3-3	SB7	土杯 A	I-4~5期頃		6.5
Ⅲ-3-3	SB8	須杯・蓋, 土皿, 他	I-6期頃		8
Ⅲ-3-3	SB6	須蓋	I-6~7期頃		10.4
Ⅲ-4W	SB1	須皿・杯・蓋, 土杯, 他	I期後半		-2
Ⅳ-4	SK19 (SB7)	土皿 A (図310)・盤	I-7期頃		15
Ⅳ-4	SK33 (SB12)	須皿・杯 B, 土皿・杯・椀 A	I-7期		-
Ⅳ-4	SB15	土杯等	I期後半~末		10
Ⅳ-4	P553 (SB4)	土皿・杯	I-7~II期		15
Ⅳ-4	P514 (SB4・10分離不可)	須杯 A・蓋	I-7~II-1期頃	内黒椀 (図305)	9~15
Ⅳ-4	P270 (SB13)	土皿・杯 D	II期	内黒 椀か杯 (図333・334)	16
Ⅳ-8	SB21-1 (P102)	土杯 B	I-6~II-1期		13.7
Ⅱ	東西縦断溝	椀, 杯 A 他	最新はⅢ-1~2期	畿内産両黒椀	-
Ⅱ-3-1	SK13	須椀 A・土椀 A	椀Ⅲ-2期古相	楠葉型黒色 B 類椀	9
Ⅱ-3-6	SK14	土皿・椀 A	皿Ⅲ-2~3, 椀Ⅲ-2期		-
Ⅳ-3	SX1	土椀 C・杯 E	Ⅲ-3新		14.6
Ⅳ-4	SK2	土皿・杯 E・椀 A	Ⅲ-3期	瓦器皿	-
Ⅳ-4	SK3	土皿・杯 E・F・椀 A	Ⅲ-3~Ⅳ-1期	瓦器椀和泉型Ⅲ-1~2	-2.2
Ⅳ-4・8	P583 (SB27)	土皿	Ⅲ-3期	瓦器椀和泉型Ⅲ-1頃か, 楠葉型 (か) 瓦器椀	13
Ⅳ-8	P11	土皿・椀 A (末期)	Ⅲ-3期		-
Ⅳ-8	P14	須椀 C	Ⅲ期後半		-
Ⅳ-4	P183 (SB17)	瓦器椀, 土杯	-	瓦器 和泉型Ⅲ-1頃	-
Ⅳ-8	P51 (SB20)	土皿完形埋納	Ⅳ-1期頃		11.3
Ⅳ-4	SB25	土皿・杯 E	Ⅳ-1期		12
Ⅳ-4	P181 (SB16)	土皿・杯 E	Ⅳ-2期	P485 より瓦器椀	-2~2
Ⅳ-4	SB26	土杯	古末~中前		14

遺構名の () は属する掘立柱建物跡で、方位は建物の主軸。

時期は、本文及び引用文献 (池澤 1998 ~ 2004) 参照。

時期は、特に比定遺物の僅少な遺構では、遺構の正確な所属時期ではない可能性がある。

方位欄は「°」。建物跡を構成するものはその建物の方位。

方位角その他の表記法については P130 凡例参照。

ST の「竈」は造付けカマド。

「須」は須恵器, 「土」は土師器或いは土師質土器で、例えば「須皿・杯」は須恵器皿と杯。

0期は付記しないものは須恵器。

「黒」は黒色土器で、特記しない限り内黒で搬入品。

瓦器椀は特記しない限り和泉型。

遺物は時期比定の指標となるものを主に表示。

3. 遺物と遺構の概要

既述した遺物様相と遺構を併せて概要を述べる。

当遺跡群で、古墳時代後期～古代初頭の遺物が時期的に連続して、遺構に伴うものを含めて検出されたのは今度が初めてである。表1および第Ⅲ章のごとく竪穴建物群や直線的な溝跡が検出され、集落の様相を一定知ることができる。

時期が推移すると、遺構の盛行する地区が変遷していることがわかった。また、主な建物形態が、0期には竪穴建物であったものが、Ⅰ期に入ると掘立柱建物となる。

Ⅲ-3-6及びⅢ-4E区で検出した畦や浅い溝状遺構群は、遺構の性格からも時期比定が難しいが、当該区の遺物量が総じて少ない中で0期～Ⅰ期前半のものが散見されることも併せて考慮され、0期後半～Ⅰ期初頭を中心とする0～Ⅰ期前半の間に位置付けられる可能性が高い。なお、第Ⅳ章表1のⅢ-4E区試料番号1は水田基盤層(畦はこれによって形成される)、それを被覆する砂層はその直上埋土(南壁ではⅣ層)からの試料で、注目される分析結果が示されている。

Ⅰ期前半～Ⅰ-4期にはⅣ区東部のSR1等から出土した食膳具群があり、律令期の地方官衙的な様相が一定みられた。該期の建物群を明確かつ十分に復元できないが、近隣のピットから共通する遺物が図Ⅳ-110～128のごとく出土しており、それらが使用された施設の存在がうかがえる。

Ⅰ期後半以降はⅡ-4-1区では遺構が途絶、Ⅲ区西部では減少し、後者もその後途絶する。先行期より大きな掘立柱建物が現れ、Ⅳ-4区やⅢ-4W区に桁行9mを超えるものがある。Ⅳ区東部の掘立柱建物跡には、既述のⅡ区東・Ⅲ区西部で展開したⅠ期前半頃のものより大きなものが多い。Ⅳ-4区SB4・5は同じ場所での建替えとみられ、さらにSB10も重なっている。SB4は今後の掘立柱建物跡中最大級となる可能性がある。遺物では、円面硯が同SB4・5の柱穴SK61およびⅣ-2区SR1から出土しており、遺構と遺物の状況が符合している。Ⅳ区はⅣ期まで継続する。

Ⅱ区東西縦断溝では、既述のごとくⅡ-3期からⅢ-1・2期の土器群と越州窯系青磁碗等が出土した。なお、同溝跡のⅡ-3-3区部分では風字硯(146)が出土している。

中世前期はⅣ区で建物跡等からの出土遺物がみられる他、Ⅱ区でも若干出土遺物がある。

4. 遺構の配置

(1) 遺構の軸方位

Ⅲ-3・Ⅲ-4W区のSD1・6は調査区を貫走する同一の溝跡で、古墳時代後期以前の遺物のみが出土している。幅63～98cm、深さ36～54cmで断面は方形に近い逆台形、埋土は黒褐色粘土質シルトである。両区の竪穴建物にも、遺物と竈跡の状況から編年0期に比定されるものがある。これらの遺構の主軸方位は後述する後続期の方位とは大きく異なっており、西振20数～40数°を当地点における当該期の遺構方位の基調と認識できる。Ⅲ-3区ST4とⅢ-4W区ST3は、溝を挟んで等距離に位置している可能性があり、側辺延長線も一致する。なお、以下方位の表記は、特記しない限り正方位軸から時計回り方向への角度とする。

0期～Ⅰ-4期頃までは、同区～Ⅱ区東端部(Ⅱ-4-1区)で正方位より東西数度の方位が主流となる。Ⅲ-3-6・Ⅲ-4E区で検出された畦や溝跡群の軸方位にも、Ⅲ-3-6・Ⅲ-4E区遺構計測表1のごとく、これら0期～Ⅰ-4期建物群との同調が看取される。出土遺物も並行期頃として齟齬はないが、0期の編年整備を進めて詳細な時期区分を行うことが望まれる。

I - 5期以降は中心がIV区に移り、II期初めまで東へ約10～15°の軸方位が観測される。III - 3区でI - 6期に比定されるSB8が示す東振8°も、先行期の同区でみられなかった方位である。これに隣接するSB5, 6は、良好な出土遺物に欠けるが、各々8.9°, 10.4°で、先行期の基調方位と比較すれば3棟の同調を指摘できる。

(2)建物群の単位

掘立柱建物を中心に配置や建物群単位について検討する。

I - 2～4期では、II - 4 - 1およびIII - 3区で一定の方位の同調が看取された。建物方位と位置関係からみて、最小で近隣3棟程度に関連が想定されるが、調査区外にも存在する可能性がある。II - 4 - 1区西半では、3間×3又は4間、4.6m×6又は8mと該期のII - 4 - 1・III - 3区で最大の掘立柱建物跡とみられる遺構があり、古墳後期の須恵器高杯を掲函している。同小区は0期～I期前半の掘立柱建物が集中する区域とみなされ、建物の方位と配置には一定の企図がうかがえる。

III - 3区のI - 6期以降の建物群には既述および表1のような方位が想定され、I - 4期以前とは異なった方位での同調が看取される。以上のI - 2～4期、I - 6期以降の両期で、方位の同調や一部での柱筋の一致を指摘できるが、広範囲且つ厳密な規制、例えば基盤目状の建物配置企画等は指摘できない。

東部のIV区で複数の建物の軸方位を把握できる時期はI - 5期頃以降となる。IV - 4区SB4・5とSB6・7、SB2と3が各々の方位でL字やコの字型に配置されている可能性があるが、該地点は遺構の切合いがあること、柱穴の出土遺物にもI期後半からII期の中での幅があることにより、建物群各々の詳細な時期や先後関係を明らかにできない。また、それらセット関係の可能性を持つ建物間でも、方位や配置企画の厳密さにはやや欠けているとみられる。

IV - 4～8区では、比較的大きな方形柱穴を持つSB1の梁間筋がSB4・5の桁筋延長線との一致を示すほか、南北溝SD2は時期不明だがSB1の中軸を通過して直伸する。互いに近隣するSB20と21は方位と側線が一致している。またSB27と22、およびSB27とSB1・20・SA2との位置関係をみれば、SB1・20・SA2の配置の根拠となった規制が、III期まで影響力を持っていた可能性がある。

(3)遺構配置企画小結

以上から、竪穴建物群の段階では、集落を貫走する溝跡の直近では遺構の方位等にそれとの関連が看取されるが、それより離ればその関連性もみられず、一定域に及ぶ規制はなかった可能性が高い。

古代初期頃にあたる0期後半～I期初葉には、遺構方位が0期古段階のそれから大きく変化し、正方位から左右数度以内が主流となる。同時に建物の構造も竪穴から掘立柱に転換していく。古墳時代の状況からの脱却と評価できる。また古代初～前期頃には、集落東側の旧来よりやや低地であった区域に水田が営まれ、その区画の方位は建物群の方位を規制したものと関連していた可能性がある。このような成果は、本遺跡群に関する新たな知見で、展開する遺構の属性の推移を観察できる点で周辺地域でも希有な事例である。

平城京期後葉にあたるI - 5期頃から平安初期は、物部川本流側のIV区東部に中心が移り、建物の大型化がみられ、L字型などの建物配置が想定される。またそれらの軸方位は、当地域にみられる条

里型地割に近付いたものになっている。

Ⅳ区の遺構・遺物は古代後期にも大きな断絶はなく、中世まで継続する。

おわりに

以上のうち、当遺跡群での広範囲にわたる既往の調査でみられなかった様相からは、今次調査地区の特性を読み取らなければならない。古代前期から中世前期まで継続するⅣ区は遺跡東縁にあたり、試掘調査によると以東では遺構が検出されず、汎濫原とみられる。即ちⅣ区は物部川に直近あるいは面していたものとみられる。当遺跡群の過去の調査を含む諸区の中でも、Ⅰ期前葉より活動し、平安期にあたるⅡ期以降は、遺物面では各種搬入品を交えながら中世前期まで建物群が営まれる今次Ⅳ区の存立背景が留意される。

以上のような今次調査で得られた知見は、物部川対岸やや上手にある下ノ坪遺跡など周辺の遺跡を含めた古代の様相把握に欠かせないものとなるだけでなく、後には守護所が当地区に置かれることになる背景を考える材料ともなるだろう。広範囲に行われた当遺跡の調査成果を活用し、既述したように連綿と続く当遺跡群の特性について、物部川下流域の動向の中で考えていく必要がある。

引用・参考文献

池澤俊幸1998「南四国における古代前期の土器様相－下ノ坪遺跡の成果を中心として－」『下ノ坪遺跡Ⅱ』

野市町教育委員会

同2000「土佐からみた平安時代の土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ 日本中世土器研究会

同2001「土佐の7世紀の土器」『古代土器研究3』 古代の土器研究会

同2004「四国における古代後期から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ 日本中世土器研究会

西弘海1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会

廣田典夫1991『土佐の須恵器』

香我美町教育委員会1988『十万遺跡発掘調査報告書』

香我美町教育委員会1993『拝原遺跡』

高知県教育委員会1986『田村遺跡群』第7分冊・第10分冊他

高知県教育委員会1991『土佐国衙跡発掘調査報告書第11集』

高知県文化財団埋蔵文化財センター2004～2006『田村遺跡群Ⅱ』第1～9分冊

高知県文化財団埋蔵文化財センター1995『尾立遺跡』

高知県文化財団埋蔵文化財センター1996『小籠遺跡Ⅱ』

高知県文化財団埋蔵文化財センター2000『奥谷南遺跡Ⅱ』

高知県文化財団埋蔵文化財センター2012『祈年遺跡Ⅳ』

香南市文化財センター2011『北地遺跡』

太宰府市教育委員会2000『太宰府条坊跡Ⅴ』

土佐山田町教育委員会1990『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』

土佐山田町教育委員会1991『高柳遺跡・高柳土居城跡発掘調査報告書』

奈半利町教育委員会2003『コゴロク遺跡群』

野市町教育委員会1996『深淵北遺跡』

野市町教育委員会1997『下ノ坪遺跡Ⅰ』

野市町教育委員会1998『下ノ坪遺跡Ⅱ』

野市町教育委員会2000『下ノ坪遺跡Ⅲ』

3. 弥生時代中期(Ⅲ期)の遺構と遺物

1. はじめに

田村遺跡群はⅣ期に竪穴建物跡・掘立柱建物跡などの遺構数は激増し、数量のみならず質的な転換がはかれる(出原2006)。本小文で取り上げるⅢ期はその前夜である。田村遺跡群全体でもⅣ期に比べると遺構・遺物量は少なく、Ⅲ期は散村的な状況が想定されている(出原2015)。今次調査区では、Ⅰ区(西部)とⅢ-1区・Ⅲ-2区・Ⅳ-1区(東部)でⅢ期の遺構・遺物を検出している。

2. 検出遺構について

Ⅰ区では竪穴建物跡とその周辺に土坑等が散在する状況がみてとれる。遺構密度・遺物の出土量から調査区外にひろく展開しているとは考えにくい。竪穴建物跡(Ⅰ-2-0・1区_ST1), 土坑(Ⅰ-2-0・1区_SK1~4・7~10・12・14), 溝跡(Ⅰ-2-0・1区_SD7~9, Ⅰ-2-2区_SD1, Ⅰ-2-3区_SD1, Ⅰ-3区_SD1, Ⅰ-4-2区_SD3・10・16), ピット(P31), 自然流路跡(Ⅰ-2-0・1区_SR1, Ⅰ-2-2区_SR1, Ⅰ-2-3区_SR1, Ⅰ-3区_SR1, Ⅰ-4-1区_SR1)を検出した。

竪穴建物跡, 土坑はⅠ区南西部で検出していることから集落は南へ展開していると推測される。竪穴建物の周辺には不整形の土坑が数基分布している。竪穴建物(Ⅰ-2-0・1区_ST1)に近接する土坑(Ⅰ-2-0・1区_SK1~3)とやや離れている土坑(Ⅰ-2-0・1区_SK9・10)があり、後者は別の竪穴建物に付随する可能性がある。

自然流路・溝跡は等高線等の微地形に沿って流れるものと等高線と交差するように流れるものに分けることができ、概ね北西(北)方向から南東(南)方向へ流れていると考えられる。田村西遺跡ではこれらの流路跡の延長を検出していないことから田村西遺跡との間を北方向へのびると推測される。自然流路跡(Ⅰ-2-0・1区_SR1, Ⅰ-2-2区_SR1, Ⅰ-2-3区_SR1, Ⅰ-3区_SR1・2)は微地形から推測して西から流れⅠ-3区でほぼ直角に曲がり南流する。竪穴建物跡や土坑等の遺構はこの流路の南側に形成されて居住域内への水の流入を防止する目的も、兼ね備えていた可能性もある。溝跡(Ⅰ-2-0・1区_SD7, Ⅰ-2-2区_SD1, Ⅰ-2-3区_SD1, Ⅰ-3区_SD1, Ⅰ-4-1区_SR1, Ⅰ-4-2区_SD16)は、等高線に沿って北西方向から南西方向へ緩やかに蛇行する。自然流路跡(Ⅰ-4-2区_SD3・10)はⅠ-4-2区を北方向から南方向に緩やかに蛇行しながら流れる。自然流路跡あるいは溝跡は出土遺物から弥生時代中期前半から後葉にかけてのものであり、Ⅳ期段階には完全に埋没し、居住域の廃絶時期と一致している。

3. 出土遺物について

(1) 土器

全体形がわかる個体は少ないが出土状況から短期間に廃棄された良好な一括資料であるⅠ-2-0・1区_SK10の出土遺物について若干の検討を加えてみたい。SK10の出土遺物の中には古い様相を残すものも多いが凹線文を施した高杯が出土していることから中期後葉(Ⅲ-3期)に属すると考えられる(出原2000)。

全体の形態を把握できる遺物は少ないため、以下に示したような分類基準を設定した。口縁部は粘土帯外面に表れた粘土帯の貼付手法、口唇部の形状、文様で細分した。頸部・胴部については施



図9 弥生時代中期(Ⅲ期)の遺構配置図

文部位と文様で細分した⁽¹⁾。

- 粘土帯外面 A：強い指頭圧痕が連続して施され、文様化されたもの。
 B：Aに類似するが、指頭圧痕が弱かったり不揃いであるもの。
 C：ヨコナデを施すが、弱い指頭圧痕が残るもの。
 D：ヨコナデが施されたもの。
 E：粘土帯貼付が施されず素口縁のもの。
- 口唇部形状 a：凹面状を呈し、上端をつまみ上げるもの。
 β：面取りを施すもの。
 θ：丸く収めるもの。
- 口唇部文様 ア：全面を刻むもの。
 イ：下端を刻むもの。
 ウ：無刻み
 エ：その他
- 頸胴部文様 a：ヘラ描沈線文 b：櫛描直線文 c：櫛描波状文 d：簾状文 e：刻目文
 f：刺突文 g：ドーナツ状浮文 h：円形浮文 i：楕円形浮文 j：突帯
 ○：文様間の無文部

表4 粘土帯外面

分類	点数	割合	貼付/ 非貼付
A	4	6.3	85.9
B	13	20.3	
C	22	34.3	
D	16	25.0	
E	9	14.1	14.1
合計	64点	100.0%	100.0%

表5 口唇部形状

分類	点数	割合
a	12	19.4
β	41	66.1
θ	9	14.5
合計	62点	100.0%

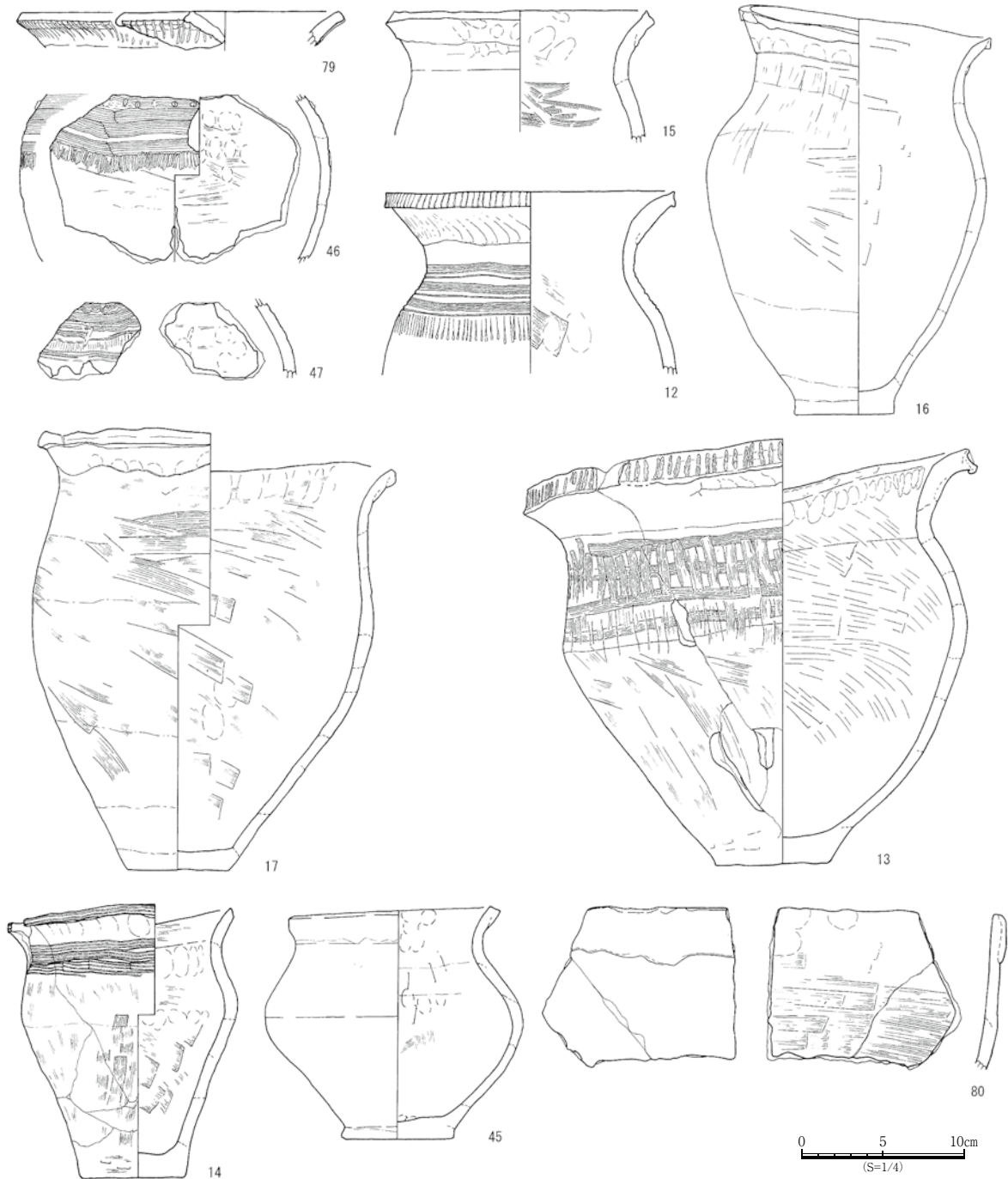
表6 口唇部文様

分類	点数	割合
ア	3	4.8
イ	6	9.7
ウ	49	79.0
エ	4	6.5
合計	62点	100.0%

施文部位は口縁部から胴部の最大径までの範囲である。胴部への施文率は全破片数の約3%であった⁽²⁾。細別分類の割合及び施文率については1基の土坑出土資料のみのため偏りが生じている可能性があり、提示だけにとどめておきたい。また、仁淀川流域に多くみられる特徴的な胎土のものを肉眼観察により抽出を試みた⁽³⁾。器形・文様と特徴的な胎土を組み合わせると仁淀川以西の土器が占める割合を求めた。SK10の出土資料では1.4%（母数2,169点）である⁽⁴⁾。カウントはしていないが、中期前半でもこの胎土の土器をみることができ、継続的な土器の搬入はあったと考えられる。後期前葉以降は仁淀川流域からの搬入品はみえにくくなり、搬入自体が行われなくなったか、あるいは粘土採取地が変化したことも考えられる。

また、第Ⅲ章で既述したようにSK10から南九州地域で製作された可能性が非常に高い壺と甕が出土した。これまで田村遺跡群からは縄文時代～近代にかけて膨大な量の遺物が出土しているが、形態が似ている壺（E6 - 20 - 70）が報告されているのみである（吉成他2004）。形態・胎土ともに南九州地域の土器に類似しているものを認識できたのは今回が初めてである。出土量・頻度等から

偶然性によるものが強いと考えられる。一方、大隅半島に所在する麦田下遺跡から南四国型土器が出土している（内村 2014）。特徴からV期に属するものと考えられ、高付式と共件していることと整合している。胎土に金雲母が含まれているものが多く、大隅半島で製作されている⁽⁵⁾。いくつかを実見させていただいたが、器形・調整・文様など南四国型土器に酷似し、単なる模倣ではない印象を受けた。図10 - 45・80は貼付口縁は類似するが器形にはやや違和感を感じるが、それら以外



2014年『麦田下遺跡』より転載、一部改変。

図10 鹿児島県麦田下遺跡出土の南四国型土器

は高知県ではよくみることができるものである。胴部径に対してやや大きめの底径は高知県でも西半部の特徴に類似している(吉岡・畠中 2004)。櫛描文を多様する文様も類似し、櫛描文・浮文・刻目文で構成される図 10 - 46 は高知県で出土するものとまったく同じ文様構成である。中園氏は報告書の中で「在地様式の高付式の製作者による模倣とは考え難く、西南四国系土器の製作に習熟した人物が製作したと解釈できる。」とすでに述べている(中園 2014)。ところで四国島外での南四国型土器の出土は宮崎県鬼付女西遺跡(永友・長津他 1989)・八幡第 2 遺跡(森本 2007)、大阪府瓜生堂遺跡(川瀬・秋山 2004)、和歌山県堅田遺跡(久貝・川崎他 2002)が知られている。堅田遺跡例は前期末～中期中頭であり、それ以外はいずれも弥生時代後期のものと考えられる。

4. まとめにかえて

今次調査区は東西約 800m に及び、微地形も一様ではなく、土地利用にも差異が認められる。現標高の高いⅡ・Ⅲ区では弥生時代前期の溝跡が 1 条(Ⅱ - 4 区)検出されたのみであり、Ⅱ区からⅢ区西半(田村川西岸)までは弥生時代の遺構・遺物は皆無である。相対的に標高が高く、弥生時代の遺構は削平された可能性も考えられるが、Ⅲ区で古墳時代後期の竪穴建物跡を検出していることから弥生時代の遺構を完全に削平するような改変は考えにくく、弥生時代には居住域としては利用されていなかったと推測される。Ⅰ区はⅡ～Ⅲ期にかけて、東部のⅢ・Ⅳ区はⅢ～Ⅳ期にかけての居住域が営まれ、調査地点により消長にズレが認められる。高知龍馬空港拡張に伴う発掘調査で検出された居住域(以下、田村本体と略記する。)からみればⅢ期の遺構が検出されたⅠ区は北西部に、Ⅲ・Ⅳ区は北東部にあたる。舌状堆積体(第Ⅳ章参照)上の頂部ではなく、やや標高の低い裾部に居住域が分布している。

さて、田村本体は居住域内に掘削された複数の大溝により居住域が 4～5 個に区分され、検出遺構・出土遺物・消長等から各グループの位置づけが行われている(前田 2006・出原 2006)。大溝 3 はやや北側に設定されたトレンチ状の調査区でもその延長が確認され(山田他 2002)、さらに北方の Loc.44 の SD1 へと接続していると考えられ(出原他 1986)、居住域も北方へ若干ひろがっていると推測される。大溝及び自然流路は田村川の旧流路へ接続していたと考えられる(第Ⅳ章参照)。一方、今次調査Ⅰ区で検出した溝・自然流路跡については取水地点は特定できないが、方向・微地形等から現在の鏑野川となっている旧流路跡に接続していた可能性が高く、微高地を挟んで東側と西側とでは取水する流路が異なっていたと推測される。Ⅰ区の西側にひろがる扇状地斜面は水田に適した土地条件であることが指摘され(第Ⅳ章参照)、Ⅰ区で検出した自然流路・溝跡は用水路としての機能を想定できる。ところで田村遺跡群は弥生時代中期末(Ⅳ期)には中期中葉(Ⅲ期)とは比較にならないほどの人口をかかえる集落となり、それに伴い食料の消費量も激増する。既述のようにⅠ区では中期中葉(Ⅲ期)段階で自然流路・溝跡は埋没し、居住域は消滅し、考古学的な痕跡は古墳時代初頭までみられなくなる。しかし、食料増産が必要な状況のなか水田適地が利用されなくなったとは考えにくい。この背景にはこれまでの水利システムあるいはその延長では対応しきれずに、基幹水路の整備や居住域の集住化等の広範囲におよぶ抜本的な整備が行われた結果と推測される。

註

- (1)いわゆる薄手式土器の系譜のものは除外した。
- (2)通常、文様の施されない底部及び底部付近と断定できる破片を除いた体部片をカウントした。母数は約1,900点の破片である。
- (3)1 cm以上を1点としてカウントした。多種の砂粒を多く含んだ黒色を呈したものは肉眼でも比較的峻別しやすく、器形や文様とも対応している。この胎土のものはバーガ森北斜面遺跡で多く出土しており、高幡地域でもみられる。胎土分析等を行われておらず、今後の課題である。なお、I区、IV-1・6・7区の報文でもこの胎土のものは、「仁淀川流域からの搬入品」と記した。
- (4)弥生時代中期末に属するIV-1区_SD6では4.5%（母数632点）である。Ⅲ期～Ⅳ期にかけて微増しているように見えるが、両資料ともきわめて少ない。これらの数値の意味するところは資料が増加してからの課題である。
- (5)高知県の弥生土器の胎土に金雲母は基本的には含まれない。

引用文献

- 出原恵三他1986年『田村遺跡跡群 第3分冊』高知県教育委員会
- 永友良典・長津宗重他1989年『宮崎県文化財調査報告書』宮崎県教育委員会
- 出原恵三2000年『土佐地域』『弥生土器の様式と編年 四国編』木耳社
- 久貝 健・川崎雅史他2002年『堅田遺跡』御坊市教育委員会・御坊市文化財調査会
- 山田和吉他2002年『田村遺跡群・緑の広場調査報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 吉成承三他2004年『田村遺跡群Ⅱ 第3分冊』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 吉岡範満・畠中宏一2004年『根々崎五反地遺跡・カマガ淵遺跡・川口遺跡・神ノ西遺跡・注ノ川遺跡・天ノ川遺跡・西原遺跡』高知県窪川町教育委員会
- 川瀬貴子・秋山浩三2004年『瓜生堂遺跡1』(財)大阪府文化財センター
- 前田光雄2006年『田村遺跡群弥生時代中後期の集落』『田村遺跡群Ⅱ 第9分冊』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 出原恵三2006年『田村遺跡群弥生時代中期から後期の集落変遷』『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会
- 森本征明2007年『八幡第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター
- 内村憲和2014年『麦田下遺跡』鹿児島県大崎町教育委員会
- 中園聡他2014年『鹿児島県大崎町麦田下遺跡出土弥生土器の蛍光X線分析』『麦田下遺跡』鹿児島県大崎町教育委員会

4. 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構と遺物

1. はじめに

田村遺跡群は中期末～後期初頭(凹線文期)に大規模集落へと急速に発展した後、拠点集落としての役割は終え、後期中葉以降急速に衰退していくと考えられてきた。これまでの調査ではLoc.12で後期末の竪穴建物跡(ST1)が1軒確認されていたのみである(島崎・下村他1986)。

一方、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて長岡台地上では東崎遺跡、ひびのき遺跡、ひびのきサウジ遺跡等の集落跡が古くから知られており、田村遺跡群から長岡台地上へ集落が移動していくと考えられていた。しかしながら、近年の調査では平野部においても弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の集落遺跡が確認されるようになってきた。今次調査において検出した居住域も平野部の集落の一つである。

2. 検出遺構について

当該期の検出遺構はI-1-3区_ST1・2, I-1-3区_P28, I-4-1区_ST1, I-4-1区_P1・3・9, IV-1区_SD13(IV-4区_SD2, IV-5区_SD2, IV-6区_SR1)である。今次調査区の東端部と西端部に位置する。竪穴建物跡が検出されたのは東端部(I区)のみである。調査区の北端部での検出であることから居住域の南端部に該当し、北方向へ居住域がひろがっていると推測される。

同時期の竪穴建物跡が検出されている田村西遺跡(久家2013)とは、遺構がみられない微低地を挟んでいるが、直線距離でわずか約150mしか離れていない。両遺跡はそれぞれ10軒前後の竪穴建物跡で構成される居住域が複数で一つのムラを形成していたと推測される。田村遺跡群に後続する平野部に展開する中規模程度の集落跡と位置づけることができる。両調査区を合わせた居住域の東西幅は200～300mとなり、当該期の一般的な居住域のサイズである(久家2010・廣田2011)。

上述のようにI区と田村西遺跡は一体の集落跡である。狭い微高地上は居住域として、I区・田村西遺跡の居住域の周囲の相対的に低いエリアには生産域がひろがっていたと推測される。

3. 出土遺物について

I-1-3区_ST1とI-4-1区_ST1の出土土器で口縁部片の器種別の組成比率を示した⁽¹⁾。

I-1-3区_ST1では、壺は5.1%、甕は45.5%、鉢は43.4%、高杯・支脚はそれぞれ1.0%である。I-4-1区_ST1では、壺は4.4%、甕は46.7%、鉢は28.6%、高杯は0.5%、支脚は7.4%、甗は0.2%、ミニチュア土器は0.1%である。I-4-1区_ST1は1軒の竪穴建物跡の平均的な遺物量をはるかに超える多量の土器片が出土している。

壺は口頸部の形態から5つに分類できる。口縁部は短く直線的に外反するタイプ(103・104・106)、口縁端部付近で大きく外反するタイプ(105)、口縁部は長く直線的に外反するタイプ(107)、口縁部は水平近く外反するタイプ(108・109)、口縁部は大きく外反し、端部を拡張させるタイプ(110)である。体部形は球形タイプ(105～108・110・114・115)と長胴タイプ(103・104)に分類できる。底部はすべて丸底である。外面は叩き調整であり、下半部は叩き調整後タテハケ調整である。内面はナデ調整が主である。

甕は「く」の字状口縁甕である。上胴部から口縁端部まで連続した叩き調整を施す。口縁部は指頭



図11 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構配置図

表7 器種別組成比率

遺構名		壺	甕	鉢	高杯	支脚	甌	ミニチュア	不明	合計
I-1-3区_ST1	未掲載	5	45	43	1	1	0	0	4	99
	掲載	0	6	6	1	1	0	0	0	14
	小計(点)	5	51	49	2	2	0	0	4	113
	比率(%)	5.1	45.5	43.4	1.0	1.0	0.0	0.0	4.0	100
I-4-1区_ST1	未掲載	40	425	261	5	67	2	0	111	911
	掲載	8	40	25	6	6	2	1	0	88
	小計(点)	48	465	286	11	73	4	1	111	999
	比率(%)	4.4	46.7	28.6	0.5	7.4	0.2	0.1	12.1	100

により折り曲げ成形・調整され、叩き目はほとんど消え線状に残る程度である。この特徴は、今次資料に多くみられ、他の遺跡ではあまりみられない。口縁部の手法にI区・田村西遺跡の特徴を抽出できる。

鉢は形態、法量のバリエーションが多い。

また、庄内式土器等の搬入土器も出土している。在地系土器に占める割合はごく少数であり、在地土器への影響はほとんどみられない。南四国では遺跡規模の大小を問わず数点は出土する。そのほとんどすべては河内型と考えられる。河内地域から南四国へのルートは四国内の分布状況等から海路を利用してもたらされたと考えられる。このように、弥生時代終末期になると河内地域からの搬入品が俄に目立つようになる。終末期の遺跡からは数点ではあるが、すべての遺跡から出土しており、集落規模の大小を問わず浸透している状況を示している。高知平野の東部と西部は土器における地域色が弥生時代を通じて顕在化していたが、後期後葉になると物部川流域と仁淀川流域の地域色は解消の方向へむかう(出原2004)。庄内式併行期には県西部を含めて概ね解消される。太平洋を利用した東西交流が活発化したことによると考えられる。南四国は約80%が山林であり、沖積平野を主たる生活の場とする弥生時代は特殊な状況を除くとスムーズな移動の妨げとなる。高知平野の東西における土器様相が異なっていた背景の一つとなっている。太平洋を積極的に利用した東西方向の動きの活発化は地域色解消の一つの要因と考えられる。この太平洋ルートの延長線上に河内潟があり、海路を積極的に利用することで庄内式甕が搬入されたのではないかと考えられる。徳島県海南町芝遺跡では南四国の後期末の土器が出土しており(林田他2006)、四国の西・南岸に沿って太平洋を航海していたことの一つの証拠となろう。集落の規模を問わず出土する状況は受動的よりも双方向あるいはこちらからの能動的な働きかけによるものと推測される。

4.まとめにかえて

I区・田村西遺跡で弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の竪穴建物跡が検出され、IV区の周辺においても居住域が存在する可能性は濃厚である。I区・田村西遺跡の立地・等高線から標高約9.7m付近の微高地上に居住域が展開していると考えられる。

以上のように田村遺跡群は弥生時代を通して古墳時代前期初頭まで集落が維持されていたことが明らかとなり、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の平野部での集落跡を追加することができた。ただし、弥生時代中後期の居住域とは重ならない点は弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の集落を評価する上で重要である。集落規模、出土遺物等から同時期の集落に対しての優位性は認められず、拠点的な集落としての役割は担っていない。田村遺跡群Ⅰ・ⅡからⅠ区・田村西遺跡への変遷は、弥生時代的な集落から古墳時代的な集落への変遷を示していると考えられ、質的な転換を伴った結果である。しかし、弥生時代の拠点集落である田村遺跡群の後続集落であり、他の小地域内での集落動態とはやや異なった過程を経ていると推測される。

註

(1)約1cm以上の口縁部の破片を器種別にカウントした。高杯、支脚は他に器種に比べると極端に少ないため、体部片であってもカウントの対象とした。搬入土器も含まれている。

引用文献

- 島崎富規・下村公彦他1986年『田村遺跡群第2分冊』高知県教育委員会
出原恵三2004年「第Ⅳ章 まとめ」『西分増井遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
林田真典他2006年『芝遺跡』徳島県海部郡海部町教育委員会
久家隆芳2010年「第Ⅳ章 まとめ」『伏原遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
廣田佳久2011年「第Ⅴ章 総括」『西野々遺跡Ⅲ』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
久家隆芳2013年『田村西遺跡』高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

報告書抄録

ふりがな	たむらいせきぐんさん							
書名	田村遺跡群Ⅲ							
副書名	高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅶ 第2分冊							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第142集							
編著者名	出原恵三, 池澤俊幸, 久家隆芳, パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原1437-1							
発行年月日	2015年3月20日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たむらいせきぐん 田村遺跡群	〒783-0005 高知県 南国市 田村	39204	040234	33° 33′ 29″	133° 39′ 44″	2010.4.26 ～ 2010.5.31 2011.9.27 ～ 2012.1.31 2012.4.6 ～ 2013.2.28 2013.4.1 ～ 2013.6.30	31,477 ㎡	記録保存調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
田村遺跡群	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世	竪穴建物跡 44軒 掘立柱建物跡 111棟 柵列跡 17条 土坑 660基 井戸跡 6基 溝跡 153条 自然流路跡 9条 性格不明遺構 121基 ピット 7,000基 水田・畦・畝・波板状遺構	縄文土器 弥生土器 石器 鉄器 土師器 須恵器 土師質土器 陶器 磁器 古銭	縄文時代, 弥生時代, 古墳時代, 古代, 中世, 近世の遺構・遺物を検出した。			
要約	今次調査成果により田村遺跡群の範囲が北方へ大きく拡大することが明らかとなった。 弥生時代中期末の竪穴建物跡を30軒検出した。1～3次調査分を合わせると495軒となる。 その大部分は中期末～後期初頭に属し、最盛期を迎える。中期末には四国はもとより列島規模でも屈指の弥生集落となる。 古墳時代後期から古代, 中世前期も連続と建物跡等が認められ, 古代初期頃の水田跡も検出された。 古代後期以降の搬入品では, 畿内産黒色土器や初期貿易陶磁器の数あるいは種類において当平野域で卓越した様相を示す。							

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第142集

田 村 遺 跡 群 Ⅲ

高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅶ

(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ)

第2分冊

2015年3月20日

発行 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 株式会社 飛 鳥

